EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03014 6773





昭和四年一月十五日印刷
昭和四年一月廿五日發行

嬉遊笑覽
【日本隨筆大成第二期別卷上】

不許複製

編纂者　日本隨筆大成編輯部
代表者　早川純三郎

東京市本郷區森川町一番地
發行兼印刷者　櫻井庄吉

發行所　東京市本郷區森川町一番地
日本隨筆大成刊行會
振替貯金東京二六七〇〇番
電話小石川三、〇二二番

發賣所
名古屋市西區下長者町四丁目　合資會社川瀬書店
大阪市東區北久太郎町四丁目　合資會社柳原書店
東京市京橋區鈴木町　日用書房
東京市牛込區早稻田鶴卷町　國際美術社

願上候云々文化四年丁卯十月四日寺社方へ出したる願書之略なり其札は出世開運大吉利市火除守竈神火除神秘青襖御札【習合神道神事舞太夫頭田村八太夫】按るに青襖とは竈神と云故青烟の意にやかまどの煙によれるならん是も阿須波の神なるべし是も竈神も大年の神の御子なれども阿須波神竈神は二神にて別なり阿須波の神は庭の神なりされど混じても申すにや庭や竈神と共に祭りし神なり人家には必ず祭らでは叶はぬ神なり（万葉集）【廿】爾波奈加能阿須波乃可美爾古志波佐之なども詠めり

嬉遊笑覧上巻終

村八太夫が神事舞の曲に似たり【享保十三年戊申三月十一日（役所日記）神事舞太夫當四月朔日より七月晦日まで町中相對勸化御免之趣申渡とあり其頃よりして今に靑襖の札といふものを江戸町中の番はに配り初穗をとる事あり文政七年の頃兩國廣小路にて觀場に出その頃神田明神祭禮練物にも出たり

十二座神樂

○十二座神樂神事舞は今の十二座のかぐら也もと神祭に神樂を催すは大方は上み方の神社なり遠國にはこれを雇ふ事容易からず但し江戸神田明神は昔より神事能とてこれ有しとぞ北條以後暮松太夫上方より下り江戸に住てこの神事能をつとめしが其者歿して寶生太夫これをつとむ暮松が子孫は大神樂打の頭となれりとなむ思ふに田村八太夫は暮松が子孫なる歟【享保十二年丁未三月菊岡沾凉湯島天神宮社地にて万句合連歌師文棠十二座のおどけや花の神慮】

神事舞

○神事舞太夫當時は田村八太夫淺草寺三社堂の祭禮を預りビンザヽラなどの事をもつとむと云り元祿年中より大黑の像竈神靑襖像繪馬都合三枚札支配下の者共在々に配申候いまだ御當地には相配不申候竈神靑襖札一枚ツヽ江戸御町中相對を以て年々正五九月私方より相配申度元文二年巳八月十八日奉願候處共通被仰付夫より年々配來候處巡行仕候兩人之者共老衰仕寶曆年中より江戸御町中巡行仕候事中絕仕候由乍然蒙御免候儀に御座候間淺草御町中年々巡行仕札相配申候何卒先規之通正五九月江戸御町中私爲名代淺野丈之進八坂主水と申者巡行爲仕竈神靑襖札相對を以て相配申度段天明八年申十二月晦日先々八太夫奉願候翌寛政元酉年二月十八日願之通被仰付是迄正五九月前月御月番樣へ御屆申上札配巡行仕來候處御町中御觸被仰付被下置候より十八ケ年餘に相成候故町方町役之者追々相替り御觸之樣子不相辨勸化之樣に相心得候者も有之候間札配巡行不行屆難澁仕候且又名代之者老衰仕候に付遠藤帶刀昌津織部を私爲名代札配巡行仕度奉存候何卒先々之通差支無御座候樣御町觸被仰付被下置候樣奉

輪ぬけ　水がらくり　人馬

とあり是はれんとびの名をかりて呼べるよしあるにや又はかるわざの女なるか知がたし又小兒の玩物にも此名見えたり（娘容氣）と云ふ艸子にちいさい時親父の巾着錢とりてれんとび買しとあり輕わざ人形にや風來が（放屁論）に、中にも險竿（カルワザ）の大當り無三飛新藏が體は龍骨車のめぐるが如く早飛梅之丞が一本綱は五體を天へ釣かと疑ふこれ又連飛の名はうせたり輪ぬけは籠脱もおなじわざなり水操とは水がらくりをいへるにや（洛陽集）鼠戸や狄の上風水からくり【琴風】からくりの水音鼠戸に聞ゆるなるべし漢土には是を水嬉といふ其内（癸辛雜識）【後集】呈水嬉者、以髹漆大斛滿貯水、以小銅鑼爲節、凡龜鼈鰍魚皆以名呼之、即浮水面戴戲具而舞、舞罷即沈、別復呼其他、次第呈伎焉、などあやつりならぬをもいへり總てみせものは（東海道名所記）にこびき町のかたへ行たれば喜太夫が淨るり其外賣かうそか賣類賣形の物をみする又（雍州府志）に【四條の處】珍禽奇獸或矮人長女、又施雜品藝術者、各開場、是近世之流風也【これ天和中の有さまなり】この頃より今の如くにて有しと見ゆ元文五年庚申閏七月廿四日町觸に近來人馬と申さま〴〵曲いたし人を集候に付眞似る者も多く其内に人柄不宜者も仕習候はゞ不埒成儀も出來可申に付向後人馬其外輕業等之曲致候儀停止に申付候事とあり人馬は何のわざなる事を知ず思ふに籠ぬけなどするを人馬ともいふべくや（列子）に燕戲張湛が注に如今之絕倒投狹者とあるは籠ぬけの類なり

○（文選）三都賦注に孫荆王能反腰帖地啣得席上玉簪これ今もある戲なり又（唐書）【廿二】禮樂志睿宗時婆羅門國獻人倒行以足舞云々同書【廿一】高麗伎云々胡旋舞々者立毬上、旋轉如風また唐叚安節（樂府雜錄）に舞有骨鹿舞胡旋舞、倶於一小圓毬子上舞、縱橫騰踏兩足終不離於毬子上、其妙如此也、といへり（唐書）に骨鹿舞の名目見えずおもふに骨鹿（ロク）舞は胡旋舞の轉音なるべし叚安節が二舞としたるは恐らくは誤ならむさて此伎は前の反また逆だちなどとは異にして唯ひたすら旋るわざとみゆ此舞は田

ちやるめら　ちやらほら　ちやらほこ　チャンメラ

付に日下開山【かごぬけ師】龍王連之丞茶廬市之進また飛龍勝之丞ちやるれんまんなどいふありこの茶廬とは都盧の訛とみゆ又おもふに今輕わざの鳴ものに用る銅角をチャルメラといふこは茶廬哱囉の轉訛にや清俗に銅角一名哱囉といへり【又今えしれぬ浮言をいふをチャラホラといふも是なり省きては唯ホラをふくともいへり又くちぼことといふ事とこれとを混じてチャラボコといふはいよ〳〵わからぬ言となれり】○（長崎歳時記）に當所にて哨吶(チャンメラ)を吹く者は唐人葬送の事あればこれを吹て柩のあとに付添故に唐人年々其謝儀を出すこのチャンメラ吹正月中哨吶小銅鑼片張たいこを以てはやし立市中家々に錢を乞といへり他人隨意にチャンメラ吹ありく事を禁ず元何喇叭號笛銅鑼等は漢土にて行軍の具なりこの故にもと統軍の官ならねば用る事ならぬものなるを後世に至りては文官も用る事となり遂に士庶人僧道までもこれを用るは法禁ゆるまりしなりと（日知錄）にもいへり

輕業　緒小桶　幻術　れんとび

○高九蛸が錯德頌(ストク)に蛛舞の骨をやはらげて都に輕業の鷲之助は女とも見えず男なりけりといへるは女のかるわざなるべし（雍州府志）に幷べ擧たる中に緒小桶とはいかなる伎にかあらん緒桶の內に入てなくなりなどする隱形の術にや幻術は目くらましなり天文弘治の頃大和國に果心居士といふもの有て奇怪き事をしたるよし諸書にみゆそれらの類近く貞享元祿の頃鹽屋長次郎といへる放下師太刀かたな又牛馬をも呑でみするものあり其頃江戸にも來り堺町に出て大に行はれしとぞ言水が句に「朝露やさても富士のむ長次郎」連飛あるひは蓮飛とも書りいづれか辨へがたし（洛陽集）【延寶中俳書】に輕藝(カルワザ)は蓮の實よりも事起れり【貞正】（歌舞伎事始）に蓮飛唐人與左衞門今はなしと見えたり又田樂の曲に鷺足にのりて飛ことあり（閑田耕筆）に彼が木をのぼりてれん飛とやらむいふ事するに似たれば田樂と名づくるのみ世にしる事となりぬ然らば田樂の曲にやさりながらしきりに飛の義にはあらで蓮の實のかたなるべし（一代男）に賣女やうの者を多くいふ處品川のれんとび白山さんさきのえしれぬもの

考ありてそれに委しくいへればこゝには略之

○(犬子集)に三輪山て杉立するや春霞(鷹筑波集)獅子舞は大和國にありつきて見ても見あかぬ三輪の杉立(洛陽集)杉立や赤熊かげたる下紅葉など見えたり杉立のわざ今大神樂はせず越後獅子のすることなり越後獅子を江戸には角兵衞獅子といふ越後にては蒲原郡より出るによりてかんばら獅子といふとぞ角兵衞獅子は恐らく蒲原獅子の誤ならむ或人云武藏國氷川神社に古き獅子頭ありそのあたりの村里にて獅子舞をするには彼獅子頭を借て用ゆ往昔田樂の遺風にやその獅子頭の角に菊の紋ありて御免天下一角兵衞作之と彫てありといへり然らば角兵衞は古獅子頭作れる名工と見えたり天下一といふ號の事(信長記)などに見えて其後停止せられきかの獅子頭そのかみの作なる事知べしなどいへりいかゞあらむ又(四神地名錄)猿が俣の條二鄕半戸ヶ崎村なる獅子頭(房總志料)長狹郡不動の祭の獅子舞みな越後獅子と同じものなり東國には處々にありしものと見ゆ

越後獅子　角兵衞獅子

蛛舞【都盧、チヤルメラ、輪ぬけ　幻術、れん飛、緒小桶、水からくり】神事舞

蛛舞

蛛舞は(見聞集)によし原傾城町を立る條に能かぶきの舞臺を立置毎日ぶがくをなして是をみせける此外勸進舞蛛舞獅子まひ云々(雍州府志)四條河原の條下傀儡之外雲舞幷幻術連飛輪脫緒小桶水操云々見ゆ(事物紀原)に百戲は秦漢のとき曼衍の戲より起る後には高絙呑刀履火尋橦等あり一云都盧尋橦と稱す都盧は山の名その處の人よく竿に緣て百戲すといへりくもまひといふ名古きものには見えず(尤の草子)に輕きものゝ内まふものゝ内にくもまひ有り(油滓)にあふなくもありめでたくもあり蜘舞の芝居で金や拾ふらん(紀原に高絙伎は今戲繩といふ者にて索に上るなりといへりつなわたりの輕わざなり蛛の糸を引はへるさまに似たれば名づくにや然らば雲舞と書は當らず少納言信西が傳來したる唐舞の圖に此伎など見えたりこゝの古へもこれを學べる事有しなるべし延寶天和の頃堺町芝居番

都盧

て御幣を立此長持四人か六人にて舁く者もみな淨衣烏帽子白きくゝり袴を着て囃子方左右に附笛小鼓太鼓拍子打合たる時右の瓔珞冠りたる舞子神樂を舞次第に拍子急に詰る誠にしんとして感にたゆる計なり其内の興にどうけ人の笑のため太鼓打烏帽子左右に筋違てかぶり時々撥を空に投上などして是を大なるどうけとして見物の者興に入なり扨近年【享保なり】大神樂といふは人柄至極浮氣に見え大白衣大廣袖木綿布子巾廣の帶をして大自墮落に大脇差をさし尤大太鼓小太鼓笛は吹ども唱歌の節に合せて吹獅子頭は持て是をかぶりてさま〴〵好色の興に小歌狂言のみにて獅子を馬にして惡所通ひの狂言などに移し若き男女の氣をそゝり立る樣にどうけ下女下男に面白からするのみ（卜養狂歌）伊勢かぐら曲大こをうつ所を繪にかきて歌よめといふ「いせだいこかしらをちはやふるだいこづでんどんなるつらつきぞかし【是又寛文頃の詠歌なり是を大なるどうけにしてと云るに合へり】（訓蒙圖彙）に今勸進の代神樂は舞手の乙女もなく只鞁太鼓事やうにたゝきたてゝ太鼓打のつらつき狂人のやうなるをみてうれしがるしかのみならず獅子が立て扇の手をつかひ一谷節で舞最珍敷事共なり岡崎女郎といふしゝをどりなれば神慮はいかゞ【天和貞享の頃は此體になれり】などいへり寛永より明暦の頃までの畫にはみな獨り立にて頭に獅子をかぶり腹に太鼓つけたるが街を走りありく初穗とりの男米錢を擔ひて添ひたるもあり長持かつがせたる大神樂は見えずおもふに寛文延寶頃始りし事とはみえたり（事跡合考）に大神樂に伊勢派と尾張派と二派あり尾張熱田の地にも獅子頭の一種ありて是も獅子を舞し歩行を大神樂といふといへり【今は尾張派などいふはなしと見えたり】（一代男）に高原のほとりに居て龍頭をかつぎ熱田大明神のお初穗を申請にあるかしやると見えたれば獅子まひも有しなるべし（醒睡笑）熱田の事をいふ處伊勢兩宮の如く禰宜あつまり袂にむすぼゝれ錢をもらふ事かまびすしといへり

○今の獅子舞はあやおり曲鞠さらまはしひらき方度何々れと種々みな大神樂が所作となれり別に獅子

春駒

○春駒は（故事要言）に年の始に馬を作りて頭に戴き歌ひ舞ものこれを春駒と名けて都鄙ともにあり是は禁中にて正月七日白馬を御覽の事ありこれを下にうけてし侍るにや内田順也が（俳諧五節句）に春駒是も萬歳樂に似て頭に馬の頭をいたゞき舞なり（俳諧水鏡）に春駒（俳）是まさいらくにて舞ものなり鳥追（同）と記したり然らば是も萬歳の一種にや諺に春駒は夢に見るもよしといへり（堀河百首題狂歌）よみ人しらずあづまより夜更てのぼる駒迎夢にみたゝに物はよく候（東牖子）に祇園神祭の節山城久世村より馬頭の木偶を持來る天より降し物にて祭禮第一の神寶といへり何に用ひし物にか飾馬の馬面などにや

○（通雅）云月令仲春祭馬祖、季春享先蠶、禁原蠶、爲傷馬也、云々、何子元曰、後世遂有蠶女兒、馬明菩薩馬、頭娘之說、見于中華（古今注）及（搜神記乘異集）何其妄また（周禮）馬質禁原蠶、注、天文辰爲馬蠶、々爲龍精、月直大火、蠶馬同氣、不能兩大、禁再蠶者爲傷馬、舊祀先蠶、與馬同祖、亦未可知、などあるをもて春駒は蠶を祝することとするは非なり只その事の似つかはしきは是のみにあらず白馬節會の事によれりといへるは穩かなるべし

獅子舞
大神樂
代神樂

○獅子舞は伊勢の吾鞍川より出るを學びて諸州に大神樂あり獅子舞はもと舞樂なるを田樂にとり神事に用ひたり大神樂とは伊勢に大々神樂といふ事あればそれによりて名付たる歟また代神樂とも書るは代參り代垢離などの意にやあらむ（昔々物語）に七十年已前【享保十七年にかくいふは寬文年中の事と聞ゆ】大神宮御祓大神樂とて每日江戸中徘徊しける有さま儀式正敷先へ鼻高き面をかぶりたる者直垂に白袴を着御幣を持て立其次に十四歲ばかりなる男子を美敷造り瓔珞を冠り長絹を着せ白袴を着中啓の扇を持右の手に鈴を持步む三番に麻上下着たる男箱を持四番に布衣の裝束着たる男其次に四ツ足附たる大長持の蓋を取て仰向にして置其上に獅子の頭をなをし中に太皷を置一万度の御祓を眞中に立

大黒舞

○大黒舞は（半井卜養千句）布袋も笛をふくや秋風身にしめて大黒舞をみまいなふ（滑稽雜談）に是も悲田寺四のヶ所恒外の類大黒天の姿を摸し面をかぶり頭巾を着て民間の門々に歌ひ舞ふ年々嘉祝の詞を以て新作して唄ふ故に此唱歌をも大黒舞といふといへり按るに大黒舞は左義長より起る【左義長の條に云をみべし】海音が淨るりに傾城事の起りより大黒舞の鳥追のと世上のさたにものつたればといへるをみれば其時ありし世間の事を作り唄ひたりとみゆ（歌舞妓事始）に大坂の芝居の事をいひて又正月に至て大黒舞と云ものを兩人出てまふ本是美濃國より出る民家にて春のことぶきをなすこれをうたふといへり【美濃國大垣の人語りけるは我國に舞まひと稱する者あり常には農人なり正五九月には札を配り歩行て米錢を乞ふ其札暦日の事を少々しるしてあり正月は肩衣を着大小の刀をさし人家の庭に立て其年の大小の月の數吉凶などの事を云てありく是を又さんばやしとも呼となむ（歌舞妓事始）に云へる者是にや】又乞食を學で出るものもありしとみえて（世間胸筭用）に隣には舞まひ仕けるが元日より大黒舞に商賣を替ければ五丈の面張貫の槌ひとつにて正月中は口過すれば此えぼしひたゝれ大口はいらぬものとて二匁七分の質に置てゆるりと年を越ける（梅津の長者の畫卷物）に大黒が舞ふ處の詞に一に俵をふまへ云々（夷曲集）の序に大黒の能をきくに一に俵をふまへ二につこと笑ひ三に三界の福壽を袋一ぱいにいれ云々（雅莚醉狂集）大黒の扇をもちて米五俵ふまへたる處の繪ふくろより扇めづらし米俵五ツいつもの圖にはかはりて【大黒舞に五ツいつもの如くある故なり】其蹟が（賢女心粧）京師河東裏借屋の事をいふ處夫は粟島大明神の御影で過れば女はおふくの面をかけて大黒舞に出て女夫ゆるりと暮せば云々江戸にはたま〳〵夷大黒をまねして來る乞丐あれども定りたる時はなし定りてあるは吉原町へ正月六日より大よそ二月初迄も大黒舞とて非人來て種々の物眞似をなす大黒舞はかた計にて多は芝居狂言のまねをなすこれも近世始りたる事なり

るき物語なり其是非はしばらく置て先この注者の解しかねたるところひとつふたついはむ。しらけもよゝにあらふ。【注】よにとはよねなりニとネと通ずといへるは非なりしらけば精米なりそのうへに米といふ事いかゞなり是はよく洗ふと云事なりよきをよといふは（萬葉）に吉事をよことゝいへりはぬるは語勢なり。まちもさかえさふらふさかいてがじやうには。【注】殿も町も榮ふる故に鳥追も來るよし歟しかれどもしやうにはといへる古語未勘といへりじやうといふ事此外にも二處あれどもいづれも注なしこゝに至りて始てかくいへるは注者解しがたかりしと見ゆじやうは定にてさあるべき事をいふなり（今昔物語）に季武が川をわたる一定をみむとてひそかに季武があとにつきて急げるなどある是なり。いせのやうだのちよさけがしめなば。【注】未勘とあり是はいと覺つかなけれど伊勢の陽田【今の山田なり（和名抄）に陽田と出てヒナタと訓りやうだと訓は後の事なるべし】の千代さかの誤れるにや【千代の松坂といへば千代さかともいへるにや。】よもてをねろかとの手をねろふか。【注】未勘と有りよもてはおもてなるべしねるはねりゆくなり（萬葉）に奈良のみやこをねるは誰が子ぞなどいふねるなり家の内ながら廣大なる事にいへば何れの方をねらむといふなり手は表てうらてなどのてなりおもふに是は義俊が寫し置る物の異本にて千秋萬歳がうたひし物の一種なり（宗因千句）御出入を申門こそのどかなれ幾はなしけむ鳥追の聲【こは悲田院部類のものをいふにはあらじ】

○奥の仙臺城下正月十四日の夜家毎に床間などに松一枝を置たるを取て門口に立かけ紙の麾はたきを持てゐのしゝかのしゝ尻はもつくりやべ〳〵ほうひ〳〵〳〵と呼是を鳥追と云ふ

さゝら踊

○（松の落葉）さゝら踊やんらめてたやゝんらたのしやサツサせちよやまんちよの鳥追かまいつた云々さゝらを持て踊る故さゝらと名付たるはもとよりながら此部類をさゝらといへり越後にては雪を高くつみあげて小兒その上にのぼり鳥追の事を唱へて遊ぶ是をとり追やぐらといふ

とり追やぐら

してあらぬ事をいひ又猿若を猿次郎といひ鹿藏といふ者をさへ作り設て僻事をきはめたりそを信て物に記せり（奇跡考）などは犬のそら吠なるべし陶九成曰、唐有傳奇、宋有戲曲、金有院本雜劇、而元因之、然院本雜劇、釐而爲二矣、院本則五人、一曰副淨、古謂之參軍、一曰副末、古謂之蒼鶻、能擊衆禽未可打副淨故也、一曰引戲、一曰末泥、一曰孤裝、又謂之五花爨弄、或云、宋徽宗、見爨國人來朝其衣裝鞵履巾裹傅粉墨舉動可笑、使優人效之、以爲戲、又有艷段、亦院本之意但差簡耳、取其如火燄易明而易滅也、其間、副淨有道念、有筋斗、有科汎、教坊色長、魏武劉三人最著、魏長於念誦、武長於筋斗、劉長於科汎、至今樂人皆宗之、院本名目多不具載、然金章宗時、有董解元所編（西廂記、）世代未遠尙罕解者、況今雜劇中曲調之冗乎、因取諸曲名、分調類以備好事稽古者之一覽、云と（輟耕錄）に見えたり

鳥追　女大夫

○鳥追はもとより一種かゝるもの有しにあらず千秋萬歲が士農工商の家に行それ〳〵の職分に付て祝語をうたひし其内にて田家のためにせしものなり今江戶の鳥追は非人の女房娘にて常には淨るりなどをうたひ三絃ひきて來る故俗に女大夫と呼あるまじき名づけやうなりこの女共春每に衣服は木綿なれども新らしきを着て三四人ツヽ一組となり三絃胡弓ひきつれていとかしましく唄ひ來るいつの程よりしかるにか（雍州府志）悲田院の條に今專乞人酋長居之、惣謂與次郎、又自元日至十五日、着笠以白巾覆面、而敲手唱祝語、倚門戶請米錢、是號敲與二郎、又稱鳥追、元民間出自追拂田疇鳥之辭者也といひ（訓蒙圖彙）にはたゝきとありて注に鳥追と云り何れもかくあれば敲といふが本名と聞ゆ其圖は二人にて掌を扇にてたゝくさまなり江戶の鳥追とはいたく異なり古き鳥追のうたひものを浪速人の注したるあり（靑陽唱話）といふ多田義俊が鳥追の歌は（殿うつり物語）に似たりといへるよりて其事の似かよふをしるせるよし注の内にみゆされど殿うつりはこの注者も予いまだみざる所多田氏の僅に所々書置るを見るのみといへり殿うつりは（枕草紙）に物がたりは住吉うつぼ殿うつりとあればいとふ

ひはおもふよしあれどしばらく置ていはず目かくしにことといひ又とらずこやらずこもみな聞ざる事なり但し何事にまれなせそといふ事にしつこなしなどいふは爲る事なかれのつゞまりなるべければこは事の省かりしなり然らば目かくしこは目かくし事やらずことらずこもみなおなじかるべし】

猿若

○（人倫訓蒙圖彙）のものもらひの部に猿若といふもの有り歌舞妓の猿若がまねしてありく乞食なり其注に一人狂言なり滑稽優人にて人を笑する事をいふ今の猿若是なり或說には猿若といふは永祿の頃名古屋三左が僕の鈍者三左是を愛し芝居にて狂言しけるを諸人もてけうじけるより此名はじまれりと未是非を知らず【此ある說は（雍州府志）等なり】三左が僕といふ事もとより虛談なり論ずるに足らず猿若は猿樂狂言の冠者の類の名にて人の實名にはあらずさるを拘肆戲房のうへの名として今の道外と云ものと異ならずなれり按るに（元曲選）に雜劇、有正末副末、狚、狐、靚、鴇、猱、捷譏、引戲、九色之名、正末者當場男子能指事也、俗謂之末泥、副末執磕瓜、以扑靚、即古所謂蒼鶻是也、當場之妓曰、狚々猨之雌者也、其性好淫、今俗訛爲旦、狐當場粧官者是也、今俗訛爲孤、靚傅粉墨獻笑供諂者也、粉白黛綠古稱靚粧、故謂之粧靚色、今俗訛爲淨、妓女之老者曰、鴇々似鴈而大無後趾、虎文喜淫而無厭、諸鳥求之即就、世呼獨豹者是也、凡妓女總稱曰、猱々亦猨屬、喜食虎肝腦、虎見而愛之、輙負於背、猱乃取蝨遺虎首、虎即死、取其肝腦食焉、以喩少年愛色者、亦如遇猱然、不至喪身不止也、捷譏古謂之滑稽、雜劇中取其便捷譏誚、故云引戲、即院本中之狚也、とありおよそ末といふは始に出るものをいふ始を末とするは反言なり旦は女がた淨はやつし其餘おして知べし捷譏と引戲は二名なれどもその事は同じと見えたり是院本の狚なりといへれば渾かたなり院本と雜劇と名目異同あり狚も猱もこゝにには産せざる物なれども猨屬と見えたればさるの類なり猨と猿はと同字なりかの猿若の名に似つかはしそのかみ是を取て名づけたる歟又は唯猴のおかしげなるにとりて付たるにもあれ右の義にかなへり若は何若と名に付事多くあり其後に傅會

かづきにて上戸も下戸も押ならしに給べき由仰らるゝ扨御肴には順の舞あるべしとてめん〳〵唱ける藝どもをどり出て舞つうたふつ入みだれて云々沈約が（宋書）【十九】魏晉以來尤重以舞相屬、所屬者代起舞、獨若飲酒以否相屬也、謝安以屬桓嗣、是也、近世以來此風絶矣、こはおのれが舞ふべきを人をしてかはりてまはしむるなり順の舞のことゝ心得るは非なり（櫻陰比事）下戸迄も我を覺えぬ程の醉のまぎれに順の舞の藝づくし云々古き前句付に【たゞもゐられず〳〵】御酒宴に身は夜からすの順のかゐ明和二年（川柳點）【首尾のよいこと〳〵】摺子木で座中をさらふ順の舞

かぼちや踊

○後は昔物語に大文字やのかぼちやと云ふ歌流行甚しかりし賓りやく二申年と覺ゆ此かぼちやぶしにてよし原の女郎名よせの歌あまたあり云々馬文耕（武野俗談）京町大文字や市兵衛其形みぐるしく頭のかたかぼちやに似たりとて爰に京町大文字やのかぼちやとてとひよつとくるわの地廻り男のわる口にいひしが流行し來る客ごとに是を聞てうたひ段々と江戸中の口にかゝりてはやり歌となれり天明五年のざれ冊子に雪の柳のそのきのさまはと云唄にてをどるをしやみこをどりと云は暹羅をどりなり甘蒲寨も其あたりの國なればかぼちやをどりともいふ其國から出たるをどりと云り戲作なるべし

しやみこをどり

なれこまひ

○（類聚名物考）になれこまひは馴講舞なり小舞にも子舞にもあらず法花八講をもほけはこと云ふ無禮講をもむらいことといふ例にて互に心やすくなれなじまんとて寄合講をして舞遊ぶをいふなり今世俗にも何講と云て會亦するみな寄合て舞かなで遊び樂をいふなり一向宗の家にては即御寄講といふ聞えたり云々古日記をみるに講と云は今世の講釋にはあらず大に異なり講會の式あり（臺記）にも庚申毎に老子を講ぜられし事あり寄合て物語し聲明となふが如く中の要文を唱ふる事と聞えたり（平家物語）のも島にて流人の中間八講の寄合なり今江戸の風俗に小兒の遊ぶにめかくしことと云やらずことらずこと云も講の意にて講を結び約束かたむる意にて皆小にもあらず子にもあらぬなりといへり【なれこま

御寄講

もいはれぬ身のはたらきをなしてゆく冷眼にてこれをみればそのまゝなる乞食といふべし云々【孔雀樓は清田君錦が號なり此筆記明和戊子冬を記せりそれより三十年前は元文四年なり】云りかゝれば（一目千軒）にいふ所即俄と名付て一種の戯事となれるが始とみえたり江戸の吉原町のにはかも同じ頃にや享保十九年甲寅八月九郎助稲荷正一位大明神と官階ありて其祭禮に起れりそれ故近ごろ迄も俄の内は大門口に葉付の竹二本左右に立しめ縄を引はへてありしが今はさる事もなしとぞ【これは俄とはいへど祇園神輿洗のねり物をもかねたるものなり】

吉原のにはか

座敷茶番

○座敷茶番といふものも此俄に似たるものなり江戸にて芝居の役者共顔みせの頃樂屋にて茶番餅番酒番などとてその番にあたりたる者より饗する事あり色々たはれたる趣向を盡すなり茶番の名は是より起る安永二年茶番狂言を書たる（當世作の種）といふ小本あり茶番と云は其頃よりの名なるべし何の番の當るなど云とも古き詞なり（高舘の草子）に辨慶かねてこんどはそれがしがばんにあたりて候と申もあへず云々

素人狂言

○素人狂言【前に云る似せ野郎の類なり似せ野郎はそれを業としたるものとみゆれば又異なり】（賤小手巻）に豐後ぶし義太夫ぶし夥しくはやりて三線の流行甚し歴々の子供總領より初め次男三男せざるものなく朝より暮迄絶ず此あげ句下かたといふ歌舞伎の鳴ものを素人よりたかりてうつ其弊遂に素人狂言となるみなこれを企て處々に催す歴々たる者河原者をまねて女形立役敵役にて立さはぐかゝらぬ戯なり寛政より皆やみて正風體となる黒ちりめんの當世羽織いづくへかなくなりて皆もめんの馬騎或は麻の羽織なり落書に年をへし三筋の糸の音絶て羽織のたてはほころびにけり

順の舞

○順の舞順字古くはすむといへり（源氏物語）松風におほみきあまたゝびすむながれて同藤の裏葉みなすむなかるめれと云々順流にて次第にめぐる盃なり（室町日記）【十三】織田信長公節振舞の條大さ

にはか　茶番　素人狂言　順の舞　かぼちやをどり　なれこまひ　猿若・鳥追　大黒舞
春駒　獅子舞

にはか

にはかは（一代男）【七】に島原にて戯ふるゝ事をいふ條に彌七しゆろばゝきに四手切てむしこより【連子をいふなるべし】によつと出せば丸屋の二階より大黒えびすをさし出す云々猫に大小さゝせて出せばからざけに楊枝加へさせて見する彌七えぼしきてあたまさし出せばむかひより十二文の包み錢を投る云々【猶かゝるたぐひの事多く書たり】女郎も男も殘らず三處の二階をながめ人々して古今まれなる慰み是なるべしと興に乘じてまた所望々々といふ程に後は大道に出てもんさくいづれか腰をよらざるはなしといへり是にはか江戸にて茶番など云事の始めなるべし

茶番

（一日千軒）に京師島原は中堂寺村に堺の住吉を祭る社ありもとすみよし屋太兵衞といひしものゝ勸請なり住吉屋廓中に入てまた住吉の祠を作るこれを中堂寺村の御旅所とす享保巳後祭事華美となれり每年五月十九日より練物出づ廿日より廿六日迄日暮より大夫練物出づ廿一日より廿九日迄暮方より若連中ねり物廿八日には練物廓を出て中堂寺村本社へ參て西口より歸る夜に入て他所よりくるわへ灯籠作りもの俄などあまた持來り夜明る迄京町中の老若男女群聚するとおびたゞし別して御影供につきて大紋日なるよし委く記せり【此事いつ止たる歟今は聞えず】（孔雀樓筆記）に市井輕佻の徒は遊賞のとは何も同じことゝ思ふべけれどもその中に是非なきにもあらず云々にはかといふものあり是は甚窮乏の相をあらはす彼にはかといふものは始りて三十年ばかりになるべし近年はます〳〵熾に行はる小家など持たるものも公然としてこれをなし恬として恥をしらず多は裸身またははだをぬき頭面手足或は全身に丹墨藍粉などをわざと描く塗りくまどり種々醜恠の狀を扮し白晝に大道上を寛歩す今宮祇園御靈の祭などには彼輩幾群ともなくしかも大形その近邊の者にてぞ有りける聲をかけて所望といへば立止り或は無根の戯語をいふ或は得

をとめるあやめや平治とて大坂より來り兩國の大木俥四郎が齒みがきの口上かけける男芳澤あやめの聲色をまねけるが又紺屋町にて山城やと云酒やの下男は藤村半太夫が聲色をつかひけるを平次すゝめて主人にいとまを乞はせて共に芝居の木戸に立て聲色をつかふ聞人感心しける是江戸にてかぶき役者の聲色つかふ始なりと云り享保の頃冠り付だまつて居我聲色をくき樓船、おくら門徒敎主善兵衞はじめ芝居役者の聲色をつかひ齒磨を賣て吉原に入込で世渡りし者なり近世には風來が（放屁論）に鶴市が聲色は其人そこにあるがごとしといへり（安永頃新地中洲にぎはひたりしに鶴市といふ小屋ものよく芝居役者の身ぶり聲色をうつしたり同八年ばかりの事にや柿色の素袍を着て堺町より咎められたりとか】又金作小藏とて不斷酒に醉てよく金作が聲色まねぶ乞食高名にてありしこれらのわざむかしは今の如くよくするもの多からず【今ははなし家と稱する者又は芝居の木戸番は更なり齒琢賣などみなよくつかふ故高名の者もすくなし】（天狗髑髏鑒定錄起）の序に近時人の名を賢て開板する俗文ありといふ處に先生笑云我飯を喰ふて人の聲色をつかふも皆人々の物好にて盲万人目明三人賣るも本屋の渡世なれば强て咎るに及ばず云々（俳諧時津風）【明和初】莚から出たる盜人の耻丹胡粉葭簀樂屋のすき通り【此付句乞食芝居鶴市などをいふなるべし】

○（後は昔物語）に聲色をつかふにうけとりたりや其次は是も同く役者にて市川及び藏て賴ますそこらの仕出しは市川ゑび藏てと留つた時でつかひ出す抔も今は古風となれり雨の降夜は一しほゆかしなどは先ヅなき事なり又五人とか七人とかつかひ仕まひて留めに短きせりふのやうなる事を昔のこは色つかひは言ひけりこれも今は聞ず其言ふ事長いは恐ありあけの云々こゝらでちよつと留袖やふり袖さまへのおいとまでとほゝうやまつて申すと云やうなる事なりといへり今も芝居の木戸にて二人かけやひに狂言の役わりをよみ聲色をつかふ事あり今の物語にいへるは此體にひとし

ひお梅が鈴のふりもあり水木おはるに敎へけるとぞみゆ是かの志賀山の始なるべし【色芝居】に舞子をいふ處水木が七ばけ澤之丞が淺間の怨靈こんくわいの鑓をとりのと恐らく知らぬ事なき番數にいかさまよき鳥のかゝれかしと此親が願ひも至極ながら云々（五元集）に靑山邊にて踊子を馬でいづくへ星は北といふ句あり馬にて迎ふるをいふなるべし借駕籠制禁の頃とみゆ此踊子といふもの始終絶ずして後は名のみにて踊りはせずそれより藝者といふ事になりぬ明和安永天明の頃女藝者はやりて江戸端々遊所はさらなりいづくの町にもなき處なかりしとぞ

竈はらひ

○又竈はらひの巫女は一蝶などが繪にも見えたり（一代男）にあらおもしろのかま神やおかまの前に松うゑてとすゞしめの鈴をならしてあかたみこきたれりしたにはひはた色のゑりをかさねうすぎぬに月日のかげをうつしちはやかけ帶むすびさげうすけしやうしてまゆずみこく髮はおのずからなどさげその有さましんじやうなるは中々おはつほのぶんにてはなるまじ【西鶴が（大鑑）に竈拂の神子男ばかりの內を心かへるともみえたり】

巫子

○巫子明和七年新上るり（往昔模様鮑山染）笠もりお仙も團子丸めずにはだしで通るならふ事ならあの後家を湯しまの天神の巫子にやりたい是は明和六年己丑二月四日より湯しま天神の祠にて泉州石津の大社惠比須開帳にて詣人群集すかぐら堂に二人の乙女かぐらをなす名をお波お初と云ふ振袖の上にちはやを着たり容色うるはしく人皆これをめでたり神樂みこの美をゑらむ事此よりなり錦畫にも出す

物眞似
聲色

○物眞似狂言盡の役者等が身ぶり聲色をまねぶ是又物まねなり（輕口噺）に臆病者寺町通を夜行して芝居役者の聲色つかふに怕たる處におきつかひなされますな今のは役者の物まねぢや【元祿十四年の咄し本也】むかしも夜行には口慰に聲色などつかひしなりされども多くは幇間また乞食などのする事なり（江戸眞砂）に正德頃芝居一番切の追出しと云に成て木戸にて人よせに色々のはなしをして人足

もなく三味線と申物をば盲目の女より外にひき不申候事の様にて常の女少しならし覺え候者有之候へば世に珍き事の様に申觸候當時は件のごぜ抔と申者はさたもなく野も山も踊子三線ひきばかりの様に成候は元祿の初ごろの儀にても可有之哉云々是は万石以上の郡主或は國主方へも奉公可爲致望にて物入をいとはず稽古致させ申事に候とあり（寸錦雜綴）に舞子稽古本を載て云志賀山万作は元祿の頃の舞妓の師なり天明五年中村仲藏中山小十郎と改名し志賀山一流の三番叟をつとむその子万作中藏となる又小十郎と名乘る今に志賀山一流をたつる（原本洞房語園）近年町々に踊子といふ者時花出て寛永

をどり子
町藝者

年中丸二が類なる歌舞伎の女に紛はしくなりし處に是亦御停止にて漸止けり【享保五年かくいへり】と有り是今の町藝者と呼ぶものゝ始なり上がたにては猶ふるく見えたり西鶴が（一代女）に万治年中酒樂といへる座頭みやこにのぼり風流の舞曲を工夫して人の爲に指南をするに小女集りてこれを世わたりに習へり女歌舞伎にはあらずうるはしき娘を此業に仕入て上ツかたの御前様へ一夜づゝ御なぐさみにあげゝる衣裳も大かたに定れり紅かへしの下着に箔かたの白小袖をかさね黑きそぎゐりをかけて帶は三色ひだり繩うしろ結びにして金作りの小脇差印籠巾着をさげて髮は中剃するもありつとして若衆の如く仕立ける小歌うたはせ踊らせ酒のあいさつ後には吸物の通ひもするなり又（一代男）【四】舞子踊子の事をいひて一人金子壹歩なり顏うるはしく生れ付やさしきをちいさき時よりこれに仕入てとりなり男の如し十四五迄は女中方にも招きよせられ其程過ては月代をそらせ聲も男につかひなさせ是を寺方のかよひ小姓と申云々【かゝるもの故停められしなり起る處異なれども歌舞伎ものに同じ】

舞子

○（風流徒然草）に中村勘之丞扇の手舞の中にてふりのよき事をえらびてゐがほのおかつといひける女に教へて後に袖とめけれど人みなをどり子とぞ云けるおかつが妹松野といひける此藝を續り是舞子の開山なり折ふしのはやり歌をわけて謠ふ其後かめやの小三郎多くのをどり子供を取たてたりかまはら

といひし者なりといへり嚢屋三かつといふものも舞子などにてありしが元祿八年乙亥十二月七日難波千日寺にて三勝半七情死せしその翌年正月二日より狂言にしたりし時の番付あり彼所の墓は其時芝居の役者半七に杉山勘左衛門三勝に花井あづまみのや平左衛門には座元岩井半四郎等三人が建る所にて石の表には嵐雪月照信士月雪妙霜信女と刻せりこの故に俳諧師嵐雪が集にあかねやみのやと聞えたるなき名の流れ止る處は千日寺の蓬生の露と消かへりぬ盆のこの頃は夜事に群聚して逆緣に弔ふ婦人もあまた侍りけり戒名嵐雪月照と石の塔婆に彫入たりあるまじき事ならねど折からはおもひがけず覺え侍りければ夢によく似たる夢かな墓參り【或云元祿八年十一月六日大坂長町みのや平左衛門女おさん和州五條の商人茜や半七と共になんば村落旁に自殺す云々】舞まひ又太夫は大坂にて殺したり（夷曲集）にそれが辭世の狂歌あり又西鶴が（義理物語）【貞享五年】御堂前の仇打の事をいふ處又太夫が舞を聞とあり【同年の（草子盛衰記）に童部人に札もらふて又太夫が舞の芝居へ行と云へば札は只でも草りが地からはゆるか云々】是又大坂の事なり舞を聞といへるにてうたふ事をむねとすとしらる女舞はまひを專とするなるべしかの新かつが唐子をどりはむかしくにがやゝ子をどりの遺意にや（鷹筑波

やゝこ踊

集）に涙ほろ〳〵ともし火のもとやゝこ踊夜の更る迄ならすらんと有は幼きものゝ踊をいふ盆踊のならしにや【古き日記におくにがをどりをやゝ子踊云々あるもくにが是を踊りしをいふにておくに歌舞伎は何にてもしかいふ事にはあらず猶昔盆のをどりはならしもあるべし】

仕形踊

○寛文二年寅正月廿日申渡の內仕形舞仕形說經狂言盡しの分屋敷方は不及申町方にても一切膓ありき仕間敷候事【仕形舞といへば所作あるを知べし】劇場の事學ばするやうの事は近き頃迄も江戸にはなかりき【落穗集】に今時町中にて女子供集め躍を教へ又は小歌淨るり三線杯教へ渡世する者いかほども有之已前よりの義に候哉答云我等若年の頃迄は躍子抔と申者は假令高給を以て召抱申度と有ても一人

河原ものかな

○（皇朝類苑）何樓條下、俳優人言河市樂、說者謂、起石𫓧馬、在南都其家樂甚盛、詆諸南河市中樂人、故得此名、其實不然、唐（元和燕行記）其中已有河市字、大都是不隸名郡中、在河市者散樂名也

瓦舍衆伎

○漢土に雜劇また樂戸をすべて瓦と云ふ又瓦舍衆伎など云ふ（古杭夢遊錄）に瓦者野人戸易散之意也とありこのかわらはこゝにていふかはらとは異なり

男舞　女舞　座元名代【やゝ子踊、をどり子、舞子、竈はらひ、聲色】

男舞

大頭の事は前にいへり其流をくむもの寛文年中より御免の舞芝居の名代正德三年癸巳十二月（四條河原名代改帳）に仕形男舞又太夫【右又太夫元祿四年病死仕悴七之助名代相續相願元祿六年御免有て又太夫と相改】

女舞

座元名代

○女舞大頭柏木【寛文七年女舞相願候處御赦免有り其後元祿十一寅年娘れんに名代讓申度奉願御赦免にてれん柏木と申候】女舞笠屋三勝同笠屋新勝同吉かつ同たちやおくにと有り（歌舞伎事始）に男舞名代笠屋新太夫笠屋なつ子孫新勝と云ものゝ一子三郎兵衛寛文六年名代御赦免あり三郎兵衛が先妻を万勝といふ三郎兵衛娘を春勝といひ後妻せんと云ひしを後に新勝といへり夫より姪さつと云ものへ讓り則ち新勝と改めそれよりつやと云ものへ讓り正德年中に宮地芝居御停止になり享保元年四條にて後の新勝前藝唐子をどりをして後女舞のわざをなし兩年勤めしに女藝を禁じ給ひ享保十六亥年九月廿三日新太夫と改り元文二巳年閏十一月後の新太夫ゆづりをうけ又今の新太夫へ渡りし也【同書芝居名代を擧たる處に女舞大頭柏木同笠屋三勝よしかつたちやくに仕形男舞又太夫同丹波右六株は今絶たるもあり當地に居住なきもあり延享年中一勝といふもの大坂にて大頭を催したり又前かた大坂にて淨るり小歌に唄ひし半七に馴染たる三勝といふ者此株の内なり】といへるは大なる誤なりそれは簑屋三かつ

り今顏みせの役者付に狂言作者と書事富永平兵衛始りなりといへり役者は坂田藤十郎なども狂言を作れり民屋四郎五郎が（續耳塵集）に晋羽次郎三郎は上手のうへに狂言立る事も達者なり云々按るに昔村山又兵衛座に杉三安鹽屋九郎右衛門に近江屋久四郎都万太夫に近松門左衛門等の作者あり門左衛門の外はみな作者を業とするものにあらずそれより後は安達三郎左衛門金子吉左衛門江戸にて津打治兵衛など專ら作者を業とする者出きたり

つらみせ

○平澤氏の（後は昔物がたり）に或老人顏見せの事をつらみせとのみいへり昔はつらみせと云しと見えたり小野寺十內がふみ妻のおたんが許へ送りたる文をあつめたるを見し事あり此文の內に幸右衛門も此間若衆と同樣つらみせを見物に參候とか書たり父かけふはでんつくでんの前を通りて抔といひしでんつくでんとは芝居のことなり堺町を通りしといふ事なりといへり（伊呂芝居）【正德の草子】野郎の事をいふ處つらみせの所作事云々又菱川が畫の（十二月遊）といふ物にも顏みせをつらみせとありされども古くは顏みせともいひたり（洛陽集）【延寶八年印本】顏みせやありし昔の初芝居【一加】（温故集）【正德二年撰句は古句なり】顏みせや此二町まち明の春【巴人】顏みせや先月までは奈良の京【超波】但し發句などにつらみせとはいふべからねばにや思ふに是も奴詞なるべし

河原者

○歌舞伎のものどもをかはらものといふは賤めたる詞なり河原にて始めたる業なればそのものと伍をひとしくいへり（似我蜂物語）に今の都のはやりものかはらかぶき子いらぼの茶わんといふ童謠ありかはら者といふ事は（雍州府志）にも伊勢守の記を引て云、寬正六年八月、今出川殿夫人安產、當年巽吉方也、云々、河原者四五輩先行、預掘土置壺胞衣桶、以赤白絹二編裹之、典藥頭取之納壺內、云々、此時仕河原者、主納藏掃除、また（職人盡）穢多の歌に「人ながら如是畜生ぞ馬牛のかはらのものゝ月みてもなぞ（夷曲集）に四條かはらにてよめる【宗恒】よせ大鼓日はてれつくと打いづる波の音まで

○（江戸鹿子）に座敷獨狂言日本橋南二丁目松村休閑南八丁ぼり一丁目道具屋九右衛門新ばしを入るぬしや物兵衛など見えたるも同じものにや但しこれは人形の獨つかひ歟ともおもはるゝよしあり

若衆能

○若衆能後にも有し事あり丹前能【西澤一風が作】尼崎大物の浦より難波の濱に行船の乘合のめん〳〵世間の噂龜山の敵討は近い頃芝居はどれが時花ますされば嵐三右衛門が京にて座元をするはめづらしい事【書中に元祿十四年の年號あり龜山仇打は此年の五月にあり然らば此書この年の秋冬の間に作りたる物とみゆ（輕口ばなし）といふ草子にやつしの上手役者嵐三右衛門病死の事あり元祿十四年十一月（役者大全）に嵐三右衛門三代打つゞきての座本其後中絶したれ共養子松之丞三右衛門に成て座元を勤めし故四代の座元と號すと有る是その初めなるべし】荻野大和屋水木など大坂へ下る【（雨夜三盃機嫌）に女形若衆方の部に水木龍之助荻野左馬之丞あり又男形の部に大和屋甚兵衛あり是なるべし】惣じて役者は車輪の如し扨此ころ生玉の八幡にて榊原小四郎と云ふ若衆又天滿の神明にて宇田小次郎と云ふ色男雙方互格のきりやう南北にわかつて能をすれば諸人見物山をなすといふ事見えたり【榊原は誤字ならん榊原小四郎にはあらざる歟延享四年歿といへり】

似せ野郎

○似せやらう寛文六年午六月十一日町觸町世に似せやらうを拵へ付髮裝束など持參致方々へ參り又借裝束などにて狂言致させ候由相聞え候自今已後改之左樣之者於有之は捕へ可差出候云々又寶永六年丑七月狂言芝ゐ野老井狂言に不出前髮有之者外へ堅遣間敷旨前々より令停止候處頃日右之族方々へ參藝致候由相聞不屆に候向後木挽町堺町野郎子供は不及申役者共又は白人にても藝致候者一切外へ參間敷候云々

狂言作者

○狂言作者は（金子吉左衛門聞書）云彌五右衛門は花車方にて狂言作者の名人なり昔ははなれ狂言なりしが今の二番つゞき三番つゞきは此彌五右衛門に始る富永平兵衛は彌五右衛門につゞきての作者な

風は竹之助京者なればよくうつしけり今の七太夫座の子共は學びけると也【此七太夫も山村座一件已後社地を過ぎ三座へ出て狂言をなすと云ふ宮地芝居古き事なほあるべし】

役者わきありき及居所の制限

○宮地芝居一旦停止これあり正德四年三月十八日日記に見えたり

○役者どもわきありき又居所の事むかしより法度あり寛文二年寅正月十九日野老共乘物にて方々ありき候由自今已後馬駕籠惣てわきありき仕間敷事同廿日野郎ども宿方々に有之故吟味成がたく候半間さかひ町ふきや町ないし木挽町五丁目の内へ早々宿替可仕候彌仕形舞仕かたせつきやう狂言盡しの分屋敷方は不及申町方にても一切隱ありき仕間敷事また凡寺社境内サヽ幕芝居は興行百日を限りて又願ふべきものなり幾年にてもかくの如し

昔江戸に女形稀也

○昔は江戸には女形出來る事稀なりとみえたり（色芝居）【正德年間】江戸の芝居見物を評する處いつもか上たかちとさへいへば女形をもてはやし京でくらはれぬあかべたのけふ迄腰元役さてはお姫さまにしてのけておいた撰屑を一枚かん板にして云々けふは上々吉などと評判に逢ふさりとては愚なり云々（諸藝太平記）に江戸の女形名人といふ分は皆上方の下り役者なればわきて評するに及ばす云々

ほめ詞

○又江戸の芝居見物の者を云ふにさりとはすがたに似ぬ心ざしの花車な所あみ笠まぶかに引込でなかなかとのほめ詞一きは風流に見え侍る

○（色芝居）に深あみ笠の男大わきざしいかめしう横たへたて衆とみゆる風俗して雲井の前がせりふの最中を止めさせて長々とほめことばこれはまんざらの添になりて札錢の外のなぐさみと喜ものもあれどもこんな處か田舍げいしやの爪はじきして惡かるもある云々

獨り狂言

○（世事談）に神田多町わらや治郎兵衛と云もの獨狂言上手なり寛文延寶の頃なりといへり是即似せやらうなり

かみ傾城買の狂言はやり是を島原といふ
○正德四年山村座の事ありて絹衣裳に改らる
○今の如くかつらを着るにはほうしは不用ながら猶女形是を用るは聊古き姿の殘れるも平生額をおほふに用るものなればかくかつら付髪さへ禁ありしかど寬文の末の頃には女形の若衆前髮剃らぬも有しと見えて其頃の芝居役者の評判記にみゆ

芝居衣裳

○(我衣)に芝居衣裳は寶永のころ結構になれり金入繻子ぬひ縮緬どんす天鵞絨熊皮牛天金滅金鋲打しかれども道具立は山みすとてすだれに山或は野立波田家の繪などかきて其けしきを學びたり正德享保に至りて中村傳七と云ふ作者勘三郎いとこ道具立丁寧を始む
○寶永の頃水木辰之助下りて【元祿四年なり】丸きひたひぼうしをかけたり是より前は前がみかつらを付紅の切にて鉢卷をしたり其後元祿の頃狄野澤之允京より下りさがりぼうしを始むこれを澤之允ぼうしと云ふ又役者惣身べににて染る事天和年中古市川團十郎始めたり
○(紫一本)に白山明神表門は駒ごめの方にあきたり裏門は小石川の方なり爰にて日向太夫と云ほうか太夫芝居を仕る染之助小源太幸之助なんと云ふ陰郎共女房若衆がたをする芝ゐ〳〵の圓座うり錢とる者も皆在鄉の物ぐさ太郎の初心ものなり

宮地芝居

○元祿中の事にや(風流徒然草)に京四條おやま瀨川竹之丞藝子のほまれ江戶へ聞えけるほどに市村竹之丞芝居へかゝへ竹之助と改めて顏みせより出けるがふと心おくれし役者を捨て遁世せんとて引込居けるを神明の宮芝居七太夫といふ座元不便に思ひかゝへたりけり此竹之助上方にて立物なりける故わけて此處にてははやりけるされば角太夫ふじの道行を歌上るりに作りて我もかたり小三郎といへる野郎におしへてかたらせけるぶんやふしは江戶にてはしらざる故にや多く人もかたらず上がた女郎の

條に云へり

歌舞伎事始

○（歌舞伎事始）大坂の芝居鹽屋九郎右衞門同九左衞門大和屋甚兵衞河内屋與八郎松本名左衞門大坂太左衞門などを名代とす與八郎は行がたなく絕たり九左衞門は九郎右衞門が子にて已前は濱芝居なり太左衞門は福永屋新十郎と改め今角の芝居といふ又此外に大和や甚兵衞といふ名代鹽屋六左衞門方へ戻す今の中の芝居是なり但大坂は今濱芝居とて小芝居あり濱芝居が本なるよし

○猿若勘三郎二代明石の弟子市村羽左衞門の子竹之丞に鶴の丸の紋を遣すといへり是寛文四年ころにや

○明石が母は中村姓にて紋は角の内銀杏の葉と云へり後これを用ふる事は加賀見遠淸が（江戸砂子標識）にいへり菱川が畫に勘三郎芝居のやぐらの幕紋の丸の內に舞鶴をかけり今の鶴の丸とは形ことなり昔は幕の紋にも鶴を付たるが（堀川百首題狂歌）安井了忠「舞にしも舞たる鶴は其家の紋そと人のいばら左衞門」といへるは舞師の紋をよそへたる歌と聞ゆ鶴はよくまふものなれは舞々が紋に用ひしなるべし勘三郎が鶴の紋もそれらの流にや朝比奈が鶴の丸の紋は中村傳九郎が狂言よりなるべし

○延寶五年四月御誕生の姬君樣は鶴姬樣と申此時御觸なくて後に御觸ありしとみえて元祿三年二月一日鶴字をかへ門印など迄もかへたるなり白粉のかんばんの鶴を鷺にかへたるも此時なり西鶴が名を西鵬とせしも是なり

野郎ぼうし

○野郎ぼうしはもと假髮を制せられたる故なり【されども猶かつらをかけたる女形ありと見えて師宣が畫にあり】寬文四年町觸辰正月八日堺町葺屋町木挽町五丁目諸芝居仕候者共へ被仰渡事やらう幷女がた仕候役者かつらをかけ中間敷候但手巾綿ぼうしなどは不苦事狂言づくしは不及申淨るり芝居說經芝居幷舞々芝居其外諸芝居にて島原狂言を仕組傾城の眞似一切仕間敷事勿論少もつけ髮仕間敷事その

となる故芝居は縄手四條上る處へ引移さる云々江戸芝居の始は猿若勘三郎寛永元年甲子二月より中橋にて始云々後堺町にて興行す市村座は中村座二代目の明石勘三郎弟子市村竹之丞葺屋町に芝居を立ここに泉州堺の人に村山又三郎といふもの有り若年より歌舞伎をして江戸へ藝指南の爲に下り寛永十一年甲戌より當芝居を被立をどり子五六人に能の間の狂言をやつし役者少々まじへて興行故この又三郎を以て市村座の先祖とす木挽町の森田座は万治三年より太郎兵衛といふ者願ひて芝居を立後に坂東又九郎が二男又七を養子とし勘彌といふ正徳午年までは同所に山村長太夫といふ座元にて芝居ありしが故ありて斷絶す又河原崎權之助といふ芝居ありしが絶たり或云河原崎權之助慶安元年京より木びき町にて芝居を立る寛文三年勘彌と相座元のとなるこれに依て其かんや体座してはかわらさき名題に代る

○元祿十七年申二月六日木挽町五丁目狂言芝居山村座取立申候年數の儀御尋被爲遊候私先祖小兵衛と申者寛永十九年午歳より狂言芝居取立仕候當申年迄六十三年に罷成申候尤其已前當所に芝居御座候由承傳申候右小兵衛より私迄五代相續狂言盡仕來申候元祿十七年申二月六日狂言座元長太夫勘彌は私共芝居取立候數年之儀万治三年子歳より當申年迄四十五年に罷成候太郎兵衛と申者木挽町五丁目にて座元仕芝居取立申候て私共先祖森田勘彌を太夫にて狂言盡仕候右の勘彌より只今の勘彌四代に成る

○享保五年庚子十一月十九日書上いにしへ傳内右傳内儀六十年程已前於神田明神社地久三郎と申者放下師にて小芝居仕罷在候處其節上方より放下師罷下都傳內と申堺町にて芝居仕候に付前廉より罷在候傳內はいにしへ傳內と申右兩人堺町にて銘々芝居仕候處四十年程已前迄兩人共芝居仕其後は相止候に付至只今大芝居取立願難成儀に御座候間私共方にて取立不申

○桐長桐はもと桐大藏と云ふ女舞なり或云寛文元年桐大藏木挽町にて興行すといへり大藏が事は舞の

根雨天之節も近年は狂言罷成候樣仕候是も前々之通に屋根かろく可致事と狂言役者衣類近年美麗に罷成候間相止之向後絹紬木綿用之可申事狂言暮へかゝりあかりを立仕候儀堅無用七ツ半時分には仕廻候樣可致事とあり

茶屋

○狂言芝居近所の茶やかろく仕座敷がましき儀一切無用可仕候右之趣を以月番奈良やより證文被申付茶屋共銘々仕居繪圖罷出不殘見分あり凡茶屋數木挽之方十六軒堺町同隣町共五十軒餘有之三町狂言座被仰渡之趣を以普請仕直し四月四日出來見分あり棧敷へ樂屋よりの通路差ふさぎ棧敷の屋根切下げ三階は下棧敷一通りに致芝居人溜りの上座敷取拂葭張に仕直し候事四月九日より三町芝居始候樣御免これあり

芝居土藏作

○享保三年壬十月六日三狂言座風雨の節芝居相止難儀仕候に付人溜り雨覆之儀願之通仰付らる

○享保九年辰三月廿六日水野和泉守殿へ上る勘三郎竹之丞勘彌右之者共此度芝居瓦屋根土藏作りに仕候に付別紙の通下棧敷の儀相願申候十一年已前繪島一件以後棧敷一通りに被仰付今以其通りに御座候下棧敷之儀者御免被遊候ても苦間敷と奉存候依之奉伺則願書二通奉入御覽候以上大岡越前守諏訪美濃守同四月十日願之通下棧敷申付旨和泉守殿被仰渡同十八日願之通下棧敷申付る

三階作り

○江戸の芝居は三階作りなり今も樂屋には三階あり（諸藝太平記）【元祿十四年】江戸の芝居は京大坂に替て三重の棧敷にぎはひ闘しにまさる繁昌札錢場錢も上方に二倍してたばこの火さへ買ねばならず

○正德三年四條河原名代改帳村山平右衞門又兵衞悴より平右衞門と云布袋や梅之丞夷や松太夫都方太夫松本庄太夫藤田孫十郎初森田又男と云享保十年巳六月勘三郎書上寛永元年二月歌舞伎狂言御願申上候處被仰付中橋にて芝居仕候寛永九年云々此時は禰宜町にて芝居仕候

三ケ津芝居の始

○（古今役者大全）に三ケの津芝居の始京は村山又兵衞明曆二年丙申四條河原中島にて興行す其處町屋

芝居由緒書

○享保十年乙巳六月芝居由緒書上承應元年又三郎死去仕候付聟村田九郎右衞門と申名代を相立一村宇左衞門幷彥作と申者相座元にて右芝居相續仕候此節上方より踊小歌舞三味線の藝者共罷下り二番ツヽのはなし狂言を拵相勤申候且又右近源左衞門と申役者上方より罷下りねりぎぬの湯帷子をかぶり女形を此芝居にて致初候右市村宇左衞門悴竹之丞十歲の時ふきや町にて玉川主膳と申役者と相座にて狂言芝居相勤候節寬文四甲辰年始て二番續三番つゞきと申つゞき狂言を拵仕候其外の芝居にては前々の如くはなれ狂言おどりのみにて御座候西鶴が（大鑑）むかし右近左近が時は面影まきらはし頭はおき手拭にして大かたに色作りしに諸見物もそれなりけりに請取仕組も今に見くらべて過にし事おかしかりき又云それ迄は舞臺衣裳も唐木綿にさらさの置形地衣裝は加賀絹に中紅の裏をつけ淺草島に紫しつくれば見る人驚きこのうへあるまじとさたする程の事なりし又云昔松本名左衞門中頃宮崎傳吉今の峯の小曝いづれも美少人の中にも小ざらし役者小供の手本よき衣裝を着初めける千里もかくれなき虎が斑天鵞絨の羽織はつとさたし侍る勤子の唐織着初めし是を手本にいろは形曆小紋袖を爭ひける【かゝれば貞享頃よりよき衣裝を着る事となれり】正德四年甲午三月木挽町山村長太夫座の生島新五郎御女中江島と事ありて此遊興に拘りし女中狂言役者數輩幷に町人淺草諏訪町宅地其外本小田原町抱地面不殘欠所拇屋善六等遠島斬罪追放等當月五月御評定所にて相極同九日堺町葺屋町狂言座も舞臺樂屋上中下三階棧敷屋根明り取等之樣子見分御檢使岡本助左衞門大薦木曾右衞門立合三方手代地割手代繪圖出來同九日狂言芝居之棧敷近年二階三階に仕候以前之通一階之外無用之事

內證道

○棧敷より內證道をこしらへ樂屋又は座元之居宅幷茶屋等に座敷をしつらひ遊興之儀可爲無用云々惣て狂言役者舞臺にて狂言致し候外棧敷或は茶屋等へ呼候共一切差越申間敷候尤自分宅にても遊興之客呼申間敷事また棧敷にすだれ懸候事幕屛風等何によらず圍之儀相止之見通し候樣可仕事また芝居之屋

海道下り

ふものをみてよめる又たぐひあるものてない過去未來けんざゐもんが舞のなりふり【（風流徒然草）小舞のふりは京四條大和屋傳助が弟子右近源左衛門はかいたう下りを作り赤手拭をかつき小舞をしけり其後澤之丞と云ふ野郎帽子の左右を垂てかつきけり】（糸竹初心集）かいとうくたり「おもしろのかいとくたりやなにとかたるとつきせじかも川しら川うちわたりておもふ人にはあはだぐちトヨしのみやかはらじふぜんじせきやまさんりをうちわたり人をまつもとにつくとの」「みわたせばせたのからはしのぢのしの原やかすむらん雨はふらねどもり山をうち過てをのゝ宿とよすりはり峠のほそ道こよひはこゝに草枕かりねのゆめはやがてさめがゐばんばとふれば袖さむきいぶせきをろしにふわのせきもりとざゝぬ御代ぞめでたき」自笑が（伎藝古實）に女形起原は承應元辰年右近源左衛門市村座へ下り女形といふを始む云々【（昔々物語）右近源左衛門といふ若き役者京都より下り三線彈一人地諷一人にて源左衛門藝する時今のかつちをといふ物もなく欝金の服紗ものに細き糸を付て額にかぶり其服紗ものを月代に打かくるにより月代をかくす而體奇麗の若ものなれば女の如く見ゆる扨藝とては海道下り山崎下りなどといふ道行を地うたひ諷ふ間小舞にまふ又業平餅を買ふ所を獨狂言に舞ふ云々有りかふりもの種々の色を用ひしにや或は赤といひこゝにはうこんといふ赤きかた似つかはし欝金は右近といふより後人聲によりて混ひたる歟この狂言を或説に寛文二年の事といへり自笑が說のごとく承應元年下りしならば寛文の狂言非なるべし孰れか是なるを知らず】

○按るに海道下りは京よりいづくへもゆく事をいへり今俗道中するといふも同じ（俳諧埋木）おもしろや花にかいたうくたり月また今どこ下りありくなどいへる下りも此のうつりたるなり（續五元集）乞食になれてやすき世をしる町くだり二聲うらぬ茶筅うり（溫故集）桃隣が案山子の句に「道くだり拾ひあつめてかゝしかな」

々或說に明曆二年丙申橋本金作といふ女形棧敷にて客と口論の事によりて京都かぶき芝居殘らず停止あり慶安五年壬辰六月廿七日此度若衆歌舞伎御法度に被仰付候に付町中にてかぶき子の様成せかれ抱置金銀を取公界爲致申間敷事と云町ぶれ有り京都座元村山又兵衞芝居御赦免を願ひ出る事十三年にして寬文八年御赦免あり村山氏の大功といふべしといへれ共誤あるべし件の事は萬治二三年にても有へきか正曆四年の（京童）にも四條河原芝居繁昌のよしみえたり

○又云大夫藏人於國が女歌舞伎も絕て若衆をあまたかゝへ是ぞ世界の花をとり鹽屋九郎右衞門座にみし岸井歌之介平井志津摩など申せしは末代にもあるまじき美少なり此外四十五人舞子ありし【是は大坂の芝居なり】

女形かぶき

○東海道名所記堺町の條に勘三郎とかや聞えしたうけものが女形とやらんこと〲しき芝居さんじきをかまへて歌舞伎がましき事をいたせり【女歌舞伎止て若衆そのまねをしたるを女形のかぶきと云り】又云故ありて子供の前がみをおろさせる此ほとは夷屋吉郎兵衞大和屋八兵衞村山又兵衞この三兵衞か大鼓を打たゝく其中にこくもちの勘太郎云々又九郎主馬之介古びたるものかなこれらの道名もの腹すぢをよらする（浮世物語）四條河原見物の處淨るりのあやつり女のかぶき鼠戶によばゝる聲かしましく覺えて名に高き女がたの上手夷屋の吉郎兵衞その內に大坂庄左衞門江戶勘兵衞が藝づくし若衆共の舞をとる有さまに云々【（太平記）田樂の條山門の法師山伏にいざなはれて四條かはらに行く處早中門の口もうつほどになりぬれは鼠戶の口も塞りて可入方もなしとありこれは田樂なりこれに依て猿樂も同し構へし勸進能の場の入口今もくゞり戶を設くこれ鼠戶なりかぶきも昔はくゞり戶なり今はそれなけれども表の格子戶を鼠木戶と云ふ】

○其頃【承應】右近源左衞門といふ者あり（卜養狂歌集）に女のまねして狂言舞しける源左衞門とい

○古屛風の繪四條かぶき芝居の小屋にやぐらの下に庵形の札あり其文、定來ル八日より於是所六條中の町又一大かぶき仕候、大夫藏人、市十郎、金作、御望のかた〲は御見物可被成候卯月吉日とあり六條三筋町の傾城出てかぶきせり大夫藏人とあるは西鶴が（大鏡）にも其名見えて於國と一双にいはれて高名なりし者なり金作は若衆歌舞伎になりて此名あるはこの名をつぎたる歟水に車はやぐら幕の紋なり又一は林又一郎なるべし伏見繁花と變りて六條に移れりとみゆ

中橋に芝居興行

○中橋に芝居ありし事は慶長中女かぶき幾島丹後が出たる事（そゞろ物語）にみゆ寛永元年の頃猿若勘三郎こゝにて興行す程なくぬき町に移りしなるべし寛永九年勘三郎西河岸に來り禰宜町にうつる慶安四年禰宜町より堺町にうつれり禰ぎ町は（吾嬬物語）【寛永十九年の板本】傳馬町をとをり禰ぎ町に至りぬ云々村山さこんが大かぶきさつまたくみがあやつりくわんじんすまふとさがのふ其外色々かぎりもなくぞ見えにける【（色音論）は寛永廿年の板本なりそれにも禰ぎ町にさこんがかぶきまひすまふさつまとちやがあやつりのはじまりたるかとさが能たちやすらひてみるときは賤が心もよしはらに二八ばかりの上ろう云々（古今役者大全）に勘三郎書上にあり寛永九年の事をいひて此時は禮ぎ町に芝居ありこれ今の長谷川町横町の雪踏町といふ處なりといへり此說寛永江戸圖に合へり寛文元年辛巳十二月廿三日町觸諸見物芝居物仕候者界町葺屋町木挽町五丁目此處にて可仕候自今已後他處にて堅仕間しき事延寶五年（江戸雀）六間町より河岸に付て北へ半町程行ば東へ通ありふきや町つゝきてさかひ町又ねぎ町とも云ふ此處あやつり島原狂言その外めづらしきみせものあり其外あき人ありさかひ町をねぎ町とするは誤れり延寶の古圖をみるに葺屋町市町竹之丞堺町より入口南かはに有り二町の內上るり說經かこぬけ居合ぬきその外小みせものあまたあり】

禰宜町

○西鶴が（大鑑）大歌舞伎御法度の後は村山又兵衞が物眞似狂言づくしに仕掛大夫子あまた集めし云

は其頃の小歌にいたゝき運た大原木をいへるをうたふなり延寶三年印本（蘆分舟）かぶき若衆の小歌の聲には道頓堀江の魚もをどり云々（懷橋談）に今は小童の舞を制し給ふとあるは前髪を剃て野郎となしたるをいふなり【此制の事諸書にいへれどもその年月をいはざればいつの程とも知がたし然れ共承應には如此】また（可笑記）などによるに正保にはいまだ其事なし是をもておもふに石谷將監殿の制なり慶安四年六月役付なれば或説に此事を慶安三年なりといへるは誤り五年壬辰なり下に町觸みゆ【白笑が（役者伎藝古實）の中に日本ばし北室町一丁目横町中村勘兵衛是貞享元祿の始若女形中村數馬がみせなり役者油みせを出す始なるべし今に繁昌すといへり年代も相違し女形と云るも誤なり】（京童）【万治元年】にも今は若年のものゝ額のかさりをとらしめうるさきかたちなり云々ひたひにわたを着云々百會を頭巾にてかくし云々【（江戸雀）【延寶五年】ひたひかみをとらせらる此故にくゝり頭巾をなせり狂言に出る時は付髮をするなり】

よしはら町歌舞伎

○江戸よしはら町にて來三月五日かつらぎ大夫かぶきをどり有と日本橋に高札を立る【いづれの年ともしられねども元和已前にてはあるなり】貴賤群集し見物す【此下大夫かぶきをどりの事あり】大小つゞみ笛大この役者は男なり云々彌兵衛善内が狂言の風情云々取分猿若出て色々の物まねすることそおかしけれ【猿がう事をする者の名今にていはゞ道外なり（雍州府志）に三左が奴隷猿といふ者の事を以て猿若の始といへるは非なり後に出】はうさい念佛猿まはし酒に醉在鄕の百姓あらゆる物まね物もまく、似たる物かな【此下にかつらぎ大夫自然居士の能をしてありければ皇帝のかつらぎ大夫と異名をとりし事あり】遊女ども江戸を拂はるゝ條にとかくかれらを江戸に置べからず女の數をあらためらるるに和尙と號する遊女三十餘人其次の名を得る遊女百餘人みな悉く箱根相坂をこし西國へながし給ふ【是よりよしはら又荒廢してありしを後に甚右衛門願ひ出て又遊所を取たてし事としらる】

や町と號し幾筋となく横町を割【庄司がとり立たる時の事ならねば慥にはいひがたきに似たれども堺町大坂町は今の所なるべく濔町は今の住吉町新町は新和泉町なるべし難波町高砂町は後に出來たる處とみゆ（原本洞房語園）葺屋町の下にて二町四方の場所を下し賜る云々とあり是又疑はし寛永板明暦板の江戸圖にも堺町のみにて葺屋町なしその頃までもこの處二町には分らざりしならむ又思案橋本名は親父橋といへる說あり誤なり古圖を考ふるに思案橋は今のあらめ橋にてわざくれ橋は小網町一丁目の末にかゝりたるなり其頃は今のとうかん堀ほり留の河につゞきたる故この處にも小橋あり親父といふは娼家の長といへば似つかはしき橋の名にはあれど其時橋いまだなく江戸橋のかたよりよしはらに至るには小あみ町より今いふ貝杓子居に出て行しなり（そゞろ物がたり）にくつわを君がてゝ君がははよくふかきばかりにて云々いへり是又君がてゝ甚右衛門に始るにあらずのふかぶきの舞臺を立おき毎日ぶがくをなして是をみせける此外勸進舞蛛舞獅子まひ相撲淨瑠璃色々さまぐ〵のあそびしてぞ興じけるこれらの見物をかことになし僧俗老若貴賤此町に來り群集す【すべてこれらの事（洞房語園）板本寫本ともに載せず】思ひみるべし

若衆かぶき　〇若衆かぶき（似せ物語）おかし男ありけりうたひはうたはざりけれどよの中の小歌を知たりけりかぶきする若衆の座にありて云々姉なる女のもとの子息なりける男よみてやりける驚破とて雲にはのらぬ舞なれどよの歌よりはよくぞありてふとなむいひやりける」左門がをどりなり【そのかみは歌舞伎もの小歌をうたふ事を專とす（夷曲集）に歌舞伎若衆小金といふもの小歌の音頭上手なりしを【以春】音頭の歌にて人を呼子鳥こきん一部の大事とそきく】（可笑記）【正保元年書る跡卷中にあり】ある人やふれあみ笠ひきこみ若衆かぶきを見物す其處の繪太夫かづまといへる若衆風折えぼしに花をさして着ふり袖右のかたぬき太刀を帶背に幣をさして扇を開てまふ傍にあの山みさいこの山みさいと書たる

よし原町

歌をまじへとある其時の名と聞えたり江戸にて興行はある（日記）に慶長十二丁未年二月十三日從今日｜｜｜觀世金春勸進能あり云々棧敷錢六十貫文有之一人二十錢ヅヽ太夫共やゝこ踊もさやうに御座候間外聞迷惑之由申札を不立人によりて勸進錢をとる何れも永樂錢なり同月廿日於先度之能之場所國といふかぶき女勸進かぶきあり【御本丸と西御丸との間にて觀世今春勸進能を興行】諸國の遊女そのかたちをまなび一座の役者をそろへ【（雍州府志）に凡能太夫脇太夫狂言太夫以下笛大小鼓地謠ことごとく備る是を一座と云と有一座の役者是なり】舞臺を立置云々【了意の記その時三味線はなかりきかくて三十郎を夫にまうけ傳助をかたらひ三條縄手の東祇園町のうしろに舞臺を立さま〲に舞をどるとあり】中にも名を得し遊女には佐渡島正吉村上左近國本織部北野小太夫出來島長門守杉山主殿幾島丹後守などと名付是等は一座のかしらにてかぶきの和尚といへるなり】（羅山文集）佐渡島かぶきは慶長十九年なり了意の記六條傾城町より佐渡島といふもの四條川原に舞臺をたてけいせい數多出して舞をどらせけり若上らうといふ傾城屋また舞臺を立て能をいたす脇もつれも地うたひも皆けいせい共なりければ諸は蚊の鳴やうにておかしかりければ後には脇地うたひは男をやとひていだせりとあり【その頃歷々の人これが爲に放蕩なりければ女歌舞伎とゞめられなほ六條三筋町も追たてられ西朱雀今の島原に一廓を立傾城其外へ出る事を止めらる】佐渡島正吉といふ遊女かみがたより江戸へ下る【いまだ上がたも盛りの時なり拂はれしは江戸も同時なるべし】江戸繁昌ゆゑ三里四方は野も山も家を作り寸土のあきまなし然るに東南の海ぎはによし原あり色ごのみする京田舍の者共此よし原を見立けいせい町をたてんとよしのかりあと芟やかしこに家作りたりし【此物語は慶長中の事にて庄司甚右衞門が開きしは再興なり場所も最初は廣し二町四方は後の事なり】先本町と號し京町江戸町ふしみ町堺町大坂町墨町新町などと名付家居美々敷軒をならべ板ぶきに作りたり扨又本町を中にこめて其めぐりにあげ

をつたへしものならむ山三郎も風流のをのこなればかゝる者にも親しくせし事もあるべし【名古屋三左とあるは西隺が（一代男）に色道二ツ寐てもさめても夢助とかへ名よばれて名古や三左加賀の八などゝ七ツ紋のひしにくみして身は酒にひたし云々加賀の八は何人なる歟しらず七紋は七所紋にや名古屋山三郎が紋は土佐淨るり二段めの文に伴左衞門みるよりもあれに見えしてうちんの紋は巴とみえてあり正しく名ごや山三が紋云々菱河師宣が繪にも山三が紋に巴をかき作左衞門が紋には菱めくもの付たり山三が紋三本傘付るは後の事なり本のうへの事なれば證とはなしがたし

傳助が糸より

○傳助が糸よりは三十郎が狂言傳助が糸よりとて京中これにうかされて見物すと了意も記せり醒齋（歌舞妓事始）を引て昔辻々に出せる札の文に云從五月八日於北野名古屋山左衞門在京糸捻女之所作成之一覽念望之人須來見とあるには糸よりといへるは在所女の糸をよる體をまねひたるさるがうとしられたりといへりこは彼事始に欺かれたるなり先山左衞門といふ名は覺束なき事上にいへるが如し又札をたつるには一座かしら立たる大夫の名を書く事なり（そゝろ物語）江戸に歌舞妓はやりし事をいふ處中橋に幾島丹後守かぶき有と高札を立とみゆ【是は遊女が名なり】是くにが歌舞伎を學べるなり北野にくにが歌舞伎興行の時はくには北野つしまの守と名乘しかば名を書べき事なり了意か記に糸よりとあるをさかしらに田舍ものゝ所作とし札の文を妄作したるはおかし糸よりは延年舞の所作なり（圓光大師行狀翼贊）延年の事をいふ所其藝さまぐ〵なる中に云々糸輪韓神（イトヨリカラノカミ）【見童のわざとあり傳助これを傳へ習ひたるにこそ】

お國歌舞伎江戸に行はる

○くに歌舞伎の江戸に行はれし事あらく〵記すべし（そゝろ物語）【三浦淨心が（見聞集）五十二冊の内より拔出て寬永十八年に開板す】くにが事をいひて北野つしまの守と名付（東海道名所記）に五條の東の橋づめにてやゝ子をどりといふ事をいたせり其後北野の社の東に舞臺をこしらへ念佛をどりに

て淫風甚し秦の符堅が時に一雌復一雄双飛て紫宮に入とうたひしも實もとぞ覺えし云々今は小童の舞をも制し給ぞめで度【好古が（和事始）懶齋が（睡餘錄）みなこの說によるに似たり】羅浮醒齋の物語は（徒然草）の野槌に出たり久仁が夫山三郎が事（見聞集）には慶長の頃ほひ出雲國に小村三右衛門といふ人のむすめにくにといひ（東海道名所記）には三十郎といへる狂言師を夫にもうけといへり故に醒齋云父も夫も三もしを名につきたればそれを後に聞ひがめて名古屋山三郎に混へしにや名古屋山三郎あるひは三左衛門ともいひいづれかさだかならずくにはもと遊女なるよしなれば彼をも是をも夫となへしかそはしるべからずといひて定めかねたり遊女なるよしとは（見聞集）に遊女とかきたればなりされどまことの遊女にもあらず幾たりも夫といはむはいかゞなりこれは遊蕩の意にてまことの遊女といふにはあらじ又後に聞ひがめてといへるも非なり（東海道名所記）は万治の刻梓なり（懷橘談）は承應二年の記なれば万治より七八年前に山三郎といひたれば後とはいひがたしされども（東海道名所記）の撰者了意は當時世上の流行何くれと心をいれて知れるものと見ゆれば餘の人のいへる處と異なるも據どころ有にこそ（鹽尻）に云森家の系譜をみしに右中將兼武藏守源忠政【可成五男】の子侍從忠廣母は名古屋山三【名古屋新藏人高信が子なり】妹と記せり山三は尾州古渡の人なり又一條に記して云那古屋因幡守敦領が子山三郎後九右衛門と云【母織田刑部大輔の女】山三郎浪人の後出雲神子くにと云女を具し八幡にて女歌舞伎をなす其後八坂にて淀殿とも惡名の沙汰有と云々【葭棟大夫といふものゝ由緒書には禁庭北面の侍にて名護屋山三郎といへるは土佐淨るりに禁中北面の侍ごや三郎左衛門が一子云々いへるに同じ】諸說紛らはしく定めがたくはあれど試にいふべしく夫の事は明らかにしるしたるは（東海道名所記）のみにて其外は夫を誰ともしるさず山三郎が（懷橘談）にいへるもくにに早歌を教へ舞せたるのみ有て夫とはいはず後世そを夫とおもひ誤り

舞ふ云々左右歌女唱歌、舞伎なほ興遊にたえず云々歌舞伎の字面は（日本後紀）などに見えたれどそはうたまひのわざをいへり今歌舞伎といふ名はもとより古き字面によりたるには非ずかぶきとは傾く義にて傾國の舞なれば其意をもてさは名付しなるべし是より出たるにやそのかみのはやり詞に世中にへつらひ媚るものをかぶき者といひかぶき廻るなどもいへり其後容躰のみつくろひて實なきやうの事をうはかぶきともいへり是上傾きにて頭がちなるなれどうつりてさはいへりと見ゆおくに歌舞伎の始りは慶長の（古記）に慶長八年八月今年春より女かぶき諸國に下る是はお國と中大夫出雲のもの佐渡へわたり京へ出踊始る諸人是を見物す次第に能なり諸國に（女かぶき）あり云々（うらみのすけ草子）慶長九年の夏の末かみの十日の事なれば清水のまんどうとて袖をつらねて都人云々らんかんに腰をかけこれよりすぐにとよ國へいざや我らはぎをんとのさては北野へいざ行て國がかぶきを見んと云ふ（望一千句）公方の前もおめぬさほ姫かぶきする春の都の町くだり（翁艸）に國が歌舞伎興行せし芝居の地は始め五條の橋の南にありしを右の橋を只今の所へ掛かへらるゝに仍て其場所御用地になり芝居を四條宮川の西畔へ移されけるが夫も秀吉公伏見より御參内の御道筋に近く憚り有とて又今の東畔へ移されしとかやといへり思ふにそのかみは後世の如くにあらず芝居は竹かこひむしろ張などにてしばらく興行しては又他所に行しなり（懷橋談）【承應二年出雲紀行】歌舞伎といへる事近き頃久仁といふ巫女が舞出したり白拍子の類にや云々此ごろのかぶき初めは僧衣を着て鉦をうち佛號を唱へて念佛躍といひしに其後名護屋山三郎といふもの久仁に刀をさゝせ頭をつゝみて早歌を敎へ舞せければ歌舞伎といふ羅浮子この事を惺窩に語て云々彼かぶきの歌に比太の横田の若苗とうたふも皆出雲の國里の名にして此國よりぞ初りける貴賤これを興じてけり誠に鄭衞の驕惰浮靡の習ある國なりかゝる淫佚の舞なれば寬永年中に是を制禁し給ふ又小童を女の形に出たゝせて舞侍るほどにいよ〳〵男色にふけり

名護屋山三郞

ちらとみた（一代男）越後寺泊にて柴垣踊はしつてかと尋ねるに夢にも知らぬと申何といふても是ぢやもの云々あれば天和の初にははやく廢りしなり按るに胸を打拍子とる事は古きふりなり（桂川地藏記）【跋に弘治二年二月と記】遠近囃子之倫與老若群集云々各自摺編木振手棒掉頭敲胸云々また胸たゝきといふもの有り其條と見合すべし（伊曾保物語）に腰ぬけのゐ計たゝみたいこに手拍子とも是等の事をや可申古き諺なるべし

雀をどり

○雀をどり諺にすゞめ百になりてもをどりわすれぬといへり（堀河百首題）懷舊の狂歌貞德「雀ほどちいさく老の身はなれどういたる人はをどりわすれぬ（宗因千句）をどりはいつも桐壺の內、秋きたる鳳皇あればすゞめあり又（雅筵醉狂集）かくす年百になりても忘られぬすゞめをどりや梅の花がさおもふにこの狂歌はすゞめ踊を人の踊る事ありての歌なるべし

○魏の武帝は宮人を銅雀臺に置てなき跡までも朔望には伎をなさしむ陸機文を作りて此を譏れりそはさる事ながら其事古く有しによれりと見ゆ漢武帝後宮の美女數千人あり武帝薨じて昭帝いまだ幼弱なりしに霍光事を專ら行ひて禮を知ず後宮の女を皆悉く園陵に置それより後諸侯王陵園にも亦是有しなり

手拍子

○手拍子前句附（口寄草）呼出しにけり〳〵手拍子に鯉戀來いは乘せらるゝ

歌舞伎（名古屋山三郎、傳助が糸より、お國かぶき江戶に行はる、吉原町　若衆歌舞伎
中橋に芝居興行　禰宜町　女形かぶき　野郎ほうし　芝居衣裳　座元名代　江戶宮地
芝居　似せ野郎　若衆能　狂言作者　つらみせ　河原者

歌舞伎

○（日本後紀）桓武天皇延曆十八年秋七月己酉、停伊勢齋宮新嘗會、但以歌舞伎供九月祭、とあるは歌伎の字の出處なるべしまた舞伎ともいへるは（著聞集）に承安二年五月二日鷄合の條妓女二人廿洲を

なりとあり】（熊坂）の謡に賊の名に壬生小猿といふがあり（拾葉抄）に壬生狂言に猿の綱をわたる事あり狂言あまたある中に是を最上とすこれになぞらへて盗人の名を壬生小猿と呼なりといへり此説によれば此狂言も久しきものとみゆ（俳諧染糸）出るよりおかしかりける狂言師是非とも壬生へ御供申さむ（京童）喜雲が狂歌「有あけのつれなき壬生の念佛より狂言ほどのうくものはなし其處の繪にも猿のつな渡りをかきたり（同書）千ぼん閻魔堂の條に暮春の念佛は文永年中如輪上人といふ人始められし也云々【（後撰夷曲集）寛文十一年千本念佛いろ／＼の狂言綺語の法事こそ讃佛乘の焔魔堂なれ【資之】其處の畫に桶とりの狂言するさまをかきたり壬生に倣ひてこゝにもこの狂言するにや」（篗絨輪心）のどかにくらす靜代賊たえて念佛に壬生も猿ばかり元祿十五年の草子（花見車）に壬生大念佛の頃にぎ／＼しきにうかれ出茶店にやすらひ茄子賣の猿になりたるを見てしばし有ける云々あり其所の農夫など狂言する事と見えたり】

柴垣

○柴垣は明暦頃の小唄にて二人むかひて手拍子うちこれをうたひしなり（武藏鐙）【万治二年板本】何者の傳へて始めたりけん此頃北國の下部の米搗歌とかや柴垣といふ事世にはやりて歴々の會合酒宴の座にても第一の見ものとなりいやしげにむくつけきあら男のまかり出くろくきたなき肌をぬぎえもいはぬつらつきして目を見出し口をゆがめ肩を打むねを敲きひたすら身をもむ事狂人のごとし右に左にねぢかへりあふのきうつぶきあがきけるを座中聲をたすけ手を打てもろともに興ぜられしをみる人さへうとましく片はらいたかりしがはたして諸家ともにみな柴垣となり云々【明暦の回祿をいふ】（卜養狂歌集）或人奴しば垣をうつ處を繪にかきて歌よめとあれば「やつこ衆の名もさ名なもさゝ柴垣をゆひたてられてうつゝなのみや又同集【端書略す】しば垣をうつの山邊のうつけもの夢にもひとつあはぬ手拍子（糸竹初心集）に柴がきしばがき柴垣こし雪のふりそでちらとみたふり袖ゆきの雪のふり袖

どりそこらでしめろまかせはら帶【延寶のころいせをどり大にはやりし事（紫の一もと）にみえたり】（風俗文選）に俳諧文をいふに一ツの趣をたつる所なくては童蒙の丸い物盡に落て果は松坂を仕舞となせる無下の事なるべしとは千代の松坂とゝちむるをいふなるべし（松の葉）にきぬたをどりは一をどり若衆をどりは一をとりなどあるはみな伊勢のやうだの一をどりといへるにならひたるもの歟

千代の松坂

岡崎踊

○岡崎をどり（鞭草）に筑紫琴をいふ條に小歌のをかざきをどりなどのみにてひきまはれば云々又（あふむ新つれ〴〵）に岡ざきをどりといふ小歌をつくし琴に合せてひける事あり是今にあるをかざき女郎衆といふ小歌なり（人倫訓蒙圖彙）代神樂の處に獅子が立て扇の手をつかひ一ノ谷ぶして舞最珍敷事共なり岡崎女郎といふしゝをどりなれば云々是獅子まひがをかざきを踊れるなり【一ノ谷ぶしは十郎兵衛ぶしなり】是は一ノ谷十郎兵衛が事をうたひし節付を云ふ某にても其初めそれよりうたひ出し節を某ぶしと云ふ八郎兵衛ぶしは古手屋八郎兵衛が事をうたひし內のふしなり金五郎ぶしはかなや金五郎が事をうたひし節なり永祿十年七月駿河國八幡村より踊初め村々へをどりをかけそれを又かへす故後には踊あまたになり八月の末九月迄踊れりと古記にみえたるをかざき踊も其頃よりのものなるべし

壬生狂言

○壬生狂言壬生は大宮西四條の南にあり寶幢寺と號す本尊地藏𦬇なり毎年三月大念佛あり此處の人民集り狂言をなす（雍州府志）に後伏見院正安年中圓覺上人作此寺始修融通念佛於今毎年自三月十四日至廿四日有念佛其間土人作俳優是爲驚衆人之睡也（滑稽雜談）に此俳優に用る假面佛工定朝が作三面あり所謂俳優の名目猿桶取等の面を第一とすと記せり（貞德文集）昨日壬生之念佛へ無御誘出拔し候事遺恨千万々々狂言十王餓鬼腹膨桶取猿等不替昔相勤候哉云々また（淀河）に秘藏の花の枝をこそ折引よせてつふりはる風我むすこしらみ見るまねする壬生の猿【注に是は壬生の狂言みねば合點ゆかぬ

みせよ時鳥」【沾涼】

鹿島踊

○鹿島踊は師宣が畫本に神代のむかしは先いせをどりかしまをどりすみよしをどりとあり又英一蝶が畫などに往々あり其外ふるき草子などには見えず事ふれば多く見えたり此ことふれ彼はうさい念佛踊などに倣ひて踊たるなべし（洛陽集）事ふれや獨言いふ神な月【如風】（永代藏）【五】これやこなたへ御免なりましよ鹿島大明神さまの御詫宣に人の身袋はゆるぐともよもやぬけじの要石啇神のあらんかぎりはとの御詠歌の心は惣じて產業の道かせぐに追付貧ほうなしと言ふれがいふて廻り云々こは戯れ書ながら其趣はしらる（松の落葉）【三】大小見踊とあり即鹿しまをどりなり月の大小種蒔の時節を云

舞々

ふ踊なり是やこなたへごめんなろ先來年のゑはうは申酉の間云々美濃國にて舞まひと稱する者あり百

正月さし

姓の内なれども部を異にす此者歳末に來りて守札やうの物を人家の門々にさして廻る是を小兒は正月さしと云は春に近づく印の意なりさて春になりて又來りこの度は月の大小種蒔等の事を云ひて米錢を貰ふ舞まひは只名のみにて彼事ふれに似たるものにや帶刀して來るとぞ万歳などのかくなりしにや

伊勢踊

○伊勢をどりは伊勢音頭にてをどるなり音頭は（職人盡）曲舞の判に當世曲舞に月にはつらき小倉山その名はかくれざりけりといふ音頭を思ひよせるにや云々有り音頭は字の如く其歌の初めに先うたふと有にや今や音頭とりは一群の中に拔出て最初をうたひ出すなり（梅窗筆記）に伊勢街道の伊勢に松坂といふ所あれど今の俗のをどりの音頭といふものに千世の松坂といへるは山城の粟田の東なり應永卅一年極月十四日（室町殿御參宮私日記）に我もまたけふは都に入日かけうれしくむかふあふさかの山松坂にもつきぬ年々歳々の御參宮にことさら此ところしも千とせの坂の名をあらはしてたひとの祝詞にあひかなひぬるも神慮のしからしむる所なり君は猶千代の花さく松坂をいく十かへりかこえてみるべきといへるは非なるべし（卜養狂歌集）にいせをどりはやりければ「我君をこゝでまつ坂いせを

葛西念佛

寺そこねたる橋までをこんりうをなし其所はんじやうすると申けると有その畫笠に花唐草の如き物を付笠の緣にきぬを垂たり皆たちつけを着て二人は頭に太皷をかけ四人は鉦をつけたるを手に持壹人は杖にて蒲簀を荷ひゝさくをもてりいづれも狂ひ踊るさまなり俗體にて法師にはあらず此時むかしといひしはいつの程にかあらん（そゞろ物語）女歌舞伎の事をいふ處とりわけ猿若出て色々さま〴〵の物まねするこそおかしけれはうさい念佛猿廻し云々是慶長中の事なり（可笑記）【正保元年記二卷】むかしさる人云狂人走れば不狂人もはしるといへる禪話ありげに〳〵江戸上下の人々が慶庵の泡齋のと云ふ狂人共町々小路をかけ廻り【慶庵の事は九卷にいふ】是は彼狂ひ踊るをもて發狂したる者に譬へていひしなり（世事談）に葛西の土人鉦太鼓に笛をまじへ踊念佛にて江戸の大路を廻る是を葛西念佛と云泡齋と呼事は寛永の頃泡齋といふ狂人の法師ありて町小路を走る童部集りて氣違よ泡齋よとはやせり今もつてかくいふ言ありて氣違の名目となれり此泡齋はやされて踊るかたち異形にして人の笑をかさねしむかの葛西念佛が踊る所一樣ならす左りへ飛あり右へはねるあり頭をうなだるれば尻をふりておのがさき〳〵心々にして定れる拍子もなくたゞ物に狂ふが如し泡齋坊が踊るにひとしよつて泡齋念佛と呼ぶ誠に氣違念佛踊とも云べきなり泡齋寛永のころといへるは誤なり前に引る古書の記文と異說なれども此事關東の事なれば彼は傳聞遠く堂塔建立も何れの寺とさだかならず是は沽涼が說然るべし其後此念佛廢れたれど下總佐原の邊には年老たる者家事をば子孫にゆだね隱居して逸樂なるは男は太鼓を打女はをどりをならふ年老ていと似げなき事なり思ふにその始葛西念佛にてありしをいつの程よりかあらぬ小歌をうたひ踊るなるべし

○（本朝俗諺志）熱海溫泉少し傍に方齋湯と云あり水なし凹みたる處に石四ツ五ツありこれに向て淸左衞門と高聲に呼はれば大に湯わき出づ淸左衞門にはかぎらず何といひてもわくなり「方齋ゆわかして

泡齋念佛

日の夜南無阿彌陀佛六字を唱る聲フシ松が崎のごとくなり【江戸にも昔夜踊あり寶永六己丑年六月十八日頃より町々にて夜中踊有之樣相聞不屆に候往還之障にも成候間踊らせ申間敷云々】をどり念佛は（老人雜話）に遊行上人の始祖を一遍上人といふ隆蘭溪に法を聞歌學に勝れたりそれより今に至りて其流を傳ふる者連歌をせり或人一遍上人を嘲りて踊念佛をなすは佛の踊躍歡喜といへる心なるべし然れ共これのみにて成佛いぶかしといひければ和歌をもて譬て云「はねば跳をどらば踊れ春駒のゝりの道にははやきばかりぞ」是等の事書たる書一卷ありとぞ（東岸居士傳）に登高座說法擊羯鼓踊躍或執扇舞とあり（臆餘雜錄）に自然居士者東岸居士之師也といへり此兩僧みな法を說てをどれりとぞ又はうさい念佛とて踊り狂へる念佛あり（似せ物語）【寛永の冊子とみゆ】おかし男いとかしけおとろへて米錢もなかりけりさるをいな事をならひていざなふものにつきて世中をすぎんと思ひて出てをとらむとてかねなどかふて首にかけゝる「出てゆかむ心かなしとわらはれむよのはうさいを人のしらねば」をどらんと思ふこゝろの歌念佛ありき〳〵も申ぬるかな」（卜養狂歌集）ある人はうさい念佛を畫にかきて歌よめといふ「人はみな西はうとこそ願ひしにさかさまごとぞはうさい念佛」古き繪卷物に【松蘿館所藏】はうさい念佛のさまを寫せる處ありその文に抑もはうさい念佛とて花を作りてかさにさし太鼓かねのひやうしをうち踊りとびまはる姿をみる人おかしく腹すぢをかゝへ大勢いこぞりて見侍りける是わたくしに踊るにあらずむかしひたちの國にたつとき僧一人おはしけるその名をばはうさいばうとぞ申ける我すむ寺はそんいたしければ弟子あまた引つれ太鼓かねのひやうしをそろへをどり念佛をくはだてはんじやうの所へをどり出て一錢半錢の勸進を待て堂塔がらんを建立し給とかやされば今末代に至てはうさい念佛と名付太皷かねをたゝきおもしろくをどりければおさあひは申に及ばず老たるもわかきも我さきにとこぞり出これを見くわんじんを入ければおもひの儘に米錢をまつへやぶれたる堂

へ朝鮮人舞來る通辭出て年頭御禮に大將軍へ踊を懸奉ると申す又（醒睡笑）に風流を他郷へ懸る物語あり【風流は祭祀の條にいふ】この風流も懸踊のことゝいへる者あるは非なり今江戸の盆うた野鄙なる事をいへるはもと子もり女などのあらぬ事をうたひ出たるなめれど其始は元祿ころよりとみえて（誰袖海）といふ草子江戸の詞をそしる處盆の踊歌を聞に「ことしの盆はほん共おもはないかうやがやけてもがりがぶつこけてぼんかたびらを白でした」といふ事をいへり西河祐信が（江戸四季遊）の繪卷物に件のさまなる女の童を下男の肩に乘日傘さしかけさせて多く群行かたかけるあり（篗絨輪）連りて鴈がね來るひと並び盆の踊は襟が帶なり【帶をたすきにしたるをいへり】（靱隨筆）春來が盆三日のことを獨吟につらねたる内に「おいとま乞のけふあすばかり欠落の君かも市のしほれ艸」

中踊

○中をどりといふは（義残後覺）入江大藏之丞口論の條七月十五日の夜藝州御城の馬場にて諸方の士小姓衆三味線皷にて大をどりを始る程に大藏の道場の太鼓三尺四方ありけるを綱をつけて首にかけ是を拍て中をどりを仕給云々（俳諧懷子）【五】三尾線のこまなへていざや中をどり（佐夜中山集）に【古歌取】こゝろしりき袖打ふりし中をどり是は輪をどりの中に居て踊るにやあらむ又木曾をどり辻をどりはねをどりばかをどりなど種々の名ありをどりぶりに聊かはりあるなるべし

灯籠踊

花園踊

○灯籠をどりといふも念佛をどりなり（日次紀事）云洛北岩倉花里西村少年女子各戴大灯籠聚八幡社前男子擊大鼓吹笛勸踊是謂灯籠踊また（俳諧五節句）に花園踊【鄙北山邊の在名なり】十五日の夜踊なり在處のよめ置灯籠の尾のあるに左右に絃なき弓のやうなる物ありそれを兩の肱にかけ腕におさへ灯籠を頭に戴き踊る赤前垂するなり此灯籠を聟張て遣す大方年に三人ばかりは娶よぶ故踊るなり惣踊

題目踊

念佛にフシ有て其中に交るなり題目踊は山城松が崎と云在所なり十六日の夜南無妙法蓮花經の七字を

念佛踊

フシ付男女一在所踊る男は中踊なり太鼓あり廻向に頰かぶりとり腰をかゞむる也念佛踊山城賀茂十六

かげ踊

などの美しき意をもかねていふなり（貞徳俳諧記）に歌いづれ小町をどりや伊せをどり其さまかける古畫をみるに小娘ども美しく出立手すきかけ鉢卷し作り花を挿小大皷を持うちはやし輪にならびて廻りながら歌うたふ躰なり昔のをどり多く輪になりてをどるなり【此大皷を後には團扇のやうに作りて盆大皷といへり】行風が（夷曲集）の序にうらぼんになればをの童は山寺の御兒綰折から攝待の茶筅がみにゆひなし友どちこよとて小手招ぐしかも明衣の廣袖を着をとめらは鬢のかみの經ぬの島田わげ夕風の吹返しにゆひていざをどろといふより手拍子とり足どりする十五夜の月の輪のごとくにこそをどれと有り打そろひて他處に行てをどるをかげをどりといふ（未得）が狂歌にかけられてあふむかへしにきたるこそ小町をどりの歌のさまなれ古き俳諧などに多くみえたり（俳諧五節句）といふものに踊は國々唱歌かはる音頭のなき國あり大方夜踊る書は女童部をどる是は箔の太鼓塗撥を手ごとにたゝき染絹の鉢卷帶を肩よりぶらさげ結びだすきと名付都の大路を日傘さしかけて躍をかけに近付の門にて踊るなり是を小町踊といふ（猿源氏色芝居）といふ草子に昔の女子の事をいふ處七夕のかけ踊に母親あいたてなく純子の鉢卷ぬめりんずの手すき髮はあたまの辻にたてかけおしろいこつてりと豆腐に目はな付てきは鬉に蓮根の後をくろめ繻珍の着るものに緋りんずの下着をほのめかせもうるの帶に紫ちりめんのかゝへ帶紫足袋に尻切をはかせ金の大皷に塗鞭鶴龜を書たる日傘にほてい書たる箔繪のうちはお乳母ばかりは古今かはらず此子を笠に着て云々（中古風俗志）昔は七月六日頃より小町踊といふ事はやりて云々四五人も召仕ほどの町人の娘は肩車に載せ乳母抱守つきそひて日傘をさゝせ其外大勢娘子共手を曳き盆々ぼんは今日あすばかりあしたは娵のしほれ草といふ歌をうたひ歩行しが近年いつしか止で衣裳を改めてあるく子供はなく漸二三人連て歩行ことゝはなりし云々【明和元年筆記なり】踊をかけるといふ事は古くいひし事と見えたり（義殘後覺）【文祿五年記たる書】朝鮮役の時正月元日或陣

なりたるも近世の事にはあらず（季瓊日錄）に寛正甲申六月十四日祇園祭禮北畠跳戈歌舞加賀舞參御所舊例也また此事は（尺素往來）祇園御靈會云々處々跳鉾とみゆおもふに舞樂の振鉾などのやうに鉾もちて跳れるにや是又田樂なるべし【山鉾の事は祭禮の條にいへり】（猿樂狂言記正續拾遺）ともにをどり念佛盆踊の事往々見えたり又（二水記）永正十七年七月廿二日見躍拍物今夜勸修寺張行也當年每夜有此事近年不見聞事也倚天下靜謐之所爲歟しからば盆躍といふ事この頃より行はれしなり空穗猿と

ひんたの踊

いふ狂言にひんたのをどりは一をどりといふ事ありいづくにもおどりあれ共是は事に名高きをどりなり三絃のふるき組歌大幣にひんだぐみふねのなかはなにとおよるぞとまをしきねにかぢをまくらにひんたのをどりをひとをどり〳〵このたぐひの歌五うたありその內三うたにはひんたのをどりといふ事なし【そのなきかたや古からむとおもはる始めその里にてその里のをどりとはうたふべからずこのをどり行はれてよりぞいりたるひんだなるべし】（懷橘談）【承應二年出雲の記行なり】かぶきの歌に比太の横田の若苗とうたふもみな出雲の國里の名にして此國よりぞ初りける又云ふ日田といふ所に日田神有り俗謠にいふ比太の横田なり古老傳云ふ鄕の中に田領許あり形聊長し遂に田によりて横田明神ありといへりひだといふべきをひんだといふは濱千鳥の類なり唱歌の音勢によれりかぶきの歌にとあるは誤なりくにが歌舞伎よりは前にある事猿樂狂言にても明らかなり

盆をどり
小町踊

〇盆をどりは何にもあれうら盆にをどるをなべていふ西武が（獨吟千句）七夕や機嫌よからん盆の月盆の前より躍るむすめらどもあれば盆を待ずしてをどるなるべし小町をどりは小娘のをどりなりまちは（和名抄）に別屋也又村坊也とみゆ今町字を用れども町はもと田閒をいへり唐の制鄕保隣里在城邑曰坊と見えたり后まち釆女まちなどいふもこの義なり女の名に三條のまち小野小町などいふ其居所をもて呼たる也又まちめといふは坊閒の女をいふされば小町は小さきまちめといふ義そのうへ小野小町

ことぶきにて衣食住の三ツを重んずる故なり】其唄諸處にて異なりとなむ其内上がた小歌（絲の時雨）などに万歳あり是は木造めける事は絕てなくむねと商人の事をいへるは事はいやしき万歳になむその

やしよめ

唱歌に「やしよめ〱京の町のやしよめうつたるものなに〱大鯛小だひぶりの大うをあはびさゞゐはまぐりこ〱云々そこを打過そばたなみたればきんらんどんす云々此小歌（大艫、松の葉）などにも載せざるはいと近く小歌には作りたる歟されど万歳がかゝる事をうたへるは久しきことゝ見えて（寛永の發句帳）に「万歳樂まづうりそめや京の町」また西武が（獨吟百韻）に「六百は堺の町のとりやりに蛤こんと賣やすみよし自注に万歳樂に百なら御ざれはしたものは賣ぬ物蛤こんとうたふなり住吉は濱ぐりのえんにいふなりと有り昔も下ざまの家に行ては唱歌も相應にうたひしなるべし（醒睡笑）に祝ひ過るもいな物といふ條春の初めの朝より千秋万歳とも又鳥追ともいふが家毎にありきて慶賀をうたふに千町万町の鳥追が參たといふて或門の內へ入らむとして犬に咋つかれあらたのしやといふをいたさにあらかなしやといへる咄ありこれ鳥追とてうたふ歌も又萬歲なり【鳥追の條にいふべし】

○或人語りけるは周防山口に覺定と云ものあり每歲元旦に國主の城門に參る此時門を開くを嘉禮としそれより諸人出入す祝詞を唱ふる事千秋万歳に似たれどもやうかはれり其服水干に鳥かぶとを着る士庶の家にも至りて此事をなすといへりこれ万歳の古風殘りたるなり覺定といへるはそのかみさる名の千秋万歳法師にてありしを其をつぎたるものなるべし

をどり

をどり　ひんたの踊　盆をどり　かけ踊　小町踊　中踊　灯籠踊　題目踊　はうさい念佛　葛西念佛　鹿島躍　伊勢踊　千代の松坂　岡崎踊　壬生狂言　雀をどり

○をどりは蹈歌を始とすべき歟しかしながらその說後世よりさかのぼりて似つかはしき事をとりていふにやあらむ古は舞といふより外に名もあらず但し踊躍ををどりといふはもとよりなれど一ツの名と

とある詞つきふと思ひ出て猶優に聞ゆるにや（續古事談）大饗の鷹飼は中門のおもて幔門本にて鷹はすうるなり東三條は中門より幔門のもと迄は下毛野二文といふ鷹かひ西の中門より鷹しすしてあゆみ入たりけるを上達部の座よりあらはに見えけるに錦のぼうししたるもの手をむなしくしてあゆみきければ人々千秋万歳のいるは何事ぞと笑ひけりその後中門のとにて鷹をすゑてゐるなりとあり鷹飼は錦の帽子きるものなれば千秋万歳が鳥かふと着たるに似たれば笑ひたるなり千秋万歳法師のまへるふりは又田樂の能に取れりと見えたり【故に（新猿樂記）にも出】（文安田樂能記）に立逢【飯阿愛阿籠阿金阿也】揚万歳聲飄袖事良久といへるは（職人盡）の判詞と同じやうなり（おゆどのゝうへの日記）に元龜三年正月五日きたばたけのせんずまんざい三人まいるともあれば人數は定まらぬにやその頃は北畠に居しとみゆこゝは洛陽二條より北にてその間三町なり（滑稽雜談）に万歳は西南相去る事三里許に窪田箸尾の兩村ありこゝより出る故に窪田箸尾の二流あり（人倫訓蒙圖彙）に此流諸國にあり京に出るは大和より出中國は美濃より出東へは三河より出るなり（和訓栞）に神樂歌に千載あり本は千歳とうたひ末は万歳とうたふ此より出たるにやともいへり是また一說なりかやうに諸說あればまぎらはしきに似たれども物一ツに似かよひたる事かさなりぬる是のみにあらず余は古說に隨へり又一

三河萬歲

說に今正月に三河の万歳とて素襖えぼしにて祝語をとなふるもの大江定基より起るといひ万歳作太郎每年東都に至り正月十一日勤仕す其初尾州白井郡長母寺の開山無住其詞を作りて愛知郡印內村の民に教へしとかや（秉穗錄）無住國師尾州木が崎に住せる時萬歲の詞を作りて其僕有助と云ものに教ゆ今田地の名に有助と云處あり土人の說なりといへり（張州府志）に無住國師所作樂稱万歳樂使小奴德若謳之以爲賀正といへるは非なるべし（日次紀事）正月五日禁裡木造始此日千秋万歳幷猿樂舞東庭に來

早歌 鳥追 春駒

云々故に此早歌に柱かぞへる事をいふとみゆ【凡万歳は造宅の祝事鳥追は田事のいはひ春駒は蠶業の

月農功畢亦如之、とありこれ又似たる事なり（源氏）【初音巻】（花鳥餘情）に正月十六日の節會をば女踏歌といふ舞妓すゝみ出る故なり男踏歌は十四日にあり殿上地下の四位以下の輩しかるべき所々をめぐり催馬樂をうたひ舞かなづる事あり是はむかし正月十四五日に京中の遊士月に乘じてあなたこなたをめぐりてうたひ舞しより事起れり末の世に千秋萬歳といひて逸興を催す事あるはこれらの餘風なり圓融院天元六年正月男踏歌ありし其後は記錄などにも所見なしその儀式は（西宮記）と云書に見えたり云々（和訓栞）にあられぱしり蹈歌をいふ（持統紀）にみゆ云々（聖武紀）天平元年同十四年に此事あり（釋日本紀）に此歌曲之終必重稱萬年阿良禮、今改云万歳樂あられは可有といふ音便也といへり（年中行事歌合）にひかる源氏の物語にも男踏歌の事を多くは中侍り大かた都の遊女の聲よく物うたふをめして年の始めの祝ひの言葉を作りて舞をまはせられけるなりと有り天平十四年の事は曲舞の處に引り其時の歌の下句につかへまつらむ万代までにとあるが即万歳樂なりまた萬歳は樂曲にありあられといふ事をいひかへたるは舞曲の名にも據しものなるべし（隣女晤言）に蹈歌の起りは唐叡宗正月十六日より五日の間女蹈歌をせられたる事ありそれをならへるなるべしと云り此事何に出たる歟また（粤述）に猺人十月朔祭都貝大王男女連袂相携而舞、謂之蹈歌、意相得則負去、樂有樂鼓胡蘆笙竹笛之屬、

千秋萬歳

○萬歳はもと千秋万歳といふ（新舞樂記）に千秋万歳之酒禱（サカホカヘ）とみゆ（三十二番職人合）に千秋万歳法師白き裝束して鳥冠（トリカブト）を着手に扇を持てまふ皷うつをのこはあさきの衣きて坐せり「春のにはに千秋万歳いはふより花の木の根はさしさかへなむ判詞云千秋万歳の能作は毎年正月の佳曲なれは諸職諸道の最初にいでゝ云々「立まへるせんすまん歳いづくにもけしきはかりのろくそかひなき判云いづくにても氣色ばかりの祿の乏少なる事をいへるさぞとおしはからるゝに袖かへす所を一をれけしき舞たまふ

へり】前に引たる〔旅宿問答〕に久兒若といふ者因緣舞の上手ありといへるは延年舞を誤りて因緣舞としたるなるべし

○〔本朝語園〕嚴島緣記を引て云安藝國嚴島社に延年とて七月十四日大宮三棟の拜殿にて延年を行なふ五尺四方の臺に三尺餘りの人形を裁て裝束を美麗に莊りて福神と號し拜殿の上に臺ともに釣りあげて暮に及び相圖の鐘鳴るを待て東西の町より男たる者一人ものこらず貴賤の別ちなくみな裸になり犢鼻褌一ツにて髻を解き大わらはに成て打連々々神前へ馳行く西の町は直違橋に勢を揃へ東の町は坂本山王の拜殿に屯して双方の鬨波三度かさなる時われ先きにと大宮の拜殿に蒐参るさて衆僧の中より延年坊とて一人の僧をかの臺のもとに臥しめ行者一人ヅヽ出てこれを祈りて臺の人形に乘りうつすこの時東西の氏子ども臺をつりたる下に立て手をひらめかし臺をうかゞひて押合操あひろめく聲廊臺に響き山に應へておびたゞし臺を下すとひとしく彼人形を奪ひあらそひ双方かけてとりあひ御首を得る事を本とす或は裸身の脇の下にはさみ或は後ろ又は前に隱すといへども少さからねば藏し安からずしてあなたにわたりこなたに取れ地にまろび海に入樓にのぼる又御池の潮にたゞよひて浮ぬ沈みぬ爭ふかくする事夜半も過曉の鐘も告ると云へども猶さぐり索むさて幸ある者疾く御首を奪ひとる時は三更ばかりには諍ひも止御首を得て皈る者は鉄の華表直違橋にて大音聲に御首を得たるぞやと名乘るされば御首得たる方は其年の福あり自ら得る者は猶々福ありと云へりこれらは延年舞の名のみ遺りて爭ひ事などする事は亂れたりし世の中の風俗なるべし

○踏歌は漢土に倣ひしなるべし〔唐書〕禮樂志有窓嶺西曲士女蹋歌爲隊また〔劉賓客嘉話錄〕云踏搖娘曲、乃踏地搖身而歌、因名踏搖娘、唐開元微與突厥默啜、連手蹈万歲樂于城下など彼國の書にはあまた見えたり【〔文獻通考〕【百四十】三韓其俗信鬼神、常以五月祭之、晝夜飮鼓瑟歌舞蹈地爲節、十

年九月後白河法皇如法經奉納の爲に首楞嚴院に臨幸あり云々食堂にして御裝束改めらるゝ此間衆徒庭上に群參して延年種々の藝をほどこす云々あり此處の畫圖をみるに童子扇を持て舞烏帽子着たる男二人突拍子と鼓をうてり芝生のめぐり衆徒あまた居其後には僧俗混じて見物するさまなり（著聞集）【十六】建長四年維摩會の延年に兒白拍子のれうに春日の社の神人季綱をつゞみ打に召具したりけり此ころより男鞁うちあしとて大衆うつ事になりにける云々もとより僧家に行ふ舞なれども俗人を用ひしが此に至りて全く僧侶のみする事となりしなり（圓光大師行狀翼贊）云大抵此場方三十間許芝をたゝんで緣とす承仕等の者甲兵を帶し異形の小童に床机をもたせ來て腰打かけて芝居を圍む中に狩衣着たる兒をならべ其中にして舞其藝さま〳〵なるに【夫催（フモヨホシ）、床拂、僉儀、拂露、假屋米中俱舍】乱舞達僧とて色々の裝束きたる法師のわざなり【糸綸韓神（兒童のわざ）朗詠、白拍子、開口、當ノ井、伽陀連事、兒催、風流、大頭、相乱舞子、退去の樂、とみゆ】（塩尻）に大平記に猿樂は佳例延年の法なりとあるは延年の舞とて舞樂の時最初にある儀なりと是を露拂とも呼ぶ今南都藥師寺の僧坊傳へていづくにても催あれば彼等の僧徃てつとむ昔は貴介の家にて時々ありしにや（東鑑）に承元五年正月五日御前の酒盛に及で延年等ありしを記せりこれ古の散樂にして今の猿樂なり是より事起り足利家の時式定り侍るにやといへり舞樂の時最初にある儀なりとは僧家に猿樂ある時の儀なるべし又（翼贊）にいふ所をみれば一事のみにあらず其內露拂とは初めにするわざの名とは聞ゆれども夫催（フモヨホシ）より三事の後に記したり是を古の散樂なりといへるもわろし今の猿樂の始といへるはさもあらむか（太平記）に猿樂は佳例延年の法なりとあるは延年舞の事にはあらじ（庭訓徃來）二月條詩歌管絃者遐齡延年方也とある遐齡の字を佳例と誤れるにや心を樂ましめ年齒を延る意をもて舞に名付しなり廣くいはゞ何にまれいふべき事ながら後專ら僧家の舞の名となれり【今も日光山御祭禮に延年舞あり僧侶袈裟をかふりて舞

鷺舞

べし】三之丞【伯父なり】取立し事近き頃迄人の知りし事なりそれを我家などと云むはかたはらいたき事なりと次郎大夫度々申されし我又今の次郎大夫を仁右衛門親かたと云れしを直談に聞しされど鷺の名字四座になし是今人の知たる事なれども世へだゝりて知る人あらじ又云鷺の笛狂言神樂同かつこ笛の習といひならはせども鷺は能に有て狂言には舞なし然るを仁右衛門親鷺舞をまひしとてそれより鷺といふと知らぬものはいへどさにはあらず前にいふごとくさやうの名をとるべき人にてはなし云々あり其外家の事をさま〴〵いひたれ共釣狐などの事さたもなきは世に傳ふる妄說とみえたり狐の猿樂古くもありと見えて（新猿樂記）に氷上專當之取袴下文に專字タウメと訓りこゝは當字恐くは女字の誤こは狐が氷をわたる學びなるべし

大酺

○將軍家御能ありて町人共まで拜見を免され御酒御菓子鳥目を賜る事あり漢土にいへる大酺に似たるべし（蓴卿贅筆）【下】康熙二十二年癸亥正月海宇蕩平する故に帝臣民と共に宴樂をなし後宰門に高臺を作り樂人に命せて目連傳奇を演じ活る虎象馬を用ひ又衣類には江寧蘇淅の三所にて織り造りたる獻上の蟒袍玉の帶珠の鳳冠金銀もて作れる魚鱗の甲など着たり帝高臺に登りみづから錢を拋て五城の窮民に施し綵燈はなびなどともして晝夜絕えず古へに稱する所の大酺想ふに即此なりといへり

アラヽギ舞

○アラヽギ舞と云は（續古事談）一條院御時相撲のぬきでの日アラヽギ舞と云舞御覽じける是は樂師寺風俗とぞ女姿にて初めは人のたけ程にてやう〳〵高くなりて一丈に及びけりと有アラヽギは齋宮の忌詞の中に塔をあらゝぎと云よりて此舞のたけ高を塔になぞらへしなり（教訓抄）に庶人三臺と云條は即右のあらゝぎ舞の事なり鷺足に乘る伎とみゆ信西入道傳來と云傳ふる唐舞の圖の內にも丈高き怪き形のものあり同物なるべし

延年舞

○延年は僧家の舞にて是又一種のものなり白拍子大頭などもその內にあり（圓光大師傳）【九】文治四

々文句を作れる人を記したるは狭衣常盤三條西殿御作、善界竹田法印宗盛作、浮舟細川弘源寺作、住吉晉阿彌作、樺小田垣能登守作、夕良上内藤藤左衛門作後河内守と云、俊成忠度同作、木玉浮舟同作、吉備津宮善德作、源氏供養河上神主作和州十二太夫先祖、朝比奈同作、文覺同作、小手巻同作、とあり【（又世ノ子六十巳後樂申談義）といへるものにも謠作者のことあら〳〵みゆ】

四座

○今の猿樂原は觀世金春の兩座なりしが近世盛に行るゝから觀世より保生分れ金春より金剛分れて是を四座の猿樂といふ【處々の大社にすべて其座あるも田樂より因循したるなるべし伊勢には和屋勝田主同三座あり加茂住吉には本座新座法勝寺三座あり春日には今行はるゝ處の四座なりさて又江戸にて

三座　**江戸勸進能**

勸進能の事（見聞集）に江戸繁昌故勸進能毎月怠る事なし（北條五代記）に諸大名の家に一座の大夫役者を扶持して怠る事なし町には西は芝口東は淺草口兩所に舞臺を建置き毎月勸進能有て諸人見物し万歳樂の遊舞に壽命延年を喜びあへりと云り盛りなる事なり

大藏

○大藏は猿樂狂言の本家といふべし（堺鑑）に釣狐寺南莊寺少林寺塔頭永德年中に耕雲菴といふあり其住僧伯藏主といへり鎮守の稲荷明神を信仰して毎に法施不怠或時神感應ありて森の中に三足の野狐あり抱歸て養愛す此狐に靈有達隨仕用追賊難事あり其孫々三足にして今に至て寺内に住居す稲荷靈驗新なり世に云傳ふ釣狐の狂言又吼噦ともいへり此寺より起れり云々其時大藏某狂言に作りしを彼狐感じ老翁に化して狂言を見て猶野狐の骨髓動（ハタラキ）を口傳せしとなり誠に狂言綺語とは云ながら道に達しぬれば如是奇特有事にや尤家の大事とする狂言なりこはまことに俗説なるべし【大藏彌左衛門虎明が（昔物語）慶安四年の記也】予が家は狂言の根元なり云々鷺は本名字長命なり今の長命次郎大夫は祖父の子

狂言師

鷺のこと

かたになりて名字をもろふ鷺といへば仁右衛門親攝津國磯島といふ在所に住し生れ付首長くして水邊に住ほどにとて異名に付し名なり仁右衛門親は下手にてわかくて親にはなれしを【仁右衛門を云なる

歌又判詞を見るに今の狂言といふものぞ貞和已前の猿樂といふものなるがごとし昔の猿樂今の狂言に轉ぜし事ある歟【按に（職人盡）猿樂曲舞まひの歌判詞ともに古き散樂とおぼしき事も見えず又猿樂の畫は今の翁舞のすがたなり【古き猿樂は今の狂言なるべきは別に證を求むるにも及ばざるべし】

○寛正の頃興行ありし猿樂能の謠の名に出雲十柄崔次郎打入曾我梶原二度のかけ星宮など書しもの有り今の内外二百番といふは見えず今その名の轉じたるか廢れたるかしらずといへり【按るに今二百番の外百番の内に似たるものあり十柄は大蛇といふあり二度のかけは梶原座論あり伏木曾我は夜討の事なれば是打入曾我なるべし外題の昔とはかはりたるものと見ゆ其謠曲共みて知べし其他もあらめどいまだ覺悟せず】

○能といふ事も古くみゆ（西宮記）相撲條に相撲了能優一番とありさるから猿樂などを云なりさるを（玉勝間）に是を引て此能字音態なるべきにのうといふは昔より誤れるにやいへり堪能の意をとれるものにて誤とはいふべからず番謠の能は東山殿の頃より始れり是は笑ふべき事もなければ猿樂の意に背けり（安齋漫筆）云謠は足利の代に作りたるものとおもはるゝは鉢木藤永檀風など北條の代まではあれ共足利の代に至りては憚りて作らずといへり（猿樂傳記）は妄說多き物ながら謠曲作者の事をいふ處一休和尚山姥江口を作る云々觀世が家にて遊行柳出來朝鮮陣の時肥前名古屋の御陣城にて芳野詣高野詣明智等の五番太閤の御慰能として出來たり羽衣は神祖駿府に御座の時出來角田川は關東御入國の後彼地の遊民夫婦して舞に似たる座敷藝を世渡とせし者しそめたるよしなり又加藤磐齋が（諷增抄）【一】謠の作は四座の大夫の作りて當座々々に能にしたるなりよき人の御作などもあるなり【二の下に】大永四年吉川藏人爲將といふ人東典厩之所望によりて觀世彌次郎長俊が物語の趣注置たるを調進すと奥書ありて謠の作者を注せる之を載す其作者といふは大方ふしはかせを付たるをいふなり其内少

載たり（源平盛衰記）にも猿樂と申はおかしき事をいひつゞけて人を笑かし侍るぞかしといへり後世にだうけと云是なりだうけを道外と書は假借の字なるべし（悔草）にむさくさものといへばだうけて面白き事云などいへりだうけはおどけの訛言なりおどけはおほどけの略なり或書に美濃國主齋藤山城守入道々三養子右衛門督義龍と不和となり家中二つに分る時に道三下知して云ふ我に同せん者は我形の如く入道せよと有しに道家某といへる者頭を半ば剃りたり此故を尋るに國家の爲を以ていふ時は義龍は義を以てす又今まで扶持の恩を思へば道三へ屬せんか所詮兩樣欲しがたし故にかくの如しとて引籠りたり此者のあたまおかしき形勢なれば是よりしておかしき事を道家と云とあるは附會なるべし（春湊浪語）に文獻通考に散樂雜戲多幻術皆出西域と見えし然るに（翰林胡蘆集）【明應の頃僧宜竹が撰なり】猿樂もと申樂と書て其始推古天皇の御時秦川勝神樂によりて作り出せし故に神字を分ちて申樂と名付と見えたり是は猿樂の家に傳へたる事を聞て書るにや古書に申樂と書しこと更に見えず【按に（本朝通紀）にも川勝奏神樂、當此時、以後代翁舞、名神樂、爾後俗間有可祝事、則致神樂、然鄙人恐神樂之名、更以申字換神字、業其藝者遂稱猿樂これ又同日の談なり云々【根元いやしき業なる故にや順德帝の（御抄）には猿樂のごとき庭上に參る事を止むべしと書せ給ひ（明月記）には下衆猿樂を召るゝ先々此事なし仍只侍猿樂を可召といふ事見えたり下衆猿樂とは其家をたてる猿樂なり今も同例にて朝廷へ參る事なしとぞ寛喜の頃より後猿樂衰へ北條執權の末京都將軍の初までは田樂のみ世に聞えて猿樂の沙汰はなかりしが貞和五年に四條の橋を渡さんとて新座本座の田樂能くらべをせし時に始て日吉山王の示現なりとて猿面を着せし猿樂を舞出せしと（太平記）に見えし是より又田樂は衰へ猿樂盛に行はるその後さまざまの事作り添て謠といひ能といふ事に成し古雅なる事はなく散樂といひし時の殘ると見ゆる事更になし是貞和以來作出せし故なるべし（職人盡歌合）に猿樂又曲舞まひといふものゝ

をうけて書せ玉へるにや嗚滸人來朝の事はいかゞ（新猿樂記）に猿樂之態嗚滸之詞とあり彼是ともに誤にて嗚滸と書べし（後漢書）南蠻傳に烏滸人とあり是なるべし（源氏物語）等のかな文には散樂をさるかうといへり故に（江家次第）には散更とも書たり【（後漢書）南蠻傳交趾之西有噉人國、生首子、輙食之、謂之宜弟味、旨則以遺其君、々喜而賞、其父取妻、美則讓其兄、今烏滸人是也】又（枕双紙）つれ〳〵なぐさむるものをとこのうちさるがひものよくいふがきたるは云々さるがひもさるかうなり人を咲はすをさるかうといふ後唐の莊宗幼習音律或時みづから粉をつけ墨をぬり猥とり優人と共に狂言をなす其名前を李天下と云みづから呼で李天下〳〵と云時に優人敬新磨と云もの俄かに進みて帝の顏を批帝色を失ふ新磨申す理天下は只御一人のみそれに誰を呼玉ふやと云ければ帝悅べりと云り是は李天下と重ね呼たればこれによりておどけたるなり時にとりて此調する即散樂さるがうわざなり（今昔物語）に俊平入道がもとにて女房共庚申しける夜俊平の弟入道君かた角に居たりけるを女房共寢ふたがりて云やう入道君人々咲ぬべからむ物語し給へといふ處咲はむとだにあらば咲し奉らむかしと云ければ女房否不爲只咲はさむと有ば猿樂をし給ふか其は物語にも增る事にてこそあらめ又（同書）に世の人上も下も由无からむ虛して猿樂に然樣ならむ惡き戲れ事は可止云々【（五雜俎）胡元瑞曰、凡傳奇以戲文爲稱也、無往而非戲也、故其事欲謬悠而無根也、其名欲顚倒而亡實也、故曲欲熟而命以生也、婦宜夜而命以旦也、開場始事、而命以末也、塗汚不潔而名以淨也、凡以顚倒其名也、此語可謂先得我意矣云々】又（宇治拾遺）に【又（十訓抄）】陪從家綱行綱兄弟が猿樂の物語りをみるに其時に臨みてする業にて定りて作り設けたるにはあらず【今のにはか茶番といふものゝごとし】又さばかりにもあらず古き曲もありと見えたり（散樂策）に所謂船太新靺鞨魚丸世羅國世稱妙舞また（新猿樂記）形勾當之面現早職事之皮笛目舞之翁體巫遊之氣裝貌京童之虛左禮東人之初京上なほあまた

しとみゆ其後も今の事さにあらず（春臺獨語）に寛文延寶の頃迄は諸侯貴人の宴饗にも幸若の舞を用ひて心をなぐさめ酒をもすゝめけるに元祿の頃より猿樂盛になりて幸若舞廢れたり（昔々物語）に昔は歴々振廻の節謠うたひが幸若をよび膳後座敷へ出尤麻上下云々また別條に昔は幸若の舞はやり振廻の節は幸若八郎九郎其外傳左衞門市右衞門抔とて數十人有之座敷へ出て一禮有之客も御大儀と一禮濟で何ぞ承度と所望有之時何かど舞一流れものたとへば大織冠満祐新曲敦盛とさま／＼番數を伺ひ極めて舞ふ仕廻へば客へ暇乞なしに歸る其時又所望あれば少し休み小舞にても中舞にても今少し承り度とあれば不歸に相待近年は絕てこれなし【今も柳川の藩中には常に唄ふことゝぞ其音聲今の万歳に似たり節は巫女(イチコ)に似たる處もあり詞は神事舞の詞つきの如しとなむ】（壒囊鈔）に大頭を獅子舞のことゝおもへるいとをかし觀場に出たる男舞女まひの事は下にいふ

○（書記）の一書に火々出見命海神より鹽の滿干の珠を得玉ひ其敎を受て其兄火酢芹命を水に溺らし困め玉ふせんすべなくて弟に乞ひ玉はく汝久しく海原に居つれば善術あらむ救ひ玉へもし我を活し玉はば吾子孫は汝の宮墻を守り俳優とならむ弟即風をやめ玉ひしかば兄特鼻を着け赭(ソホニ)をもて手につけ面にぬりて足を擧て溺れ苦むありさまを學ぶ事さま／＼それより今に絕ずとありこれ大隅薩摩隼人の祖なり（職員令）又（隼人式）などに踐祚大甞會の日犬吠をなし舞樂する事見ゆ上代には全く俳優なりしが後に歌舞の體となれり然れば古へよりわざをきは面をぬりし事なり

猿樂　散樂

○猿樂はもと散樂の假字なり【散學は莊子に散木とある散字の如く散人散位の散も同意にて正體なき意なり】（三代實錄）貞觀三年六月廿八日云々、有雜伎散樂透撞呪擲云々之戯とみえ又（同書）陽成紀、元慶四年庚子秋七月廿九日辛巳晦御仁壽殿覽相撲の條右近衞內藏富繼長尾米繼善散樂令人大笑所謂嗚滸人近之矣その後村上天皇御製の（散樂策）にも嗚滸來朝而有解頤之觀と書せ給ふ恐らくは舊史の誤

の小路烏丸久兒君といふ因緣舞の上手あり此久兒君は五條の橋邊雲若より拾子といふ說もあり又北野へ化生したる童といふ義も有り如何さま權化の者也朝夕佛菩薩の因緣を舞て叡慮を慰雲の上にて月日を送彼久兒若この由を聞及び多武峯に登り源喩僧正にかの双紙を申給はり種々の曲節を付先大納言藤原經賓卿にて中之經賓主上內祖父也經賓卿天奏す【二條院】有御感權大夫に任申す是も二條院の御宇に樂の前といふ內裡の女房あり十二の樂老なるに依て得其名家習難遁猿來て結契男一人生この子面猿五體は人なり最上利根にして一字を聞十字を覺ゆ一度受る時は二度きかず就中物の學する事を得たり仍て久兒若禁中にして舞を申す時は其□聞ては立て其體をまねる希代不思議の者なれば所詮それ〳〵の面をかけて躍るべし常に朝廷に躍て叡感を蒙るされば父母の一字をかたどり其名を猿樂と申されば猿樂をば庭の者舞まひをば椽の者と申是也と云り（保元平治）の作者の事久兒若といふ者の事は必その傳へ聊よる處ありしものなるべし其他は總て傅會の空言取にたらず（雍州府志）【九】傳云古桃井氏之童爲小兒在比叡山岩松家童亦然【是稱幸若丸兩童共在山門爲慰寺僧作舞曲唱之是稱幸若流又有一家其家紋大柏二枚相並依之其一流稱大柏流至今有兩流今稱大頭者誤大柏者乎といへるをみれば大頭の徒に岩松氏なる者ありてそれが家傳などにて大柏などの事をいひしものによりたる誤なるべし又思ふに幸若は相續きて越前に居（醒睡笑）越中には舞々瀾座逋座とて二方あり其餘流他國に居るをはみな大頭といひしやうにおもはるおのづから二流の如くなりしもの歟もとさはあるまじきなり後女舞に笠屋といふものあり是はもと大頭の脇にて在し者なり（醒笑咲）【落書條】に大頭勸進舞のワキに笠屋ツレに池淵といふものなりしが折ふしわるう雨ふりし「雨ふらば笠やをきせよ大かしらこゝもかしこも池ふちとなる又同條に大頭彥左衞門と弟子の黑助と何事にやあひだあしくなり中を違ひたる時「舞々の師弟の中もこくすれば大夫も今はないがしらなり【女舞の事は末にいふべし】元和ころは大に行はれ

うたひて舞ことをせざりしより舞はぬものとなり笛などの鳴物も止たりとす無稽の甚しき事なり幸若がうたふ處の軍ものがたりなど白拍子がうたひし物とおもふにや笛はもとより舞まひは用ひざるものなり又幸若よりこのかた立て舞はぬものとはいかにぞや（醒睡笑）などにも舞へる事あまたみえ又（武林錄）【六】前田何がし松風といふ名馬をもてり云々馬取腰にえぼしを付て路にて誰の馬ぞとたづぬる者あれば馬取其儘えぼしをかぶり足拍子をふみこの鹿毛と申するはあかひらまつかいかは袴いばらかくれの鉄兜鶏のとつさか立えぼし何がし慶次の馬にて候と幸若を舞てとほりける云々是にて舞ことしるべし（雍州府志）に幸若自稱桃井直常之裔代々領公方家之祿其舞詞は戰場の事盛衰の變戀慕の情種々三十番あり其後に出來たるを新曲と號す【今書籍目錄を考ふるに三十六番外に五番あり】曲節音聲猿樂と大同小異なり大夫の左右に二人あり連といひ脇といふ大小の鼓を用といへり今の猿樂は舞より取れる事多し舞の詞は大かた（義經記曾我物語）同時のものとみゆ古實其外取用ひて證とすべき事多し（兵家茶話）【十二】（幸若家說）を引て云越前幸若は八幡太郎義家後裔桃井宮內少輔直詮童名幸若丸といふこれより相續て幸若八郎九郎幸若彌次郎三家共に舞曲を業とす【已下義家より五代義兼といふ者より八郎五郎直良といふ迄の累系を載】延寶五年先祖之儀御尋家傳之趣松平因幡守石川美作守に相達此節肯前立物奉窺之處旗本並に可仕旨也御前にて音曲申候節半上下にて相勤御紋時服拜領故不憚着用也また異說あり（旅宿問答）【是はある神職の大夫と天台宗の僧と問答の書永正四年にしるしたるなり】問云舞々は何頃の者にて候哉答云傳承に今の舞々と申は世間を往來する聲聞士が佛菩薩の因緣を唱人を勸る□源平以後兩家取合を作て是を唱へ人心を慰る是今の舞々也【節信云此說非なるべし是說經師などを誤りたる物とみゆ兩人田舍人なればかゝる事あるか】ある說には多武峯に源喩僧正とて宏才有智の貴僧御座す此僧正保元平治源義賢と義平と一亂を作り出し給ふ實是聞事なり然るを勘解由

流なる歟江戸に召れしはいつの頃かひそかに思ふに御三代の頃踊を好ませ給ふとなれば其頃にても有か其後はいかゞなりけむ女舞を禁止の事有し後は零落せしなるべし天明四年甲辰六月廿六日葺屋町狂言座羽左衛門借財多きによりて休座致し桐大內藏當時桐長桐名題にて歌舞伎興行仕度願出同十月十八日桐長桐後見昌甫假芝居興行願の通被仰付此より後度々羽左衛門休みては桐長桐名題を以て假芝居興行の事あり（家譜）に先祖幸若與太夫【中略】女子長桐犬桐坂桐桐大內藏千桐大內藏桐長桐元祖より天明四年に至り二百四十五年といへり

曲舞まひ
大頭
幸若

○曲舞まひは（職人盡）をみるに女なり後世大頭と稱するもの是なり或は大拍とも呼は誤れり又大頭幸若を二派とすともいへり大頭といふ事は（甘露寺職人歌合）廿五番女盲の歌にいかにしてさのみたつ名を大つゞみかしらうつまで戀しかるらむ判詞云大鼓にかしらうつといふ事侍にや云々見ゆ大鼓の頭うちを省きて大頭とはいひしなるべし【鼓は遊女白拍子曲舞まひみな打ものなれど大つゞみ頭うつといふ事出たれば引用るなりさればとて女盲を大頭といふにはあらず】（延年舞）にも白拍子大頭見えたり是もと拍子（ハヤシ）の名なれば幸若もすべていひしにはあらざるか（尤草子）は舞の頭は大頭越前のこうわかといへるはたしかに二派をいはゞ先幸若次に大頭といふべし又幸若のみ仕國を書るもいかにぞや（醒睡笑）などに舞まひの往々出たるみな大頭といへり其頃專らかく呼しことゝしらる又古く幸若舞といひし事もみえたり（應仁別記）云々石見が討れしは三條殿にて幸若舞ありて人々群集して歸るさに辻切のやうにうたれしと見ゆ（猿樂傳記）【二】に後鳥羽院の御時龜菊といふ伎女其始にして妓王妓女佛御前等皆白拍子遊君也桃井幸若丸叡山の兒童として有しが其舞の文段を居ながら吟聲を付て語る是賤しからず面白と流石なる人もならひうたふより今幸若の舞といふもの世に廣まり立ての舞又笛鼓の鳴物も止たりといへり此說すべてひが事なり先その始を白拍子とし幸若はそのうたひものばかりを

るものにや（長門本平家物語）にも白拍子かぞへてとあり【今も春日若宮の神樂舞の歌にシラ拍子ラン拍子と云と有とぞ】

男舞

○男舞とは（徒然草）に多久助が申けるは通憲入道舞の手の中に興ある事共をえらびて磯の禪師と云ける女にをしへて舞せけり白き水干にさうまきをさゝせ烏帽子をひき入たりければ男舞とぞいひける禪師がむすめしづかと云ける此藝をつげり是白拍子の根源なり（源平盛衰記）には島千歳若の前に始るといへり其後源光行おほくの事を作れり後鳥羽院の御作もあり龜菊に敎させたまひけるとぞ（源平盛衰記）佛の前が舞ふ處に祝ひの白拍子かぞへて舞澄したりとあり又今は舞一とさしといへどもそのかみは舞一番といへり同條にみゆ漢土の劍器に似たるものか（文獻通考）【舞部】に劍器古舞之曲名、其舞用女伎、雄裝空手而舞、これを（天祿識餘）にも杜子美公孫大娘舞劍器歌、指武舞而言、或以劍器爲刀劍誤也、といへり白拍子を歌舞するさまは（續古事談）に妙音院相國云白拍子といふ舞あり其曲を聞ば五音の中には商の音なり此音は亡國の音なり舞のすがたをみれば立廻り空をあふぎて立りその姿ものをおもふすがたなり詠曲身體ともに不快の舞なりとぞの給ひけるとあり白拍子は後世絕たれども田舍には其餘流などありしにや（甲陽軍鑑）上杉家の事をいふ條其頃こうきりしやうきり松きり藤きり櫻きりとて五人の白拍子の下にいたいけ美人しづさと美人などとて七八十人もあり其中に櫻きりは大膳藤きりは兵庫二人の白拍子にちなみ內々にて日夜の遊山故諸侍こと〳〵く兩人をまねて行儀わろき事中に絕たり云々又五人の白拍子のこてわき菊夜叉桔梗花おしまなどといふ女共云々あり（鹽尻）に武州熊谷の西新堀といふ里に古より舞女あり上にもめされ傳馬を賜り東都に出その行裝驕れる體大家の夫人のごとし對の挾箱長刀を先にたて鎗もたせたる者を供とす【是は其夫なり】其名を代々桐大藏と稱し富者なり梨園の少年及戲藝者數多扶持し戲場を開き利を得侍るにやといへり彼こうきり等が

ことをこの度新たに作りたるやうにいひて守なる翁を欺き笑はむとて其歌をあらぬさまに翁をそしるとなりといひ聞するなれば眞のことにあらねども是にて歌の意は聞えたり但し髪だゝらは美（ウルハ）しき女の髪のさまなりだゝらはたゞなはるなり（万葉集）【二】疊有又（タヽナハル）【六】立名附は疊着なり（狹衣）にみぐしは行へもしらずつや／＼とだゝなはりゆきてなどある是なり

びんさゝら

○田樂のびんさゝらは拍板なり（文安田樂記）に田樂先中門口ヒンザヽラ【菊阿彌】笛【玉阿彌】着花笠高足駄をはくとあり（洛陽田樂記）には編木とありてヒンザヽラと訓じたりヒンとは編字の訛音にや又ザヽラとは其器の鳴（ナル）音をもて名とせし物と聞ゆ【榮花物語】などにさゝらといふものつきといひ（今昔物語）には高拍子突ともみえたり高拍子にもさゝらをいふか又拍子木なるべし【（一代男【七】阿べ河をわたればひがしのかたにびんざゝらものせてこすにまたすか今のうらみとうたひしは爰のけいせい町とや云々いへるは今伊勢にて比丘尼が手に握る小き鉄にて作れる物にや】

中門口

中門口といふとは（職人盡）の歌に田樂のちうもんぐちの透れんしのぞくぞ月の細めなりける是は内の中門口をいふなり其邊に參るもの故ならん舞まひを椽のもの猿樂を庭のものなどいふ例なるべし【但し中門口は拍子するものゝ着く處なり（太平記）田樂の條兩方の樂屋より中門の口の皷をならし音取の笛を吹立たれば】内の中門とは妻戸の事なり

品玉

○泉州大津村に古より法師三人あり毎年住吉春日の神事に出て伎藝をつとむ高あしだをはき刀をぬきて品玉とす

白拍子

○白拍子とはもと拍子の名なるがやがて歌舞の名になりたるなり（七十一番職人歌合）に白拍子曲舞まひとつかひたり白拍子の歌忘れゆく人もむかしのおとこ舞くるしかりけり戀のせめかな（鶴が岡職人盡）にも白拍子あり秋のおもひ一ころにてもかぞへばや月みるとのつもる夜ごろを白拍子はかぞふ

云々、如此、日々夜々在々所々諸院諸宮已下、郷々村々田楽、

小田楽　大田楽

○水戸の金沙権現祭禮七十三年丑年毎に大田楽あり是は奇観なりと云ふ小田楽は丑未年毎七年め必有

○（公事根源）十一月五節の條を考ふるに天平五年にまさしく内裡にて五節の舞はありけるとぞと有り標注に（江次第）を引て云天平五年無殿上五節寛平昌泰間例云々【今の板本天平を承平とあるは誤なり天平の事を注するなり】按に天平五年は誤なり（續日本紀）天平十五年癸卯宴群臣内、裏皇太子親儛五節、右大臣橘宿禰諸兄奉詔奏太上天皇、云々飛鳥淨御原宮爾大八洲所知志聖乃天皇命、云々、此乃舞乎始賜比造賜比伎こは天武天皇上下をとゝのへ和らげむ爲に作らせ給ひしなり孝謙天皇いまだ皇太子にして五月にみづから舞せ給へば其頃まで定れる事なかりける歟（本朝月令）天武天皇吉野宮にて天女五度袖をかへして舞へるをみそなはしてより起れりといふは俗説とみゆ又天武天皇吉野宮にて琴をひき玉ひしに天女あま下り五度袖をかへして舞へるより五節は始れりとする事いとおぼつかなし因にいふ五節にひんだゝらといふうたひものあり（公事根源）五節帳臺試の下に乱舞ありひんだゝらなどうたふと見えたり（萬葉緯）【十九】収むる郢曲五節帳臺試事の條比牟多多良乎阿由加世婆古曾由加勢婆古曾阿以支也宇川以多禮也古止宇止宇【號早鬢多々良】だゝらは下垂の義かあゆかすはゆるがすなり垂たる鬢髪をゆるがせば愛敬付てみゆとなるべしこれを（今昔物語）に五節奉る尾張守なる者内わたりのことを露しらぬ者なれば殿上人達いひ合せて例年ある事をこの度新たに作りたるやうにいひて守なる翁を欺き笑んとて其歌をあらぬさまにいひ鬪する處これを（今昔物語）【廿八第四語】上略鬢だゝらといふは守の主の毛清く鬢の落たるを此るびんだゝらして五節所に若き女房の中に交り居給たるを歌はむするなりあゆかせばこそ愛敬付たれといふは守の後向て歩せ給ふが□やかなるを歌はむするなり云々とありこの五節奉る尾張守なる者内わたりの事を露しらぬものなれば殿上人共いひ合せて例年ある

田樂法師

能と云こと

新座本座

五節の舞

樂記）郁芳門院、殊儛叡感、姑射之中此觀尤盛、家々所々引黨豫參、不唯少年緇素成群、佛師經師各率其類、帽子繍裲襠、或奏陵王拔頭等舞、とあれど此ごろより僧家にも此わざをなし殊に堪能のもの其徒に多かりし故などにや後には專ら僧家のものゝ如く田樂法師と稱してみな僧形なり（職人盡）などに其さまを畫けり其伎も次第に種々の藝を盡し舞樂雜藝せざる事なしかつらかけて女に出たつ事など（職人盡）の歌に見え其外種々の事するは（田樂能記番組）に見えたり（田樂記）又云侍臣復參禁中、權中納言基忠卿、捧九尺高扇、通俊卿兩脚着藺笠、などあり高扇といふは今も伊勢神宮田殖に出つ兩脚は恐くは高脚の誤なるべし高脚は鷺足といふものなり春日祭に今もあり能は何にもいふべけれど今は猿樂を稱ふるやうになれりし事は田樂を始とす（文安田樂能記）の番組に一番熱田のしゆんかう門の能二番女沙汰の能などとみな能と書たり故に田樂能といふ（田樂人數注文）をみれば福善麿菊阿などの如くみな何麻呂何阿と名乘れり【法師或は童子などもあるべし】その能あまたあり（太平記）に新座本座の能くらべなどおもひ見べし（尺素往來）爲勸進本座新座之田樂和州江州之猿樂各可播所能候この頃ははやう猿樂さかりになりて田樂やう〳〵廢れむとする程なるべし（紀河原勸進猿樂日記）【慈照院殿の時寛正五年四月】田樂法師祗候の事は見えたれどもゝとより猿樂の勸進にて田樂は能をせざりしなり今は神事などに僅にそのかたばかり殘りてあれどもその趣はしらるもとより歌ひものなきにや又猿樂狂言などの如く言詞もありて唯舞とと輕わざのみにはあらずとなむかの伎に高脚に乘りたる形の似たればとて豆腐などの串にさして燒たるにみその名は高し田をあふきて蝗を避る事は（古語拾遺）に見えたり伊勢御田扇もかゝるゆゑにや田樂にこれを用ゆる事なり

○（古事談）或記云七月十二日參內祈年穀奉幣定也、今日有殿上人田事、云ふ、又云、永長元年大田樂事、云々、上達部尻卷四人、左兵衞督基忠、治部卿通俊、右兵衞督雅俊、宰相宗通等、皆直衣持高扇、付大物忌、

やのまぐさの田はとのゝ北わたりせがゐむのもとにぞうへける此ごろうふべかりければみまやのつかさめして此田うへむ日は例のありさまながらつくろひたるとなくておこがましういかにも有のまゝにて云々その日になりてかのすみのついぢくづさせ給束のたいにみやとのゝうへわたらせ給ふ女はう達さふらふかぎりは參るわかうきたなげなき女ども五六十人ばかりもはかまといふものいとしろうきせて白き笠どもきせてはぐろめ黑らかにべにあかうけさうせさせてつゞけたてたり田あるじといふおきないとあやしきゝぬきやれたる大がささゝせてひもときてあしだはきたりあやしきさましたるをんなどもくろかいねりきせてはうにといふものむらはけゝしやうしてそれもかささゝせてあしだはかせたり又でむがくといひてあやしきやうなるつゞみ腰にゆひつけてふえふきさゝらといふものつきさまざまのまひあやしのをとこどもうたひゑひて心よくほこりて十人ばかりありその中にこのたつゞみといふものはれいのつゞみにも似ぬこゝちしてこほ〳〵とぞならしいくめりとあり【此外（枕雙紙）等にも見えて同じ趣なり】鼓を田樂といふこと（今昔物語）【廿卷第二語】白裝束の男共の馬に乘たる或はひた黑なる田樂を腹に結付て枹より肱を取出して左右の手に桴を持たりもとより田殖の舞にして田舍びたる物なれば朝廷に行はるゝ事も其後は聞えず右の物語【榮花は宇多天皇より堀川院寛治六年に終る】の頃には田舞といはずでんがくと稱ふるその樂に用る器なれば田皷をしかいひやがて舞をもでんがくといふ事になりかくて後さかりにはやり出し事は（洛陽田樂記）に永長元年之夏、洛陽大有田樂之事、初自閭里及於公卿、このこと（古事談）に永長元年大田樂事、或人記云、七月十二日參內、祈年穀奉幣定也、今日有殿上人大田樂事、卅餘人裝束式、兼被仰定、云々【この裝束の內に以冠筥蓋爲笠といふ事みえたりこれ今も神事に田樂のきる笠は兩端折れて筥の蓋めけるはこれらのなごりにや】とありもと田家祈年の爲の舞なれば法師の伎にあらぬをかく行はれて一種の遊戲となり僧俗ともにもて興じぬ（洛陽田

田樂

大隅薩摩の隼人等風俗歌舞を奏つりしと往々見えたりこれもとは水に溺れて色々苦みしさまをまねびしなり

力士儛

○（万葉）【十六】に力士儛と云と見えたり又紀記ともに此歌は某振又某歌也などいへるは皆後に樂府にて呼る名それを管絃にかけ儛に合せて奏し歌なり今世に某節と云ほどの事なり雅樂寮大歌所內教坊

樂府

の類上代にも官所ありしなりすべて皆樂府なり（唐百官志）曰開元二年置教坊於蓬萊宮側、京都置左右教坊、掌俳優雜劇、以中官爲教坊使、此其始也、又曰、武德後置內教坊、武后、改曰雲韶府、以中官爲使、開元後始不隷大常也、大常は禮官なり大廟郊社の齋みなこれを掌どる處なり內教坊は樂府なり樂府と云とは漢武帝始て置といへり

久米舞

○又（書紀）神武卷數首の歌どもの終りに凡諸御謠皆謂來目歌此的取歌者而名之也これ後に久米舞と云は此樂なるべし大嘗祭また佛事などにも此舞ありし由（續紀、三代實錄）などに見ゆ（北山抄、江次第）などに以琴爲節拔劍舞無敵とあれば早く歌は絕て舞のみ遺りしなり近世に至りては此舞絕て傳はらずとぞ故に宣長云抑初國所知看し天皇の大御代に始りてさばかりめでたかりし樂の絕はてぬるは可惜しとも可惜しく哀しとも哀しと云へり

田舞

○（續日本紀）靈龜八年五月丁巳云々五位已上進裝馬及走馬、作田儛於儛臺、蕃客亦奏本國之樂、云々（同紀）天平十四年正月丁未朔壬戌、天皇御大安殿、宴群臣酒酣、奏五節田舞、訖更令少年童女踏歌、云々、六位以下人、奏琴歌、曰新年始邇可久志社供奉良米万代摩提丹また（類聚國史）文德天皇仁壽三年閏三月丙午朔、鑾輿幸大政大臣東京染殿第、云々御東門、覽耕田農夫田婦、雜樂皆作、云々また（延喜式）大嘗祭に田儛あり田殖の舞なり（榮花物語）【御裳着】大みや土御門とのにおはしませば【大宮は上東門院なり此段九卷の本を校正して載す】とのなにわざをして御らんぜさせんとおぼしめしてこのとの丶御ま

其聲容の如き後世に傳れりとも聞えず【殊舞八佾の舞田の舞楯節の舞などいふ事國史に見えたりこの內田樂は田うゑの舞にて後代の田樂なるべし】今按るに白石の說も誤れり先づ（書紀）の天磐戸の段に巧作俳優とあり（古語拾遺）に巧作俳優相與歌舞とあり（古事記）にはたゞ歡喜咲樂と云りさてこれはよの常の樂の意にはあらずと見ゆ其故は（古事記傳）天若日子の喪屋を作り八日八夜遊ぶと云ふ處に遊ぶとは管絃歌舞のたぐひを云て樂の字に當れり上代には殯時もむねと樂びせし事此外も古書に

大角小角

あまた見ゆ云々（喪葬令）に鼓吹とあるは管絃にはあらず鼓と大角小角となればよの常の樂にあらず其故は大角小角は御國にても專ら軍に用る器にてよの常の管の類ひに非ずこれに付て上代の遊樂を其類ならんと疑ふは非なり上代のはよの常の樂なりし事古書どもにて知べし天武持統の御卷に見えたるも然なれば其頃といへども天皇の御をりにはなほ上代の如くにぞ有けんさて喪に如此樂せしは何の故ぞと云にまづ人の死たるは彼天照大神の天の石屋に隱りまして世のやみの夜に成しに似たる故に（万葉）【二】に天武天皇崩坐し事を天原石戸を閉て神上り上り坐ぬと讀み河內王を葬りし歌云々これ其時の故事をまねびて歌ひあそびて其人を復この世に還りたまへと招禱る意より起れりその鎭魂祭の儀にも彼故事をまねぶ儀あるにても知べしと云ふ【鎭魂祭】の儀と云へるは覆槽置の事なり（後漢書日本傳）に其死停喪十餘日、家人哭泣不進酒食、而等類就歌舞爲樂、

わざをき

〇俳優をわざをきと云稱もわざは神のなしたまふ意をきは招にて神懸りして大御神を招奉りしより云りをきのをきは淸で讀よし招禱おをきと讀なりまねきいのるの古言なり又火折命その兄火照命を汐滿珠もて溺らし苦め玉へるに依て子孫長く火折命の守り人とならんとある處其溺時種々之態不絕仕奉也とのみ（古事記）にはあることの種々の態（書紀）の一書に悉く出たり火照命は隼人の祖にて守衞と俳優の事後までも隼人の職なり上代には全く俳優なりしが後には歌舞の躰となれりしならむ（續紀）に

なり】無盡の法その始は異なるものなり（見聞集）【三】聞しは今關西大坂堺にてのはやりもの關東江戸まで流行しはたのもし無盡と名付て貧なるもの有德なる者をかたらひ金を持寄座中へ出し百兩も貮百兩も積置皆人札を入是を買取る有德なる者は貧なるものにたかふ買はせ毎月金の利足とるを悅び貧者は持たぬ金を得ることゝちして歡ぶはやりものなればいかなる人も五十ロ三十ロ無盡に入扨又無盡好む人達は壹人して百ロ二百ロもするなり江戸本石町四丁目の乳牛彥右衞門と云人は貮百廿ロに入て無盡中をかけまはり賣買に隙なしと愚老に物語せられしいづれの人もかくの如くなるに依て町さわがしく是希代のためしなり老人是をみて申されけるは已が有を有として貪らず是先賢のいましめなり夫無盡といふ事は貧なる者のたくみ出せる惡事なれば矛楯と名付たりしを此わざ好む者が無盡と文字を書かへたり云々人と中あしき事をむじゆんといふ是により無盡のある年は必國にさはがしき事あり云々【この歲元和元年なるべし】見えたり同意して行ふ事を矛楯と呼むことといかゞなり何ぞ其故ありしなるべし

歌舞、田舞　田樂【能といふ事】五節　ヒンサヽラ　白拍子　曲舞まひ【大頭幸若】猿樂散樂、能、謠曲作者、狂言師、大藏、鷺か事】アラヽギ舞　延年舞　蹈歌【千秋万歲、早歌】

歌舞

○新井白石の（樂對）に伊弉冊尊かみさりませしを吹鼓幡旗をもて歌舞て祭る由（日本紀）に見えたり此神は我國開闢の神にてましますを祭りまいらするに歌舞と云事あらんには天照大神の御時より猶さきの代に始れるかされどその祭りに歌舞を用ひし事も後代の俗に書きしも又しるべからずされどまづ神樂をもて本朝の樂の始とは申すなり庭火より朝倉其駒に至るまでの二十四回皆これ神代の遺風にて神を祭らるゝ時に用ひられし樂にてあるなり其餘の樂曲かれこれと國史に見えし處ありといへども

神樂

によりし戯謔なる觀場なるべし【但しこゝのみにもあらず祝允明が（語怪）に往年兗州、有人家贅壻、與其妻妹私通、事頗露、二人屢自分疏、既而語家人、吾二人不能自明、當共詣岱頂質諸天齊帝、遂與俱去告于神、吾二人果有私、乞神明加誅、祝訖下山各以爲謾衆而已神固何知行、至山半趨林薄僻處行淫焉、久而不歸、家人登山覓之、得於林、則皆死矣、而其二陰根交接粘着不解、方知神譴以示衆也、ことし文政十三年おかげ參りはやり往來にて釣臺に人を載せて通りしは男女交接してはなれざる者を舁行なりと專ら風聞ありこれを尋るに大御番堀田甚兵衞といふ人の相番某召仕のおや方【用人やうの者】と呼ものみやの渡にて怪我したれば歩行かなはず釣臺にて送りけるとなりそれをあらぬ事に風說したるなり】明和八年抜參はやりし時銅脉が（勢多唐巴詩）といふ狂詩一巻ありみな參宮道中の詩なり、或語我町御祓降、又言在所利生奇、

無情講

○乙州が（それ〳〵草）【正徳四年刻】近き頃貧賤無祿のやから無情講とて組々をさだめ少ツヽの懸錢を集め其中に死の先だつものあればそのつみ錢を以て講中より合のべ送り不足なき程にとり調ふ【近ごろ此事大に流行り木魚講と稱し大なる木魚に紐付て首にかけてこれを打ツ、念佛をとなふれば其外これにつれて大聲に念佛してのべ送りするなり】（入子枕）といふ草子に遊女より合て身うけ講といふ事するとありとゝのひがたき事なるべし

身うけ講

無盡講

○享保二年十一月廿六日今度天野佐十郎儀無盡金を企其上金子之肝煎等致し遂電仕むさぼりたる儀共有之付て死罪被仰付是又神尾五兵衞神尾外記神尾彌五兵衞事無盡金の連中に罷成追て掛金迄遣之侍の仕間敷儀に付追放被仰付明和の初ころ無盡講はやれり（寢惚文集）【明和丁亥】無盡會稿序あり有花有實造物者之無盡藏而多金多錢賴母子之初會日也故借茶屋則引一文目之茶代嫌遲參則除八時過之座鬮云々また（太平樂府）に一目掛山子、毎會出錢頻、花鬮亦不中、空（カラ）掛常絞身【山子は江戸にてやましといふ

秀吉神地の封度を掠めてより祠官恒の產なし是より山田のする處に傚ひて漸く麻宮土宜を送りて始て今は遠國までも持行侍るされば山田の十が二もなし此故に處さびしく侍ると舊書に大麻を奉るとあるは各別の事にて千度万度の祓したる麻を奉るにはあらずといへり內宮祠官の說もいかゞあるべき神地封戶を掠められしも豐臣家に至りての事にはあらじ麻宮を諸州に送れる事も山田より後なる由はさも有しにや豐臣家より後の事とも聞えず菅公（須磨記）など僞書とはいへど古きものなり其中に白太夫といへるをのこ伊勢より年々問來り我家のかたはらなる宿をかりのやどり所になんせし云々（異本四季物語）に二月條北野の御社の神わざあら人神はさる事にて白太夫延勝とかものせしは伊勢の神人たりしが是をさへ同じすぢもたふとめりと有かくやゝ古くも見えたれば宇治の方には山田にならふといへどもさまで後に始たりとも思はれず

ぬけ參り

○因に云伊勢にぬけ參りといふ事昔よりありとみゆ（奇異雜談）文明年中の事を記して山崎にある人の下人いとまをこはず伊勢參宮をいたす云々七日にして下向すくれほどにきたりてあるを主人手討にしてしやうがいす中間をよびて是を遠く捨よといふむしろ共につつみて遠くもて行て捨たり翌日早朝にかの下人大道をゆく中間是を見て驚き主人に此よしをつぐ昨夕うそくらきにきりころすもし別人かゆきて其死骸みよといふ中間ゆきて見れば其まゝからげながらあるをあげてみればしがいもなくむしろに血もつかずして御祓箱一ツよこ筋かいにきれてある云々【猿若の芝居狂言もぬけ參りの事を作れり】かゝる俗說も古くありしなり後世ぬけ參り時々流行事ありておかげ參りといふ其時には必種々の怪說あり寶永の初におかげ參りはやりぬ其頃の草子（伽羅女）といふものに大坂生玉誕生寺開帳の條觀場の事をいひて看板を見廻る內大きなる枕繪かき女は振袖生國備後の福山歷々なる人の娘參宮の道で仕ぞこない男は卄五見ぬ事は咄しにならずとゑいや／＼の大見物立嶋の大夜着へ娘と男を上にして片わきに參宮の手みやげ幷べたりとあるも古き其頃流布せし俗說

條可然候松陰預設座梅風自添韻可催講席時興者乎云々

大師講

○大師講（貞德文集）六月四日帖今日は比叡山延曆寺之御開山傳教大師御忌日候昔は大師講とて都鄙諸滿崇敬仕候得共天台佛法令衰微人皆不信心成末世作法中に可申樣無之候【（公事根源）曰是は傳教大師の忌日なり勅使登山の儀あり俳諧季よせにはこれを六月會また長講會ともいへり】と有り十一月廿四日の大師講は天台智者大師の忌日なり在家にも赤小豆の粥を手向く

伊勢太々講

○伊勢太々講今世町人等人數を定め醵銀を集め是を積み年を經て伊勢に參宮し太々神樂を奉る費用を設くるを太々講といふ伊勢かうと云事ははやくありしにや（狂言記）外五十番ちがり木といふ狂言に伊勢かうのとうに當ツたといふ事あり【とうは頭人なるべし】（室町殿日記）【永祿年中】上京今出川に大宗坊といふ客僧伊勢講中の懸錢方々より借用し何れも返辨せざりしかば檢斷所へ訴訟申によりて裏書を出されけり伊勢講の代物借置云々令難澁之由尤不可然云々猶古くは大永享祿の頃宗鑑が（犬筑波集）に結解をやする伊勢かうの錢道者船さながら算を沖津舟とも見えたり（安齋隨筆）吉見左京大夫源幸和が（倭姬命世記辨）に云近年は太々神樂等いへり珍らしき事を作り出して金銀を貪り祈禱をなすといふ元來臣下の祈禱は致すべからざる事なるを非禮の祈をなす妄作と云べし（大神宮諸雜事記）曰安和二年三月廿九日大政官被下式部省書偁補任伊勢大神□部宮司正六位上大中臣公賴事、右大臣宣奉勅伊勢大神宮司等最是自非公家御祈禱之外輙不司臣下之祈禱矣勅宣其嚴重なる事如此是故に搢紳家妄に參宮する事あたはず庶民等は然る故をしらざるにより貴賤爭て參宮す今は天下一統の習風となれり

大麻を配る事

又大麻を配る事は（塩尻）に宇治の祠官語りて云山田は中世より大麻を國々に送り初穗を求む專ら僧家の師檀の如くせしかば遠國の人もよく是をしりて參宮の時先其師職をたのみなどせしかばいつとなく家も富で夫につきたる市井もにぎはしくなりける宇治の祠官は大麻を諸國に送る事なかりしに豐臣

厨膳

ひたる人には當年は御普請可然などゝ年中大形の相談初としきけんよく遊びけるなり（庭訓往來）三月七日條厨垸飯と連ねていへり厨は臺所のことには非ず饗膳をいふ古淬厨膳とて結構し厳なる膳なり領主入部の時百姓を拜する事なり垸飯も同前とあり按るに（後三年合戰物語）に永保三年の秋源義家朝臣陸奥守になりて下りけるに眞衡新司を饗應せんことをいとなむ三日厨といふ事あり日毎に上馬五十匹なむ引ける共外金羽あざらし布のたぐひ數しらずもて參れり云々

日光責

日光責　天神講　大師講　伊勢代々講　ぬけ參　無情講　身うけ講　無盡講

○日光責（閑際筆記）に野州日光山は關以東の靈區なり云々土人古より食を望む人に强る事あり今は歳首祭日及大賓あれば少くこれを行ふ或人云日光の神は餓死の人となり故に後世これを行ふて神意を慰す若然らば介之推火に死て世人寒食すると同日の譚歟といへり京師の人などはあやしく思ふにや（惠空和尙徒然草參考）【これらになき人事にて傳聞たらむは不思議におぼすべしといふ所に】京邊に仕人かの日光あたりの土民のそのむかしには人に餉をふるまふとてひたせめにしひるといふ物がたりを聞に同じかるべし【貝原益軒（東路之記）に日光山瀧尾に行路次をいひて瀧ありて上の高き處に別所とて食攻する堂あり今も物を食せむと乞は食をせむるねぢ棒など責道具多く壁に懸置も又大なるきせるありといへり今も行て見るに別所といふ處にはみな右のごとき器物を懸てあり食を强る事こゝのみにもあらず江戸王子などにも强飯といふ事あり皆これ邊境の古風おのづから有し事なり何の故といふ事もなし】（徒然草）に田舍の人こそ色こく物はもて興ずれといへる類なり今も田舍人の飯酒など强るは常にある事なり

强飯

天神講

○天神講（尺素往來）年始の帖に聖廟御參籠舊冬御有增治定候歟然は今月中可被思食立候法樂式目可爲如何樣候哉天神講七座幷詩歌續歌一千首和漢聯句十百韻以內曇墨流等之短策懷紙七貴夜中可被果遂之

り】汁講を再興仕れり其方共も巡々に興行仕候はゞ自然城下及び領内にも廣まり美麗なる振舞相止可申かと思召候由仰られ候

書畫會

○近來書畫會所々の料理茶屋に於て催す事四時絶る事なく盛りに行はる其卑俗なる事御法度のはな會とて小歌上るりをどり子供の名弘めに異ならず年中其事にかゝつらひて興行をなす者は菊池五山大窪天民が輩なり馬喰町の扇面亭などもと狂歌會の催主占正が輩をたのみ扇を賣に出しが書畫にも出はじめ其會になれて此會催す者は必扇亭五山を賴みて催さねばならぬやうになりたり

垸飯

○垸飯（源氏物語）【やどりき】中の君産養の處大將殿よりとんしき云々わうはんなどはよの常のやうにて（江次第）に調垸飯居其盤と見えまた（東鏡）に獻垸飯といふ事あまた記せり【何れも垸飯とあるは誤なり埦字を書べし埦は（玉篇）に烏管切とあり音わんなり（字彙）に飯器と注せり椀字に通はせて埦字を用ひしなるべしされど合子のひき入には有べからず】後世わうばんふるまひとて節振舞な

わんばんふるまひ

どの儀とす節は節會をいふ（今昔物語）に梅花いと識くさき鶯いと花やかに世中今めかしく所々節供參り云々節供といふべきを今節句と書て又五節句などいひて氣節の句ぎりのやうに思へるは非なり（室町日記）【十三】織田信長正月五日節振舞あるべしと佳例にまかせ諸侯をあつめ玉ふ云々（俳諧御傘）おせちとばかりするは春なりこれは天下の地下人正月に親類ども振舞を申つけたる俗言なれど不及是非春に用（昔々物語）五六十年の昔は【延寶天和貞享ころをいふ】大身小身衆は不及申下々輕き者一人も召仕ふ程のものは町人迄も正月は椀飯振舞とて親類縁者子共不殘呼よせ夫々分限に應じ結構にして目出度壽を謡ひ酒盛してあそぶ是遊ぶ計に非ず年中遠々敷打過たる親類も此椀飯の振廻には年中第一の祝儀なれば不洩集る又不通不和にして過し親類親き方へ詑して此椀飯より寄合の人數に交るなり又誰の子息最早年高らるゝ間今年は緣組可然又誰の息女は當年中に緣邊如何樣の方望に候哉家古

慢高講筵試

先生卒せらる論語をよまれしは此より後の事とみゆ（同文集藁續）の內に講筵矜式書以賜玄同一祝髮之徒者可衣十德蓄髮之人者可着袴肩絹是亦我邦俗禮百行之一也【これは第三則なり】

無禮講

○無禮講（太平記）にその交會遊宴の體見聞耳目を驚せり獻盃の次第上下をいはず男はゑぼしを脫で髻をはなち法師は衣を着ずして白衣になり年十七八なる女の貌かたち優に膚ことに淸らかなるを二十餘人すゞしの單計りをきせてしやくをとらせければ雪の膚すきとをれり云々人の思ひ咎むる事もやあらんとて事を文談に寄せんが爲に其頃才覺無双の聞え有ける玄惠法印と云文者を請じて昌黎文集の談義をぞ行はせける（宋書五行）志晋惠帝元康中貴遊子弟相與爲散髮倮身之飮對弄婢妾逆之者傷好非之者負譏希世之士耻不與焉

隨意講

（醒睡笑）に老僧小僧兒若衆いひ合せて隨意講のまはし始まれりある席にて兒汁の椀に酒をうけられたり後親の法師目をきつと見出しければ兒かほをおさへてなむさんぼう隨意かうは破れたよ

汁講

○汁講（甘露寺元長卿記）に於姉小路三位亭有汁また內藏頭有招事汁張行（貞德文集）明旦御年寄衆へ常仕之菜汁申候云々（落穗集）に小身なる武家質素なる事を云て綿服は勿論屋敷廻り家居等之儀も搆無之何ぞ肴の一種も求られ候へばそれを汁に申付近所あたりの心易き相番衆へ人を廻し飯をば食次に入膳椀を添て面々の宿元より持寄に致して給あひ被申共會合を名付て汁講と申事濟候となり（桃源遺事）に西山公御病中御前に相詰候者共に仰られ候ば昔世に汁講といふ事ありその樣子は客を請候とては其客銘々に飯をめんつうと云物などに入携へ來り亭主は唯汁一色のみこしらへ能時分汁を鍋のまま座敷へ持出うち寄賞翫もてはやして此外は何のもてなしと申儀一ツもなけれども興に入咄し候由されば儉約の儀は本より諸士及び百姓町人までかたく相守るべき旨度々申渡事にて候へども治世故にやまゝ客請候節分限に過て甚美麗を致候由相聞え候夫に付大森典膳【西山にての御家老な

ふ題にて詩を作る其後絕てなし會の式云々引合の紙を廣さ短冊に切て三枚重ねて面々の前に硯筆墨架水滴など盡して面々に供す詩成て草稿を一座の衆廻し見て後淨書して座右の文臺にのせ其後五岳より一人宛出て吟ず五岳の吟聲各異なり詩事終て大饗あり亂舞酒宴夜に入とぞ

褒貶和歌會

○褒貶和歌會（大平記）【二】二條中將爲明卿は歌道の達者にて月の夜雪の朝褒貶の歌合の御會に召れて宴に侍る事隙なかりしかば云々又千劍破軍の條あるひは百ふく茶ほうへんの歌合などをもて遊び夜をあかす（尺素往來）當座衆議判の詩歌合興行云々【衆議判も又褒貶なり】貞德が（歌林雜話集）に有時中院入道殿へ靈山の褒貶の會に御出座ある樣にと長嘯公より申つかはし給ひければ共はめづらしき雅遊なりとて云々比は慶長六年九月十三日兼題は月照菊名所月月前戀此三首の和歌にて侍りし凡歌合には左右をたてゝ難陳あり褒貶の會には獨々此歌には此難あり此とばは古しなどゝ神妙に取さた有てこそゝられてもほめられても殊勝の會席なるべけれ此靈山の會の人數は連歌をさへはかばかしくえせぬいやしき下臈ともにてたゞ長嘯公の御歌一首筆者の左兵衞と申す者ひそかに尋しり是をさへ褒つれば跡はみなよしあしに拘らずきたなくのみいひちらし侍る云々いへりみやびたる和歌の會も時に隨ひてさぞとおもひやらる（老人雜話）に禁中信長の時より興隆すといへども太閤の初め迄はいまだ微々なりやむ事なき歌の會など是に三方のあく迄黑きにころころとする赤小豆餠をのせて出されたり然れ共歌は今時の人に十倍すと見ゆ

百ふく茶

○又（歌林雜話集）に道春始て論語の新註をよみ宗務太平記をよみ丸にも歌書をよめと下京の友すゝめしによりなにの思案もなく百人一首つれづれ草を人の發起もなきに群集の中にて大事の名目などをよみちらし侍云々（惺窩文集）に道春の惺窩行狀の中に慶長十八年秋奏白て庠序を洛中に建て生徒を敎授せむとす妙壽院を爰に置むが爲なり許を蒙りしかども元和四年の事ありて果さず明年九月十二日

ぞ宋元豐五年文潞公も彼九老會を慕て洛中公卿大夫年德高き者を集て耆英會をなす齒を尙びて官を尙ばず其會に預る者凡十三人後また同甲會をなす像を資聖院に畫く同甲會は同年の人を集めて宴會をなす事なり本朝にも尙齒會は度々有けるよし（着聞集）にみえたり同甲會といふ事は未だ聞ず菅原是善公貞觀年中に白氏が跡を踰て尙齒會あり（本朝文粹）【九】菅相公尙齒會序あり【其內に樂天廬胡六叟を招き宴集し名づけて七叟尙齒會とす其畫圖本朝に傳へきしを見てその舊蹤に續よしいへり九老圖にあらざるは訝かし】（尊卿贅筆）に古語鄕黨叙齒亦爲同類者言之耳頃有一友擧尙齒會貴賤混淆儔類錯雜非特不雅觀殊失古人禮意都少卿穆曰考之禮一命齒於鄕再命齒於族故同輩叙齒可也苟非其人而亦以齒尊之不幾於失禮乎藍田呂氏鄕約曰非士類者不以齒斯言爲得之矣」延曆年中法皇御寶算七十の御時尙齒會に准ぜられ堂上地下の高壽の人を召る中にも岸本壽賢は【針醫】其頃百有餘歲當座に御苑松を賦し聖壽を祝し奉る詩あり此人元文の頃まで存命にて百廿餘歲とかや近ごろ長壽の聞えたる者は渡邊幸庵なり此人寶永五年十二月谷中感應寺の隣なる草庵にて尙齒會をなす其時幸庵百二十七歲にて上座したり長生殿裏不老門前の二句を書て壁上に懸即幸庵が筆なり此人仕官の時さま〴〵功あり仕を辭して後便船に隨ひ西土に渡り天竺阿蘭陀までも經めぐり四十餘年殊域に在て歸鄕したる時九十九歲また諸州を徘徊する事十年にして武州大塚に居れり天正十年壬午駿河國に出生し寶永八年辛酉百三十歲にて歿す幸庵物語を記せる物あり正德の頃幕府の士生島幽軒八十賀に老人七人集會志賀瑞翁百六十七歲とぞ享保中頃は百八十歲ばかりにて存命のよし三河國百姓滿平寶飯郡水泉村の百姓なり慶長壬寅年生れ寛政八丙辰年百九十四歲享保年間江府に參り御米を賜ふ今玆丙辰年復まいれり享保の故事の如しと云ふ滿平子孫みな長壽曾孫だにこの時百歲に近きものありとぞ

○短冊切會【老人雜話】に五山の大詩會を短冊切と稱す南禪寺傳長老の時短冊切の會あり龍山雪とい

ば猶こそぬれめ香もやうつると】

蓮葉宴　○蓮葉宴は（續日本紀）寶龜六年八月癸酉始設蓮葉之宴、

萩花宴　○萩花宴は（續日本後紀）承和元年八月庚寅上內宴淸涼殿、號曰芳宜華讌、その外（日本後紀）大同三年六月甲子禁中有一株橘樹、彫枯經日生意既盡、忽生花葉、楚々可愛、因茲右近衞府奉獻宴飲、賜物有差と有などは非常の也

菊宴　○菊宴は（大鏡）【二】菅原のおとゞ右大臣の位にておはします云々又筑紫にて九月九日菊花を御覽じけるついでに又京におはしましゝ時九月のこよひ內裏にて菊宴有しにこの大臣作らしめ給へる詩を帝かしこく感じ玉ひて御衣賜はり玉へりしを筑紫までくだらしめ給へりければ御覽するにいとゞそのをり思めしいでつくらせ玉ひける去年今夜侍淸涼云々菊宴の事は猶諸書に出たり重陽に菊の花を酒盞に浮めて其酒を飲に花をば吹てかたよせて飲事にや吹花と云事唐にもふるくよりありと見ゆそれ故九月を吹花節と云へり（散木集）などにはな吹秋とよめる是なり

吹花節

曲水宴　○曲水宴（萬葉集）【十九】天平勝寶二年三月三日宴中納言家持から人も舟をうかべて遊ぶとふ今日ぞ我せこ花かつらせよ（六百番歌合）後京極攝政散花をけふのまとゐの光りにて浪間にめぐる春のさかづき（已下略）

竟宴　○莊子竟宴日本紀竟宴等の竟宴は帝その書に委しき時の博士より其書の義をうけ讀せ給ひてその業竟れる時博士に厚く賜物ありその他諸臣に其書中の載る所の事をとり出て詩また歌によませ給ひ管絃杯酌ありて何れも祿を賜る事差あり新古和歌集竟宴などもあり（拾玉集）にみゆ

尙齒會　○集會、尙齒會は（白氏文集）に九老圖を爲りたる事ありこれは白居易暮節浮屠に惑（ワク）ひ葷を食はず香山居士と稱し常に胡果が輩みな高年にして官仕せさる人々と燕樂す世人これを慕ひて九老圖を畫けりと

大かた桴にて撃ものなり故に手してうつ鼓を呼てしてゝいと云ふ今の【今はつゞみとだにいへば手にて打つゞみの事とゝなるは行はるゝによりてなり小鼓をいふなるべし執轉提も假字がきにて字義にはよらず是もしだらうちの義なるべしシッテン／＼など云ふ皆つゞみの聲なり】

しでのたをさ

○また按るに杜宇をしでのたをさといふ【（古今）に敏行いくはくの田をつくれはか時鳥しでの田をさを朝な／＼よふ】袖中抄に賤の田長也郭公は勸農の鳥にて過時不熟と鳴なりといへり【彼が不如歸と啼は物に多くみゆ過時不熟は何に出たるに歟】又しでを死出の山といふ説もあれど田長といふをおもへばしでもしでうつ田のみなるべし【（袖中抄）の説は田長をとさらに賤といはんも穩ならず死出の山の説は蜀魂のかたにはかなへれども田長は死出の山によしもなき事なり】（枕雙紙）ほとゝぎすよおれよかやつよおれなきよおれなきてぞわれは田にたつ（源氏夕皃巻）手をたゝきたまへばやまひこ答ふる聲いとうとまし人はゑきゝつけてまいらぬとあるは手をたゝき人を呼なり

しだらなし

○因に云俗にしだらなしといふ事の誤はよくわかりたる事ながら童蒙の爲にいはむ件のしだらとおもひ混ふべからず是は自墮落の字音なりされば自墮落なしとは通ぜぬ言なればしだらなといふべき事なり冥加なといふべきをめうがなしと訛れると同じ義なり此類いと多し

梅花宴

○梅花宴は（續日本紀）天平十年秋七月癸酉云々、晩頭御西池宮、因指殿前梅樹、勅右衛士督下道朝臣眞及諸才子、曰人皆有志、所好不同、朕去春欲翫此樹而未及賞翫、花葉遽落、意甚惜焉、宜各賦春意詠此梅樹、文人三十人奉詔賦之、因賜五位已上絁二十疋、六位已下各六疋また（續日本後紀）承和十三年二月戊寅天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、於是攀殿前之梅花、挿皇太子及侍臣等頭、以爲宴樂とあり

花宴

○花宴は（類聚國史）弘仁三年壬辰二月辛巳幸神泉苑、覽花樹、命文人賦詩、賜祿有差、花宴之節、始於此乎、【（後撰集）第三寛平御時櫻花宴ありけるに雨の降り侍りければ藤原敏行朝臣春雨の花の枝より流れこ

を夕に呼なりといへりさもあるべししたらうちとはしたらし撃にて垂うちの義なり砧打にもしで打と云事有り（作庭記）に雨したりのあたる處に石を立べからず云々（義經記）【四】土佐房よしつねの討手にのぼる條白布を以てじやうゑをこしらへてえぼしにしでを付させほうしにはときんにしでを付ひかせ云々見ゆ垂をシデと訓はシタレを約めたる言なりタレハデと切る（万葉）【十】に垂柳また【十一】に四垂尾など有にて知べしシダルは繁垂の意なりタリタルは自ら然るなりタレタル、は物を然するなりタレは令垂タル、は令垂なり凡て活言は皆此差別ある事なり後世に四手と云ふ物は此用語を體語にして名とせるなり天慶八年の頃京洛の間に訛言ありて東西の國より諸神京に入るといひのゝしる事ありて其月に攝津國司解官裁を申し請て言上す神輿三前志多良神と號し數百人是を舁幣を捧げ歌舞す道俗男女會集して山を動す其歌曲に月笠着留八幡種蒔久伊佐我等波荒田開天志太良打天止神波宣末不云々と（百練抄）又（外記日記）等に見えたり【本文繁きによりて撮要してしるす】この志多良撃の歌に田をうつ事を云るにてもしだらの意辨ふべし又小兒の戯嬉に手打〳〵といふもこれなり（遊學往來）

拚遊

に戯れ事をならべ擧たるに石子拚遊とあり按るに拚字志多良にかなはず是抃字の誤なり抃は拚と同くて拊手也と注ある字なれば義をとりて抃遊と書るものなり又（梅村載筆）に震動雷電とかきてしだらでんとよめりとみゆ何に出たるか興ある書さまなり（書言字考）これをとりたると見えて震動雷電注云三河國俗謂迅雨疾雷爲設樂田といへり（犟草）に五月雨や山鳥の尾のしだらでん【寛永中の發句な

しだらでん

り（懷子）にも出て慶友が句なり】また忠臣藏といふ院本に鐵炮雨のしだらでんといへるは是なりもとどよめき噪ぐ事なれば雨の音になぞらへてもいひ又田をうち返すさまをもいへり又按るに（源平盛衰記）に知康はくぎやうのしてゝいの上手にてつゞみ判官と異名を呼けりとみゆしてゝいは（砂石集）

執轉提

に執轉提と書り【和訓栞に師手弟とするは僻ごとなり】鼓の事と聞ゆ鼓は太鼓羯鼓その外種々あれ共

嬉遊笑覽卷五

宴會　設樂擊　拃遊　執轉提　しでのたをさ　自隕落　梅花宴　花宴　落葉宴　萩花宴
菊宴　曲水宴　竟宴　尙齒會　短冊切　褒貶和歌會　快窩講筵式　無禮講　汗講　垸飯

宴

（宴を（日本紀）にうたげと訓るは拍上の義にて手をうち遊ぶ事よりいへるなり弘計天皇の室壽し給ふにも手掌𢴴亮拍上賜とあり（續日本紀）神護景雲元年八月乙酉參河國言慶雲見、屈僧六百口於西宮寢殿設齋以慶雲見也、是日緇侶進退無復法門之趣、拍手歡喜一同俗人、また（日本後紀）延暦十八年春正月丙午朔皇帝御大極殿受朝、文武官九品已上蕃客等各陪位、減四拜爲再拜、不拍手以有渤海國使也、云々（竹取物語）にうちあげあそぶなども見えたり（うつほ物語）藤原の君の卷にも日七夜とよのあかりしてうちあげあそぶ又（榮花物語）にも處々に見えたり（伊勢內宮年中行事）六月十七日從酉刻許、鳥名子等參候瑞垣御門外方擊志太良叩手也、謳歌件之中、シタラウテトテカノタエハウチハンヘリナヲヒハンヘリヲヒニヤセンタスキニヤセンイサセン〳〵タカノチニセン又云シタラハシリウチ大津ノ濱へ行ハアツモノカハメタチコカムサ云々歌雖多不委記云々酒酣をたけなはと云もうたげなかばの約まりしと本居の說なり美濃國の俗によめ入の時聟なる者婦翁のもとに始て行を宇茶下と云ふ是うたげの古言の遺れるなりと云り又相州津久井などにては新よめ知るべの方へ始めて行には紙に茶を少し許りひねり包にして持行習ひなりこれは宇茶下より轉じ來しにや

とりこな舞

【鳥名子舞といへるもの伊勢神宮に古來よりあることにて他所にはかつてなし（延喜式）伊勢大神宮式に鳥子名子舞童男童女十八人裝束青摺衣裳云々見えたり】此神事は今もありとぞ

設樂擊

設樂は（和名抄）參河國郡名設樂【志多良】と見えたり設樂をしたらと訓るは友人太田全齋云設轉音しつ韻會に叶式質切設は舌內音なる故に樂字の發聲に連りてツの韻

へられたり云々種捷たぐひなき人とみえたり

猿返り

○猿かへりといふも彼か左右前後自在に返るをいふなり（寛永發句帳）にさる返りみてや立くるとりのとし（東京夢華錄）駕登寶棚諸軍呈百伎條に兩々出陣格鬪作奮刀擊刺之態百端訖一人棄刀在就地擲

板落

身背著地有聲謂之板落云々この板落といへるは宙返りなり筋斗は勢すくなく板落はいたく勢ひあるさまにやさてこの戰鬪の學びは今歌舞伎のタテといふものに似たり（文選）三都賦注に孫荊王能反腰帖地御得席上玉簪これも今ある戯なり

枕の曲

○（箏草）に若き人たちよりあひて遊ぶ中に一人木枕をおほく集めてかさねあげ手にするゑ右左へわたす人のこのむところよりきる又二ツ手にするゑいかほども自由にかへすこぶしうごかしかいなかたくだりきり〱とまはしなどして色々のたはむれをする（後撰夷曲集）芝居にて枕返しの曲を見て、枕をまげ枕がへしをする人の樂はその腕にありなん【成之】（一代男）によもすがら夢もむすばす枕をどり云々【是は枕拍子といふものなり】（諸艷大鑑）に女郎交りの枕踊といへるもおなじ其頑が（色三線）に

枕踊
枕返し
扇の曲

枕返し扇の曲【この枕かへしは上にいへる枕にて色々曲をつくすをいふ也】昔堺町に此わざにて芝居をはれり慶安二年巳二月晦日堺町上るり座の手形出したる中に枕返し善次郎武藏とあり

りければいかでさる事あるへきとあらがひけり云々煎豆をなけやるに一間ばかりのきてゐ給へて一度もおとさずはさまれけり見るものあざますといふ事なし柚のたねのたゞ今しぼり出てたるをまぜてなげてやりたるをぞはさみすべらかし給ひたりけれどおとしもたてず又やがてはさみとゞめ給ひける

擲倒

擲倒【てんぐり返り、蜻蜓かへり、翻筋斗、杉立、もとりうつ、猿かへり、板落、中かへり】枕の曲　枕踊【枕拍子】扇の曲

でんぐり返し　**蜻蛉返り**　**宙返り**　**車返り**　**翻筋斗**

○(和名抄)楊氏漢語抄云擲倒【和名賀倍利宇都】とあるを何伎とも人のしらぬにやこの事いひたるを見ず今按るに俗にでんぐり返りなどいふたぐひすべて身をうち返るわざをいふ也このわざにさま／＼ありとんぼがへり蜻蜓の飛さまをいふ先へさしてゆき仰に返りうつをいふもんどりといふ是なりでんぐり返りは俯して返るをいへど手を地につくにやあらん手をつかで返るを宙(チウ)かへりといふされど廣くはもんどりうつをも宙かへりといへり(懐子)【重賴】とんぼうや程は雲ゐに中かへり(温故集)に【乙由】つばくらや何をわすれて中かへりなとあり又車がへりは身を横になして返る毎に手は地につきてつゞけさまに返る事車輪のめぐるやうなるをいふ漢土に翻筋斗といふ事諸書に載るところすこしづゝ異同はあれ共大かたは手を下につきて返るわざ也しかもそのさまゆるやかなる様なり(教坊記)に少

杉立

頃緣長竿倒立尋復去手久之垂手翻身而下おほよそこれらのさまなり此伎はしめは杉立なり手を放つ時は足にて竿に下れるにや杉立は越後獅子のする伎なり(犬子集)に三輪山て杉立するや春霞(鷹筑波集)に獅子舞は大和國にありつきて見てもみあかぬ三輪の杉立(洛陽集)杉立や赤熊かけたる下紅葉【我黯】越後獅子は古畫にも見れものなれどかくあれば古くも諸國をありきたるにや但しひとり舞の獅子あればその伎なる歟

もどりうつ

○(著聞集)に侍從大納言成通卿の鞠の藝をいへる條に鞠を足にのせて山からのもとりうつやうに飛か

○（宗長紀行）に天正四年六月十六日夕立して宇都の山に雨やとりすこの茶屋むかしより名物十團子といふ一杓子にかならずめらうなとにすくはす（古今夷曲集）駿河國宇都山にて團子賣ものゝ杓子もて必十つゝすくひあくるを見て【藤原雅章卿】すくひやう共名たがはぬ十だんご杓子定木もかたは有けり又【藤原政宗】十だんご十づゝ十はくひぬとも幼き口にあかんものかは後に是を數珠のやうに緒につなきて賣れり【東海道名所記】十團子その大サ赤小豆ばかりにして麻の緒につなきいにしへは十粒を一連にしける故に十團子と云ならむ【明暦万治のころはやくかやうにしたり十づゝしやくひしを人もめでざりしなるべし】

○西鶴が（諸國咄）に長崎半左衞門がひしやくの曲つくしを名譽とおもへば京のこり木町に若い者共集りて束ね木山の如くつみかさね下より三間も高き上より茶が呑たいとどよめば天目に入ながら投るも少しもこぼさず取事幾度にてもあぶなからず又近江の湖にて白髭の岩飛よし野の瀧おとし是みな煉磨なり飛鳥井殿のゑぼし付の鞠をみて油賣一升はかりて錢の穴より雫も外へもらさず通しけるとかやたとへば無筆なるもの將棊の駒を書に同し

○（三曉庵談話）といふものに【薩州の書師木村靜隱寶暦中七十餘歳にての物かたりを記す】南的は能學寺の住持にて隱居して荒田八幡邊藥師堂後に庵をかまへ居られ候茶湯すきにて柄杓に水を汲釜の内に投入るゝに露ほどもこぼさず能しなれたり故に南的の投柄杓と申傳候【又美濃國の或門徒寺の住持末座より上客の杯うけたる中へ柚子をへぎ投入るゝ事妙を得たり坊主にて候へ共經文などは讀不申かやうなる徒事によほど隙を費候段申候とあり】（西陽雜俎）に建中初河北の軍將夏姓なる者あり於新泥牆安棘刺數十聖爛豆相去一丈一々擲豆貫於刺上百不差一（宇治拾遺物語）慈慧僧正戒壇つきたる條【上略】僧正のいはくいかなるともなしかははさまれぬやうやあるへきなげやるともはさみくひてんとあ

輪鼓

○輪鼓とあるは（和名抄）本朝相撲記云輪鼓二人【諸雜藝之中弄輪鼓之者二人也今按此物所出未詳但其形如細腰鼓而輪轉于絲上故以名之】（沙石集）に其形中のくびれたる事をいへり右に引る職人盡放下が服に付たる紋りうご也放下がまはす物なれば也そのまはすやうはしるべからねども中のくびれたる處の緒を卷てはかたごまなどまわすやうに中に投て緒のうへに承少しづゝ投上廻るいきほひつよくなる處を高く投あぐるわざなるべし【今のはかたごまのてうながけといふものゝ如し】輪轉於絲上とは是をいふならん

豆藏

○放下師を今豆藏といふ（齋諧俗談）といふ物に貞享元祿の頃攝津國に一人の乞士あり名を豆藏といふ市中に出て常に重きものをさゝげて錢を乞ふ又一人の小兒を梯に登らせて其身は楊枝を加へはしごを楊枝の先に立て起居ゆく事心にまかす小兒もまた馴て怖れず或は長き鎗を鼻の先に倒に立て行または藥のしべ一筋を鼻の尖りに立て其しべ倒れず唯煉磨のみといふ又外に人ありて腹の上に大きなる臼を置仰て杵にてつかしめ或は凳を腹のうへに置て人二人これに登りて躍るといふ請身といふ類ならむといへり此者より豆藏といふ名は起りしにやこれも其者のまことの名にはあらで渾名なるべし

手煉の事種々

○手煉（今昔物語）右近の陣に□の春近といふ舍人有けり鞠をなむ極く微妙く蹴ける其春近が後の町の井の篗に押懸り立て若き女共などの數有けるに見せむと思ひて鞠より勁敵を取出て手の爪に立て井の上に差出て四五十度計り返し立けるを人集て此を見て興じ感しける事限りなし而る間年老たる女寄來て此を見て云興ある態し給ふ主かな古も此る態する人なかりきいておのれ習ひ申さむとて袖に差たる針を拔出て緒を付ながら爪の上にして四五十度計返しければ此を見る人皆奇異く思けり（朝野僉載）に僞周の時の人藤州錄事參軍袁思中平之子於刀子鋒抄倒筋と云るも似たる事なり【大神樂打豆藏などがよくする事共也】

精者擲刀空中接之名雜摸また王犍登が（呉社編）に刀門とあるも此たぐひにや（夷曲集）に刀を品玉にとりけるがいかゞしたりけんとり落しければ囃子たる太鼓も拍子をうしなひみる人どと笑ふが中によめる【一幸】ふりあぐるたちつてとんと落すにぞ耻かきくけこ太皷うちまて

しな玉

○しな玉（新猿樂記）唐術品玉云々（油滓）にきりにこふしにちかきたつふりしな玉もをとなの目には入やらて（吾吟我集）【三】いろ〳〵に手向をかゆる天目は是やしな玉こまつりなるらん（宗因千句）茶わんの露は何にたとへん品玉の手品はとかう申されず（懐子）【九】魂祭、まつる玉をみする放下の品もかな

呪師

○上に引る三代實錄の文に透撞と有はいかなる伎にかあらむいまだ考へず呪擲とあるは恐らくは呪師の誤ならむ（新猿樂記）にも呪師（ノロンジ）みえたり名の意は呪詛にてのろふ事也（伊勢物語）に人の呪ふ詞は負るものにやあらん負ぬものにやあらん【こは遊戯にはあらず】（江談）【二】呪師猿樂於營始事三條院圓宗寺を供養せしむる時俊綱朝臣始搆出すの由見えたり幻術なるべし【（拾芥抄）を案るに後三條院本名圓明寺と有俊綱は宇治殿賴通公の子なり】（事物紀原）に生花と云もの有其文に今京城有生花種植以戯者按前漢張騫傳顏師古注云眩與幻同今吞刀履火種瓜植樹屠人戮馬之術是也本自西域來由是言之種瓜植樹即生花之事也蓋自漢武時大宛所獻眩人始云ふましなひてかゝるわざなす眩人（メクラマシ）なれば呪師と云るなしべし後世の手づまつかひのごとき者にはあらずこれも彼唐儛の圖中に馬の口より人の出る又口より火を吐くかたをかけるあり此類なりかの（新猿樂記）に唐術といへるはかやうの類を廣くいへるにやあらん元龜天正の頃果心といへるものあやしき術をなして人を驚しめしとなむ其後もいくらもあるべけれど聞えたるものなし元祿の頃鹽谷長次郎といふ者觀場に出て馬を吞やうのめくらましをなして世に名高かりき

て思ふにはもじを誤りたるならんはふれは（古今集）の歌に身は捨つ心をだにもはふらさずといへり今も物を打やるをはふるといふに同じ即放下の義なり此伎する僧の身をはふらかしたるさまなれば名づけたる也（同職人盡）の歌に月みつゝうたふはうかのこきりこの竹の夜聲のすみ渡る哉こきりこは（埃嚢抄）小兒翫物字の内にさゝらとは編竹と書或は編木と書く筑子はこきりこ也とあり筑は樂器にあり（風俗通）に狀如瑟而大頭安絃以竹擊之とある竹の事をとりて筑子の文字は充たるものなるべし（和名抄拾芥抄）等にも箜篌などは載たれども筑は見えずこはいづれにもあれ太皷のばちなどより出たる物にや【（和名抄文選）云拍浮（拍打也俗云於布須是也）と有また太皷の條に枹音浮字亦作桴云豆

小切子

ゝ美乃波知所以擊太皷也とあれば拍浮ははちの事なり】その名義は小切子なるべし子も小の義なれば重語なるに似たれども竹にまれ木にまれ小さく切たるが切子といふは物の名にして體語なり小は形をいふ用語なれば也又はさまでもあらずたゞ其打鳴す音をもて名付たるも知べからず貞德が（油滓）にお恐れながら入てこそみれこきり子を主の踊りにうけ取て（懷子）【十】吳竹のふしなき中は慰みて君こきりこをうつゝなの我【重頼】（古今夷曲集）はやしぬる踊の庭に燈籠をともして持もこきりこぞかし【切子燈籠をかけ合せて盆踊をよめる也この灯籠は切手を組て作ればいふなり火燭の部に出たり】こきりこは指先にて廻しもし又打鳴らし手玉につかひさまぐ＼曲をなすその竹の中に赤小豆など入る

あや織

（風俗文選）毛紈が楊揮豆賦に赤小豆どのゝ能には云々あや織の竹にからめきとある是なりあやおりはこきりこにてする曲なり（訓蒙圖彙）に二ツ三ツ四ツの竹を以て上下へあげおろす手品をいふ也其意は機を織には橫の糸をとほす時竪の糸上下をなす也これ織手のあしのつかひやう也今此わざよく似たるを以て文織といふと有今はあやおり竹を略してあや竹といふ

刀子だま

○刀子だまの古圖は少納言信西が傳來の唐傀の圖の内に二三種あり宋朱輔が（溪蠻叢笑）に跳雛撲藝

人各刀三ツをもちて前後より我劣らじと早く投かくるを中にて前より投るを取て後ろへ投やり後より投るをば前さまへなげやるすべて六の刀をとかくさばきやるさま凡夫のしはざともおぼへず人づてにきかば信ずべくもあらぬ事なり田樂に刀玉を弄する事諸書に多く見ゆ（溪蠻叢笑）に擲刀空中接之名跳雞摸といへるも是なり

あやをつく

○（新猿樂記）にも唐術品玉輪鼓八玉とあり田樂にも此伎をなす（鶴岡職人盡）田樂の歌、玉章を手玉によせてつきやらむつれなき人もとりやいるゝと（源平盛衰記）に知康が一二つくといへるも此手玉の事なり津輕にてはさま〴〵みごとなる絹にて丸く袋に縫その內に鈴と赤小豆又は錢などを入て是を手玉としその數三ツばかりは片手にてつき五ツより以上は兩手にてつく是をあやをつくといへりその突やう兩人にて一人づゝ是をつく一二ツと數へて落る迄はつくなり數多きを勝とすこはいづくにもする伎ながらつくといへるは古言なりあやは下にいふすべて投上げ〳〵するやうの事をつくといふ羽子つく鞠つくみな同じ地にうち返し〳〵するをもいふは名の移りたるなり本義には有べからず

放下僧

○玉とりあやをとりの伎する者を放下といふ（七十一番職人盡）に放下あり謠曲に放下僧といふ是なり【謠曲は親の敵討の事を作れり然しながら牧野左衞門刀禰信俊といふものゝ事實さらに物に見えずおもふに放下がまはすこきり子を輪廻の義にとりて作れるものなるべし】

やぶれ僧

○放下僧は田樂より出たる物とみゆ放下は禪錄に放下着といふ事往々みえたり物をはなち捨て無我の心になるをいふ（職人盡）放下の歌。やぶれ僧えぼしきたればこめらはの男とみてやしりにつくらむとありさるを世に寫し翫ぶ繪には髮あるさまなるは誤なるべし有髮の僧といふもあれどこは異なり又僧のえぼしきし事（沙石集）【三】破戒の僧をいふ處同宿の僧烏帽子引入て火たきけるとあり按るにやぶれ僧は破戒の義にやと思へどもししからむにはやぶり僧などこそいはめ自他のけじめいかゞ也より

七ツ小女郎 ○また藤岡邊でいろは前逹伊せ〳〵參るいせの長者のまがり木のもとで七ツ小女郎が八ツ子をうんでうむにやうまれずおろすにやおりず【江戸にてうたふ處と少し異なり】按ずるに七ツ小女郎は猿樂狂言に七ツになる子が殿がほしと唄ふたなど云る事もあり又（大幣）に七ツ子といふ曲名も見えたれども此はそれらの事にはあるべからずおなつ小女郎といふべきを誤りたるなり草木に生ずるあふらむしに一種白絮あるもの有これをシロコといふ伊勢の山田にてオナツコジヨロといふ是なり唄に伊勢の長者の云々あるにて知べし長者の女のやうに作りなしたるなりすべて小兒の戯語は嬉れ弄ぶものに付て

くけべに いへる事多かり昔咄の條と合せみべし又同處五兩で帶買ふて三兩でくけるくけめ〳〵にくけべにさして云々江戸にてはくけべにを七ふさといへり（屠龍工隨筆）に中古の流行に帶のくけたる間に燕脂をさしたゝみて結ぶ處の折めをりめに總をさげたるが七ツありしと老人の語りしとあれ共古きものに所見なし且四すみには總を付もすべし七ツ有べきやうもなきをや是はくけめ〳〵にと重ねたるくけめにといふがやがてくけべにとなりたる也七ふさとは只ふさ糸の多きをいふにてもあるべし

弄玉 弄玉　あやをつく　放下僧　やふり僧　小切子　文織　しな玉　呪師　輪皷　豆藏　手煉の事種々

しな玉つかひ ○しな玉つかひ（三才圖會）に百戯起于秦漢云々大率其術皆從西域來といへるが如し（續日本後紀）承和四年秋七月丙戌天皇御後庭命左近衞府奏音聲令弄玉及刀子また（三代實錄）貞觀三年六月廿八日云々有雜伎散樂透撞呪擲弄玉等之戯などみえたり（和名抄）に梁武帝千字文注云宜遼者楚人也能弄丸（此間云多末斗利）八在空中一在手中今人之弄鈴是也【楊氏漢語抄云弄鈴須々止利】とある是なり刀子玉を弄ことは古へのさるかうなり（發心集）云田樂猿樂などの中に刀玉と云て危きわざする者あり是をみれば刀六ツを三人してとるむねと上手なる者をば中にたてゝ前に向へる者一人うしろの方に一

立まり

てひとこそゆかしけれと有これ立まりなりかゝれは昔は都鄙ともにみな立まりにて女子も庭に走り門に立て弄ひしが後にはさるへき人の娘は家の内にて遊ふに立毬はしがたく跪きてつきたるが都人の風となり立まりは田舎にのみするようになれりと見ゆ【但立鞠のみ古の風と云にはあらず】（雍州府志）

まりたつく

婦人女子家園或板床ノ上ニテ手にて撃ツコレヲマリヲツクト云上手ナル者ハ千ヲ以算（色芝居）に昔は人の心公道にて女子十八九迄も前うしろみるといふ事なく髪貌といふに寝起のまゝにはしりありき手まり歌に小三さぶろくといふ文句を覚え自慢し云々いまはおてさんさぶろくと云は誤なるべし本町

糸屋の娘

二丁目の糸屋の娘姉は廿一妹ははたちといふ唄は（松の落葉）糸屋娘と云々踊歌に本町二丁目をとん／＼通りたうはないが糸屋娘は廿一はたちヤツシツシ姉にのぞみはすこしもないが云々【坂本に娘といふ字にいもとゝ旁に書たるは次に姉とあるによりてなりされども廿一はたちは兄弟の年なれば娘とあるべき也】

○上野藤岡邊の手鞠唄、おぼたんやこたんやさゝたやしもたや厩橋うたさましまぶに腰かけころんでひやあくころんで二百ころんで三ひやあくそのかみ厩橋酒井家の釆地たりし時の童謡なりといふしまぶといふも何の事にか或は御船ともうたふと云へり【此歌わきまへがたけれども大殿小殿さあしまふたと聞ゆ彼領主國替ありし時などにや】

○柳亭子云寶曆年間に尾州侯の鷹場の所々を記しゝ（見聞愚按）と云ものに山口の観音椿山の條下に江戸及河越にてうたふ手まり歌とて鎌倉へのぼる道に椿うゑてぞだてゝ日が照らば涼み處雨の夜はやどり木云々あり江戸には此歌絶たり今も河越にてはこれをうたふ天竺へのぼる道にと云ひ其外異同あり此つばき山は江戸より西南にあたりて野老澤などへの通路なり其かみ東海道はこゝに通りしことゝみゆこれらにても此歌古きものと知らると云り寶曆は遠き事にもあらぬに江戸には知れる者もなし

取て始には居なから打けるが後には跪き直垂を肩脱て樣々打て結句は座を起て十六間の侍を打廻て柱の本ことに無盡の手を踊躍らし宛轉たり腰を廻し肩を廻て打たりけれは女房男房心を澄し落涙するものも多かりけり其後又十二兩の金を取て云砂金は我邦の重寶なり輙く爭か玉に取へきと申て懷中する儘に庭上に走り下りて同程なる石を四とり持て目より下にて片手を以て數百千の一二を突左右の手にて數百万をつき樣々亂舞してをう／＼聲を擧てよく一時突たりけれは其座にありける大名小名與に入てゑつぼの會なりけり兵衞佐も見給て誠に皷と一二とは名を得たる者と云に合て其驗ありけりとて感し給へり皷判官と呼れけるも理なりなどひふ判官とはいはざりけるやらむと迄宜ひけりとあり手玉にとる事なりこの故に（四十二物）爭の歌にもみたれて落るなども云へり一二(ヒフ)とは數を算ふるをもて名とすこれつくといふ事の本義にて今のことく手鞠を地にうち返し／＼するをもいふは名の移りたるなり今川舍人立まりとて四五人ばかり立むかひ手鞠弄ふは蹴鞠の體を學へるにや（帝京景物略）正月元旦是月也女婦閒手五丸且擲且拾且承曰抓(ツカ)子兒丸用象木銖礫爲之競以輕捷といへるは一二弄玉なり然るを先輩みな是を擧て手鞠とするは非なり【猶下の弄玉の條にいへり】

（ ）手まり唄おのが姉さま三人ござる云々いへるはかぞへ歌の類なり（和泉式部の草子）に柑子(カンシ)賣二十かそふる歌一とやひとりまろねの草枕たもとしほらぬ曉もなし二とやふたへ屏風の內にねてこひしき人をいつか見るへき云々皆三十一もじつゝあり是かそへ歌なり姉を多くいへるは事異なれども右京太夫明衡の（新猿樂記）のおもむきに似たり【又宋書（廿二）樂志鹽歌何嘗行古辭云々長兒爲二千石中兒被貂裘（二解）小弟雖無官爵販馬駸々往來似王侯長者遊（三解）但當在王侯殿上快獨樗蒲六博對座彈棊（四解）これ又似たることとなり】（大幣）といふ小歌の草子に手毬といふ歌、つる／＼と出る月を松の枝でかくしたいざゝらばきりてもすちよヤレ松の下枝チラシこんと突あけきりゝとまはり／＼み

來孝順大官人、向前打了半跪云々、亦有朝天子一詞、單表這踢圓的始末、在家中也閑到處刮涎、生理全不幹、氣毬兒不離在身邊、每日街頭站、窮的又不趨、富貴他偏羨、從早辰只到晩、不得甚飽餐、轉不得大錢、他老婆常被人包占、これは妓女などゝ鞠をけ客人の幇閑をなす是を圓社といふ漢土の蹴鞠はかやうの卑きものなり

手鞠

○手鞠（石清水物語）【上】中納言は宮の御かたに參り給ふついでにひむかし對へおはしてさしのぞき給へばわかきごたち手まりつき給ひてみたりかはしく几丁などさまよひたるに云々【七月の事前文にあれはこゝもその月のことゝ見ゆ】（明月記）嘉祿三年十一月十九日條云午時參大納言殿則見參云々手鞠五節櫛枕云々每句置之（東鑑）に將軍賴經卿の幼きころ手鞠會なりし事度々記したり（尺素往來）に楊弓手鞠等云々（太平記）【廿三】空より手鞠の如くなる物光りて草むらの中へぞ落たりける（四十二物）爭に貝おほひと手まりと「くろかみのみだれておつるまりよりも貝におほへる袖はなつかし」（活所遺稿）癸未元日詠懷詩に擊毬撞羽と羽子手まりをつく事を作れり了意が（浮世物語）しな玉をとり手まりをつくみなこれ煅煉なりなどみえたりさて鞠につくといふ事は今のさまなるをばつくとはいふべからずさるを（冠辭考珥）比麼利莬玖波の條に新毬をくつといへる說のうけかたきはさら也また其說に是によれば今も手まりつくにひふみよ云々といへるは古き世よりの事なるへき也云々いへる

一二

はつくといふ事をいかに心得たるにかこは一二といふ一種の戲事あり手まりも其さまにつくものなり（夫木抄）【八】源仲正家集螢火亂風、風吹は打あくる波に立ゐして玉のひふつく夜の夏むし（源平盛衰記）【卅四】兵衞佐殿子息左衞門督賴家の未少く十萬殿と申ける時招寄給ひてあの知康は九重第一の手鼓と一二の上手と聞これにて鼓と一二とあるへしといへとて手鼓に砂金十二兩取添て奉り給たれば十萬殿これを持て簾中より出て知康にたびて一二と鼓とあるへしと勸給けれは知康畏つて賜て先鼓を

りたてまつるへしと男にいはれて櫻さくほどはのきばの梅の花もみちまつこそひさしかりけれこれに感して送る事止りにけり（尺素往來）にいへる植もの同じ只梅と柳と異なり鞠の場は七間まなか四方なり木と木との隔て二丈六尺

外郎曲鞠

○（雅筵醉狂集）まり沓も都そ春の錦反やなぎのながし花の雲入自注に家に身にそふまりといふを俗になかしと云雲入は妙曲にてむかし成道も一代に只三度けられし由舊記に見えたりとある後撰夷曲集おいぬれはえもんなかしもありといへはいよ／＼けまくほしき鞠哉【宜堅】（卜養狂歌集）に外郎らこんと云もの曲まりをける人なりある人の所にて興行ありしに色々曲をつくし侍りければうたまりといへば歌にもきよくよみと所望せられて、楊貴妃の時にはじまりけるものはそよやけいしやうゝゐらうの曲灰屋紹益が（賑草）【下】に流罪せられし外郎なといひしものよく蹴おほへ自由なる事は今の地下など百分の一にも不及事なり又松下主殿といひしもの予が若年の時幾度も見物し侍り住吉のそり橋けわたらんけいこにとて屋根をのぼり下りけたり妙顯寺にては二王門より蹴行て諸堂に蹴あがり緣をめくりて遂に鞠はおとさず侍りしかゝる自由さま／＼の曲などをけたりけれども此らは誠の鞠といふものには侍らざりし其ふり蹴さまゝり色沓音各別のもの也（世事談）に頃年地下にて上手といひしは江戸にては綿屋五郎右衞門服部休甫三木可眞栗本光壽等なり光壽神田に居れり神田沓といふはこれが始めしなり近世の妙足たり此道を學ぶ人皆御家の門弟なれば師とも弟子ともいはず相談といふ當世江戸にて三木可眞をはじめしの老人の相談に至らぬはなし享保十七年八十歳にて死すといへり明和のころ鞠の小六といふ者よく曲まりをけたり（名物鑑）に小六曲鞠と題して曲まりを上からおとす雲雀かな

まり

圓社

○まりとは圓き義なり漢土にても（事林廣記）に天下惣呼圓といへりまた（金瓶梅）【十五回】西門慶進院中幇嫖といふ條に見三個穿靑衣黃板師者、謂之圓社、手裡捧着一隻燒鵞、提着兩瓶老酒、大節間

打毬　蹴鞠　かゝり植物　外郎曲まり　圓社　手鞠　一二（ヒフ）　手まり唄　立まり（糸屋娘、七ツ小女郎、くけべに

打毬

○（詞八衢）に古事記【上卷】蹶散（クエハラヽカシ）云々（和名抄）に蹴鞠【末利古由】とあり同じ詞なるをかくいひてはヤ行の下段の活にて假名も異なり此ころはやく誤りたるにやといへり（史記）正義蹴鞠今之打毬也と見えたれども打毬は擊鞠と同くて蹴鞠とは異なりされば和名抄にも打毬は別に擧てまりうちと訓り蹴鞠は唐の代に專ら行はれて穆宗ことに是を好みこれによりて疾を得たる事史にみえたり（源氏）【螢】（花鳥餘情）云五月六日武德殿の騎射はてゝ唐人の裝束にて馬に乘て毬子を走らしむるを打毬といふ其時奏する樂を打毬樂といふなり

○（酉陽雜俎）に建中初有河北軍將姓夏者彎弓數百斤嘗於毬場中累錢十餘走馬以擊鞠杖擊一錢一錢飛起六七丈其妙如此

蹴鞠

（蹴鞠は專ら堂上の藝となりて碁局の戲などには遙に勝れたるものゝことくにはあれど漢土にはもとよりさる事にはあらす（和名抄）雜藝類に收めたるが如し鎌倉將軍よりこなた足利家の時よりぞ重んぜられて歌と鞠とを兩道と稱するに至れりと云

鞠のかゝりに植る木

○（名物考）に鞠のかゝりに植る木の事（尺素往來）に櫻【艮】柳【巽】楓【坤】松【乾】とあれど（東常緣聞書）寶德二年三月於御所御詠寄花祝今よりは猶すゑとほく契りおかん四本の櫻千代にあまりて思ふに今は松柳竹なと植らるゝをこの時は櫻のみ四本植られしと見ゆ飛鳥井雅章（吉野記行）四本の櫻に蹴鞠の興を思ひいてゝ、鞠の庭にうつし植なんみよしのゝよもとの櫻おもかけにして（源氏細流）にまりの懸りをうふる事は保元に內にてきりたてあり是始と見えたり（沙石集）【七】常陸國にある人の女房かまくらの官女にてありけり云々前栽の鞠のかゝりの四本の木を一首によみたまへならずは送

之中者爲上これ擊壤の戲なり俗にげた打とも云へりこれをモギといふ事は（夫木集）に山ふかく八重のさかもきひくとても世のうき事は猶そかよはむ、枯はてゝもきゝになりしむかしより燒すてられん日をそはかれる、世の中はせきとにふせくさかもきのもかれはてぬる身にこそありけれ、などあるもき木の略なり【居所の部もがりの條に委しくいへり、（帝京景物略）小兒以木二寸製如棗核置地而捧之一擊令起隨一擊令遠以近爲負曰打板々古所謂擊壤者耶】

こまようろめき

○こまようろ津輕城下にていふ名なり在郷にてはこまうちといふなり是又めきの類なり大きなる釘を鍛冶に作らせて是を用其法めきの如し但しうつ處より向ひたる方二十間ばかり隔て地に筋を引て界とし先地上に打立たる釘を次の者ねらひて打とばし界を越ればこれを取釘は即賭なり先の釘は飛いま打たる釘は地に立ものなりとぞこまようろとは何の義にかこまやらうなどにはあらぬか猶よく尋ぬへし（因樹屋書影）金陵童子有琢釘戲畫地爲界琢釘其中先以小釘琢地名曰簽所在爲主出界者負彼此不中者負中而觸所主簽亦負こまようろは即是なり但其法いさゝか異なるのみ（宋書）【五行志】泰元中小兒以兩鐵相打於土中名曰鬬族とあるも琢釘にや

れんから

琢釘戲

しく

○（長崎歲時記）に時候を撰ばざる風俗あり兒子の戲にネンカラと云ことあり其法一ならずタテハ、ヤリハ、ツウカヲウ、チンカン、クサラカシ等の名目ありされども兒輩の唱ふる詞にしていまだ其實を詳にせず又略して木ネン金ネンとも云ふ木ネン多く椿の木を用ふ金ネンは以前は別に作りしを近年多く船釘を用ふ其法木ネンの如し但兒輩二人にても一本づゝ持出互ひにかはる〳〵土地に立る其時それ〳〵呼聲あり其法渉筆しがたしと云り思ふに是又江戸にてメツキと云類なり次て云同書石の次條に蹴ッと云事あり土地に限りの筋をかき中に小石をつみて一人これを守る衆兒左右前後よりこれを取んとする時その手を蹴て勝とすかはる〳〵石を守る役となる

給ふとありて重六の沙汰あれば双六の事也（埃嚢抄）にも攤の事は双六博奕のやうにのせたり（野槌）に攤は鮑宏（博經）意錢何承天（纂文）云詭億一曰射意一曰射數卽攤錢也といへりこの射字は指物而取をいふ射にて入聲に讀なるべし【下にみゆ】此戯紙を賭にすることゝみゆ【安齋隨筆】玉海を引て【此文略す】攤の事右に見えたり共打やう詳ならず右に筒といひ寨といふ事みえたれば双六の類歟折といふ事打時の詞なるべし云々和名セニウチといふは錢を的にして別の錢を手にてもみて的の錢を打やうの事にてあれば双六とは別のことなれども後には攤を双六の異名のごとく稱へしなるべし源順の頃は双六と攤は別なりといへるはわろし折といふ事は紙を折なるへし上さまには錢を用ひす簺をふりて賭には紙を用ひしことゝ思はる

はり打

○今童の戯に紙を賭にして針に糸をつけ【糸長サ三四寸】糸の端を指にてつまみ針を前歯にくはへて重ね置たる紙にうつ紙に針立たるをそと拔ば針先に紙付て上るをとる是を針打といふ此戯攤には類せざれども紙を賭とするによりて次にいふ（長崎歳時記）に是を紙打といへり

なめかた　もだかへし

○博に錢もてなめかたとてする事あり東海道の山路にて見し事あり錢戯猶種々有べし遊戯双六に攤錢(モダカシ)とあるも似たるもの也（帝京景物略）に三月是月、小兒以錢泥、夾穿而乾之、剔錢泥、片々錢狀、字幕備具、曰泥錢、畫爲方城兒、置一泥錢城中、曰卯兒、拈一泥錢遠擲之曰撇、出城則負、中則勝不中而指扠相及、亦勝、指不及、而猶城中則撇者爲卯、其勝負也以泥錢云々これ前にいへるキズの法なり地上に畫く事をいはざるは紙にて盤を作るなるべし瓦にて作れる紋がたなど近頃出來し物ながらこの泥錢に相似たるもあやしされども此卯兒もそのもとは擊壤意錢の變じたる物なるべし

もき　めつき

○穴一を日州にてヘキといふは誤なりヘキはモキといふを正とすべし江戸にてはメツキといふ戯是なり（三才圖會）に以木壤爲前廣後銳長一尺四寸闊三寸云々將戯先側一壤於地遙於三四十歩以手中壤擿

ゆれど（和名抄）に毛無とも訓せたるをみればうつことゝは異なるべしもむは採字などをもよみて兩手にてするわざ也されど攤うつといふ事もある（下にいふ）は錢を兩掌の內に持てよく念して擲ちそのなめとかたとのあらはれたるをもて勝負する事なるべし（資暇錄）錢戲、有每以四文爲一列者、即史傳所云々、意錢是也、俗謂之攤錢、亦曰攤鋪、其錢不使轟映欺惑也、疾道之、故譌其音、音攤爲蠶皴反、音鋪爲蒲厰反、此耳云々【四文一列とは一度に投る歟】

○（錢氏私誌）に歐文忠が事を去る條に年七歲正是學簸錢時也又（避暑漫抄）宋曹后の事をいふ處其在父母家時與群女共爲撚錢之戲而后一錢輙獨旋轉盤中凡三日方止これらの錢戲みな似たるものなるべし（鐵圍山叢談）南俗尙鬼、狄武襄靑、征儂智高時、大兵始出桂林之南道、旁有一大廟、人謂其神甚靈、武襄遽爲駐節而禱之、因祝曰、勝負無以爲據、乃取百錢自持之、且與神約、果大捷、則投此期盡錢面也、左右諫止、儻不如意恐沮師、武襄不聽、萬衆方聳視、已揮手、倏一擲則百錢盡紅矣、於是擧軍歡呼云々、敗智高平邕管、及師還如言、取錢幕府士大夫共視之、乃兩字錢也【斯るたばかり事は本邦にも多く聞ゆ】（癸辛雜識續集）、聞理宗朝、春時內苑、效市井關撲之戲、皆小璫五爲之、至御前、則於第二三撲內、供鋌純撒錢、供一笑これまた兩面のなめ錢をいふなり意錢は錢もてすべき事なるを公卿貴人の手にもてあつかふべきならねば（但し碁などの賭は錢をみつから手にふるゝにあらねば此例にあらず】こゝには撒を用ひたるならん（紫式部日記）に殿をはしめ奉りて攤うち給ふ紙のあらそひいとまさなしその標注に源禮委記曰元永二年五月卄日三夜云々立切燈臺於座上置筒圓座一枚大進濟降置筒簺於圓座上次殿上侍臣兩三人參進置紙【自下臈置之】上達部同置之次有擲攤之興事六月二日五夜亦同（卅日三夜二日五夜とあるは疑はし三字五字は之字の誤歟】又（徒然草）【百五十七段】盃をとれば酒をおもひさいをとればだうたんことをおもふ（壽妙院抄）に大鏡に師輔公の傳にだうたせ

すぼ引
かんきり
から
よせ
けし
ばつそう
とうもいち
意錢
攤

し一の釆は目の穴の如くなれば是をいふかよりて此戯もそのやうに穴の似たれば名づくるなるべし（嘉良喜隨筆）に穴一外へ出るを左遷といふ流さるゝ心なり始め誰が敎たるぞ其頑が（賢女心粧）【一】をのこのすなる石取穴一なとの似合さる惡遊ひ云々有る（長崎歲時記）正月二日條に此日は市中家井に曉起し店先に簾をたれ家內賑ふ男女小兒の戯れに破魔弓双六猫貝手まりはこ板紙打等なり下賤の輩はスホ引ヨセケシカンキリカラバ筋打などして樂むものあれども右は博奕に似たるとて親々堅くこれは禁ずるもあり云々この下に圖說ありスホ引は寶引なりヨセ以下はみな錢を投る戯れにてカンキリは常の穴一カラは一名穴ポンと云は穴の廻りにわをかきたり筋打は江戸にてキズと云もの也ヨセは小き木を地に立て錢を投るにその木の本によるをよしとすケシは地にうづ卷をかき投る錢その正中によるほどを勝とすうつ錢をバツソウと名付二文又は三文を飴をもてかさねつけるハツソウは蠻語かといへり古錢家に繪錢の厚きものを福一玉と云る是なり（物類稱呼）に參螺相州三浦にてつほがいと云ふさざえのふたをとうもいちといふ是は童部の戯玩に穴一といへる事をすなり浦里にてあれば錢のかはりに用るものかと云り【按にとうもいちとは投壺を和名にとをなけとあるとをなるべくいちは穴一の一なり】さて此戯錢をもてうつ事は意錢(ゼニウチ)の名にも似つかはし江戸にても木槵子を用ひし也故にむく打ともむくろんげとも云り明和の初の川柳點むくろんげおぶつてするが上手なり近頃は瓦にて作れる小き面(メン)かた又は紋盡しなどを川ゆめんてう紋打など云へり

〇意錢は（和名抄）に後漢書注云意錢【世間云世邇字知】今之攤錢也（桂苑珠叢抄）云以手有所搖謂之攤【唐韻曰云々此間云駄搓音七何反手攤錢也訓毛無】とあり（後漢書）梁冀傳に少爲貴戚、逸遊自恣嗜酒能挽滿彈棊格五六博蹴意鞠錢之戯といふ是なり攤は（康熙字典說文）開也一曰手布也云々杜甫詩白書攤錢高浪中云々（正韻）難去聲按也又同書搓字注音嗟推擊也と見えたり錢をうち中る事とも聞

晦日町觸前々度々相觸候通町方にてとみつき又は大黒つき或は俳諧前句附三笠附抔と名付博奕がましき儀堅致間敷候其後いつの程よりか正月は街上にてこま廻し寶引あり明和のはじめの狂詩に早來四遶飴寶引、物申年始御祝儀といふ句あり寛政の初迄も辻寶引はありきサァございく\と云て子供を集る故是をございと云り當るものには菓子翫物をとらするなり禁有て止む】近ごろ諸國の神社佛寺江戸において富の興行年々におびたゞし

辻寶引
さござい

お花こま
八方ごま

〇博具のこまはおはなこまといへり(缺啓物語)【曾我自休著寛文二年刻】我幼稚の時木を以て八方といふ物を獨樂の如く作りてその八ツの面に春夏秋冬花鳥風月と云文字を書て同じ文字の札を七ツ書てめんく\に持たて門とし鳥といふ字を名目と定め是を廻してばくちの如く勝負をす八方なれば八度に一度鳥出るは順なるべしされど初めの程は十度十五度に一度も鳥出かねけるが廻すものども氣を屈し精を出して鳥々と念じければ此八方のこま次第にふるくなる程に人の念力入て後には二度三度に一度はかならず鳥出けりと見えたり是を美しく風流に作りたるをおはなごまといふ花はもとより八方に花字あり種々に彩色繪をかくに至りても花は必書しことゝ思はる【近く延享の頃作りそめしといふ説は無根のそら言也余が家にも倉のすみにこまと札とくづれたるが有し其書は今よくも覺えず櫻花傾城達摩和藤内チヤルメラ吹る唐人などは覺ゆ札も六枚おなじ繪にて札は大なりこまのしんぼうは銀めつきすべて黒上花ぬり畫の處は絹地に金箔おして上に彩色畫をかけり、こまにヒイ、タルといふも是にてしらる思ふにこの繪かの八方の花鳥風月春夏秋冬の如く二枚づゝ對になることゝみゆ】女の童の鞠歌に穴一こまとりといへるはこの駒鳥にはあらず兒戲の條にいふべし

穴一

〇穴一は元隣が(寶倉)に花見の處幕のこかげには双六のどうく\とふりならしぢやうさいとこのみ穴一のあなかしましき聲たてゝわれ一とのゝしり云々これ双六の事にいひたれば穴一は采の目なるべ

福引

もてなすべし二人むかひて餅をひきわるは福引と云習はせるも故なきにあらざる歟又內裏には餅名を福生菓と云といへり此說は（豐後風土記）に據て傅會したるものと見えたり（豐後風土記）云大足彥天皇（景行）詔豐國直等祖菟名手遣治豐國往到豐前國仲津郡中臣村于時日晚宿焉明日昧爽忽有白鳥從北飛來翔集此村菟名手即命僕者遣看其鳥々化爲餅片時之間更化芋草數千許株花葉冬榮菟名手見之爲異歡喜云化生之芋未曾有見實至德之感乾坤之瑞旣而參上朝廷擧狀奏聞云々あり埃囊抄の物語も古き俗說とはしらる

寶引

○福引は正月の節物なるも故なきにあらず然れ共古き俳諧の季寄にはなし但付合發句にも稀には見えたりそは世に專らある事なれば也（世話燒草）【明曆二年】おさあいやいと遊ひつゝ笑ふらん只ほうひきにかつはしるしも（春の句の內なり）【滑稽雜談】に攝州箕面弁才天の社に每歲正月七日富の行事を修す是を得る者必幸ありて万家に充ると云是も福引なり云々（犨草）【寬永廿一年】姫子ははねつきほうひきなとしてと見ゆ（洛陽集）【延寶八年】引まし松しめつる野べのどうふぐり【友靜】これは子の日に寶引を用たる也胴ふぐりは寶引つなの根といふもの也（同集）いざ子供駒引錢につなゆりかけ【一得】是は寶引の句なり此頃よりいと多く見えたり（五元集）寶引讃保昌かちから引なり胴ふくり寶曆年間の畫双六に寶引とありて畫に橙子をかけり昔より胴ふくりに用ひしことゝ見ゆ又射覆（フクシヤ）とありて畫に屛風の內よりつなを多く打かけたりかく同じ物を二ツ出せるは今も種々の物を多くのつな每に付て取らするを福引と云是なり又寶引と呼はさにあらず勝負をむねとするもの也

（福引には摺こ木などにあたりたるはこれをかつぎて舞するなどの興あり又水をのませなどする事もありと見えて其角が（類柑子）に冠り付この事をいひて福引の水をのまぬものぞとかろ／＼しう心得て云々不角が（矢根鍛冶集）【上】まづおめでたい／＼福引に水をまいるも聟下地【正德元年卯十二月

拊つ事前三ツ後一ツ少し歇てヲ前七ツ後四ッ拊也夏字平聲の霞とするが如きも切の二字掌をうつ事前の法に同くこれは去聲なれば別に掌を三つうつ也一二三四を平上去入とすれば也この法もと賓退錄に出たるなり

帶引　寶引　八方こま　穴一　きず　意錢　攤　紙の賭（針うち、もきめつき、こまようろ、琢釘戲）

○（續日本紀）天平二年正月辛丑、天皇御大安殿、宴五位已上、晩頭移幸皇后宮、云々、因令探短籍、書以仁義禮智信五字、隨其字而賜物得仁者絁也義者絲也禮者綿也智者布也信段常布也これ物を引當て取事の始なるへし釋義堂が（日工集）至德三年丙寅二月三日、奉府君官伴、二條攝政殿日野兄弟、云々、倭漢聯句一百句、余姑去座、不知何人所白、府君聞余帶經年段々結續、欲互相交易、所謂帶引者也、余辭焉、君欲必相換、蓋欲府君與余帶引換也、座中皆知會、然余獨不知、剪紙繫各帶端、兩々曳出、先性海與日野相當、餘皆兩人相引、末上探紙、果君與余相合、君先出御帶畢、欲出余帶、余固辭者再三、大淸在余左偏、以手曳出余帶、及是君賜御帶於余、而後乞余帶、余亦辭焉、淸後奪余帶、直傳君手、君擎余帶、普示座中、大笑一場、遂辱服有余帶、いはゆる帶引とあるをみれば其かみかゝる戲ありしにこそこれ今の福引に似たり（埃嚢抄）【三】昔豐後國球珠郡に廣き野ある處に大分郡にすむ人其野に來て家造り田造て住けり有付家とみ樂しかりけり酒のみ遊びけるにとりあへず弓を射けるに的なかりけるにや餅括りて的にし射ける程に其餅白き鳥になりて飛去にけり其より次第に衰へて迷ひ失にけり跡は空しき野となりけるを天平中速見郡に住ける訓邇と云ける人さしもよく腴たりし所のあせにけるをあたらしとやおもひけん又爰にわたりて田作りたりける程に其苗みな失ければ驚恐れて又作らず捨にけり云々餅は福の源なれば福神さりける故に衰へけるにこそ福の體なれば年始に

けさせてかたはらに太皷をうちその太皷の數に間を隔て是を聞てその字は何字なるとをしる戲あり是は西土の擊皷射字の戲なり人その名を知らすそのさま目付繪の如し是によれば目付畫も射書といふへきものなり（輟耕錄）【十九】射字法ありといへり此兒戲は筭法にさつさ立といふとあり似よりたるとなれ共巧なるは勝れりたとへは錢三十文渡して一文づゝと二文づゝと二わけにするわくる度ごとにサアサアと聲かけてわくる也其聲の數を四五間も脇に居て聞に十八聲ならば一文の方に六文有べしと中る也其法聲數を倍して三十六となる此元內三十文を引殘り六文を一文のかたの數としる也渡す錢は幾文にてもおなじ法なり又もとの三十文の內にて聲數十八を引殘り十二を倍して廿四文となるを二文の方の數といふも同じ此類幾種もあり

目付繪

○目付繪は（諸艷大鑑）【二】目付紋合すと云とあり又（伽羅女）と云草子【寶永七年刻】に島原の條京屋の雲井とて鹿戀なから器量打越此度の隙に氣をつけ太夫目付字と云たはこ入の仕出し奉書一枚に大坂の大夫三十六人を歌仙に作り是を一句人に目をつけさせ此方より其目付字をあらはすの口傳なりとあれど此戲はもとよりありしを聊そのさまをかへてたはこ入に作りしか新製なるべし紋も字もその法はおなし勘物の草子に出たり又西土に覆射といふは卦を布きてあて物をすると也漢東方朔を始めとして魏の管輅唐の袁客師趙丁文果等これをよくすといへり本邦には晴明吉明在繼などみなその術に委しとなむ

○擊皷射字のと（輟耕錄）の文を考ふるに彼我と二人聰明にて文字をよく知り翻切に熟し記臆よき者は逸捷くこれをなすべし坐を隔て我掌を拊を彼聞て我言ふ處詩詞言語一字一句何にても彼聞てこれを言ふ其法七字の詩十二句々を追て排寫す前四句（廿八字）は字母を括り定め後八句（五十六字）は叶韻を括り定む是は切字の數を打ツにたとへば春字淸諄淸字第三行第一字諄字第七行第四字なれば掌を

鈎之戯分二曹鬪勝負云々若人偶即敵對人奇即一人爲遊附或屬上曹或屬下曹名爲飛鳥以齊二曹人數一鈎藏在乎中曹人當射知所在一藏爲一籌【三籌爲一都】（和名抄）に三秦記を引て昭帝母鉤弋夫人手拳而國色先帝寵之世人爲藏鈎之法是也と云り【（漢武故事）云上巡狩河間見淸光自地屬天望氣者云下有貴子上求之見一女子在空室中姿色殊絶兩手皆拳數百人擘之奥舒上自披即舒號拳夫人即鈎弋也後人見其手拳而有國色故因之而爲藏鈎之戯云々【又（瑯環記）に毎月廿九日陽會とて女子遊ぶに此戯をなすと（採蘭雜誌）を引ていへり（和名抄）に和名を載ざるは藏鈎と音にてとなへしなるべし西土には藏鬮とも藏彄とも云へり此戯をするさま古畫に往々あり後世はよき人はせざりしにや其内圓光大師傳の畫に最多し

なご

皆下部のもの僧俗ともに見えたり是をなことといふ（守武千句）今はよふとも〻どらしと思ふまけぬればなごの勝負もやめにけり又握り拳はうき大はんにやなごよふに六百貫やまけぬらん（續山井）握る手をてうか半とやかきわらひと云る句も是をいふにや（一代男）に扇引なんご呼ておのづと子供心となつて云々（諸體大鑑）手相撲なんご呼もありといへりもとなごといふは石なごの略なり是をなんことといふより何箇の義と思ふは非なり何箇の義ならんには幾箇とこそいはめ石なご掘りてもするもの故なごといひしなるべし（勘物御伽双紙）に十にたらずといふ法あり錢にても碁石にても物數九ツ先の人にわたしていか程なりとも心ま〻に手の内に握て御出あれ此方よりも又握りて出て其方の物數ほとかへして扨御出有し物數を十にたして跡の三ツ餘さんといふて物數十三持て出るなり十二持て出れば二ツ餘さんといふ也いくつにても同斷といへり是なことより出たる兒戯なるへし（又小兒兩手の指を組合せて何の指にても一ツ掌の内に藏して中さするとあり是もなごを學びたるもの歟（天祿識餘）に唐路德延孩兒詩を載する内に抛果忙開口藏鈎亂出拳

擘皷射字

○擘皷射字（類聚名物考）に今小兒の戯にいろはの四十七字を一紙に書その中の字を人にしるしをつ

らひて彈き敵の駒を盤より落せばとる敵と共に落たるは敵の方へとらるゝは彈棊の遺法にや

彈棊

○彈棊（和名抄）に世說云彈棊（タンキ）【今一名指石】始自魏宮文帝於此伎且好矣【古本には今一名を此間と云あり】指石はこゝの名なれば音にて讀にはあらざるべし【按に世說以爲彈棊始自魏宮裴奩戲文帝於此伎特妙用手巾角以拂棊帝客又能低頭以葛冠巾角拂棊妙逾於帝】（香祖筆記）彈棊之戲始見西京雜記後漢梁冀傳注稍詳之似近投壺而共製不傳今人詩多以奕棊當之可發一笑王建宮詞云彈棊玉指兩參差背局臨虛鬪著危先打角頭紅子落上三金字半邊乖讀之亦不能通曉也とあり（空穗）【菊宴】なかのおとゝに庚申し給ひて男をんなかたわきて石はしきし給ふとあるは彈棊の事なるへし（源氏）【須磨】あかし入道の家居をいふ處おまし處もあらはにみいられるごすぐろくばんてうどだぎのぐなと田舍わざにしなして又【椎本】所につけたる御しつらひなどおかしうしなしてごすぐろくだぎのばんともなとゝり出て心〻にすさひくらし給ふ（徐廣彈棊經）彈棊二人對局黑白各六枚先列棋相當下呼上擊之云〻また昔人、彈棊、握槊、長行、波羅、双六、諸藝後多失傳、而近代唯雙陸盛行、或曰握槊卽今之双陸、長行卽古之彈棊、亦未然また徐岳（見聞錄）【四】吳人沈坦若精於操鏝彈棊之技云〻いへるも古法にはあらざるべし

○（徒然草）貝おほひの段棊ばんのすみに石をたてゝはじくにむかひなる石を守りて彈くはあたらず我手もとを能みてこゝなるひしりめをすぐにはじけばたてる石かならずあたる万のこと外にむきて求むべからず云〻今も兒戲に棊石を彈くことあり（和名抄）に指石などいへるをみれば指にて彈くものとはしらる南都東大寺正倉院寶物圖の中に双六盤のやうにて中高に作り異なる物ありおもふに是彈棊の盤にて唐物なるべし（彈棊經）に下呼上擊之などいへるも盤の中高き故にや

藏鈎

○（藏鈎文德）實錄帝覽藏鈎之戲左右相分飛鳥游附者不禁とあり（康熙字典風土記）京師人臘日後爲藏

拮据之際胸中別有悠々閒日月而優爲之信哉

はさみ象棋　○今兒戲のはさみ象棋は徐廣が（彈棊經）に夾食者二人、黃黑各七十棊、横列于前第四道上、甲乙迭推二棋、夾一爲食棋、不得食十、兩不得過食といへるに似たるもの也

とび象棋　○とび象棋はによい〱といふ物也（酉陽雜爼）【續集】小戲中於奕局一枰各布五子角遲速名蹙融予因讀坐右方謂之蹙戎【（賓暇錄）蹙融今有奕局、取一道、人行五棊、謂之蹙融、融宜作戎、此戲生於黃帝蹙鞠、意在軍戎也、殊非圓融之義、庾元規、著坐右方所蹙戎者、今之蹙融也、學者固已知之、（五雜爼）委花兒戲、則有行棊、或五或七、直行一道、先至者勝、此古蹙融製也】（籆絨輪）わこの抱守り袴

によんによ　きた馬蹴あふ時首でによんによを碁いく雜【白黑の碁石にてもすればなり】

將棊たふし　○將棊たふしといふは馬を立並べいか程多くても端の一ツを輕くはじき倒せば殘らず倒れゆくもの也（太平記）【七】千劍城軍の條此時城の內より切岸のうへに横たへて置たる大木十ばかりを切て落しかけたりける間象棋たふしをする如くよせ手四五百人押にうたれて死にけり（海人藻芥）に一年田樂の棧敷多く崩れて云々落書田樂の將棋たふしの棧敷は王計こそ登らさりけり（秋夜長物語）將棊たふしのはらい切云々

廻り將棊　○廻り將棊これは兩人各こま一ツを盤の端に置又こま三つを采となし金か歩かと定めてふるにそのこまあるは竪に立横に立とあり假令ば竪なるを十の數とし横に立たるを五としその目をかぞへ盤の緣をめぐる追越したるを勝とす

盜み將棊　○盜み將棊こまを殘らず箱に入盤上に打ふせ箱を除けよき駒取たるは勝なり幾人にても次第を定めその駒の音せぬやうにとるなり

彈き將棊　○彈き將棊　一方は步一方は大こまを用各盤の端にならべ中程の駒いづれにても指にて敵のこまをね

廣象棊

〇漢土には種々の象棋ありと見えて（五雜組）などにも廣象棋は今傳らず司馬溫公七國象棋を造る是又廣象棋を作りかへたる也また儒棊などに至りては見るにも堪ずといへり（莊岳委譚）宋晁無咎廣象棋譜序云象棋局縱橫路十一棊三十二爲兩軍耳意苦而狹嘗試以局縱橫路十九棊九十八廣之意少放焉云々こゝにも今大象棋摩訶大象棋中象棋等あり其內大象棋は翫ぶもの稀なり（名物六帖）に廣象棋を大象棋にあてたり

中將棊

〇中象棋（鴉鷺合戰）奧書文明八年一條禪閤の作と云々せうぶせめたる中將棊の盤の上は所さびしく駒の足なみ入みだれて鳳皇は成て八方をやぶり飛鷲角鷹は威をふるふてあたりを居食ふそのはたらきにも似たり云々葉むしやはうたれ一騎當千のつはものばかり殘りたるその有さまはせうぶせめたる云々（童蒙先習）【十三】はか行ぬもの中將棊に好（スキ）たる（堺鑑）【天和三年衣笠一閑】北莊妙國寺々內法林坊住侶日蓮宗の門徒にて中將棊の良手なり或時法皇の御所へ召いだされ法橋宗知と中將棊をさゝしめ兩人の勝負を叡覽ありけるに溫故兩度勝利を得たり因玆天下の名人と聞を取れりといへり今も行はるれど江戶にはさしてすくなきにや（中將棊初心抄）【元祿十年正月板行】といふもの有委しく記せり貞德（油渣）に哀にしゝはいづち行らんまけがたの馬（コマ）はかひなし中將棊又古き前句付にちりみたれたり〱盤中につながぬしゝのくるひ死【獅子の馬には陰につなきといふ事有】（武野俗談）【寶曆七年】

七國將棊

中將棋今江戶中にて上手の名高く門弟多くある先生は大津又左衞門【西丸御書院番】といふ人なり濱町に住宅あり六十ばかりの老人にて生れ付少し魯鈍なり又云晋の七國將棊とて近年朝鮮國より獻れり其盤大きなること三間四方なり駒多く是をさすに七人にてさす也胡床に腰をかけて杖のやうなる竹を以てさす事なり云々

廣象棋

〇徂徠の作たる廣象棋は其子百八十局は棋局を用となむ片山兼山が廣象棋譜の序に云命世之人雖鞅掌

○（日本風土記）棊盤横連河界九行直亦九行與中國象棋盤相似正用行而不行路こゝの象棋はこまを筋のうへにやらざるをいふなり

王と玉

香車をやりと云こと

○（埃嚢沙）に象戯の馬の事をいひて一ツは王と書一ツは玉と書は國に二王あるを忌なり是手跡家の口傳なりとあり香車をやりといふ事（新撰狂歌集）金□主といふ法師加茂の祭見てかへるとて道にてけんくわして云々五月五日けいば歸りのきんさうすやりにつかれてひしやとこそなれ競馬を桂馬にとりていへるは（守武千句）にかものけいばに袖はぬれけりしやうきさすのゝ宮人に雨ふりて又三盤を一ツにいへるは宗鑑が（犬筑波集）碁うち双六將棊をぞさす濱みれはきほひおくれの駒くらべ

番所象棋

○今俗に下手象棋を番所象棋といへり（懷子）【十】つまり〳〵のよき番所さま〳〵の手をさすがなる象棋會とあり此將棊のかたにいふ番所は象棋所といふ也されば下手と云にはあらず【次云今町中の番所を中番といふは非なり辻にあるを辻番中程にあるを中番といふ也寛文元年町觸に中番兩木戸番の者夜中ふせらず火之用心申付へし又辻番中番の者とあり】

○（天香樓偶得）馬之爲名所施不一如禮記投壺請爲勝者立馬是以計數之物爲馬也今俗猜枚之物謂之。馬賭博者以物衡錢謂之馬子交易者以銅爲法衡銀輕重謂之法馬此皆計數之意也木工以三木相攢而岐其首橫木於上以施斧斤謂之作馬此則象形也云々

○象棊（宋玉招魂）箟蔽象棊有六簙些所云象棊乃是以象牙爲棊子蓋即簙棊之戲非後世之象棊也後世象棋之制不知所起云々（太平御覽）又謂象棊乃周武帝所作有日月星之象此復與今之象棊不同

桂馬の高あがり

○桂馬の高あがりと云も古くよりいひし事にや（懷子）に棧敷をみるや競馬の高あがり○今入王になると云事をば昔はさか馬と云り（醒睡笑）曾てない合點といふ條に上手の棊が今朝めしすぎより八ツさがりになるがいまだ二ばんはてぬと云を聞てそれは逆馬になつたものであらふはてまいぞ

石にてする戯色々あり二書見合すべし

まゝこ立　○まゝ子立は（徒然草）【百卅七段】まゝこ立といふ物を双六の石にて作りて立并べたるほどはとられん事いづれの石ともしられね共かぞへあてゝひとつをとりぬれば其外はのがれぬとみれど又々かぞふればかれこれまぬき行ほどにいづれものがれざるに似たり又棊子にて虎の子渡しといふ事をするは（癸辛雜識）に虎三子將ゐて水を渡す事あり余聞獵人云凡虎將三子渡水慮先往則彪食子則必先負彪以往彼岸旣而挈一子次至則復挈彪以還々則又挈一子往焉最後始挈彪以去盖極意關防惟恐食其子故也とこの法なり

虎の子渡し

象棋　大象棋　番所象棋　中象棋　七國象棋　はさみ象棋　によんによ　象棋倒し○彈碁石はしき○鈎藏　など　撃皷射字　さつさ立　月付繪

象棋　○象棋は（和名抄）にも載せず（榊巷談苑）に此國の象棋は誰が始めたるやしらずされど久しきもの也近衞院の康治元年八月攝政賴長の新院にまいりて源師長と象棋さしたりし事著聞集に見えたりといへりされどこは大象棋なり（年山紀聞）に明月記建保四年十二月十日宇治御幸記其傍置圍棊双六將棊等盤とあり後日家兄爲實言台記に大將棊といふもの見えたり其文に云康治元年九月十二日參新院於御前與師仲朝臣指大將棊余負とあり（新猿樂記）圍碁双六將棊彈碁と并べ擧たりこゝの象棋は漢土の今の象棋とはいたく異なりされども（事物紀原）に唐牛僧孺が元怪錄を引て曰唐寶應元年岑順於陝州呂氏凶宅夜聞撃皷之聲有介人報曰金象將夜警也竊見鐵騎長數寸進曰天馬斜飛度三疆上將横行撃四方輜車直入無廻翔六甲次第不乖行乃有一馬斜去三尺止又一歩卒横出一尺後車進已而於見處掘之即古塚也前有金象局列馬滿枰其辭與勢正今世所爲者是則此戯於古塚初定時已與周武帝所造不同而名象棋也とあるは大よそ似つかはし

大將棊

たき風にみたれ碁石の竹【山石】

大家の人巧手稀也

○大家の人この伎に巧手なるは希なりと見ゆ寛政中雲州老公初段になられしに免狀の例なく林門悅これを漢文に書たりとぞ。恭惟、閣下嘗以國務之暇、遊衍群藝之場、好圍碁、頗得其妙、盖以韜略盈虚之機、符於此技者歟、今玆寛政十二年辛酉新正、門悅與同職等謀、謹品第一級位最初矣、自今而後對於上手、不過布置三碁子、閣下因是而進焉、則奇正相生循環無端、至五級六級亦何以爲難也哉、林門悅再拜、上羽林次將備前州太守源老公閣下と書けりとぞ

亂碁

○亂碁(拾遺集)に圓融院のみかど一品のみやにわたらせ給ひてらんごとらせ給ひけるにまけわざを七月七日にみゆ【(圓融院扇合)に宮の御方にうへおはしましてらことらせ給ひかたせ給へるかちわざ六月十六日にうへせさせ給ふ云々その歌七夕天河をよみたる多ければ六月十六日は誤なりまたかちわざといふ事はなしかたせ給へるとは負といふ事をいみ嫌ひてかくいへり(新千載集)天曆四年五月圓融院らんごとらせ給ひける時人々歌奉りし中にあしたづのむれゐる澤のさゞれ石の千代の數ともおもほゆるかな】(増鏡)【五】うちのゝ條らんご貝おほひてまりへんつきなどやうのことゞもおもひ／＼にしつつ日をくらし給へば云々（鹽尻）に亂碁は指につけて碁子を取多く得たるを勝とする也(名物考)に今も童子の戯に亂碁とて白石のみにて打四ツ目殺しといふ事をなすそれをいふかなどありて定かならず今碁盤の筋のうへに石をならべその筋を順に石をとる筋違にはとらぬ事ありこれらも亂碁の遺法か

とり碁

○享保中の板にて智惠較と云ものあり四ツ目惣どり碁と云ありこれ（名物考）にいへるものなるべしこの外に四ツ目總どり三ツ星そうどりと云ありいづれもいくたりにても順にとりてまはすなり又一人

ひろひ物

にてとるはひろひ物ともとりもの共云其形升八ツはし矢万字等あり寛保三年刻（御伽双紙）と云ものにひろひ物には中字井筒などさま／＼ありいづれもごばんの筋を順にあともどりせぬやうにとる也碁

盤内兩圍估畢、然後、各將所得棋子、塡彼所估空内、兩皆塡滿爲和局、如塡空着不得等數多少以令勝負、如有一着不能塡滿、是爲輸局、塡内多一着、是爲贏局外、「外恐也」和局呼曰是我、贏曰各打、輸曰埋告打、

してう
○してう（碁式）に四丁不被懸などあり（守武千句）あつまちのはてと思へと碁を打て四てうにかくるさのゝ舟橋。手なほりといふ事將棊にはいへど碁には今は云ぬやう也（似勢物語）におかし男あり

てなほり
けり名人の碁うちへ石なほされにいきけり云々よことに上手をつけてうたせければうてど疊かたで手もなほざりけりさてよめる一二ツわが手なほらぬものならばよひ／＼ごをばうちもしならんとよめりければいとやさしかりけるあるしゆるしにけり

持
○二人勝負なきを持といふ是は誤なり（榊花談苑）に勝負なきを帀といふ（通玄集）に見えたりこゝに持といへど持はせきの事なりといへりそは漢土のさた也（左傳正義）奕棋不能相害爲持とこの持は碁のみにいふにあらずもと歌合の判に優劣わかり難きを持といふもち合ふ義なりやがて音にて持ともいへりこれをとりて碁にもいふなり

○古昔碁子貴人及高手黑を用ゆしからずといへり前にもいへるごとく上手とて黑を取にあらず貴人長者は黑をとる也二人同等の人ならば上手のかた取べきにや貞德が（油粕）握られん物かやたゞは置ましや調半とふもつらき碁がたき（吾吟我集）ちやうはんと名のりかけ碁の勝負にはぬすみをするは道理せんばん（續山井）【如貞】握る手をてうや半とやかき蕨

○今碁將棊双六の三ツの内碁にはむだ言をいひつゝ打つこと秘なり（世話盡）【明曆二年刻】打たる狸のはら鼓御地何ほど蛭の瘡尋その外少々出せり其内手みせきんとありて註に三盤にわたると書たり今

手みきん
略きて手みきんといふ廣く賭博に用とかや（續山井）花のあとや風の手みきん石の竹【政好】手ぞみ

くれよと云と也また漢土には護幾子と云は今幾つおかんと云事也

聖目

○今石九ツおくをせいもくといへど此九ツ置べき處の黑星は一ツにても聖目なり今人の碁うつを見るに聖目をさけて打古法と異なり殊に先手に中の聖目に打こと見及ばず又〔圍棊式〕に聖目の事由緒未分明說云聖目と此字を用事極僻事也際目と此字を用と云々さかひしり目と云なりさかの兩字を略して聖目と云習へるなりと有【此文は正治元年六月日注之玄尊とありてその末にあれば玄尊の書たるにはあらず後の人の書入れにや】この際目の說はうけがたし〔今昔物語〕などにも聖目とあるをや寬蓮は棊の名手にて世に棊聖と稱せられ聖目も目の內の正位にてよき處なればいふなるべし

結さす

○結(ケツ)さすといふ事は【〔源氏〕〔花の宴〕大殿の弓のけちに上達部みこたちおほくつとへ給ふ云々踏歌の後宴弓を射る事あり結は弓を射て勝負を定むる也】今のさだめさすといふことゝのみ思ふは委しからず打果るを結局といへばだめさすはもとよりなれど〔圍棊式〕に半番過る程より結を心にかけて結(ケチ)鼻(バナ)をとりて敵に一手も先手を取せじと次第を案つゞけてさす也能させは二十目などの負をさしよするなりといへり然らば端くのはねかけすべてひけ手せず先を取り出べき處押へき處をうつ事すべて物の先なる處を鼻といふ結鼻もおなじこゝろ也【今俗に云少なる事に拘るやうの事をけちな事といふはこの事より出しなるべしされどけちの本義にはあらず只細少の義をとれり】石と濱との事は先に余が雜考の中にいへり【石と濱とはわかちあれ共後には通はせいふ事あり】

○漢土の今の圍棊はこゝの法と變れることありこの故に徐葆光が〔中山傳信錄〕に棋下時不用四角黑白勢子局終數空眼多少以定輸贏不賣子也と右は琉球の碁をいへりその國の棋はこゝの碁と同じければ不賣子とあるは誤にや漢土の今の法は石を打取たる多少をもて勝負を定め地の廣狹には拘らぬなるべし〔日本風土記〕云但負勝與中國殊、假如圍佔著數、「數悉盤」將內所得彼棋子、拾于手各收之、待

六十一、案李善注、韋昭博奕論、枯棋三百、引邯鄲淳藝經、曰碁局縱横各十七道、合八百二十九道、白黑棋子各一百五十枚、則漢碁製可知云々、又曰今奕多以三六二四等起手、然前此或不盡爾、（集異記）、王積薪、避亂夜投一茅屋有姑婦、暗中以口奕、始云以東五南九置子、次東五南十二、至三十六、而止、其說雖極詭誕、然所以知唐世起手不盡類今也云々【三六二四は今の大けいま小けいまなるべし唐の世の起手はげにかはりたる事也○以口奕は今盲人の象棋をさすが如し碁を打は希なるべし】こゝにも古法は今とかはれりとみゆまづ白黑の定めも今とは異なるにや（江談）【三】吉備公入唐の間に唐人圍碁を以て試みむとする處白石をば日本に擬し黑石をば唐土に擬て勝負をせんとする事をいへりこの事いと稚き物から黑を貴きかたにとるならひなるを證すべし賓主の故にかくあるにあらず（碁聖閣碁式）に先石のふたをあけて黑きを敵のかたへやりて白を我は取べし員并にかけ物の事むねとの人また先達可計其上に我存ずる旨を可言とありたれば上手下手を論ぜずおのれ白を取相手の人に黑を與ふる也人を敬ひてしかする事なれば白は卑く黑は尊をしるべしされどもおのれより相手よはからむには白もちても其力の對すべきほど置石さする事とおもはるさらば今の定めとはいたく異なり又先手の事（同書）に初番の先手をひとしくあらむにおいてはむねとの人若は先達にはうたせずしていそぎすへし所をおく義なり聖目に可打さけておくは樣々しくてけましき也次の手は心にまかすべし先の手をば中の聖目に打入べくやと覺ゆ云々但是はこのみによるべきこそと有（舊本今昔物語）寛蓮が碁打女に値といふ語の內に此女几帳の綻より卷數木の樣に削りたる木の白く可笑氣なるが二尺許なるを差出て丸が石は先此に置給へと云て中の聖目を差す手を可受申けれ共未程も不知ば何とかはと思へば先此度は先をして其程を知りてこそは十卅も受聞へそといへば云々【初めて値たる事なればその力のほどもしられず先先をして試みて後に石は幾ツもおかせんといふなり】（碁待詔傳）に請受子と云は石を置せて

へて云なり信濃にて小路と云越後にて六道路江戸にてキツと云江戸田舎にて十六と云といへりもと一ツものなるべし寶暦十三年の書双六（大坂板）六道をジヤウロクムサシとありて畫は辨慶が七道具をかけり是十六むさしなり又陸拏（ロクド）と有て畫は錢をかきたり是地上に筋引てする戯なりロクトは六道なるを前と同き故あらぬ文字を書たる歟（物類稱呼）に大坂にてロクと云とある是なり思ふに昔むさしといひしものは十六むさしの馬の類すくなきものなるべし地に筋を引てせし下條にいへり

○碁も双六もひとしき博器にて古へは上より初めてみな賭をして勝負を爭ひしなり就中天暦の頃は殊に行はれて寛蓮法師などは碁聖と呼れたり古事談舊本今昔著聞の類の書に記したり

碁

○（續日本後紀）承和六年冬十月己酉朔天皇御紫宸殿賜群臣酒召散位從五位下伴宿禰雄堅魚備後權掾正六位上伴宿禰須賀雄於御床下令圍碁並當時上手也（雄堅魚下石二路）賭物新錢廿貫文局所賭四貫所約物五局【須賀雄輸四籌贏一籌】これいはゆる碁手の錢なり（源氏）【宿木】中の君の產養に薫よりとんじき五十具碁ての錢わらばんなとはよの常のやうにて云々抄李部王記天暦四年七月七日是夕藤女御有產養事云々屯食八具碁手錢二万云々見えたり（新勅撰集）【七賀歌】圓融院御時中將公任と碁つかうまつりてまけわざにしろかねのこに虫いれて弘徽殿に奉らせ侍ける小野宮右大臣よろづ世の秋をまちつつなきわたれ岩ほに根ざす松虫の聲と見ゆ負饗（マケワザ）また負態など書り又所課といふも是なり歌合その外何にも物に賭をして勝負を爭ひてその負たるものには科を課せて饗應の主さするをいふ是をまけわざともいひ音にそくわともいへり又勝負を傍に居て見るものをけんぞといへり（源氏）【竹川】玉かつらの姬君兄弟碁をうつに姬君の弟侍從の君けんぞし給とて近う侍ひ給ふといふ事あり注に見證なり鞠などにもありといへり

まけわざ

白黑の位

○今の碁十九行三百六十一路は唐製なり（莊嶽委譚）云程氏演繁露云、今棊方十九道合枰爲棊、三百

よく似たり日本紀に城をさしと訓る處あり韓語なり然ればむさしといふは即ち馬城歟（安齋隨筆）に

十六むさし

和名抄に八道行成讀夜佐須賀利とあり今も武州埼玉郡邊にては十六サスカリといふ江戸にては十六ムサシと云十六は子馬の數十六あり親馬を除ていふ也ムサシは馬指なりマとムと音相通ヤサスカリといふはヤス、カリなるべしヤスはヤスシの略語にて八の道スシなりスガリは子馬を以て親馬にスガリ迫る也スガルは摣字にて繩を付て離れざるをスカルと云ふ相州鎌倉の邊にてはニツサと云ふ二人にて三

ニツサ

ツづゝ石を六ツ持なれば二三といふ心か十六ムサシを牛追ニツサといふ（和訓栞）云ヤサスは八指カりは樗蒲なり八道行成は梵經に出たり其名義いまだ考得ざれ共今も十六むさしを十六サスカリといふと思へば八を倍したるものとは知らる伊勢氏ヤスジの說は疎忽なり假字の違へるに心つかざる歟さて

八道行成

八道行成(ヤサスカリ)のつくりざまは今しるべからず（遊學往來）に七双六一二五双六云々十六目石(ムサシ)など載するを見れば双六の類なる事明らかなり【ムサシも安齋の說はいかゞあるべき○今その盤の三角なる處を牛部屋といふ牛追ニツサの名ある故なり】

○（守武千句）きれ〳〵になりぬる事のあはれにてむさしをさすとみゆるなりけり（鷹筑波集）善惡に二道かけてつよき人させるむさしを手詰にぞする又二道かくる人のさいかくちはながらさせるむさしは上手にて西鶴（一代女）に子ども相手に六ツむさし氣をつくす事にもなりぬとあり馬子(マゴ)六ツにてさすなるべしニツサと云も二三が六なればなり（和訓栞）にむさしは八道行成(ヤサスカリ)の類なり六指の義なるべし石六ツを用ゆる物なり八格戲なりともいへり（物類稱呼）十六むさしを中國にはむさしといひ野州十六さすがり信濃さすかり陸奥に辨慶むさしといふ

八道　六道

（又云八道わらへの地上に大路小路の形を書て錢を投て爭ひをなす戲れなり京の小兒むさしと云大坂にてロクと云泉州及尾州上野陸奥にて六道と云相模又は上總にて江戸と云津輕同じ江戸の町々にたと

永沈双六とはいふ（丹波與作）といふ淨瑠璃に道中双六の事をいふところ南無諸佛分身と書た六字を六角にきざむ櫻木花のみやこ云々ありこれを見れば道中双六は此双六に倣ひて作りたる物としらる南無云々の六字はこの双六の目安なれば也【按るに六角に削りたる木は面二十あり然らは是は細長き木を六面にしたるにて木口には文字なきなり】（五雜組）に唐李郃有（骰子選格）宗劉蒙叟揚億等有彩選格即今陞官國也諸戲之中最爲俚俗云々至又有選仙圖選佛圖不足觀矣といへる選佛圖は即淨土双六なり選仙圖の事（天香樓偶得）に見えたり

道中雙六

○道中双六は貞享頃に作り出しもの也と柳亭子いへり【（還魂紙料）といふ物に委しく考へ置り遠からず板行すべしと語れり】さもあるべし古き前句付に【いぢのわるさよ〱大津から六が出たる急な用又上を下へと〱】やうちんへ落る髮の毛繪そら言【是は永沈双六の上より女の倒に落る處髮を空さまにかきたるをいふ也】其後紀逸が（六玉川）に双六の戻る箱根に櫛が落などもいへり又この道中双六に類してさま〲作り出たるものあり今も春毎に新板出づおでゝこ双六は正德ごろの物なるを上りの處おでゝこは後に板へ入木といふ事をしてかへたる故畫のさま異なり

おでゝこ雙六
官位雙六

○漢土に（骰子選格彩選格）などいへる物はこゝにて官位双六といふもの也こゝにて是を作りしは官職の事を兒輩に覺えさせむため也是は簺の六面に靲品位階等級の文字を記して用板本ふるきをみず寛延元年浪花の人山本由古通能とこふもの圖を作り畫は周山か書たるあり凡例一卷を附刻す官職補任双六と名づけ此百寮の圖十年餘り以前著述して門子兒童の嬉戲弄翫に備ふといへり【然らば元文年中をいふなり其時始て作り出たるにあらす改正潤色したるにこそ】されどもこはもとより有しものにて淨土双六とおなじ程に出來たるものならむ【古く書たるもあればなり】

むさし

○（玉勝間）に童のしわさにむさしといふものあり五雜組といふから書に委巷兒戲有馬城云々と云るに

戯にて早く宋の代にはほろびて其制をしるものなしおのれ（万葉集折木考）に委しくいへり

おりは
下貽

○今おりはといへるものは（撮壌集）に双六下貽重畯（オリノコシチウハン）（ハンと傍點あるは誤なるべし是（枕双紙）にてうばみといへるもの也但音便にみをはねたるか】また（尺素往來）に圍碁將棊双六下貽【この類の書に此名目いくばくもあるべし】この下貽といへるものなるべしそは双六の打はてのさまよりしいでたるものなればなりおりはといふ名は古きものには見えず貞德が（油滓）に一二々々と文字ぞみえけるおりはうつさいに將棊のさまをして又（古今夷曲集）【端書有て】三芳野の花をおりはのこつちめを主ぞ打ぬる丈六の堂又（似せ物語）おかし男伊勢より歸りて上りけるに大淀の渡にて伊勢のさいうちのでつちにいひかけゝるこいめうつかたやいづこぞさいなげてわれにをしへよゆきてうたなむとあり

むだ口

て書にも双六に錢を賭て打ぬる狀を書けり双六の石をつかふにたと／＼しきを連歌にしたる有り（莵玖波集）は石の上にてやすらひにけり双六の手を打わらふ指の先【救濟法師】又今も博奕にはむだ口をきく事あり（竹齋物語）すご六ばくちを打ちらしすご六のならひにはおくれに三のつもり石きほひに二ツのおくれ石しうしせんの打返し大聲あけてうちにけり明暦二年梓行の（世話盡）といふ俳諧書に双六の條二くい坊主のふせ好みさつとちれ山櫻しゝめせ坊主聲の藥にぐつと呑で實（サネ）をはけ六尺おどれ沖のこのしろ一にほそきはうり買の升ぐいちかす酒ひげに付さい打主從は馬にめす引下ケ作りは船か早いぐわん夏の虫ぐし／＼腹の立ばかり切くにくま太郎てゝは藤四郎此類なほ出たり

佛法雙六
名目雙六
繪雙六
淨土雙六
永沈雙六

○佛法双六といふものあり天台の名目を集め初學の僧に覺えさせんが爲に作りたるものとぞ故に是を名目双六ともいふ繪はなきもの也繪双六は淨土双六といふもの古し（望一千句）願ふこそ唯極樂の花の緣永きひねもす打繪すご六是は南閻浮州よりふり出しいつる目のよきあしきに依て或は天堂に上りあるは地獄に墮その內永沈（エウチン）とて一度こゝに落ぬれば出ることあたはず故に永沈とはいふなりこれによりて

候ぞといへりさしちがへの釆とはわろき巧みの物と聞ゆいぬを物とは犬追物なるべしかゝる釆もあるにや疑はし若これはひきめにてひきめくりの詞の釆摺が詞にまぎれ入たるにやあらん再考ふるにもし双六に犬追物といへる一種の打かたありてそれに用る釆にやいきめはひきめなるべし（著聞集）に鎌倉の修理大夫時房朝臣の前にて双六ありし條にひきめ打ことありひき目はひくき目てて小目をいふなりわろき巧みは了意が（浮世物語）に今はたゞ簺二ツを筒にもいれず手にとりてもみ簺とかや名づけて七ツの數を勝とし簺にあやつりをし出し人をぬきて金銀をとる云々いへれど古くもさるたぐひ有と見えたり

てうばみ

○（枕草子）に心ゆくものゝ内にてうばみにてうおほくうちたると有【これ又双六の遊びにて偶數を勝とする也今のおりはのたぐひかおりはの事下に云べし】

七半

（著聞集）に七半といふ事ありその文によきほどつゞきてまはる處におし出してかきたりければはやくかきおほせて一貫になりぬ我はいまだ一度もしり候はねばどうをば人にゆづり申候はんといふ事みゆ【是今のちよぼいちなどいふものゝ類にや】

ちよぼ一

是また双六より出たる戯なり（缺口物語）【二】ある双六の上手と聞えし人の云みねの重六（チャウ）は必人ごとにかくもの也云々二地の重一（ヂッチ）はかゝぬもの也とあるをみれば著聞にかくと云る詞もと双六の詞なるべし【七半などの奕より後に双六に轉りしには有べからず】

四一半目勝

又（東鑑）に双六於侍者可被許至下﨟永可令停止四一半錢目勝以種々品態不論上下一向可被禁制といへり四一半錢目勝は二色なり【是また今のちよぼ一重半の類なるべし】今の事だに知らざれば古へのさま考ふべき由なしされども釆を戯とするはみな双六の變じたる物とは知らる

樗蒲

○樗蒲といふものは和名抄にも出令などにもあれどこゝには盛りに行はれたるものともみえずされども万葉集に是を假名に用ひたる事見ゆれば稀々此戯したる事なきにはあらず漢土にてもこはいと古き

じうのろふともうちはづしてんや云々釆を筒に入るゝとは敵のふりたる釆なれば筒は我もつて釆は敵に入さする其時敵さいをとりてこひのろふなるべし（源氏）【常夏】近江の君が五節のきみとてされたるわか人のあるとすくろくうち給ひ手をいとせちにおしもみてせうさいせうさいといふ聲ぞいと舌ときや云々此人【五節の君】はたけしきはやれる御返しや〳〵とどうをひねりつゝとみにも打出ず中に思ひはありやすらんいとあさへたるさまどもしたりとあるもおなじさま也

名目

○双六の名目は明衡の（新猿樂記）に筒父擢傍（寒目任意語條、盡詞謀計究術、五四尙利目、四三小切目、錐徹一六難呉流叩々平寒鐵塞要筒金頭定筒八破康居樋亜、品態、簺論、猶勝宴丸道弘、即四三一六豐藤太、五四衝四竹藤椽之子孫也また（埃囊抄）に品態扣子平簺乞出入破採居立入袖隱透筒要筒定筒とあり互に異同あれ共是非定めかたし推はかりいはゞ八破は入破なるべく康居は採居透筒透筒なるべし

盤の寸法

○同書に盤の寸法を記して厚四寸廣八寸長一尺二寸云々筒竹を三寸三分に切當時の局は厚六寸あるなりかやうの事までも古體の改るこそ無念に侍れといへり宋洪遵が（譜雙）【說郛にあり】に日本雙陸白木爲磐闊可尺許長尺有五厚三寸、刻其中爲路、置二骰子於竹筒中、撼諸盤上、視其釆、以行馬、々以青白二色琉璃爲之、如中國棋子としるしたるはこゝの双六かしこのと異なりしによりて也漢土には古制をうしなへる歟寸法（譜双）に記すところ埃囊にいふが如し（鞶草）に双六は古へ吉備大臣のひろめ給ふ盤は長さ一尺二寸横七寸二分の物也とあり吉備公の說論に及ばず當時の盤の寸法をみべし此書寛永中の撰なりかゝれば次第に盤を厚くしたるものとみゆ（建保職人盡）の繪に二種あり博うちを裸體にかきたる方の盤は形薄く又一種のかたなるは今の盤に似て厚し（七十一番職人盡）にはさいすり

さいすり

といふものあり簺を賣てありきたるもの也その詞にさしちかへのさいもめし候へいぬを物のいきめも

て打とむる戯にて弓をもて射るにあらす】はま弓はま矢といへども弓はまといふ事は物に見えず（嬉筑波）暇な日はくるふ童濱弓を一入下手や削るらん又（佐夜中山集）【付句】みつばよつば作る若殿のはま矢かな【西雀】が（世の人心）に五月の節句に甲(カブト)正月に破魔弓進して祝儀とる事もわきまへなく乳母の奉公になれざるものぞかし【今は乳母よりかゝる物贈る事江戸にはなし】（醍睡笑）いはひすくるもいなものゝ條そうりやうの子六歳なりこ弓にこ矢をとゝのへもたせけるか元日の朝矢か一つはなし俵にいつけ云々（日本歳時記）の畫にも正月こともの小弓いる處ありはま弓今はたゞ祝儀の物たれども昔は射らるゝやうに造りて賣し也寛文七年十一月朔日町觸はま弓結構に致さず射られ候様可仕候但人形作り物一切可爲無用事（類柑子）いなつかの燈の條破魔弓の矢筒とゞろはげたるを火吹とし畫けるまゝの名を松鶴とよぶ云々これ畫やうはかはらねども吹竹に用ひしは今の如く紙のはりぬきにはあらじ

雙六

雙六　名目　寸法、てうかみ、七半、四一半、目勝　樗蒲　下貼　おりは　むだロ　佛法双六、浄土双六、道中双六、官位双六　むさし　八道行成(ヤサスカリ)　○碁　まけわざ　白黒の位　聖目　結さすしてう　亂碁　とりご、ひろひ物、まゝこ立

○（古今著聞集）に天武天皇十四年天皇御大安殿喚公卿等有博奕しかれども其賭物をいましむるか故に憲章其咎をまうく専ら禁すへき事にこそ小野宮はむかし惟喬のみこの双六のしちに取給へる所也かのみこはたのしき人にてなむおはしましけるむかしもかゝる輕々敷事は有けるにこそといへりいとあるましき事なり（持統紀）に双六を禁ぜられし事みゆそれより此戯を禁斷のこと多くしるしたるもいよゝ行はれて止さる故なり

○（枕双紙）にかたきのさいをこひせめてとみにもいれねばどうをばんの上にたてゝまつ云々さはいみ

水嚢投　は水嚢投に猿猴の手をのばし或は滅多的に王餘魚の目をふさぐ云々（松落葉）四條の凉の加賀ぶしに的矢のかゝり打けふりといへるもこの事なるべし（誰袖海）に子供衆は正護院の森に行て楊弓の者はめつた的あるひは本弓にかゝり絃にて耳より頬先へかけて打そんじほろ〳〵泣てゐるもあり右に見えたる水嚢投は水嚢の中へ錢をなげ入て外へはね出さぬやうになぐるなるべし又めつた的は江戸にも處々にありしとみえて寛文元年丑十二月廿二日御觸の内にめつた的町中にて爲仕申間敷事とみえたり今神田の多町は舊名メツタ町といへり何の故にかあらん

投壺　うち矢

○投壺（童蒙先習）に近き物の内うち矢とあるは投壺といふとみえたり此戯（雜遊漫錄）に圖式も出たれど爰には行はれず投壺は漢土の古禮なり古の投壺は中るを宗として矢の激して還る事を求めざりしを漢武帝の時郭舍人より始て矢をかへらしむる事をなすこれを驍と云とぞ諸書に見ゆ（和名抄）に投壺都倪宇知一云都保奈介とあれどもこゝには行はれざりしこと見ゆ同又云内典云投壺牽道注に和名美知久良閉とあり又是一種のしかたなるへし板本に都保奈介とあるを旁點にトホナゲとつけたるは誤なり是をうけて雜遊漫錄にもその如くしるせしは非なり

はま弓

○はま弓ははまと弓と二物なり此事は先に著しゝ雜考の内にいへり舊說破魔の字義によりていふは非なりはまは藁にて造るそれを小弓にて射る戯は今も田舍にありといへり（蝦夷の兒童わを作りまろはしてこれを射はしりものゝ目あてを習ふ事（三國通覽）などに見ゆ又近ごろ都鄙ともに小兒箍廻しと云事をす細きわり竹の先をりウゴの形に曲たるをもちて桶のたがを地上にまろばし押ゆく也其角がたがかけの發句も思ひ出られてたが廻したが廻し始めけん】はまなげは江戸近在にてもするなり逆井わたりにて童ども打むれてこの戯をするを見たり是をはんま廻すといへり【濱千鳥をはんまちとりと云ふと同じ（雜考を合せみるへし○これ名は異なれども其わざは毬杖なり戸車を投て是を竹木等に

箍廻し

はまなげ

中此道を得たり一表二百のこらず的中したりといふ元祿のころ江戸の芝邊に五郎未碩とて兩人の上手あり百八十四五の矢數江戸中詰改場の看板にしるし無双の上手といへり頃年は百九十四五或は七八に及ぶしばらくの程に世人かく上手になれり詰改一表矢員二百本なり中る處五十本以上は朱書百本以上は泥書百五十本以上は金貝百八十以上大金貝といふ賭には一錢を紅白の紙に包し也是を字といふ近年は素字とて裸錢を用といへり

ほうかた

○ほうかたは（雍州府志）に凡矢二本稱一手、二百本謂百手、繋格臺謂堋格、中央有小穴是謂喜利穴云々（和名抄）射乏【夜布世岐】（文選）東京賦注云乏以革爲之云々（撈海一滴）に大射禮乏一名容、似今云屛風以牛革輓漆之、鄭曰唱獲者、所蔽而以禦矢也と今この形に似たるを以てほうかたといふなりといへりきり穴は錐穴なるへし今略してきりとのみいふは聞えがたし

きり穴

吹矢

○吹矢は（雍州府志）云【楊弓條下ニ云】又一種有吹矢長三尺或四尺圓木突貫其內入矢於其頭以息吹矢其矢中鳥則立斃云々これにもよく熟したるもの往々あり（諸艶大鑑）に宗益といふ人鳴は中までもなし雁も吹矢にて留る事またなるまじき名人などみえたり（續山井）箭ならて花にねとりそ吹矢かな（大坂宗知）樋は筒軒に蓬を吹矢かな【百之】

からくり的

○つなをつけて人形など出す吹矢はからくり的と云ふ（松の落葉）四條河原涼八景といふ加賀節にからくり的おやまか鬼にうちかへり鬼か佛になむあみだぶつ云々【其砧】せつかく握る飯にくもる日【春旭】吹矢的つまる所か息まかせ【橘佐】（娘容義）に心底はからくり的段々にかはるなど云り（江戸名物鑑）富が岡吹矢みた計り初雷の吹矢かな【胴脈】が（勢多唐巴詩）吹箭射唐操的、腹減息亦弱試吹十本前偶中的不離更無人形轉

滅多的

○滅多的（俳諧楽糸）祇園林にかすむ飴賣なくさむは長閑にみゆるめつた的（本朝文鑑）涼の賦ある

らで中つかはしける【贈法印慈應】あづさ弓いてもかひなき身にしあればけふのまとゐにはつれつる哉【返し、道命法師】梓弓君しまとひにたくはねばともなはれたる心ちこそすれ小弓は即楊弓なるべし雀小弓は小弓の殊に小きものとみゆ（二水記）云享祿三年二月三日午時參內有御楊弓【小弓といはず專ら楊弓といひ小弓はたゞ雀弓にのみいへり】

○安齋云楊弓其始をしらず本は小童の楊の枝を弓に作てもてあそびとせしより起りたることなどにやといへりかくいひては雀弓と異なることなし按るに養由基の楊の葉を射たりと云傳ふる事によりてさゝやかなる的矢なれば楊弓とはいふなるべし楊弓は今に絶ず行はるれど雀小弓は（雍州府志）に近世亦翫之といひしは天和年間の事にて其後すたれたるにや聞えず楊弓の事書るもの一卷あり共式委しくみゆ其起原は唐玄宗に始れるよしいへるは取にたらず思ふに（開元天寶遺事）に庸宮中毎端午造粉團角黍釘金盤中纖妙可愛以小角弓架箭射中粉團者得食盖粉團滑膩而難射也都中盛行此戲とあるなどに傅會せしものなるへし楊弓のはやりしは寬永前後のころ（犬子集）近年聞書の部に世上に楊弓のはやり傳りければ楊弓の下手のさしきや夏こたつ（鷹筑波集）楊弓か雀の森の三日の月（目覺草）【寬永二年光廣卿跋あり】楊弓はいとけなきものゝさゝはき矢のやうにて弓は寸尺にたらす矢づかもなければ射法にかゝはらず何の用に立ことをしらずたゞいたづらにかけものをあらそへるをみれば博奕のたぐひなり惠中が【海上物語】に宮本武藏が楊弓を削りて樂む事みえたり是は慶長中の事にやまた天和貞享ころの草子にも多くみゆ（一代男）【三】折ふしやうきう初りて各々やう〳〵朱書くらゐあらそはれしにある御方の道具をかりてとり弓とり矢にして四本はづれず一筋はきり穴に通れば座中目を覺して猶所望するにかずあり（諸艷大鑑）に東山の遊ひ光寂一中ましりに楊弓の會も詠くらし又（世の人心）に楊弓は一中かゝりに大金貝の看板など擧るに遑あらず一中とは都一中が事なり（世事談）近年みやこ一

小弓

は座敷などに出し置にや（金葉集）に公實卿のもとにまかりたりけるに侍らざりければ出居に置たりける小弓をとりてさふらひにこれはおろしつとふれて出にけりかの卿歸りて弓を尋ねければ時房まうできてとりつと申ければおどろきて院の御弓そとくかせといひにつかはしたりければ御弓につけてつかはしける藤原時房あつさ弓さこそはそりの高からめはるほどもなくいつるべしやは

雀小弓

○雀小弓は（庭訓往來）に春始御祝云々將又楊弓雀小弓勝負とある其抄云楊弓は公卿の御弓なりあづちを九の杖にこしらへて廣椽などにて射なりゆんほこは三尺六寸なり雀小弓は殿上人の態なり弓のほこ二尺七寸なり的を四寸にして中につり五間口おいて射る也といへり此說何に據れるにか覺束なし楊弓は公卿雀小弓は殿上人と分てるとも有べからず雀とは物の小きをいふ草木の名などにも小なるを雀といひ是に對して大なるを烏といふ此義にて小弓を雀弓ともいひしなるべし西行の歌に「篠ためて雀弓いるをのわらは額ゑほしのほしけなるかな」とあるなどは製りざまに定りたる事もあるべからず古き繪卷物に童の小弓もて小鳥を射る處をかける往々あり是に後世田舍には雀を縛りて的として射る事も有とす【安齋が（庭訓往來古抄）の頭書に（採梔集覽）を引て曰予が幼年の頃迄に於て年始の遊覽とて生たる雀を括り目當として二尺七寸の小弓を以て射さしめたりもし中る時は雀を取中らざる時は賭を遣して興としき疑はこれを雀小弓と云たるか【猿樂狂言（やはたむこ）に弓こそはちいさいときからはちこ弓の射手にてすきで御ざる【はちこゆみは蝶小弓にて虫など射る小弓か】（恨之助草子）に小弓に小矢のもとするゑをしらざりし頃云々【幼き時をいへり】西鶴が（義理物語）に小娘の藝をいふ處雀小弓に一筋もはずさず云々（軍器考）に長日の頃あづちを作りて本弓にて的を射るを小弓引と云よし是堂上の小弓に准ふ也とあり

○小弓は僧徒も翫べり（新拾遺集）【十九雜中】右近大將道綱家に人々小弓いてあそびける時まかり侍

ちこぼしてと書るはやくかひとらんとてさはぐ故に物などこぼすことゝするにやさには非ず多くとらんとするものは中々やくかひをうちこぼしかろ〳〵と取ものには結句おとるなりかしこきおさめどのにとは火燒やを丁度よき納とのにしてとりいるゝなりさてやくかひ（春曙抄）には口訣ありとのみ記せり或云秀吟法印が書しものに此事たしかにしれざれども今のし包のごとく包てある物なり淸少納言の書ざまを見れば中に金銀などを包しものなるべしといへり殿上淵醉の繪卷物の禁裡にありしが一とせ燒うせぬ其うつし土佐にありしに袖よりまきちらす所といへり按るに金銀をやくかひとは但右の說によれば錦貝を疊紙に包みたるものかこれ琁玖貝也（推古紀）に（琁玖人釋）日本紀之琁玖西海別島也出美貝（和名抄辨）色立成云錦貝【夜久乃班貝】本文未詳但俗說西海有夜久島彼島所出也、本草家に紫貝をやく班貝とするによれば漢土の古貝を寶としたり至秦廢貝行錢といへりされば錢などをやくかひといひしにや但紫貝は（和名抄）にうまのくほかひとありて錦貝とは異なり金銀ならずともあらそひとらむはうたてあるべし彼畫卷物といへるは承安五節の摸本にや疊紙のやうなるもの落てある處みゆ此は櫛なるべし（古事談）に頭中將公能朝臣殿上一種物に蛤をこに入てすやうをたてゝ紅葉をむすびてかざしたり蛤のうちにたきものを入たり云々中將とりて人々にくらはせてけり人々とりて興じあへりとありこれを打まきなどして人に拾はするとなるべしやく貝とは常の蛤なれど見事に包みなどしたるから琁玖貝と美貝の名をとりていへるにや

○（源氏）【若菜上】やよひばかりの空うらゝかなる日云々おほやけわたくしに事なくて何わざしてかはくらすべきいとさう〳〵しきを例のこゆみいさせてみるべかりけり（舊本今昔物語）【東三條內神報僧恩語】梅の花いと謎く榮き鶯いとはなやかに世中今めかしく所々節供參し云々鞠小弓など遊ぶ又【東鑑蜻蛉日記著聞集義經記】等其他諸書にみえたるみな三月或は四月頃長日に翫ぶ事なりその頃に

に畫けり

貝合

○貝合は歌合の一種なり昔二條院の御時貝合云々（山家集）に伊勢のふたみの浦にさるやうなる女のわらはども集りてわざとのことゝおぼしく蛤をとりあつめけるをいぶせきあま人こそあらめうたてき事なりと申ければかひ合に京よりひとの申させ給たればえりつゝとるなりと申けるに、今ぞしる二見の浦のはまくりをかひあはせとて覆ふなりけり（袋草子）に小貝卅一に歌かく事あり又（今昔物語）にいつくしき貝どもを拾ひ箱一具に入て貝の中に書入たる歌ひろひ置君がなぎさのうつせ貝今はいづれの浦によらまし【是は朱雀院女御失給て後其女房のよめる歌なり】是らは種々の小貝を拾ひ集めた

貝盡

るなり今も貝盡とて百千の貝を筥に入て翫ぶ事あり此に歌仙貝とて諸集より小貝をよめる歌をあつめたる物あり大枝流芳が（浦の錦）に載たり（春湊浪語）に近き世に貝合の歌合としたるこれは今の歌仙貝の歌なるか昔二條院の御時貝合し給ふ其時西行法師人にかはりてよめるさくら貝袖貝小貝などの歌（山家集）に見えたり今貝覆の貝入る器を一對にし貝桶とて女子第一の調度とする事古きものに見えず近世に起りしなるべし（万寶全書）【八】紀州熊野の浦邊には人の食事に勝る異形珍奇の名貝班文怪色無量の形あり所の人其形をしりて弄物とし綿におほひ袋に包みたがひに相くらべて興じなぐさみとす尤賞するに足れりと其所の人かたられしとあり是元祿七年の刻梓なり其頃箱入の貝盡などは世間に稀なりしにや（五元集）に貝そろへを送られしに、蛤のしかもはさむか玉柳

やくかひ

○やくかひ（清少納言）に公卿殿上人はかはる〴〵さかづきとりてはてにはやくかひといふ物おのこなどのせんだにうたてあるを御前に女ぞ出てとりける思ひがけず人やあらんともしらぬにひたきやよりさし出ておほくとらんとさはぐ物は中々うちこぼしてあつかふ程にかろらかにふととり出ぬるものにはおくれてかしこきおさめどのに火燒やをしてとりいるゝこそおかしけれ（春曙抄）に物は中々う

古今戀歌書之、貝裏歌事、左右一首をわけ候て御書候はゞ右の出貝に上句を可書候歟以前承候し忘却候其分に先年御尋被成候時申つる歟と有これも歌の贈答または上句下句を覺ゆるために出來しものなれば歌かるたは是を紙に作りかへたるものなるへし（甲陽軍鑑）【二】武田信玄幼き頃其姉今川義元の室より母儀のかたへ貝覆の爲にとて蛤を贈る處に其時信玄勝千代殿と申たる時なれば御母公より女房達を以此蛤の大小を扈從に申付えりわけて給はれとの御事にて大をはえりて參らせられ小の蛤たゝみ二帖じきばかりにふさがり高さ一尺も有つらむ云々（雍州府志）に倭俗婦人合貝爲戲、其法以三百六十之貝左右分之、闔並床上空其中央、貝一雙內、右貝稱地而並床上、左貝稱出、每一箇而出置中央之隙地、各闔巫視之則、出貝與地貝其紋采合者則取、出貝合地貝、其所合之貝多者爲勝、少者爲負、其貝大蛤蜊也、始出自伊勢桑名海濱、今大者絕、故多用朝鮮貝とみえたり（壺のいしぶみ躾形）の帖に歌貝を俗に歌かるたと云は誤れり貝合に似たる故に歌貝とは名づけたる也一名ついまつといふは伊勢物語に出たり式法將棊頭に作る今四角にするはあやまれり四角に並ぶる物にあらず取やう上の句よりよみてとるものにあらず口傳あはせとりといふ事あり云々

繪貝文字札

○繪貝文字札は近代の物なり繪貝は歌貝の形にして名所の繪を書て付合といふ物にて合する也文字札は四書五經或は名所又平生の文字魚鳥何にても文字を二字三字かきて是には出し地といふ事もなくみたき散らして文字つよき人よみてになりて取らする也文字札出し地をこしらへ熟字或は付合を書わけて歌貝のごとくとる事もあり廻りよみによみてとる事も有といへり貝覆を貝合といへるわろし歌貝を俗に歌かるたと云は誤なりといへるはうけがたし紙にて作れるを貝といふも名に負ず頭窄く將棊の駒の形に作り合せて取など貝おほひに異ならず新たに製りて人を欺くなるべし繪貝文字札同時の製(もの)とみゆ此類に武者盡し職人盡し花鳥など書たる形も團扇などに作りたるもありみな裏おもて金箔を押濃彩

に蘭省花時錦帳下と書て末はいかにとあるをすびつのきへたる炭して草の庵を誰か尋むとかきてやりたる事伊勢物語の故事を學べるなるべし又中宮の御前にて古今集をおかせ給ひて歌とものもとをおほせられてこれか末はいかにとある條の事などついまつの起源なるへし（春湊浪語）にも宇治十帖に八宮の姫君兄弟はかなき事をもとするをとりていひかはしといへるを（花鳥餘情細流抄）等に歌などの上句下句を讀ことゝ注し（枕草子）に歌のもとを仰られて是か末はいかにと仰らるゝにすべてよる晝こゝろにかゝりて覺ゆると見えしことなどみゆる此歌のもと末を覺えむ料に今の歌かるたといふは來けるにそ其頃よりの物なるへしこの本に末を對するといふ事より對末の歌かるたなといふ名もありかるたとは輕板といふ言葉の略なるにやといへりされど其頃の物とするは非なり古への物ならぬ事は歌かるたといふ名にてもしらるかるたは蠻名にて博の具なり【ホルトガル紅毛にてしか云ふ】それに形の似たるから歌かるたと云たるが其名のいやしきによりてついまつの名は出きしなるへし對末の說は附會なり義はおのづからかなへるにや

貝覆

〇貝覆は古きものにて歌かるたとひとしからす安元三年五月廿日西八條殿にて平家君たち貝覆の勝負ありし事（源平盛衰記）【五】多田藏人行綱中言の條に見え其後（增鏡）うちのゝ雪の內にみえたり又（著聞集）に天福元年の春のころ院藻璧門院の方をわかちて繪づくの貝おほひ有けり云々是は繪卷物を賭にして貝覆ありしなり（徒然草）に貝をおほふ人の我前なるをばおきてよそを見わたして人の袖のかげ膝のもと迄目をくばる間に前なるをは人におほはれぬ（四十二物諍）貝おほひとすくろくとひし〱とつとひておほふ貝よりもたゝふたりゐてめをやろんせん（とりかへばや物語）などに畫かきひゝなあそび貝おほひは女子のあそびにいへり（宣胤卿日記）長享三年八月九日云、今日自中山黃門、

歌貝

貝歌事所望、書樣事、一條亞相返事如斯、但貝左右各々一首書之、贈答歌書之間、贈右答左所書也、

といふ月見して【仙鶴】また引負の肩の一本【貞佐】これ又力くらべとしらる又扇きりといふ事あり（甲陽軍鑑）【十六】武田信勝十一歳の時小姓友野一郎と日向小傳次と扇切いたせと御意の時又一郎は腰にさしたる扇をぬく傳次は手に持たる扇を腰にさして指をたてゝ向ふ時信勝はや見えたるぞおけ扇切に傳次は勝たりと心の逸物なるをほめ給ふ云々かくあるのみにて其法しられね共今ゐあひ拔が扇を空に投て地に落さず拔打にきる事をする是もそのたぐひとみゆれど指たてゝ向ふとなれば扇を投付などするを指にて打落すわざにや（寛永發句集）【宗富】骨をりて勝まけはなに扇切【（埋木）にも此句を載てまけかちとあり】

綱引

○（唐書）【四】中宗神龍二年二月己丑及皇后幸玄武門觀宮女拔河爲宮市以嬉同四年二月戊戌及后妃公主觀二品以上拔河（五雜俎）唐時淸明有拔河之戲其方以大麻組兩頭各繋十餘小索數人執之對挽以强弱爲勝負（日次記事）に江州大津の人三井寺門前の人と各原野に於て左右に分れ互に大綱を爭引兩方共に太皷うち競進引勝方その年各福と得るといふこれをつな引と稱す正月十三日より十四日の朝に到て去といへり此事猶處々にありと聞り（後撰夷曲集）親月とて時々にするつな引はゑいや大勢の子どもあるゆゑ（良因）東寺の前にて綱引を見て東寺にて綱を引とる人はたゞ鬼よりつよき力なりけり（一見）

雜伎

雜伎（續松）歌かるた　貝覆　歌貝　繪貝　文字札　貝合　貝盡　やくかい○小弓　雀小弓　楊弓　吹矢　からくり的　滅多的　はま弓　はんま廻し

續松
歌かるた

○（和名抄）に松明をついまつと訓り（三代實録）【四十七】には續松とあり松のひでは能もゆる物故に明りに用たいまつはついまつ也歌かるたをついまつと呼事は（伊勢物語）に齋宮のかたより盃に歌の上の句書て出し給ふを業平ついまつの炭してその下句を書る事によりてなり（枕双紙）に頭中將の文

女相撲　座頭相撲、のはす手はなでるやうなる柳かな【風潮】女すまふ、男より勝色ありや女郎花【梧英】

　　こぶし打　腕おし　首引　膕おし　指はじき　枕引　扇引　扇切　綱ひき

こぶし打　〇（和名抄）に相撲和名古布之宇知【これは漢土の拳法といふ類にて兩人打あひて勝負する事なるべし〇今小兒兩人にて一人手を開き甲を上にして出せば一人その手の甲を撫るを手を翻して打なり撫る者は打れじと引戯あり】共次に相扠和名多加閉之楊氏漢語抄云拗腕とありこれは手を捩る事とも聞ゆれ

腕おし　ど手かへしといふ名はよく腕おしにかなへり鬪腕といへるも是なるべし齊鬱林王何妃淫亂與侍書馬澄鬪腕較力以爲笑うでおしといふ名も古く見ゆ（義經記）【三】辨慶幼き頃比叡山の學頭西塔の櫻もと僧正が弟子になりたる條師の仰にはしたがはずちごほうしばらをかたらひて人も行ぬ御堂のうしろの山

首引　のおくなどへともなひゆきて腕おし首引すまふなどぞこのみける云々（狂言記）【れんちやく】といふ

すねおし　狂言に商人女商人と爭ひ事して腕おし又すねおしをする事あり又爲朝と鬼と首引腕おしする狂言もあ

指はじき　り（異制庭訓）に目比頭引膝挾指引腕推指抓【膝挾は足おしにて膕おしにはいさゝか異なるべし兩人

しつぺい　ひざをたて挾みて押倒すにや指くじきは指シツペイ也】（寛永發句帳）すねおしに風力そふ小萩かな（吾吟我集露）をいとひもすそくりあげ野をゆけばすねおしかまし萩の花ずり（世話やき草）あつければ暮る力も出かぬらし日は暮かたの夏の腕おし（五元集）腕押のわれならなくに梅の花（丹前能）

枕引　といふ草子に腕おし枕引足おしなどなさるゝ云々足おしは膕おしなるべし枕引は（京羽二重）枕引みしか夜明て笑ひけり（珈笑）古き冠付にやす〳〵とかけきよになる枕引いとおかしきは共角が（若葉合）に首引のころぶ拍子に起あがり明和初年（川柳點）首ッ引まをのけさまにみそをあげ（本朝文鑑）

扇てんがう　支考が文に扇てんがう枕すまふ互には握り拳の上に枕を立てあたり合せて落たるを負とするにや扇て

扇引　扇切　んがうは扇の曲か又は扇引をいふ（佐夜中山集）扇引や紙のちからのあらん程（類柑子）大空を天竺

らをも申さむ歟漢土は侏儒をいたくめで興したる事後々の書にも多くしるせり其故に（唐書）武德元年十一月戊申禁獻侏儒短節小馬庳牛異獸奇禽といふ事なども見えたりこゝには（續日本後記）承和十一年三月甲申朔云々戊戌但馬國上帽子單衣腰帶草鞋刀子等一櫃其體樣卑小不似此間之物疑侏儒國物流着者歟と載たれども侏儒國といふ國は物に見えずさるところもあらんとおぼめきて書るなるべし小人島といふ事はいひ傳ふる事なれどもいづくとも定かならず【（神異經山海經）等に小人國としるすといへども誕妄に似たり又（輟耕錄）【十四】小人の乾したる長六寸許なるを見たるよし記して豈其人與といへりまた長人小人の事徐岳が（見聞錄）【二】に載す】思ふに外國の嬰兒の翫具流來しにもあるべし【（金瓶梅）に李瓶兒が生る子の名を道士に付さする時道士より道家の衣冠服玩を小く製りて一櫃に入て贈れる事ありこれらもし漂流して他國に行事もあらむにはかならずいぶかしく思ひて小人島の調度ならむといはんかし】

○俗に矮人を一寸法師といふ法師は小法師と云より小き物を名づく能の狂言に小兒をかなぼうしと云るはそのかみの俗稱なり（尤草子）ひくき物なきなたぼこ一寸法師（犬子集）すゝのこは竹の一寸法師かな【德元】（正章千句）ゐた〳〵したるなりは見たむないつしかも一寸法し年闌て（洛陽集）蓮花茶や一寸法師の座下の草【計也】今は法師を略してぼうといふ事を男の子にいふ其外ぼう盡しの俗謠めけ共梅ぼうし影ぼうしてり〳〵ぼうし猶多くあるべし略きてぼうといふは猪の子をうりぼう豚をとろぼう櫻の實を櫻むぼう柚の類に九年ぼう人の上には吝ぼうべらぼう此は殊に擧るに遑あらず

辻相撲
○辻すまふ（七十一番職人歌合）かけ法師みぐるしければ辻すまふ月をうしろになしてねる哉

獨り相撲
○獨すまふ（鶴岡職人歌合）日は入て月こそ空にねぢいづれひとりすまいの心ちのみして

座頭相撲
○座頭すまふ女すまふ觀場にあり（江戸名物鑑）【寛延寶暦ころより明和まで世にはやりし物を集む】

りてありし事をいへり古へ大勇のわざのあと誰ともしれぬを大太ぼつちといひし也ボッチを（紫一本）に礫の事と云は非なり例の法師といふ事にて大なる人といふ程の義なり今大なるを大ほやと云も是なり馬と云も其心おなじ紀海音が（傾城無間鐘）といふ浄るり猿廻しの段馬といふ大ほやしはせなかに物を置より外一藝もござらぬゆゑ云々

大女

○古事談【一】萬壽三年四月〔大〕女長七尺餘面長二尺餘乘船寄丹後國浦船中有飯酒觸邊之者悉以病惱仍不令着岸之間死去云々

小男

○古き（年代記）延寶二年の條十一月近江國よりたけ七尺三寸ある大女名をおよめと云見せものに出すとあり（續無名抄）【延寶八年惟中著】近ごろ道頓堀に頭大甫春と云ものあり其たけ一尺二寸足脛すぐれて細く四五歳にこえず梅花心易を誦んず粗書をよみて義に通ず又大女房あり江州の者なり白髭大明神の變化といひ傳ふたけ七尺二寸足の長さ一尺三寸手の長さ一尺全身すぐれて骨高く力人にこえ達者究竟の男にも勝れりといへり其頃の俳諧に大女房とあるは此およめが事也近年文化の末大女淀瀧と名を付て見世物に出大きなる馬下駄など看板に見えたり一雪が（新著聞集）に南部信濃守殿國方より石力雲藏とてたけ七尺五寸杉臺右衛門とて長三尺一寸ある男をめづらしとて連たまひし雲藏が右の袖口より臺右衛門這入て左の方へぬけ出し誠に過不及のたがひなり右江戸の人々に見せたまひし（蕁卿贅筆）平生所見異形山左一販棗客長丈餘首幾及屋梁毎出兒童噪而隨吾郡一僧年可四十許身不滿二尺一人承之以槃沿衙乞食

侏儒

○因に云（新猿樂記）に侏儒田樂とあり是は侏儒のまねして舞ふまひの名とみゆ侏儒の事漢土には（列女傳）に夏桀の時にありといひ（家語）には魯定の時の事などいとふるく見えたりこゝには只その小きをいはゞかけまくもかしこけれど少彥名神をや申べき又蛭子は後世傀儡の徒あがめ祭ればこれ

して名を大太と云とあり（紫一本）大太橋條に大太ぼつちが掛たる橋のよし云傳ふ肥後國八代領の内に百合若塚と云あり塚の上に大木あり所の者云く百合若はいやしき者なり世に大臣といふは大人なり大太とも云大人にて大力有て强弓をひき能礫を打いま大太ぼつちとは百合若の事なりぼつちとは礫の事とぞ一とせ大風にて右の塚の上の大木倒れ崩れたる中に石のからどあり内をみるに常の人の首五つばかり合せたる程の首ありふしぎに思ひみるに雪霜の如く消失ぬ依之大きなる卒都婆を塚の上に立右の樣子を書付たるもの今にあり百合若は筑紫の人にてけんかいが島にて鬼を平ぐる事百合若の舞に作り侍り然るに奥州の島の内に百合若島といふ有てみどり丸と云鷲の事までたしかにある島あり又上州妙義山の道にも百合若の足跡また矢の跡とて有この外にも大太ぼつちが足跡力業の跡爰かしこにありといへり

○（春湊浪語）に笠朝臣金村は備前國の人なり鹽津山作歌二首ますらをの弓すゑふり起し射つる矢を後みむ人の語りつくかね鹽津山打越ゆけば我の乘る馬もつまづく家こふらしも（万葉集）【三】に見ゆ昔は精兵なる者はわがうでのすぐれたるを後代の者にしらしめんとて道路などの大木に矢を射付殘す事ありし故に金村も鹽津山中にて木に矢を射のこしこの歌をよめるなるべし保元の軍に八郎御曹子上矢の鏑の一筋のこりたるを末代のものに見せんとて寶莊嚴院の門の柱に射留しと（保元物語）に見えし又建久四年曾我兄弟親の仇を討んとて富士野の狩くらへ行とき箱根路の湯本の矢立の杉に矢を射立置し事（曾我物語）に見えたり其杉は後世までありしといふ是ら皆同じ類也云々近き世の事なれども此國に伊庭藤太夫といふ精兵あり備中吉備津宮に昔より鐵の弓あり誰が奉納せし事を知らず俗に百合若大臣の弓といふ是に弦をかけて藤太夫引試みけるに其弓半より折たり此事世の人口にあり引折たる弓今社頭にありといへり此下に寶暦九年日向の杣より杉の大木を切出し舟木にひく時中より大なる鏃くち殘

袋といふ判にたちつけの體田舍行事とみえたり

われ相撲

○勝負なしのすまふをわれといふも古き事なり（懐子）【明應二年】相撲場に破やみゆらん河津かけ、むすふ手のあかても人やわれすまふ、闘すまふわれても末や合物

興行日數

○すまふ興行の日數四方山人が（狂詩諺解）いにしへより晴天八日の定めなりしが安永七戊戌年三月廿八日深川八幡にて角力興行ありし時より十日となりしと見ゆ又其頃の記錄近年は秋角力なく寒中興行これも近年雨ふりつゞきしよりかくなれりと見ゆ

大漢

○釋迦嶽は朝寐せる豆腐屋の二階の戸を扣きしといふは大きなる事の勝れたる迄なり谷風の如きは近世には稀なる力者といふべし【深川八幡社地に釋迦嶽雲右衛門身の丈をうつしたてたる石柱あり高サ七尺五寸なり此ころ肥後國より來る大男武左衛門も七尺五寸に重さ三十九貫目といふ】その手掌の形（寸錦雜綴）にも出せり【南品川妙國寺に加藤清正自筆の法華の題目を書たる上にみづからの手形押たるあり石摺に作りたるを出す谷風が手形に校べみるに谷風より指一節大なり】釋迦嶽が手の形押たるは半紙一ぱいあり

大なる者を馬と云こと

○本朝の史には侏儒など獻りし事は見えず長人の事は往々ありそは相撲あるは追儺の設なり（西宮記）追儺條下國史云天長十年四月勅喚大舍人穴太馬麿與内竪橘吉雄双立量其身長吉雄短而共頭首不及馬丸腋下焉また貞觀八年五月下知相摸武藏上總下總常陸等國選進長人六尺三寸以上者按世人及今呼長人曰馬丸起于是歟とあれば大なるものを馬といふ事いと古き事なり【前文は（續日本後記三代實錄）の文今按は西宮左大臣殿の按なり】

大太ホッチ

○大太ホッチと云は（平家物語）【八】豐後日向兩國の界に姥が嶽といふ山の下に岩穴ありて大蛇住これは日向國高知屋明神々體也豐後國に太夫と云ものゝ娘に此大蛇通妊して男子を生む七歳にして元服

四ッ辻　みつひ

卿腹くじりといふ相撲と立合ける所の文に腹くじりが四ツ辻をとりて前につよくひかれたりければ頭もをれぬばかりに覺えてやがてうつふしにたふれにけり云々今犢鼻の尻の上にて結ばれたる處をみつひといふは三結の省けるなるべしさて其結目は上に角出たれば四辻ともいふべく覺ゆすまひの手に三結とるといふ事あれば今こゝに四辻とりてといへる似つかはしげ也といへり（類柑子）鬪雞句合とり結ふ植毛の爪や要石判云かなめ石四結を取てちつとも動かず云々（曾我物語）にてきもうはてにめをかけてのさんとよる處をこひちをうちあけちがひさまによつひをとり足をぬきてはねまはしとあり上に引る（異本曾我物語）の辻膊辻搏の誤なるべし即この四辻とるとあるなり是後世も四結といへり（類柑子）云々三ツと呼は近ころの事なるへしまはしの形によりていへば三なれどさにはあらず背の中筋に三處より廻したれば是四辻なり腹くじりは今いふ前つけにや元祿ごろに相撲取櫛をさしたりしは前

前づけ

づけといふ手をとるをつたなき事としそれをせざる印としたるよりはじまれりといへるは非なり櫛の事上にいへるが如し

行司の出立

○行司の出立（相撲大全）にいふ古代行事裝束は侍烏帽子を戴き素襖を着し露をむすびてたすきとし揮を以て相撲を合せしもの也中古風流になりえぼしをとり茶筅髮にしてすほうを陣ばをりに替裁付をはき揮を團扇の換たり此出立漸く久しかりしに享保年中より又裝束轉じて着ながし小袖の上に上下を着し股立を取て立出古の風流より今の變化に心を付べき也といへり案るに素襖烏帽子の頃も弓を用ひしなるべしざいにはあるべからず唐うちはを用ゆるは猿樂狂言唐相撲の體なり裁付を着うちはを持し行事は延寶頃京師四條の圖の古畫にも見えたり又同頃の一枚畫に明石志賀之助のすがたの圖ありこれには行事木村喜左衞門上下にて股立とり唐うちはを持たり江戸の風は異なるにやされ共其後は彼唐人出立の筒袖の服裁つけはく事はいつくも廢れたりと見えて（類柑子鬪雞發句合裁つけの足に覺悟や錐

大なであげ
半かう剃
おてつ

たる又髮そきしたる形さま〲又前髮あるは額の小鬢さきをそぎて左右へ鳥の羽をひろげたるやうなる又耳の際にて髮を切たる種々なり【此風今武家の手子の者水子などに殘りたり】これも貞享頃迄は鳥の羽ひろげたるやうなるは繪にもみえず元祿このかた也（類柑子）鬪雞句合【寶永元年三月】名乘せん三枚朱冠をみつの山と云句の判に云鬢切左右へこきあげ大前髮つかみたてたる有さま三枚さかの見參と也（新竹齋）【貞享四年刻】爰に八月始の日松の尾の神わざにて鳥居のもとに相撲をとる畫よりすまふの場ならしに十一十二四五六迄の小すまひを始れば次第々々に大きになる仁王をそねむ大兵どもどんすひざやの三重まはり大なで上ケに半かう剃其外丹波津の國伏見大津のうはきもの所せき迄並居たり云々この撫あげ半かう剃の形容さま〲になれるなり

○オテツハ（猿樂狂言記）すまふの處におてつまいつたおてつかつたぞなどいふ事あり是はもと手といふ事なり人をさしていふ故におもじを付るなるべし（古今著聞集）に時弘しきりに宗平をてこひもしまくるものならは時弘か首をきらん云々又一條にとりわきそこをてこひ申すぞ心みたまへとの玉はせ云々又伊成弘光すまふの條左の手を出してこひけるを云々あり是もてこひなるをてもし重る故あやまりててもじ一ツ脫たるなり（古事談）に此事を弘光左手を指出て手乞けるとあり今狂言のうへにては唯おてとのみいふにて手とつよくいふ故ツハロにありそれを其俚にうつし書るなり今狂言のうへにては唯おてとのみいふにてしるべし但し今はボテと云は誤れり合戰などにも手に合とは鬪たるを云手に合はぬとは鬪はざりしなり傷をうけたるを手を負といふ凡人の活動に皆手と云與するものを手下と云たくひの詞多しをさなき事ながら女兒のいしなどりにテツと云事あり狂言の詞より云にや

○（著聞集）に相撲なにかしとかやいふ上手ありけり敵の腹へかしらを入てかならずくじりまろばしければこれによりて腹くじりといひける云々このごろ（亮々草紙）といふものに此段を引て中納言伊實

櫛

○又前髮ある相撲取は櫛をさしゝ事元祿中西の方大關なりし兩國梶之助さし初たりとなむ是又上にいへる如く髮のみだれ易き時の事にて搔撫るも度々にてうるさければ櫛を其まゝさし居たるが便利なりしより常にしかせし事と思はる其後鬼勝象之助か二枚櫛をさし白粉をつけしなどはたゞ戯事にて假粧

化粧

といふへし（此鬼勝は大漢にて長七尺三寸ありしとぞいとおかし）是等に假粧の事も見ゆれば彼力紙力水もなべて假粧といふ事になりしか【江戸の戯場には昔より勇武の扮には角力人のさまを學べり（色花居）といふ草子に江戸芝居の事をいひてまたしても朝比奈が門やぶり金ぴらが人つぶて三々糸びんにたばね髮おみき德利の口したるやうなはね元結をかけ云々いへり】

○（相撲大全）に角前髮の角力取櫛をさす事元祿年中に盛なりし云々此事おぼつかなしたま／＼櫛をさしゝもありしなるべしかく云ては多くさしたる樣なりさはあるまじきと思はるゝは（五元集）鬪鷄句合桒岑が句勝關に毛なみを直す櫛もがな判云中入して手はじめなるに女房の後見とは心得ぬ業なり富士の烟のかひやなからん力がひなく齒がみせらるゝぞかし牝雞晨すればわざはひ有とこそ傳へ侍れ象もよくつながれ鹿必よると云る詞をしらばさしぐしも心を付てつゝしむべし力の出る最中なるぞとあり古き相撲人の圖うつし傳るものあり古へ相撲の節會ありし時の畫なり其内にも相撲人自ら櫛もて髮の亂れをつくらふ處ありこれ必持てあるべき具なり兩國梶之助がさし初めたるも理はり也されども女らしきやうなればにや行はれたりとも聞えずたま／＼象之助如き者は只異風を事としたりし也もし元祿中此風盛りならんには其角が件の判詞にさは云べからず但し其角が此判當時にはかなへりやしらず彼梶之助が事などをば知らざりしと見ゆ殊女房の後見などいへる事其句の上にも見えざる事なり發句作者寃みなるべし

髮の結ぶり

○髮の結ぶり昔の角力とりの髮のさま今は歌舞伎狂言のかつらに殘れり髻するに元結を多く卷曲を立

まはし

○まはし　是をまはしと云事は幾重もまはす故の名なるべしこれもきのふけふの名にあらず（後撰夷曲集）米屋を「下帯のさがりし米を買ふ人は肌ゆるさずにまはし能せよ（高故）慶安元年戊子二月廿八日（日記）町觸相撲取の下帯絹布にて仕間敷候屋敷方へ呼れ候共布木綿の下帯可仕事　一勸進相撲とらせ申間敷事など見えたり又同四年辛卯七月廿一日シコ名の異名を付候者有之候はゞ早々可申上候

シコ名

いにしへより相撲取候もの異名付候共向後は其名堅可爲無用事おもふに是はそのかみ男達どもが異名を付し故の事なるべし古も盜人に袴垂天竺冠者など異名あり是を（今昔物語）に字とありもろこし人の字の義にはあらず今あだなと云が事きかすまふ人には腹くじりなど云もあれど自稱には非ず人の呼るなるべし漢土にも草賊には異名あり宋代ことに多し（水滸傳）證すべしこれを渾名また綽號ともいへりすまふとりのしこ名即これなり

力紙

○力紙○（鷹筑波集）【五】相撲とりたのみやかくるちから紙【ちから神にとりなしこの作意なり】（續山井相撲）とる草葉や露をちからがみ【忠次】思ふに音は髮に伽羅の油といふものなく元結も文七などの堅くつよきものなければ青樓に登る遊冶郎など茶筅がみになる事みえたり【箕山が（大鑑）に茶筅がみ無禮なる物ながら遊所にはくるひて打みだれたるに引さきにてちやせんに結たるもよし云々】況や相撲取は亂髮になる事常に多かるへしそれ故にかねて紙をしごきもとゞりを結ひたる物と見えたり（相撲大全）化粧紙と號し正面の四本柱の左右の柱に釣置すまふ取これをつかひ用ゆ是は全く勸進になりて後初りしと推せらるなほ後考を俟といへり又力水とて相撲場の桶に水を湛おき力者に與ふ此

力水

事古より今に至る迄同様なり今は化粧水といふとあり右いづれも假粧は名に負ず假粧水ももとは力水といひしと思へば假粧紙ももと力紙といひしなるへし寶永中の俳諸に力紙といへるものこの紙なるへし後には元結にかくる事もせずなりぬるによりて只假粧ばかりの心にて呼かへたるにや

大家に扶持せらるゝ事

○（東海道名所記）に近江の國はむかしより相撲をとるもの多くて石部草津の兩宿より出合て相撲をとる云々大名かたに聞及ひ給ひて相撲の衆とてめしかゝへ給ひし今は天下此事すたれたるに似たり云々【稱名院御說に諸國の供御人をめし集めて七月に相撲節といふ事を行ひて御覽ずる也云々（年中行事歌合）にみゆ供御人とは粟津のさると今いふもの也地下のもの也供御なとしたゝむる故也とあり】大家に相撲取を扶持せられしこと其頃【承應明暦の頃】はすたれて又寶永正德ころはやりしなるべし

かたや

○かたやとは今いふ土俵の事也（今昔物語）【十一】種合語に關白殿もしのびて女車のやうにて杼より東の方の方屋の面に立て御覽あり（大友家記）に大友宗麟の家人原大隅守は日田永季以來の大力といふ或時上方より雷稻妻大嵐辻風といふすまふとり下りて豐後府内に於て勸進相撲を興行すこれらに勝もの一人もなし云々關相撲かれこれ七八人大隅がもとに來り相撲の手合を望む處に大隅家人を呼て大竹一本とり出させさらはかたやをつくらむとてかの大竹をひし〳〵とひしぎ引わりてもと末を一ツに扭合せ大きなる輪を作りこの輪より外へ踏出したるもの負なりと定むれば雷も旋風も目を驚しはやわれわれ負にてさふらふ我ら諸國の大力をも見候へどもかやうの力はいまだ見候はずとて歸りけりと見ゆ

褌

○褌　古はさらにもいはず文龜文正の頃までも角力とるに用ひしは麻布にて白或は茜染を三重又は二重にも結べりとぞ其後に至りては常人も純子綸子綾繻子などを用ひたれば角力には勿論なりさて次第に花麗を好みしが紀州まはし出來しより後土俵入に用る事として取に用るは別物となれり【（大全）に織紋縫もやうの風流は正德中に始り享保に盛なりと云】昔人角力とるに手綱を用るは常のたふさき三重などはまはさねばしかせしなるべし又昔の褌は前下りと云ものなし後の方をよつひと云ひ前をまへぼろと云ふ其形ほろに似たる故に云なるべし

唐衣四幅袴を賜ふ其後信長公秀吉公權現樣御時度々相撲相勤元和五年四月十七日於紀州和歌山東照宮御祭禮奉行朝比奈宗左衞門殿諸事申談相勤依之御刀一腰頂戴す十五代目追風に至り朝廷御相撲も廢絶せらるゝ故二條家へ相預万治元年より當家へ罷出元祿年中憲廟牧野備前守殿へ被爲成相撲上覽の時牧野藩士鈴木梶右衞門入門の御願有之將軍家上覽の式一通致相傳品々拜領あり元祖より拙者迄都合十九代相撲の故實傳受し來り當時諸國の力士どものゆるし拙者方より代々差出す寛政元年十一月吉田長左衞門」此書付をみるに其始祖とする吉田清林を相撲の行司に定めらるゝ事正史に所見なし其他も推て知へし

○(相撲大全)に野見宿禰の末孫とて今肥後國に現存してすまふ行司をなすといへれど古くの書付その事は見えず虛談多く流布せりと見ゆ

○(古事談)【六】に伊成弘光相撲の處一差仕て見候はむとあり一差といふ事舞などのみいふに非ず

○相撲の手は(山家集)ものゝふのならすすまひはおひたゝしあけとのしさりかもの入くひ(新猿樂記)內搦外搦亘繫小頭小脇逆手また庭翔心地手合氣色云々（異本曾我物語）股野は名にしられたる大力なれば人々面を合打たる者こそなかりけれ內からみ外からみ向ふからみ手斧かけ入蹴爪け逆手け腕組前亘後亘り走亘小頭掛たぶさ取胸反し辻膊肚取すまひの手は數を盡し云々（竹齋物語）あらしをひてしゆんれいやこきつねやけなべひんせうかすまふをこそははしめけれ扨すまひの取手にはさまたかへしによこたをし入くひさしくひはね返し大こしもとつめむかふつきまはりてかへすは車なけ四十八手の其內を百手にくたきて取たりけり【かゝれは四十八手といふ名目もいと古し（大全）にいふ古法四十八手より後人また工夫し出して手捌八十二手々碎八十六手合て百六十八手ありとぞ（後撰夷曲集）名乘ぬるは弓取なれやかちかたの鬮のすまひをうつほつけにて(且保)

裏鬮の稱號は今にも此道熟達の人々は聞傳へられける云々いへるは覺束なし先古へ鬮小結等の稱はなく二人づゝ撰まれしといへるも明證なし【思ふに古は左右に同位の最手ありしには有べからず最手占手は一人なるべし】彼高野川原にての時はいかなる故にかあらん正しからぬことにて不便利なれば次のたび正德には今の定めの如くなりし事としらるゝ又裏鬮など稱する事もあるまじき事にやこれは古への占手をうら鬮と心得たる誤ならむ鬮脇は古へも腋といへり（西宮記）の相撲の條最手額田成連與腋守治部利里決勝負とあり最手といふ事は（三代實錄）より見えたり又（西宮記江家次第）などに助手とあるも腋の事歟と（玉勝間）にいへり

江戸にて興行

○（そゝろ）物語もとよし原のさまをいへる處に勸進舞蜘蛛舞獅子舞すまふ淨るり（色音論）禰宜町にさこんがかぶきまひすまふとあるは慶長より寛永頃の事なりまた延寶ころの一枚繪に志賀之助相撲の圖あり【行司は木村喜左衞門すまひ人はかこ之助大竹などありめぐりに幕を張り上の方さじき男女見物の體】勸進とて佛寺などの建立修覆の爲に興行するのみにあらずそのかみは寄を勸むるをもて勸進といふなり（大全）などには彼勸化の爲にするをのみ勸進と心得たるにやそれ故干栄寺鎭守八幡宮再建の時を勸進相撲のはじめといへるなるべし

相撲故實

相撲行司

○細川家士吉田氏家說相撲故實聖武帝神龜年中近江國志賀淸林と云ものを召行事に定められてより其式委く相傳り多年相續の處節會行はれずなりて志賀も斷絕し後鳥羽院文治年中二度相撲の節會行はるるに及で行司勤むべき者なく拙者先祖吉田豐後守家次と云もの越前國に在て志賀家の故實を傳へしより五位に任ぜられ追風の名を賜り相撲の行司の家と定られ木劍獅子王が御團扇を賜り節會の御式勤しかども承久の兵亂より節會又中絕正親町院永祿年中相撲節會行はるゝ時十三代目追風久例の如く相勤元龜年中二條關白淸□公より日本相撲の作法二流なきの義にて一味淸風といふ御團扇幷烏帽子狩衣袴

〇（遺老物語）永祿巳來出來始し事種々ある中に相撲取はやることと見えたり

關脇

〇關といふ事古は最手占手左右ありみな免田を賜ふて勅許なりそれ故最手脇なとに昇進しぬる相撲は公家なほたやすく雌雄を決せられざる事（古事談十訓抄）等に記したり其後公にめさるゝこともやみて剛（ツヨ）强の相撲もありて廣く諸國の者と其力をためすこともたやすからず最手其外の位も私に定むへきやうなければその事絕たる也（著聞集）に長居といふ相撲畠山重忠と取て肩骨を碎かれたる事をいふ處長居は東八ヶ國のうちすぐりたる大力とあり今東西と分つはかやうにうちすくりたるの義なり前に引たる文祿古記に關を名乘といへる處をみるに勸進もとより定めて出るにあらず合手なき時名乘なりこれは昔武士の取たる時も一度出て勝たる者負るまでは相手をかへて取しこと也曾我物語など見るべし勸進もその定めにひとし

〇（日本相撲かゞみ）正德壬辰秋洛陽處士とあり此作者何人なることを知らずすまふは其かみ大內にて諸國の供御人をめしあつめ七月にすまふの節といひて仁壽殿の東庭にてめし合せて御覽あり供御人とはすまふを役としてつかへ奉る諸國の防人（セキトリ）なりこの故に今にすまふの長を關といひならはせりと此說通ぜず相撲を奉仕する人みな防人なれば其長たる人のみ關といふへからずその上（日本紀万葉集）等防人をさきもりとあり崎護の義なるへし海國の邊塞をも守らしむるなり故に島守（サキモリ）とも云り後世關といふは其義にはあらず關門の義にてこれを越るものなきをいふなり

小結

〇（相撲大全）に上古朝廷にて行はせ給ふ時は關に脇小結とも二人づゝ是を撰み給ふ勸進相撲になりても二人づゝありしなり千菜寺より二度め元祿十三年庚辰六月糺の東高野川原赤の宮にてのすまふ組を記すに寄方にも各二人づゝ勸進方にも各二人づゝあり三度め正德六年には一人宛になりたり其已前二

裏關

人づゝの時表裏になすらへ第一を關といひ第二に列するを裏關と稱しける立派（古今相違すれども此

申候哉若御望の方御座候はゞ只今御出候へ左あらずは名乘申候とよばゝりければ出むといふ人一人もなしかゝる處に鼠戸よりも暫く相撲を待給へ御望の方御座候と申程に行事共儀ならは早く御出候へと申ければ出にけり人々何たるいかめしき男なるらむと見る所に年の頃二十計なる比丘尼なり行事こは異なる人そと申けるは比丘尼申けるはさん候我は熊野邊の者にて候が常に若き殿原達の相撲を取せ給を見及候に因て人々取せ給ふが浦山しさに參りて候似合ぬ事にて歷々の殿原達幷居させ給へば恥敷こそ候へと申ければ芝居中是を聞て如何樣聞も及ばぬ不思議かな急き合せ給へといひければ立石申けるはかやうの微弱なる者は十人も廿人も一つまみ宛にすべきに爭か某おとなけなくも取へきぞ若小相撲の候はんに合せ給へと云ければ比丘尼聞ていや〳〵取程ならば勸進元にて上相撲を出し給へ左なくは取まじくと申す見物の貴賤是を聞て誠に面白し立石取れと一同に所望しければ力なく取にける扨比丘尼は帷子を脫て出けるをみれば島かるさんをぞ着たりける行事相撲を合する時立石大手をひろげてやつと云て搆へければ比丘尼樋と入て仰に突倒しける芝居中是をみて忙惚果てぞ褒たりける立石口惜く思ひなめ過て負けると思へば今度は小體に搆へてかゝる處に比丘尼樋と寄ければ立石弓手のかひなを取て三振ばかり振ければ比丘尼は後臑の追とりを取て俯さまにぞ投たりける芝居中は時の聲を作て笑ひけるほどに少時は鳴も止ざりけり其よりも伏石貫木荒波など出て取れども後は次第に比丘尼が投口は電光の如くに如何に取やらん目にも見えず手にもためず取たりける斯て相撲はこの比丘尼に鬪をとられければ芝居は則退散す其より又伏見にて勸進相撲ありけるに又この比丘尼出て取ふせけり醍醐大坂など迄も行て世に勝れたる大相撲といへばひろひける程に世の人是は唯ものに有まじと恐れ慄き奇代の事とさたしけりとあり怪談ながら是をみれば勸進相撲いつくにもありしなり此昔物語のさま見るが如し

しは此時迄にて其後聞えず公事には絶しかど世には猶さかりに行はれて鎌倉にて執行せられし事（東鑑）に往々見ゆ

勸進相撲　**京都勸進相撲**　**江戸勸進相撲**

○今の勸進相撲は（相撲大全）山州千榮寺八幡宮再建に付正保二年六月下鴨會式の内十日が間興行す是京都勸進相撲の起りなり江戸は寛永元年明石志賀之助寄相撲と名付四谷鹽町にて晴天六日興行す是はじめなり【四谷しほ町と云は志賀之助にはあらじ寛文元年丑十二月廿六日諸見物事法度内に勸進相撲前々より町中にて御法度候間彌其旨相心得町中にて爲致申間敷候】江戸勸進すまふ寛永とあるは寛文の誤なるべし延寶年間板行の一枚繪に志賀之助相撲の體あり行司は木村喜左衛門其外相撲取かご之助大竹など名をしるしたり惜むべし紙やぶれて志賀之助と取組たる角力者缺たり此内大竹とあるは（角力大全）に古人を擧たる中に丸龜柴とありて大竹彌五太夫の名あり是にやあらん又延寶中の書卷物に京都四條河原の圖あり其内に丸山仁太夫がすまふあり此仁太夫と志賀之助京都にて上覽相撲ありて云り其時夢の市郎兵衛といふ男達を志賀之助伴ひ行たりしは喧嘩あらん事を恐てなり志賀之助仁太夫に勝てけんくわもなく事故無りしは市郎兵衛が功なりと（俠客傳）にいへり

大坂勸進相撲

大坂は元祿五年袋屋伊右衛門と云もの南堀江高木屋橋筋立花通にて興行すと云りされ共神事などには昔より何方にも絶ずありしなり（職人盡）【甘露寺また鶴岡等也】歌合に見えたるすまひ人みな是を業としたるもの也やゝ古くも京都に勸進相撲ありしと（義殘後覺）【文祿五年に出たる書也】京伏見繁昌せしかば諸國より名譽の相撲ども到來しける程に内野七本松にて勸進相撲を張行す勸進本の取手には立石伏石荒波岩崎反橋藤瘤玉葛黑雲追風筋金貫木抔を初として都合三十人許ありけり寄には京邊五畿内扨は諸國より集りて捕けれども流石に勸進相撲を取程の者なれば何にても取勝けり寄手の人々には口惜き哉如何なる人もあらば求めて取合せ度こそ存ればと抔議してある處或日立石關にて出る時行事申けるは御芝居に相撲は盡

かたや、褌、力紙、力水、櫛、假粧、髪の結ぶり、四ツ辻、前づけ、勝負つかざるをわかれといふ、興行日數、大漢、座頭すまふ、女すまふ、辻すまふ、ひとりすまふ

相撲
相撲節會

○すまふの事は（垂仁紀）に宿禰蹴速の捔力より後（皇極紀）に命健兒相撲とあるを始にて相撲節會を行はるゝ事毎歳七月に諸國の供御人を召て先内取あり【右は右左は左と取る今いふ地とり也】さて召合ありて後拔出【昨日召合の内を拔出してとらしむる也（拾芥抄）は日數相違す】あり其式は（内裡式、江家次第、雲圖抄）等に委しく見えたり最手占手助手相撲長立合（タチアハセ）等の名目あり今の稱にていはゞ最手より助手までは關より小結の位なるべく相撲長は頭取立合は行司なり（玉勝間）に江家次第にすまひの事をいへる處に犢鼻褌上着狩衣差紐と見え（古今著聞集）には烏帽子袴など着ながらすそをくゝりてとりたりしやうも見えたり然るに（榮花物語）根合卷にははだかなるすがたどものなみたちたるぞうとましかりけるとあればむかしより裸にてとりしにこそといへり今おもふに狩衣など着るはいまだ相撲とらざる内の儀なるべし又平日人の家などにて試にとる事などあらむにはすそを括る迄にて裸體に及ばざる事もあるべし昔相撲人は其わざを業とするもあるべけれども大かたは力つよき武士のわざと見えたり（曾我物語）にさすかに股野はすまふの大番つとめに都へのぼり三とせの間みやこにてすまふになれ一どもふかくをとらぬものなり其故に院内の御目にかゝり日本一ばんの名をえたるすまふ也云々また同書におの／＼酒もり海老名の源八いにしへを思ふにひでさだがわかざかりにはたかがり川がりのかへりあしにはちからわざすまふがげこそおもしろけれわかき人々すまふとり玉へみてあそばんけんぶつにはうへやあるべきと云ければ

最手
占手
助手
相撲長
立合

日本一

童相撲

○童相撲は（三代實錄）に見えて淸和の時に始るまた相撲の節は（著聞集）に安元より以來絕て其名のみ聞く口をしき事なりと有按るに（源平盛衰記）承安四年七月廿七日相撲召合あり大内にて行はれ

兵法の手

○(室町日記)【二】冷泉民部少輔討死の處活人劍殺人刀向上極意の妙劍十字手裡劍杳はう身などいふ兵法の術を盡しきつて廻り給ふ云々(似我蜂物語)兵法の手に右甲滿字玉簾亂除飛除半開半合清眼村雲な

眞妙けん

どいふ太刀を稽古する人あり其内に眞妙劍といふ太刀ほと何共ならぬ事かなとて明暮精に入つかふ師匠云道得さるも三十棒道得るも三十棒いかんか不犯を通ぜん咄(トツ)眞妙劍といふは此語の如く名有て形なき太刀なり言句にもまねにもならぬ練磨の所侍る諸事万端の稽古至極の所あるべしさる程に念流の兵

懸聲

法に大雲といふ太刀懸聲を咄々とかけゝる是も至極の所にやといへり禪意をかりて名つけたるもの多しと見ゆ

斜に構る

○(安齋隨筆)にしやにかまへるといふ俗語劍術より出たる詞なり立て刀を提け兩手に柄を持刀をすぢかひになして向ふを斜に構へると云なりかやうの事何のわけも知らずして人なみにいふと多し扇をしやにかまへ其外何にてもかまへる物ある也さもなき空手にいふはいかゞといへりおもふに空手にて正體に居らず筋かひにかまへたらんは斜にかまふなるべし(葉子譜)【(廣百川學海)癸集に收む】刻畫品の骨牌に斜眼また斜齒といへるあり其圖を見るに牌の緣の黑き處上下にすぢかひて星あるは斜眼なり齒のかたも筋かひたるは同じ斜といふ事是にて明らかなり

生兵法

○(貞德文集)富田柳生實手無殘所御遺覺云々天狗之自由程無之候者御愼肝要候生兵法は大疵基と申諺御座候一笑々々(犢草)なま兵法大疵のもとひとかや何にてもよきほどこそあらまほしけれ(吾吟我

逃る手

集)なか〳〵にやめようさぎのなま兵法いぬにかまるゝ疵のもとひぞ(俳諧三疋猿)逃るといふか兵法の奧といふ付句あり是も諺なるべし(獲絨輪)に見せ男先三ツ指て詰ひらき兵法自慢傳受逃け處(冠角)

武事【二】相撲　勸進相撲、關脇、江戸にて興行、相撲の手、大家に扶持せらるゝ事、

はおもひ〳〵なり手負はてまたきわざは鎗なりとて大略やりを持と云うでもあるわか者はやりにてはねけたるわざはせられず五き十き追まくり立て行もをつとり込て打やぶつて出るにも大ぐそくはよし云々とてわかき衆は大りやく大だち大なぎなた也

千人ぎり

○因に云千人ぎりといふ事何によりていひ出たるかと問へるもの有しに答云われもそのかみ専らいひし事と見えて謡曲外百番に千人伐ありて詞に云あふくま川の源左衛門と申人行衛もしらぬ人に父をうたせ其無念さに千人きりをさせられ候云々扨そのうたれたる處はいつくの程にて候ぞ【狂言】此さきに石橋の候其所にて候とあり又（秋の夜長物語）山門三井寺合戰の處千人きりのあらさぬきかなまたの悪太夫八方やふりのむさし房などもいへり（續五元集）【中】心をつむとて消し提灯出あへと千人きりを呼ふらん【晋子】

鵜丸の太刀

○天野信景云鵜丸の太刀は濃州久々利の人土岐悪五郎が太刀也悪五郎は天文頃の人なり土俗云悪五郎京五條橋にて千人切したりし時此太刀川へ落しけるを鵜二羽くはへて上りし鵜の嘴のあと殘りし故鵜丸と名るといへり野話此頃多しそれより代々傳へて土岐氏が寶とす久々利の城主土岐三河守を森武藏守亡して其太刀は同國金山にあり今の兼山なり武藏守かの太刀を同所地藏院に納めしが奇怪の事ありし故森中將忠政天神宮へ奉りける依て代々出口家の藏にありとなむ

劔術の師を和尚といふ

○劔術の師を和尚と云事（鹽尻）に興福寺に地藏院といふ僧あり此僧代々鎗を業として人に敎へ東武にも參り鎗つかふ弟子毎に多く集る其門人師を呼び和尚といふ今他處にて僧ならぬ者の劔術馬藝など敎ゆる師をも和尚と呼もと寶藏院より風をなせりとぞ是もさる事なめれど師たるものゝみにあらず傾城にも和尚ありたゞすぐれたるをいふ俗語なりそはむかし禪宗行はれてより俗人好みて佛家の語を用ひしが今に殘れる事いと多し

ず俗家にては調度といふ武家には弓矢を專一とする故調度と云今世は鎗を道具と稱するも古に同じき意なりと有されどひろく道具といひしも近きとにはあらず辨慶が七ツ道具といふたぐひみつべし（寶倉）熊手の條武藏坊辨慶が七ツ道具の名にこそおへれ（冬草）に辨慶が七道具と名付て鉞鋸槌鎌くまでの類を背に負たる形を畫けり此七ツ道具のと（義經記）其外古き物語等にもみえず（諸書當用抄）【北畠家の記】云七ツ道具といふ事先具足同かたな同太刀同矢をふ也同弓持同ほろかくる同かぶとをきる也是を七ツ道具或は七ツ物といふなり他流には太刀二振長刀などやうあまた持事といふおかしき事也と見えたり然れども辨慶が七ツ道具其品これと同しからず按るに（義經記）【住吉大物二ケ所合戰の條】むさし坊は弓矢をも持ざりけり四尺二寸有けるつかしやうぞくの太刀はいて岩とをしと云刀をさしゐのめほりたるまさかりなたかまくまでを舟にかちりひしりと取入て身をはなさず持けるものはいちゐの木のばうの一丈二尺有けるにくろかねふせて上にひるまきしたるに石つきしたるを脇にはさみて小船のさきに飛のる云々此物語によりて色々の物を七ツ道具といひて背に負へる處を畫くなるべし（義經記）には背におひしにあらず舟にとり入しなり【已上冬草】舟に取入たるも常に持たりし事しるし辨慶はともあれ七ツ道具負へる事は（續狂言記）【朝比奈地獄に至る狂言あり】朝比奈七ツ道具を背負て出閻魔と力を競べて勝により七ツ道具を脱(オロシ)て閻魔に持せ供につれて行とを作れりこれそのかみ七ツ道具を背負ひしとあれば也（太平記）畑六郎左衞門の條或は大鎧に七ツ物持時もありといへるは種々の物を持て敵城へ忍び入とをいへり（荒山合戰記）爰に般若院は大剛の惡僧にて度々の合戰に名を顯したる兵なれば其頃の俗異名を付て今弁慶とぞ申ける誠に諸人にすぐれ色黑く長は六尺三寸云々指物には鍬鎌熊手鋸鉈鳶嘴等の七ツ物取付云々見えたり（續山井）さす花や七ツ道具をよろひ草（未翁）

○（鴉鷺合戰物語）は文明八年の奥書あり一條禪閤の作といへり軍のてたての條さて自餘のもちぐそく

やゝもすれば諸流と威勢をあらそひ仕合喧嘩の中立となりける此事停止なり今静謐の御代なれば其家ならぬ外民間に於てはしらぬこそよけれ」寶暦ころ俳諧の宗匠しける舊室といへる者おどけたるものなりし麻布邊にて劍術けいこするを見て案内を乞て内にいり何とぞ一本つかひみたく所望せしをことはりしかど達て申ゆゑ據なく立會しに舊室はもとより何もしらぬ者なれば只一打に頭をうたれて早く座敷へ上りさて／＼痛きめに逢候とて五月雨にうたれて開く百合花とかいて歸りぬ知るものありてこは舊室なりとて笑ひけり

亂破

○戰國にはらつはといふ盗人を多くめし置て敵を冐す事あり（五代記）に氏直亂破二百人扶持し給ふ中に一の惡者あり彼が名を風魔といふ同類の中四頭あり山海の兩賊強竊の二盗なり【又云此亂破我國に有る盗人をよく穿鑿して己は他國へ忍び入山賊海賊夜討强盗その調略凡慮に及ばず道の品こそかはれ武士の智謀をめぐらし他國を切て取も又同じ云々あり淺ましき事ならずや】といへりこれよりやがて戰船を海賊といひならはせり

戰船を海賊と云事

弓取

○（秋草）鎗の條に古代の武士は弓矢を以て働し故武士を弓矢取といひしなり信長秀吉の頃より專ら鎗を以て働き一番鎗を以て武功の最上とする事になりし故鎗を稱して道具といふことになりてかりそめの出行にも身をはなたず鎗をもたする事になりたる也古は侍を弓取といふ今の侍は鎗取といふべきか鎗持といふべきかこれら古今の變なりといへり【但この前文に（武雜記）にえほうし上下の時長具足持べからずとあるを引て鎌倉將軍より京都將軍の時代に至る迄鎗を持すること無之といへるは非なり（奇異雜談）に應仁の中頃間主の手鎗を持て供したる事みえ（守武千句）に花見に鎗をもたせたることもみゆ】

鎗取

道具

○同書又云道具といふ名目は古は僧家の詞にして【（釋氏要覽）云中阿含經云々】俗家にての詞にあら

迄も修行仕り手合を見候へ共我にあはするものなし故に西國かたへ兵法修行に罷下り候也云々【是は宮本武藏が播州明石に住めりし時そこに此者訪來て兵法を試み武藏が弟子となりしとあれば慶長元和の頃にや】（誰が身上）【三】馬鹿氣なる町人其子にかくし藝なりとて兵法を習はする處きるものにもよのつねのかたこもんはつけず下がへにはきねにつかるゝなどかけちらしかたきさには南無妙法蓮華經などはねまはり大わきざしのおとしざしたびんすりさげかき頭巾目のてりわるにも鐵子(カネコ)杖たま〱つかふことばさへ關東兵のごとく也このありさま他人の目にあやりおやの耳にも入しかば云々

長柄刀

○關東に長き刀はまりし事（北條五代記）鹿島の住人林崎勘介といふ者明神の示現により長柄刀の益ある事を悟りこれを用ひ始て田宮平兵衞成政といふ者に傳ふ成政長柄刀をさして諸國兵法修行し柄に八寸の德みこしにさんぢうの利其神妙祕術を傳へしより以來皆人これをさし給へり成政が兵法第一の神祕奥儀といつぱ手にかなひなばいか程も長きを用へし勝と一寸ましと傳へたり云々扨長柄の益といつぱ太刀はみじかし長刀は長過たりとて是中をとりたる益なり（おもふにそのかみ柄の短き長刀あるもかゝる爲の故とみゆ【（鴉鷺合戰物語）大太刀の利をいふ處おつとりのべてちやうどうつにもびんぎによつてかつはとつくにも柄は長きが吉く候弓はいさゝかも手にすぐれはいたつらもの也大くそくはちと腕にあまるやうなれどもあつかはるゝものなり】北條氏直時代まで腕貫うつたる長柄刀を帶たりとぞ

かぎ鎗

○（北條五代記）當世はかぎ鎗とてくろがねを長くのべかぎをしてやりの柄に十文字に入其先に小じるしを付柄にて人を突べき威風をなし給ふとあり

○伊藤一刀齋は劍術を弘めんと諸國を修行し將軍家より召されしかど猶遊歷修行の志あるよし申て門人小野次郎左衞門を吹擧しぬ（人倫訓蒙圖彙）にむかしは囘國修行の兵法者あつて盛に是を教弘めしが

などいひて鹿島の住人飯篠山城守家直兵法の術を傳へしよりこのかた世上に廣まりぬ此人中古の開出なりまた【七】天正のころほひ常陸國江戸崎といふ處に諸岡一羽といふ兵法の名人あり古へ飯篠長威入道にも劣るべからすといひならはす云々またむかし下總香取に塚原木傳といふ兵法者ありしが是希代の名人末代に於て木傳が一ツの太刀といひならはせり太刀の名さま〴〵ありといへども極る處は一刀と知られたり但し一刀としるといへども稽古なくしては本分の位に至りがたし（狂歌咄）に尼子下野守晴久の家に杉坂角彌とて才覺すぐれたる侍ありト傳一流の兵法に名を得て門人多しといへるト傳は塚原木傳なるべし

とつたり

○トツタり（上野國群馬郡箕輪軍記）永祿四年十二月みのわの城を信玄これをせめ落し内藤修理之助に預る處此度預り候侍共在々處々の取傳の侍共呼出しみのわの城の番兵とす【取傳は其居住の地を取り傳なるべし】土御門泰親卿（東行話説）に市場村の橋を渡り山中村を通りて見れは早繩あるは網早繩貫くされ錢さしは入ぬかとす丶む此方は取たの術をしらねば早繩の入目なくおあしそへても召れかたし

武者修行

○武者修行（室町日記）義輝三好を討る丶處今度は丹州の兵どもそのうへ方々に隠れ住ける牢人または武者修行にまかり出て暫くの間方々に滯留しける武士などを撰あつめて云々（羽尾記）に上州吾妻郡羽尾といふ山里に羽尾入道何某といふ侍ありその三男海野能登守新當流の兵法をよくこ丶ろさし力百人に對し勇猛の侍なり己が勇の人に勝れたるを以て兄弟親族をかへりみず古郷を去て兵法修行に出る尤到る處毎に武勇名譽をあらはす【此人永正四年に生れ天正七年に死せり】（海上物語）【明暦二年刻】器量人に勝れたる大男折しも六月のとなるに羽二重のひとへ羽織に大なる朱の丸を付肩先より帶し迄に兵法天下一日本開山無双權之助と金を以て書たるを着たり云々さて申けるは關八州は不及申奧

らひ折々通ひける寛永十五年肥前島原一揆の時に武藏黑田家の幕下へ見舞のため島原に行むとする時かの遊女がもとより旅立するを人々送りたる也さて此柔氣といへるはやはらの術なり武藏が書るやはらの名目は先に余が（雜考）に載かゝれば（和事始）などに柔術は陳元贇より始るといへるは妄なり元贇がこゝに來りし万治二年より武藏が歿にし正保二年は十五年ばかりも先なり又慶長頃とりてゐあひはやるとりでは即やわら也ゐあひは今のごとく太刀拔わざをいふは（人倫訓蒙圖彙）にもゐあひとりてと并へいひて柄に手をかくるより拔いたす遲速によつて勝負こゝにあればいかで學びずしてあらんやといへり諸流多き中に關口流其名高しされどもゐあひといへるは今いふ柔術なり貞德が（油滓）にふぐりをしめてきいめかせけりゐあひする物にはならぬ相撲取とありしからは上に引たる草子どもに居合やはらといひとりて居あひとあるはいづれにかあらん思ふに居合はとりでにも太刀拔とにもいふべきとしらる

○延寶の頃かしんとて居合やはらを見せものにしたるもの葺屋町にありし古圖に見えたりこれは今の如く長き刀を拔しなるべし近時の松井屋源左衞門などの如く藥など賣たるもの歟（万歳諸用日記）【寬延元年の反古にて表紙うら打したり】拔合之法關口多田片山之諸流皆其法具り申事にて候其內大口流の居合刀は木刀を仕込申候所作少き物にて候故世上に曲拔とて三方にのり一丈の刀申取仕或は襷掛など申類は一ツも役に立不申候拔合はたゞ鯉口のはなれ一種にて指て外に子細無之由に候同書棒の手舊法八角に作り八尺にいたし筋金入鐵の疣子を末四尺の間に打これを金さい棒と名付剛力の所作に仕候其後山科流と申は櫟の木にて六尺に作り用候へ共利方宜からず候故近代捨りて今は邊土の順禮の所持に罷成候棒遣候儀用捨可有之候

棒の手
金さい棒

鹿島香取の兵法

○昔より上野常陸等の國は武術を好みし處なり（北條五代記）【四】兵法の起りは鹿島の神に始るよし

〱つわとつてやちむまかたらばなをよかろこまをはやめて、俗に父をおやぢと云やぢは上略也牡馬一名父馬と（事物紺珠）などにみゆやち馬これなるべし【今諺にやち馬といふは人の尻舞する者をいへり老馬の用に立ぬ意より轉れるか但し尻馬にのるといふを誤しにや】因に云木馬は鞍懸といふ（寶倉）に鞍懸はもと鞍をやすむる具なり猶たくましう作りたてゝ障泥をかけ手綱をつけて鐙のおりのり鞭のあてやうをもならはせりこれ世に所謂くらかけの馬なり此器の四足つよく物を乘するに堪るを借りてなへて人家のふまへ物とすといへり踏臺の大に高く造れるを今も馬といふは是故なり

木馬

打毬

○打毬の戯は昔は江戸にて行れたりと云ふ今も奥州白川の諸士聚て赤白の毬を打小門を設て打入先後相爭て勝負を極むこの戯唐土より傳へしなり張直佐（打毬儀注）一卷また査同（打毬要略）一卷あり此等を考へてなすへし

居合やはら

○居合やはら（浮世物語）【淺井了意作明暦万治ごろ】ゆく〱は渡り奉公歩わか黨にもなさばやと思ひ居合やはら兵法なんどおさなきより手なれさせ云々（悔草）【正保四年版】我などはやはら取手や捧などをあらまほし云々（一代男）【天和一けんぼうといふ男だて其頃はとりでゐあひはやりて世の風俗も糸びんにしてくりさげ二筋かけのもとゆひ云々けんぼうは宮本武藏と鬪し吉岡氏なるべし慶長ごろのことと聞ゆ

柔氣

（洞房語園）に市橋如見といふ者の書たる（柔氣目錄序）を載て云右柔氣目錄序は先師一橋如見齋より予が祖父玄意齋に傳へ玄意是を澤道智に傳へ道智より予に傳ふる所なり云々いへり此書作者庄司道恕が祖父甚右衞門は正保元年六十九歳にて身まかれり如見はこれが師にてありしなり宮本武藏と同時の人にはあるべけれど如見は年齢まさりたるべし原本（洞房語園）に新町野村玄意は其頃かくれなき柔術一流の名人市橋如見齋が弟子にて宮本氏とは懇意なり江戸町二丁目山田屋三之丞角町並木屋源左衞門は共に宮本が弟子也右三人殊に餞し首途を祝し送るとあるは其頃武藏遊女雲井にかた

其涯分に過たるか其故は大炊御門の河原に於て景能八郎が弓手に逢八郎弓をひかんと欲す鎭西より出給ふの間騎馬の時弓いさゝか心にまかせざるか景能は東國に於てよく馬になるゝ也ていれは則八郎が妻手にはせめくるの口を相ちがふ弓の下をこゆるにをよんで身にあたるべきの矢ひざにあたりをはんぬ此故實に及はずんば忽命をうしなふべきか勇士はたゞ駿馬に達すべきと也壯士等耳の底に止むべし老翁の說嘲哢するとなかれといふ當座みな甘心す

○大坪道全は將軍義滿公の命をうけて辰の刻に京都を乘出し吉野山の櫻を手折て腰の花籠に入て午の刻までに往返二十六里を乘て歸りしは奇代の名人と御感にあづかりしとかや後世すくれたるは備前の藩士市森彥三と云もの年頃の心願にて江戸芝なるあたご山のをとこ坂六十八段を馬上にて登り下りしたりとなり享和ごろ此らの術とは異ならめど予が若年の時兩國廣小路などに出てみせものにしたる源太郎と云ものゝ曲馬をみしに高き階子をかまへて登る時は鞍の上に直に立下る時は逆立したり熟したるもの也

的顱

○的顱といふ馬は額に白點あるを云と【通俗三國志によりて也】心得て繪などにかけり(蜀主先主傳)に(松之世語)を引て劉備的顱に騎て檀溪を渡る事を云て孫盛曰此不然之言備時羈旅客主勢殊若有此變豈敢晏然終表之世而無釁故乎此皆世俗妄說非事也といへり又的顱は(晉書)庾亮傳初亮所乘馬有的顱殷浩以爲不利於主勸亮賣之亮曰有己之不安而移之於人浩慙而退さて(字彙を)みるに的顱馬首飾又呼的顱紅點也又黑也など見えたり盧は黑きをいへば黑點といへる然るべき歟いづれにも白點にはあらず

やぢ馬

○やち馬(松の葉)【馬かた小唄】はるはごさせのおつゞら馬よ〳〵あけ七才のれんせんあしげにさゝなみくつはをとつゝけておしかけざんまいはりゝんしゝ日本一のやちうまかたらばなほよかろかへして

に砂を敷せられし馬場にて御代々改めざる場所なれば願ひ不屆なりとの事のよし（明良洪範）にいへり【此書誤多ければ信じがたけれどもいづれ古き馬場にては有なり】これらの處に借馬あるを戲に借て騎る者あり明和二年（川柳點）の句に衆ならひ口をはなすと土手を喰（沙石集）に或人歌と持ての外たるまをはする人をこそのり知らすといふへかりけれ達磨を破するは駄馬を走るににや法は乘なり

曲馬

〇曲馬（甲陽軍鑑）【十六】關口とて馬のりの上手あり曲乘は本の事にあらずといへども是は一入重寶なり一丈二尺あるがけを飛おろし横一尺五寸の土居のうへをも早道或はいつさんをのる貫の木通又は板屋の上を早道に乘る其外あら馬强馬を乘て馬の藥飼まで上手なれは關東奥にも此關口ほどなるはなし

鬼かげ碁盤乘

俗說に小栗判官といふ者鬼かげといふ馬に騎て棋盤をものりたりといへり小栗がとは（鎌倉大草紙）にも出たれ共鬼鹿毛といふ馬のとはみえず是も（甲陽軍鑑）【一】武田信虎公祕藏の鹿毛の馬のたけ八寸八分にしてかんかたち譬へば昔の生食摺すみにも劣るまじきと近國迄申ならはせば鬼鹿毛と名付と見えたり俗說は是をとりて彼名としたりとみゆ碁盤のりといふとも有とみえて（續山の井）くらべ馬も一もくさんや碁ばんのり【目筭は碁のかけ合せなり競馬の句ながら碁ばんのりに作りたり】

〇其かみ關東人は馬をよく乘しにや（北條五代記）結城秀康卿北條家の舊臣を尋て多く扶持せられしとの條秀康卿仰けるは關東侍は馬上にて達者をはたらくよし聞及ぬさぞつよ馬を好みつらん朝倉犬也承て關東さふらひあながちつよ馬をも好まず候唯自力に叶ひたる馬をもつはらとのり候愚老舊友に伊藤兵庫助と申て馬たんれんの勇士ありしが或時口すさみに大ばたに大立物につよき馬このまん人は不覺なるべしとよみ候馬下手のつよ馬このむをみては馬にはのらで馬にのらるゝと申候むかし賴朝公の御前に諸老候ずる砌仰によつて各往事をかたる大庭平太景能保元の合戰の事を語る勇士のしゝめ用ゆへき物は弓矢の寸尺騎馬の學びなり鎭西八郞は我朝無双の弓矢の達者たり然れ共弓箭の寸法を案ずるに

五里ばかり秩父の方なりこゝに兒童の戯に石を抛合ふことあり細き麻繩を長サ一尋半或は二尋ばかりにして中程五六寸が間を三筋に取兩端を結ひとめ三筋になりたる處の正中に小石を載せ繩の片端は右の手の小指に結ひ今一ツの端をその手に取て肩にかけ繩に載せたる石を左の手掌に居へ後の方へ投越すを右の手にて二ツ三ツ打ふり向ふの目當の方へ抛る時繩の端を放てば石は飛行き繩は片端小指に結ひ留たれば手に殘るかくすれば石の飛ぶこと極めて高遠なり手練熟したるものは格別なり是を名付て雁殺(ガンコロシ)といふ雁などをうつにや勢のするどきに依て名づけしなるべし（年中行事）の繪卷物稻荷祭の處に童部が手に持たるは麻繩にて石を抛る圖とみえたり竹の割ばさみにはあらず

鵰殺し

せめ馬

○せめ馬【借馬】（色音論）にやう〱ゆけばこくちやうの末はばくろ町とかやさふらひあまたうちつれて云々みなせめ馬と打見えてかけ足ぢみち一りうの手綱のひみつ鞭のきよく心の儘に乘つれて云々馬を乘ならすを責るといふ（夷曲集）に淨土宗日中のせめ念佛を【宗恒】きせんくんしゆのりの場とて市なせるうまの時々せめ念佛かな【せめ馬と作りたるなり】（續五元集ロ）をとらせて責ならふ馬、斯參れ目にて仕はむ新參【是は止動方覺の狂言の心なるべし】馬場は（江戸鹿子）に湯島新馬場といへるは天和二年壬戌に出來る故新馬場といふ（江戸砂子）に櫻馬場といへる是なり又（江戸砂子）に木挽町四丁目廣小路新馬場とあるは最遲く出來しなり享保三年十二月廿三日木挽町松平釆女正殿上ケ地同續木挽町四丁目跡幷河岸共ニ町方御支配に成候ニ付今日請取方出役水野傳六荻野助八幷に下役三方手代地割三右衞門（紫一本）博勞町此町名主高木源兵衞富田半七と云則御公儀の博勞なり云々此馬場は以公命土屋忠兵衞繩張ㇱ長四町餘追廻ㇱ馬場なり御小姓組御書院番大御番日を定ㇾ組ツヽ乘頭々見分あり馬喰町の馬場は江戸の中にて最もふるき處と見えたり寛文の頃車力重右衞門といふ者この馬場を町家にせむ事を願ひしに是は關東御打入の時御見立有て七尺地下にかきがらを五尺突込せて其上

馬場

櫻馬場

馬喰町の馬場

頃も猶田舍には此事ありしなるへし
○祝儀に石打のことあるは神事より起る總て此條はさきに雜考の中に洩らしゝ事また其時おもひ誤りし事のみを擧たれは先に引たる書どもははぶきていはず合せみて知べしいんぢ鑓を員數やりならんといひしもわろし（平家物語）なとにて考ふるに後世野武士やうの者をあざけりて印地といひしと思はるそは兵具などもとゝのはずはかゞしからぬはいんぢ鑓といふもかれらが持し物なるをいふなるべしかすやりにはあれどいんぢを員數といひたるわろし曉月坊の歌の事はある狂歌師に欺れて新撰狂歌集に出たりといひしも非なり（きのふはけふの物語）【上】定家卿の弟きやうかくばうとの外ふへんにて年のくれにていかの卿へよみてつかはされけるきやうかくかしはすのはてのそらいんちとし打こさむ石ひとつたへ返し定家が力のほどをみせ山とて石をふたつに割てこそやれ此の返歌に米一たわらそへてつかはされけるとぞ【三井寺敎月房は（沙石集）に見え淸水寺敬月は（東鑑）にみゆこれは（作者部類）に京月或は鏡月ともあり又このきやうかくばうを（古今夷曲集）には曉月坊とあり】
○（唐國史補）【中】德宗晩年絕嗜慾、尤工詩句、臣下莫可及、每御製奉和、退而笑曰、排公在、俗有投石之兩頭置標號曰排公、以中不中知勝負也、とあるも石打の戯れ也印地とはいたく異なるものにて拋甎の類也梅堯臣拋甎の詩あり先に引たればいはず又童の戯に石瓦を水中に投て水を縫ふやうに飛するをちやうまやると云を打瓦とおもへるもわろし水馬を（物類稱呼）に畿內にて水すまし又かつをむし江戸にててふま云々あり是は大なる蚊に似て足高く水上を走る蟲なり小兒これをあめんぼうといふは捕へてこれを嗅に飴の臭氣あるもの也故に西國にてはしやうせん【地黃煎にてあめのこと也】ともいふさてちやうまやるはこれにて石の飛さま蟲の躍るが如く又その蟲を追やればなり

ちやうま

○（望一后度千句）やりくらをしつの男の石つぶて麻の衣の肩を脫けり武州寄合（ヨリヒ）といふ處は熊谷宿より

刀或謂菖蒲刀以其狀之相似准節物而稱之兒輩横腰間端午石戰戯後多以斯刀相戰是謂菖蒲切と今端午に童とも菖蒲の葉を打組て是をしやうぶうちといふ是もとは互に打合ふために作りたるもの歟菖蒲おのづから勝負の音に通へり古き【寛永發句帳】にけふは印地のしやうぶ刀かな（甲陽軍鑑）【二】天文ころ五月菖蒲切といふ事あり是印地なり（見聞集）に角田川は武藏と下總のさかひを流れぬ河中よりこなたには石ありあなたはみな沼なり爰に淺草の童ども下總に石なきことをあなどり笑て五月になれはいんぢせんとて舟に石を拾ひいれ河向に見えたる牛島の里の汀へ舟をさしよせ牛島の童どもをつぶてにて打勝て笑ふ古歌にうなゐごかうちたれかみをふりさけて向ひつふての袖かさすなりとよみしは此事かと思ひ出せり去程に牛島のわらはこれを無念におもひ常に武藏の石を拾ひぬすみ置き五月淺草の子供例の舟に取乘來る時牛島のわらは岸根に出ていんちをする其岸へ打たるつふて頓てこなたの岸へよると語る愚老聞て云々武藏の石下總の地にとまらすかくの如くの國さかひを如何なる人かよく知て分られたることの不思議さよと云り【（落穂集）老人の物語に淺草川は只今の通には無之汐干の節は殊の外川はゞせまく流候故川向の子供と此方の子供と川端に立向ひ石つふてを打合申たる義にて候かいつとなく只今の川はゞになるといへる永祿ころのことと聞ゆ】また（醒睡笑）落書條に妙心寺の金藏主といふもの加茂の競馬を見物に行て歸る時印地のある處にて負る方をひいきしつよみ過て鎗につかれたりといふことあり麁末なる鎗を印地鎗といふもかゝる處に用るもの故なるへし（紅梅千句）永き日にふしんの者が印地して内裡のうちに大かたなぬく延享四年坂部胡が兮（到來集）世に印地今は闇の夜の斫かな（大坂舍水）この事制せられて止みしころ也（五節句）といふ俳諧書【貞享戊辰】予童部の頃迄三條五條の川原にて礫打是も騎射を學ふと也果は小弓をもて射るといへり（口寄草）といふ前句付【元文元年】ひかへこそすれ〳〵敵味方沼の匂ひの鉢卷し【菖蒲を鉢卷にしたる印地の體なり】此

畠水練

○（太平記）宮方京攻の條白引の精兵畠水練の言ばに怖る人非じ

つぶて

○つぶては（万葉集）【八】憶良が天河の歌に多夫手二毛投越都倍伎天漢徹大而禮婆可母安麻多須辨奈吉（略解）云たぶては飛礫にて今つぶてといへり語のもとは手棄なるへしうてはすつるといふ古言也といへり是は手にものをつかみて投る事なり

はじき石

○拋石は綱にまれ竹にまれ石を飛すへき物にて按る也ことに軍器に用るは別に其器ありと見ゆ又つんばいといふは此はじきと異なれどもみなつぶてと通はせていふ（寛永發句帳）貞德が句礫にて花の鳥うてすはい拋これつぶてをつばいといへり又同集打みればいしさうなれやすはい桃といふも同じ又ふりつはいともいふ云也（獨吟千句）やみ／＼とうたれにけりな花の雨松に礫をふりつばい桃住吉や三月三日印地して軍中には必用の場所ありとみゆ（甲陽軍鑑）【十二】松山城責に水の手をせむるに飛礫にて乘取是矢鐵炮なりかたき所故也云々【つむばいふり／＼の條にいふ可併考】

石打禁制

○石打を禁制の事（東鑑）【五十二】文永三年四月二十一日甲乙人等數十人群集于比企谷山之麓自未刻至酉刻向飛礫爾後帶武具起鬪諍夜廻等馳向其所生虜張本一兩輩被禁籠之所殘悉以逃亡關東未有此事京都飛礫猶以爲浪藉之基固可加禁遏之由前武禪室執權之時有沙汰被六波羅畢況於鎌倉中哉可奇云々

印地

○印地は（加多言）【二】印地といふへきをゐんぢんといふは如何飛礫をうち侍る場の陣場に似たるとの心得にてゐん陣を誤りけるにや印地とはうてる飛礫の跡の地につきて印おしたるやうの心なるべしといへるは文字に付てのひがと也いんぢは石うちなるべし（義經記）に白河の印地五十人かたらひと見え（秋の夜長物語）合戰の處に三町つぶてのきやう一房また天狗共ものかたりの處にしらかはほこらそらいんぢ山門なんどのみこしふりなど見えたり後世このと端午の戯となりしはひをりの日とて馬にのり弓射て武を試るとなればそれを學びて此戲をしそめたるものなるへし（雍州府志）端午處用木

○江戸淺草の卅三間堂は傳て云寬永十九年の頃弓師備後といへる者射術稽古の爲に創立せんと請て淺草に地を賜はり諸家に勸進して建立したりとなむ又（江戸卅三間堂矢數帳）には慈眼大師發起なりとあり詳ならず今其地矢先と稱する處あり廣くは堂前と呼ぶ元祿十一年回祿に罹りしより同十二年五月今地深川に移さる（五元集）に新卅三間堂と題して若草やきのふの箭見も木綿うりと見えたり寬永十九年十一月淺草に卅三間堂建射始森刑部直義元祿十一年九月燒失して深川に移る正德三年十二月燒失して再立享保十五年八月大風雨に吹潰さる寶曆二年立同十年燒同十四年立明和六年八月又風雨に潰さる

○（元祿十四年日記）巳ノ十二月廿五日深川三十三間堂普請出來之由堂守久右衛門御番所へ申上候に付爲見分出役繪圖認候但堂形間數元地淺草の如く出來外に堂之表通り正面に破風三ツ堂造り惣廻り緣之上高サ八尺堅腰板拜堂之本柱之間柱八十七本此間之分風雨洪水の爲増普請に仕立申候事卅三間堂守堺屋久左衛門また日記に元祿十三年辰八月廿三日淺草卅三間堂跡御金拂方同心拜領屋敷名主三右衛門始て仰付らる下谷黑鍬町の名主なり

めつた的
水囊投

○（俳諧染糸）きおん林にかすむ飴賣なくさむは長閑に見ゆるめつた的（本朝文鑑）涼賦歌祭文には女中をなかしめ太平記には浪人をたゝずましむあるは水囊投に猿猴の手をのばし或は滅多的に王餘魚の目をふさぐ【水囊投は水囊の中に錢を投入て外へはね出さぬやうになぐるなるべし】（松落葉）に加賀淨るり四條河原凉八景といふ有それにも的矢のかゝり打けふりといへる是なるべし（誰袖海）に子供衆は正護院の森に行て楊弓供の者はめつた的あるひは本弓にかゝり紘にて耳より頰先かけて打そんじぼろ〳〵泣て居るもありめつた的は江戸にもありしと見えて寬文元年丑十二月廿二日御觸の内にめつた的町中にて爲仕申間敷事

紀州吉見段右衛門尾州星野勘左衛門紀州笠井園右衛門後星野氏貞享三年紀州和佐大八通矢八千百三十三惣矢數一万五千凡一息一矢晝夜計一万三千五百中有飲食便溺暇而放一万五千共秀逸可以知【(人倫訓蒙圖彙)には惣矢一万三千五十三本とあり星野は通矢八千とあり】江戸にて堂前通矢(寛明日記)云正保三年戌四月十四日阿部豐後守が家來海野仁左衛門といふ者淺草三十三間堂にて根矢千射を仕る通矢二百五十三本根長サ九分込の長サ二寸五分矢の重サ八匁より十二匁迄安齋云此海野が矢數千と定て鐵鏃の重き矢を以て射たる戰場の射藝弓力の試といふへし近頃の麻莖の如き箆に木の鏃をすげて射るとは同じからず三十三堂堂は二間を一間にして柱を立たれば六十六間なり戰場にて六十六間射通したればとて其矢甲冑を貫こと叶はず戰場には敵を七八間近付て射る習なり近ければ甲冑を貫かざることなし又通矢に用る弓【内竹は堅く强き竹を厚くして少やきて付外竹は柔かによはき竹をうすくして付るといふ】しかけをしたる物に麻がらの如き輕き矢なり戰場には用ひられず又一晝一夜に一万幾千といふ矢數も無用なり戰場にて終日終夜矢軍ばかりするものにあらず又通矢の射手布にて腹を卷粥を啜り藥を呑て射といふ如此なること戰場の用に立ず如何程古人に矢數を射增天下一の名を取たり共戰場の用に立ざることをするは遊藝に同じ只見物人の目を慰め遠人の耳を驚かし名を賣祿を求る迄のことにして實の武藝にあらず心あらむ武士は通矢を望むことなかれといへり(貞德獨吟百韻)勝やうにせむ弓の射こくらうしろより參りて拜む堂の前【自注に三十三間堂の體なり】(懷子)【十】勝手の方へ人つかふなりとをり增をみはやす堂のうへ【玖也】(新竹齋)【三】やころをかくる大箭大ひの弓に知惠の矢數いさ通りかけ見てゆかん「いてきては婆婆八千の大矢かず火宅の箭つみのきえかた○(京童)に昔はなかりし事なから三十三間堂のうしろの縁にて矢數をいる也ちやうまくといふは一すぢとをすをのぞむ也とありちやうまへとは矢數をしるす帳前にや

ちやうまへ

嬉遊笑覧巻四

武事（犬追物、通し矢、つぶて、抛石、印地、ちやうま、雁ころし、せめ馬、曲馬、碁盤乘、鬼かげ、的顱、やぢ馬、木馬、居合やはら、鹿島香取の兵法、武者修行、長柄刀かき鎗、亂波、道具、七道具、千人ぎり、斜に構、兵法の手、生兵法、逃る手）

武事 犬追物

昔武人のあそびには犬笠かけしゝ圓（イル）ものゝあそびといへる皆射法なり犬とは犬追ものにて其式故實等ある事ながら又一人にて路傍の犬を射てなぐさむなどは常にしたることと見えたり（猿源氏双紙）に年廿三ばかりなるをのこつきげの馬に梨子地の蒔繪の鞍おかせしら木の弓のまん中握り腰よりひきめを出し犬を追つめ駒を引かへす云々これは遊女が家の門の邊りをとをりかけにする處なりむかし頼光朝臣鞍馬に詣るとて市原野にて四天王の者どもと牛追物したりといへるも同じ義なり

牛追物

三十三間通し矢

（今の通し矢といふとも始は（古郷帰江戸噺）に東本願寺三十三間堂並本寺の縁起矢數の初これ京都の堂形也云々弓を射初しことは豐臣太閤の頃東山今熊野觀音堂の別渡弓數寄にて八坂の青塚にて弓射かへるさに三十三間堂に休み初てくり矢にて射そめしより事起る指矢の起は松平下野守の家來川瀬權內遠矢の無双は同苗佐內村田與助なり然れども矢數の多少を論ずるに及ばずして過ぬ淺岡平兵衛といふ者初て通し矢數を記して佛前にかけ置しより段々上をこして射ける也江戸淺草の三十三間堂は元祿年中深川にうつる（尤草子）に大橋長藏は三十三間堂を二千八百四十七矢をとをす（日次紀事）云凡矢數者射人居堂前今昏至翌日昏以所過矢數超過於他者稱弓天下一慶長十一年淺岡五兵衛【（江戸咄）には平兵衛とあり】始通五十一矢其名鳴于世次百廿六筋而僅八十餘年中高手者累出增數尾州長屋六左衛門

ぞはんじ物板行いたし町々へ持廻り候無用に可致候旨奈良屋にて申渡これあり

つきを出すなと古書に往々みゆみなその用る物を目とす
○（西鶴大鑑）【七】猿に袴をきせ楊枝屋の看板とすることをいへり歯の白きにとるにや
○（雍州府志）土産門補遺に洛下烏帽子屋の棚頭に簡あり士と書り立えぼしの紙のはゞ一寸許なるを縦横に貼り立てうは張するなり故にえぼしの色を十文字と云ふ一字は士えぼしに表する也といひ又（和訓栞）云天武記に圭冠ハシバカウムリとよめり私記に烏帽子也といへり榛子の形烏帽子に似たれは名くるにや京室町烏帽子折の看板に十一と書るも圭字の略なるへしといへり
○（人倫訓蒙圖彙）に漆屋の看板に曲物を二ツ幷へて板に付たるあり又漆桶を細繩にて十文字に結たるも畫けり川柳點の句にうるしやの看板なんのこつたやらとあるは彼わけ物二ツ幷へたるが何とも知られさるをいふ歟うるし桶は今も見ゆこれはしれたる物なればさはいふまじくや
○（我衣）に古來は饅頭みせの緣先に木馬を出したりあらうましといふ心を表したり元祿頃より止む【今も河内國石川郡上の太子へ追分の處に角屋といふ餅屋に木ぼりの馬を看板としてあるよし也】

大小判じ物

○大小（五元集拾遺）大小の吟【元祿十丁丑年】大庭をしろくはく霜師走かな

二　四六　八九十一十二

（江戸名物鑑）に大小作ありこれは延享より明和七年迄のはやりものをあつむ

柱かくし發句の判じ物

○（五元集拾遺）格枝亭柱かくしに乾ヤ兌坎震離ス艮坤巽、そらや秋水ゆりはなす山おろしと御よみ候へ下の字自然にまいり候こそ彌三五郎にて候とあり彌三五郎といへるも判じ物なり彌三五郎は山本飛驒椽にてからくりの名匠なり艮坤巽の字を用たる自負にや

願人坊の判じ物

○願人坊の判じ物を鼠半切を小くきりて摺たるをもてきて錢を乞ふ明和二年の川柳點の句に一つかみやりなからきく判じものこは文化の末の頃迄は多くもてありきしが其後はおのづからすくなくなりぬ此頃に至りては止しやうなり其始はいつの頃よりかしらざれども享保十四年己酉四月廿五日願人共な

盛岡のめくら暦
看板判じ物種々

も判じ物書たるがあり又南部の盛岡暦をめくらこよみともいふ文字を用ひず繪にて曉らせたるものあり其外商人の看板に多くあり酒屋に杉葉をつるし醋の看板に輪を出しおしろいやに箱の中高に作りたるを出すおしろいの看板に鷺を書たる【鶴を後に鷺に改む憚るヿ有て也】は白い物の義箱の凸なるは顏の形よきを中高といふによりて作れる也古き俳諧に貌と云發句の賦物凸字也（雅筵醉狂集）おしろいのかんはんとする凸に凹しらぬ下駄屋文盲、醋のかんはんは柳亭の考あり虫を漉たりといふ印に布篩をかけたるがいつしか輪ばかりとなりしと云り又一種醋のかんはんに瓶の形を板にて彫たるがあり七十一番職人盡の醋賣の側に瓶をすゑたり酢を貯る器なれは其形より出て古くよりありし看板なるべし其器物を目しるしに出すヿこゝのみにあらず（傳家寶）【二集卷之七】笑得好といふ條下に笑話あり注に醋店招牌每用葫蘆樣とみえ宋人（蓼花洲閑錄）に醋胡蘆とあり（平家物語）に伊勢へいじはすがめなりといへるも瓶子醋瓶の意なり後世も伊勢すり鉢あり伊勢にて作りたるなるす瓶なるべし（東牖子）に昆布屋に不二の山の形を出すは水からの看板なり富士はもと湖水より出現すといふ風呂屋に矢を出すはいると云義なりといへり

○紀逸か（六玉川）初篇帳屋の笹に二度雪がふる帳屋にさゝを出すヿを考ふるに住吉寶の市にて笹に大福帳結を付てうる是によるものなるへし（宗因千句）に向ひの里にゐたる月ぐすし看板のおもては竹の林にて又一種の看板（六玉川）七目藥とはなのあたりへかゝれたり漢土にも眼科の看板には眼を畫くと見えたり（笑林）【三】に見一眼科招牌上畫樣數隻とあり

○縫箔屋に松を畫くヿ（犬子集）【四】門に小松を立並べけり暖簾にしるしを見する縫物屋【重頼】元隣が（寶倉）に茶筅松の袖摺のしるしとなるも皆その類によれる物なるべしとあり茶筅松とは其畫樣の似たるによりてなり松を縫物の印とするは松葉を針といふにとれり其外味噌屋にせつかひ餅屋に高

て其間にかくの如き過りありしもをかし

○異國人に物たつぬるなどに誤り多きと理りなり朱舜水に或人さま〲の物の名などを尋ぬる中に草履取の小者のゐたるを渠は何と云ものぞと問ければ小僕と答へし故小僕とは草履取のことおもへりとか此ごろ朝鮮板の日本國考略と云ふ書を見しに寄語略の中に僕と有て三字郎と譯し小厮とありて歪皆水譯せりふに是も明人の日本人にそれが從者の小ものをさして渠をば何と云ぞと問しに日本人は小ものゝ名のことと心得て三次郎といひしをもて譯し付たるならん小厮も同じことにて其もの前髪立の若衆といふを聞て付たる譯なり歪皆水はわかしの假名なり右の類あまた見えたり

器物の銘の判じ物

○(俳諧染糸)器物の銘の事尺八三味線の類に銘付る事あり其品其譯あるへし云々其中にも判字物のやうに付たるそよきといへど尺八の銘に花野風ふくにあかぬとの心なるへし三味線の銘に初むかしと書り細かに挽となり予が家に小皷あり其蒔繪香の圖と鎖(ジヤウ)と梨子と柿の蔕(ヘタ)とを書たり上手下手なしといふ模樣なり豐太閤の遺物といひ傳ふ(一代男)安藝のみや島の條あらひかきの袷かたひらにふとぬの花色羽織にさし渡し四寸五分ばかりの紋に鎌と輪とぬの字を付てもんもうなる出立我身ながらこれはみにくいものといふ云々【こゝはことさらに賤きさますする處なり万治寛文頃の繪をみるに此もやう付たる衣きたるはみな下部の奴なりおもふに寛永頃より俠客の異風なるへし】

衣服模樣の判じ物

○貞享頃の女の衣服の雛形をみるに斧に菊と琴とを付たるはよき事をきく也又つり鐘の瀧の中にあるは成のぼるといふ意か又は金が湧にてもあるべし(耳塵集)に古き傾城買の狂言に買手の役者の出立白加賀に銀箔にて鹿の角を蜂のさしたる處を總身に付とありこれは漢土の蜂猴(封侯)蝙鹿(福祿)などの如きなぞにはあらず馬耳風に對すべきものなり雄長老狂歌に狩人のうそ吹山や鹿の角をさして飛行はち月の空

扇團扇の判じ物

(一代女)に賤きものとものの雜談する處に判事物團扇のさたとありはんし物書たる團扇なり其後扇に

頭一頭還對一脚中間全無肚腸外面許多稜角此末聯亦借用前人語也嘗聞字用謎既久止記一二句今爲足成之云三山自三山三山皆倒懸一月後一月一月還相連左右排双羽縱横列二川闔家都六口兩口不團圓又聞墨斗謎云我有一張琴一絃藏在腹笑墨如鴉正異人間曲この墨つぼの謎などは字を解にはあらずしてよのつねの謎なり

謎付

○（懐子）【九】弘永が何夜はしの字月はいろはのの丶字哉（松の落葉）古今節なぞうた「なぞ／＼なにこちや　なぞしらぬなんどのかきがねはづすは大じかけるが大じ是又今も小兒のいふことなり古への謎合をみるになぞ何々のものと端書あり俗にものはといふも是なり故に寛保のはじめ謎付といひしは今の物は付なり又判じ物といふも卽謎ながら其内書畫などにて曉らせたるを云（淨瑠璃十二段）【枕もんたう】野中の清水のたとへとはひとり心をすますとやつゝゐの水の心とはやるせもなきとの仰かや尺なし帶のたとへとは結びかねたとの給ふかや（きのふはけふの物語）に御茶を進上申せもみちにたてゝ參らせよこうようたてよと申事ぢや（同物語）ふろやにかう／＼ふろといふが有これはいかなるいはれやらんといへばふかうにおよばぬ（醒睡笑）にいづれもおなじことなるに常にたくをば風呂といひたてあけの戸なきを柘榴風呂とはなんぞいふやかゞみいるとの心なり

判じ物

○判じ物（歌林雜話）に上京に新城の出きし正月に御門のからゐしきにわれたる蛤貝を九ツならべ置たりいかなる心ぞとしる人なかりしに信長公さとき御智惠にてこれは公方の御心うつけてくがいかけたるといふことを京童が笑ひてしたる物そとさゝやかせ給ひしとなり

○文人の中といへども要用の事をかける手簡には謎々判し物のやうなる文は書まじき事なるべし藤東壁は物徂徠の門人なりしかるに或時徂徠へ金子二兩三歩からんと云こしゝに其文字を徂徠見誤り二歩二朱と思へりしことあり文章の謎めけるが故なり徂徠の古文辭を東野は諸子よりも早く肯綮せしものに

尾短きを秋日の短にとる也むつかしきなぞ／＼なれや厚氷【昌意】とけかたき也（寶倉）【三】ふるき女の童のなそ／＼にも四方しらかべ中ちよろ／＼などこそいひつれ云々寛文中にふるきとあるは此あんどうの謎は久しくいひ傳へたるにや

○文字を謎にするとあり無レ惡善（ナクハサガヨケン）し〻子のこのし〻などの類也（千載集）に季通と／＼にかなしかりけりむへしこそ秋の心は愁といひけれこはむへ山風の歌の類にて謎にはあらず文字を解るなり見る石の面に物はか〻さりきといへるは謎といふべし池田正式が（狂歌合）に蘭を草ふきに門をかまへて西かはのむかひにあきの花そかほれる是いま童のいふ草冠やはたちの下に門建てとうや東やらんやあら〻きといへるに似たり漢土の字謎といふもの是なり（桂花叢談）【唐馮翊】太保令狐相出鎭淮海日支使班蒙與從事倶遊大明寺之西廊忽覩前壁題云一人堂々二曜重光泉深尺一點去氷旁二人相連不欠一邊三梁四柱烈火燃添却雙勾兩日全諸賓至而顧之皆莫能辯獨班支使曰一人非大字乎二曜者日月非明字乎尺一者寸土非寺字乎點去冰旁水字也二人相連天字也不欠一邊下字也三梁四柱烈火燃無字也添却雙勾兩日全比字也以此觀之得非大明寺水天下無比八字乎衆皆恍然曰黄絹之奇智亦何異哉また（雞肋編）【宋莊綽】筋展之謎戯于前史鮑昭集中亦有之如一士弓張泉非衣金卯刀千里草之類其原出于及正止戈而詩人因字作謎とありて王介甫が作れる字謎を多く擧たり（委巷叢談）【明田汝成】古之所謂廋詞卽今之隱語也而俗謂之謎人皆知其始於黄絹幼婦而不知自漢伍擧曼倩時已有之矣至鮑照集則有井字謎杭人元夕多以爲此猜燈任人商略永樂初錢唐楊景言以善謎名【商謎のこと（古杭夢遊錄）にもみゆ高は謎をとく也】など多く見えたり

○敬齋（古今黈）【元李冶】鮑昭有井謎世傳東坡有賀資謎又黄庭堅有粥謎象棋謎近者伶官劉子才蓄才人隱語數十卷謎固小技倆然其諷詠比興固與詩人同義而在士大夫事中亦談笑一助也嘗擬井謎云四十零八箇

みえたり（似我蜂物語）【中】なぞ〳〵ほうくのつきんなあにそばなる人それはふみかふり又【下】なぞ〳〵いろはにほへと何にそばなる人それはにはとり今も小兒がなぞ〳〵何といふは古きふりなり（甲陽軍鑑）【十二】永祿十二年甲州より小田原を責る條に內藤修理といふ者手から有ければ馬場美濃より使を遣し謎をかくるいとけの具足敵をきる內藤即小太刀とゝく美濃聞て本手よりは增なりとほむる是は美濃も修理も日來なぞずきにてかくのとし又味增峠の條內藤方より馬場方へ謎をかくるまつよひに更行かねの聲きけはあかぬ別の鳥は物かは美濃守則くるま車はなれうしとゝくとありはげしき戰の中に好むとこそおかしけれ（翁草）に勅製謎の御歌秋風のはらへは露のあともなし荻の上葉もみだれてそちる是を月と解く心は上の句露のあとなければツ文字なり下の句荻の上葉をちらせはキ文字のこる故に月となる其頃なぞを好ませられ勅製あまた有しとて人のいへるは四國の刀麻糸と解く心は阿波サヌキ伊豫土佐の片名なり待宵にふけ行かねの聲きけはあかぬわかれの鳥はものかは車牛放牛これらも勅製とかや云める實否は知らず〇渭北春天樹江東日暮雲これを藻とゝく心は渭北ー退き類江東ー退く右のあとはモの一字のこる是らも右のたくひとありいつれの御代の勅製かおほつかなし

人名の謎

〇人名にもなみの名あり佐々內藏介成政が士に阿波鳴門之助といひしは越すにこされずといふ心とかや此類なほ有へし

〇貞德が（淀河）春風にふらめき返る松ふくら永き日かとにたてる傾城【注】傾城の門だちといふなぞはまつふくりとゝく故なり是らは當時童迄も知たる古き謎なるべし【紀逸が（雜話抄）に或人のもとに人々つどひ居て謎をこしらへて遊ひしにとてこのなぞをいへるはこれに出たるをしらぬにや】（俳諧懷子）【八】かけあひにけり水莖の岡なぞ〳〵をやかたの內のなくさみに同【五】雨の夜やをこけに角の二ツ星【重昌】合さるにたとふ同【九】聲は夜尾は秋日のうづら哉鵺の聲くわいを悔にとり

けかたきは響のァイウエヲにて付るを習とすといへり又（昔聞集）に家隆卿の家にていろはの連歌はへりけるにぬれにけり鹽くむあまの藤衣大進將監貞度といふ小さふらひつけゝるるきゆく風にほしてけるかな人々どよみてるき行風をわらひければさも候はずとよぬもじのる文字にて候へはかくつかうまつり候なにの難か候へきとちんしたりけるにいよ／＼わらひけりとみゆ

南京流

○物を明らかにいはすしてそれとさとらするを常に多しこれをそのかみ俳諧に南京流といへるにや（花見車）にその風體のさま／″＼に變したることを云て宗因風の後時とかわれる世のさまなれば或は南京流とは一てさぬきを敷と云て圓座になし三輪をひやすとのべてそうめんになりたる一體半年ばかりいひしらけ又句四十二三字などあまして發句といふ

謎

古き謎

○謎（拾遺集）なぞ／＼のものかたりしける處に曾禰好忠わがことはえもいはしろの結ひ松ちとせをふとも誰かとくへき此時の謎合は（小野宮右衛門督家歌合）一卷あり其初めにをのゝ宮の右衛門のかみのきむたちの物かたりよりいてきたりけるなそあはせ云々（淸少納言）に人のなぞ／＼あはせしける所にかたくなにはあらでさやうの事にらう／＼しかりけるが左の一番はおのれいはんさ思ひ給へなどたのむるに其日になりて云々それにはりゆみといひ出たり（徒然草）百三段大覺寺殿にて近習の人共なぞ／＼を作りてとかれける處へくすし忠守參りたりけるに侍從大納言公明卿我朝の者とも見えぬ忠守かなをなそ／＼にせられけるを唐瓶子と解てわらひあはれけれは腹立て退出にけり【忠守は丹家なれども平家の忠盛になずらへ平氏といふ瓶子は平家物語鹿谷の會合など思ふへし】なそは何々といふことはとひかけてそれはなにそなにそと問催す故にかくいふにはあらす（小野宮歌合）にもなそこのころふるめかしきかするものとやうになそてふことを何々といふことのかみにいへり（淸少納言）にもなそ／＼は初めにあり然らは速（はや）とけとて催すにはあらずたゞ是は何ぞと問かけてさて其物をいふが例と

の一字かむり有これもじくさりの類なり

文字ぐさり

○（著聞集）【五】弘徽殿女御歌合に花かうししらまゆみといへる文字ぐさりを歌の句の上にすゑて折句の歌によませられけるめづらしかりけることなりとみゆもじくさりは體は長歌にて句の終の文字を取て次の句の首に置てつゞる源氏文字くさりなど有り鴨長明が文字くさりの歌ありて逍遙院に至りて盛なりと云（類聚名物考）に婦女兒の遊にも古歌をよみて次第にいひつらぬるに歌の末の字におなし文字の上の句にある歌を思ひ出ていひつらねるを文字ぐさりのあそびといふたとへばめつらしきかなといふ歌の次ならばその終のなもじをうけて名にしおはゞといふ歌をとなふるの類なり

廻文の詩

○廻文の詩蘇若蘭と云女夫の邊塞に居るを慕ひて廻文の錦織て送れりとなむ此古事は人みな知ところなり又南海の女子轉輪八花鉤枝鑑銘を作る唐の上元の初のことかや王勃が序令狐楚の跋ありて皆口を極めて稱讃せり其圖（廣東新語）に載す花上八字枝間八字環旋讀之四字爲句匝相爲韻其盤屈糾結爲八枝者左旋讀之自萮字起至詞字止當就支脂字韻右旋讀之自詞字起至萮字止當先仙字韻その圖これを略すまた疊字の詩と云ものあり（東坡禪喜集）に東坡が妹聰慧なること人に過ぐ博學強記工みに文を作る秦少遊が妻たり東坡が歸省せし時佛印長歌を東坡に寄す坡これを讀に少しく凝思せしかば妹傍らより見ていと易く其文を了せるを坡嘆じて云汝を男子たらしめば名位かならず我上にあらんと云り妹その疊字の詩を錄して秦に示しけるに秦亦連環疊字の詩を作りて答ふよりて東坡も妹女も其體に効ひて作あり○これとは異ながら藤大納言爲兼卿佐渡國に左遷の折からよみ給へる長歌文字くさり等の作あり

尻とり

○（夫木抄）【五】建長八年百疊字合信實朝臣つらなれば翅をかけて玉章の文字鎖して歸る雁金また（和訓栞）第一五十音のことをいふ處アイウエヲの五位を字母とすよて餘りの四十五位の音を引て呼へは皆アイウエヲの音を生ずアイウエヲの響は本韻の外を出す云々近世の文字鎖にもラリルレロ文字出てつ

口合 地口附

わる木なりといひけり歌のとりなしはおかしけれどもむさくさなり云々此外おかしきも猶多かりこれらの類を口合といふ口合は廣き名にて地口もまた口合なり口合はヿもなし地口とはいかなる故にかおもふに地は下地の地にて上に一重ある意にていふなるべし（我衣）に享保八年の頃地口附はやる云々のヿは前に引たり同十年の頃もぢりといふヿはやる字もじそ本もじりあり云々五人三人幾人にても人

字もじり 本もじり 段々附

數かまひなし先題を出し一句を附る一句の終をまた題にして付る今の段々付なり字もじりはたとへば題丸かぶりすき（好）かまくわ（桑瓜）をもつ土民また土民を題にして云廻すむすめの子かみ（髪・紙）すい（梳・漉）てゐる三谷町【前に同】本もじりたとへば題年市臼あり杵あり兎もあり【題】兎もありほそ長い耳をあられにきるなとみえたり西川祐信が畫にて（浮世謎盡）といふ草子に當世の段々附とかけてえびす殿とゝく心はきこへませぬ〳〵とあれば段々付も上方よりはやりしなるべし後に五文字といへるもの此類なり〇山崎久卿云地口とは當地の口合といふべきを略したるにてこの地に作れる草子を地本といひきせるを地張其他地さけ地廻りの地の如く只この江戸にかぎれるの義なりもと神事に地口行灯と云ものをともすヿは他郷にはさらにあるヿなし今はありもすへしそれは江戸のふりのうつりたるなり行灯にかけるを繪地口といへり玆にてとけるもの多し又語路といふありこれも地口の變體なりおもふに語路とは嗇相するめのつけ燒丁子茶きつねの子ぢやものなどの類なり

語略萬句

〇そのかみ語路万句興行の事ありしに語路たまごといひしが其時の秀逸にてありしとなむ

もじり

〇もじりとは言の二ツに聞ゆる處あればなり然らは鋏の義にてもぢりなるべし段々付の趣きは文字鎖にも似つかはしぢぐちはもぢりといへるがもとにて即もぢぐちなり當所の口合といへるはわろし雅俗は異なれども是おなじ

五文字

〇五文字といへるものは冠り付にて二種あり段々付はいかいのちがい付の如し冠りに五字かふりア

○享保の頃京都火事ありてみかど岩倉へみゆきならせ給ふ清水谷どの風早どのにかくいひかけ玉ふ風はやといふ君が名もつらきかなとありければ風早どの笑て付られける清水谷とてやけものこらず是は風早中將實積卿なり京都諸司代土岐丹後守長屋より火出たりければしかも五月五日なりけり「時も土岐丹後の晩に火事だして江戸へしれたら御諸司千万、これも風早どのいたづらとなりと云へり

○（新撰狂歌集）に前大上戸朝又宇治茶大臣などは酒の歌茶の歌なればそれに付てさる名を書るにて共讀人の常に用ゆる戯名には非ず又池田正式が布留田造平郡實柿なども一時作り設し名なり後世のことき名を作りて用ひたる者はなく皆實名を書り諧師も宗匠は僧形なれば字音に呼ぶ名をつけれ共俗體の者は名乘を用ること連歌の如くなりしに後世常の人も宗匠めける名をつくことは大かた談林よりこのかたのことなり是を俳名と呼その後に至りては五七五を排することもしらずして放蕩無賴の者も別號を付て表德と稱するは何の德を表するにか是又世風の一變なり（禮）二十而冠々而字々以表德云々いへり

秀句【かすり、地口附、本もじり、字もじり、文字ぐさり、段々附、尻とり】謎【古き謎、字謎、なぞ付】判シ物【大小、願人判し物、鎌わぬ、衣服もやう、招牌數種、柱かくし發句】

秀句
かすり

○（醒睡笑）に秀句も外にかすりといふありされども秀句とかすりのけぢめはなし古へに秀句後にかすりともいひしことと見ゆ秀句とある內にいとよきはいがき見めよしま一度こいかご見ら又かすりとある内にところほる野老といひかくればいや山のいも薯蕷また津の國多田の在所のものとをるを關守とがむればたゞの夫と答ふさらば八島の軍をかたれといへばそれはつぎの夫にとはれよといへるなどは今專らおとし咄にすることなり正保四年板（悔草）にある人燒木にせんと大なる木を置けるに隣の人斧をもち來て割とるを見て咎めければ彼ものこたへてわがよきに人のわる木があらばこそ人の割木はわが

○生白堂行風が（後撰夷曲集跋）まことに此一筋天津神代より傳はり侍れどのほれる代にはまれ〳〵よめりとみえ侍るを中頃佛心宗の名僧我宗の旨二三子に傳へんため百首或はいろはの文字を頭にするて數十首をつらね源空親鸞もかくの如く念佛の正理をよめり又平時頼百首をつらねて男女の教訓とせり其後天正年中にすきものども出來て和歌百首の古題に數人よみしより寛文の今に至るまで其間に夷歌にて世に鳴るもの道の記の歌或は諸職人を題にし又は百首よめるたぐひ數十人に及べり云々夷曲のさまわかち見はべらはやと思ひ給ふれど代々のやんごと無かた〳〵の尊詠に凡俗の名書まじへ侍らんもおふけなく又名字顯はし侍らざらばかれ規模なしと思ひ侍らんいかゞと八宮御方へ申上侍りければ此旨我心ひとつに定めがたしとの玉ひ内にまうのぼり給ひやがてまかで給ひ望の趣奏し奉りぬれば夷曲のさまあるまじきに非ず夷曲なれば名乘のともおのが心にまかすへしとの詔そと仰下され侍りかくかしこき御うつくしみもやつかれが面目のみにあらす夷曲好まん者の万代までの悅ひ何とかこれにしかんされば明て五年の冬古今夷曲集を撰て八宮御方へたてまつり侍りしを叡覽に備させ給ひ本すなはち大内に納り侍りぬといへり八宮親王は智恩院御門跡開基

○万葉かゝり歌の事（沙石集）【五】中古常州田中庄といふ處に高觀房といふ山臥あり隣家に藤追と云百姓が妻に忍びかよひける云々山臥熊野へ參詣の時かの百姓妻を具して奥州の千福といふ處に下る山臥下向してみれば逃亡して人なし柱に妻が手にて戀しくは問てもわせよ高觀房千福にあるぞ藤四郎の本に是をみて哀にわりなく思ひて彼が見るへきにもあらねと心のゆく方返事せんとて出て行ばかくともいはでうたてやな藤追の女房千福の藤四郎のもとも我したらはこそあらめ、心ざしはさりぬべし心はまことにおかし万葉の代ならばこれらも集に入べくやそのかみ万葉集などは世にあらはれず見し人あらねば唯怪調のものと聞つたへたるのみならん無住が評けしからずや

らふものゝ僞ことて欺きたるなり眞顔は欺れたりしもそれにつきて社中より多く收納を得たれは利にはなれり飯盛はさることもなく物を費せり深川仲町の茶屋尾花屋は眞顔が弟子にて名を福養といへり上京して歸りし後彌左衞門町に二條家の金子とてそれを借すもの某といふと親しく交りて此事を謀りけるなり】されどもまめに筆とることを得て（雅言集覽）などを著したるはその功勞とまれかくまれ稱すへし津村三郎兵衞と云もの佐竹侯に用達せるが傳馬町に居て和書をよみ歌をも好たり飯盛この人に學ひたりと聞ゆ

狂歌者流の花押

○又おかしきは狂歌者流の花押なりみなわろき物ずきにてはては商家の屋印の如く覺えて用るは何の心にかあらん其初めは漢江かの赤良の扇巴より起に輩にならひて是をうけ繼て用るはます〳〵あやし

社中を何側と云こと

又其社中を何側といふは今の俳諧者流がそのむれ〳〵を何側といふに傚へる也いとあるましき稱呼にやそのかみ漢江赤良などが判者たりし頃はいまだ讀人もすくなく好みてよむほどの者は無下なるもなかりしやうなり其後ます〳〵行はれて判者と稱するだにけしからぬ者多くなりはやるにつけてそれらも各社中ありて田舍などより月丼の會に出詠するものたえず是に依て目に一丁字をしらぬ者ども狂歌せぬはなきやうになりぬれば其詠出るとおもひやるべし

○油烟齋貞柳が狂歌集（續家づと）に當春京より風水軒白玉翁の雅筵𦾔狂集板行出ければそれに狂歌の所以委細に御自注ありそれを考見て手習初とすへきものならん卷末に狂歌式あり其中に中比の狂歌秀をと多くよめり云かなへたるも有またたは無理に俳諧をいひかけて歌の落着聞えがたきありそれ故に狂歌といへはまめなる處にては花すゝきほに出すへきもなんなかりけり

○落首の狂歌かたくいましめ有ことは古へよりのことにて中頃松永貞德別して戒しめられ俳諧の門弟にも此ことかたく制せられ誓紙をもかゝせられしとかや

有心
無心

ゆ

○（井蛙抄）に六條内府語られ云後鳥羽院御時柿本栗本とて置る柿本は世の常の歌これを有心と名づく栗本は狂歌これを無心といふ有心には後京極慈鎮和尚以下其時の秀逸の歌人なり無心には光親卿宗行卿泰覺法眼等なり水無瀬の和歌所に庭をへたてゝ無心座あり云々俊成卿の【和歌肝要】に俳諧は狂歌なり俳諧證歌にはとりはいくらの稲をもたやらむ曉とにこけ〳〵といふとありされば狂歌は俳諧歌なりそが中にくさ〴〵の體あり雅なるあり俗なるあり代々の撰集又家々の集又紀行などの中なる俳諧歌も休かはれり云々いへり按るに（菟玖波集）【九】建長六年五節のころ有心無心の連歌侍りけるに「ゑせきぬかつき猶そねりまふ玉かつら誰に心をかけぬらん【常磐井入道太政大臣】なとも見えたり後世は連歌師また俳諧師の詠りしを專ら好みてよめるは建仁寺雄長老八幡山信海生白庵行風江戸に德元卜養未得等就中聞えたり其後しばらく廢れたりしが安永ごろ又流行出て漢江赤良橘洲木網等を初めとして其徒あまた出來ぬみなゝくさみわさとして點料など取となし其後これをもて業としたるものは眞顔なり別號を俳諧歌場また四方歌垣なとゝいへり俳諧歌場はおほけなく歌垣は日本紀にみえたるをいかに心得ひがめてかゝる名をつけるとぞいとおかし六樹園と號するはもと旅人宿にて小傳馬町に住り此處昔は六本木といへる馬つぎの宿なりと云これによりて今にはたごや馬借などありと（江戸砂子）に見えたり眞顔おのれ高くかまへてよく僞りごとをして社中の愚物を欺けり飯盛は大言して人を誘る本性にて世に一ふし新奇をとなへむとて狂歌は俳諧歌にはあらず落首體より出たる物なりとて其徒をして卑きことをむねと詠せたり近頃眞顔が俳諧歌の宗匠號を得たる時飯盛をも勸めて宗匠號を願ひ申さしめしに俳諧歌とゝなへされは其號を許されかたきよしなれはそれに隨ひて宗匠號を受たりかねての大言虛談となりて世人の物わらひとなりぬ【此事はやむことなきあたりの御許なりとて取つきて事を計

尺【大場仁右衞門正秀門人】已上五人なり續集もあり長水素丸これが評を貞佐に乞ふ【其評略す】また小寺文貢と云もの評に云江府の俳諧法をみたり格をすて放埒の句姿となり宗匠といはるゝ者句者といはるゝ者多くは世の落魄人にして邪婬の媒となり章臺の合詞となる近頃佐久間長水丈是をなげきて云々邪風を改て正風体に歸せんとす有難貫むへし然れ共其姿まゝ江戸風の破手ありて大津畫の僧の如く法体には似たれ共未眞實の正雅とはいひかたるかるべし云々

○古き俳諧の句を歌と誤りおもへること昔よりあり大かた（犬筑波）の句なり（新撰狂歌集）に大般若はらみ女のきたうにはたきやうくわんたいさんのひもとくなどの類往々見えたり

狂歌【俳諧歌、有心無心、今世の狂歌、師花押、何側といふこと】

懷劍
懷句

○山岡明阿云今詩歌連俳を兼て巧みまうけしを懷劍といひ俳諧の俗言には懷句といふ是は宿搆なり（魏志）王粲善屬文擧筆便成無所改定時人常以爲宿搆といへりこれに依て思ふに孕み句を昔は懷子ともいひしにや重賴が集の名にあり

俳諧歌

○俳諧歌は古今集より聞えて和歌の一体なり俊賴朝臣無名抄に是をざれごと歌とあり又奥儀抄には俳諧の字をわざことゝよませたり又是を狂歌ともいふ太平記などに落首あり是また狂歌とはいへど俳諧歌とは云へからずされば狂歌とは廣くいふ名にしていつれの体をよみても狂歌といはむに妨なし元木阿彌が（言葉の本末）に狂歌は實情のやむことを得さるにせまりて詞の雅俗をえらぶにいとまあらさるより起れるものならし古へ釋門の佛意を述るの言葉おほくは此體なりされば心をもとゝして言葉にかゝはらざればなるべし末の世に至りてはおかしきことをもとゝし言葉の俗なるをむねとす其おこれる故をわするゝに似たり是又時風のしからしむる處里花歌謠の自然を見るにたよりなきにしもあらず

○狂歌の字（白氏文集）【廿九】秋日與張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌凡二百三十八字云々其他往々見

地口付　〇（我衣）に享保八年の頃地口附といふとはやる是は點者より題も出さず附るもの思ひ付を書てつかはす點者よろしきを取て勝とす褒美は端物塗もの烟草入等なり其體は下に繪を書て上に地口を書これも

もじり　やがて禁ぜらる同十年の頃もじりて云ふとはやる字もじり本もじり有これはしる人に俳諧するものを

段々付　頼み甲乙を分て勝には懷紙をとらす人數幾人にても先題を出し一句付その句の終を題にして又付る今

謎付　の段々付なり【是は前句の終の五文字を初五文字に用ひて句を作るなり】又寛保元年の冬謎付とては

物は付　やる點者題を書す是は今の物は付なり三年ほどはやりて停める

六玉川　〇（俳諧六玉川）は四時庵紀逸の撰なり寛延三年の冬高點にしたる句を集めて初篇出づ寶暦六年迄に十篇となる一卷を一篇とす續て十五卷あり十一卷より（江戸枝折）と號す自序に云世移り人變りて年々の變化なきにあらず晋子雪中の後水間沾德花美の風流を開そめて世上一判の師とし光彩門戸に至りぬ次て沾洲道に名を鳴し今兩側の門人立並ておのれを勵み道の警固をなす俳諧諸國に盛なる中にも江府は其湊にして遠境村里も江戸の風流にたかはず點を以て流行を極ると明らか也されば日々愚判の卷に秀逸とする句々書留め置侍るを此度書肆の需に應ず云々

川柳點　〇前句附判者多き中に寶暦の末明和の初頃机鳥露丸川柳等大に行はれ月次万句合として集る句數凡一万六七千句勝句四百四五十半紙五六枚に暦の如く細字に印刻して摺る柳樽といふ草子は川柳その內よりおかしき句を板書て上木したるなり今に至るまて相續て出

五文字　〇五文字も初めは五文字附といへり前句附より出たるもの也これ又明和の初よりあり

片歌　〇建凌岱片歌を起さむとして（片歌道のはしめ同二夜問答東風流）等の著述したれども行はれず

五色墨　〇享保の末（五色墨集）といふあり五人の歌仙したるを一集とす其人々は佐久間長水【三郎右衛門沾

同評　德弟子】素丸【琴風弟子】宗瑞【兩替屋中川三郎兵衛其角門人】蓮之【松木次郎右衛門杉風門人】咫

冠付
笠付
三笠付

を出すこれを得むとて貴賤となく句を附て點錢を費す是則博奕の類なり世俗これを好むほどに下句に上句を付るも猶むつかしとて宗匠より上句の初五文字を出して次の七文字五文字を諸人に付さするをになれり是を冠付とも笠付ともいふかくいやしきわざになりぬれば下部の童げす迄も俳諧といふことをしりて笠付して褒美とらむとするほどにいよ／＼賤くなり寛永の頃より冠の五文字を三ツ出して三ツ冠に各々七文字五文字を附させて勝負をわくるとあり是を三笠附といふこれ彌博奕に近し其後五文字の冠をも出さず下の七文字五文字の詞をもやめて唯數の文字を封して外より其數をはかりて札を入て其數の當れるを勝として金錢とらする事になりぬこゝに至りてはまさしく博奕なれども本の名を存してなほ三笠附といふこの三笠附さかりになりて賤きものはいふに及はず士君子も是をなして得つかむとするほどに得はつかずして多の財を費し身を失ひ家を亡すもの數をしらず此事上に聞えて享保の初よりきびしく三笠附を禁せらる其後禁を犯して刑にあふものあれ共今に至る迄猶絶すときこゆ和歌の流その末變して博奕となるべしとは住吉玉津島の神もいかてかしろしめさむあさましくかなしきは俳諧のわざはひならずやと見ゆ

褒美前句附

○（世事談）には前句附は延寶の頃にはじまる褒美前句附江戸にては元祿八九年に盛りにして景物あると起る冠附は元祿の末寶永の初め專らはやる【沾涼は延寶八年に生れたりしかれは延寶中の事は後に聞傳へしなり】南畝云三笠附は其始卷を二通かきて一通は點をして封じ一通は封せずしてあるを人々それ／＼に心にかなふ句を己が句と定めたる後かの點をして封したる方を開き勝負を定むるなり句は廿一句なり鳥の子紙に書たり點者此句は筆にまかせて書點をして諸國に驚き大に利を得たり其後句をやめて一より廿一迄の數を三ツ重ねて書き勝負を定む是より博奕にひとしければ御禁止ありといへり

はせ放財ものにしたり泯江はじめは觴をうかめしに後汚濁の腐才に流て舟につむ程の諸道具椀家具絹布夜具ふとんのたぐひ源氏物語の箱入春曙抄つれ〴〵の諸抄すべて人のほしげなるものを書あらはし一番二番三四十番までそれ〳〵の句主に配分せしほどに禍引の水をのまぬものぞとかろ〴〵しう心得て十歳の男女丁兒小僧まで他につけてもらひながら物をとらぬやからは下手なりとのゝしりよきゝぬ得たれば此點者よくものしれるなりとほめわたる端々町々手よりよき所に看板をかけならべ夜々灯を挑て群集したり風雅の狐狸なれは弥をのがれて産業となると和光同塵のことはり魔佛一如の見ゆるし成べし云々つら〳〵彼天狗どもの飛行するやうを見侍るにいつくの杉の上に住ともしられずして蝙蝠の出るころに必しも行ちがへりその中の大團扇を以て座したるは首領とかや最上源三と一二の賽をあらそへる者也をのが住山々雪なれば十月の比より師走をへて二月の末まては民家にまじはり人間の胸裡を亂漫し正法觀念の席を妨け一万三千の句形を招くといへ共白雲に花のうつろへはあらしと共にちりうせたり」かくいへれば初めは褒美も盃などにてありし也天狗に比したるは虚文ながら天狗はいかいと云ことはいひしものなるべし

前句付

○(花見車)前句付の一番勝れたる點者は唐にもなしと云かやう〳〵の名句をやりたれど一點もなし點者でも杭でもあるまじきとのゝしる」などいへり

○(春窓獨語)に頃日の俳諧といふものはさのみ笑ひ興ずるほどのおかしきことをいはす意趣いかにとも知かたし云々其句をかきつけたるものを見れば何やらんえもいはれぬことをえもしられぬ文字にてしるしてものしれるやうなりきつめて筋なきもの也又云元祿の初の頃より前句付といふこと起れり其法宗匠より下の句を出して多くの人に上の句を附させて點に第一第二の品を命して甲乙の次第に隨ひて賞を行ふその賞或は布帛或は器物などそこばくの直なる物を出す其品物に望みなきものには其價の金銀

〇大坂に一時軒惟中と云俳諧師あり人の長點のことを尋ねしに答云其句のあまり面白さに上より點をかけて句のとまりまでも引下げたれども猶面白さにひかれて其點はまだかけたらず下にぐる〳〵とたぐりておかんもいかゞしければやがて上へ筆をあげて又一點かけたるものなりと云々

正風體

〇正風體といへる姿は桃靑これを廣むといへどもこれよりさきに正章既にその端を開けりされば支考も貞室がことをこの老人は俳諧の中興にして芳野山に花を詠し隅田川に鳥を吟す當時正風の祖といふへし此老晩年に俳諧を知るか自己の短册をは燒捨けるといへり桃靑か不易流行の二體をとなへ初めしは（去來抄）に正風といふことは奥羽行脚の内に工夫し給ふと見えたり此年【元祿二年】の冬始て不易流行の教を説たまへり長頭丸以來手を込る一體久しく流行し世人俳諧は如斯ものとのみ心得て變する事をしらす宗因師一度其こりかたまりを打破り給ひ斯風天下に流行し侍れといまた此教なし

不易流行

〇（蚓隨筆）に春來云芭蕉は正風の土臺をすゑたり古流秀句口合なとはやりし中を美しく改めて詩歌の意に同くせしは器量なり其角は芭蕉をひつくりかへしたる物なり作者なり芭蕉はひつくりかへすとも其角はひつくりかへしがたしをいへり江戸は其角嵐雪が二派となりて今に行はる

座敷乞食

〇世の諺に俳諧師を座しき乞食といやしむこともと連歌師をいへり（歌林雜話）に紹巴がことをいふ處古今は近衞殿より御傳あり稱名院殿はかれは乞食の客なればとて御ゆるしなきなり

天狗俳諧

〇後の俳諧はおもしろき句もあれど大かたは端書前文なければわからす其意解てみれば何事もなくおかしくもなきが多し天狗はいかいの如し天狗はいかいは（葛藤）におのが老年號しらず名もしらず【秀序】仕りけり天狗はいかい【秀億】

〇（類柑子）歌の島の條（いつを昔）と名付たる編集北村湖春にことばをそへさせ句の首中を分て付習はせ侍りしも今は二昔のことなりけり近來の冠付は教へかた先褒美の盞よりも起りて專人の本心をくる

して別の子細なし近年は世上の俳諧上手になり又點者もそれ〲能聞分て二點の長より廿點迄は善惡細かに見分て添削に及ぶ時氣に隨て可なり去人申けるはえぼし附色めくに隨て文字不通の旁人(かたく)に讀てもらふて點引人あり八十點迄を聞分夥しき印判を拵へ朱印をおす云々

○(俳諧家譜)【寛延四年】往古の點は和歌連歌に傚て平句長點の二ツのみ長に及はず平に勝るものは旁に珍重の字を書てこれを一點半とす又長點の中尤も秀者は朱圈を加へて褒美し是を三點とす近世五點七點花鳥の形を彫刻み潤色して興を催す十點廿點百點に出づ遂に千點の印あるに至る抑古へは百韵の內點あるもの十廿にして卅句に及ばず今は百韵の內無點のもの僅に一二皆墨の者亦多し故に古は點なきを以て輸とし今は高點あるを贏とす是時世の風俗なり今古何ぞ異ならん今千點の高判はこれ古の朱圈なりこれにつぎて五百點三百點は古の長點なり百點已上は古の平點なり其中百點に至らざるは古の點なきもの也米仲が(籾隨筆)【寶暦中】むかし長點は卷中の秀逸とする也其後風流うつりて趣ある句を長として拔群とはせず沾德云發句脇第三までは主客功者のする事あればさはるとなくば第三迄は長點しかるべし近年は發句より表八點大かた主なき句にて詠草したゝめける沾德のともいたづらになりたり脇起のはいかいも今は只一通りにて意味の差別なしといへりおもふにかく點數の高くなりしは(染糸)にいへるえぼしづけの點者より始れるなるべし

○(翁草)は半時庵淡々が傳に點譜等を時の人の氣に應ずるやうに製し花押に靑印を交へ書拔といふ事を始めしも此淡々なり

永點
つましるし
長點

○永點は(驚水閑話)に一點をかくると云と和歌にはじまりて古はつましるしといひけるなり點を乞ふ人ある時はすくれたる歌と思ふには食指をのべてそつと爪形を横につけ玉ひたるなりその上に再吟して初の爪形を加へたる上に又かさねてつましるしをかくる是を長點といふ

ごとにあらぬ工みをめぐらし人の前句をはひあひなどせんは無下に口おしきはたらきなり用無用のさかひ新古の分別こゝろざしを高く守らは自然の風流にあらはれて幽玄の一句もいかでおもひはつしぬへきやといへり此言誠にしかあるべきことゝおもはる

一巡の事

○（俳諧染糸）【西鶴が門人炭翁元祿十六年撰】一巡のこと別にかはる事なし我句前になりたる時案したる句を別紙に書付て苦しからずは其元にて御書留被下よと次へ送る是大法なり宗匠あれば銘々右の通の作法にて御目に懸る當世その辨へなし指合の句も考なく書付て送る次より氣をつけて戻せば初の句を消して又脇に書付る体なり嗜ていつ迄も本式を守るべし（鬼貫獨言）【享和三年】いにしへの俳諧は

古式

來る幾日の興行なりと前廣に定め置て詠草に刻付して再々返までも廻したれば句數もいでき侍り當日に至りて或は朝飯後よりはしまりたるは夜半をも越て終り又晝過て集りぬるは大かた夜もしら〳〵と明わたる程に滿ぬ今時の俳諧は再返をだにまはすと稀なりければ座の上の句數はおほく侍れど滿る處はいにしへの席の三分が一にもたらず古人は各々沈思して尤毎句に宗匠の心を伺ひ宗匠はまた故なき句を取となしあるは前句に不便を加へあるはのりなじみを專一に案じ侍りければおのづから時のうつりたるなるべし

○花見車（元祿十五年）昔は一會興行し禮義正しかりしよしをいひて當時は點者よりひたすら會をすゝめ料理出れば一巡よむまでもなく盃とり〳〵にまはし我句前にあらねば大聲に雜談しはては大酒になつて懐紙はいづこにあるやら點者に藝をさするやら歸りにはいとま乞さへせずさて翌日宗匠の方から馳走の禮を述にゆくなどいへり

點法

○點法は（染糸）に添削古法は長珍重平この三の外なし長は秀句を感し一點かくるは殘多しと二點に及へり珍重は仕がたき處をかやうに致さるゝと珍重にこそあれと一點半に及べり平は勿論點の通りに

非をとらずこれより實の道にも入へき器なりなど遙かに定家の骨をさぐり西行の筋をたどり樂天が腸をあらひ杜子が方寸に入やからわづかに都鄙かぞへて十の指ふさす君も則ちこの十の指たるべし能々御つゝしみ御修行御尤に奉存候

○鬼貫が（獨言）に俳諧は狂句作意をいふとのみ心得たるはかり一槩にかたよるへき道にもあらず猶深き興もやあらんと延寶九年の頃より骨髓にとをりて物みな心にそむこともなくやゝ五とせを經て貞享二年の春誠の外に俳諧なしと思ひ設しよりそのかさりたる色品もかの一句の巧みもこと〴〵くうせてそれ〳〵はみなそらごとゝなりぬ又云當時もてはやす俳諧の中に此句を聞給へと語り侍るを前句は何というにやと問人あれば今時前句を尋ね給ふは扨も古めかしく侍る當風は前句なとに拘はることは候はずといふ人などもありげに聞ゆにが〳〵しくこそ古談林風伊丹風などいひて【かくいへるをみれば伊丹風はもとよりの名にて鬼貫が一風立し後の名にはあらず】句にさま〴〵異形をつくせし時節も更に前句を忘るゝことなく或は文字をけうとく餘したる句も侍れど二句隔る掟を守らずといふことなかりし又云古は一座百韻の俳諧をも毎句に覺えて歸りて人に語り書止もし侍りし今當風といふは歌仙の句をだに覺ゆる人なしこれを思ふに古は緣語をつたひて付侍れば一句〳〵思ひ出さる今は前句に緣語なき事を詮なりと覺えて作り立たる句にてあれば何とらへて思ひ出へき種もあらじひとへに前句に付ざる咎なるべしといへるはさることにてその頃より付合はかゝる類多し其角が（綿繡緞）に利休が茶湯道具新古の口きゝは商人にこそあれ道を好むものはたとへかけすり鉢にても時に宜く用へきと用ふましきとのさかひを辨ふへしといへることを引て俳諧もさのことし句は道具なり點はあき人あり俳諧過ての點なれば其席に交りて是は長これは丸珍重などと點にあてゝ目利せらるへきは本意なるましくや打こしのむつかしき處か席のしふりたる時に宜く付流したらばたとへ無點の句なりとも是用也點者の心をかねて句

伊丹風

付句

其角が説

句のやうにて怪調なることをいへりこゝに於て桃靑これを改めて正風體となし凡物はしつくす時に必かはるよのならひなり又攝津國伊丹に鬼貫といふものあり「姓は上島氏俗稱與惣右衞門槿花翁と號す大坂に仕て小兒の導引をなして今も鬼貫導引とて小兒の足より上へもみ上る按摩あり貧窮自滅せんとせし事京俳が（頭陀物語）に其文を載たり」重賴が門人にて後一家をなす

江戸談林始る

〇宗因江戸に來りしは松意が招によりて寛文二年春【于時五十三歲】なり江戸談林風これより盛りなり此時の記行自筆にて（東日記）といふものあり（綾錦）に延寶中武江に下るとあるは非なり又（俳諧家譜）に立圃が門人に村田常長といふ者あり其養子を常矩といふ師父の俳風を好まず一風流を作て世に鳴る宗因が談林鬼貫が伊丹皆こゝに出といひ又宗因は惟舟が門人たる歟などいへるはみな僻言なり（去來抄）云先師常にいへらく上に宗因なくんば我々が俳諧今以て貞德の涎をねぶるべし宗因は此道の中興開山なりといひ許六が（滑稽傳）に西翁は連歌宗匠なりしが俳諧師となり古風の俳諧を叩きやぶり天地の間に獨歩す世擧て宗因風と稱す又常矩がことをいふ處に洛の田中常矩は季吟門弟なり後談林に移る洛の談林は大方常矩が門弟なりといへるにても知へし【家譜の作者は京師の人なれば常矩が門流の說によりたる誤にや】

桃靑が文

桃靑が俳諧の大旨は（答曲水文）にみえたり其文に風雅の道筋大かた世上三等に相見え候點取に晝夜を盡し勝負をあらそひ道をみずして走り廻る者あり彼等風雅の内のうろたへものに似申候得共點者の妻子の腹をふくらし店主の金箱を賑し候へはひがことせんには增りたるへし又其身富貴にして目にたつ慰は世上を憚り人事いはんにはしかじと日夜二卷三卷點取勝たる者もほこらす負たる者もしいて怒らすいざま一卷など又とりかゝり線香五分の間に工夫をめぐらし事終て即點取など興することども偏に少年のよみかるたにひとしされども料理を調へ酒を飽までにして貧なるものをたすけ點者を肥しむること是又道の建立の一筋なるべき歟又志をつとめ情をなぐさめあながちに是

四ツ手附
嚀附
取なし附
談林風

万堂と號したり貞德門人多れどもその跡を受たるは安原貞室なり【許六が（滑稽傳）また堀江林鴻か中島隨流著したる（永代記）の返答にも委しくいへりしかるを浮生が（滑稽太平記）には山本西武譏をうけたりといへるを正として正章が承應三年【貞德身まかりし翌年也】の試毫をそしれり西武は貞德に隨ふ事久しく正章は晩年の弟子なれば令德宗畔らも西武につきて貞室をにくみしなるべしまた貞德が西武に俳諧の批判を免したりといふはさも有へしこれより前に立圃重頼いづれも一家を立たり【重頼が犬子集編輯も貞德が免したる也寛永八年より十年に終その間立圃と確執の事ありて重頼は貞德の破門となる又鷄冠井令德が崑山集は慶安二年開板なればこれも批判を免されたるなるへし】批判を免されたる者西武のみにあらす江戸には齋藤德元石田未得高島玄札等みな同時の人なり德元寛永十八年に俳諧初學抄を上木す是江戸に俳諧書を彫刻する始なりいつれもその門葉また多し

○（誰か身のうへ）【四】ある人はいかいの發句すへきやうをたづねられ侍し予いはく發句のいたしやういさゝか習ひも有なりと古人も仰られしかど初心のうちは世上に出たる俳諧の書を能く覺えて其時を知るをもつて一ツの習といたしさふろふ也云々問云すでに世に出たる集を手本とせよと仰らるれども今世の集には集一ツには非言の書二ツも三ツもあればいづれを正としいづれを邪とせん答云尤よきふしん也され共其内に山井などいへる書にはいまだ非言もなくよき書かと覺侍る此書の作者は大和物語の抄などもせられたる人のよくしりて世に用ると也問云されども此作者の句に山里やいつも正月門の松とあるを去人難ぜしはもし此句を山里やいつもむ月の門の松とよみさふらはゝ連歌たるべしと答曰これこそいはれね非言なり先この發句はいつも正月といへる世話にてしたてたる句なり云々】

○宗鑑守武の頃はおかしく興ある事を專らとしたり其後は理屈になりぬ附合も連歌の古體にて四ツ手附嚀附取なし附などにてありしを西山宗因出て其古風を變し談林風を起すそれより文字あまり或は漢

六玉川、川柳點、五文字、片歌、五色墨、同評】

俳諧

〇俳諧を古くより誹諧と誤り來れりされは連屬して書んには可なるべし俳諧と連歌は猿樂の能と狂言のごとし古へ連歌の客には二三句つゝにて入興したりとなん宗鑑が犬菟波集「山崎宗鑑法師は近江源氏にて佐々木の一族なり志那彌三郎範重といひし延德の頃六角高賴甲賀山に籠り居しに將軍義尙公軍勢を引率し馳向ひ勾里の陣中にて薨し玉ひける範重も供奉せられしが此時初めて浮世のあだなることを悟りて頓て髻を切津の國尼崎に閑居せられしが後に山崎の鄕に遷り常に油筒を鬻きて世わたる業とし朝げ夕げには鳥目十錢づゝはたごに持行しとなり室には藥罐一つより外は蓄るものなしといへり（新著聞集）」はそれらをあつめたる也守武が千句より長くつらぬると起れり宗鑑守武同時の人なれども守武は宗鑑より十年あまり後れたり【浮生が（原俳論）に山崎の宗鑑守武先生の正統を學びて犬筑波を撰むといへるは誤なり】守武が千句の跋に周桂かたへ此道の式目いまだみずみやこにはいかむと大かたのむねたつねしかばかゝる式目は予こそ定むべけれさためよそれを用ゆへきのされたる返事くたり合せ云々本連歌に露かはるへからず大事ならむか兼裁このみにて心ものひ他念なきとて長座にはかならすもよほし庭鳥がうつほになると夢をみせ聟入に一はしをわたり宗碩は文かよはしの自讃に入あひのかねをこしにさし宗鑑よりたひ〳〵發句なとくたし侍り近くは宗牧一二座わすれかたくそれらをたよりにておもひよる事しかなり云々【この時天文九年にて守武六十八歲なるべし周桂は堺の人宗碩が子なり兼裁は兼純が父にて奧州の人宗牧は宗養が父なりこれも堺の人いつれも連歌師なり【其後松永淸

法式

左衞門貞德俳諧の宗匠となりその式を定む雛屋立圃これをうけて（噫草）を著す貞德が（御傘）はその後に出是より法式定りて今に至るそのかみ千句もする人は稀にて令德が獨吟千句に貞德おく書をして

俳諧沿革

守武已後千句といふもの俳諧に見すといへり後には次第に多く西鶴は一日に二万三千句をつらねて二

る事なり又此時昌琢が歳旦の句、於武州江戸初而越年寛永五年元旦試毫とありて長閑さはけに日本のあつまかな【この二句を昌琢が書たる予が家にあり昌琢予が家にも來りしとなむ】

○（塩尻）に天正三年正月十七日の夜天野康景が妾目出たき夢想の歌を見しとて十八日朝啓せしかば廿日御鎧の御祝の時連歌しける者共を召て一折仰付られしこれより今に至りても正月松の發句にて御連歌あり彼夢想の歌は盛りなる都の花は散うせてあづまの松ぞ世をば經にける云々但シ（三州錄）に此歌は慶長三年正月二日の夜江戸にて米津清右衞門某が妻夢みる所といへりそれには東の松ぞ世をばつぎけるといへり康景が妻は松の發句を夢想有りしとばかりしるして句はみえ侍らず

連歌會

裏白の連歌

○（京羽二重）【元祿二年版】連歌會【目次十日六條道場目次廿五日北野會所】また毎年正月四日北野松梅院に裏白の連歌あり凡連歌懐紙は四枚也中古執筆の人あやまりて片面を除て書しるさずこれより流例となり片々白紙を置又外に紙一枚をそへて五枚とすこれに依て裏白の連歌といふとありおもふ正月は物祝ふ月なれば四の音を忌てかくせしが例となりたるならん又或書に紀伊國熊野權現の本宮の拜殿にて毎年正月二日社家と地下人と相交りて百韻の連歌興行あり其發句は往古神託の句なりといふ、

この山のあるしは花のこかけかな

○連歌は紹巴のいへる如く後世は人の耳に止るほどの發句もなしとみえたり（花見車）と云ふ草子に宗祇宗鑑の頃の句はいかにもをもしろくてはし／＼の耳にも止りたるなり紹巴このかたついに連歌の發句とて人の語るとなり近頃北野の能順こそ一ふしある句も出さるゝとて心なきまでも耳にふれけれどもこれも七十にあまりてかすかにきこゆる名なれば日暮て道いそぐやうなりといへり

俳諧【式法、俳諧沿革、談林江戸に始る、桃靑が文（フミ）、付合、其角が說、古式、點法、正風體、座敷乞食、天狗はいかい、前句附、冠付、三笠附、地口付、もじり、物は付、

き又ある時紹巴の御句ばかりをぬき書にせんと申せしかば其事無用なり今よき句は有へからす我もわかき時はふかく案じつるが今は毎日ある會只やりやうをのみ心にかけて案する事なし若書ぬかんと思はゞ打こしより書て給はれと申されし誠に尤なる詞にて侍云々あり紹巴は心も剛に力つよく正直にしこ無欲なる人なりとぞ世に光秀が愛宕の連歌の發句しるといふ文字を消て又もとの如く書直したりなといふは關白秀次の時嫌(ウタガヒ)をうけて罪せられしをまがひて作り事せし物なり

移徙の連歌

○安樂庵が（醒睡笑）に移徙の連歌に春の日は軒端につきてまはるらんといふ句を出せり宗匠消せ〳〵といはるゝ執筆墨がくろうてけされぬといふ時右の作者何とやうにも消せまた付う程にといへるは誰もしりたる話にてこの頃の咄のやうに人の物かたりするを度々聞たり此草子に出て古き話なるをしらぬなり

露の字を質に置

○諺に連歌師が露字を質に置といふは何よりいひ出たるとか（世の人心）【五】昔日立花の家より鳶尾(シヤガ)の前置を金子百兩の質に入れ連歌の花の下より露といふ字を黄金二拾枚に置れける質にあるうちは花さしに鳶尾をつかはせず連歌師に露といふをいださせぬは此約束を迷惑して請られけるといへりおもふ作者の滑稽なるべしさりながら立花連歌はやりたればかゝる說も有なり（溫故集）にむかし露といふ字を質に置たまへるとは連歌師の風流なりしら露の手形もとりて今朝の秋【蓮谷】【今これらの趣向に倣ひたる事にや火消屋敷のくわゐんは草鞋を質に置き歌舞伎芝居にては拍子木太鼓の撥をも質に置となん】

古歌を覺えし事
江戸正月の連歌

○昔の連歌師は勤めて古歌を覺えたるにや玄的の八千首ばかり昌琢は一万首餘り闇記したりしより（筆のすさみ）にいへり昌琢の時より江戸御城にて御連歌は始れり毎年正月御嘉例の御連歌始りしは寛永五年廿日なりその時の發句、松にみむ八百万代の春の色法橋昌琢としたるよし今に松を發句にす

づけられわろき連歌をば栗本の衆と名付られはべりき柿本の長者とて異なるけんせうの事そはへりし同御時とのゐ百の賭物のをりも定家卿は四十とられたると日記にもはへる爲家卿も齢たけては歌案じつゞくるはむつかしとて朝夕連歌をのみぞせられけるとぞ承はりし後嵯峨の院の御代には辨内侍少將内侍なといひし女房連歌しにていとはえ／＼しき事ども侍りきこの比地下にのみもてあそぶ事になれるいと無念なるわざなり花本の言葉うたにたがひたらばたゞ歌のやうの面白き句とも〻せられ侍らは子細あるまじきに歌の毒とて一向にすてられ侍る事は昔にはたがひたる事にこそ詩作る人の連歌きらふは未なしなりとて歌よみの連歌を忌たまふらん初心のをりこそ用心も侍るへけれ口も心も定りたらん人のれんがにとられ玉ふ事や有へき

詩歌の代作

○（可笑記）【正保元年卷二】上かた衆は花車だてはめさるれども萬ふたしなみかと存るそのいはれは歌の道には公家のめん／＼おはします詩作には五山のめん／＼おはします連歌には昌琢玄仲の宗匠あり師匠に不足なけれ共百人が九十人迄は連歌詩作などは少もしりたる侍まれ也但その用あらん時にはそれ／＼を頼みてまに合せんとやおほすらんけにも／＼代官主いんに增るとなればさもこそあらめ但又灯臺もとくらしといへる本の語にもとつき給ふか東の侍は佛道儒道歌連歌詩作など能こそしらね少づゝは百人の内七八十人は心得申候さりなからよき師匠もなければひがことのみ多かるべし云々その頃さも有しにやしらず

後世よき付句なき事

○連歌後ほとおもしろき付句なきは（歌林雜話）に紹巴法橋宿にて千句の有しに天滿の由己と丸と二人夜ふかく行たりしにいまだ連衆一人もなし紹巴月剃をしておはしけるが人にかたらは僞にせむと云句に「一こゑは秋の山路の時鳥」と古人の句にあり連歌に前句によりて名句ある事今もかやうの前句あらは我らも付へけれども今はかやうに一句の道理なき事はせぬによりて付句によき句なきなりと申され

芳精舍にて救濟法師あまひこか谷と峯とのほと丶きすといふ句をとりたるか夢庵は肖柏が號なり肖柏は後柏原の後胤なりといふ泉州堺に居れり春さかぬ花や心のふかみ草といふ秀句ありしより此人牡丹花と稱す宗祇の門人なり古今傳授は宗祇より逍遙院稱名院などに傳はり又宗祇より牡丹花饅頭屋に傳ふを奈良傳授といふ今このきうじんより傳ふるは何の傳授とか稱へん

古今傳授
奈良傳授

道印幸順
基佐

○宗祇の時代江戸品河に道印幸順とて父子富有なる町人にて連歌を好めるものあり此事三浦氏の（見聞集）に見えたり原文長ければこゝには撮要して錄す權大僧都心敬といふ連歌師都より年毎に下りて鈴木道印父子と知音にて其家に宿りしとなん品川九品寺にて九つの品かはりたるはちすかなと發句したるを人聞て河に蓮珍事と沙汰しければ極樂の前に流るゝあみた川はちすならてはこと草もなしと心敬諸歌を引れたり堀川江城に於て千句ありし連衆は心敬宗祇元祐道印幸順印幸なり開頭の發句に幸順春もきて歸らむ雪のあしたかなこの幸順俳諧も數寄にや有つらん反古の背に書殘したる付合あり元祐は櫻井氏にて生國は下總舟橋の人都に上り連歌に長ずる故に參內したりとかや下向に品川なる幸順宿に立よりける上りにはまづしき體なりしが此時衣裳もよきを着たれば幸順あやしや御身誰にかり衣といひかけたれば取あへすこの小袖人のかたよりくれはをり【今案にこの連歌（新撰狂歌集）に般若坊にある人いひかけたりと有て御身を御僧と書たり】と付たりこの幸順父子品川に七堂伽藍を建立したりしがみな風に損して只塔一ツばかり殘りたり文安三丙丑年成就せしとなり撞鐘にも年號ありしが當年慶長十九甲寅の八月廿八日未刻大風吹て百六十九年品川の名物なりし塔も倒れ壞けたり【塔のと爰には川なき事ながらいとめづらしくて】

柿本の衆
栗本の衆

○一條禪閤（小夜のねざめ）に爲氏卿は日本の物の上手を唐國へ遣されば我身は連歌の名にてや人の國までも渡るべきなど狂言まうされけるとかや後鳥羽院の御世にはよき連歌の上手をば柿本の衆と名

けるに小川のはたにて我かひける犬の主をしりて飛付たるを猫またと心得おそれ驚きて小川にころび入て叫びたるを家々より出て抱きおこしたれば連歌の賭とりて扇小笥なんどふところに持たるも水に入ぬといへる物語あり又同草子【花は盛りの段】田舍の人こそ色こく万は興ずれ花の下にはねぢより立よりあからめもせずまもりて酒のみ連歌してはては大なる枝心なく折とりぬといへるは件の落書にいへる鎌倉武士なとのゑせ連歌の輩なるへし點者にならぬ人そなきとは田舍には判者をもえらまさりしにや【今世の俳諧師狂歌師の如し】判者を點者といひしとも古きとなり宗祇以前は百句滿るとは稀なりといへり宗祇が子孫のとは（賑草）に大虛庵光悅かわかき時きうじんといひし人ありし悅物かたりにけだかく風流なるといひ出る次でにはきうじんがとをかたりきかせけれどもそのほどはまだ心もいわけなき程の時なりければ同し物がたり度々也などばかり打思ひて聞とゞむべき心は更になかりし程にきうじんといふ文字も覺侍らずさりけれども宗祇の子孫なりしとはたしかにしるきとども覺えて侍る也其頃八十にも及ぶ程の老人と聞えしと有り此下に宗祇自筆古今傳授の笥をきうじん光悅に傳へ寫させ其自筆の原本は後に光悅媒して光廣卿に傳へし事あり文長ければ略之光廣卿は光悅に手をならはれし因によりて也僧日重が（和語抄）【賑草に抄出あり】古今は宗祇より夢庵逍遙院殿傳授ありと云々宗祇宗匠になられし初の發句あらぬ名をかるやあま彥ほとゝきす不吉なるやうなりといへは此發句にこなくは宗匠にはなるましといはれし卑下の心なり宗祇の後は兼栽宗匠になられし宗匠になりては白

紹巴宗匠にならず

袴にぬり輿にて往還せり紹巴はこのやうなるとを六借かりてなるへき人なれ共なられす【この本滿寺日重は一宗の學者にて老後幽齋紹巴にも親く交りたる者也】古今傳授次第の事は一時新帷中が（續無名抄）中卷にありこゝにいへる說は非なり

○また紹巴が生涯の事は貞德が（歌林雜話）に詳なり宗祇宗匠になりし時の發句は（菟玖波集）に西

應安二年に同公新式を造らる猶たらざることもあるにや宗砌法師七句さる物竹田の舟路云々の歌あり（御傘）にこのことをいひて新式になしとてもなにの疑かあらむ此宗砌は連歌道には人丸にたとへて宗祇のあがめおかれし人なり云々いへり其後宗祇新撰筑波を集む宗祇は紀州の人藥師家の子なり自然齋また種玉庵とも號すはじめある律院【いづこともなし】にて僧となり和歌を好しが後山水名勝を尋て遊歴し東野州常緣に隨ひて古今集の奥儀を傳はりぬ【古今傳受といふことの起りなり】連歌をもて一家をなし此道の棟梁たる世に宗匠とし花下と稱せらる

花下

○花下といふことは（菟玖波集）の僧正慈遍が眞字序に或詠花下或嘯月前之鞏云々普光園の序に代々のひしりの御門も撰集にくはへ家々の道をえたる人も式目を作りて久しく雲のうへのもてあそび花のもとのたはふれとなれりとあるによりてなるべし【又（菟玖波集）第廿に新式本式相わかれけるに鷲尾の花下にて百二十句連歌【善阿法師】枝のこる花は老木のかざしかな又花下連歌【十佛法師】花に來て雪にわするゝ家路かな又夢窓國師圓寂の後西芳精舍の花下にて百韻連歌侍りしに二品親王花や夢散はうつゝの名殘かな】花下を新在家と稱すそこは宗祇以來宗匠の居住の地なり【（東牖子）に此處今は或御所となりぬもとは熨斗目師も住めりとぞ依て今も猶のしめ織の標札に新在家御熨斗目師とかきたり】（見聞集）に宗祇都の會所をあつかり給ふ祝詞の發句に世にたつも麻にましはる蓬かなとせられしこそ殊勝に覺侍れ【老人雜話】に宗祇は今より百四五十年以前の人なり其時會の給仕などせし者に成庵といへる者に會すといへり按るに建武元年（二條河原落書）に事新き風情なく京鎌倉をこきませて一座そろはぬゑせ連歌在々所々の歌連歌點者にならぬ人ぞなき云々あり其式もまたよく定まらぬ程のことなるにかく世にはやりしなりこれも歌合なとの如く賭を出し勝負せし事と見えて（徒然草）に何

連歌賭物

阿彌だぶとかや連歌しける法師の行願寺のほとりに有けるがある處に夜更るまで連歌して只獨かへり

名の詩といふ事を人々いひ出侍るを戯れに恵比須大黒を、かるさんはいて鯛をうろ〳〵、袋かついて米は〳〵と、遊むてゆかぬうきよしれとや、七福神も異見をいひ顔。傾城を、風に柳の身をまかせうち、世をうき草のうきを思ふに、笑ふてかなしき日をくらしかね、泣てうれしき夜を惜むらし、

チクラ

○唐人の詞をもてこゝの事を書むには手づゝにしては何この文とも云がたきやうなるをチクラといふ、別源圓旨が（東歸集）の雲臥が序に學唐言說道理喚作新羅人云々いへるは其意に近し

詩を集てけい物を出す

○詩をあつめて賞物をいだしたるとあり元人吳渭月泉吟社とて至元二十三年丙戌十月春日田園雜興と云題を出し體は五七言律詩なりこれを天下に徇て翌年丁亥三月三日を揭曉と定む作者二百八十八人二千七百三十五首集れり謝翺と云もの考官たり選に中る詩六十首を集列す首名より五十名まで詩賞あり筆墨に雜布等を贈る次第によりて甲乙あり輕きは筆墨吟箋などなり作者は皆僞名を出せり此事（徐氏筆精）に見えたり

連歌

○歌をうたとはうたふ義なり漢土の詩におなじ彼處にも詩に歌といへるも多し故に万葉集に歌を倭詩といへり歌にさま〴〵あり筑波の神詠をはしめ上の句にも下の句にもあれ二人して一首の歌を作り是古への連歌なり撰集には金葉集に始て連歌の部を立られたり（八雲御抄）に昔は五十韵百韵とつゞくるとはなしたゞ上句にても下句にてもいひかけつればいまながらを付ける也今のやうにくさるとは中頃よりのとなり賦物なども中頃よりのと歟【（筑波問答）に後鳥羽院建保のころよりしろくろまた色々の賦しものゝひとり連歌を定家卿家隆卿などにめされ侍りしより百韻などにも侍るにやとも云り】とあり（名所和歌物語）に建治二年鎌倉藤谷に於て冷泉爲相卿本式目と號し述作なり其後新式目は爲藤卿の作なりしかるを後普光園攝政公應安五年にあらため書加へらるゝ處を新式目追加と號す又其後宗

宗匠

砌法師宗匠にて沙汰せられたるを新式今案といへり文和中【五年】に普光園良基公菟玖波集を撰まれ

山に學ひて文才拙からす井上友貞といふ俳諧師と狂吟の和漢々和千句に追加二百韻つらねけり其作むかしよりこれほどよろしきはなし狂連といへばたゞ野鄙なるものとのみ思ふは非なり其趣をよくしる時は眞の句もおなじことにて只俳言を用るはかりのちがひなり云々昌純が詞の末残り多く且又百句つらぬるにもあらすいひ捨の章句ばかりには子細あるましきかかの道二すでに七言の句もあるにならひて今これをましへ備る云々見えたり元隣が（寶倉）は咏物なり下りては無轍が（三盃機嫌）は野郎を評すまた（元祿曾我）に水木辰之助七變化の秘曲を盡し世こそつて評判七變化狂詩といふ一卷を作り金や平兵衛櫻にちりはめ世に流しけるといへり吉原のことを賦したるものも往々あり聞えたる作家にもたま／＼ざれごとに作りたるもあるへけれどしられざるなるべし木下氏劄記に林道春風鈴詩渾身是口掛虛空不問東西南北風終日爲他說般若的丁東了的丁東ある人紅葉の鹿の繪かきたる扇子をもて南郭元喬に題詩を請ひければ其まゝ筆とりて客來素紈覓詩處古歌一首有相宜奧山楓踏分鳴鹿聲聽時曾秋者悲とかきたりとなむ又松岡元達藥を荻生徂徠に贈る詩あり調合進申芍藥湯生姜一片煎如常平生食物肝要事唯許牛蒡與大根この詩藥方煎法食忌まで一絕の中にこもれり近世銅脉恍惚は高名なり

假字の詩

○假字の詩といふものあり（延寶八年田舍句合）螺子農夫野人を左右に別ち詩の體五十句をつゞるといへども詩とも聞えすかなの詩は五音相通のかなを韻とす去來が鼠の賦その體なり（風俗文選）は李由が序に和文には文字のかずさたまらず韻字とてもなししかるを去來が鼠賦に五音相通のかなをもて韻とすこれ和文に韻をふめるの一格なり（本朝文鑑）支考茶詩に梅はたま／＼詩に忘れけむ、茶は何とてか歌によまれぬ、雨にさびしき俳諧を聞て、豆煎る宿に音をのみぞなく、咏蝿に、蝿はなど蝶に似たる、風雅にもにくまれて、疱顏はなふるとも、兀頭にとまらされ、香を尋ぬ酒のあたり、花にあそぶ食のうへ、秋風のたよりあらば、晝寐せぬ國へゆけ、此等の類也紀逸が（雜話抄）に近きころ假

けるに言下に季親含陰先達儒とぞ付たりけるにがりて云ことなかりけり

漢和聯句 狂詩

○漢和連句のこと狂詩といふもの古くは聞えず五山の僧等がそれをより出きしなるへし一休狂雲集二巻あり其內狂詩多し唐人に捧腹すへき詩句あれ共それを狂詩ともいはす狂詩また逸狂詩ともいふ（殘唐五代史演義傳）の內に往々あり其體は瀧鬬賊破寇無休堅守招兵或可收恨殺奸臣無計策輕移車駕上祁州此類にて皆當時のことをありの儘に賦したりこゝにいふ落書の體に似たり（百物語）にいにしへはいかいのれんぐはやりし時名人の句とて人のかたりしは雲雁過ニ雲雁一。水魚達ニ水魚一。鹿々鳴明ス鹿。鶉々睡暮ス鶉。咄自ニ口邊一出。睡令ニ目下垂一。油因ニ油斷一斷。火以ニ火吹一吹。こは寛永の冊子なり

○又（東見記）に好對多く出【その內雄長老が句に白川隣黑谷、紫野近丹波、八坂五重塔、三條六角堂、小僧參北野、大佛在南都、櫻東山地主、梅北野天神、など見ゆ

○（和語抄）に宗祇新菟玖波を撰しに櫻井永仙が連歌不入これによりて落書を立しと遙見樂波錢使入不論上手與下手足なくてのほりかねぬるつくは山和歌の道には達者なれとも永仙は櫻井碁輔なり

漢和聯句 和漢聯句

○漢和連句のことは（古筑波集）に始て出つ和漢は擧句漢たるへし漢和は擧句和句たるへしと（無言抄）に見えたり（枕草子）に蘭省花時錦帳下と云てすゑはいかにとありしかは共おくにすびつのきえたる炭のあるして草のいほりを誰か尋ねんと書つけしと云ことありこれ漢和連句に似たることなり漢和の連句は五言にて和句十七文字に長短等しからす故に（雅筵醉狂集）に漢句も五言のみに限るへからす殊に横折の懷紙はさのみ目にもたゝねと堅の一巡の時は和句長きに漢句五言にてはつり合ず見ぐるしければ七言をも相交へては如何にと里村昌純にたつねければ答へに愚拙も兼々左樣に存候へ共然し漢句の式を連歌師の定むへきにもあらす候何とぞ官位高く文字ある方の遊はし初められたらはおのづから世に行はれなむかしと有けり近頃甲良道二といふ隱者あり里村氏が一家故連歌の事能しれり詩は石川丈

本朝詩賦の始

○（今昔物語）に天智天皇の御代に御子在ましける心に智り有て才賢かりけり文の道をは極めて好み給ひける詩賦を造ることは此御子の時よりぞ此國には始りける此事は（本朝一人一首）に日本紀曰詩賦之興自大津始也記淑望古今和歌集序曰大津皇子始作詩賦何不言大友乎想夫壬申之亂大友天命不遂而太弟得志是天武帝也舍人親王者天武子也故撰日本紀時諱而不言之乎抑亦大友子孫僤而不傳之乎大友久蒙叛逆之寃故其詩不傳于世是以淑望亦未見乎微懷風藻則大友之寥々乎これ詩賦の始にて續紀より以降盛りに行はれたり

聯句　聯詩

○後世聯句といふとあり又聯詩といふ（玉海）曰文治三年二月廿七日御書所作文云々先例連句不過五韻云々而天永以往多有二十餘韻餘可追舊例之由豫以仰宗隆仍連句有二十韻と見ゆ五山の僧徒此技に長ず其式漢土の連句とは異なり此にて創意に造りしとと見えたりこれにも點とりあり東山如月和尚が（幼學詩句）と云ものに予わかい時たんだんの句にて百句あつたに買絲春綉蝶としたに被縛日纒蠶とつけられたぞと點を景徐にとるぞ此一對まるあり予が章句を皆ほめられたぞ買絲綉作平原君と云句でしたぞ又對のことをつれといへり【嵯峨策彦和尚】が（蠡測集）に何やうに菊を秋の靖節としたを海棠は春の貴妃のつれぞなど往々見ゆ連字の意にや

またいとおかしきは（笑林）に詩あり日暖看三織風高闘兩廂蛙翻白出潤蚓死紫□長云々自註に方書見三蛛結網又見兩雀闘于廂簷次聯云一蛙跳擲而忽翻其白肚似出字一蚓死于砌下如紫之字也云々あり思ふに（席上腐談）に或謂蛙形象出蚓形象之此皆魚骨象乙之意也云々この語を取て作れるにやまた高敖曹の詩に桃生毛彈一弧長捧搥兒犢欲壁亞腹河凍水生皮などもあり

○（十訓抄）に漏刻博士季親は周易博士にてぞ道に覺ありけれど風月の方には疎かりけり或文辛の聯句の座にひぞみ沈思しけるを其中に宗徒の儒者ありけるがこれをあなどりけるにや閉口後來客と云たり

【月の宴】おほんものいみにてつれ〳〵におほしめさるゝ日なとは【醍醐帝の御事】おまへにめしいてゝ【女房たちを】ごすくろくうたせへんをつかせいしなとりをせさせて御らんしなどまてそおはしましければと見ゆ此へんをつかせとあるは文字の偏につくりをそへて何の字となるを知るヿと聞ゆれはへんつきはつくりをかくして云々の說は非なるへし

○文字合といふものあり何人の作れるヿを知ず其序に抑文字合は篇繼と名つけていそのかみ古き昔はやことなき人々の翫ひ給ふとなん傳りしかいつしか此ヿ絕はてゝとりはやす人もなくなりぬ然るを予愚にも淸少納言の文より思ひつき兒達の大和唐土の書をも學ひ給ふのはしともなりなんやと先はいまだしらざる文字を人にも問ずして自ら知りたとへば崔雀 衭 衦 等のまきらはしきをも辨へ又は知らざるを恥て友とちのはげみともなりなんに艸出なば齊字を齋と讀てとりなんものをと思ひ侍りしに月篇出たれはかたへの人いちはやく腡と讀て取けるもおかし云々享保十年とあり凡例に合せやう歌がるたの如く篇冠は中に重ね置造はこと〴〵く幷へ置論へば初めに魚篇出れば魚篇の文字をおもひ〳〵に取つくし云々才出たらば合といふ字を拾とよみ又寺といふ字を持とよみてとるいづれもかくの如し多くとりたるを勝とす造毎に其造につく篇四五字づゝを和歌につゝりて覺えやすからしむとあり思ふに小野篁が歌字盡といへるものこの類なり篁の作とするは論ずるに足らず歌字盡といへるもいかゞなり文字合の料とこそ見ゆれさりながら此體にて古き物もあり（瓊玉集）といふ古寫本なり序曰愚昧沙門圓一念佛之暇徒然之餘開一字篇作以合本字々綴成三言云々康應元年上旬信州小管山眠居比丘圓一謹記之とあり其句體は天一大日月明、地土也、卉木椅、日者暑、月良朗、弗人佛、玆心慈、かくの如しこは篇繼の料にも有べからず康應は南朝の元中六年にてたゞ一年なり韻寒の歌（巾務集）になつ山のしけりをわけてなく鹿をいかてとものゝ人尋ぬらん

い石筆【冥仲】石筆は紅毛より渡るホツトロウといふもの也（本草）に五色石脂を載その内黒石脂は是に似たりと（本草啓蒙）にもいへりされども黒石脂はいまだわたらざる物なり貝原氏の（大和本草）に黒土といふ物を載て山州山科の東牛の尾山觀音堂の後に黒き土あり青色を帶ねばく〱て細なり筆に浸して字を書べし云々（啓蒙）云嵐山天台山貴船幡枝大原吉田鹿谷鷹峯其外諸州にあり此を砂を去り石筆に造れば淡青色となるといへり即黒石脂なり黒石脂一名黒石といふ（品字箋）に出たり懷に收めて筆墨に代用べし又市中にて售る石筆に硯石の粉に蠟を和て鋌に製るものありこれにて合子杯などの漆器に書畫をかき假鍮のやすり粉をふりかけて拂ひ落せば書たる處にばかり金の粉つきて蒔繪したるが如しその器に水を入るればよく光りてみゆ此手遊いつのころよりにか（江戸名物かゝみ）に見えざれば明和已後の物とはみゆ

詩歌【掩韻、へんつき、文字合、歌字盡、本朝詩賦の始、連句、漢和、狂詩、假字の詩】

連歌【花下、連歌賭物、點者、紹巴宗匠にならざること、古今傳授、道印幸順基佐【品川の塔】後世よき付句なきこと、移徙の連歌、露字を質とす、古歌を覺えしこと、江戸正月の御連歌、連歌會、裏白連歌】

ゐんふたぎ　ゐんふたぎは掩韻と書り（西宮記）宸宴の條延喜二年七月十七日（略）有掩韻事（源氏）【榊】はかせともめしあつめてふみつくりゐんふたきなとやうのすさひ云々（河海抄）に古集の韻字をふたきて何文の字と勝負する也上古掩韻を爲宗不好連句云々見ゆ（孝範朝臣記）その何字と推あてたるを明と云なり（清少納言）にゐふたきのあけとうしたるなとある是なり明（あく）るの疾（とき）をいふ又これに似たることにへんつきといふあり（源氏）【橋姫】碁打へんつきなとはかなき遊ひわさにつけても云々稱名院の說に文字のつくりと篇とを分てつくりをかくして篇をもつて何といふ文字と言あつるとありされど（榮花）

へんつき

は人みなほめにけり【或人云燒繪は炭火の上の白灰をとりて研墨に交て繪にても文字にても書て燥し紙捻のさきに火をつけて彼書たる處に火を付ければ火は墨をつたひやけ行て彫たる如くになる也といへりこれはまことのやき繪にあらず】(好古日錄)に燒畫古製のもの此間の紙を用其燒と濃淡ありて着色の狀あり今存するもの至て尠し又唐紙を用るものあり至古のものを見ず異邦の製と同し(曠園雜記)に火炭作畫武怙安寧州人能以火炭畫竹絹精巧不可多得【曠園雜志は吳陳琰が撰にて(說鈴)の內に收めたり】また(述異記)に永寧州通大道處有上岡々側一小茅庵々中一道人以賣馬鞭竹快爲業傍置一爐取炭焠鞭快即成人物山水花鳥較倭銀更細所獲錢即修路及橋云々これまた燒繪なり竹快とは竹筋なるべし倭銀といへるは紅毛の銀錢などをいふにや本邦の銀に繪はなし(源平盛衰記)に三浦義盛が矢に三浦小太郎義盛と燒繪したりけるとあるは燒印なり文字をも燒繪といへるは繪のやうなればにや紙に燒は小き鏝を作り火に燒て紙に繪をかくなり鏝は好みに任せて色々あり生紙には燒がたし奉書などの厚きをよしとす

あぶり出し

○(物理小識)【八】礬書白字と有て皂礬水寫字入五倍子水中鹽滷寫紙烘以火草麻子油寫撒紙灰或杏仁灰俱可見又曰白芨研汁入礦灰蘸礦灰書黃竹紙俱如丹これ今のあぶり出しと云もの也こゝにてするは酒をもて物を書き火にあふる異國の方よりも簡易なり同書に寫不上者有法として薑汁研墨書布絹不湮石工以大蒜粘石市鍋者以蘿蔔書鍋肥皂水磨墨書油紙畫燭とあり今こゝにて油紙に墨繪など書には鐵漿を墨に和用

寫不上者有法

石筆

○石筆(名所和歌物語)自序にこゝかしこ見ありき名所舊跡を尋とひ石の筆の禿になり云々(續山井)石筆か岩ねに生るつく〳〵し【呂保】(洛陽集)石筆や古今に步む春の客【松扇】(一代男)【七】しはしまてとへはな紙に石筆をはやめ云々【其砧】杖きらひ普請奉行に撰出され【瓦難】折はいたさぬ赤

に松脂を入また青松葉よく搗て其汁を入たるもよし墨に筆に漬し水のうへに筆先を入れは墨丸く浮むを細き竹串箸なとの先頭髪を撫て油氣を付てさし入れば墨開き散めぐる時其鉢を靜に動かせば色々にうづまくを紙を漬して移しとるなり金泥は紙を板に張て乾あげて墨の間を彩るなり（簍絨輪）更る夜の油烟ざしきの墨流し（江戸名物鑑）墨流一筆【唐迄も雲の峯】

しやぼん

○今しやぼんとて無患子(ムク)芋がら烟草莖などを燒たる粉を水に漬し竹の細き管に其汁を蘸て吹は玉飛て日に映じ五色に光りてみゆ眞のシャボンは（本）草土部に石鹼といふもの也こゝにも蠻船將來る灰色の煉ものなり蘭人はセツプといひ羅甸語にサボーネといふを叟にてしやぼんといふなり衣服の油を洗ふに無患子皮と白小豆を粉にして澡豆に用ふる故に白小豆をシャボン豆とも呼ふ覇王樹も截たる小口にて蠱などの油つきたるを摩ておとす故サホテンと呼たるはます〳〵轉じたり件の玉を吹ことを水圏戯

水圏戯

といふ（物理小識）に出たり濃鹼水松香末蘸小箆圏揮之大小成毬飛去劉若愚言熹宗能戯以水拋空中成園（洛陽集）に空やみとりしやぼん吹れて夕雲雀【一春寛文延寶の俳諧なり】（紀逸點）しやぼんの玉の門を出て行叉我貌の面目もなきしやぼん吹（唐書）【卅五】大中末京師小兒疊布漬水紐之向日謂之曰

拔暈

拔暈この文簡にして分明ならねど布を水にひたして日に向ひ布を透してみれば彩色虹のことくなるにや日に向ひて水を含みふき出せば虹の如く見ゆるもの也【此事（茅窓漫錄）にありとおぼゆ】これ又拔暈ともいふへし

燒繪

○燒繪信實朝臣の（今物語）にやむごとなき人のもとに今參りのさふらひ出來にけるやきゑをめてたくするよし聞えけれは前によひて檀紙にやき繪をせさせけるに何をかやき侍るへきといひければ水にをしをやけといはれけるに打うなつき水にはをしをいかゝ燒べきと口すさみけるをあるし聞とがめておなしくは一首になせといはれけれはかいかしこまりて波のうつ岩より火をはいたすともといへりけれ

水上の書畫

水上に書畫をかくは墨流しの方なり（物類相感志）云磨黃岑寫時在紙上以水沈去紙則字畫脫在水面上【此書蘇軾著とあれども書中に東坡が筆を収る法をいへり後人のさかしらに作者を記せり】また黃蘗白礬を用ひて字をかくもよし又一法小豆粉一匁黃柏五分明礬一分これを麻切に包み水にて濕し紙にひたし其上に文字にても繪にても書て水の內に浮め細き竹串にて紙を突ば紙は底に沈み書たる墨ばかり水上に浮み殘るなり又明バンにてかきたるは白紙の如くなれど水中に漬せば文字あらはる】

白字

（暌車志）にをさなき物語あり李恒といふ者巫祝を業とす陳增といふ者の妻李恒とよひて巫事をなさしむるに手洗の水に白紙を沈めて祝すその紙のうへに鬼ふたりにて女を捕へて曳ゆくさま顯れければ妻女これを懼ろしく思ひて夫の陳增に告しかば陳增その明の日また李恒を呼しめ手洗の水に紙を沈めて李恒が妻のしゝ如くにして李恒に見せしむその紙のうへに數多の鬼ども一人の男を追責て行處をうつせりその男の名をしるして李恒とありければ李恒は慚おそれて逃歸れりと也其注に蓋以白礬畫紙上沈水中與水同色といへり

水を吹て字をかく

○水を吹て壁に字をかく事西鶴が（置土產）に陰子(カゲコ)どもの藝をいふ處に松風琴之丞年十七影人形よくつかひ申候此ほか口から水を吹出し壁に文字をうつし申候【祐信が繪本に遊女水を吹て壁に文字を寫す圖あり】

墨流し

○墨流しはふるき物なり（古今集）【第十物名部】にすみながし春かすみなかしかよひちなかりせは秋くる雁はかへらさらまし【春霞の中の通路といふなり】（尺素往來）に內曇墨流等之短策懷紙云々藤貞幹云墨流し後世種々奇巧をなすが如きは古昔なし淡墨を用ゆ一條の桼烟風に隨て飄るが如し四百年許のものに甚雅趣のもの有【墨流の法桐の木白灰一匁松脂五分明礬三分これをまぜ合せ墨または紅粉藍などの繪の具を加へ用また一法墨の內へ松脂烟草のしぼり汁を入るもよし先油氣なき器に水を汲硯墨

繪解比丘尼

めくらなりけれ判云平素は入道のすかたにて盲目なり繪をとくは俗形にして離婁か明をおもてとしてしかも四絃を弄せりしかるに繪をかたり比巴ひくといひうきめみえたるめくらといひて自他の所作をよく讀わけたる心ふかく聞ゆ云々あり其繪を見るに判詞にいへる如く俗形にて比巴を抱き雉の尾付たる柄のながき物を持箱より出したる繪をその蓋の內に置たり雉の尾はさし敎ゆるに繪のいたまざる爲と見ゆ花柄天神緣起の內にも繪解みえたりこのわざ後には熊野比丘尼のすることとなれり（東海道名所記）いつの頃にか比丘尼の伊勢熊野にまうでゝ行をつとめしにその弟子みな伊勢熊野にまいるこの故に熊野比丘尼と名付その中に聲よく歌をうたひけるあまの有てうたふて勸進しけりその弟子また歌をうたひけり又熊野の繪と名つけて地ごく極樂すべて六道のあり樣を繪にかきて繪ときをいたしおくふかくおはします女房達は寺にまうで談義なんどきくことなければ後世をしらぬ人のために比丘尼はゆるされて佛法をも勸めたりける也いつの程にかとなへうしなふて熊野伊勢には參れども行をもせず云々繪ときをもしらず歌を肝要とすみどりの眉ほそくうすけしやうし齒は雪よりも白く手足に胭脂をさし紋をこそ付ねたんからそめせんさいちや黄からちやうこん染くろちやぞめに白うらふかせ黑き帶にこしをかけ裙けたれてなかく黑きぼうしにてかしらをあぢにつゝみたればその行狀はお山風なりひたすら傾城白拍子になりたりと有もと繪解は繪を指て見せその物語を比巴に合せてかたるは專ら後世を勸るものにはあらず比丘尼後にはやり歌をうたひ手拍子をうちなどして終に好色の方に流れたり【說經祭文にうまずめぢごく血の池ぢごくといふものあり是は僞經の血盆經によりて作れるものなり比丘尼これをうたひしなるへし】比丘尼のことは遊女の條に委し併せ見べし

水上書畫【白字、墨流し、水を吹て字をかく、シヤボン、水圈戯、拔暈、燒繪、あぶり出し、寫不上者有法、石筆】

大佛餅

文章なまりて評すべきたぐひにあらず又（東牖子）に京極通誓願寺の本尊は佛師春日作の大佛なり此寺門前に餅を賣る家あり大佛餅とて繁昌し巨万の財主となる其後豊太閤洛東六波羅の南に大佛を建立せらる又別の餅屋大佛餅とて新に店を開き連綿として今にあり京極通の餅屋は業を變ず誓願寺柳馬場といふ處に宅をうつし子孫江島太郎右衛門といふ遊里にあまたの財を費し奢りて風流のみをことす（傾城禁短氣）といふものを著し京師の書林八文字屋八左衛門に與ふ實に烟花の一絶筆なり太郎左衛門は表徳を其碩といふ八左衛門は自笑といふ【其蜩が翁草に南嶺とあるは自笑が別號にや書中に近世南嶺が書し役者大全とあり是自笑が著作なり又亡人南嶺とも見えたり友人なるべし】

自笑が事

○八文字屋自笑は京師麩屋町の書肆なり近ごろ四代にて京を去り大坂安堂寺町に住す自笑本姓は安藤氏延享二年十一月十一日歿す享年八十餘京都二條寺町本覺院に墓あり

役者似顔

○芝居役者似顔は（江戸眞砂六十帖）に元祿八九年の頃元祖團十郎鍾馗に扮す其容を畫き刻みて街に賣價錢五文これより役者一枚畫といふもの數種を刻すといへるは非なり又（寸錦雜綴）に壺春堂が嵐音八の似顔畫を俳優眞圖のはじめにやといへるは何事ぞや似かほの一枚ゑは延寶天和の頃よりもあり

東錦繪

菱川が筆とおぼしくて坊主小兵衛似がほの一枚繪を見たり圖をもうつし置ぬ○明和の初に出きたる錦繪は鈴木春信が畫なり春信は歌舞伎ゑをかゝず是あつま錦繪の最初なり

似せ繪

○肖像をにせゑといふ後堀河院御時似せ繪を御好ありけるに北面下﨟御隨身などの影を左京權太夫信實朝臣をめしてかゝせられける（著聞集）にみゆ

繪解

○畫とき古へゑときといふものあり（三十二番職人歌合）に繪解【花の歌】みところや繪よりも勝る花の紐とかうとかしを我まゝにして判云【上略】いひかなへたる姿こと葉雉の尾のさしてをしへすとも繪解の歌とはいかてか聞さらむ又述懷のうた繪をかたり比巴ひきてふるわか世こそうきめみえたる

て萌黄の表紙を付鳥居流の繪本を出す是青本の始なり後また黄表紙とかはりたれ共猶それをも青本といふ赤き表紙の本は昔よりありて是を赤本と呼ぶまた表紙の標書(ウハカキ)を紅摺にし双紙の繪も鳥居風をかへて當世錦畫樣の畫となりしは寶暦十年庚辰の春油町丸小山本九兵衞が家の双子丈阿戯作の本を始とすこれより所々のさうし題號みな紅摺となりたれ共鱗形屋のみ古風を守りしが安永五年丙申より草子の繪また表紙の題號ともに風をかへて紅摺となす【是迄は例年青表紙に題號を書赤き紙に畫をかきたり】といへり享保頃より上方の繪双紙は行成紙の表紙にて三冊もの每春發行して子供の翫とす畫工は祐信など詞書は其碩自笑など也また畫上に俳諧發句狂歌等を書たるあり小川氏が（昔噺）に京都八文字屋浮世双紙五冊もの役者評判記は其碩自笑といふ者述作にして每年正月二日定式にて大傳馬町鱗形屋孫兵衞といふ繪草子問屋賣出せり五冊ものには名文も多し評判記は京大坂江戶歌舞妓役者の顏みせ狂言の善惡の評なり顏みせ狂言十一月朔日より初れ共狂言省略にてやう／＼五六日頃よりとりしまる狂言なるを評判をしるし梓行して正月二日に江戶にて賣弘む誠に速なること驚入たる仕業なり延享寬延の頃は兩書ともみな人待かねみることなりしが五冊ものは寶暦の末より絕て梓行なし評判記は京都にて作りて今以て出れ共正月二日よりは出ず程過て江戶へ來る其故は折ふし江戶にて江戶役者ばかりの評判をこしらへ賣れども人々更に賞翫せず

八文字屋双紙

役者評判記

其碩が傳

○其碩がことは（翁草）に八文字屋自笑が（浮世双紙）の編者に江島其碩といへるありよく世情をのぶ筆勢をさ／＼近松に幷ぶ所謂（曲三味線色三味せん契情禁短氣）はた諸(もろ／＼)の容儀(カタチ)類などは今の世の人も足を翫ぶされども淨るりをかくことはならず近松は又双紙を作る事をえず云々後の南嶺は其碩を欺くばかりに作意巧みなれども其情陋しうして其碩が上に立んことかたしそれより下つかた擧ていふべき作者なし今の世に散はふよしなしことをみればつかまへ處もなき莊子のうへ行うその出來損ひにて筆しぶり

り其餘は傳はらず清少納言にも物かたりの名住吉をはしめこまの〻物がたりまで數多出したれども大かた絕て久しきを八雲御抄にも住吉の外は記されすすべて是等も古へ繪卷物にてありしなるへし後世

卷双紙

足利將軍の頃に至りてもさま〲作り出たる物多しと見えて今しほやふんしやう鉢かつぎ淨るり十二段の類御伽双紙と稱ふる物の內に收む今女子婚禮の棚飾に用るは古風の遺れるなり是を卷双紙と稱ふるは俗名ながら（源氏）【梅枝】にまたかゝぬさうしども作りくはへ表紙ひもなどいみしうせさせ給ふ（花鳥餘情）に卷物をも双紙といふ也とみえたり（沙石集）に三井寺に侍從房と云もの情あることをいふに小兒共の始てのぼりて有つかぬには繪なんど見せ遊び戲れてあり付ける（正章獨吟千句）【正保

草双紙

四年】けふよりやいろはちりぬる假名月しぐるゝ窓にひらく繪草紙また是を草双紙ともいふ思ふに昔の雙紙物語に分つが爲に後に當時出來るものをしか呼しにや草ざうしとは双紙と草子と聲同しければ草ざうしといふなりそは經山金山おなし音なるを分ちてこみちきんざんかねきん山と呼と同例なり又正章が千句にさのみ人に違はぬ猿のなり形うき名とらるゝ內裡女﨟大かたは戀ぢをかける草ざうし（西武獨吟）うつむいてみるのもとなる水濁り伊勢物かたりうつす繪双紙日に向ふ國の指圖は何のため【自注に伊勢や日向の物がたりとあれば付るなり】（懷子）任口が序に鼠のよめ入うそ姬の戀くさま

鼠の双紙

でとのためしに引ぬはなし（醍醐隨筆）に程朱を學ぶ人も又經書の外はと〲く雜學なりとて聞もいれず鼠の草紙などのやうにおもふ云々（賑草）に歌のよみやうをいふ處鼠のさうしの聟しうとの歌きくやうに成ぬべし又云川原のあやつりも草子として童女のなぐさみとす云々（御伽さうし）の內には

しらみ本

猫のさうしといふも有あやつりを草子にするは播磨太夫などが頃には淨るり版本は五段を細字に書その間に一段每に繪あり童部の翫び物とす是をしらみ本といへり江戶にてもかくのとし南畝老人語りけ

草紙沿革

るは昔の繪双紙は唐かみ表紙にて土佐淨るり本文は金平などの本にてありしを享保の頃より鱗形屋に

紅粉繪　**漆繪**　**錦繪**　**彩色摺**　**丹繪**

り其外角力また遊女等の繪もあり歌舞伎役者繪もあり是は元祿頃より殊に多くなれり丹と黃汁にて色どる紅粉繪となりしは醍醐云享保のはしめ同朋町和泉屋權四郎といふもの紅粉色の繪を賣初め是を紅粉繪といふ夫より色々に工夫して墨のうへに膠(ニカハ)をぬり金泥などを用ひて漆繪と云て大に行はるといへり其頃の前句付ひかりかゞやく／＼浮世繪にこの頃着せた黑小袖（曲亭云）錦繪は明和二年の頃唐山の彩色摺にならひて板木師金六といふ者板すり某をかたらひ版木に見當を付ることを工夫して初めて四五遍の彩色摺を製し出せしが程なく所々にて摺出すことになりぬと金六語れり明和已前はみな筆にて彩色したりこれを丹繪といひ又紅摺といへり【彼金六は文化元年七月歿すと云り】明和四年（寐惚文集）詠東錦繪に忽自吾妻錦繪移一枚紅摺不沽時鳥居何敢勝(カナハン)春信男女寫成當世姿、詠衣裳繪模樣雛方當世裝板元仕在鏡町傍細工仕上流々事應著人形傀儡坊】唐山には是を時行紙繪といへり（東京夢華錄）宣和樓前省府宮宇の條に街の都亭驛相連梁家珠子舖餘皆賣時行紙畫花果舖席云々（居行子後篇）【安永五年】むかし愚が少年の頃迄は江戸ゑといふ物は市川團十郎大谷廣治等が繪漆ぬりにひからせ大津ゑめきて甚田舍らしき物なりしに今の江戸繪は飽迄粹に色めき西川のうき世繪も及ばぬ位見れば心も動くばかり人々のしる處なり

繪双紙

○繪雙紙（源氏）【ほたる】なか雨例の年よりもいたくしてはるゝかたなくつれ／＼なれは御かた／＼繪もの語なとのすさひにてあかしくらし給ふ云々この下にこまのゝ物語うつほの物語の畫のことども見えたり古は物語も畫にかき翫とせしもの今も稀にその繪卷物傳はれるもあり實錄もあれど多くは戯作なり又繪合せの爲に作りたるも多し諸寺の緣起なども同じさまなるは兒女子にも見やすからしめんがためなり（源氏）【蓬生】にふるめきたるみづしあけてからもりはこやのとしかくや姫のものがたりの繪にかきたるをぞとき／＼のまさくりものにし給【ひたちの宮をいふ處なり】と有かくや姫は竹取な

もその時代にて繪の勝れて見ゆるを又兵衞と定む其頃まぎらはしき書あり是は內匠といふもの丶繪なり專ら浮世繪をかきたる上手なり西鶴が（大鑑）にも承應元年のことをいへる處に浮世繪の名人花田內匠といへる者美筆を盡しけるとありまた雛屋立圃といふ者あり許六が（歷代滑稽傳）に立圃は野々口氏也貞德門人にして撰集あまたあり畫を能す（京童）といふ名所記自畫なりといへり其頃板本の繪これに似たるが多しまた京童は中川喜雲が撰なり畫をば立圃がかきたるにや自畫也とは紛らはし立圃か自畫讃などの草畫をみるに瀧本坊などが風に近く板本の繪とは異なり許六も畫をかくことを好める者なればみだりにいひしにはあらじとおもへどこ丶の文疑はし

ひし川

○菱川師宣が繪行はれしことは（續五元集）なとにも菱川やうのあづまおもかげといふ句も有また其頃の草子（女大名丹前能）といふには師宣がかける繪にけさうしたる男女のことを作れり又（色芝居）といふには菱川は畫圖に妙あり又人形を造るにも上手にて役者の姿を手づからきざみ舞臺衣裳そのま丶に彩色すといへりされども彫刻はその工人にさせしにもあるべし師信が後には西河祐信聞えたり同時に下河邊拾水といふ者繪本多くあり月岡丹下は美人をよく畫けり春畫はわきて妙を得て勝れたり其門人上手高名の者多し

江戸繪
勝川流
歌川流

○江戸繪は菱川より起りて後鳥居庄兵衞清信といふ者あり初め菱川やうを學びしが中頃畫風を書かへ歌舞伎の看板をかく今に相續きて其家の一流たり勝川流は宮川長春を祖とす長春は菱川の弟子にはあらねどもよく其風を學びたる者なり勝川流にては春章すぐれたり歌川流は豐春より起り豐春は西村重長の弟子なり【重長は初めの鳥居淸信の弟子なり後に石川豐信といふ】此流にてはこの頃まで歌麿が當世にもてはやされたり其外あまたあれ共枚擧にたえす

一枚繪

○一枚繪は延寶天和の頃のものをみるにその紙美濃紙より大にて厚く武者繪を丹綠靑黃土にて彩りた

ばけて女になるを見て古いく〳〵といへば大きなみこし入道になる云々あり

浮世繪　名人ども

○浮世繪は英一蝶が（四季繪跋）にやまとゑはそのかみ土佐刑部太輔光信のすさみに堂上のうや〳〵しきより田家のふつゝかなるさま岩木のたゝずまひ遣水のめいほくこれに初りて末々になかれ予が如きの拙きまで是をもとゝす近頃越前の產岩佐の某となむいふもの歌舞白拍子の時勢粧ひを已から寫得て世の人うきよ又平と仇名す久うして世に翫ふ又房州の菱川師宣といふもの江府に出て梓におこしこぞつて風流の目を悅はしむ此道予が學ふ所にあらずといへども若かりし時云々岩佐菱川が上にたゝん事を思ひてはしなき浮名のねさし殘りてはつかしの森のしけきこともなれり云々いへり古き土佐畫などもこゝの風俗をうつしたらむはやまと繪なりそも又漢ざまのことをかゝむにはからゑといふべしまた其畫法をもていはゝ今世に和繪といふもの眞の和繪にあらず唐畫と稱ふるものも誠の唐畫にあらず【和繪とは專ら狩野家をさしていふ是もろこし宋の代の風にて今いふ唐繪よりは古し今唐繪といふは明の代已來の風なれはなり狩野家も探幽より古法を變じたれども眞畫は猶古風なり】

やまと繪

○やまとゑと稱する土佐家などの流は其始もろこし晋唐の代より傳へたる畫法なれば是をこそ眞の唐繪とも云べけれ賢聖障子など全く唐繪といふべし又今は其かたも殘らざれども乾元錄の屛風などもさこそはあらめ菱川吉兵衞みづから大和繪師と稱へしはいと妄なるを西河祐信等輩にならひてこれを稱せり岩佐又兵衞をその頃うき世又兵衞と稱へたれは菱河等も浮世繪師と稱へんにはともなかるべしこの浮世といふとは佛家にいふとは異にて今世に當世といふ如しおなじく時好にかなへるさまをいふなり猿樂狂言きんし聟といふに浮世人といふことあり是なり岩佐又兵衞は貞幹が【好古日錄】に小傳ありといへども覺束なし畫所預の家に又兵衞畧傳ありといひて其說を記しゝやうなれども又兵衞略傳といふものなしとぞ土佐家の門人語りける又兵衞が畫名印などある物なければたしかには辨へがたけれと

りと見えて（備前老人物語）にいづれの陣にや名も忘れたり信長公の侍云々左に扇を持右手に刀を拔大音に愛宕參に袖をひかれたとうたひてをとり出たりと有】こゝのゑ元より佛像を宗として其外は旁にかきたる物にはあらす佛像は田舍人の求るために書初しを後には買ふ者もあらされはおのづから書ずなりたるにこそ【今も追分にて佛繪を賣れとも常の佛畫を彩色したる也】其かみ此繪の外に今の一枚繪のやうなる物もなけれは此を童の手遊にせしなり（傾城返魂香）といふ淨るりに浮世又平大津に住て繪をかきたる由を作れり是に依て其說ます〳〵廣がりぬ（一代男）【天和二年】いづもさき寺泊りの處屏風引まはして有けるおしゑを見れは花かたけて吉原參の人形板木おしの弘法大師ねづみのよめ入鎌倉團左衞門多門庄右衞門かつれやつこ此みな大津の追分にてかきし物そかしとあり（賢女心化粧）【三】池の側の針屋花かたけたおやまゑなどかく人と隣り合せ云々

化物繪

淨土畫双六

○（化物繪）花山院のあそばしたるめかゝうは傳はらす光重か百鬼夜行を祖として元信などが書たるもあり扨その奇怪の物に名のあるは淨土繪双六など其始にや其名の大略は赤口ぬらりひよん、牛鬼、山彥おとろん、わいらうわん、目一ツ坊、ぬけ首、ぬつへらほう、ぬりほとけ、ぬれ女、ひやうすべ、しやうけら、ふらり火、りうんばう、さかどみ、身の毛だち、あふ〳〵、とうもかうも是れ其さまによりて作りたる名多かり其外猫また野きつね、雪女、かつぱ、山わらは、犬がみ、山姥、火車、みこし入道【（鷹卒波集）に影ほしやみこし入道山の月（續山井）これやけふ三越入道雪の山【義明】これは大なる法師のかな棒なと杖にしたるをいふかまた同しさまして頸の長きものをいふかみな世に畫くところ也されど光信が百鬼夜行などにはみえず元信が畫に頸の長きもあれど今のさまにあらず（懷子）【八】岡のかたをや見こし入道【久任】時鳥松を赤石の泊木にこれは見こしを松とつけ入道を源氏物語赤石の入道によせたるなれども時鳥にかんはり入道といふ諺あるをも取たりと聞ゆ（輕口咄）に狐

其下有數十石其畫皆作人物如今之春畫間有幹男色者畫法與隷釋中有一碑上所畫之人大率相類其筆甚拙頗陸倘有其遺意至唐則漸入於巧矣按るに（好古日錄）に欽明帝御陵の邊の田間より出たる石人四軀の圖を出す一は一石三面一は四面一は三面一は二面後土人是を陵上に列す俗呼て七福神と稱す固より意義なし亦其形製何の意あるヿをしらす或云古昔石工の戯に鐫る處ならむと或は然らむといへり其圖をみるに裸體にして春畫のことし三面四面に見ゆるものは交接の形なれは也これかの山東古墓中の春畫の類にして殉に代たる物と見ゆ貞德か（油粕）に逢坂山をこゆるはりかた戀の文いれて旅たつ具そくひつ（更豈有此理）【書名】辭好々先生啓望南飛賦あり【好々先生は京かた望南飛はあづまかた也この類を（不求人）に角先生ともいふ】春畫の古きヿは（藝林學山）に即仁實云濮成畫紂踞妲己于䏶此春畫所有自始也【用修（藝林伐山）徐陵與周弘讓書云優遊俯仰極素女之經文升降盈虛盡軒皇之圖勢則宋人畫苑春宵秘戯圖有自來矣張平子樂府素女爲我師天老教軒皇抑又古矣

古陵の石人　角先生　大津繪

○大津繪は傳へていふ岩佐又兵衛が畫き始たりとてそれか子孫めかして又平久吉なとと落款したる畫も有たしかならぬヿ也其畫法は信貴山玉藏院に明兆か地藏𦬇の繪を繪表具にして十戒圖をかきたるは海北忠左衞門藤原某とかありこれ今の大津繪にひとし清水寺の額に賴政が怪鳥を射たる圖はこの海北忠左衞門が筆なり寛永十二年乙亥六月吉日と識したりまた畫者の名はしらず奴の番椒を肴にして酒を大杯にて飲ところをかきたる上のかたに當時の小歌を書たるは正しく光廣卿の書なりといふ【古きすまふの繪に此繪の畫法なるあり】鬼の念佛ひさこもてなまづ押る圖等のヿは雜考の中にいひたり（似我蜂物語）に上町の友達共より合て初心連歌の會をして遊はむとて先床には大津粟田口の道にて賣天神の御影をひつはり竹の筒に花を生かはらけに抹香をふすべける（松の落葉）【三】大津追分畫踊の唱歌あり其内に猫が三味ひく酒のむ奴あたご參りに袖を牽れたと云々【此愛宕參りと云は古き小歌にあ

笑一冊とあり是なるべし枕繪の名はともなきことながら（職人盡）枕賣の旁に今一のかたも持て候ひそかにめし候へといふ詞あり今一ッと隱していへるは（雍州府志）に殿枕ともいへり是長枕にや

枕繪

春畫

○枕繪を鎧櫃衣ひつに收むるは蠹の喰さるまじなひ也といへり按るに徐渭が（靑藤路史）【撮要】松江何俊云予家乃有漢人畫云々畫于車鳌殼上乃是姑蘇沈辨之至山東賣畫買回者云々則知古帝王墓中皆用之蓋置於柩之四旁以防狐兎穿穴其畫春情亦似厭勝恐蛟龍侵犯之也【云々已下徐渭語】蜃畫春情厭勝之說恐亦未是蓋自古蜃飾祭器而後世淫亂之君遂乘此以畫其生時之所嗜以娛於死也即代殉之義他物不久惟蜃能久耳云々間有男色者是諸好男嬖者之君也亦是取男嬖以爲殉耶又云唐書蠻夷傳夜郎滇池以西用蠡蚌封棺此無他故云々免蟲蟻虵狐之穴也在我呉越則燒石成灰以封棺槨不用殼灰矣春畫厭勝誠然非止防蛟龍太約狐狸蟲蛇爲妖爲祟益在所厭也有士人藏書甚多毎賣必置春畫一冊人問之曰聚書多惹火此物能厭火災也世傳藏書家皆然此恐假言以掩醜耶設果爾何公所云厭蛟龍之勝似亦可存【この說ともの內蛟龍の類の蜃と大蛤の蜃と同名異物なるを混說して論したるなどは省きて抄出せす】といへり（本草綱目）時珍曰蚌粉亦曰蛤粉古人謂之蜃灰以飾墻壁㙇墓壙如今用石灰也【車鳌の殼をも灰をも用ると今こゝにて地を固め壙を埋るに蠣がらも石灰も用るとおなし】件の說などの傳はりて春畫は蠹を防ぐなといひ習はしたる也然れども件の說地を固めて蟲蟻を避るは蛤殼の故なり春畫によるに非ず櫃中に置て蠹魚を防ぐとは異ならずや（物理小識）に南甘士司中金蠶蟲夫婦裸體以祀之故籠底畫壁蟲爲其厭也これ又一說なり其起源はともあれ春畫をさるまじなひに用る習ひあるにこそ書廚に納るは彼處にては火災を厭ふとなればこゝには取ちがへて覺えたるものなるべし鎧びつのかたは武士の軍陣又は他國に勤番する者は携さへその衣びつの方は奉公する婦人の秘もたりしより始れることなるべし又（路史）【前に引たる文の中程に至山東賣畫買回者とあるに續】聞彼處盜墓人毎發一墓則

遊に似たるをばさらといふはさら狼藉ともいへり

男繪女繪

○男繪女繪（榮花）【根合】ひはひかせ給ひゑなとかゝせ給ふをとこ繪なとゑしはつかしうかゝせ給ふ【右大臣頼宗の姫君延子の事をいふ處なれば男繪といふ歟】（枕草紙）こゝろゆくものよくかいたるをんなゑの詞おもしろうつゞけておほかる（紫式部日記）におとらしとしたてたる女ゑのおかしきにいとよう似てとありいづれも男が書たる繪女が書たる繪といふにあらす男をかき女をかきたるなり

笑ひゑ　おそくづの繪

○笑ひゑ古くはおそくづの繪といひたり（著聞集）に鳥羽僧正の許に繪かく侍法師ありそれか繪の失を難陳する處僧正わ法師が繪かたはらいたしといはれけるを少も事とせすさも候はずふるき上手どものかきて候おそくづの繪なとを御覽も候へその物の寸法は分に過て大に書て候事いかでか實にはさは候べき云々おそはたはれたる事くづは屑なるべし陽物をいふに似たり古き繪の傳はれる物は小柴垣ふくろ法師などの外にはいまだ見及はず十二枚あるもの往々あるは鐵櫃に収めたる物といへり又衣櫃に納るともあり枕書といふは貞德か（油粕）にたうとくもありたうとくもなし枕繪を羅漢のおくに書そへて其碩が（賢女心化粧）清少納言も次第に不如意にて袋入の枕草紙をして内証のたすけとし給へ共云々戯文ながら其頃是を枕草紙といひしを知る枕さうしとは（榮花物語）にきぬのつまかさなりてうち出したるは色々の錦をまくらさうしにつくりてうち置たらんやうなり又（新六帖）にとちおける枕さうしのうへにこそ昔かたりの夢はみえけれ（春曙抄）に枕さうしの名のよしとかけるは非なるへし朝夕身にそへたる冊子といふ義にて枕はまくらべなり（源氏）桐壺この頃あけくれ御らんずる長恨歌の御ゑ云々やまと言の葉をもろこしの歌をもたゞそのすちをぞまくらことにせさせ給ふとあるもおなしさるを枕繪に枕双紙の名を呼ふは枕畫といふとをかくしたるなり

枕畫　枕草紙

笑

○又笑といふは（一代男）【四】枕ゑひとり笑ひを見て（誰袖海）ひとり笑に殿心おこり書目にひとり

てもならぬすりこ木有明は羽のはへてや飛ぬらん或雜記に攝州茶臼山に居られし天桂和尙へ誰人か摺木に羽の生ひたる畫賛を乞ければすりこ木に羽のはへたる繪こそみつ世に眞身の人はすくなし春卜が一時の頓筆俑をなしてより此風流行してその後繪本多く出づ【鳥羽繪車、同三國志、扇の的、あくび留、などみな三冊ものなり欠留は竹原春朝齋が新畫なり】

牧童騎牛の圖
カブラの圖

○牧童騎牛圖カブラの圖（新安手簡）白石の書に此圖を三弄と御答被成候由笛に其緣有之候ていかにも左樣可有之候樣俗間に申傳候は譯もなき事にて用明帝牧童に御なりまの﹅長者が娘の許へ御こし候てサンロガ夜の笛など淨琉理にも候とて老拙へもむかし聞候人有之候玄宗月中霓裳曲を笛にも寫させ候事も候此御事は笛の名人それも帝にて候故引合用明の御事を三郎笛なと申候歟と答候きたゞ牧童圖を申候はんには三弄のかた遙かにまさり申べく候カブラの圖家來の圖と申と京都將軍の頃物の異名をとなへ候事多し蕪の和名を唐僧のカライと聞候て硯を蘇松利としるし候樣に家來と書候事有たるには無之や

一畫付
より合畫

○西鶴が（大鑑）に戲とする事をいひて一畫付の筆慰み扱は扇引するもありと云り是は一筆がきの事かと思へどさもあらぬやうなり今人二三人も集り互に一筆づゝ書ておのづから思ひもあへぬ繪になる戲あり一畫付はこの類にや【又此類のより合がきに一筆二ふで何とも分らぬ物を書て是を題となし人々思ひ／＼にその上に書添て繪になすによきもあしきもありて興を催す又繪を何にても一種かき次の人その繪に書つぎ／＼する其工夫さま／＼なるおかし題を出してかゝするを惡ゑといふ判者有てよきを撰み勝負をなす繪は拙きも筆かず少く判し物のやうなるをよしとす】（油粕）に拭ふべき紙を手に持泣ばかりすみだふれにや負て腹たつ今戲とに何にても先定め置て負たる者に墨を塗るとありこれにや

あくゑ
墨だふれ
ばさら繪

○土佐節淨瑠理の草摺引にあふぎうちはのばさら繪にも腕押首引草ずり引云々すべて米春の日待する

すなかし　散し物
○（好古日錄）云古昔すなかしと云は紙にすなごを置たるなり散し物は是より起る散物はくろめに金をすなごの如く燒つけたるなり梨子地と云る漆器の散し物なり俗に微塵青貝と云も此類なりとぞ先輩の說のまゝに記す

一筆がき　嗚呼繪
○一筆がき（今昔物語）比叡の山の無動寺に義淸阿闍黎といひし僧畫を好みて嗚呼ゑの上手なり筆はかなくたてたるやうなれどもたゞ一筆に書たるにこゝちえならず見えておかしきことかぎりなし云々紙つぎてかゝする人あれば只物一つ許ぞ書たる亦人かゝせけれは端に弓射る人の形を書ておくの畢に的をなむかきたりける中には箭の行く形とおほしくて墨を細く引わたしたりけるとみゆおかしき繪をばこれに依て嗚呼繪といふべし

鳥羽繪
○とば繪（著聞集）に鳥羽僧正は近き世にはならひなき繪かきなり云々いつの程の事にか供米の不法の事ありける時ゑにかゝれける辻風の吹たるに米の俵をおほく吹あげたるが塵灰の如くに空にあがるを大童子法師ばら走りちり取とゝめんとしたる形をさま〴〵におもしろく筆をふるひて書れたりけるを誰かしたりけむ其繪を院御覽して御入興ありける其心を僧正に御尋ね有ければあまりに供米不法に候て實の物は入候はす糟粕のみ入て輕く候故に云々見ゆこの圖は（信貴山緣起）の中に鉢をとばして物をうくる處にありこれとはその事異なり諷諭の爲ならはまとは彼山の緣起にはあらぬにや又鉢を飛して物をうけたるとは（今昔物語）に參川入道震旦にわたりてさるとありし由みゆさてこの信貴山緣起の繪今のとば繪といふとはいたく異なり今のとば繪の姿は春卜が書出したる戲畫にて（繪本手鑑）

擂木に羽
に出たりこれを鳥羽繪といひしより僧正の名を小兒までも知れりかの義淸阿闍黎のとは今俗には知る人も希なり春卜が鳥羽繪の內に擂木に羽生ひて飛ふ圖ありこれは古き諺にや（犬筑波集）に天狗にもなれるかはねの生ぬらんくらまの寺に古きすりこ木成安が（埋草）に卜養落髮千句あり其中に枕にし

寫眞鏡 種々臻妙與刺繍無異亦奇技也貞幹云近年巩畫まゝあり俗に指畫と云龜玉これが祖をなす
○また寫眞の鏡あり（物理小識）【十二】置玻瓈鏡于暗室之窓版則物形小縮透入几上之紙可細描也寫眞甚肖これもと西洋の法なるべし

すみ繪 ○すみ繪（守武千句）もとあらの小萩しうき大臣あはれにもむらさきすみ畫かきくらし鍾馗は黑繪に限りたるやうなり

白繪 ○また土佐家の繪に着色なきを白繪（シラエ）といふとぞ漢土に白描といへるに似たり榮花【初花】しらさらそくとものさま〳〵なるはたゞすみゑのこゝちしていとなまめかしとある墨繪件のしら繪におなし

泥繪 ○泥繪は金泥を刷毛にて隈どり其うへに草花蝶鳥なとを金泥にてかくをいふ銀泥も用ゆ（新勅撰集）【賀歌】泥繪の屏風石清水臨時祭【權中納言定家】ちりもせし衣にすれるさゝ竹の大宮人のかさす櫻は

金砂子 ○今金箔を洲濱形のやうに押とはもと金箔のもみ砂子を雲のやうに蒔たりしをそれにては箔を用ると多けれは費を省き箔を砂子にせす其まゝに押たる物ならん色紙短册などの泥ゑを下繪といふ（竹齋物語）に連歌のざしきと打みえて云々下ゑの懷紙折かさねとあり金砂子の雲も古畫にはなし古畫にある

霞 は霞にや【今俗に霞といふ形なり山などには雲とも云べけれど其外はかすみて見えたる體にかくもの故これかすみなるへし】橫に長く引て藍の具にて塗たりおもふに地を泥引にし金砂子を蒔くとは漆器の金蒔繪の法に倣ひしにやこは足利將軍の頃より始れり今は彼洲濱のやうなる形を雲とおほえて是を

源氏雲 源氏雲といふはいとおかしそは源氏物語をかける畫にのみある物とするか【溫故集】にやねなきは源氏の繪雲うつら籠【古靑峨】といへるは古畫に家の內を見せたるは屋根も天井もかゝす鶉籠は上に網を張たる物なれば見立ていへるなりさはれその屋根かゝぬとも源氏繪のみにはあらす

これは（筠廊偶筆）の文なり其文には昔王夢澤稱施生雨於方寸之楮云々いへり近ころ西洋の銅板の法に傚ひて微細なる顯微鏡を用ひされば見えかたき書畫を鏤刻す精巧をさ〳〵彼に劣らず麻粒の細字奇とするにたらず

○（五雜俎）に高麗日本畫皆精絕不類中國余從番舶購得倭畫數幅多畫人物形狀醜怪如夜叉然長短大小不一亦不知其何名也畫無皴法但以筆細畫縈廻環繞細如毫髮四周皆番字不可識といへりこれをおもふにこの物にはあらず西洋紅夷の畫にかなへり

油畫

○油畫は西洋の畫法にて今にこゝにて書るもの蠻畫に異ならす貞德が（安布良加須）にかしらも髭もぬれわたりけり（其付句の内）獅子やぎうさてもかいたる油畫にぬれわたるは油の光澤をいふなるべし浮畫と稱ふる物も西洋の畫法なり唐山にて是を遠視畫といふ彼こにも今は專ら西洋のことに傚ふ大淸耕織圖なとを初め磁器の染付にも山水遠景この法を用【又硝子に油畫をもかきまた近頃ヘルレンスの石摺多く新渡にあり是西洋の彩色の具なり】

鞘畫

○鞘畫といふ物も和蘭より渡りし物なり（池北偶談）に西洋所製玻璃等器多奇巧嘗見其所畫人物視之初不辨頭目手足以鏡照之即眉目宛然姣好鏡銳而長如卓筆之形又畫樓臺宮室張圖壁上從十步外視之重門洞開層級可數潭々如王宮第宅迫視之但縱橫數十百畫如棊これ前なるはこゝにて刀劔の鞘にうつしてみるさや繪といふ物なり【其後の法横に扁(ヒラタ)くかけるが竪に長くうつるなり】後なるは浮繪なり（寐惚文集）詠鞘繪に二人頭似鉢瓢瓜背曲未申著物斜笑此一技京土產皆々映鞘更相誇と明和四年の撰なり其頃めつらしかりしものとみえたり

浮畫

○（香祖筆記）曰云々有王秋山者工爲界畫凡人物樓臺山水花木皆于紙上用指甲及細針界出設色濃淡布境淺深一法古名畫按界當畫川音樂字書以手界物也近閩中有織畫乃破紙爲條織成之山水人物花鳥布置設色

文字畫

ず惜べしと云り（鷹筑波集）【五】入道のもつ小刀やほそからん佛師をしてやいくよへマムシ【吉次】こは寛永中の誹諧なり又（山の井）に望月のかけを書によく似たる哉とおもひ合せて【立圃】繪に似たるかほやへマムシ夜半の月（誹袖海）由之軒自序【元祿十七年草子】へマムシ入道のをしへとても勸善懲惡の道理にしかず云々このほか山水天狗ぞんしよ〱のこも僧の類多し鳥居風の畵の青表紙の草子に文字畵とて武者を多く書たるあり【余が弱年の頃或人寄書畵戀といふ題にて狂歌せよといひければ尺八の戀慕なかしとしらせはやよ〱をこも僧にしてとよみてやりしと有き今こゝにおもひ出るまゝに書つく寶暦ころ童の翫ひの草子に文字繪とて武者などの形を文字にてかき頭と手足をば繪にてかきそへたるものあり

木筆

○古きものには天神の二字にて菅家渡唐の像を畫き人丸の二字にて柿本の影をうつす是はもと眞言僧の木筆にて梵字をかきて佛像を作るより出たり木筆の繪は光顯が木筆の歌仙ありまた東寺七祖の御影の名号は木筆にて書たる二三幅ありとぞ【こは太師唐山より將來の物なり】

○近衞伊尹公號三藐院又龍山公々善書世稱近衞流之祖也嘗畫一筆天神百幅相傳唯有百故亦稱百幅天神高唱唐衣之歌也高祖基實公十七代之孫慶長七年薨

米粒の書畫

○今米粒に法華の題目佛名または着色にて夷大黑唐人行列の圖などを書ものあり（江南錄）に史應川善寫細字微如毛髮常於一錢內寫佛家心經及於麻紙上寫一經書又於一粒麻上書國泰民安四字人欲讀之須澄目良久乃辨凡書時於闇室中向陽獨開一竅如錢大因映其明方能寫之咸平五年爲吉州永新令後以貪慾受賂敗謫擊制もこのことをいひて此雖絕世之技然亦近於棘猴矣以余所見有便面上書西廂雜劇一部者余亦能之但目力勝人耳不關書法也といへり虫めかねを用ひてかゝば何の難きことあらん澤元愷が（瓊浦偶筆）近世施生雨者能於方寸之楮作小楷數千點畫不淆於粒麻上宛轉書之成五言詩一絕人甚奇之是未知有術也

歌にあしの葉の形は舟に似たれともなにはの人はえこそわたさぬ是葦の葉かきの歌なりと有り（五月雨記書）たる香疊の繪は歌繪なるへきを葦手といへりおなし類にはあれど葦手は文字を繪とし字は多く繪はすくなかるべし歌繪は大かた繪にて歌をかく文字はすくなかるべし葦手はあしの葉のやうに書たるがもとにて水石鳥なとを書ととなりても葦手といひしなり歌繪と紛らはしきなり越智久爲の（反古染）に今いふ茶屋染は昔のあしでもやう也たとへは我みても久しくなりぬと書て住吉の社の體をかき岸の姫松といふに松を畫ける類なるへし藤の花かきつのはかきも葦手なり後京極攝政良經公より始るといへり按るに今も芝の神明祭りに賣るちきびつの藤のはなこれ藤の花かき也つのはがきは茭(アシツノ)にて葦の角くむさまにかけるなるへし又文字をもて人物などを書るもあり【下にいふへし】また梅字の草體末筆を長く引て花を書そへ竹字に葉をつけ龍虎の文字は尾を其物の形に書るも同したぐひにて猶さま〳〵あり

藤の花書つのは書

○畫かき花結び（源平盛衰記）清盛の息女數多のうち六には七條修理大夫信隆卿に相具し玉へり云々歌よみ連歌し繪書花結あくまで御心情御座す云々八は大納言有房卿の北方なり畫かき花結諸道に達し給へり云々女の藝にこれをむねとするは常の畫はさらなり葦手また衣服のうは畫なとに用あればなり花結は糸もて種々の花を結ひ衣服に用るは菊とぢなどなり其外調度の緒を風流に結ぶ今いふむすひ方なり

畫かき花むすび

○（類柑子）に觀世小縷(ヨリ)していかにも文字を結ふ盲人あり元より字形を手練して日月山川雨風草木たてよこの點畫たがふとなく竹は竹鳥は鳥馬は馬と見ゆる蒼頡のむねをわきまへその物とさとししらせたる魂は目明かなる人の書畫の筆術にもまされり云々

こよりの文字

○へマムシ夜入道といふ戯書（遠碧軒隨筆）に靑蓮院にへマムシヨ入道の四百年以前の物あり其筆者しれ



なり其内に飛白書をかきて省庵に示す文あり其飛白の模本を關源吉の許にて見しとあり行草の二重文字みことなる物なりされど古き飛白は昇僊太子牌【則天書】題額は薛稷か飛白書なりこれは細く筋立て刷毛がきのやうなる物なり又（名臣言行錄）集釋の内には飛白を飛帛と說けり漢土にも定かならざる也（夢溪筆談）【十八】古人以散筆作隷書謂之散隷近歲蔡君謨又以散筆作草書謂之散草或曰飛草其法皆生於飛白亦自成一家いにしへ殿門の額は飛白體なり王僧虔云飛白八分之輕者張懷瓘以爲本是宮殿題署者といへり空海逸勢なと唐朝の製を親しく見て其法に倣へるなり

葦手 歌繪

○葦手は天德歌合記拾遺和歌集にみえまた歌繪は後撰集拾遺集等にみゆ源氏【梅枝】あして歌繪をおもひ〳〵にかけとのたまへば皆心にいどむへかめりあしでのさうしともそこ〳〵にはかなうおかしき宰相中將は水のいきほひゆたかにかきなしそゝけたるあしの生ひさまなと難波の浦にかよひてこなたゆきましりていたうすみたる處あり又いといかめしう引かへて文字のやう石なとのたゝずまひこのみ書給へるひらもあめり榮花【かゝやく藤つぼ】弘高か歌繪書たるさうし行成のきみ歌かきたるなといみしうおかし同書【根合】池のかゞり火ひまなきに白き鳥とものあし高にて立るもあしてのこゝろしておかし（小大君集）あしてに書てまいらせたり和泉式部歌ふでもちびゆかみてものゝかゝれぬはこれぞなにはのあしでなるらむ（花鳥餘情）にあしての色葉はあしの葉なりに文字をかくなり水石鳥なとのかたもかきなすなり中峰和尙の篠の葉がきといふ文字の體篠の葉に似たるが如きなり（岷江入楚）に或注に歌繪とはやといへは矢を繪にかきわといふに輪をかきにといふに荷を繪ふ書なり又（今物語）にたかしとかやいひけるちこを天王寺にありける女たへかたう思ひかけての紅梅のたんしに心もおよはすあしてをかきてこの兒のもとにおこせたりける云々兒やかて其あしてのうへにおほつかなゝにはにかけるとの葉も都にすめはしらぬあしてをと書てやりたりけるとそ（夏山雜談）日蓮上人の

篠の葉がき

あるへし云々（昔々物語）に昔は用筆の手紙取替し希にて使にて口上に申遣す女中方も大かた下女使にて用事口上にてすむ夫故紙筆近年の十分一に入らず依之紙下直なりしが近年は口上には濟とまでも書狀になり猶以て上封までも致す故紙も多く入なり半切紙と云ものはかつてなく六十年已前より半切紙を用ることなりかく云る享保十七年より六十年前は延寶のはじめ也

封筒

（朱氏談綺）に尺牘封筒圖式等委しく出たれ共世人好む者も無りしが近頃は俗間の手簡みな封筒を用ゆることとなれり是を書簡袋とよふ彩色金摺なとにして模樣さま〳〵あり鄙俚なるは野郎の紋處なとさへ出來ぬ

てづゝ　口づゝ

（紫式部日記）に一といふもしをたにかきわたし侍らすいとてづゝにあさましく侍りてづゝは今もいふ言なり又ロづゝといふ言あり（舊本今昔物語）俊平入道第習算術語中におのれは口づゝに侍れは人の笑ひ給ふばかりの物語もしり侍らすとあり今いふ口無調法なり）

文字魚蟲の體

（海岳名言）上問本朝以書名世者凡數人海岳各以其人對曰云々黃庭堅描字蘇軾畫字上復問卿書如何對曰臣書刷字と云るは筆法を論するなり山谷東坡か書字形を畫にしたるものなし頓阿の（高野日記）に大師の此山の圖を書せ給ひし法性院の坊にありいつれの繪ところといふとも及ふましうみえ侍る竹は竹とみえ木は木とみえ鳥馬などいふ文字その見ゆるさまに書せ給ひしものゝありたへなるもの也と聞ゆと思ふに八幡の八字鳩に似せて書など漢土蟲魚の篆體なり葦手といふ類ひのもの皆これより出しなるへし

籠字

（双鉤字を俗に籠字また二重もじなど云明人これを飛白と云へり（石墨鐫華）に出たり又張斐と云る者清を避て日本をこゝろざし長崎へ來りしかど舜水などの後にて其時もはや異國人を止むるとの禁制になりしかば空しく歸國せり此者安藤省菴と贈答して（省庵霞池手簡）と云板本あり霞池は張斐が號

文章の長短 遊女が文

ては書出る初筆をいふ文章の長短も世につるゝにや女の文も昔しは今と異なり古き遊女が文をみるに長きはなし遊女が文だに細かならぬにて常の女の文は推て知るへし但心用ひもある事なり（女鑑）【慶安三年刻】ふみの書やうわかきうちはあまり細かにしたるきは人のひはん多きとなりかろきをほんとす云々貞享元祿頃女教訓の草子には女中の文章は御所かたを學び文づら手の風は京の傾城風をならひ給ふべしといへるはその頃までは遊女に能書多かりし故なり

封印

八千代なとが書しものに印あり是は定紋を印にして封文に用ひしなりとそ（諸艶大鑑）ことに上包みを二重に封しめには印判定紋を押て御念の入たるとそかし永祿の頃迄は世間に状文さへ包みて封るとなしまして遊女の文なとは當座のなくさみに見捨しに昔この里六條にありし時玉虫といふ女郎客の方へ錢一貫のむしん初て封し文つかはしける（箕山大鑑）あげやの女あるしに文やるとたとひこまとありとも折紙にてかくとなかれ數多く書ともたて文にして卷たてる上を中よりをり封すべし封し文のと女郎よりはうつくしく封てこす物なり男よりつかはす封し文はひし／＼と折まけて封しめ計に糊を付て上下は其まゝ置べし

封し目に印判を押糊付

若大事の用をいひやらは封しめに印判を致すはくるしからずそれとも上下ををりかけ糊付るは初心なり文箱に入て封付たるなとは苦しからす細川三齋は封し文の上下はいふに不及封目に糊多く付るとさへきらひ給ひ糊多く付るは野體なる物なりとあれは女郎のみならす客の文にも印判用ひたり

ちらし書

○又文のちらし書は歌を散して書より出たり安齋云歌の散しやうに法もなしされば文のちらしやうとて定りたる法もなし只文字のふときとほそきとにて見わかるやうに書しとなり

返し書

近き頃は三へん返し五へん返し七へん九へんなどゝて其手本かき朱にてよみやうの次第の印に一二三の數字を付たるあり是近世こしらへ出したる物にて故實にあらず昔は男も女も文かくにさのみ長々しき文言はなかりしなり長く言たきとは文持て行つかひの者に申ふくめてつかはしたる也もし長き事は二へんに返して書とも

玉づさ

玉つさと云】此艶書の結ひやうを男のの狀頭にむすひたるを今結ひ狀とて通用するなりと云り大方は此分なれともまたさばかりにもあらぬは上の件のことし

○玉つさも（萬葉等）の集などにも見えたれは俗稱とは言べからず【からす瓜のたねは結び文に似たる故玉つさといふ】（玉勝間）に讃岐國人は女をよばふに藁を結びて贈る云々（万葉）に玉梓といへるはかゝる事にはあらじか今の世に莘の實の仁を玉づさといふがあるも件の藁の結びさま似たりと云々】

怠り文

懸紙

○（今昔物語）叡山義清阿闍梨の條怠り文書て進てんと云て忽ち手筥を開て古き紙四枚取出して何か書にはあらん書つそれを押卷て懸紙して立文にして上書には云々懸紙は表卷と云るもの也紙四枚は重ねと禮紙と懸紙なり【（莵波波集）のかへして見れは跡のおもかけ玉つさのうら狹きまて書なしてとは重ねの紙に書るなり】（俳諧染糸）【千句】しる人に言つてしたくおもふなり書ぬる文にちいしあるかや今俗に書ものゝ端をらいしといへど消息ならぬものにいふは誤なり

宣旨がき

うちむかひ文

案じ文

○（源氏）などの物語に宣旨がきとあるは今いふ仰せ書にて代筆などのとなり又（榮花）に御くち筆とあるは今の口上書といふものにや【（遊學往來）ニ仰書ハ硯入水向御前搦墨染筆後可申案內ウチムカヒ文トハ（後宮名目）云ウチムカヒブミト申侍ルハ上ノオホセヿニテモサラヌ主君ノ申サタセラレ侍ルニモ其御前ニツメソフラヒテ案ジブミナドモモノセデツカフマツル文ナリ是又仰書也案ジブミトハ下ガキヲモセヌヿナルベシウチマカセテノ筆人ハサヤウノハレワザハ用捨アルヘキヿ也】（玉勝間）に三代實錄【十三】宣命の中に口狀とあり今世に口狀を口上と書は物語書には几張を几丁本性を本上とかけるたくひ也といへり（群碎錄）に爰書爰は換也以文書換口辭也これ口上書に似たれとも今世に口がきといふものなり（天香樓偶得）に爰書爰換也文以書代換其口詞若今錄囚口供是也とあり

口狀がき

筆たて

○（醒睡笑）【文の品々といふ條】筆たてに日の字あり云々とかく當世は文章の短きがはやる云々筆た

もたて文もえん書にはあらず】若紫の巻に御手などはさるものにてたゞはりなうおしつゝみ給へるさま云々【(河海抄)におしつゝみてはたて文なり艶書をたてふみの事本儀なり（堀川院艶書合）にも同大納言紅のうすやうたてふみにて云々有今この艶書合を見るに初めに大納言公實の歌ありて次に同大納言とあるは上を指なりこのたて文を本儀とはいかゞ也】見えたり漢土には艶書をは方勝とて菱形に疊む【勝はもと婦人の首飾なり】事などもあれは包み文似つかはし（花鳥餘情）に嫁娶記艶書のやう

引墨〆
むすひ文

は假令紫或は紅の薄様二重に歌を書ておしたゝみて引むすひて墨を引て其をまた薄様一重にて藥もしは砂金なとの如くつゝみておなし薄様をほそくきりてひねりて頸をゆふなりこれに墨を引不引は兩說也とあり今封しめに〆とかく是引墨なり（北山抄）に封字のかはりに近代は忽引墨とも見えたり（菟玖波集)【十九】雜体連歌俳諧にすみを引かと見ゆる黑かみ思ふ筋かきやる文のむすびめに【良阿法師】むすひ文に墨を引る也同集【第九戀部】むすぶ文にはうはがきもなしいはしろのまつとはかりは普づれて【信昭法師】又【第十一戀下】關白家千句連歌にかへして見れは跡のおもかけ玉つさをうらせはきまて書なして【藤原家平朝臣】又【第十六雜】にむすふ庵ぞ山のおくなる捨る身を文はかりには書おきて【藤原長恭】

封文

○結ひ文艶書のみにもあらすおもふに封文は遠方の音つれにて程近きには艶書といへとも糊などは用ひさるにや【枕双紙】心もとなき物の段に遠き處よりおもふ人の文えてかたくふんじたるそくひなど

捻文

はなちあくる心もとなし【秋草】に捻文古式は一重ねに狀を書て卷て其うへを白紙一枚にて卷く是を

禮紙
表卷

禮紙といふ其禮紙のうへを白紙を横にして包むこれを表卷といふ此表卷の上下狀より餘りたる分をひねる也【ひねりやうあり】捻りたる處を紙捻を後より前へ廻してまむすひにして切る也【上下同じ】

式の立文

此表卷に名書をする也これを式の立文といふ云々艶書をはふみの眞中をねちりてむすふ也【俗に是を

て手跡も異やうになりにけりといへるをもてなり又（桂川地藏記）【跋に弘治二年二月六日誌と有】道風之經手金岡之靈筆ともみえ（寛永發句帳）に道風にうこくやふるひ筆つはな【正直】なといひ傳ふれども上と同日の談にして取に足ざる事なから揮筆を訛りてわなゝくとゝし附會の說を設たるにやあらん（覲鷲百譚）＝南唐ノ李後主名煜字重光顫掣筆とて書給ふふるひ筆なり金錯刀の法とも稱す又元の張禮字孟庸も隷書を能し又時に金錯刀を學ひて顫掣勢とてふるひ筆を書しけるなり小野道風たま〱此法ありといへり

早書

○又藤原敏行は大織冠の末孫なり一旦卒して蘇生すその後一切經を自書し遂に廿七歲にて身まかれり在世いくはくもあらすかやうの早書凡人にはあらずと云り（輟耕錄）【十五】江浙平章子山公書法妙一時自松雪翁之後便及之嘗問客有人一日能寫得幾字客曰聞趙學士言一日可寫万字公曰余一日寫三万字未嘗以力倦而輟筆公號正齋恕叟云々これたゞ早がきのみにあらす氣力の勝れたるなり

蚯蚓がき

○（榮花）【木綿四手】姫みやみゝずかきにせさせ給へるこれいかてあての御もとに奉らん【三條院崩御ありて中宮の姫みや御年五つにならせたまふ】童の蚯蚓かきは今もいふ字の調らぬなり

はしり書　ちらし書　はなち書　おひつき書

○はしり書はなほさりにて心にもいらぬをいふちらしがきは色紙短冊えん書等にいへりはなちかきは幼き頃の手一字づゝはなしたる体をいふ也おひつき書は追付の義にや（源氏）【總角】みちのくにかみにおひつきかき給て【細流にちらしなどもせさる也とあり書つゝくるをいふなるへし】是は艶書なれともかやうにかきたり

艶書　たてふみ　包み文

又艶書はたて文もあれと多くは包み文なりとみゆ宿木の卷に例のうわべはいとけざやかなるたてぶみにて【是は艶書なりわざとたて文にしたるにや】浮舟の卷にみとりの薄やうなるつゝみ文のおほきやかなるにちいさきひげこを小松につけたるまたすぐ〱しきたてふみとりそへて云々【是はつゝみ文

嬉遊笑覧巻三

書畫【ふるひ筆】早かき　蚯蚓かき　はしりかき　ちらし書　はなち書　おひつき書　たて文、つゝみ文　引墨〆　結ひ文　禮紙　懸紙　宣旨書　口上書　筆だて　消息長短　遊女が文　封印　糊付　返し書　封筒　てづゝロづゝ　文字魚蟲の体　蘆手歌繪　藤の花書　つのは書　こよりの字　へマムショ入道　文字ゑ　木筆　米粒の書畫　油畫　鞘畫　うき畫　寫眞鏡　すみ繪　白繪　泥畫　金砂子　霞　源氏雲　一筆かき　鳴呼繪　鳥羽繪　摺木　翼　一書付、より合書、あくゑ　墨だふれ　ばさらゑ　男ゑ女ゑ　笑ひ畫　枕畫　枕さらし、古陵の石人　角先生　大津繪　化物ゑ　浮世畫、名人ども　一枚畫、べにゑ　漆畫　彩色摺　繪草紙、巻ざうし　草ざうし、鼠のさうし、しらみ本、草紙沿革　八文字屋双紙　役者評判記　其碩が傳、自笑がと　役者似顏　書解比丘尼

書

ふるひ筆

筆を口にくわへ或は頭に鉢巻してそれに筆を挾みなとし又は左手にてもゝの書戯あり（著聞集）に弘法大師は筆を口にくわへ左右の手に持左右の足にはさみて一同に眞草の字をかゝれけりさて五筆和尚とも申なりとかやふしきなると也とあれと是書法の論にあらす（桂林漫錄）ニコレ曲筆トテ下劣ナル者ノ戯レニ爲ル事也按ニ書法正傳ニ韓方明カ執筆ノ五法ヲ載ス云々空海書ヲ韓方明ニ學ヘリト云傳フレハ此執筆ノ五法ニ通達シタル故五筆和尚ノ名ヲ得シナルヘシと云りもとより小說にて是非をいふに足らす又世に道風のふるひ筆といふも同書にまとにや道風朝臣大師のかゝせ給へる額をみて難していひけるは美福門は田廣し朱雀門は米雀門と署額に作りて嘲り侍りける程にやがて中風して手わなゝき

十六年癸未、竟賣至二千矣、夏秋間二千幾百矣、（宣問由來）云、私錢攙入過多、乃于九門特點御史嚴察督理、衙坊錢卓、有私錢一文笞三十、二文徒一年、三文遣戍、四文斬首、其價頓遜隆萬以來舊例、多一文亦斬、後勅工部、設石臼鐵杵、一見私錢不暇入爐鎔化、即刻搗碎以滅其影、恨之也、九門搜簡有挾入進城必斬、小民貿易存剩、勅令送入御史臺、獎之令至嚴也、臼設于門、杵懸于臼、官吏坐守自朝至暮、半月來、小民無捨錢之俠腸、販商無觸網之痴棍、淸對無聊、西臺正務、各欲自幹、巡方乃出自己橐、買私錢搗之、辰出午飯必欲班役持錢四五千搗臼兩番、將碎錢銅末積于杵臼之間、爲人觀看匝月後、各學報命云、私錢收盡、額外一文不敢增、民皆遵制矣、然皆塞責之詞、民間之錢價下趨更甚也、凡賣換錢鋪對而現付必如欽限、如一兩應買二千四百、共一千八百、則於卓下私授、或少轉再收、以廠衛多人曾有照常交易擒去梟首故耳、

（蚓庵瑣語）明朝制有京省之異、京錢曰黃錢、每文約重一錢六分、七十文値銀一錢、外省錢曰皮錢、每文約重一錢、百文値銀一錢、自崇禎六七年後其價漸輕至亡國時、京錢百文値五分、皮錢百文値銀四分、甚至崇禎通寶民間絕不行使、本朝順治四五年間、崇禎錢百文止値一分、每錢重二觔、値錢二分五釐、崇禎末錢背有馬形者頗重、易使、江南卒亡于馬士英、

錢玉負駒のたぐひ凡て錢質の格別に厚きものは皆これ兒童のもてあそび福一玉の類也】と有こゝにて古くは小兒の錢など弄ぶと聞えずまた漢土にも【帝京景物略】に小兒泥錢を作りて卯兒といふ事するよしみゆ彼こにも銅錢はたやすく小兒などの玩びに用ひがたかるべし福一玉とは穴一の玉をいふとあれば近世の名か

鳩の目

○鉛錢に鳩の目といふあり伊勢參宮の蒔錢なり（後撰夷曲集）に人々散錢まくを見て「散錢も處によりてかはりけり難波のあしを伊勢は鳩のめ」【友信】（松の葉）さいもん「伊勢のくにすゝが宮川云々宇治橋やはしの下にはそつこでおだんなほんのぜにきせろの雁首はとの目おつとよどんだ猫の鈴でもそつともとまれかし」【今も其わたりにて蒔錢ひろふ此の如し】（永代藏）にいづれの世より小才覺らしく宮廻りの蒔錢に鳩の目とておかしげなる鉛錢を百と云て六十つなぎにしてさても世智がしこき人心、かゝれば貞享頃迄は伊勢にてこれを用ひしとみゆ【內宮長官藤波氏富の時まで專ら用ひしが其後停止したりとぞ】

古錢減少

○（安齋隨筆）に享保年中の頃までは一貫文の錢の中には古錢いくらも雜りてありし開元熈寧洪武皇宋大觀大中大平通寶等也永樂などは尤多くありしが近年づく錢のみ世に行れ銅錢はいづかたに留置やらん今は少し銅錢かくるゝに隨て古錢はいよ／＼なくなりたりといへり【此事さまでもあらず寛政の末迄も貳朱の錢に十四五文ばかりづゝはありしなり眞鍮の康熈錢なども雜れりそれより次第に少く予が知りても中村彌太夫といふもの康熈錢を多くつぶして鉢ノ子をつくりたる事ありまた鉄器の骨路（イカケ）を補ふもの銅錢を用るを見たり漸々にすくなくなる理なり

唐錢の多き事

○もろこしの錢のこゝに多きは東山のころ度々請はれたる故のみにもあるべからず（談往々）【花村看行侍者偶錄】明朝京師錢價、紋銀壹兩買錢六百、其貴賤在零幾與十之間、自崇禎錢祚、與日俱遷、至

て江戸中忽に小兩替のみせ出たるもの享保の初江戸中兩替屋六百軒に御定有之と也享保三年戊十月廿日町中兩替屋ども多有之人數少く致可然五百人程に相究申べしと也同廿五日惣町中名主御呼出し兩替屋六百人に御究其外兩替相止させ天秤は其町々名主方へ取上置候樣仰渡さる

○漢土にも惡錢多し（天祿識餘）に明朝通行歷代好錢謂之當一次用新錢謂之折二民甚便之正德十六年吳中驀然不用好錢惟用折三嘉靖改元則用折三折四惡號出是私鑄者日甚

鬪花蝶

○古錢を弄ぶと延寶の頃越中富山侯を祖とす（化蝶類苑）を著し給ふ是に次て難波人天王寺屋某化蝶類集を編す是大坂に弄錢家出來る始なり元祿享保の間難波にて妹尾柳齋が（泉譜）及（世寶錄）等の著述ありそれより彼地に同好ます／＼多く寶永正德のころ中谷顧山宇野宗明等これに委し顧山は（孔方鑑）などの作あり又其頃丹州福智山侯深く是を好まれたり【（新撰錢譜、孔方圖鑑、珍貨孔方鑑、東洋錢譜）等若干篇の作あり】宗明年老て安永二年癸巳福知山栃木侯の求に應じて（續化蝶類苑）を著す【時七十餘歲翌安永三年歿】富山侯にて古錢の位階定あり是は古錢の多少を以て上中下の次等を分つ中谷顧山等が（弄泉品定）も年代の次第にはよらず多少を以て定るはおなじ古文錢を初めに置次に平錢百品を集て公卿大夫士庶を分ち公座二十番卿座【廿一より四十番大夫座】【四十一番より六十番まで】已下も准之百迄あり【此時宗明が（弄泉記）あり】元祿寶永この事ありて鬪化蝶と名くこれを較ぶる眞行草等の式などを立こと繁ければ略す

六條錢

○宗明云六條錢とは（東山慈照院殿記錄）六條河原にて種々の錢を鑄させて下され候錢うつしは御制禁にて樣々の形を人々の好みに任せ鑄させ候云々いへり【此事おぼつかなし此時寬正五年文明七年同十五年三度まで明へ錢を乞はれたり然るに樂錢を鑄て小兒に賜ふとあるべからず

福一玉

又云厭勝品漢駒の類は凡て漢土の兒童の弄び物にして和錢の福一玉（フクワンタマ）の類なるべし【和錢の内にも兎犬

は金銀の天地の間に生ずる是を人にたとふれば骨の如し其餘の寶貨は皆々血肉皮毛の如し傷られきずつけ共又々生ずるもの也骨の如きは一たび折て拔出れば二度生ずる事なしこの故に古より後世まで採得し後金銀再び生ずる理なしと云り】されば是を世人みだりに玩具などに費し用ふるはいとあるまじき事なり

古錢

古錢を集るも玩弄ながらそれとは異なり代々の制度をみるべく又考古の一端なり（拾芥抄）に開基勝寶より歴代の泉貨を載て村上天皇の天德二年に鑄られたる乾元通寶に終る此後鑄錢なく漢土歴代の錢を用ひ鹿苑院殿の時より

永樂錢

永樂錢わたりて後北條家關東を領して永樂錢を貴み他錢を鐚(ビタ)と稱す【是によりて他錢自ら京師に上りしかば是を京錢といへり錢を撰みし事天文十九年より慶長十一年迄五十七年】

錢に年號を載る事

○錢に年號を載ると馮鑑が（事始）には後魏孝莊永安二年に鑄ると云れど（通典）に據るにそれよりも七十六年前宋武帝孝建元年に鑄たる四銖錢始めなりとす（天祿識餘）に辨ぜり】

びた錢

（見聞集）に天正年中金一兩の代に米は四石永樂は一貫但しびた四貫にあたる是は此卅餘年已前のこと也と有びた錢をヅク錢のことと思ふは非なり其頃永樂の外は無文錢の如く賤めてしか云り（碧里雜存）に錢を撰むこと見えて惡錢を板兒といへり（骨董錄）云慶長十三年止永樂錢用京錢これより永樂錢法は止たり寛永十三年六月江戸と近江の坂本兩所にて寛永通寶の新錢を鑄らる是より本朝の銅錢ゆたかになれり【（事跡合考）云寛永十三年以來江戸表にそれ迄通用したる奥州相馬鑄出しの鐚錢停止仰付らる然るに承應の頃迄も金銀兩替といふことは駿河町兩替町の外には其筋の商一軒もなく少々の銀子錢に替たきはいづくの果よりも日本橋南北の通町へ來て調へたり是は室町並通町南北四町が間錢賣とて數百人各三四貫文づゝ肩にかけ居て少き錢兩替を數十年が間毎日いたしたる事也かの御停止の鐚號を交へ賣しに青物町に小兩替一軒出て鐚をまぜず九十六文本數の錢を賣し故みな此店に來て兩替したり是をみ

枚づゝに極て開帳するを三度まで開帳したり戸帳のきれ損じたるを法師をすかし新しきを寄進して古きとかへたり是唐織の時代わたりの柿地の小釣ル淺黃地の花兎紺地の雲鳳其外さま〴〵あり是を茶入の袋表具のきれに賣て利を得たる物語あり○（一代男）【六】織出しの島ちりめん又本おく島のはやりでといふとありこは寛文延寶ごろの事にやいづれもその始と見えたり○（産業袋）棧留島の條に赤糸入の立じまを俗に奥島といへり是御本手と云紺地に淺黃いろしまを青手といふ蛇がら赤ざんくづし鹽ざんくづしなど有なべて是を奥じま唐棧留とて賞翫する也

島ちりめん　棧留島　奥島

金銀

金銀の事　古錢　鬪化蝶　六條錢　鳩の目　古錢減少

（見聞集）に天正年中の事をいひて此頃金壹兩みるは今五百兩千兩みるよりも稀なり今は國治り民安穩の御時代みな人金たくさんに取あつかふといへどもあたひは古今同事にてめで度寶なり當御時代諸國に金山出來云々就中佐渡島は唯金銀を以て築立たる寶の山なり此金銀を一箱に拾貳貫目入合百箱を五拾駄づみの船に積毎年五艘十艘づゝ越後の湊へ着岸す夥しき事昔をたとへてもなし古歌に「我戀はかねのみたけの金ならばみろくの世にもあはましものを」此歌の心ならは誠に今がみろくの世にやあるらん（骨董錄）云佐渡國慶長六年より銀出ることおびたゞしともいふばかりなしかゝることは我國の古より傳聞ざる所なり同十三年の頃より初の如くにはあらずそれより年々にすくなくなりて或はまた黃金も雜へ出たり石見國より黃金出ること其始をしらず是は始は出ること多からず慶長六七年の間より出ること多くなれり程なく此國の金を採るをば止められき伊豆國より金銀出る事も聞えず慶長十一年の頃より出て其數大かたは佐渡國より出る事の如く程なく多からずして採ることをとゞめらる陸奥國の南部より黃金を出す是も慶長十三年の頃出ること殊に多して程なくいでず我國の古に例なきのみにあらず外國にも類ひなき事なり今世人かゝる事の有難きをしらざるは口惜き事なり【又云漢土代々の人の論ぜし所

マトヘル有〇劍太皷地色コンモヤウ太鼓ノ輪チガヒ間ニ劍サキ有〇二重蔓紺地中牡丹ナリ地紋トモ
ニ金ナリ右（古錦看定書）に見ゆ

撰糸絹

〇（堺鑑）に撰糸絹は往古此浦へ唐船の入し時織人を乘來しを此地に留て始て絹を織出せしとかや其子孫不傳といへども其工今に至て精好なり

金紗

〇金紗は元和年中の頃唐人當津に渡りて錢屋松屋といふ兩人のものに金紗の織やうを相傳してより其兩家相續て織出せり因此今代に及て世間に散在せる物を名付て錢屋裁松屋裁ともてはやすものなり

燒切

〇燒切は（長崎聞書）に有馬修理大夫故有て長崎より二里外神の島の沖にて南蠻船を燒討の事は慶長十二年の夏なり云々（明良洪範）と云ものにも燒討のとあり（世上覺書）に黑舟燒討に有馬左衞門佐殿といふは誤なり慶長十六年迄は修理大夫代なり其後左衞門佐相續なりこの時貨物などを拾ひたる者もあるにや銀はみな水底に沉みしを寛永十三年又承應三年と前後千貫餘あげたりとぞ昔は黑舟處々に來たり（見聞集）に慶長六年の秋上總國大瀧の浦へ黑舟流れより損じたりこれは呂宋よりのびすばんへわたる船にて數々のものをつみ此荷物浦へ打上けるを安房上總下總の者ども集りて拾ひ上れども盡ずと風聞す云々慶長元年丙申の九月八日土佐國浦戸の湊より十八里沖に黑舟流れよるこれは南蠻船の惡風に逢海中に年を經て五百人の者のこりたる者二百人このよしを長曾我部より告來る其頃秀吉公大坂におはします急ぎ增田右衞門尉を撿使として指遣はさる云々大船二百餘艘に此荷物をつみ右衞門尉奉行して大坂にかへる云々又（同書）【上略】去ほどに唐國にて日本人の好める衣裝を色々さまぐ〳〵に工み出し織出して每年相摸國うらか湊へ黑舟着唐と日本との通事出合賣買ゆゝしくぞ覺ゆるそのかみ唐船も蠻船も黑舟といひしと見ゆ漂流の船は其處にて燒すつるとあれば燒切いづれの時の物と慥には分らぬなるべし

泊瀨の戸張

〇（永代藏）に伏見の町はづれに菊地善藏といふ質屋あり泊瀨の觀音は古來より判金一

南道武安州土貢朝霞布これらの紋は今も織もの也○名たゝる産物も今は遺製もあむぬにや（隴蜀餘聞）に大抵蜀匠最巧不但錦機紙局冶鑄扇而已予再使蜀成都云々至于錦扇等製詢之皆懵然不知況其遺法耶○（童蒙先習）に厚き物蜀江錦六丁紬

ツヾレ錦　京師本國寺所藏ツヾレの錦と稱する物を見しに所謂唐子あそびのもやうなり【天祿識餘】に唐宋禁中大婚以錦繡織成百子兒嬉戲狀名百子帳

○段子　本能寺極上代【五百年餘】コイ花色紋セイカイ波寶チラシ又カラクサ○笹蔓【上代三百年餘】濃アヰミルチヤ地紋カバチヤサヽツル○藤種【上代三百年餘】ウス花色地紋二重ビシノ内梅バチ又万字あり○定家【上代四百年餘】チヤ地又ハナ色モンモエギナカレ水ニキクキヽヤウ「正法寺ノモヤウチヤ紋二重ツル又唐草桔梗「京島原ノ大夫定家トイヒシガ衣裝ナリ

○漢島　鎌倉【極上代七百年計】地色赤カウシ又鹿ノ子モアリ「建長寺ウチシキ」「赤地黒イトノヌキナヽ子スカシ鹿ノ子ノ如シ「鶴岡」

○金襴　逢坂【上代五百年計】地色赤トビハナ色モアリ大燈ノ色ト同シ紋長樂寺ト同ジ「逢坂丸壺ノ覆○嵯峨【極上代七百年計】地色コン和ラカナルラン地也五七ノ桐ランニ丼ブ間ニ地紋アリ角チガヒ入子菱也清凉寺戸帳○富田【上代四百年計】地赤トビ金ニテ一房ヅヽノ雲アリスベテ大燈ニ同ジ○花兎【極上代五百年】紫地金ニテ花ウサギ雲ノヤウナル地紋アリ「白地花色モエギ地アリ時代不同」○荒磯【上代三百年計】コイ花色モン金ニテ波ニ鯉大サ一寸餘黄段地餘ランモアリ○大内桐【極上代四百年計】地色紫白ハナ色チヤアリ紋金ニテ桐カラクサツルフトシ葉アリ枝アリ○筒井地コキ紅ラン地ニテ横糸フトシモヤウ金地ニツクリ土ノ如ク二寸バカリ葉ノ入タル中ニ龍ノ紋アリ惣小蔓石ダヽミ瓜ノ中ニ雲龍二ツアリ○建仁寺地合安樂庵ト同ジモエギ地ニモヤウ唐クサカラ花蔓立木ニ

双紙に綴たる歟又は折本の押たるか一枚づゝ切はなれたるをいふと見えたり絹はたけ長くあれど紙もつぎたらむにはおなじかるべし且つ古畫大かた紙にかきたり漢土には書は多くは紙にかき繪は絹を用ゆ（五雜俎）に書方可千年畫力可五百年書之傳也以臨榻屢臨榻而書之意盡失矣畫之傳也以裝潢屢裝潢而畫之神盡去矣といへるはひがことなり臨摹して傳ふるは眞物にあらず繪もよくもち傳へたらむには猶ひさしくたもつべきなり大和國の寺々には千年に餘りたる古畫どもありその内紙は絹よりもたもつこと

書畫の七厄

久し又（五雜俎）に書畫に七厄あることをいへる中瞰（ムサボル）名俗子好事估客揮金爭買無復徑渭また拙工裝潢面目損失奸僞臨摹混淆聚訟といへるはまことに然り

黄金鷄

○京師の人陸可彥が（紀聞）に浪花の富商淀屋某が家の重寶黄金鷄といへるもの世に名高くして金の雞と思へりかの家身上滅却の時其父ヶ庵八幡に退き彼地に終れり其孫八幡屋某なる者剞劂を業として京に住り余が五經を刊せし時其事にあづかりて日每に余が家に來る話言この物に及び如何なる物にやとたづねけるに答云したしく是をみざれども親なる者にうけ給はりぬ宋の溦宗皇帝の宸筆の雞にて何とかいへる古錦欄にて表裝したる横軸なり今和州郡山にあるよし承ると答へぬと云り千鳥の香爐のたぐひなり

古錦

○(續百川學海)の内に元費著が撰の（蜀錦譜）あり蜀は錦を以て天下に名高し故に城の名を錦官といひ江の名を濯錦といふ舊來年每に上供の錦を輸すは轉運司より其費を給ふを府にて其事を掌れり元豐六年呂級公始て錦院を建て匠人五百を募りて織造しむ其別四つなり上告錦官告錦臣僚襖子錦廣西錦といふ其後外攘の務のしげくなりて建炎三年茶馬司に都て始て錦綾被褥を織しめて黎州等の馬價に折支すこれより私販の禁起る其織錦名色の内に八答暈錦六答暈錦盤毬錦宜男百花などあり暈錦とは雲繝なるべし唐書）【卅八】蔡州土貢四窠雲花龜甲雙距溪鶒等綾又【四十二】遂州土貢樗蒲綾また【四十三】嶺

いづれもよきものはすくなかるべし或人云近衞龍山公に古筆一萬枚餘ありける故ある時古筆目利了佐を召て汝何ほど見知りても本據なくては覺束なし手本にせよと仰ありて古筆五千枚を賜り家の寶となしける後には二枚あるものをば一枚他にゆづりなどして終には加賀中納言利常卿へ過半を賣たるは利欲にはせて義を忘れしなり斯る心より定めたる古筆何ぞ信ぜらるべき衆人の用ゆべき物をば疑がはしきも眞物とし正筆にても世の疑ふべきをば難ずるたぐひ誠に古人を愚弄する成べし云々

小倉の色紙

〇小倉の色紙なども茶人用ひてより世にことなき寶とすること（備前老人物語）に聚樂にて秀次公小倉の色紙を求め得たまひ座しきあらため色紙ひらきの御會あり利休を上客にて相伴三人あり頃は四月廿一日曉方風呂の茶の湯あり人々ざしき入ありけれど短檠の火もなく釜のにえ音のみなりいかなることと思ふ折から利休の居られし後の障子ほの〴〵とあかくなるを不思議に思ひ障子をあけゝれば月かげ御床の内にうつりけるまゝさればよと思ひにじりよりて見れば小倉の色紙の御かけ物にて「ほとゝぎす啼つる方をながむれば只あり明の月ぞ殘れる」と有まことに折にふれおもしろきこといはむ方なし利久をはじめ人々さても名譽不思議の御作意かなと同音に感じけるとあり是らの聞へみな人募りて求しなり〇（貞德文集）に大燈國師墨跡御感得被成候哉大德寺衆へ御伺有度由最候彼寺開山にて候間實否御極候事如指掌候乍去先年松岳和尚擯出已後長老衆墨跡見聞卒示不被成候其上北塔頭南塔頭中別派にて候數寄者衆北派を用南派を不用候玉室和尚江月和尚可被懸御目事簡要候

紙繪

〇（源氏物語）繪合の巻この頃の世にはたゞかくおもしろきかみ繪をとゝのふることをあめのしたいとなみたり云々かみゑはかぎりありて山水のゆたかなる心ばへをえみせつくさぬ物なればたゞ筆のかぎり人の心につくりたてられて今のあさはかなるもむかしの跡にはぢなく云々（花鳥餘情）に昔は絹に書たるを今のよには紙にかくを紙繪といふ也とあり此說しかるべからず紙繪とは續ずしてかきたる物にて

表褙

掛ものゝ表装に𧝒補輪補繪といへるほゑは褙の音なりすべて是を表褙(ヘウホイ)といふ（三十二番職人歌合）にへらほうゑ師あり（節用集）に表補繪表背衣とあるなどみな後の稱なるべし（源氏）【繪合】ゑはこせのあふみてはきのつらゆきかけりかんやがみにからのきをばいしてあかむらさきの表紙紫檀の軸よのつねのよそひ也とありばいとは褙の字にて裏うちのことをいふほゑともほいともいはざりし也諸聲（品字箋）裱褙背也凡糊物者必兩層以有書繪者向外謂之裱以無染表紙托其背爲褙也と見えたり今上中下な

へり

どいふはみな緣といふべしへうほうゑ師の歌に山水もはるぞ見ごとにへうほうゑ花のにしきをちうへり

巻たし

にして又巻たるこぐちをばいかにせむ馬ならぬ繪のへうほうゑまぎたしわろくのりのこはさを【巻たしをまききり共いへり】

風帶

今唐表具といふものには風帶なし（典籍便覽）に今畫軸上二紙飄者曰拂燕恐燕集墮塵于其間（讕言長語）に畫上二紙條名曰驚燕云々古不粘任其飄動とあれば後に褾(ヘリ)の表に粘着(ノリツケ)けたるをやがてそれもせぬことゝなりしにや

表具師
經師屋

爰の表装は唐の代ごろの古風を守るなるべし今經師屋といふものは表具もすれどもとは別ちてありしなり（雍州府志）にも表具師やの巻物經師や表具いづれもよからぬよしをいへり○表具師西順は（堺鏡）に生國は奈良の笠置の住人中氏古來の名人なる故利休當津へ呼て其頃表具専ら用ゆ即生國を家名として代々奈良屋と號す西順より其子孫慶勝慶音慶巖とありそのかみ堺は繁華にて茶事などの風流も此地に昌りなりしかば何によらず諸方の名人どもこゝにつどへり

手鑑

○手鑑（きのふけふの物語）に今ほど世間に手かゞみ色々さまぐの古筆をあつめてほんさうする云々（一代男）【六】了佐極の手鑑定家の歌切云々などいへり今も多く傳はりたれども大かた贋作なり花美によそひたるはそのかみ競ひて作りしならん又繪かゞみも有また錦繡を集て切かゞみといふもあり

に比すべき物なし

桔梗皿

○（下學集）に桔梗皿あり（鷹筑波集）に染つけて花野やうつす桔梗皿【重治】（後撰夷曲集）菊盆に槿のちよく桔梗皿みな花やかの道具ども哉【滿永】形を花がたに作りたるなり桔梗笠にても知べし（遵生八牋）に六角環盆といへる是なり又桔を吉慶の義にとり圓き鉢皿に吉字と桔梗の花を染付にしたる漢土の瓷器あり

はりぎ

また鉢のはたそりて細かなる花がたになりたるを俗にハリギといふは花菱の訛なるべし【（桂林漫錄）にもいへり】（下學集）に菱華臺【日本之俗菱作輪大誤也】と見ゆ八ッ花形の鏡を菱花といへるが如し

○（寛永發句帳）にたんぽゝをあへてやいるゝ皺鉢【三直】立皺の形したる鉢なるべし【陶說】に三楚新錄を引て荊南瓷器皆高足といへる類なるべし【瓷器のみならずむかし繪に黑ぬりの腰高といふものの如き大なる器に菓子もりたる有】近ごろジツキンとて茶盌の數十あるを一づゝ色を異にし繪も各同じからず老少年を十樣錦といふが如く十錦とは呼なるべし

十錦

瓷器を湯でゝ用

○瓷器を湯にとをして用るも漢土の法なり（博聞類纂）【十一】新定器須以沸湯泡過用庶不脆云々

やき續

○やき續は（陶說）に（博物要覽）云有一種復燒者取舊官哥如爐欠耳足缺損口稜以舊加以釉藥一火燒成與舊製無二但補處色渾然得此更勝新者、愚謂用今吹釉之法、補舊補處可使無迹こゝにて燒つぎをすることは京師より始まれり寛政二年迄は江戸にて知らざりしとなり此頃は江戸にて白瓷器に金紺青赤色などにて繪を燒付ると行はる其法漆にて何にてもかきしばらく乾して金箔を押て燒く青色もその如くしてはな紺青をふりかけて燒くといへり

　表褙（へり、卷たし、風帶、表具師）手鑑（極め、紙繪）古錦（撰糸、金紗、燒切、泊瀬の戸帳、島ちりめん、おく島）

金絲

りめに黒き筋一ツあり揚茂が作はほりめうすし重に筋なしといひ其外金朱金絲桂漿松皮はしかぽり堆黃等さま〴〵の名を呼分ちたるは誤なり其物だに慥ならでその工匠を誰かれと定めむといとをこがましほりめに筋あるは彩漆にて數遍塗たる物なり金朱といへるは其說をみるに箔金を指す金糸とは古く丸蓮絲といひしにて即ぐり〳〵の文鏁環なり（太平記）佐々木入道々譽遊宴盛膳といふ處前引の物共に四番の頭人は沙金百兩づゝ金絲花の盆に入ておく

桂漿

桂漿は蒟醤の轉訛はしかほり堆黃などいへるは皆西皮をいふ其作りやうに依てさま〴〵に呼しものなり（桂海虞衡志）に南人擯榔を食ふ其法石灰抹留藤と同く咀ば澁からず客あれば先づ合の內を三室にしきりたるに件に三色を入て出すとをいへり是は今こゝにて客きぬればたばこ盆を出すに似たり抹留藤は蒟醤の一名なりこの草をキンマといふ【蠻名にや】西粵交趾もこれを好みて食ふよし（廣東新語）

キンマ

にいへり閩も此風あると（五雜俎）などにも見ゆ（萬寶全書）などに桂漿といへるは蒟醤にて是を入る小合を名づけてキンマと呼これ又西皮の一種にして剔ぬものなり【今のつがる塗は是を學びたるものなるべし】剔りたるも剔らざるも彩漆をかさねて塗りたるは其國の漆器に倣へるはみな西皮なり（墨莊漫錄）に具理といへるは盒子の顏をいふ名にて是とは異なり（和爾雅）に曲輪と出たるは漢名にあらず古董家堆朱の說はグリと等しく心得たるなり古くも堆烏などあらぬ名の見ゆいと妄なり

螺鈿

螺鈿（名物六帖）に方勻が（泊宅編）螺塡器本出和國云々あるを引て漢土へは我國より傳へたり方勻は宋の紹聖の人なり彼國に傳りし事久しといへり螺鈿をこゝにて物に見えたるに貝すりたるなどゝ書るもあれど源氏榮花等の物がたりにもらてんと音もていへるをおもふに彼こより傳へたる物のやうなり（泊宅編）に和國といひしはいづくにかあらん（雍州府志）古器多木質而不漆之直施螺鈿是謂木地螺鈿高倉院時既有此製其始未知于何時といへり本邦漆器は薄でにして堅固なり描金の美麗なると萬國

蒼然瑩然其器傳絕少故數倍貴于漆紅故僞者亦多、倭漆中國盡其枝者稱蔣製倭漆與潘鑄倭銅然倭用碎金入漆磨漆金現其顆屑圓稜故分明也蔣用飛金片點徧薄摸糊耳正統中楊損之描漆汪家之彩漆【小注設色如用畫粉入漆久乃如雪或云眞珠粉也】隆慶中方信川之堆漆螺鈿黃平沙之剔紅人物精采刀法圓滑雲南雕法雖細用漆不堅刀不藏鋒稜不磨熟矣、

堆朱

堆朱を剔紅といふ元の時張成揚茂はその名匠なり（典籍便覽）剔紅器無新舊但看朱厚色鮮紅而堅重者爲好云々宋朝內府中物多是金銀作素者元末嘉興西塘揚匯張成揚茂剔紅最得名但朱薄而不堅者多浮起日本琉球國極愛此物と云り爰にて堆朱の初久しからぬものにや（人倫訓蒙圖彙）に日本にて彫はじめしは下京邊に門入とて其名四方に聞えたる名人ありしその子孫佛光寺通東洞院西へ入處堆朱屋二郎左衛門とて名人今もあり昔の門入にはまさりなんと皆人申あへり（江戶鹿子）堆朱彫物師南大工町養淸とありこゝにて造るものは皆似剔紅にして眞の製にあらず古董家の說に堆朱は彫めに段々の筋みゆるをよしとすといへれどさやうの堆朱はあらず同色の朱をかさぬるに筋のみゆべきやうもなし必ず誤傳なり筋の見ゆるは別物なり

西皮

（同話錄）に髹器稱西皮者世人誤以爲犀角之犀非也乃西方馬韉自黑而丹而黃時復改易五色相疊馬鐙磨擦有凹處粲然成文遂以髹器倣爲之とあり是を名物六帖にスリハカシと云り（藝苑日涉）に一種以彩漆班爛繪圖花兒而不剔者亦名西皮（同話錄）所載是也キンマのことを云なるべしされど（同話錄）にいへる處不剔ものとも聞えがたし西皮とは國の名にや（席上腐談）に漆器有所謂犀皮者出西毘國訛而爲犀皮また（格古要論）古剔犀器以滑地紫犀爲貴其色如棗色俗謂之棗兒犀【（典籍便覽）には犀字毘に作る】亦有剔深峻者次之但黃地者最易浮脆と見えたり

グリ

こゝでグリと稱するもの是なりグリとはグリ〳〵の略なり（尺素往來）に九連絲堆漆犀皮等出たり皆一物なるべし（下學集增補）に屈輪香合紋也又九連絲臺とある是なり（萬寶全書）に堆紅張成は手深くほる揚茂は手淺くほる上手なれ共張成より少しおとる又云張成が作花鳥ぐり〳〵などありほ

七寶燒

之類但可婦人閨閣中用非士大夫文房淸玩也又謂之鬼國窯といへり佛郎嵌は七寶ながしなるへし

存星の盆

○(東牖子)に世に存星の盆といふ古器有て珍藏す目利する者存星の若出來或は後出來などゝ鑑定す存星は器物作人の名と覺えたるやう也作は宋の張成なり盆の地面に星顯れたれは存星と稱す張成古今の細工人なりとぞ南土御門氏所持三種の內存星の盆あり是は東山殿御所持なりしを傳來す下繪は馬麟なり圖は許由なりといへり存星をまた誤りて珍星といひたり(人倫訓蒙圖彙)堆朱彫の處に唐士にては珍星張成其外數多の名人ありといへり是を按るにいづれもいたく誤れりとみゆ(雍州府志)漆器條に有稱藤重者元樽井氏而南京之漆工也是漆工羽田氏之類也至今藤嚴十一代也第七世人剃髮號藤重特爲巧手自茲後不稱樽井從倭訓號藤重是專製中次茶器云々この漆工もと南京の者にて樽井氏なる故にこれが作れる器を【其始は彼國の式にて作りけむは中次茶器のみにはあらぬなるべし】やがて音に呼て樽井

ちんき

といへるが唐物の漆器をもしか稱へしを後に戧金の盆に星の如きもの有から樽井を存星と誤りしものと見ゆ【こは前條にいへる建安兎毫琖を班點あるに依て天目といひ窰變と曜變と誤しと似たるとなり】(皇明文則)に載たる張汝弼が楊義士の傳に宣德間に人を倭國に遣はして泥金畫漆の法を傳へて歸らしむ揚塤これを習ひて大自己の意を出し五色金鈿を施し物色天眞に稱へりと有り然らは泥金畫漆はこゝよりかしこへ傳へたるなり樽井もそれらの時に來て遂にこゝに止まりしにや彼國泥金畫漆なき頃に

剗金
沈金彫

はみな戧金の漆器のみ也戧金は剗金ともいふこれ沈金彫にて堆朱の類にあらず【(帝京景物略)云漆器云々國朝可傳則剔紅塡漆倭漆三者剔紅宋多金銀爲素國朝木爲錫胎云々其法朱漆三十六次鏤以細錦底深黑光(小注、針刻大明永樂年製】字以比元作者劍鍰香草之式似爲過之宣廟有宮時剔紅等製原經裁定立後廠器終不逮前工屢被罪因私購內藏盤合欵而進之廨去永樂封書鈿款刀刻宣德大字濃金塡掩之故宣欵皆永器也間存永樂原欵則希有矣塡漆欵亦如之塡漆刻成花鳥彩塡稠漆磨平如畫久愈新也其合製貴小其古色

の土哉判詞云上の句の三句に五種の道具を出して南部一境の土に功をつのれり云々さま〴〵に作り出し焼なせるならの土たいらの京へもいかばかりのぼり侍らむ云々あり其内宗喜が造れるは殊に勝れて茶人これを賞美す【洛陽集】奈良火鉢この手があらば二ツ欲し【自悦】今は江戸今戸にも上手に造るもの出來たり

備前焼

○備前焼（春湊浪語）に國々陶器を造り出す處多き中に當國【備前なり】の伊部より出るほどふるきはなし（日本紀）に嚴瓮とも忌瓮とも書て是を（神代卷）にイツベと訓し（崇神紀）にイムベと訓し（舊事記）にはイハヒベと訓す兼方の說に嚴瓮は祭神の十器の惣名とも見えたるもの也孝靈天皇の御時に吉備津彦命と若建吉備津命と吉備國に向ひ給ひし時に針間を道ノ口として忌瓮を居と（舊事記）に見えたる則今和氣郡伊部村といふ處にて是を造りければ忌瓮といふ名其處の名に殘り陶器をも今に作るなるへし【針間とあれども道の口とあるは備前のことなるべし】其後深草焼丹波焼等の陶器のはしまりしと（雄略記）に見えたり（舊事記）は證とするに足らざれども土地を忌部といひ陶器を作るは古きことはみゆといへり備前の伊部邑今陶器師の竈本と稱するものは森長十郎と云森榮吉といふは別家なり往昔の竈は今の處より南にあたる近き處にありしと也いつの頃か地震に壞れて失ぬ竈は山の腹に口を開く其はゞ九間それより山の內を穿つと竪に長サ三十五間其中にあまた土の柱ありて自ら陶器となりたりかくの如き竈三口ありこれ今の竈なり是を新山といふされども其始て開きし時より五百年餘に及ぶとなむ【舊窯の壞れたるも此年數を經たる歟】土人言傳ふる吉備前焼印の歌「古備前は松葉長元丁茂兵衛丸は宗伯十は茂右衛門」

大食窯

○西洋の陶器に骨を銅にて作り五彩をもて細密の繪をかき瓷器の釉水をかけたるものあり漢土にてこれを大食窯といふ（典籍便覽）に大食窯以銅作身用藥燒成五色花者與佛郎嵌相似嘗見香爐花瓶合兒盞子

掘出し

語）【三】折ふし取賣の男參りて高麗茶わんせとのかたつきなどさま〴〵古き數寄道具を持參す云々（色芝居）【享保三年】茶人を云處この道に入ては取買かたきになるぞかし又掘出しといふ詞は（淸水物語）【下】道具などの掘出しとやらんいへるたぐひに領知すくなく人もゝたぬさまにてほしがられ候は千里の馬に駄賃つけむといひたるに同じ（鷹筑波集）【五】ほり出すに人や水さしの芋頭（醒醉笑）に古道三洛中歩行の折ふし或る棚のかたはらに靑瓷の香爐おもはしきあり立よりうつけたるふりに此かうろんいくらとゝはれければ內よりなにとはねても銀二枚といへる咄あり此も掘出しせんとしたるなり近頃おかしきは（六玉川）【五】どろぼうめ茶にゆく顏のから物屋石川近江守總茂三幅對の畫を買得て賞せられし時常に出入する者に目利せよと有しかば誰がしが筆に紛れなく見えてよき物に候某等も求得たく候と申然らば價はいくばくがよからんと有しかば大抵白銀百兩計に求得候はゞ幸たるべく候それを減じては手放申まじくやと申けりそこにて其事を預かる臣下を召て此畫先に三十兩に求得たりといへ共百兩たるべきものをそこばく減じて得べきやうなし直に其分つかはし候へとあつて百兩ましてあたへられしとぞ大家にはさもあるべき事なり

法華釜
あみだ堂

○貞德が（淀河）に十王堂に秋風ぞふく淨はりの鏡に似たる月出て夜露にぬるゝ此法華釜【自注】茶釜に情張と云釜を法華釜と異名ありといへるは日蓮宗の頑愚なるを名とする也【淨味は代々京師の釜師なりそれが張たる釜を淨はりといふ歟】秀吉公有馬の溫泉に浴せられし時利休扈從して阿彌陀堂の庭に茶亭を造り其時用たる釜の形を世にあみだ堂といふ法花釜に對すべし

ごとく

○五とく（散木集）【四】松のす櫃にするともなふてかな輪といふ物の立るを見てよめる「いかにせんいつちゆけとも世中のかなはぬさまぞ似る物もなき」

土風爐

○土風爐は奈良をもとゝす（三十二番の職人歌合）に風呂火鉢瓦燈ぬり桶みづこぼしよき商ひとなら

の後妾と宗入との間睦からず依て妾は幼少の子を懐にして在所玉水へかへり育上げ成長に随ひ樂燒を仕習はせ玉水彌兵衛といひて茶椀など燒しなり後に名を一元と改む一元の子二代め彌兵衛なり此彌兵衛弟を任玉齋といふ三代め玉水甚兵衛四代目甚兵衛なり後に樂翁と改む今は五代めなり又尼樂といふは（統譜）に長次郎が母製し出せりと有【長次郎は元祖朝次郎なり】

伊末里
○和蘭人は萬國の產物を交易することを務とし物の性質を見ることも委しきに此方の伊末里の瓷器を賞して海內第一といへりとぞ殊に五郎七柳右衛門が燒たるものはまことに珍翫すべきものなるに他國のよからぬ器物を貴ぶは隣の糂汰のたぐひにひとし

古董（藏廻り、取賣、掘出し）法華釜　あみだ堂）土風呂　伊部　大食窯　剝金（シャウ）（沈金、存星、堆朱、西皮、グリ、キンマ、ラデン）桔梗皿（ハリギ）十錦　磁器をゆでゝ用る事　やき續　燒付繪

古董
（後撰夷曲集）に售物店にてかねの塔を求んとするに代銀三十目にすこしかろしまけまじきよしいへればよめる「かねの塔三ぢうめより上ぞとて九りんのことを爭ひにけり」高故茶具などうるものをから物ばかり商ふにはあらね共昔よりかく云り漢土には古董家といふ【此古字も音ばかりにて義はなきにや（霏雪錄）に東坡作骨董晦庵作汨董云々かく色々に書り】

藏まはり
こゝには古へ藏まはりといふもの古手買古道具やの如きもの也（職人歌合）に藏まはりの歌になかれものといふ詞あり不用なるものをはらふをいふと聞ゆ質物のことにはあらずそれよりのち掘出しなどゝいふ詞はやりたる頃には取賣と書たり（これは今いふ道具屋なり）貞德が（油粕）に是非ともに又も

取賣
きたらば打やせむこちの道具を望む取賣（東海道名所記）に庄屋どのゝ二ばん子めしつれらるゝ大皷衆はに御出入をいたすとり賣なまばやりなる藪醫師云々といへるは今も昔もかはることなし又（浮世物

の時擒となりて來りし者の末葉なりとぞ今血脉にて相續せるは坂が家ばかりなりと彼國人に聞り

御室焼

○仁清は仁和寺門前仁清が作るを御室焼と稱す初め狩野探幽永眞などに繪をかゝせて焼たりといへり其後尾形光琳が弟深省鳴瀧村に居て陶器を作る王城いぬゐに居る故乾山と號す現在なりと（世事談）にいへり是等も樂焼の類なり近來京清水六兵衞上手なり世に清六と稱す其外近ごろは京師に名手多く染付瓷器青磁等もよく作りて古物に劣らず

のんこ

○朝次郎より三世にのんこといふ者ありそれが作れる七種の名物嵐雪が（茶椀銘）にもみえたり黑茶椀あり云々闇の夜に鼻をとられしはをの〳〵つちめくらの交りなるべし【撿挍貧僧黑小黑鉢子早舟小雲雀】三代めをのんこといふのんここそふかき意味あれ祕てしばらく殘す「まつ虫のりんともいはず黑茶わん」深き意味とは何をいふにかおぼつかなし或はいふノンコは昔のはやり言葉なりこれによりて思ふにのんこはその頃うたひもの有て踊りをるとありこれを異名としたるならむ（松の葉）端歌の内のんやほうし晩にござらばひごなださいてござれ〳〵ばんにや梅の木の枝おろそのんやほ〳〵後にもはやりしとみえて西鶴が（大鑑）などにものほんやゝ踊とありのんこはおかしき男にてこの誦を好みたるか又その身ぶりなどの似たりしにもあるべし

○戯に樂焼をして見むと思はゞ浪花人中田潛龍子といふもの享保十八年に著したる（樂焼祕囊）といふものあり製法圖式委しく出たり【予もとより試みし事もなかりしが文昌星像一軀を作りて出來ぬ】其内に（茶椀圖式）ありのんど又のぞきといへるかた有のぞきとは今を云へどのんどは聞ざる名なり形を人の咽喉になぞらへたるか

玉水やき

○玉水焼は（芝屋隨筆）に樂焼屋一入の妾は【（樂焼師統譜）を按るに道入のんこが次四代吉左衞門號一入元祿五丙子正月歿】南山城玉水の産なりこの妾の生たる子を彌兵衞と云ふ宗入の弟なり一入死去

いらは

もたりし器を本とするなり伊羅保はいらだちたるやうなれば名づくるにや（似我蜂物語）今のみやこのはやり物の内河原歌舞伎いらぼの茶わんといへり

井戸手焼

（井戸は按るに昔のはやり詞に至り盡せるやうのことを根ぬけといへり（元隣）が（寶藏）に俊慶が作れる茶壺の事をいへるに見事なことの根ぬけとあり（寛永手鑑）に根抜とは渡り古きをいふとみゆ太閤の時井戸若狹守朝鮮より茶碗をとりて献ぜしを井戸手焼といふ井戸は掘ぬくものなれば是根ぬけにて古渡最上の意にいふなり井戸を家苗のことにいふ説は非なるべし又思ふに掘出しなどのはやり詞も此緣語より云りしにや塚掘といへる茶碗の名もさるたくひと思はる古塚より出しものにはあらじ（風俗文選）に許六が紫芝岡賛とゝやといふ名物の茶椀は魚店何がしが猫の飯器たるを達人取て萬貫の道具となれり云々（春臺獨語）に朝鮮國の人の常に用ひたる唾壺の舊きを求めて抹茶を貯へ是を茶入といふこれもけがらはし云々などあり好事のしれわざにかゝることも有べき也食器などは其元よりしれたる新しき物ほど潔(イサギヨ)きはなし（百莖根(クキネ)）はこの頃の人の記しゝ美濃の地誌なりこれをみるに其國にも處々より陶器を出す磁器出於土岐郡久尻駄知多治見下洞妻木下(オロシ)石笠原等此邑中久尻或は郡尻焼物釜久しく作之久尻釜元祖加藤筑後と稱す（延喜式）貢物出於此地歟古瀬戸藤四郎焼出尾州春日井郡瀬戸妻木久尻焼等もすべて瀬戸といふ不破郡晝飯村に寛永年中に焼物始るなどみえたり猶諸州に國焼とてあれ共勝

樂焼

れて聞えたるも少し豐臣太閤聚樂にて朝鮮の陶師をめし利休に其法式を命して茶椀を焼せらる是を樂焼といふ聚樂の字を分て印となすその陶師を朝次郎と稱するは朝鮮の一字を取たる也その子孫今に榮

萩焼

ふ又毛利家にも長門の萩に高麗の陶師をよびて作らしむるを萩焼と云ふ陶師の名を高麗左衞門と云ふ是も今に末流ありと（雍州府志）に見えたり（桂林漫錄）に長門侯の領内松本村と云ふ所にて製す彼藩中にては松本焼と稱す陶工三軒あり坂新兵衞三輪十藏林彌四郎と云ふ何れも高麗の種子なり朝鮮征伐

したるものをさもいひしとありて其形なればこれに名付るか】そをやがて器物の名としたるにや擂木の說はうけがたしすり木に泡鋲あるべきやうもなく又それにて茶をすると云をもいまだ聞ず

古高麗

○(典籍便覽)に古高麗窯色粉靑與龍泉窯類上有白花朶見者不甚値錢【(陶說)に高麗窯器與饒相似有細花髣髴北定者とあり】などいへるをこゝには昔よりいたくめづるは茶人の好事なるべし其器多くは所謂質麁にして釉水燥暴なるものなり其品三島手【暦の文字の如く細き文あるなり】熊川斗々屋金海御本手判司伊羅保刷目【(寛永手鑑)に四十年已前の物刷目もあり堅手に似たり朝鮮役より此かた也】雲雀井戸繪馬高麗等さま〴〵あり寛永十七年手鑑に高麗わたり三百年になる物ありといへり康永貞和ごろなるべしそのかみにもなほ渡りたらめど世にもてはやすとも聞えぬは賞美せざりしにや有けむもと茶碗にあらぬ物多し筆すゝき香爐或は肴もる器さま〴〵なるを此所にて皆茶碗に用ひたり

三島手

○(懷子俳諧集)【十】暦をばけふは三島の里問て遊女を思ひそめつけ茶わん(齋藤德元)熊川金海は彼地名也朝鮮慶尙道郡七蔚山咸陽熊川云々府六金海善山云々とゝやは(榮花咄)に泉州の堺は云々唐

斗々屋

へなげ銀して時代もうけの分限斗々屋の何某といへる人云々斗々屋は魚屋の義なるべし其家にもたりし茶碗をもとにして類へるものを皆しか呼るとかや【是には限らず靑瓷のきぬた天龍寺七官等もその例なり】

御本手

○御本手は略て御本ともいふ御本手は茶碗のみにあらず棧留島にあり(產業袋)に赤糸入の立縞を俗に奥島といへり是を御本手といふ紺地に淺黃色島を靑手といふなどいへり今も御本手の外をかはり島といふ常に多くあるを本とするはもとより此所にて定めたる名なり異やうならでよき程なるを本とすといへる詞そのかみ習ひなり彼處へあつらへ遣はして燒せたる故御本といふとは非なるべしさあらば布もその分にや【江戸本所の地名御本松といへる處によき松あり是又同例なり】判司は彼處の官人が

きものなりこれに畫焼青(ゴス)を加ふるといへり】

祥瑞

○祥瑞（桂林庵漫錄）に五良太夫祥瑞は勢州松坂の陶工なり明の正德八年後柏原院永正十年に當る歸國の時に李春亭なる者送別の詩あり勢州丹生の神宮寺に藏すると也（若葉合歌仙）に虚谷祥瑞は火入の底をたもひやる（萬寶全書）は元祿七年の書なるに染付物に祥瑞は是南京道具の內すぐれてよきものを祥瑞と云品さま〴〵もやう色々あり然れ共別して見事なる物を指て是祥瑞なりといふとありて人の名ともいはずいと近く迄しられざりしにや李春亭が詩に五良太夫とのみ有て祥瑞といふことはみえず又思ふに名手なる者彼國にて法を傳へてありたらんには爰にても作らぬこともあるべからずさあれば世にも廣く知られて彼藤四郎俊慶などの如く古跡も傳へて明らかなるべきに近き代までも知られざりしはいといぶかし

呉洲手

○呉洲手（萬寶全書）染付のあしきを名付たり手のよきを子昻といふ其うちなればごすでといふとぞ（新安手簡）にもごすでは子昻を打返して手のあしきを申ことと申候是等も京都將軍の世の俗語と聞え候とありさることもあるべけれど畫焼青をゴスといふ磁器の青繪なりよく製法して繪をかき釉水かくれば青色となれども元と色黑きもの故釉水かゝらぬ處は其色黑し故に藍色の黑みある陶器なればゴス手といひしを謎の名のやうに取なしたるもの歟

擂茶

　擂茶　高麗（三島、斗々屋、イラボ、井戸）樂焼　萩焼（のんこ玉水焼）

茶入壺に擂茶と呼ものあり其形口作り立のびて廻りに金物の菊座の如き圓形あり俊慶も摸し作れり（萬寶全書）の說に唐にて茶をする擂木は頸の廻りに鋲ありて丸し是によりて譬へて名づくといへり按るに東山殿御道具の內擂茶といふ壺あり其腹に渦卷のごとき筋あり是擂盆の目に似たる故に名づけしなるべし又碓(ウス)などにて挽くをする共いへば擂茶とはひき茶をいふなるべし【漢土より來る圖片とな

祖母懐

伴ひ入宋して磁器の法を習ひ得て來れり本州春日井郡山田庄赤津村窯陶の竈七口同庄瀬戸村に十二口ありて磁器を燒藤四郎が作りし祖母懐の石は當處の内にあり國禁ありて命にあらざれば見るヿを得ず又青繪【青色の燒付をするをいふ也】此地に產す然れども異邦より渡す青繪に比すれば色おとり愛智郡に瀬戸山といふありせとは海路磯近き島の間をいふ迫渡とかく愛智郡の海遠き地にせとの名はいかにして有ぞといふ人ありされば我州陶器の制智多郡海邊より燒初て薪につきてやう〳〵北の方に移りしとかや初め智多の瀬戸より起りし名なるべしといへり（和訓栞）に瀬戸の隣に祖母懐谷ありとみゆ（萬寶全書）に尾州瀬戸の内にうばがふところと云所名あり其里にて燒く茶入を云とみえたり世に春慶と書は誤としらる堺鑑には舜慶とありて世間に堺舜慶とて茶入をもてあそぶヿは此人根本當地の生にて其後尾州瀬戸にて茶入を燒又伊勢にても燒ゆゑに其所々の名によりて分あれども根本此地より出たれば一ツ事也其子孫利休時代迄堺に居住すとなり○此說おぼつかなしもしさもあらんにはその古跡燒ものゝ窑の處などあるべきにもなきは思ふにそのかみ堺地繁花にて茶も行はれしかば諸方の名匠多くこゝにつどへり彼が子孫も他より來しものならん又（攝陽群談）ひたち帶塚のヿもとより里俗の傳なれば誤あるべし俊慶道元法師に隨ひて入道したるものなれば禪法も聞しものならんに死に至りて燒ものゝ土などに執着せんヿあるべからず必ず傳者の誤なり

尾張燒

○今世盛りに行はるゝ尾張燒は其始今より卅年に及ばず傳聞に其國の陶師廻國順禮となりて肥前伊末里に行其地に止りて生涯を過んするやうにもてなし陶家に立入て其製法を習ひすまし故鄕に歸りて燒初たりとか

三田青甆

三田（サンダ）の青磁も同じ頃より始まれり三田は攝州兵庫の山の後に當れり久喜家の領地なり（九鬼長門守）其頃の領主陶を作るヿを心得られけるが茸がりの折其土と藥に用ふべき石とを見出されたりと也初めの窑戸（カマモト）は内髮屋逸年といへり今は他の者引うけたりとぞ【其石紫色にして剃頭刀の砥の如

水滴　油滴　手瓶　蔓付　天目

○今骨董家に水滴の類に四品ありとてこれを四滴といふ油滴水滴手瓶蔓付なり手も口もある瓶を油滴といひ手なきを水滴口なきを手瓶といふ蔓付は藥罐の手のやうに付たるをいへりこれも其辨別おぼつかなし手がめつるつきの二ツは何の滴ぞ油滴は（萬寶全書）に天目曜變より次とす第二の物なり曜變より數ありといへり又按るに天目は山の名なり（考槃餘事）に茶品を擧たる內天目爲天池龍井之次亦佳品也（地誌）云山中寒氣早嚴山僧至九月即不敢出冬來多雪三月後方通行茶之萌芽較晩むかし五山の僧など天目の茶を賞したりしが器物にも轉りて呼しにやされど天目山は杭州臨安縣にあり建安とは相渉らず

南京燒

○南京燒は慶長年中より渡る加藤侯嘉明成化年製の猪口十枚そろへ置て客をもてなさるゝ時近習の士取落してこれを碎きければ恐れて閉居せる由きかれて早々呼出し苦しからぬことなり誰も麁相は有べきなり殘りし皿ども持參れとて取よせられ悉く打破られて此皿一枚にても殘りてあらん內は何の年何某が碎きつれとて其者の名を出さん事よからず我毛頭怒りてかくするには非ずとて其後は器物を愛せられずとかや

瀬戸物

○（人倫訓蒙圖彙）に瀬戸物やは一切の燒物諸國より出す然共肥前唐津やきを面にあきなふ故に瀬戸物やといふとあるはいかゞ尾張の瀬戸村よりいふにやあらむ（五雜俎）に今俗語窰器謂之磁器者蓋河南磁州窯最多故相沿名之如銀稱朱提、墨稱隃麋、之類也といへる例なり

藤四郎後慶　常陸帶

○（攝陽群談）常陸帶塚住吉殿堂村にあり傳云尾張國瀬戸の藤四郎加藤四郎入道春慶なり永平寺開祖道元和尚に隨て唐に渡り彼國の土を取來りて茶入を燒これをひたち帶と名く藤四郎死に臨て其土を惜み此處に埋みし故かく呼とぞ【（茶器名物記）に常陸帶といふ茶壺唐物にて形色帶に似たる處有故の名なり藤四郎是に倣ひて燒たるを同常陸帶と稱せり】（鹽尻）に常國智多郡の人藤四郎法名後慶通元和尚に

聞誤りしと見ゆ茅變といふ事はなきと也（典籍便覽）に凡窰器茅篾骨出者、價輕、損曰茅、路曰篾、無油水曰骨出、此賣古董市語也とあり

○窯變とは燒とき窯の內にて形ゆがみてさま〴〵の物の形となる事あるをいふ（五雜俎）に景德鎭に造るもの常に窯變あり造式によらざれば忽變ず或は魚の形となり或は果の形となる傳へ聞初め窯を開く時必童男女各一人を用ひて其生血を取て祭る故精氣の結凝りて怪をなすといへり俗說にして虛妄なり（陶說）に景德鎭は僅に十餘里ばかりの處山水環りて一隅の僻處なれども陶ある故に四方の商販來り民窑二三百工匠の人夫數十萬これに藉て營みをなす故に陶を祭り報賽を重くす明の時に龍缸を燒しめたるに成がたかりしを中使頻りに督責するに民みな苦めり龍缸といふ物は底濶肚凸なれば墜裂すること多しと也其時童姓なるもの窑戶にてありしが衆人のために窑突の中へ躍り入て燒死たりしかば龍缸全く成就しぬ司事の者これを憐み感じて祠を廠署に建てこれを祀りて風光仙と稱すそれより屢靈異をあらはす每年祀り社方に擬ふとあり此者童姓なるによりて是を童男女とし自ら燒死たるを其生血をもて祭ると誤りしものと見えたり景德鎭は陶窑二三百工匠數十萬ある處といへば其中にはまれ〳〵窑の變ずる事あるべき也

○建安は福建泉州府德化縣の地名なり（格古要論）に盌琖多是撇口色黑而滋潤有黃兎斑滴珠大者眞體極厚少見者薄また（淸異錄）に閩中造茶琖花紋鷓鴣斑點試茶家珍之といひ山谷が詩に建安瓷盌鷓鴣斑とある是なりとぞ是を兎毫琖と稱するものは斑紋ある故也蔡襄が（進茶錄）に紺黑紋如兎毫さるを（萬寶全書）に眞天目といふものは斑文なき黑盌なりとこれ恐らくは吉州或は均州などの產にして建琖にはあらず許次紓が（茶疏）に茶甌古取定窑兎毛花者亦鬪碾茶用之耳東坡が試院煎茶詩に定州茶瓷琢如玉とあれば兎毫は建盞のみにはあらず

ふ事市買よりも厚しこゝに於て造るもの益精く前代に劣らず又古人のいまだ考へつかざることなどを工み出せり

陶器に釉水をかく

○陶器に釉水かくるに古へは筆にて塗たり不勻なる處は數遍ぬる故に藥厚く堆脂の如し今は竹筒に細紗を蒙て是を蘸して吹かくる也但し圓器の小きものは缸內に於てひたす釉を吹は琢器と圓器の大なるものにすること也【今新渡の器物大なるものを見るに其釉水汗の出たるやうに平らかならぬはこの故】（天爵堂筆餘）に本願寺永樂宣成正嘉窑器與宣廟銅爐數百年後價視宋時諸彝商周彝鼎必翔宋彝色製雖古雅而器之精工細澤遠遜今代彝鼎出土者反易毀宣爐在今日已不多得矣といへりされど古物はそれに就て古を考ふべき便となれば貴ぶとあり

點茶は黒樂燒を用

建盞

天目

○（五雜俎）に蔡君謨云茶色白故於宜黑盞以建安所造者爲上此說余殊不解茶色自宜帶綠豈有純白者即以白茶注之黑盞亦渾然一色耳何由辨其濃淡今景德鎭所造小壇盞倣大醮壇爲之者白而堅厚最宜注茶建安黑窯間有藏者時作紅碧色但免俗爾未當於用也といへるは非なり蔡襄が（進茶錄）にいへる處は點茶なり點茶はこゝにても黑樂燒をよしとするは蔡が說の當れる事を知るべし白き茶椀のよきは煎茶のこと也（考槃餘事）にも宣廟時有茶盞料精式雅質厚難冷瑩白如玉可試茶色最爲要用蔡君謨取建盞其色紺黑似不宜用といへり謝肇淛屠隆等は煎茶をもて點茶を論ずるに似たりこゝに古く建盞と稱するは建安の黑盞なり烏盞といふも黑きをいふなり建盞を天目と稱す其名義を知らず按るに星あるを星建盞といふ天目と名づけしは星あるによるなるべし然るを同じ建盞なれば星なきをも天目ととなへてより後には星あるを曜變と誤り呼事起りしにや窯變といふことあるを聞誤り星あるに依て曜變と心得たるはおかし今骨董家天目の內にばうえうばうへんのぎのきかつぎと稱へて分つばうえうは星あるをいふこは又曜變を訛りたる也のきと稱ふるは兎毫文をいふ茅といふことは藥の毀剝するをいひて義異なるをそれとも

其民繁富甲於一省余嘗以分守督運至其地萬杵之聲殷地火光燭天夜令人不能寢戯目之曰四時雷電〇（帝京景物略）首成窯次宣次永次嘉其正弘隆萬間有佳者又云成杯茶貴于酒米貴于青其最者鬪雞可口謂之雞缸といへりこれは白壇琖の内染付の文字あり茶字をすぐれたりとすされ共壇琖は雞缸に及ばざるなり【（陶説）に饒州府浮梁縣西興鄉の最德鎭は水土陶に宜し鎭を設しは宋の景德中なりしかば景德鎭と名く宋元のころは命あれば窯を開きさなければ常は止たる故其器傳はれるものまれなり

古窯

〇古窯は青瓷をおもんじけるが明の代に至りて彼秘色といへる物は絶て專ら白瓷青花或は五彩を加ふ永樂窯よしといへども宣德成化の下嘉靖の上にあるべし明の陶器は宣成に過る物なし宣德の時黑頳石また畫燒青ともいへるものを用れ共そめつけの青料は蘇泥勃青を用ゆ成化の時に絶たり回青は正德の頃に得て嘉靖の時盛なり鮮紅土は此時絶たり【赤繪の藥なるべし〇（帝京景物略）云、永尙厚、成尙薄、宣青尙淡、嘉青尙濃小注に成宣用青之漂去其沉脚嘉青全用濃者とありまた成青未若宣青蘇渤泥青也宣彩未若成彩淺深入畫也嘉萬之回青特爲幽菁鮮紅土盡絶色止礬紅而青盛作隆窑之春宮不入鑒藏是其別而已又云今市所爭購多當年不中御用者其有龍紋五爪不落民間或礮去一爪而亦市之】赤繪は後にもあれと鮮紅にあらず燒法前に及ばず礬紅色となる鮮紅土は西紅寶玉を末となし紅魚などを畫くに寶光鮮紅目を奪へり嘉靖の青花五彩製器傳るといへどもこの時坏を造る麻倉の土竭むとする程にて體質宣成に及ばず隆慶萬曆に至て麻倉土竭たる故縣の境吳門托の新土を掘用青科も外國の產は繼とあたはずして絶たり神宗の時尙食御前の成化杯一双直錢十萬といへり當時貴重かくの如し（野獲編）に窯器成化を貴び次は宣德なり此頃成化酒杯每對銀百金といひ（曝書亭集）に萬曆器は白金數兩宣德成化款のものは是に倍蓰す鷄缸は白金五鎰にあらざれば買がたしといへり淸の代に至りて順治十一年に饒州窯龍缸欄板等の器を造らしめていまだ成らず民を累はさむことを恐れて止む康凞十九年朝官を簡び緡を給

新窯といふもの有り其うへ偽造の處々より出れば好事家鑒定ぶりて是は定是は官などいふものおぼつかなしといへり

哥窯

○哥窯は南宋の時處州の人章姓兄弟各一窯を主り章一兄なる故にそれが焼ところを哥窯といふ【（春風堂随筆）哥窯淺白斷紋號白圾碎宋時有章生一生二兄弟皆處州人主龍泉之琉田窯生二所陶青器純粹如美玉爲世所貴即官窯之類一生所陶者色淡故名哥窯と見えたり（雲谷臥餘）には一生所製爲佳故以哥窯別之哥窯多斷紋今溫處人稱爲章窯云とかゝれば春風堂の説と表裏の違也哥とは兄をいふ】さるを（徐氏筆精）に甆器有哥窯壽州有舜哥山此窯所出今賞鑒家解哥謂其兄所製誤矣といへるはいたくたがへり龍

龍泉窯

泉窯も古物はよきよし（典籍便覽）に龍泉窯古靑器土脉細且薄翠青色者貴粉青色者低有一等盆底雙魚盆口有銅掇環體厚者不甚佳【（五雜組）に今につたふる器たゞ哥窯のみ得やすきは其質厚く藏むるに耐れば也定汝は白きが玉の如くして全き物なし宋の時宮中に用ゐしは大かた銅鈐其口以是損價といへり

磁器のふくりん

ふくりんしたるを嫌へり（陶説）今之求定汝者即以銅鈐口爲眞骨董家之論古往々如此】器の口に銅のふくりんかけしは滑らかならぬ故なるべしこゝに今ある天目はみな銀にてふくりんかけたり宋の代の風なり盆底に魚あるもの【是は造りたるにて畫にはあらず】今もありて筆洗なりとす杜撰にいふにや【また染付にも鯉などかきたるも是を寫したる也然るを僧牧溪が下繪なりとて牧溪鉢と稱る笑ふべし】

陶器年號　饒州景德鎭

○藍染付の器年號などある事は明の代より起る（五雜組）に今龍泉窯世不復重惟饒州景德鎭所造徧行天下每歲內府頒一式度紀年號於下然惟宣德欸製最精距迄百五十年其價幾與宋器埒嘉靖次之成化又次之世宗末年所造金籙大醮壇用者又其次也【成化は嘉靖より前なれ共次とす世宗は嘉靖中の君なり今本邦にて万曆の欸製なるをめづるはよき物多ければなり成化嘉靖は彼處にてよしとするより僞造多かるべし○王世懋が（二酉委譚）に江西饒州府浮梁縣科第特盛離縣二十里許爲景德鎭官窯設焉天下窰器所聚

定窯

○定窯は（典籍便覽）に紫定黑定はその色によりて呼也其價高きと古定にひとしみな定州より出東坡が詩に定州花瓷琢如玉といへり本朝にて定州の白磁器芒有て用に堪ず汝州に命せて青磁を作らしむ【（老學庵筆記）故都時定器不入森中惟用汝器以定器有芒也按に器邊毀剝するを芽といふ芒とも通へり】（陶說）に定州は今眞定府に隷す宋南渡の前を北定といひ後を南定といふ但し南渡の後窯をいづくに移したるにか定に南北といふものは官窯とまがひたるにはあらざるか元の代には戧金匠彭均寶といふもの定器に效ひて作れりこれを彭窯といひまた新定といふ（典籍便覽）霍器出霍州元朝戧金匠彭君寶效古定制折腰而滋潤者貴質粗而色黃者價低外有淚痕者是眞劃花者最佳素者亦好綉花者次之また彭窯土脉細白者與定相似皆滑口欠滋潤脆不甚値錢賣古董者稱爲新定器好事者以重價救之可矣かゝれば新定とはもと道具屋の新呼なりあまり下劣にとりあつかはれ好事者價をよく買ふべしとやうに聞ゆ

汝窯

○汝窯は（陶說）に瑪瑙を製して釉水（クスリ）に用【釉水上にかくる藥也】淡青色にして蟹爪紋あり【磁器のクワンニウは是蟹爪紋なり（君臺觀）に云埴瑤土むらさき色也藥もうす紫色にてひゞきたるを云也青き

官窯

茶碗にもひゞきあり青クワンニウと云なり又定州ひゞきとも云りこれもと官窯の字音なりそれより後にはうつりてすべてひゞき入たるをクワンニウと云てひゞきの名のやうに思ふは非なり】古窯柴汝尤勝る次は官定なり官は宋の政和の間京師に窯をたてゝ燒此を官窯といふ宋南渡の後舊京の遺製によりて窯を修內司にたつこれも亦官窯と云其土紫口なる故紫口鐵足の稱あり紫口とは釉水下にながれて口にはうすくかゝる故坏の土色【坏とは木地をいふ】少し透て見ゆるをいふ鐵足は釉水をかけざる處なれば坏の土色なり【（典籍便覽）に官窯宋修內司燒者土脉細潤色靑帶彩紅濃淡不一有蟹爪紋紫口鐵足色好者與汝窑相類有黑土者謂之烏泥窯僞者皆龍泉所燒無紋路とみえたり】柴汝の器は存するもの絕て少し官定は希にありといへどもこれも得がたし定州には南北新の三定あり官窯にも舊京修內司また郊壇下

秘色

○（源氏物語）【末摘花】御たいひそくやうのもろこしのものなれど（孟津抄）秘色今の茶碗也秘色は磁器越州より奉るもの也其色翠青にして殊にすぐれたり仍て是を秘藏して尋常に不用故號秘色云々（河海）に此分也取要載之（花鳥餘情）李部王記云天暦五年六月九月御膳沈香折敷四枚瓶川秘色云々（うつほの物語）に云ひそくのつき今按秘色はあをき茶碗の類をいふ也【右湖月抄】（孟津抄）に是を秘藏

柴窯

して云々いへるは誤也（五雜俎）に陶器柴窯最古今人得其碎片亦與金翠同價矣蓋色既鮮碧而質復瑩薄可以粧飾玩具而成器者杳不可復見矣世傳柴世宗時燒造所司請其色御批云雨過青天雲破處這般顏色做將來然唐時已有秘色陸龜蒙詩九天風露越窯開奪得千峰秘色來惜今人無見之耳余謂洛中人有掘得漢唐時墓者其中有陶器色但淨白而形質甚粗蓋至宋而後其製始精也【また（侯鯖錄）云今之秘色磁器世言錢氏有國越州燒進不得臣庶用之故云秘色陸龜蒙進越器詩云九秋風露越窯開云々乃知唐已有秘色非錢氏爲始】

青磁

とみゆ秘色とは人巧の及びがたき色といふ義也今青磁と稱するものなれども質瑩薄と稱すべき青器こゝにわたらず漢土にすら碎片も希なればこゝになきは理也其色鮮碧にしてよの常なるとは異なるべし

定汝官哥の窯

猶この外に定汝官哥の四種ありみな宋の代の器なり清の朱琰が（陶說）六卷あり古今の陶器を論ずる事いと委し其說に陶器のこと太古よりありといへども唐に至りて盛なり諸州に是を作る其內越州窯勝れたり瓷器青くして茶を點るに茶色綠なる故陸羽これを上とす陸龜蒙が詩云々作れり吳越錢氏の時秘色と稱するものこれにもとづけり後周世宗の時に燒ものを柴窯といふ汴を都とす唐の時河南道に屬せし處なり其地もとより陶に宜きゆゑ宋の政和中官窯といへるも汴の地なり汝もまた唐の河南道所管の州なり傳へいふ柴窯を燒く所司器の式を請しに世宗その狀に批して雨過青天雲破處の顏色に倣せといへり昔人云實に柴窯はそら色にして鏡の如く薄きと紙のごとしとなむ今も其碎片を得る者は玩具の飾とすといへり

燕口

ば改めて燕口なる椀のかず〲燕口といふもの古きもの也ひはわれめをいふ也

朽木の膳具　**木具**　**金箔押の木具**

○（貞德文集）に雜餉之獻立委細御書候て給候云々就其椀折敷三十人前新に用意仕置候但椀は朽木五器木具金箔押可然候哉治陽集に（自悅）花に呼ぬ主の柚や朽木盆などみゆ朽木の膳具も古きもの也金箔押の木具も今は神に供する物とのみおもへり

　陶器　茶椀　秘色　柴窯　定汝官哥等の窯　龍泉　磁器のふくりん　饒州景德鎭　點茶は黑器を用　建盞（天目）窯變　水滴油滴　瀨戸もの　藤四郎俊慶（ヒタチ帶、祖母懷）

　尾張燒　三田　祥瑞　吳洲

陶器

陶器の古き神代に嚴瓮とありていつべと訓（崇神紀）にいむべと訓たり其後（雄略紀）十七年春三月云々土師連等、使進應盛朝御膳淸器者、於是土師連、祖吾笥、仍進攝津國來狹々村山背國內村俯見村伊勢國形藤村及丹波但馬因幡私民部、名曰贄土師部、と見え又（日本後紀）【廿四】弘仁六年正月癸酉朔云々丁丑造瓷器生尾張國山田郡人三家人部乙麿等三人傳習成業准雜生聽出身とみえたり瓷は（和名抄）に唐韻云瓷瓦器也といふを擧て俗云瓷器之乃宇豆波毛乃とあるは音にて呼しなり（玉篇）に瓦器

瓷

物名とあるはこゝにて今世燒ものといふ程の義にや（和名抄）にいふ處はさにあらず（字彙）に陶器緻堅者潘安仁笙賦傾縹瓷以酌醽とあるに同意にて藥のかゝりたる陶器をいふなりこゝにて上藥をかけ

茶椀

て燒事はいと後のことゝ見えたりこれを專ら茶椀といひしにや（江次第）春日使の條中關白爲使於兼時山崎家飮水兼時依無土器以茶垸獻之關白有疑色兼時得意乍給茶垸沃前また（續古事談）【一】圓融院大井川に御行に大入道殿攝政の時御膳まうけられけり茶椀にてぞありける（十訓抄）に德大寺の古大臣うちまかせてはいひ出がたき女房のもとへ獅子のかた作りたる茶わんの枕を奉るとて云々此茶わんといふは今俗に燒ものまた瀨戸物といふが如し

朱器　黒塗

日ほんめいよのゑがきの上手がこんじやうろくしやうの筆をもつて朱をも惜まずかいたりしと是にても朱の高價はしらる】其むかしも朱器は重んじたり（江次第）【二】大臣大饗云々藤氏一大臣用朱器臺盤以其日可行由以職事達天聽云々また（式）に朱漆臺盤と出たり又黒漆は古き盃黒塗なるもの往々あり是らは今の膳具にむかへていふべきにもあらず黒椀正しく見えたるは（七十一番職人歌合）ひきれ賣の繪合子二三具かきたるみな黒漆にて内は朱も黒きありまた黒漆を下とすること（甲陽軍鑑）【九】笛吹峠合戰の條合戰に手に合ざる者手柄の者上中下をさたして上の手柄には三膳或は二膳赤椀にて振舞ひ手に合ざる人々にて黒椀にて精進飯を喰せらる是を他國にては信玄公なされたると沙汰有信形短氣なる人にて如此云々【板垣信形也これは義家朝臣の甲乙の座を學びたる歟】手に合ざるとは戰功なかりしをいふ今の手にあまるとも手にあはぬともいふとは異なり黒漆の椀は賤きものにて田舍にのみ用ひたりしを宗易好事に茶席に用ひたりしより會席椀と稱するものを殊さらに作ることはなれり茶事にのみ會席といふはおかしきにそをまた茶會の庖丁料理のことさへ心得るはいかなる僻ことにかいと拙し

白木合子　山折敷

○里はなれたる處などには漆もぬらぬ合子を用ひたる故に質朴に堅固なるものを白木合子といふ是なり夢窓國師本來意をよめる「山賤の白子の合子そのまゝに漆つけねばはげ色もなし」古調和が發句に漆刷毛しらずに久し山折敷いまは正月神に供ふるに山折敷は用るのみ

根來朱　薩摩椀

○根來はそのかみよき朱ぬりをしたる處なり（鷹筑波集）に折敷をばしつかい朱にや塗ぬらんねころ法師はさぞな成佛根來山破られて後薩摩の田代根古へ行たる者あり彼處(カシコ)よりは朱出る故緣ありて行たりけんそこにて椀を作りて塗たるもの多しとなむ（万寶全書）根來物香箱折敷あり紙をしめして摺りて見れば紙に漆つく書寫ぬりはよく根來に似たれども紙につかずといへり薩摩椀はわろかりしを（鷹筑波）にさつま椀花ぬりはたゞのり地かな【薩摩守忠度を隱したり】又（同集）に十せんの位にひを

ちやつ

時の宋の音の帖子又偏すべきにあらずといへり今も高野山の寺院にて人を饗應する膳具ツスチヤツあり根來朱ぬりの木椀なり其形をもて思ふに今の皿はチヤツなりツスは猪口と壺との間のもの也又今のこし高はツスチヤツをかねたるもの也（醒睡笑）にサラ〳〵と云ことを覺えちがひてチヤツチヤツと云たるものがたりあるにてもチヤツはさらなるとしるし（尤草紙）赤き物の中にチヤツかヅスと云りみな朱ぬり也

ちよく

○東雅【十二】盃の條下鍾字讀てさかづきといふ即今瓷器にしてチヨクといふもの是なり鍾を呼てチヨクといふは福建及朝鮮の方言なるを近俗かの方言の如くによびし也といへり友人太田全齋云今小盃をチヨクと呼即鍾字入聲燭に竹の吳の原音チヨクあるの轉なり吳の轉原音シユク省呼シグ万葉集鍾禮シグレ又鍾禮ともあり鍾鐘音同愚按黃鐘ウワウジキを呼もシグの轉用也此轉のウの韻は唐音撥假字の音にて朝鮮音などはグと呼やうに聞ゆといへり漳州をチヤグチヤといふ類なり越後の鄉名勇禮とイクレも同例なりといへり

へいから

（海人藻芥）に鍾はへいから二度入三度入置也然るに近代間物（アイダノ）五度入十度入寒鼻（ソクヒ）如斯種々土器令出來酒興盛故也と見ゆへいからとは何の由しか推て考ふるに瓶子の大小によりて二度入三度入の差別あるにや一度二度といふは今いふ一盃二盃なり

手鹽

○次云今小皿を手鹽といふは手鹽入べき皿をいふ也（庖丁聞書）に手鹽を組付る事は膳部の不淨を拂の心といへり其外心入有べしといへり是もなほ後の事也古の膳には鹽のみならず酒も酢も組付たり食ふ人の加減に任するなるべし

黑椀

○黑椀（歌林雜話集）にいにしへの人のしおける事は或は天地を表し或は佛道にかたどり云々子細あるをも知らず近年宗易が茶湯に用そめて黑闇の椀折敷用ると忌々敷おぼえ侍り云々とあり其頃ゟ椀は用ゐざりしを知べし是は都あたりのことにて田舍には黑きを用たるべし其故は今も同じことながらわきて朱は貴き頃なれば下賤の器物これをもて塗ことあるべからず【朱の高價なりし事は（淨瑠理）しのびの段

かはらけの事也輪をして高くする故に高坏といふ下の臺を輪にせず臺共にかはらけに作り付にしたるを土高坏と云供御の御膳に用之魚の燒物なども式正には大なるかはらけに盛なりそれをかたどりて大なる陶器の皿に盛也といへり思ふに壺平腰高等はひきいれがうし有て後に出來て添たるものか【物は異ながら腰の高を用ひたると（陶說）に周羽沖（三楚新錄）高從誨時荊南瓷器皆高足公私競置用之謂之高足盌こし高の名に似たり】下條に出づ

坊主椀　○糸底なきを坊主椀といふ（續五元集）に糸しりのなきもおかしき坊主椀これ糸尻なきにはあらず其處内に窪みたるをいふよしの椀などにあるもの也（獲絨輪）に世捨し閑居茶わん坊主手【次に云疊に坊主縁といふを野郎だゝみといふもおかし】是は人形手歟

さら（さはり）ちよく（へいかう）手鹽　黑椀（朱器）　白木合子（山折敷）　根來朱（薩摩椀）燕口　朽木の膳具（木具金箔）

さら　さら（東雅）に和名抄に唐韻を引て鈔鑼銅器なり鈔鑼音與沙羅同俗云沙布羅今按或說言新羅金椀出新羅國後人謂之雜羅者新之訛也正說未詳と注せりさふらとはもとこれ新羅の方言なり即鈔鑼なり雜鑼

さはり　の義にはあらず即今も朝鮮より此器を出せり俗にサハリといふはさふらの音の轉したる也といへり（和訓栞）に三才圖會を按るに沙鑼の形碟の如し今俗はちさらと幷へ稱するは梵器の鉢沙鑼よりいへるなるべしと有（和名抄）に匜を佐良介とあり（日本紀）に淺甕と書たる是なり然らば淺らけの名を上下略してさらとはいへるならん鈔鑼と同音なるによりてまぎらはしき也さらをもて名づくる器物（和名抄）にもくさ〳〵あり疊子うるしぬりのとら酒臺子しりさら又盤を佐良といふときは盂の類す

づす　べていふ廣き名なるをや豆子楪子などは禪宗こゝに出來てより始れり（埃囊抄）に楪子は大にて淺し豆子は小にて深し饒磁と云皿葉上僧正孫弟聖一國師相續て四條後嵯峨の御頃諸人此風情を好む云々當

今の飯器

金椀

壺皿 平皿 腰高

皿といふものは古の盤の如く壺皿といふは古の窪坏の如く笠といふものは古の笠形葉盤（ヒラデ）といふもの丶如く（延喜式）に見えし漆器の大椀徑八寸六分深三寸中椀徑七寸八分深二寸盤徑八寸窪坏徑五寸深一寸五分又葉椀に盛りし物を覆ふに笠形の葉盤をもてすると見えたり今を去る事百餘年前の御器といふ物をみるに今の如く其形小きにはあらず大やう式に見えし所に相近し又椀字よびてわんといふとは我國の禪法始れるより後の事にして宋國の音なり古の時に引入合子などいひしもの也と（塵添埃嚢抄）にみえたり【按に埃嚢のかたに出づ塵添にはあらず】と云り名は古き物より出たり共其製大やう近しとはしひと也式に見えたる寸法によればみな扁き（ヒラタ）器物にてかはらけの形なり（東雅）又云玉鋺といひ金鋺といふもの有てまた藥椀續てくぼてといふ物もあれば古の時も瓦器をのみ椀とせしとはみえずとあるは其意葉椀を漆器とするに似たり（和訓栞）に今の大嘗祭の葉手（ヒラテ）は柏葉を竹の針にて盃の形に圓く平く造れり釋に葉盤は柏葉に盛物也といへり葉椀葉盤くぼとひらとの差はあれどいづれも柏葉にて作るもの也つぼひらなどいふとは此器のみに限らぬ詞なれば今の椀必しも是を取たるにはあらず又金（カナ）鋺（マリ）は後のものにも見えたり（著聞集）に大食する人水飯くふ處まづしろかねのはちを口一尺五六寸ばかりなるに水飯をうづたかにもりておなじきかひをさしてあをさふらひ一人おもげに持て前に置たり云々これ器の名をいはざれ共かなまり也今の椀は（秋草）に壺皿平皿腰高といふ物あり式正の膳には菜もみなかはらけに盛なり煮汁の多くあるものはかはらけにてはこぼる丶故に杉の木のわけ物にもる也其わけ物の平たきをかたどりて平皿を作りそのわけもの丶つぼふかきをかたどりてつぼ皿を作りたるなりそのわけものにかつらとて白き木を糸の如く細く削りて輪にしてわけもの丶外にはむる也平皿壺皿の外に細く高き筋あるは彼かつらを入たる體をうつしたる也腰高の形はかはらけの下に檜の木の輪を臺にしたる形をうつして作れる也かはらけには必輪を臺にして置物なり是を高坏といふ坏とは

侍る（貞順故實集）食籠は面向へ不出候去ほどに貴人へは諸家より進上なく候世上をわたし候てふるくなる故に貴人の御前へは斟酌候也といへりその外居もその如く御前に出ぬものなれば外居とも行器とも書これ食籠の大なるもの也これを大海といふと古書には見えず茶壺の內海は大海の名に對して出來たる名とはしるし（淸異錄）に輝州陶匠創造一等平底深盌號小海鷗と見えたるは其名大海に對すべし外居は（古事談）【一】平治之亂逆之時師仲卿奉取內侍所安置家之車寄妻戶中其體新外居足高之上敷薦一枚乍裹奉置云々かゝれば新しきは物を入て貴人などにも贈りしにや又思ふにタイカイは臺匙にや臺は飯をいふ女詞なりされば飯匙のことなれども飯をも臺といへるなればおだいかひと云は飯器のことなれるにや

七ツ椀

○（庭訓）の抄に大名の分限にて飯の大小ありといふ愚說笑ふべし偃鼠飮河とは人の腹かぎりあることをいへり分限勝れたり共それ程の大食はならねと也又もとよりさる威儀もなきと也又合子七ツ入九ツ入云々七ツ椀といふものはおや椀汁椀の外に中椀あり其外蓋四ツあり椀每にふたに用て一ツ殘る女は本椀より中椀に取分てくふ殘りたる蓋は高鉢の臺の端に置て臨時の用とす高鉢とは飯椀の形にて大なる飯鉢をいふ九ツ入はいまだ聞ず又三升四升入こそなけれむかしのごときはみな大なり人を饗すに食を强ることならひにてありしかば飯器も大に作りたるにこそ今も田舍には飯酒を强るはそのかみの遺風なり

朱漆合子

日光山などに强飯といふとある卽是なり（和名抄）漆器類に合子を載て今按朱合俗所謂朱漆合子也とあるは入子のかうしにはあらぬなるべし（名物六帖）に品字箋を引て云盒器也盤之有盖者【按小器有蓋覆者謂之合如金合香之屬取其上下相合也後世加皿以別之】といへり

垸飯

（江次第）（東鑑）等に垸飯（ワウバン）とあるは（和名抄）瓦器類に盌字亦作椀辨色立成云末里俗云毛比とありかはらけにや漆器を用るともひきいれがうしにはあるべからず（東雅）に今俗に飯椀といひ汁椀といふものは古への大椀中椀の類にして平

精進合子など見えたり合子はひきれといふ挽入にて轆轤にて木を挽器に作り幾ツも入子にしたるをいふ今の椀の四ツ入子にしたる是なり（七十一番職人歌合）ひきれ賣が詞にこれは因幡からしにて候戀の歌我戀はしはすのはてのうりひきれぬるかとすればいそぐ別れ路とみゆ春の設に椀を買ふ人多きなるべし今とかはりたるとなし沾州が發句に椀屋より手を打つゞけ神の春（櫻陰比事）むかし都の春の事ども

引入合子

とりいそぐに丹波の奥山家より常器の椀賣りに來りし云々（庭訓往來）に引入合子皿盞云々抄に引入合子と公は方の供御を盛る物なりひきものゝ太しきなり三升盛五升盛なんどもの也大名は國を持分限ほど飯の大小ある也合子は七ツ八九ツ入など重々を入引たる御器なり云々あり此註わろし思ふに合子は田舍より行はれたる物なるべしおや椀の大なるは古へ食器みなかはらけにて飯は高く盛あけたるもの也合子もその高盛ほど飯の入べき爲に大に作りたる也然れば今の如く度々かはりを食ふとはなかるべし今も正式とて高盛にするに其遺風あり三升四升盛といへるは今いふ高鉢か又はたいかいといふ

大海
內海

ものなるべし大海は食らうの大きなる物にて挽ものにはあれと中に入る子もなし文字には大海と書なるべし（和名抄）に樽を酒海とあり硯には筆海の名もあり又茶壺に口の大きなるを大海といふ小きを內海といふ（万寶全書）にむかし大海は茄子或は肩衝茶入に一ツ、添置て茶臼より大海に茶をうつして後茄子へも肩衝へも茶を入替るなり然れば大海は挽溜の器にして古へより小座敷へは出たる法なし自然廣間書院の臺子には飾り置也宗易作意にて大海を挽溜に用てはやきものとやきものとあぶなき事なりとて引ためには吹雪を用ひられしと也此說によりて思ふにかの漆器の大海もほかゐ也ほかゐは形

外居
食籠

色々あるべし（下學集）外居或作行器節用には行器とあり

○食籠は（東山殿御飾記君臺觀座右帳仙傳抄）に棚にかざれる圖あり重に作りたるもの多し又私の贈り物はこれを用宗碩の佐野渡に此ふたりの方より食籠などいふものとり／＼にてこま／＼と書おくり

花足

碁石を入る此引出し箱のほかは透しの彫形あり此故に花足といふ（紫式部日記）にいへる碁ばん此形なるを知べし今の碁盤の梔子(クチナシ)あしは後のもの也民間にて佛具にけそくと云ふ物ありこれ其足に彫形あればなり（物類稱呼）に江戸及び四國にてけそくと云ふ東國にてろくがうと云西國にてろくごう又ごうといふ近江にてくげと云ひ越前にてくぎやうといふ加賀にてをけそくたいと云【供したる品をおけそくと云】今按るにろくごうと云はおくきやうの訛かと云へり（下學集）に公卿は臺器也とあり大臣を公といひ大中納言參議を卿といふ俗に六鄕家の紋は折敷に團子を盛たるやうなれば是をろくごうと呼といへるは非也（一代男）【六】こたつの火にておけそくのだんごを手にふれちや事せしと見てけうあり云々寬文三年卯九月御書付の內國持大名たりと云とも不時の振舞は二汁七菜たるべし云々附ふる舞の刻又は常にも杉重の菓子は可爲無用櫃物事不苦杉折杉重杉木具杉臺檜重右五種の分諸大名衆より誂申され候共仕間しき事杉箱檜櫃折これは不苦事元祿二年巳九月杉檜の儀窺候書付の內常に取かはし候青物かけながしの臺無用の事臺樽ぬり候て用候儀は心次第に候但ぬり候器物音物に付て差置候儀にては無之事常に取かはし肴等遣候籠を用候事肴水菓子の類入候靑竹かごはかけながし用可申候うるしぬりの酒樽肴籠等專ら用るはこの時よりなるべし

ごき　定器

○ごき（古事談）【二】九條民部卿顯賴辨官之時公事の日參陣して飢に及ぶ雜色に其由を云れければ黑器と云物にみそうつの毛立たる一盃と署預の燒たる二筋とを持來て奉れば黑器の物をばひきそばめて皆啜て只今ぞ人心地するとて云々見えたる黑器なりこれ黑き合子なるべし定器は常に定て用る器といふなるべし（好古尙錄）に老學庵筆記を引て汝器定器とあるを證とすこれは定州の窑器のとなりこゝにかなはず（甲陽軍鑑）【十三】元龜二年法令に向後於陣中貴賤共振舞一切可停止之然則定器之外碗折敷以下無用之荷物帶來禁法之事

合子

合子といふは（源平盛衰記）【卅三】平家物語【八】猫間中將の條に田舍合子

物なりされどもたゞの六位などは不用之六位藏人はこれを用ゆ四方はいの目四方に有】（宗吾記）云公方樣攝家門跡大臣家にては御盃四方にすはり候大方の公家衆は三方にすはり候武家は角の折敷にする候【角の折敷とはすみ切角の折敷也今木具といふ物なり足付の折敷也】云々あり（梅窓筆記）今の三方といふ物は衡重あり八寸臺は足付なり（宣胤卿記）云永正十四年十月五日【取要】公卿【衡重】殿上人前【足付】とあり足付は足打にて折敷に足打たるといふとなるべしといへり【按ずるに今緣高と

緣高八寸

いふものは足付の折敷具木とも八寸ともいふなり】緣の高きものなり【折櫃に足付たるは緣高といふべからず】緣高きは物を盛るによければ櫃の如く用ひ蓋をも作りたる也【膳に用ひざれば異ものゝ如くなれり】衡重は三方となりても猶さま〴〵に用ると同じからず

かけばん

○かけばん今あるものは古製と異なり古圖を見るに今の高坏といふものゝ如し（三中口傳）懸盤の制

高坏

を記たる處如高坏面有四方緣其面押織物也裏幷足沈揩貝足ハ各別也四角立緣上下有横緣四方牙象ヲ彫也足ノ四角內ニ合テ面ノ下裏ニ保曾ヲ付テ居之也云々安齋云牙象は齒牙の並へる如く高く低くほりたる也といへり（和名抄）木器類机附錄に牙脚者今所謂牙象脚也といへる物の類か盤は臺也（唐書五行志）【卅五】龍朔中時人飮酒令曰子母相去離連臺拗倒俗謂杯盤爲子母又名盤爲臺

蝶足の膳

○蝶足の膳は明曆万治のころの草子の繪に菓物などを盛る圖ありその時代の折敷なるべし今の蝶足に較れば足低く先尖りたり按るにこれけそくの類也足の形蝶花形に似たれば花足にむかへて蝶足といふなるべしけそくは（源氏物語）【宿木】くゑそくのさらどもいといまめかしう又【繪合】すはうのけそく（孟津抄）に机の足也蕨手の程なりともいへり（紫式部日記）播磨のかみ碁のまけわさしける日あからさまにまかてゝ後にぞごばんのさまなどみ給へしかばけそくなどゆゑ〴〵しくして云々（東大寺正倉院寶物圖）の中に碁盤二面ありその足今のやうにはかはりて筒の如く兩角に小箱の引出しありて

硯蓋

○硯蓋は元祿已後多く見えたれども（諸國咄）【貞享二年版卷二】時代蒔繪の硯箱の蓋に秋の野をうつせしが此中に御所落雁煎榧さまぐ\の菓子つみてとあり但しいまだ一種の器物に作りしにはあらず（俳諧三疋猿）【寬永元年支考撰】末をとめたる竹のしら露【季覽】菊の香に菓子取まぜて硯ぶた【京莵】此頃よりのち肴などをも盛るものとはなりしなるべし磁器の皿鉢に盛ことは寬永中よりもありて古書にもみゆれど飲席の體かけるに今のごとく膳出たるはなし羹はあれどもくひ終れはおろす故なるべし

あさぎ椀

○あさぎ椀（尤草紙）靑き物ろくしやう繪のあし打せいしつの椀あさぎこき（貞德文集）【上略】口切出し申候淺黃椀塗足打貴樣御心得にて五人前被取揃急度奉賴候（洛陽集）にあさぎ椀白魚のかへる波かなと【自悅】あさきごき（雍州府志）に四條南北新町にて製するを縹椀（アサギ）といふ黑塗のうへに縹色幷に赤白の漆にて花鳥を畫く云々近世上品の椀も製るとあればもとより下品なりしにや漆ぬりの上に淺黃また白などを彩色に用ひて繪を書たるを桐油まき繪と呼古き足打などに見事なる物あり昔ははやりたるものとみえたり日光山には御宮の玉垣の長押其外諸堂にこれを用ひたるあり今の南部塗も五色の繪を書き處々に金箔を押たり又加賀の城ケ鼻の椀に金箔繪の中は靑白赤黃の色を用ひて繪を書る古きものに上品あり又古き物に彩漆をもて書たる下品なるは大名けんどんなり

三方　衝重　四方

○重箱を衝重とするは非なり（室町日記）【十九】いつくよりとりてまきけむ杉重角折すはまの臺などあまた和尙にすゝめてけり云々これ重宮の白木なるもの即折うづ也又三方は三方にいの目あれば也とこれは衝重より出たるものか（秋草）に今世は平人盃を三方に居るとありもと賤きものゝ用べき物にあらず（三光院內府記）長盤【膳のことをいふなり】大臣以上は四方大納言以下は三方なり又云細緣の三方は六位藏人に用之【細緣の三方とは緣をひきくしたる也是を薄盤共いふ是も三方なれども品下りたる

まつりけるに硯のはこのふたに雪をいれて出されたりけるしきがみに書付はへる云々敷紙すると古き習なり（新勅撰集）【夏】白河院御時うへのをのこともきさいの宮の御方にくだもの申けるたまふとてうへに花立ばなを折ておかれたりけるはこのふたかへしまゐらすとてよみ侍りける源師賢朝臣云々箱のふたは硯筥のふたなるべし又（新拾遺集）【十八雜】花園院位におはしましける時十月ばかり持明院殿へ行幸あるべかりけるまへの日もみぢを箱のふたに入て奉らせ給ける伏見院御製云々（榮花物語）【玉の臺】御堂作り佛など造らるゝ處御厨子所の方をみれば云々ながひつといふものに御くだものさうしものもてつゝきまゐりたれば云々また同物語【若はへ】ながもちからびつのふたにいとおとろおとろしうたゝみ入て【衣なり】打かさねてふたりなどかきてもてくるもあり云々（平家物語）紅葉の段あやしの女の童のながもちのふたさげたるがなくにてぞ有けるいかにとゝへば主の女房の院の御所にさふらはせ給ふか此ほどやうくにしてしたてられつるきぬをもてまゐるほどにたゞ今男の二三人まうてきてうばひとりてまかりぬるぞや（同物語）三日平氏の段長もち三十えたにこがね卷衣梁ものふせいの物を入て奉らる【賴朝より池大納言賴盛へ贈らる】又征夷將軍院宣の段厚綿の衣二兩小袖十かさねながもちに入て設たりなど見ゆ衣筥のふた用ると諸書に見ゆ（位記問答）に廣蓋はころもはこのふた也といへり【もと硯筥のふたを用ひしが後世に硯ぶたといふ一種の器できたるが如し】古へ調度は定りたる物の外何にも廣く用ひたる事多し品數すくなくても足りし也

餌袋

○餌袋は鷹の具なりこれに食物を入ると（今昔物語）【廿】餌袋に干飯を入て堅き鹽和布など持來て云々廿日許有て亦前の女來たり又餌袋に精たる米を入て折櫃に餅可然菓子など入て云々また（蜻蛉日記）（枕草子）等にも見えたるは前の袋の條にいへり火とりなどをも用ひたり（古事談）寛治八年正月三日朝覲行幸云々小舍人童一人柑子火取持之相從馬後云々

の字漢書に出と（野客叢書）にみえたれど爰に用なければ錄さず】

さげ重
○（考槃餘事）提盒足以供六賓之需といへるは六人前の辨當のさげ重なり（尺素往來）に六納の樏俛（下學集）食籠樏梚また提爐といふ物ありこれは茶辨當なりさけ重といふ物他に持行ものにてこれも辨當とおなじくて品よき方にや今は坊間などには廢れたる物なれど五人づめ七人づめの辨當箱ありて古道具屋に出て買ふ者もなければ組入たる膳椀重箱一品づゝ分て賣りよき蒔繪したるなど往々ありこれら

さげ食籠
みな提重なり（似せ物語）天王寺に能ある條人々さげ食籠もてきたりもてきあつめたるくひもの千々ばかりありそこばくのさげ重箱を木の枝につけて堂の前にたてたれば山も更に堂の前にひかり出たるやうになむ見えける

重箱
○重箱は（狂言記菊の花）などに見え又（林逸節用）に載たり（好古日錄）に重箱は慶長年中重ある食籠にもとづきて始て製造すされども其用ひたるやうは折櫃と同じをりうづは檜のうす板を折曲て宮

折櫃
に作る形は四角六角さまざまなり今はこれを折といふ足利家の頃のものにも專ら折と書たればこれも近世の稱呼にはあらず折うづに肴物餅菓子何にても盛り檜の葉をかひ敷四すみに作り花などを立て飾とす盞あり御前へは取て出す昔の畫をみるに重箱も一重づゝ分ちて肴を盛り草木の枝を四隅にさして飾れり元祿ころ迄は飲席にも是を用ひたり其後今の硯蓋出來て酒の肴はこれと皿鉢とに盛ことゝなり重箱は正月用るのみなり（三月の重づめはひな祭美麗になりてよりのことなれは昔よりの事にあらず）

箱のふたに物を盛
○器の蓋に物を盛ことは古への常なりいくらも有べけれど一つ二つを擧く（源氏物語）【若菜上】つはひもちひなしかうしやうの物ともさまざまにはこの蓋ともにとりまぜ云々又【蜻蛉】女一の宮の女房辨のおもとか事をいふ處うちとけて手ならひしけるなるべし硯のふたにすへて心もとなき花の末々たをりてもてあそびけり（詞花集）太皇太后宮賀茂のいつきときこえ給ひける時人々まゐりてよりつかふ

檜破子

氏物語)【宿木】産養の處女房のおまへにはついかさねをばさるものにてひわりご三十さま〴〵し盡したることも有ひわりごは檜にて作れる也たゝのとは他し木にて作るなるべし檜破子のみわきていふは品よき故なりさるを(古事談)【三】南京永超僧都條晝破子と書たるは假字書ながら中食の義にとれるなるべし(和名抄)行旅具に樏子蔣魴切韻云樏(力委反漢語抄云樏子加禮比計今按俗所謂破子是破子讀和利古)樏子中有障之器也とあり障字古本には隔字を書り餉をいれて持行器なり中にさゝへとてへ

破子さゝへ

だてをしたるによりて破子といふ後には破子さゝへとてさゝへは酒を入る器とし小竹筒また篠枝と書るは誤なり後京極殿寄破子戀の歌われをいとふ妹が心やこま〴〵とへたてかちなるわりごならましといへるにても思ふべし古書にかけるをみるに白木の折ひつのやうなる物に同板の身より大きなる蓋(フタ)ありいと麁相に見ゆるは一度用るばかりの物かその旁に靑竹の筒あるは酒を入るなるべし是を誤りて篠

さゝ折

枝などはいふ也今さゝ折といふ物あり是はさゝへ折にはあるべからずさゝやかの義歟(俳諧三疋猿)にさゝ折しける折の饅頭といふ句あり篠葉をしける物ゆゑ篠折か神祭などの人數多き辨當には此さゝ折を用る事古への破子用ひたるも同じ趣なり又こゝに引る(うつほ物語)にとしきと有は頓食なり(源

頓食

氏物語)【桐壺】源氏元服の處とんしきろくのからひつどもところせき迄云々(孟津抄)に頓食つゝみいひ共いふ下らうに賜ふ强飯鳥の子なり或人是を握りかためて卵の形にしたるなりといへるは臆說なり握り飯といふことはよし今も公家にては握り飯をどんじきと云と也鳥の子は鷄卵にて其形をいふにあらず(古事談)に惟成秀才雜色たる時花逍遙に一條一種物しけり惟成飯に宛りて長櫃に飯二合外居に鷄子一折(脫字アルカ)櫃擣鹽一杯これを納て出すことみえたり卵を飯に添るは是なり(草廬雜談)に溫公通鑑云以馬邑爲之中頓胡身之注云中頓者謂中道有城有糧可以頓食置食之所曰頓唐人多言置頓中頓は今の晝食の所なり一頓食にして至るなどゝいふは晝飯一度するといふことゝみえたりと有【按に一頓

樽　天野樽　人形樽　角樽　柳樽　わりご檜

(一遍上人の畫卷物)に長櫃に飯入たる圖あり近き頃迄も長持にて食物もて行しとなりそは人の數多ければ也さなくば破子にても足ぬべし長持とあるは(榮花物語)【若はゑ】長持から櫃のふたにいとおころ〳〵しう疊み入て云々(平治物語)賴朝卿平家を亡し初て上洛して清恒が老翁に引出物の處長持二合とあり(太平記)泰武文怨靈の條先一番に退紅きたる仕丁が長持舁て通ると見えて打失ぬとあり長櫃を長持ともいひしなるべし唐櫃は長持に對していへる名には有べからずこはもと漢の櫃のことに渡りたるを呼る名なりそれに習ひて作れるにはみなしかいひたるなり佛經など入たるは今も古き寺にはあり

○樽　和名抄辨色立成云【音與尊同、字亦作罇從缶、見說文、今按無和名、俗稱去聲】酒樽有脚、酒器也酒海、蔣魴、切韻云、樽酒海也【今俗所用罇與酒海各異、故別擧之】(空穗物語)なかひつともにいひ入させ酒そに入てもたせて云々そに入るは樽に入る也後世是をたると呼は酒を垂るの義と聞ゆ光信などの書たる檜の酒樽は大鼓に作りたる也(十二類合戰畫)また(福富双子)等にみえたり後世太こ樽といふ名はこれにより今は婚禮などに用る斗樽を太こ樽といふ又柄の長きを柄樽とも角樽ともいへど此はもと河內國天野酒を入るゝ樽にて天野樽といふもの也とぞ寛文延寶の頃これを人形樽といひしはこの長き手の上にあみ笠させて人形に見立て醉興にこれを舞せし也角樽といふはほそ長き箱に作りて兩端に角の如く出たる處ある故にしか名く昔は婚儀の結納に是をも用ひしなり今は此樽雛人形の道具に殘りてあれ共人これを知らず吸筒とおもへり又今は斗樽を柳樽といへど柳樽はその形して長く手の付しものも也と云へり其圖(安齋隨筆)に載たり

○弁當箱は古のわりご也(うつほ物語)【さかの院中】源中納言殿よりひわりごたゞのわりごとしきなどいとおほく有御前ともにまゐる人々にたぶ又他物を入しともあり(榮花物語)【莟花】齊信大納言人々に物贈る處女房の中には大なるひわりごをして白いものたき物などをぞ入て出し給へりける又(源

ひにこ便當にてつかふものあまたあれごうつこりにて朝走なごする者なし云々是は召使の者亭主がこ便當なるをあなごる也うつけたる者のくせに小利口なるを好むなるべし器物によりて此詞ありこ見ゆ

面桶　片口

さて辨當は音轉りてあらゐ文字に書たるなり(雍州府志)に面桶片口の末に片口盛水器也、其吐水口在一方、故稱片口、面桶或稱覆(コボシ)面桶元一人所服食之飯盛此一器、携遠方爲行厨、五人十人隨人之多少、就一人面而與一器、依之號面桶、今毎一人與飯料、是如謂顏扶持、或爲覆水之器、茶人點茶時湯、或水之餘瀝、納此器、凡面桶片口、或有以銅鐵造之者又有用磁器者、然千利休所好、杉片口杉面桶外、未見勝之者、宜哉茶人之宗利休也、其時所造之末孫今猶存こいへり面桶めんつうこ讀は呉音べんこうは漢音なり(三十二番職人盡歌合) 薦僧が歌の判云紙きぬ肩にかけ面桶腰につけ云々(奇異雜談)古堂の天井に女をはた物にかけたる事の條に井を尋ねめんつうに汲て云々【これは法師の僧が携る器なり】(因果物語)中風氣なる乞食めんつうに古きつゞれをしきて赤犬の手白なるを入て持來る云々見えたり乞兒やうの者のもこあつかひしが始にや(きのふはけふの物語)【下】秀忠公より禁中樣御作事の時國々のにんぶ共ついぢまはりのうゑ木の枝にめんつをひしごかけておきたるを柳原殿御らんじて見渡せは柳さくらにごきかけて都は春のごしきなりけり黒川氏が銅鐵にて造るものもありこいへるは面桶にはあらず輕くせんこう此器の用なれこゝは覆水(ミヅコボシ)のことを專らいひたるにてそれには銅鐵も磁器も有をいふ也文のわろきなり

長持　唐櫃　長櫃　中持

○古へは長持に食物を入てもたする事多し安齋云(新儀式)奉賀天皇御算篇云庭中東西相分立、長物酒食云々貞丈按るに長物は長持なるべし物字音によめば湯桶よみなれご古書其例多し足あるを唐櫃こいひ長きを長唐櫃こいふ足なきは長持也常の長持に對して唐こはいふなるべしされば長持古よりあるべし長持本名は長櫃なるべし(東鑑)に中持あり不長不短の櫃なるべしこ云り(空穗物語)【さかの院】ながひつこもにいひ入させ酒そに入てもたせてまうでゝ山伏ごもめし〳〵あつめていひさけくはせ云々

挾竹　挾箱　辨當筥　面桶　長持　破子さゝえ【屯飲さゝえ折】　重箱　筥のふた
他物を借用　硯蓋　あさき椀　三方　緣高八寸　かけばん　蝶足　花足
ごき定器　合子【ひきれ】　大海【内海】　外居【食籠】　今の飯器【カナマリ】　腰高【坊主椀】

挾竹
狹箱

上さし袋廢れて挾竹できそれもやみて挾箱始れり挾竹は（甲陽軍鑑）【廿】天正元年九月勝頼遠州に出て歸陣の處此時草履取二十內外の小者共十五人挾竹を以て惣手のあとにさがりたるを敵方の馬乘三騎出て草履取を一人きる所に殘て十四人挾竹にて馬乘一人打落搦取（和漢三才圖會）に古は板二枚を用衣服上下を覆ひ竹をもてこれを挾み僕に擔はしむ是を挾竹と名付【中略】相傳ふ慶長年中秀吉公の僕布施久內といふ者始て挾箱を作出せり江村宗具が（老人雜話）には挾箱は大坂の津田長門守初て作れりと有りいづれも非なり古は今の如く一雙のさき箱などいふとはなけれ共かゝる器物は古畫に多く見えたり此類すべて行李の皮籠なるべし上さし袋も專ら用たる頃の繪ともに挾箱めく器擔ひたるかたいと多し挾箱は古畫にかせ杖に雨皮かけて擔たる仕丁多し又文杖とて竹を割て文を挾む物あり是等に習ひたるもの歟この物なほ後々も旅中の飛脚などは用ひたり万治元年の（東海道名記所）延寶七年（宮雀）【五】の繪などに見えたるこれなり（鷹筑波集）【一】一荷にもつやこの田子の浦駿河路をとをる辨當はさみ箱【孝甫】

辨當筥

〇（犬子集）【三】へんとうなりと人やみるらん、小からとを花見の庭へ荷なはせて【慶友】（老人雜話）に信長の時分は辨當といふ物なし安土に出來し辨當といふ物あり小芋ほどの內に諸道具おさまるといふ僞ならんとて信するもの無りしと也今世に信玄辨當といふ物ありもと甲州より出たると雜話の說によれば信玄の作りし物にはあらず（醒睡笑）【二】うつとりと云ふ條、利根をよそにあつけぬる亭主なまじ

信玄辨當

間敷候尤町中は不及申旅立候共又は江戸へ入候共御赦免無之者は品川千壽板橋高井戸中川此內を限り一切乘申間敷候云々町人乘物之儀御免候て只今迄乘來候共向後は無用に致先惣樣駕籠に乘べし向後御免被成候駕籠の仕樣此度相極候間町年寄方へ參樣子承り拵乘可申候云々元祿二年巳九月十八日乘物の棒上繪無用【節多き下繪を用可申候】乘物桐木の棒かろき乘物幷駕籠云々輕き者乘候麁相なる乘物籠の棒は丸木の桐又は棒なりに削候桐も短き棒は有來通は用可申候女乘物の棒山高サ有來棒を五寸におろし用可申候新規に仕候はゞ上檜無用に可仕候寬文五年巳二月九日町中にて籠あんだに乘候者有之由に候前々より御法度に候間自今巳後は町中は不及申品川千壽板橋高井戸此內を限り堅乘申間敷候云々寬文八年申三月廿八日辻々橫町に借乘物置候義御法度に付其町々馬喰町橫山町淺草御藏前通り名主月行事へ申渡延寶五年巳四月十五日頃日端々駕籠幷借乘物相見え候近日御捕させ候云々元祿十年四月廿八日町中借駕籠の儀前々も法度に申付候處又々頃日より猥に借駕籠在之云々同十三年十二月廿八日借駕籠乘申ましき場所の定外櫻田御門內より馬場先御門和田倉御門の內龍口より井上大和守屋敷の方小普請小屋の前通松平肥後守屋敷の方神田橋御門通一橋御門內より竹橋を限り大手の方へ右の場所一切乘せ申まじく候元祿十六年未十二月【三傳馬町へ出銀差許の事大八車の處に引り】寶永六丑年三月廿四日頃日辻駕籠戸を拵又は簾をおろし停止の者も乘せ候の樣に相聞不屆の至に候云々〇正德三年巳三月町駕籠の儀只今迄町方に三百挺差免候得共向後百五十挺に減候の間致吟味持主書付可差出候只今迄の燒印の外に添燒印可申候尤御定の外之者乘せ申候間敷候【吉原駕籠のことは其條にいへり併せ見べし】

町駕籠員數

覚寶永八年卯三月廿日辻駕籠數多罷成候向後六百挺可相極候廿一日只今迄何程有之哉日雇座へ尋候處千八百挺有之候同廿五日樽屋藤左衛門方にて辻駕籠燒印仕候町方ばかりにて六百挺の內三百挺町方百挺寺社方二百挺代官付右之通割合相極こなり

さま〴〵の舁やうつくすに其水少も動かぬほど腰肩のすわりたるをよしとす六尺といふは乗物の棒六尺の寸法故にいふとかやとあり（竹丈點）前句附おなじとなり〳〵腰を曲尺駕籠の目見えの茶椀水とあり是をいふ也六尺の説これにも出たりこれ普通の説と知らるさりながらかゝるもの大漢(オホオトコ)を好とすれば六尺とは云なるべし今も駕籠舁ならぬ者に六尺といふ者もあれば駕籠の棒によるにあらず（櫻陰比事）に勝手も人ずくなに仕るべき覺悟六尺一人腰元づかひの女一人隙を仕しといへるもかご舁にはあらず

○（經濟錄）今の儀仗には士太夫も袴の裙を高く褰げて髀より下を露はす奴隷の輩は腰より下を露す人身の中にて臀は至て不淨なる處なるを是を露して貴人に示す殊に舁夫は輿の前後にある者にて輿の窓よりこれを守り看て穢しとも思はぬは如何るな習俗ぞや前代までは箇樣にはあらざりしに當代に及で斯の如く醜態を見はす口惜きと也然らば此風享保より甚しくなりしとこ見えたり

辻かご
かご制禁

○辻かごも上がたには早く有と見えて了意が（浮世物語）に島原へ通ふ者歩荷物を乗物を借といふとあり江戸には度々制禁あり（見聞集）當年【慶長十九年なり】十二月御法度雜人はしいまゝに乗輿すべからず云々醫陰兩道或は六十以上の人或は病人等は御免に及ばず乗べし又駕籠の制作は延寶九年酉七月十三日駕籠の注文長三尺三寸五分横下二尺四寸上一尺八寸五分軒の出端一寸五分但四方共臺木幅二寸角鐵物腰の緣六分四方の折廻し但四方につか一本づゝ入腰の籠外より見え候高三寸五分但澁張外皮日竹龜甲但折返し後七寸前一寸五分前後共にござ包掛莚前一盃後は小あき五寸みせすそ緣迄同窓長一尺五寸高九寸軒下より一寸五分さげて窓あく但白すだれ布べり前の窓大体すだれ前一ぱいに仕布べりを取やね澁ばり角金物惣体近江表包押緣竹四通四方共駕籠の內さはら本地肱かけ何にても白木棒長一丈丸太以上右之通駕籠の仕樣被仰付候間駕籠に乗候者は不及申駕籠拵候乗物屋共に申きかせ何方より誂候共仕樣違候駕籠一切拵申間敷候旨被仰付候間此旨相守可申候同七月十三日駕籠の義自今以後堅乘申

竹輿　○（落穂集）に我ら若き頃云々町人職人等の儀も五十以上に罷成又は法体など仕候は御願申上候へは漸ぬり竹輿を御免被遊候今時の御免駕籠など申物は無之候其節も四座の猿樂どもは御願を申上老若をかぎらず竹輿を御免被遊一同に黑くぬり候て乗申候は外の竹輿に紛不申樣にとの儀に有之信景云今少壯の人自ら病と稱して轎輿に乗る三四十年前は希なりし庸醫も三四人舁天を用ひて箯を走らしむるを榮とす

肩がよいわるい　○（籠耳）【貞享四年とあり此草子も例の入木をして外題をなほしたる物也（心縫）にくわい中と有り】運のよいわるいといふべきを肩がよいわるいとはいふべき詞にあらず肩に棒おく商人駕かき乗物かきより起りたる詞なり

六尺　○六尺は中川喜雲が（しかた咄）に乗物の棒は一丈二尺の物なりそれを二人してかたぐるにより二つにわれは六尺也（醒睡笑）京にて乗物をかき或は庭にてはたらく男を六尺とはなどいふらんさると候やしきにつけ家につけ疊につけ一切竪横間を定るに田舍のは一間を六尺にとる法なり都のは間尺を六尺三寸に取て一間とする法なりされば亭主をば都六尺三寸の間にとりつかはるゝ男をば田舍六尺の間に取その故は主人たる人の心と下男の心と物とばらりとちがひてまにあはぬ故にかの下人を六尺とは云ふ乗物かく男は隨意なる者にて主人の間に合ぬといふ心にて六尺といふと云へり乗物かくは大かたならぬわざにて手づかひには種蒔およぎ鴟口足づかひにはきざむ足戻り足そり足かよひ腰づかひにはひねり腰するとごし中腰および腰などさま／＼のならひ有むかし京の醫者にては山科板坂兩家のあらそひに六尺火花をちらせし事もあれどすべて六尺は主人を蔑にし隨意なる者也或はおろせの宿して大臣を集め或はむかしをほのめかして紋付のひとへ物駕やりましよの辻立をする有さま心がらとはいひながら見るも中々かはゆや（人倫訓蒙圖彙）に京六尺をよしとす上のかきてといふは茶椀に水をいれ駕籠に置

網代

○（撮壌集）輿部塵取網代半疊袖白などみゆこの網代といふもつり輿なり（猿源氏草子）五條の橋を渡りしが折ふしあじろのこしに行あひしに川かぜはげしくてしたすだれをばつとふきあげたる其隙よりこしの内の上臈を一目見しより云々【猿源氏が遊女を見そむる處】

塵取

○塵取は（太平記）【廿九】河津左衛門は痛手を負たりける間馬には乗得ずして塵取に舁れて云々あり今も塵をとる具にむしろの端に繩を付て二人して舁ものゝ如くなるべし（師門物語上卷）【寛永六年の寫本是も室町頃の草子なり】御こしをつまどの口へたてまうす御供の女房達のちりとりまで十六ちやうこそかきすゑたれ【師門夫婦鹽がま明神に參りし處なり】これらの塵取と云は麁末なる釣輿の類なるべし

あんだ　織部

○あんだの制そのもと異なるが如し慶長ごろの書にとさ包の乗ものあり是にや今は藺席にて包みたるを織部といふ

駕籠　箯輿　山籠　四ツ手　あんぽつ

○駕籠は（鹽尻）また（秋草）などにもいへる如くもと（和名抄）刑罰の具に見えたる箯輿といふ物後にはあんだと呼る是なり又按に（宋書）【八十七】殷琰傳、時琰有疾、以板自輿、輿諸將面縛請罪、（太平記）【十】龜壽殿信濃に令落條には箯と出たり今世の釣臺のごとくにて手負を乗また物を運びなどするに用（同書）【十六】執事兄弟奢侈の條に土石をはこびたる事もあり今も山籠といふものは是に日覆をしたるなり四ツ手といふは其さまを云なりあんぽつは東國の詞に法師をぼちといふ坊とおなじく遣ふ詞なり稻をつみたるをいなぼつち俵のこぐちをさんだらぼつちなど是なりあんだは罪あるものを乗る故となふるに忌々しければたゞあんとのみいひて彼ぼつをそへたるなるべし女詞に其物の名を顯はにいはずして何もしと云へる同例なりそは勞れたる旅人など乗るもの也漸々に意巧を加へて駕籠といふ物にはなれり

さしになひ　牛かひ童

○車を御する者を牛かひ童といふ木曾義仲が牛こでいと云へりし事（平家物語）にありこでいは健丁(コンディ)なり古畫を見るに大鬚なるもあれど頭はわらはなり後世水主などは立髪半髪(ハンカウ)なると同じ儀なり八瀬の在所の男は駕輿丁に出るとかやその古風にて惣髪にて齒をそむるも有とぞ其かみも下さまの者は頭髪を童の如く束ねたるも多かるべしされば京わらんべと云ふ諺は此故にもよりたらん輿の品さま〴〵あり

白輿

其中白輿は大臣以上親王家用ひ給ふとあり棺うる家をしらこしやなど呼は憚るべきと也

力者

○力者のこと安齋（庭訓標書）に古代は力者とて剃髪したる中間のやうなる者あり出張頭巾をかぶり白布の狩衣袴に脚半して馬の口にも付馬ひさくなどを持長刀などを持て輿などをも舁もの也短刀を腰にさすこと俗人のごとし（後三年合戰の繪）に義家凱陣の行粧を畫たるに力者兩人馬の口の左右に立たる体見えたり紺の出張頭巾をかぶりたり一人は柄長きひさくを持たり古門跡がたにも力者に輿を舁せられしと舊記にみえたり室町將軍も武正の時は力者に輿を舁せられし由古記に見ゆとあり（下學集）に兄部(コノカウヘ)は力者の頭也【（庭訓往來）にもみゆ】

○車立論　（源氏物語）に車爭ひあり後にはこれを車立ろんと云（沙石集）【九】故金剛王院の僧正公請つとめられける時僧正の牛飼御室の御車と車立論して御室の車を散々とこしたり

肩輿

○肩輿を專ら用るは漢土にもいと後のことゝみゆ王世貞が（觚不觚錄）云余于嘉靖中、見在都一二翰林、有乘兩人肩輿出城、飲宴者以爲怪事、至萬曆甲戌、郎署往々有之不復以爲異矣、同寮二三少卿至、乘四人肩輿、開路出西北郭門、無有問之者矣、かやうの風俗となりし故にや揚愼が升庵と號せしも（皇華記聞）に朱乘器云、用修在滇、製小扇輿、如升之形、僅可容膝、張愈光含題一聯其上云、人到東京須氣節、地當西晉且風流所謂升庵以此、（閩小紀）【下】今八閩度仙霞者、必乘竹兜子、淮南王諫擊越書、輿輪而踰嶺、則知竹兜之制、漢巳有之、今仕者乘轎、古無之制、轎子亦始於此こゝにて上ッかたの乘物は釣輿より變したる也

間に柱を打渡し船を動かさず平地の如く道を造り石をば臺にのせ舟の内に卷車を仕付て綱を引陸にて手コボウを持て石を押やり舟に載る船の中まき車の工み奇特なりとあり今これをシャチといふ思ふに車軸の略なるべしそのかみ修羅と云しも此の工にや（節用集）に修羅は引大石材木也と注せり又地車などもしか云しにや石屋宗山が（明暦火災記）戌年に御天主臺をほぐし金銀の塊をシュラにのせ五六百人にて引出すと見えたり（壒嚢抄）【一】石引物をシュラと云は何とぞ大石【帝釋】を動かすは修羅にあらずばあるべからずと仍て名く阿修羅と帝釋と闘ふと（長阿含經）などに見ゆ（東京夢華錄）【三】般載雜賣の條に車大者曰太平其次有平頭車、又有獨輪車云々、平盤兩輪謂之浪子車、唯用人拽、又有載巨大木只有短梯盤、而無輪謂之痴車、皆省人力也といへり痴車はシュラなるべし

ヘカ車

○ヘカ車　中井竹山が（草茅危言）に平地任載の小車なり京師にて地車と稱へ難波にてヘカ車とよぶ其形狀小さくして兩輪を板にて作る輪の徑り三尺許輿平らにて前後に長し前の輪おのづから兩轅をなせども轅も輿の内なり木石を運びそれより他物をも積て廣く用ひ一推一輓二人にて濟む輕任は一人にても辨ず簡易便利の器なり按るにヘカと云も同言にて輕細なるを云なるべし江戶にて今地車と云ものはもと修羅と云ものにて長たけ低く形異なり

輿

○古へ輿をば大かた旅行に用ひたり（朝野羣載）齋王の處に輦輿腰輿などあり（圓光大師傳）建永二年の處に信濃國御家人角張の成あみだ佛最後の御供なりとて力者の棟梁として上人の御輿をかくとみゆ力者とはこしかき也遠流の人ゆゑかくあるにはあらず（三十二番職人歌合）船人と輿舁とつかひたり

輿舁

一たびの世のうきをいとはし輿かきのくるしむ道ぞさし合せなる判云旅のよに身を捨て苦をしのかば安樂の國にのぞまむ心を會得せり三人輿にてさへ道路はかなひがたきにさし合せの苦行あちきなくぞ侍る

三枚肩

と見えたり三人輿は今かごかきの三枚肩さし合せは今さしになひ又省きてはさしともいふ

八葉の車
七葉の車
車長持
卷車
シヤチ
修羅
地車

の如しなど見ゆ】もと借駕籠と同く傳馬方へ出銀あり元祿十三年辰八月九日傳馬町へ大八車辻かご橫印致し大八車より一ケ月に銀拾匁づゝ借かごより一ケ月に銀三分づゝ取立候樣被仰付候同十六年未十二月十六日に大八車借駕籠出銀三傳馬町へ出候義向後差許候と見えたり此觸書に大八とあればもとよりかくも書しなるべし（紫一本）武藏野の條馬もかごもならずは大八車になり共乘たらばよからん（誰身の上）【三】一日に錢を一貫文づゝもち出て百人にあたへ我とすまひをとるならば必まけよとやくそくしてとりぬる間大八町の男をもかたにてとりてなげ六尺二分の法師をも指一つにてつきたをしける今按るに大八町とは大津の八町をいふなるべし大津は古より雜車のある處なれば大八車の名はこれに起れりと思はる【車に大八葉と云あり古圖を見るに車の紋に靑蓮花の八葉を畫けり其名を襲ひて大八と呼りとするもいかゞ】

○翁草に八葉の車は輪の葉八ツあり常より大形なるを大八葉小きを小八葉といふ七葉は輪の葉七つあり小八葉は轅（ナカエ）頸木に至る迄眞すく也御車大工昔は惣司久太郎とて車屋町丸太町の北に居る故に車屋町の名あり今は久太郎丹波へ引越しこれが一族惣司茂左衞門と云もの上京木ノ本町に居て御用を勤かつ御車副に出る

○又むかし車長持といふ物あり明暦の回祿に不便利にて夥しく燒たるより後廢れて用ひざりしといへるは非なり天和元年辛酉十一月町觸に火事出來の節兩國橋かり橋長持幷車長持通し候へば往還の妨に成候間通し申間敷候云々とあり其頃より次第に廢れし也【寶曆五年戊子七月廿二日牛車宰領付可申と御觸あり正德三癸巳六月廿七日芝車町此間願に付牛車宰領御免これあり】

○卷車シヤチ修羅地車　まき車と云は今のシヤチ也（見聞集）【二】先年江戸御城石垣を築せらるゝに依て伊豆國にて大石を大船に積を見しに海中へ石にて島をつき出し水底深き岸に舟をつけ陸と舟との

よきほどの高さに作りたるなり然るを此答に棧のことをいへるはいかにぞや車のこと古今とよろづの書にも古き繪などにもしぢは有て棧の如きものはなしたど近ごろさかしらにさる物を作り出せしと見えたり且つそれをしきと名付しは（古今和歌集）にしきの羽かき百羽かきと此鳥の羽搔のしけきをよめる歌のあるを後の世にとりかへて搨の端にきざみ付たりてふ例の戯れ物語を作りしより又後人しきといひしちといふ爭のあるを又好事の車にしぢの外にしきてふ物ありてそれにきざみはつけたりなどいひけんをもてこの棧の名とせし事しるきなどと云へり

○又昔は葬を送り罪人をわたすなども皆車を用（景淸草子）にあこわうといふ女を車にてわたすことあり【あこわうは戯場にあこやと作れり】是は作り物語なれど（平家物語）などのさまをとりて書るにやと思へどさにはあらず蟻岡が城落たる時信長荒木が女房等を車にてわたし豐臣公の時秀次の女房なども車にてひきしとか彼草子も作りたる當時の制と見ゆ物を運ぶ車は（庭訓）などに見えたる車借とい

車借

ふ者の業（ワザ）なり【四方硯】に鳥羽僧正の舊跡は鳥羽にあり此僧正參內に乘られし車を村の農夫が借て米を京へつみ運びしとありそれより此鳥羽に牛車始まりしと云其村の村岡氏の物がたり也と云へり附會の說なるべし】（狂歌咄）に鳥羽といふ處は保延年中より此處に牛車ゆるされ今も車借の家々ならび立て物をはこび送るにやすらか也（一代男）【八】島原より車借の車をかりそれにのりて八幡に詣しことをいへり【寛文のころには逸興にさる戯などもせしにや椀久も花車に乘て物詣したるとみゆ是は地くるま也されどかゝる戯はためしなき事をすなりまた明和八年銅脉が（勢多唐巴詩）は伊勢參りはやりたる時の作なり引拔（ヒキヌキ）島田元結黑立双梳漢犢褌（ビツフイ）、紅、牛車猥載參宮德、鑑浴（カユ）皆容下向衆】江戸には牛に懸

大八車

るも人の挽もみな大八車を用此車は（世事談）にも寛文年中江戸にて是を造るといへり人八人の代りすること云を以て代八と名づく今は大八と云とあり【（諸艶大鑑）江戸のことを書る處に大聲に笑ふは代八車

車【車にゑふと　むな車　榻　車借　大八　車長持　大八車　并借かご出銀のと】
輿【力者　肩輿　塵取　網代　徒輿　あんほつ　駕籠舁やう六尺御免のかご、制禁、町かご員數】

車　（羣碎錄）に三代兩漢は馬車を用ひ魏晋より梁陳に至る迄牛車を用唐は人主后妃といへども馬に乘給ふ**馬車**　となければ步輦にめさるたゞ郊祀にのみ乘車なりといへり（唐書）の車服志を考ふるに唐代初めは隋の舊制に隨ひ武德四年に至りて車輿衣服の令出來ぬと見えたりこゝにも彼國中古の制にならはれて專**牛車**　ら牛車を用ひられしかばさるべき女房なごは私の忍びありきにも常にのりたりとみゆ是も乘ならばされば醉と有と見えて（今昔物語）に賴光の郎等貞道季武時公時が三人同車に乘て紫野に遊ぶとていたく**車にゑふ事**　車にゑひたる物語あり（和名抄）に苦船をふなやもひと訓り是は船にゑふとなり苦車は何といふこともみえず苦車苦船の字（西漢叢語）に見ゆ

むな車　○（久保のすさひ）にむな車は先達の注に人の乘ぬ車なりと云り（賴政集）返迎車「戀のせてやる我心さへとゝろきてねたくも返すむなくるま哉これ空車と聞ゆ今按るに古きものにみえたるは其義異なり（宇薹物語）【藤原の君】むな車にいを鹽つみてもてきたり（蜻蛉日記）【中】むねくるま引つゞけてあやしき木こりいとをぐらき中より來る又（宇治拾遺）其邊にしりたる下人してむな車かりにやりてつみ出むとする云々按るにむなくるまは車蓋なき車をいふ人の乘にはやかたあり物をつまむにやかたは不**力車**　用なりさるは今の鳥羽伏見の車の如く運送の料にのみ作りたるもあるべし（枕草紙）にげなきもの月のいとあかきに屋かたなきくるまに逢たる云々漢に所謂棧車また（万葉集）に戀草を力車に七くるまとよめる力車もこの類なるべし

榻　○近ごろの繪をみるに車の後より榻の外にかけはしと云ふものを持行處あり黑く塗りたる階子なり賀茂氏の（雜問答考）に榻は牛をはなちてより軛をかくれご先は是を踏て乘も下もする物にてそれが料に

三十石もあるなり茶船は十石の荷物を運送の船なりとぞ當時大坂七村に荷舟九百廿艘中舟六百七十二艘新上荷茶舟五百艘茶舟千三十一艘堀江舟五百艘都合三千六百二十三艘となむ
○小舟に傘をさして帆とすることあり楊誠齋が舟過安仁詩に一葉漁舟兩小童、收篙停棹坐船中、怪生無雨都張傘、不是遮頭是使風また陸放翁が豊桑詩に采桑蠶婦念蠶飢、陌上忽々負籠歸、却羨隣家下湖早、畵船青繖去如飛といへるも同じきにや川柳點の發句に「我を帆や筑波おろしに歸る猪牙

競渡船

○ハイロン　端午の競渡はもと屈原を祭ることより起るとかや（長崎歳時記）の五月朔日條に競渡船は別に製作あり近き浦々より出【近浦は船津浦大浦カマ馬込小瀬戸浦小ヶ倉稻佐等なり】今は漁獵祭と稱へて崎中より一里ばかり沖の方神の島小ヶ倉のあたりにてこれを催す船の長さ十五尋又は二十尋一艘ごとに五六十人づゝ撰び立たる大の男多くは裸にて乘艫には町印浦印の幟または長刀或は幣を立ごら太皷を打互にかひを入て渡を競ふ兩船飛が如く波浪の勢ひ海面の奇觀なり兩船を二艘ぜりと云又三艘ぜり四艘ぜりあり市中の貴賤浦〳〵の老弱いづれも船を浮て見物すること夥し町々浦々知音ひゐきの者競渡船に酒樽等を贈る此船の爭をハイロンと云ふ競渡の唐音なりと云へり

馬ふね　酒ふね　舟形手水鉢

○馬ふね酒ふね何にまれ横長なる筥のたぐひなぞらへて舟といふは常の事なり（色音論）淺草寺の條に御堂になれば手水鉢ちから及ばぬ大石を舟の形に作りなすことあるをめづらしげにいへるものあり此舟の形とあるをいかに思へるにか天和頃師宣がかける淺草寺境内の圖に本堂の前に大なる石の手水鉢の横長なるをかけり即是なり舟形といへばとて艫舳具りて首尾異なるやうに作りしにはあらず先づ年大和國なる長谷寺に詣しに樓門の前に石の筥めくものあり其形凡長サ一丈ばかり横五尺餘高サ二尺二三寸もあるべし其狀石槨とも云べしこは古き手水鉢と見ゆいにしへ參詣群集せし時かばかりの物にあらずは足るまじければ也是に似たる手水鉢の圖（淸凉寺融通念佛御緣起）の畵中にあり

間數候事二挺立三挺立の日除船川船方の御用員數宛渡し置候此外一切所持仕間敷候事同八月十日ちよき船の義當夏中令停止不殘解船に申付候處今以ちよき船有之由相聞不屆の至に候云々貞享四年卯十一月日記川船荷物積候は極印爲打候處荷物積ざる船は是迄改無之候へ共其賣物船の改にも紛敷故以來川船奉行にて川船不殘極印爲打候事とあり

ちよろ

○さてちよき船の名を按るに今御船手の用る小舟をちよろと云ふ二挺立は是に類したるものにて其名もこれを轉じて呼べるにやチロヨといふも小き物の疾き義なりチヨキは今も小手廻よきをチヨキ〳〵

小早

といふチロヨと同じ意なり小早といふ舟ありちよろは即是なり【今小はんと呼舟は小の轉じたるなり】（松落葉）【岡山通踊といふ歌】をか山通ひの六ちよこばや【六挺小早なるべし】にろを八丁立て云々又しと〻ん踊といふ歌に「四丁の五丁の六丁こばや花のゑじまへおせやれをのと云々（松の葉）【船歌】ちよぎりや〳〵ちよぎりやちり〳〵やなどあるは櫓の音といふ也これ等にてもさとすべし

茶船

○茶船といふは（童蒙先習）【十】いそがはしきもの茶船こぐ凡度量のびざる奉行の事をなすは茶舟こぐに同じ（俳諧染糸千句）の內に湯の山で見たる名所をかたられよ茶船こぞつてさても寢がたき【此句淀の渡船などを云ふに似たり】ちよき船などの出こぬ前には此舟もいそがはしきものにてありしなるべし茶筅にて茶をたつるは急なる物ゆゑ准へて此船の名としたるにや又は茶屋などの如く客を載て憩息せしむる意にや（風流徒然草）に二挺大三挺をおさせとみえたる大三挺は今のにたり舟をいふ歟【大

にたり舟

茶舟は後に出來る物と見ゆ昔の茶船はこのにたりにや】にたりを荷足と書れ共もと其義にはあらじ三挺などに似たるのか

○茶船はもと大船の荷物を分ち載て運送する爲の船なり上荷よりも小き船を云ふ（永代藏）【一】難波橋より西見わたし云々上荷茶船かぎりもなく川波に浮びしと云へり上荷船は廿石積なりとも堀江船は

と名付るはおほひ多く乗にも出るにも四ッ這して出入船ぐら〳〵して今水に入かと思ひ面白き事も忘れ通ふにも此船を思ひきり〳〵すといふ心なるべし鎰屋仁左衛門といふ船宿がいふ左様の埒もなき事にては御座なし船をこぐ故に櫓の音が二丁できり〳〵すと鳴ゆゑに名付ましたと云ふに皆大笑になりぬとあり今の家ね船にて二丁櫓は止められたる也とすべて昔の大やかたは幅に比ぶれば竪に長過たるものにて何丸などゝ船の名をしるすは金物にて文字を刻み入口の戸の上の横木に打付たり今の如く扁額を造りて懸たるはなし

やね舟

へか船

○へか船　羽根田の海邊の漁船にへか船と呼ものあり薄板の小船なり按るに難波にへかと呼小車ありへかはへことといふと同く輕細の義と聞ゆ中井竹山が(草茅危言)に此車手を放せば前後軒輊して平らに成て居らず可盃の類にて下に置れぬと云意よりへく車と呼たるが一轉してへかとなりしが又狗の手をへかと云和訓あり世に形狀の似て然らざる物を狗と非ぶ狗葵狗山桝の類是なり此車任載の牛車大八葉などに似たるゆゑ狗車と云べきをひねりてへかと呼にやと云へり此說宜しからず手を放ち傾はいづれの車も同じ又狗車も迂遠なりさて車にも此名あれば船にも同義にや但し船は薄板なればへか〳〵する意にてもあるべし薄きものゝ撓(タハ)みやすきをへか〳〵といふ

船の法度

屋形舟の員數

○船の法度の事は正德三年癸巳三月廿七日二挺立三挺立の船御停止に成候上は右の船來月九日迄に不殘解船に可仕候無據子細有之新規に茶船拵候者は向後月番の番所へ相伺可申事同三月晦日屋形船の義百艘に御定燒印札相渡置候上は武士方より預り候屋形船幷支配違より預り候屋形船有之候へば町中致吟味早々船主方へ爲相返可申候子細も有之候へば船主の者幷預り主の名書付來月七日四時奈良屋所へ以主月行事持參可申候云々同五月十九日町中屋形船員數の義寬永三戌年百艘に相定其外船主共へ燒印札渡置猶又此度令吟味右の者共へ燒印札一枚づゝ相渡彌員數百艘に相定候間右の外は屋形船一艘も所

長サ一間三尺筒ノ間長サ一間一尺二寸鞆ノ間長サ一間家根ノ高サ板子ノ上棟木ノ下端迄五尺軒ノ高サ船端より三尺七寸軒ノ出端一尺一寸間數胴ノ間筒ノ間此二間より外は仕間敷候とありまた貞享元年子六月廿九日町中にて屋形船むざと造り申間敷候向後新規に造度存候者は前方町年寄へ相斷差圖次第可仕云々とあり

檜垣舟
はがせそ
いさば
押廻し
どんぐり舟
過書船
てんとう舟
けんさき

○檜垣は大坂廻船問屋の大船垣たてのすぢをひかきにする故名とす○ハガセソ越前船なり舳の形とりの羽がへの如くなるに依て名く○イサバ小船にして磯邊をゆくを以て名とす○押廻シ千石船なり舳を高くまげあげる故おしまはしと云○北國船ドングリ船と云は形の似たるを以て名く○過書船淀河筋運送の船三百石をつむべし今は川筋淺くなりて用がたし今小船を用てテントウブネと云三十石ふね也○ケンサキ凡荷物十六駄を載す大和河内へ運送する船なり長サ九尋余深サ一尺四寸へサキ尖り劍の形に似たり

二挺立
三挺立
ちよき舟
窮屈丸

○二挺立といふは今いふちよき船なり三挺は今もしか呼り專ら三谷がよひの船とすれば異名を勘當船といふ(吉原徒然草)三線筥はかんごう船ばかりにはのすべからずゆれて糸まきくつろぐなど云り（江戸砂子）に此船をちよきふねと云は長吉船の略なり押送船の長吉といふもの船の形をやげんの如くにして至つてはやし此船のつくりを考へ又見附の玉屋勘五兵衛さゝや利兵衛などいふ者始てちよき船を作る近き頃二挺を御停止あり今は一挺なり近來猪牙船と云り又一說に此船を作り出せし祖は兵庫屋何某とかや昔より今戸橋の端に住居し今に榮へて船作るを業とす是によりて聞に長吉といふもの慥ならず若し作り出せし頃其船健に動を見てちよきと呼そめしにや知らず(紫一本)に窮屈丸といふ船ありかはりたる船なればしるさず【船まんぢうといふ者にや】

きり〳〵す

○又二丁立の小船に屋ねを付たるをきり〳〵すといふ吉原がよひの船なり遺佚が云此船をきり〳〵す

屋形船

に云り又(落穗集)に葭原町より傳奏屋敷へ遊女召れて船に乘參り候節船のうへには苫覆を致し幕簾などをかけ候を手初に致し外々にも屋形舟と申ものは始め候由とあり【(洞房語園)に此を吉原開基より寛永中までありといへるは非なりこの開基といふは元和三年なれば時かなはず其上(落穗集)を考ふれば程もなく止し事とみえたり思ふに慶長四五年の頃はやみたるべし】其後次第に屋かた舟を大に作れり東國丸是大船の初なり山市丸はそれよりも大にして屋かた八間にしきる依て八間市丸と名付熊市丸は屋形を九間にしきりし故に九間市丸といへり又十一丸とて十一間あるに至るとなん(紫一本)(昔々物語)等に見えたり【全文は遊行の條に引り】かく夥しく流行て華奢になりし頃寛文八年申三月萬事儉約御法度の内に遊山船金銀之紋座敷之内繪書申間敷事とあり其後度々法度出たり難波にてはこれを屋形御座とも【もと高貴の乘船にて二階あるを云しが其稱をとりて屋形あるをば然呼べり】御座舟とも云り京師にもありと見えて(洛陽集)【延寶】嵐丸關吹越て夏もなしといふ句あり【桂川の船なるべし】野省記【前攝政桂山庄會事】に寛仁元年十月十二日壬辰刻許、被參桂山庄、到大井傍河南、行於贄殿邊乘船、注に屋形船二艘、其外有橋船、前攝政被設菓子干物等船中、勸酒云々、舟の屋形と云ふと(平家物語)(源平盛衰記)等にもみゆ(和名抄)に車蓋を屋かたと訓す【車も船も義はおなじ】享保の頃に至りて江戸川筋のやかた舟水道橋に六昌平橋二和泉橋七江戸橋六淺草橋十二木挽町十三南八丁堀四北八丁堀三芝金杉四牛込八兩替町五土手藏九本町河岸七後藤がし五鎌倉がし三本所二ッ目一總計九十九艘なり川市丸櫻丸高砂丸川吉丸福村丸同名多し○天和二年戌七月二日町中に有之借し屋形近年大き成船共相見え候に付今度船の寸法御定被成候間只今迄持來候共御定より大成屋形船自今後は堅借申間敷候尤所々之川岸〲にもつなぎ置申間敷候屋形船寸尺之覺船長サミヨシ際より戸たて迄四間三尺表梁間四尺六寸胴ノ間梁間六尺五寸但中敷居に致仕切可申候艫ノ梁間五尺五寸表ノ小間長サ四尺八寸胴ノ間

だへこいふ詞あり(和訓栞)にひそまぬ意なりこいへりこれこ似たるやうなれご別なるべし今人怒りなごして物を擲うちなごするやうのとをあたけるこいふも是なり夜討なごするスツパを亂破こいふが如し敵を恐れずあれ廻る舟なるべし師宣が畫きたる兩國橋のもこに唐船あるごころ疑ふべくもなき此御舟の圖なり寫さで過しゝはいこ悔しされご皆よくうつし取たる人もあれば後日もこめて寫さまじ(色音論)にも聊その圖あれごも繪描く大よそに畫者の心もて書たるなれば證こし難し

高瀬舟 をふねは しふね

○高瀬舟は(三代實錄)【四十六】神泉苑に舟を置るゝ處に見えたり(和名抄)に艜を訓り艜は艇小而深者云々和名太加世世俗用高瀬舟こあり艇はをふね又はしふねこ訓り小船也一二人所乘也こみえたれば今江戸にて高瀬こ稱するは古へ高瀬こいひし者こは異なり(東雅)に凡物の長短高卑をもせの長さ短さなごいふと也船の底深ければ旁高きもの也故にたかせふねこいひしを世人高瀬船なごしるしぬれば(和名抄)にかくは注したる也こいへるは非なり高瀨をさす船なればたかせこいふなり(源氏)【橋姫】あやしき船こもに柴かりつみ云々はし姫の心をくみてたかせさすさほのしつくに袖ぞぬれぬるなごあるを思ふべしいこ小き船こ見えたり○(和名抄)其次條なる艜の注に和名比良太俗用平田船こあるは上こ

平田舟

同例にて平たき船にはあるべけれご田舟に用し故に平田舟こ云なり古書の證にはいこをこなれご(風俗文選)李由が湖水賦に大丸子小丸子小ばや川御座は大名舟高せ傳馬は川舟なり段平に大石をつみ艜は耕作のたすけなり自注に淮肥付馬不入舟數こありこれ田舟なり今の江戸の俗には石を載る舟をばひらだこ云何にまれ石を載る舟をば修羅こ呼ぶは大石を動かすこ云ふ例のなぞ〱の名にて帝釋を大石にこる也されば舟にのみ此名あるに非ず石屋宗山が明曆火事の記に戌の年に御天守臺をほぐし金銀の塊りをしゆらに載せ五六百人にて挽出すこ云りこれ今の地車を云なり林逸が(節用集)には修羅引大木材木也こいへり江戸にて慶長の頃夏日納凉には平田船に屋根を造りかけ是を借したりこ(昔々物語)

みゆ船のうめくも此理に同じかるべし（癸辛雜識續集）越中宋鄖（サウ）兩舫舟、忽有聲如牛吼、移時方止俗謂之船吟、不祥之徴也云々あれば是も又ためしあり因に云今田舍にて釜なるとあれば婦人の新らしき褌のいまだ肌にふれざるを上より覆へば鳴やむと云り（博聞類纂）雜法門に釜鳴不得驚呼須一男子作婦人拜即止、或婦人作男子拜亦可、といふも似よりたる事也○一說に彼あたけ丸を繫ぎ置たる御船藏の内にて繫たる鎖の音大地を轟し彼御舟しはがれ聲を上て伊豆へ行ふ／＼と幾度となく鳴云々數百人の大工并人足の者を以て打くだく江戸中の賤男女見物市をなし其日數三十日に及ぶ迄兎角夜に入靜れば伊豆へ行ふとなきける也とあるは壞るに及びて鳴たる也（太平記）三井寺合戰の條に文保二年三井寺炎上の時此鐘を山門へ取寄て朝夕是を撞けるに敢て少しもならざりける間山門法師共惡くみ其義ならば鳴やうに撞とて鐘木を大に拵へて二三十人立かゝりてわれよとぞ撞たりけり其時此鐘海鯨（クジラ）の吼る聲を出して三井寺へゆかふとぞ鳴たりけるとあるなどに依ていひけるにや○（蓴卿贅筆）に南史王琳傳記琳將戰舟鳴如野猪、嘗讀其事而疑之、沈蕃士浩然浮海舟、忽鳴殷如百牛、自旦至日中不止、衆懼不能食、舟人請曰當祭而祈之、浩然不應、作詩而自歌之曰、石憑而言、惟政之衰、劍悲而嘯其將訴誰、刳木爲舟鳴孰使之物有變化、吉凶安施寘々滄海、吾道在茲受命於天、舟汝何爲、歌數闋而舟之鳴亦止】（江戸砂子）に阿武丸の舊地新大橋の少し北手なりとのみありその時は今の如く小高き塚にてはあらざりしにや【傳へいふ御舟取くづし此處に埋めて塚にしたる也とぞ】安宅といへるは（孟子）に仁者人之安宅也といへるに取るなるべしといへれど非也又（清正記）にあたけをかけ置候はんやとあるも大船のことをさしていへるやう也是は朝鮮役の時のことなれば安宅丸造られたる年より遙に前にさる名の有ければその名を取て呼れしならむといへり今按るにさにはあらじあたけはそのかみの俗語と聞ゆさるは大船なれば也あだけ船といふも水中に船うけて其處より他に去らぬやうに止め置あたけは放逸の義なり（源氏狹衣）等にあ

物の鳴ること

たきくわうていの御ふねにまさる御座ふねのいくちよかけてきみがよのひさしかるべきためしなり又わがてうにならひなきひとつのみふねなりければ日ほんまるとも名つけたりあの入うみにうかびいでさほさす人もなけれどもわれとかはべにいでければあたけ丸とも申けり又(東海道名所記)【万治元年作】海の中にうし島新田あり若宮八幡やしろある故に八幡新田と申すなり新田の北をば深川といふこのうちにあたけ丸とて日本一の御舟をつながれたりなどしるしたり此御船大さを記しゝに異同あり左の如し長サ三十尋【近世武家編年略】卅二尋【我衣】長サ三十五間胴の間七間御上段屋ぐら四間に八間【阿武丸の事書】長サ三十八間胴間十八九間【江戸砂子】いづれもたしかなるはあるまじく思はる又この御船壞たれしにもさま〴〵の說ありみな浮たる事ども也椋梨一雪が(新著聞集)【寶永元年九月の序あり】に天和年中安宅丸の御船を由有て解ひらきてそれぞれに拂物になしたまひし然るに柳原和泉殿橋の酒屋市兵衛といふ者板を買求めて穴藏の蓋にしけるに召つかひの女に物つきて我は安宅丸の魂なり憚りもなく某を穴藏の蓋とし穢はしき雜人原に踏せぬることそ意恨なれ云々亭主驚き作りかへ申さむと頭を叩て詫言せしかば物付さめ侍ることあれば御舟は板までも御拂物になりしにや【これを售れし事いかゞ有けむされども其事書に時僅廿年過ざる間の事なれば何共いひ難し物付の事は論に及ばず】又其時風說を書たる物にはよしや御用にも無之不益成ものなりとも御藏に繫置るゝとて如何程天下の費に可成哉などかたふける者も有と見えたり其時の執政の心をいかゞは知るべき口さがなきは下々の常なりまた此御舟伊豆へ歸らむとてうめきたりといひ傳ふ其聲何と聞えたりけむ覺束なし但しうめける如きはさもあるべし物の自ら鳴ると古へより傳へ云り釜竈などは今も時々鳴とあり奇とするに足らず【(續日本後紀)承和七年五月丁丑、但馬國言、養父郡兵庫鼓、無故夜鳴聲聞數里云々】(三代實錄)天安二年冬十月云々、陰陽寮漏刻盛水銅器、自鳴一聲云々(百練抄)天延三年四月一日、南殿母屋柱鳴如牛云々など

引陸にては手こほうを持て石を押やり舟にのする舟の中まき車の工み奇特なり云々拙又唐船海中へ出すと海に綱引まき車も立がたし陸にて手こぼうも及ぶべからず【此間に昔實朝公由井濱にて唐船を作らしめたる事を載す】先年造らしめ給ふ淺草川の唐船は伊豆國伊東こいふ濱邊の在所に川ありて是こそ唐船作るべき地形なりこて其濱の砂の上に柱をしきだいこしそのうへに舟の敷を置半作の頃より砂をほりあげ敷臺の柱を少しづゝさげ堀の中に船を置此船海中へ浮むる時に至りて河尻をせきこめその河水を舟のある堀へながし入水のちからをもて海中へおし出すこあり此御舟いはゆる阿武丸なるべし（堺町猿若勘三郎由緒書）に寛永八申年伊豆より阿武丸の御舟御當地へ御入之節金の麾(ザイ)を頂戴し御船の先にて木やり音頭仕候こあり【かゝれば御舟出來たるを慶長の末年こしてもその間十九年伊豆に置れたる歟三浦の記慶長中に書終るよし跋にしるせごもなほ寛永中の事其後に書加へたるものこ見ゆ】

○北條家の船こいふは（北條五代記）【七】氏直伊豆國に於て軍船を十艘作り給ひぬ是をあたけこ名付たり一方に櫓二十五丁兩方合て五十丁立の兵船なり常にひこりさぐる鐵炮にて十五間さきに板を立玉のぬけざる程にむくの木板をもて舟の左右艫舳をかこひ下に水主五十人上の矢倉に侍五十人有て矢ざまより弓鐵砲を放つやうに作りたり舳さきに大鐵炮を仕付置たり　伊豆重須の湊に兵船ここ〳〵くかけおく沼津よりは二里隔りぬ　此によりて彼御舟を北條家の舟などいふ說もありあたけは北條家のみいふ名にあらず軍船の名なり作りやうは右の如くなるべし此法によりて作られし唐船なればあたけ丸こ呼れし也】又（色音論）【寛永廿年の作】すみだ川わたし場の條ふねこぎもごしはる〳〵こかはべをいづるおりふしにひがしに見ゆる入うみのまん〳〵たればたましゐもそらにするがのふじさんがしゆみの山かこうたがはる大船うかひ見えにけりあれはいかにここひければせんごうこたへさればこよその名かくれもあらばこそあれは龍頭鷁首(リウトウゲキシウ)こ申御座船なりけるが船のむかしを尋ぬれば云々かゝるめで

隅守夜討して乘取豆州下田に繋置れ寛永十二乙亥年六月江戸に御取寄せ天海大僧正不動明王を加持す同六月十一日御乘船八月三日再御乘船國主大名御饗應天和二年四月八日堀田筑前守正俊が言上に仍て安宅丸破壞の事阿部豐後守被申渡寛永十二乙亥年伊豆より安宅丸江戸へ來り御藏へはいらず今柳川町松浦屋敷邊に堀をほり繋置一年大風雨に鎖を切て伊豆をさして走る三崎の番所にて止め其後堤風除をしつらひ此處に置周二三尺の鐵の大鎖四五十筋にてつなぎ置る【右阿宅丸舊地の條】加賀見氏のいふ處實を得たるに似たり彰考館に所藏せらるゝ天正二十年五月十八日の豐太閤軍令の文書に安宅船のさし圖九鬼大隅かたより相越候云々又清正記にも番船のおさへとてあたけをかけ置候はんやなども見えたりかくの如く天正年間に記せるもの往々これあり（近世武家編年略）【寛永十二年の條】（我衣）【天和二年の事とす】などに記せし所は蓋傳聞の謬ならむ歟【巳上山崎氏の說】（近世武家編年略）に寛永十二年乙亥六月、公嘗令向井將監、令造巨船、於相州三浦而成、長三十尋、以銅包之、有三重樓、搆櫓二百挺、水主四百人、號安宅丸、公乘之蓋備變也とありまた（我衣）には天和二年、安宅丸出來、長三十二尋、十二船玉、東叡山南光坊、大山八大坊、兩僧勸請の御船なり堀田筑前守解之と云り節信なほよく考ふるに加賀見氏の說時代はかなふやうなれ共明證なし先年ある人のもたる畵卷物を見しに【師宣かけるなるべし】兩國川の岸に唐さまの大船繋ぎたる處あり天和の頃の有樣まのあたり見て書し者なるにかゝる船の事覺束なく見過しぬ其後三浦淨心の記したる（見聞集）をみるに唐船の事あり其文に見しは昔慶長年中【神祖御諱】公唐船を作らしめ給ひ淺草川の入江につながせ給ふかゝる大船を作り海へ浮むる事汀にては人力も及びがたかるべしいかやうなる手だて有て出るやさらに分別に及ばず先年江戸御城石垣を築せらるゝに依て伊豆の國にて大石を大船に積を見しに海中へ石にて島を築出し水底深き岸に舟を付陸と舟との間に柱を打渡し舟を動かさず平地の如く道を作り石をば臺にのせ舟の內にまき車を仕付て綱を

嬉遊笑覧卷二下

舟【舟の名　安宅丸　物の鳴と　船吟　高瀨舟　平田舟　屋形舟　二挺立　三挺立　猪牙舟　やかた舟員數　小早　ちよろ　茶ふね　にたり舟　舟形手水鉢】

舟　**飛舟**

（續日本紀）養老六年夏四月、唐人王元仲、始造飛舟進之とみゆ飛舟は櫓の多き快船(ハヤフネ)なるべし（圖書編）にも十槳飛船あり

船の名

船に名をつけ位を賜はりし事同紀天平寶字七年八月、初遣高麗國、船名曰能登、歸朝之日、風波暴急、漂蕩海中、祈曰、幸賴船靈、平安到國、必請朝庭、酬以錦冠、至是緣於宿禱、授從五位下、

ふなたま

ふなだまといふこともこゝに見えたり【是は船の靈にして他の神にはあらず（延喜式）に住吉神を祭ることあるは何れの船をも守り給ふ神なれば也（神后紀）に住吉神の誨に往來船(カヨフ)を看むとある是なり漢土には天妃を祭る其功德天に配する義にて名づくるを女人の像とするより是をうけて本邦にても今俗に船だまを女とするは非也】後世船の名には必何丸とよべりまろは古へ人の名に多く男女の通稱なり自稱にもいへり才(カド)なく愚なる意也といへり又物の名に呼もの中古より多し【猿まろいなごまろの類又寶物には劍の名何丸と付るいと多し】今はたゞ船にのみ其例のこれり○（續日本後紀）天長七年九月癸酉朔丁亥、太宰府言、對馬司言云々、傳聞、新羅舟能凌波行、望請新羅船六雙之中、分給一雙聽之とあり雙は艘の誤か

あたけ丸

○世に名高きあたけ丸といふ御舟のこと諸說定かならず何人の記したるか此御舟壞たれし時に書るよしの物ありそれには承應巳後に造られたる御舟のやうにいへり先この一條にて妄說なるとしるしこの頃友人山崎氏よき證を得たりとて記しておこせたりその說に加賀見氏（江戸砂子標識(ヘウシキ)）に云阿宅丸は北條家の船也天正十八年以來秀吉秘藏して秀賴の時慶長十九年寅冬陣に千賀與八郎向井將監小濱民部九鬼大

藤枕　花わんの枕　括り枕　皮枕　入子枕　箱枕　夢想枕　あづち枕

古へに草枕薦枕篠枕杉枕菅枕柘の小枕などいふ草木の葉を束ねて枕としたるにや然らばこゝには括り枕本義なるべし天竺には木枕を用ひずみな嚢枕なりと(南海寄歸傳)にいへり漢土には玉虎枕などもいと古く其製ありしよし(事物紀原)に見ゆ

○(甘露寺職人盡)に枕賣あり其詞に今一のたかも持て候ひそかにめし候へとあるはいかやうの枕なるか(雍州府志)藤枕の條、良賤嫁娶夜必用之、故新婦携一双而行、是又婚禮之一端也、或謂殿枕、倭俗崇男子稱殿、故爾、造之者唯一家、在室町南、革枕疊枕獏形枕黑漆塗枕等烏丸下立賣北とある藤枕などにや虎の枕のとは方術の條にいへり磁枕は(十訓抄)に德大寺の右大臣うちまかせてはいひ出がたき女房のもとへ獅子のかた作りたる茶わんの枕を奉るとて云々此茶わんといふは今俗に瀬戸ものといふ程の事なりおもふにこは唐物なるべしさらば獅子といへるも寔は獏か避邪の類なるべし又(雍州府志)嚢屋の條に此家に錦唐織にて婚禮一双枕を作ることもありこはよの常の括り枕なり皮枕はなめし皮屋にて作るよし(人倫訓蒙圖彙)にいへり

○後世入子枕といふ物あり箱枕の細長きを五つも七つも數多く入子にしたるなり夢想枕といふも是なりもと琉球製にや(中山傳信錄)に是を套枕といへりすべて奇く妙なる工夫したる物をみな夢窓といふ彼國師將來の器物よりいひ習はしたる賍柳亭子云物に夢想と名つくるは神佛の告なんどいふより形變じて一ツかと思へば二ツ三ツにもなる不思議なる義なり此說も面白し又古ものゝ見世棚にて箱棚を數多く一ツ箱の中に重ねて入たるを見たりこれを柳亭に語りしにそは昔の簞笥なり黑漆をぬり合蒔繪などしたるもあれば今の絜枕(アツチ)なき已前は中人以下皆箱枕を用ひたりと見ゆ下賤の者のみにはあらず常矩が(塵取)に「大形の恨みのかずも十ばかり來ぬ夜かさねてうき枕箱といふあり其外あまた枕箱の發句見出し遣ぬといへり絜枕とは今のよのつねの枕なり

ざれば罪ありといへる事を附會していひ出し事と知らる（世話盡）【明暦二年板】戀部に長楊枝琢楊枝片見楊枝とあれば件の物語のかるた楊枝はかたみとして贈り重ねて逢ましき意にて楊枝に靈あるよしにあらじ（綿繡緞）【其角が獨吟】露ふく風や公家の編笠、七夕に楊枝をかるといひそめて仕似せぬ戀をたそがれの月

○江戸にて楊枝商人の多きは淺草寺境內に勝る處なし此商人古くより有しとなむ昔は茶筅と楊枝を櫃のうへに幷へ置て賣たりとぞ是寛永頃よりありしものといへるはおぼつかなし

みがき砂

○みがき砂　すべて香具屋にて賣しなるべし（江戸鹿子）に齒藥幷はぬき【竹川町】入齒師安藤安志【日本橋通三丁目】小野玄入【源助町兼康祐玄とありこれらの家にても賣たる歟】喜三郎が琢砂といふ事（諸艶大鑑）に見えたるは難波にて其頃の聞えたるものと見ゆ又明暦二年の（世話盡）白雪や山のはきはのみかき砂楊枝につらく似たる谷口食籠を狩場の末に開かせて漢土には是を白齒藥と云（博聞類纂）【十一】磁器を洗ふ法に用白齒藥擦則光澤とあり風來山人が齒みがきの報帖（ヒキフダ）はおかしく書るひきふだの始なり【（下手談義）にもおかしき引札あれどもこれはそらごとを作りたる也】

○江戸には常に房州沙を水飛して龍腦丁子など加へて諸州にも白砂又白石等を粉となし又は米糖を燒て用るもあれど房州砂には及はず故にみかき砂は江戸にまさるものなし

齒取唐人

○次てに云虫くひ齒をとりて業とせしもの古くも聞えたり（沙石集）【七】南都に齒取唐人ありきある在家人慳貪なるもの唐人がもとへゆきて虫喰齒をとらするに一つ取には錢二文のさだめなるを一文にてとれといふを心ざまのにくさにふつにとらずさらば三文にて二つとれとて虫もくはぬ齒をそへてとらせたりといふ物かたりあり此唐人まことの異國人にや今世の山うりの如きもの歟

爪やうじ　浮世やうじ　紋楊枝　そぎやうじ

もていふにやこれ又たけ長きにて今の爪やうじをいふにあらず（諸艶大鑑）【職人の弟子やうの者をいふ處】道行つくしの淨るり本皮付の大楊枝喜三郎が琢砂をたしなみ（西鶴大鑑）【一】花みごりの處女はさはがしく木綿たびをぬぎて袂にいれ銀の笄を楊枝にさし替云々【同四】臺打の楊枝手ふれて齒を琢云々あり爪楊枝は八文舍が（色三線）に【浮世男をいふ處】こぎくの五ッ折爪楊枝を指こみ云々あれば此頃は小き楊枝も出來て臺打などは懷中にもたざりしにや又（西鶴大鑑）にえびす橋筋に根本浮世楊枝こし芝居若衆の定紋をうちつけ置しに云々あり其頃の俳諧集に野郎の紋やうじ付合の句往々見えたるよし柳亭子いへり思ふに紋の摸を作り楊の木の軟かなればその模を打たるものと見ゆ又そぎやうじは（俳諧懷子）立よりてこそ三輪の杉木はつせ女をもてなす茶子そぎやうじ【重賴】これは杉の割木なるべし

楊枝さし

○男女ともに楊枝さしと云もの昔はなくはながみの間に入るまでなり（賤の小手卷）にやうじさし大かた女の拵へたる切封しの手紙にしたるやうじ指なりしに次第に色々の工夫して黃土佐紙にて小く拵へたる有又折居にして疊むやうにしたるもありとかくいやみなく辨理なるかたになりたりかく云へるは寬延頃なり是にて楊枝も小さくなりしを知る

楊枝に靈ありといふ事　かるた楊じ

○世につかひたる楊枝は折て捨べし若をらで打遺る時は祟ありともいひ又楊枝がくれなごみな女童べのいふ也按るに（似せ物語）【寬永の草子】男けいせいに知音にして卽時もはなれず有わたるにいたつらものになりぬべければ終に知音はなるべしとてこの男いかにせん吾かのさまよせ給へと佛神にも申けれごいやまさりてよせざりつゝなほわりなくいとすけなうあひしらひければ御楊枝かるたなごつゝみかきつけてもはやかはしといふせいもんをたてゝなむあひける云々有そのとわきまへかたけれごこれをもて誓に立る遊里のならひありしと見ゆされはやうじに靈あるやうにいふと久しき俗傳と見ゆその原は上に引る（寄歸傳）の文にやうじは人氣なき處に棄るに咳つまはじきなご種々の法あり然せ

黑もじ
かんぼく
白楊
ほやうじ
打やうじ
ふさやうじ
平やうじ
皮付やうじ

西より祇園町のあたり殊に多しその木河内の玉串村より出るをよしとす就中豐前の立石の楊枝を絶品とす（人倫訓蒙圖彙）打やうじ平楊枝品々あり粟田口猿屋は玉串村の者なるに依て其名高し加賀越前より出るはこぶある木なり猿は齒白き故に揚枝の看板たりと云り【（商人世帶形氣）【二】楊枝屋の看板のさる見るやうに守つてゐてなど云り】是等やなぎのみをいふに似たり今牙杖に削り造る木黑もじかんぼくの白楊等あり黑もじは木の高さ一丈計に至り葉椎に似て鋸齒なし春若葉の出る時黃花咲秋丸き實なる榎に似たり皮は色青く黑き斑あり（大和本草）に皮香氣あり用ひて牙杖とす又ほやうじと名く云々かんぼく（同書）云肝木漢名未詳云々この木江戸にも處々にあり葉は對生にして三尖なり形楓葉に似て大さ一寸許木はひょごり上戸に似たり香氣ありこれには（大和本草）にも牙杖にするよしを云ず白楊は（同書）又云京都四條邊にてこれを牙杖にけづり賣又扇筥にもこれを用故にはこ柳といふ筑紫にては犬桐といふとあり葉は唐ぎりのやうにて圓き葉なり木理桐のごとし打やうじと云ひしは今のふさやうじなり平やうじ今もあり平めにして少しそりたるなり茶菓子などに二本添て箸に用むかしのは大かた今の辨當箸よりも長しと見ゆ（箕山大鑑）に楊枝はこふにて直なるよし房かみたるを用皮付のやうじ凡卑なり參會の座席にて楊を琢かず懐中にやうじ失念の時は座席にて乞べし苦しからず云々次に寸法の事（僧祇律云、極長十六指、極短四指とあり今此四指を三寸とするを倶舍に一肘を舒て一尺八寸と定めて廿四時指肘といへり然れば四指は三寸に當れり最大なるは一尺二寸最小三寸其中は意に任すべしと右は古代に定れる法也今四寸より六寸の間を用ふといへり延寶に遊治郎用る處のやうじ寸法かくの如しこぶとはこふ柳をいふ也【古書を見るに寛永前後天和貞享ころ迄もやうじの大さ同じやうなり】（西鶴織留）に傾城が人の妻となりたる處に延の鼻紙に壷打のやうじ取添云々その繪に今のふさやうじの形をかけり食後には必是を用ひたる也（大和本草）にほやうじとあるは黑もじの皮付にて草の穗に似たるを

羅壁破屈而刮舌【人前にて牙杖をつかふに口を手にて掩ふことも此法より出】或可別用銅鐵作刮舌之篦、或竹木薄片、如小指面許、一頭纖細以剔斷牙、屈而刮舌勿令傷損【牙杖の原竹をも用ひたり然るに菅家神詠とて、みる石の面に物は書ざりき竹のやうじもつかはざりけりと云る歌を傳へたるは何ものゝさかしらなりけん抑意義なき事ながら其かみさる俗習ありしにこそ（秋齋間語）に竹の箸内膳式に出又箸竹をたてまつりて氏を賜りしと（姓氏錄）にみえたり箸字もとより竹に隨ひたる字なれば今の俗竹の箸はいむべきなどゝ云と故實にあらずといへる同日の談也竹の箸を忌と云るとも竹のやうじより云出たることと思はる】亦既用罷、即可俱洗棄之屛處、凡棄齒木、若口中吐水、及以洟唾、皆須彈指經三時謦咳過兩、如不爾者、棄便有罪、或可大木破用、或可小條截、爲近山莊者、則柞條葛蔓爲先處、平疇者乃楮桃槐柳隨意、預收備擬、無令闕之、濕者即須他授、乾者許自執持、少壯者任取嚼之、耆宿者乃椎頭、使碎其木條、以苦澁辛辣者爲佳嚼、頭成絮者爲最麤、胡菜根極爲精也【即蒼耳幷截耳、入地二寸】堅齒口香消食去癊云々、齒木名作楊枝、西國柳樹全稀、譯者輒傳斯號、佛齒木樹、實非楊柳、那爛陀寺、目自親觀、既不取信於他國、聞者亦無勞致惑、檢涅槃經梵本云嚼齒時矣、一たび楊枝と譯してより其說によりて本邦迄齒木は何にまれやうじと云ことなれり漢土にもそれによりてやうじを用ひしなるべし寸法人の好みによりて用ゆるにや（埃囊抄）には四指量といへりいと近きころ迄も今の如き小きやうじはなかりき昔菓子に添て出しゝは食に用るのみにあらず牙を剔ためなり（沙石集）【三】ある僧檀家の請用に行たる處食者なれば食後の菓子まで至極せめくひて楊枝つかふことあるも菓子に添て出しゝなり（女鑑）【寛永前後の書慶安三年板】くわしのと御すはりなばまづやうじをとり給ひてつかはれ候はゞをとこのやうにやうじを折られ候まじく候又やうじもちやうの事大りやくゆび二つにてもたれ候又くわしをもまいり給ふべし（雍州府志）に下粟田口猿屋を本とす百本或は五十本づゝ桐の箱幷紙袋に入て遠方に送る今四條京極の

なき事に物を入武具疎略にしてあしきこの事なりと（甲陽軍鑑）に見ゆその内柿油うちはは見るだに賤き物なればにや世に貧乏神の澁うちはといふ雄長老狂歌「大きなるかき團扇かな二三本びんぼう神をあふきいなさん也足軒判に云柿うちはに貧乏の神のつくといへば我等の果報にて二三本にてあふきいなせん」といかゞ彌増長すべくや又（梅津のかもん繪卷物）に貧乏神みなうちはを持たり（永代藏）に藥篩澁うちはは貧乏まねくといへども云々又貧乏神の形を作る處にわらの人形に紙の衣服頭巾を着せ澁うちはを持せたり

團扇形

〇團扇形と云ふ今の洲濱の形に似たり今の團扇に此形なし古書を見るに寛文正保ころもうちはは昔ダンセン形といふものなり

網代團扇
塗うちは

〇貞享より元祿はじめは女は内に居るも外に出るもみな扇は用ひず團扇を持り師宣がかける（繪本百女）など見るべし其角が（花つみ集）元祿三年六月廿六日條に誰とのゝ後室にや寺まうでの有さまを紅に團扇のふさのにほひかな此風江戸のみにあらず（雍州府志）に網代うちはゝ竹を割あみ連ねて作る其兩面を漆にて塗たる塗うちはといふ近世或は圓き竹を柄としその末を細く割て上に紙または紗を貼たるを婦人女子專ら用といへりあしろ團扇は畫にみえて其製久しきものなり紙を貼たるは近世といへるいつの程をいふ歟

楊枝

楊枝【竹のやうじ　猿屋打やうじ　平やうじ　壺打やうじ　紋楊枝　爪やうじ　楊枝に靈ありといふと、附琢砂】

（釋氏要覽）に諸經を引て嚼楊枝とを云り牙枝は佛家より始りしなるべしされど楊は天笠になき者とぞ義淨が（南海寄歸内法傳）に委しくみえたり其說に云、齒木者、楚云憚哆家瑟詫、憚哆譯之爲齒、家瑟詫卽是其木、長十二指、短不減八指、大如小指、一頭緩須熟嚼、良久淨刷牙開、若也逼近尊人、宜將左手掩口川

して厚紙に板行の馬を畫くこれを以て熱病をあふげば則さむる又田をあふげば稻に虫付ず按るに此時大なる扇を持たる者多く出るは田樂の高扇と云もの也（古語拾遺）に稻虫をさくる祭に以大押草押之、以烏扇々之と見えたり此烏扇は草の名なるべし○外宮御山豐宮崎御田植神事扇持五人御田植といひて凡六七尺ばかりの扇を一本づゝ持扇の畫色々にて定らず各素袍烏帽子いづれも老人なり顏を紅粉に粧ふて踊り行世に流布するは長官の宅にて貰ひ歸るなり檜の骨六本にてかたばかりの物なりとぞ又楠部村御常供田五月吉日大御田神事ありこの御田扇は三尺ばかり也といへり田樂は田を祭る舞樂なれば（古語拾遺）にみえたる故事などにより高扇とて大なる扇を用るとあり即御神事の御田扇これなり

扇懸け

○扇かけ　書畫など書たる扇を床にかくると（甲陽軍鑑）【九】おし板の釘に物書たる扇の掛て有を見て云々おし板は板をはりたる床なり折釘は扇を掛るとあれば中釘なり今は扇かけとて紫の組ひもなどにてさま〲風流に作り總角などかけたるは陽明家の御好とかや

團扇　奈良うちは　判しもの團扇

○（人倫訓蒙圖彙）の奈良うちはは春日の社人の中に是を作る京は油小路中立賣上る町にあり當世大坂長町に作る野人童子の持領として判し物うらはさま〲の畫をかく代物三錢にして涼風を求む誠にかる行の重寶なりといへり繪は其時の流行なるべし爰の團扇は早く聞えたり（洛陽集）三笠山藤は散けり禰宜うちは【行止】又延寶三年の（南都名所集）にも團扇賣の童の繪あり（一代女）【三】高聲に鯨油の光よしあし判事物團扇の沙汰【貞享の初かくいへるは都わたりには此ころ鯨油を用ひそめし歟】（志道軒傳）【寶暦癸未】夏の景色を荷ひ出す判し團扇澁團扇あふげはいよ〲高荷のかや賣又（その園）

澁團扇

とて俳優追薦の發句集に月村の畫にて團扇を色々かきたる内に判し物うちは有常の丸き團扇なり【初の瀨川菊之丞三回忌の追善なり寛延二年五月二日身まかりしその三周は同年辛未なり】江戸には此ごろ行はれしと見ゆ團扇は輕微なる物故武田家の定めに足輕の進物は一蓮寺うちは一本づゝ是は諸人詮

る修羅扇は武者扇と同樣にやその紋月日を書たるなるべし前にいへる（便面記）に軍扇に日の丸と月の扇とを畫くと是も古人の物ずきのよしなどいへるは修羅扇のことと見ゆ貞享頃の畫には扇また團扇に丸き物書たるあり是修羅扇にや鬪場を修羅のちまたといひ武士の事なれば武者扇ともいひしなるべし【俗にひらだこいふ船は石を載る舟なり是を修羅といふはたいしやくを動かすと云ふ謎なりよりて石引に用る扇をいひしにやと思へど猶さにはあらじ】

由禪扇

○（人倫訓蒙圖彙）に城殿折、是根本也、城殿今鷹司通の西に住す云々中頃より五條の御影堂の僧これをなす女のわざ也近世由禪扇とて一風あり城殿は駒井氏なり扇もとより女のわざと見えて（職人盡歌合）にも扇うりは女なり（雍州府志）も御影堂のことをいへるこれと同じ然ればこゝの扇敦盛の室より起るとするものは非也

○由禪扇は（一代女）【五】似せ由禪の扇にして凉風をまねき云々（色三線）【四】我らが持しは十一本骨のゆうぜんが繪にゆく水に茶筅を書てなかれをたてるといふ故事じや【是又似せ由禪にして判じ物うちはより出たる也】

烏繪扇

○烏繪扇　泉州堺にて白扇に烏かきたる扇を賣傳へいふ一休和尙扇賣の聟となりてかきそめたりとぞ此事一休ばなしにも見えず只（堺鏡）に和尙住吉牀菜庵居住の時當津甲斐ノ町中濱扇屋甚右衞門といふ者所へ折々來臨し給ひて家內窶しきを憐み給ひ白地扇子に烏或は銀臺繪などを書給へば世人此扇子を賞翫すといへり俗語に扇屋へ入聟し給ふといふは僻言なりと有此說もなほひがことなるべし（一休和尙年譜）云文安五年是年、假寓双杉【俗云二本杉】小庵三五日、乃歸永昌坊口之菴、【乃陶山公舊第菴曰賣扇】と見えたり此事を附會していふにこそ（五元集）に「烏とぶ紺のあふぎのあつさ哉とあるは烏を紺にかきたる也○按るに（本朝俗諺志）【四】伊勢太神宮の御田を植る時禰宜祝子舞奏づる所の扇なり骨は檜に

所、是謂要とあり此頃いまだ鯨にはあらず(永代藏)【三】伏見の里の荒たるをいふ處吹矢の細工人はまだしも歴々なり扇の要刻み云々いへり是彼かなめといふ樹を削りて業とするもの也(大和本草)に鯨初めは油を取のみにて肉も骨も捨たり後肉を食ひしかども腸も頭骨も捨たりその後また臓も頭骨も食ふやうになりしと云りさもあるべきことなり鯨のおさなど用るはかくいへるより又後のことなり(紅梅千句)いそぎつゝ蕪を齊の調菜に【安靜】鯨のほねや魚としらざる【秀吟】これは承應の跋あり然らば(大和本草)にくぢらの骨を捨たりと云しは古きことなるべし(嗚呼たり草)【四】扇の要は近世までも象牙犀角塗要銀錫或は尋常のものはみな木要なりし故かなめはしりて不用のものとなりて捨ること夥し殊に木要も角要もいづれも中は銅の管を入て仕立し故鹿物といへども人工を費すこと多かりしに元文の頃京師柳馬場六角邊に小西八郎兵衛といへる扇折今の鯨かなめを工夫仕出し初て製せしなり其頃松原富小路に千歳要と号け小西氏の眞似して大に幸を得しとなり

一束一本

○一束一本は出家の禮物なり(貞順故實條々)中紙の事一束にて候へば必五明をそへ候云々又二束の時は扇は有間敷候二束一本と申事なく候また別條に俗は太刀抔にて禮申出家は一束一本常の儀也と有【今鹿紙にほんそくと稱するは一束一本の儀に用る紙なり】(洞房語園便面記)寺院僧衆の吉例として一束一本の中啓は公の祝納殊更にめでたしやあるは檀主へ年玉に殿さまかみさま書きたる黑骨の女扇はやぼ扇とてふるめかし今やうは扇子屋染の名題もめでたくお局中の袖扇子にゐひ香の匂もいとゞしくときめきてめでたしといへり【袖扇は今の女房の小きをいふ殿樣かみ樣の扇は箔の押たる羽子板の繪のやうにありしなるべし】

しゆら扇

○しゆら扇 (鷹筑波集)日月は手にも握るやしゆら扇【重次】あつき日の苦患やはらふ修羅扇【定清】(佐夜中山集)破るなよ其執心の修羅扇【徳儔】蚊のせめに我が味方や武者扇【皆川之住】など見えた

ぼんぼり に扇は中廣也とありて傍注にぼんぼりと云と有此注は承秋門院の典侍石井局の説なり扇の半よりさき廣がりたる也中啓也といへり又按るに建武元年落書ばさら扇の五ッ骨とあるも中啓なるへし異名多き扇なり

檜扇

○（海人藻芥）に檜扇僧綱は【公卿扇廿五橋】凡僧は【殿上人廿三橋】十五歳内非職綾楫用之也とあり

すき扇

○すき扇【雅亮裝束抄のすき扇は透扇にや是は板を彫透してすとしなど張たる物とぞ】檜扇は（本朝畫史）に杉目の扇は官家童形持之、元服之時持之爲先例、圖樣多畫松竹鶴龜云々、俗曰袙扇、粧爲袙姿以持之故也また女御扇侍女扇男扇云々いづれも檜扇にて地に胡粉を塗繪樣は其品による但し男扇もとは畫をかきたりしが今は地に胡粉もぬらず木地にて糸も白糸を用家々の紋など付るよしいへり横目扇は板の正目(マサメ)ならぬをいふ（古事談）に後三條院儉約にまし〳〵て御扇の骨檜にて藍を塗て持しめ給ふとみえたり【紙扇のやうなれども板あふぎなり】染給ひしは白骨を忌しならひにや

えだあふぎ

○（枕草紙）楢の木の長きをきりて定證僧都のえだあふぎにせさせばやと云とあり定證のせいの高きを嘲るなりえだ扇とは木葉ある枝を扇のやうに手に持をいふにや扇の一種あり共聞えず風流なる扇とも圓融院の扇合に見ゆ

かなめ

○扇眼(カナメ)を（源平盛衰記）などにはかのめをいへり蟹眼なり泡頭釘を蟹眼釘といへるとおなじ【（内宮長暦送官符）に蟹目釘あまた見ゆ】かなめといふ樹はこの釘に用る故の名なりかなめもと木とかなめもの用今の如く鯨のおさにて作るはいと近き事とみゆ（一代男）【八】此ほど京での仕出し人の重寶になるものと云々扇のかなめ目くぎ竹きぬの糸もち粘耳かきうち楊枝七色ありて代三文といへりくぢらの要ならむには損はるとあるべくもなし（雍州府志）に扇心以竹造之、以木釘或泡頭銀釘、彖貫其骨於一

扇の骨の色

○扇の骨白黑のこと（安齋隨筆）女房故實に云扇のほねはいはひなごの時は白きを御持あるまじく候黑ほねよく御入候子細ある御事にて候貞丈云白ほねをいむとは死人の白骨と同じとなへなる故なり（三光院内府記）云蝙蝠平生用之、兩猫間骨白なり黑ほね不用之とあり貞丈云公家にては凶事にて素服を着する時無紋の黑色の物を用ゆ扇も黑ほねを用なり武家には吉事に白骨を忌み公家には吉事に黑ほねを忌む表裏の違なり云々とあり兩猫間骨白也とはおやぼねのみ白きにやしからばその外は黑なるべし【（海人藻芥）に猫間骨大臣家物也云々昌喜が（久保の取蛇尾）に猫間骨とは中啓のすかしとおなじ少ひらく小啓の如し ○按るに猫間骨は猫の目丸くなり細くなるもの故透の穴そのやうなれば名くるにや】古說にかはほりは蝙蝠の翼を學ひて作れりとあるは非なるべし板扇ありて後紙扇いでき其さまおのづからかれに似たるによりてしか呼るなりと（久保の取蛇尾）に扇をかはほりといふと源氏に見えて（河海抄）（岷江入楚）等にも蝙蝠を見て扇を作り初たるやとのみいひていかやうなる扇をいふ共委注せず云々高橋氏云かはほりと名付る扇にもさまざまあり今の末廣もかはほり也當時宮中女房の扇これは常の十二本骨中ひらきなるもの也これもなべてかはほりと稱て舊記に夏扇といふものは皆紙にて製したる物なり云々【此間京都御影堂より調進の扇を種々いひて女院御用十二本骨少ひらき尋常の骨おや骨ほそし女房の扇といはれしは是なりとあり】

櫻扇 山吹扇

○又云櫻扇山吹扇といふも紙と見えたり櫻山吹を書たる扇なり檜扇にも兒女房は檜を書て持なり（枕草紙）に三重かさね五重かさねはあまりあつくなりてにくげ也と有は檜扇のおや骨ばかり本のかた其重ねの薄葉にてつゝみたるものにて勿論風流のため包たるもの也【（平家物語考證）にかはほりの扇紙の色さまざま也紅紫香丁子等なり或は泥繪或は彩色凶喪の時は扇の紙を用骨は厚朴或は竹を用墨塗朱塗蒔繪等あり凶喪の扇は黑を用骨數舊記に載る所七骨九骨十骨なり是を夏扇とす】安齋云（女房私記）

きかふごてまぎれ入給へるに云々おきかへる人は丁より外に出たるべしいたくさはぎておふぎたゝう紙などおこしたゝなり【中略】赤きかみに竹に雪のふりたるなどかきたるがぬり骨にはりたる云々うちははあつき時のみ用るなるべし同物語にすゞしき方にひるのおましゝきてうちやすみてうちはせさせてものがたりなどする云々（源平盛衰記）【五】西光法師ごらはれにて清盛を詈る處清盛が弱年の頃のことをいふに京童が高平太ご云て咲しかば耻しごや扇にて顔を隱し骨の中より鼻を出して閑道を通り給しかば云々後には鼻平太ごこそいはれ給ひしか（物理小識）摺疊扇貢子東夷、永樂問盛行、陸文裕得楊妹子寫扇、摺痕尙存、東坡言高麗白松扇是也、智按孫愐韻注、搨扇則唐人已有矣ごいへり便利なるもの古へありて後絕たるもあやし（雪谷臥錄）に陸文量菽園雜記、謂今之摺疊扇、一名撤扇始於明永樂中、成祖見朝鮮所貢松扇而倣制、前此皆團扇、無摺疊者、陳眉公太平淸話亦云、然予考喪大記翣翿注、形似扇、文公家禮繪圖、亦下狹上寬、頗類今撤扇形、若古扇皆團則注、翣者何團物不可擬、乃曰似扇乎云々、古扇不盡團信矣、但摺疊與否、無可考者耳、按に朝鮮の松扇は吳仁傑が（離騷草木疏）に高麗松のことをいふ條取松之柔條、細削成縷、搥壓成綫、織而爲扇、上有花紋、不減穿藤之巧ごあり又有杉扇、惟以白杉木、劈削如紙、貫以采組、相比如扇亦可招風これ本朝の製なり團扇の形はまんまるにあらず上ひろく下せばし何の疑ごあらん諸家かやうにいへるはさだならぬなり（天祿識餘）に元時高麗始以充貢、明永樂間稍效爲之、今則流行寢廣、團扇廢矣、至於揮灑翰墨、則如於成化間、近有作僞者、乃取明初名公手蹟入扇可哂、

かはほり
末廣 中啓

○かはほりは末廣なり中啓ごもいふ骨の數に差別あり本式は七骨なり（堀川後度百首）に【忠房】すへひろく七のほねにてはるあふぎやつれにけりなもごの姿を折かたを浮沈の二種あり末廣はうけ折なり沈折常の扇なり【按るに古へかはほりご云しころはみな中啓にて紙扇の惣名かはほり也もごより異同のものにならへるにあらずこゝにて作り出しものごは知らる】

入紙を以てさま〳〵に作る所々にあり革は滑革師これを作ると有これに油紙のよしをいはざるは其頃京師にこれなきなり紙を以てとあるは折居敷疊紙などをいふなるべし．しらうは班竹なり老撾（ラウ）は東天竺の國名なり其國に班竹あり爰に初て煙具わたりし時の煙管その竹にてありしかば何によらず煙管をらうと云とになれり班竹は旋文たるを上品とすこゝにも越後蝦夷などの産は旋文なりおもふに肥後させるをもてはやせしは又此竹をすげたるなるべししらうを竿ともいへり（宗因千句）高野の奥もつまる世の中黑染の袖枕にもきせる竿

扇【かはほり　末廣　中啓　骨の色　ぼんぼり　檜扇　かなめ　一束一本　修羅扇　油類　友禪扇　鳥扇　扇懸】

團扇【奈良うちは　判じ物繪　柿油うちは　流行あじろ】

（續日本紀）天平寶字六年八月御史大夫文室眞人淨三、以年老力衰、優詔特聽宮中持扇策杖、また寶龜八年五月癸酉、賜渤海王書云々、檳榔扇十枚至宜領之、とあり蒲癸のうちはなり古へ扇とあるみな團扇なり（職員令）主殿寮頭一人掌供御輿輦蓋繖扇云々、義解云、扇團扇也とあるが如しこれを御前に持ことは禁制ある故に老人には許されし事ある也後世はいたくかはりて是をもつことを禮儀とし笏の如く用ひたりかくかはりたるは摺扇出來てよりのことと見ゆ【又後世に至りて武家にはこれを持を不禮とするよし（秋草）にいへり】紙扇は木の扇の後に出來しなるべし【（和名抄）扇團扇と次でゝ擧たるは當時行はるゝ處によりてなるべし】夏はつる扇と秋の白露といへるは團扇をいふなるべし冬も女は扇もつことは顏をかくす料なり（源氏物語）【朝顏】童の雪まろぼしする處よろこびはしるにあふぎなども落してうちとけ顏おかし氣なり是はさして扇とて檜扇をさす也つかふべきばかりの用にてはなきといへり摺扇はいつと定りもなく持しなるべし（取かへばや）中納言衣とも人にぬぎかけていと寒かりければしのびて衣

いふ昔は京にては桐油屋にて油紙の煙草入を賣しとかや【始は京師の製にはあらず伊勢などの產なるべし】今もかつぱたばこ入といふ（榮花咄）【五】しぼり紙の煙草いれ百を十八文のぬひ賃心ぼそき糸仕こと云々これはちりめん紙の類にて油紙にはあらぬなるべし質素なる𪜈なり江戶にては紙たばこ入とだにいへば油紙のこ𪜈なれり其製は江戶にて伊勢の壺屋紙にならひて次第に上品出來たるは四五十年にも及ぶべし貞佐が（追善集其砧）近い御幸の東までまた翌日も期さぬは紙のたばこ入といへるはたゞう紙などのたばこ入なるべし賤小手卷寬延ごろ油紙のひとへなるを櫛形にして廻りをかんせん縫にして紺青にて女は役者の紋處など小く隅に書たるを用男は無地または墨繪など書たるを調へ用或は柿澁に砂糖を入摺交て厚紙へ數篇引たるをかんせん縫にして用るはおとなしくてよし又びいどろ紙は子供などの持べきもの也たばこの色すきて景氣なるもの也【中略】紙の拵へ方次第に高上になり今はきれよりも價高し又きせるも品々ばやりたれ共京師のさくら張のみ万代不易の形にておとなしき人は用昔は打のべきせるを持もの十に二三もあり又女は纎らうとて二ツにして懷中するつぎめ相口を角又は銀にてするもあり安永頃は銀ぎせるのたつふりとしたるにらうにわざとわれめをみせかすがひ打せて持などもあり煙草入きせる筒を蝦夷にしきなどにて拵へ銀くさり銀の火はたきを根付にして用近頃に至り革のきせる筒を仕出し御役動むる者など一般に用これはおとなしく脂も通らずよろしといへり

さくら張

羊かん

○羊羹といふ紙煙草いれ四五十年以前江戶橋四日市の竹屋淸藏にてかます形なるを百文づゝに賣たり其後松本屋といふ紙たばこ入の棚を田所町に出してくすべ紙のよきを製すきせるは池の端の住吉屋淸兵衞が田沼ばりとも出世張とも云るがはやり其後水野某が好にて今戶など出來たり又その隣家瀧口屋宗八と云へるは專ら吉原のきせるを作れり

田沼ばり
出世張
今戶張
らう竹

○（人倫訓蒙圖彙）にらう竹師品々塗色毛彫籐卷青貝等あり諸商人にこれを賣中京所々にあり又たばこ

れがきせる袋に毛たてばしがある矢根を抜べいとおもつて入てきた毛立ばしは毛ぬきなり

烟草入

○烟草入（昔々物語）に昔は懐中烟草入といふ事曾てなく善悪ともに亭主の烟草盆に入れある烟草をのむなり呑やうも今とは違たり【此間その禮儀を記せり文長ければ略す】其頃の煙草入は或は柿澁にて紙はいため又吹繪墨流しなどしたる隨分粗相のたばこ入なりしに今は【享保十七年】金入の切純子繻珍花布黑塗高蒔繪梨子地にて自慢氣に差出すそれ故煙草賣と夥しき也（風俗文選）飲食色欲箴【許六】たばこ計は亭主を奔走せり客人たばこはへらぬを調法とせるは何ぞや（風流つれ〴〵草）に遊女せきしゆ江口などは揚屋へきせるを持せ行たるを珍らしき事にいひ又揚屋のきせるは來る人毎に飲ば脂つまりたる事をいへり是らにも煙草は持て行ざるを知らる但し野がけ遊山にはもたせ行たりと見ゆ（寶倉）【三】破籠さゝへやうの物は麓の里にやすめ云々嶺に攀のぼりて木かげにしりうたけしても火縄こそ友なれ「雁首や花を見すてぬ山路かな一草刻初慶長頃、當時見學嗜家々、万民推幷作仙否、毎日飲籠一片露

かます煙草入

○（諸艶大鑑五卷）【貞享元年板】長袋のたばこ入があらば取ておけとは今のかます煙草入といふものゝ長さ也ほそ長き銀のこはぜなどの付たるにや○（一代女）【貞享三年】禿いひやりて供の者に持せ置し白き奉書包の煙草とりよせ奉書包の煙草入は疊紙なるべしその頃よりも古代の繪に煙草を紙に包たる圖多くみゆ又疊紙にあらずひねり包みたるを長ききせるのうらに結付小者にもたせしさまもあり

紙煙草入

繼きせる

○同草子【五】に繼きせるを無理取に合羽の切の煙草入貳分が物もとらぬがそん云々繼きせるも貞享の初頃は常のきせるみな長ければ懐に入るゝために作りしなるべし（雅筵酔狂集）飛ほたるたばこの火をやつききせる

合羽のきれたばこ入

○合羽のきれたばこ入是は油紙にて作りたる初のほどなるべし京難波にては今もかつはたばこに入と

早道

○早道（續五元集）【下】出し入しやすき早道の錢紛れずに返す芝居のたばこ盆（艶道通鑑）今日は心ざしある日なり有合たるぞ幸と逸道打あけて殘らずとらせける今はこれにもさま〴〵の製あり思ふに昔は前巾着も早道なるにや（花摘集）景淸が道の早きは音もしれ【其角】前巾着に小判へし折【曲水】道の早きといふにて前巾着即早道なると思ふべし

きせる

○きせる（大和本草）【六】烟草日本に初て來ると天正の初年なるべし或者慶長十年初て來る云々はしめは竹筒に入て火を吸を後に眞鍮の烟筒を用請取わたしの禮あり今は其禮廢れたり云々（色音論）【下】このごろ江戸のはやり物をいふ條丹波たばこにひごきせる云々（毛吹草）諸國名産を擧たる處隈本きせるとあり寛永頃肥後きせる行はれたりとみゆ（人倫訓蒙圖彙）幾世留張今二條通富小路に櫻屋といふ者あり其先祖これをはじむとかや昔は葭をそぎてそれにてのせみしと也京間町通二條の下三條大橋の東大佛におほく住す近頃水口坂本團子やこれ名物なり【（雍州府志）今處々製之然洛下間町幷大佛邊所造爲本】

櫻ばり

おもふに今櫻ばりといふきせるはこの櫻屋が元祖の製りたるなるべし烟草初て長崎櫻の馬場に植とあれば此櫻によりし家名ならん】又水口は桐の紋を付吉久といふ文字あり（風流旅日記）

水口きせる

【三】水口きせる名物なり云々火皿に水口とほり付るはいかゞといへり此桐の紋を豐臣公の頃御免をうけて彫付といへるはいぶかし上に引る（訓蒙圖彙）に近ごろといへるにかなはず（一代男）【二】慶長元和の頃風俗のとをいふ處五ふくつきのきせる筒小者にへうたん毛巾着ひなびたる事にぞ有けるとは供の者に持せしなり昔のきせるは皆長く小者が肩に打かつぎ行さま古畫に多くみえたりきせる筒とはき

烟袋

せるのとにて今の如くきせるを入る袋にはあらずきせるらう長き故に多くは烟袋を結付たりきせるの短くなりしは懷中するとになりてより也（續五元集）かぐと頭痛の愈る印傳花みるに憎いきせるや五ふく繒これ寛永二年の吟なり此頃も大首のきせるありし也またふるくもきせる袋ありしか（雑兵物語）お

かるべし（雍州府志）は革或は絹を以て片嚢を縫その內に丸散の藥を納また耳抓石筆等の物を入はな紙と合せてこれを懷にすはなかみ袋といふは或ははな紙を此袋の內に入るもの有【今女の懷中物の如く紙を外に卷などもしたるなりといへり】貞享元祿頃の書にかけるを見るに一口にして脇入ありかぶせは櫛のむねの形にまろく裁たり今の小ぎく三ツ折ほどの大さなるをはな紙にて卷たるもみゆ（人倫訓蒙圖彙）に紙入師諸の絹毛織革をもて是を作る幷巾着手帕(フクサ)同所にあり銀師諸の金物足を作る此中近世紙入は金物師別に名乘看板を出して是を作る（賤小手卷）はな紙袋昔は一ツ口にして脇入を入口のかぶせに銀の大なる平がなものさま〴〵物ずきして打たりそれを紫のふくさに包み胴じめに眞田の廣きを廻し銀の平き輪かなものをはめ緒じめの如くしめ其先に落し巾着を付て內懷へ入て持たりはな紙別に

鼻紙差

其儘入るか又ははなかみさしはな紙押へとてきれにてうすく拵へ狹みて入たり右のはなかみ袋は今に女の用るヿ替るヿなし其後三德といふものはやり今なほ是を用はなかみさしも色々工夫し中に一ツ淺

どんぶり

き口を付楊枝などを入是を田沼懸と云り又どんぶり有り更紗純子などにて大なる袋を拵へ何もかも此內へ入【中略】安永明和ごろ彼はを紙さしも腰をひきくし鼻紙を三ツ折にして女の如く懷中するヿは

寸袋

やりたりと有り按るにどんぶりと云は大なる袋をだんふくろといひ細きを寸袋といふ（雍州將志）革に

ひきはだ

て刀劍の室を包むこれを寸袋といふ刀劍長短の寸尺に應じて造の義なりといへり是今いふひきはだなり長短の寸尺に應ずといふは非なり只細き物ゆゑに寸袋と云なるべし右のどんぶりだんぶくろといふべけれども聞えのふつゞかなればどんぶりといひかへたる也磁器にどんぶりあれどもこれに準へんは非類なるべし【磁器部にいへり倂せ見べし】

はこせこ

○武家の女の用ゆるハコセコと云もの昔の紙入なり其ころは男女共に此形の紙入なりはこせこは筥狹子なるべし箱にてせまき意にや

る切はくの光となる秋夜の月「忘れめやき城殿に染るたゝう紙しなやかなりし人の手ざはり其書をみるに色々の紙重ね衣のかさねのやうにおめらして疊みたる上にはくを散らしたり大疊紙はこれにやき殿は城殿和泉とて婦人假粧の具扇などを製る古は何屋と云を何どのと云へり打どの張どのゝ如しキドノも是なり城殿は綺殿の假字なるべし綺羅とはいつくしき服飾をいふこれ後世の小間物屋なり

○（江談）【五】橘孝觀は文字を忽諸せず凡反古などにもあえて鼻かまぬ人なり云々これらをみるにも古へ紙少く反古を用ひて鼻などかむとさるべき人に有しと知らる然るに高貴の人といへども色紙に箔など置て用るは專らはなをかむ爲の物ならぬを知べしさて後世下さまのはな紙は（一代男）【七】こぎくのはなかみ（箕山大鏡）はな紙は小杉原に限るべし或人云女には勿論なれど男にはぬるし小半紙を用べきかといへりこれ宜からず鼻紙は男女共に小杉原を本とす男は小幅はぬるし展の大はよを用べし外の紙にはもし加賀の小菊か那須の中杉たるべし此外は紙はかつて用べからず折やうは竪の四ッ折なり紙の端を中へ折入るとあれど二ッに折て又二ッに折なり横折は少人用ゆべし（類柑子）哀れなる物を云處客の中杉つかひへらしたる文もかゝれず（色三線）大坂の條杉懷紙も延は女めくとてこぎくの五ッ折爪木楊枝をさし込奉書反古包に名木厚刻鼻紙入はさもしきとてつれたる散切の禿に入させなどみえたり今は紙入にいるゝも小菊二ッ折より四ッ折に過ず五ッ折は思ふに横に二ッに折たるを又竪に三ッにたゝむなるべし然らば古式にかなへり但し小ぎくの大さその頃と今と少し相違あるべし

紙入

鼻紙袋

○鼻紙袋　これも（色道大鑑）に近代【延寶】はなかみ入用ると盛りなれば下ケ物は廢れげなり根本凡卑なれども今は上ッがた迄用ひ給へば下輩はさたに及ばず諸用とゝのひて重寶となれり風流ならしめんとならばうすく小くして藥などのみを入べきに横に長く脇入をして中にさまぐ\の具あり片かたより引かけて金物にてしむる是賤しとはぜにて留るも又よからずふたを二ッにわけて打かぶするは宜し

一晩之意とみゆこれ昏黑によりて葫蘆の形前後しれかぬる意をとれるものか

千なりびやうたん

○千なりびやうたんは(考槃餘事)に天生一寸小壺蘆と云るこれなり又根付といふは俗なり(貞德文集)

鼻紙袋

に印籠燧袋帶挾珊瑚珠緒止等云々この帶挾とあるは今いふ根付なりはな紙袋行はるゝに及びて印籠などの提もの漸く廢る(新長者敎四、)【貞享五年】越前敦賀繁昌の事を云て、巾着切も集れば今時の人かしこく印籠ははじめからさげず鼻紙袋も内懷に入れゝば手のごとく事にあらず

鼻紙

鼻紙【疊紙　紙入】　きせる烟草入【つぎゝせる　油袋　らう】

はな紙は古へたゝう紙といへり(枕草紙)みちの國かみのたゝう紙のほそやかなるが花かくれなるすこしにほひうつりたる云々【赤はなか紅がすこし色のかはりし也と抄に有】思ふに花とはつゆ草なるべし今花色と云と同じ(園大曆)に德大寺前内大臣公賢大臣に物問給へる條々の中帖紙は不及沙汰之由蒙仰候し只朝夕用候白候やらんもし箔などちとちりばみたる物にや候べき現在鼻垂候はど可取出之間可有之樣大切候歟公卿巳後も薄樣帖紙持たる事もよそには見及候し是はもし夏の事候やらむ紅の帖紙古物をば持て候(貞順條々聞書)に疊紙折樣の事紙數二十枚を五つに折候て持べきよし候云々紙は大略杉原を用候同書【下】女房衆のはながみ【はながみといふも古たり】男のやうには折れまじく候袖の紙と申を必もたれ候是を杉原またはならのやさ〳〵を用ひ申され候なり(秋草)に云古へは今の如く小菊

疊紙

小菊 小杉

小杉などの如く小板にすきたるはな紙はなし小引合せ杉原などを折て用歌の詠草を書に紙の折樣今もあり是即古へたゝう紙に書たる体也折やう同じ事なり近世公家衆束帶の時大たとう紙といふ物を懷中せらる此大たゝう紙は厚きだんしに切はくなどちらして折たるもの也此たゝう紙の間に前にいふ處の疊紙をはさみて懷中せらるゝなり【此大たたう紙は古書にみえず近代の製作なり前にいひたる疊紙は(源氏物語)其外歌集古き物語等に見えたりと云り】(七十一番職人歌合)疊紙賣あり〔疊紙みがき打た

付しなるべし昔は物もらひなど長き袋を腰に帶び地にひきてありきし繪本などに多く見ゆ

打飼

○鷹の餌を入る袋を打飼と云それに種々の物をも入るゝより遂に打飼といふ袋できしなり（雜兵物語）鉄砲足輕小頭の詞がいに働て息が切れべいならば打飼の底に入て置た梅干をとん出してちよつと見ろ必なめもしないもんだぞなめても喉がかわく物だ

瓢簞根付

○ひやうたんの根付　（見聞集）に山椒と胡椒と問答の條公家武家の面々たち御賞翫あればこそよきひようなどに入よるひる御腰をはなれず御自愛淺からず了意が（浮世物語）【二】ある者腰につけたる百なり瓢簞より朝倉の山椒をとり出し（竹齋物語）にあとさき丸きへうたんをさすがのさげ緒にくゝり付（榮花咄）にあとさきかまはぬもの闇の夜になりそこなひの瓢簞（新竹齋）ちかき頃のとくさにねつけひやうたんの二ツのふくら同じきをあとさきがしれぬとてやみの夜といひ侍り（色三線）にいんでんの横ひだ【巾着をいふ】金岡時代の筆捨松の蒔繪の平いんろう【時代ふるきをいはんとてなれ共印籠の起原を辨へぬもの也】袋打の長緒あまかはの二ツ玉廿六夜のひやうたん根付もさらにおかしく（東牖子）【二】攝南今宮村は往古は御厨子所へ日々供御の料の魚調進の所なり偖當時より元祿寶永の頃迄は闇の夜といへる壷芦を出せり藏頭藏尾にして蔕是分らざる故闇の夜と號す人に益あるものとて帶佩として珍翫す珊瑚の緒じめに對して貴寵せらる今は絕て彼村に壷芦を作らず闇の夜といへる名だに知人なしと見ゆ瓢を帶ると古くよりはやりて猶諸書にみえたると多し今は只ひとつふたつを擧るのみ前後おなじ大さなるひさご百なりの中に出來るなり闇の夜といふも廿六夜といふも同義にて其意は二說なり（榮花咄）などに云處は菓物などやみの夜には生そこなひて常ならぬ形できるといふ諺ありしやう也されども是はあとさきしれぬと云例の謎の名なり漢土にも似たる事あり（西廂記）齋壇鬧會の條に銘子裡各歸家、葫蘆提鬧到曉と有る注に云、銘子裡猶云昏黑也、葫蘆提猶不明也、俱方言、盖謂天時人事混過了

うき世と稱するものいと多かり大かた今の當世といふとの心に同じ

花袋

○花袋といふは今女兒の五色の絹を縫合せて花形に作れる桔梗袋といふものなるべし（寛永發句帳）糸糸柳よれて緒になれ花袋（宗圓）はな〳〵の莟はうき世袋かな【重政】紐とくやげに千金の花ふくろ【良德】重政が句はうきよ袋の三角なるを花袋の莟といへるか只諸生花のつぼみとならば是はうき世袋の句なり但しうきよ袋も花袋ともいふべきか又（懷子）【二】紐とくや逢みるけふの花袋【云笑】

歌袋

○歌袋　今世に傳ふる所は檀紙にて作れる袋にて詠草短册反故など入るもの也其製古へはいかゞありけん未詳（夫木抄）【蛙、永仁元年楚忽百首藤原爲賴】いたづらに鳴や蛙の歌袋おろかなるにも思ひいればや此を（犬子集）に一村が發句として初五文字の徒にを讀かねてとあり

もみぢ袋

糠袋

さくぢ袋

○もみぢ袋　（空穗隨筆）空にけふもみぢ袋や月の顏【露牙】といへるも糠ぶくろをいふ也汁をもみ出してつかふ物なればさは名付たるにや但し赤くなる意にいふかもみぢ袋といふを所見なしさくぢ袋といひけんを訛りしなるべしさくぢは糠なり此條下に似よらぬ物ながら袋の名によりて次でにいふ

扭ふくさ

○扭ふくさ又ひねりふくさ共いふ（一代女）【四】武家に奉公の女をいふ處ひねりふくさよりこまかね取出し（續五元集）舌打をして恨うらむ虫月と見てはな紙袋ねぢふくさ又金銀扭和巾といふ草子もあり（六玉川）にむつかしきねぢり和巾も一むかし【元文頃をさす其時迄は行はれし也】今の胴まきといふ物は是より出るにや

財布

守袋

○古へは鷹の餌袋にも種々の物入て持し如く金銀なども今の財布などの如く其のみに用ひしものなしと見えたり（沙石集六）ある僧本尊を造立せんとて金を五十兩守の袋に入て首にかけて上洛しける

陣吉

ふうつう

○さいふを上州甲州にて陣吉といふは腰に帶る長き袋なり巾着を豐州にてフウツウといひ長崎にてダラと云とぞ今厚板類にフウツウと云もの巾着などに用ゆる故フウツウ織かダラは垂るゝものなれば名

浮世巾着

○浮世巾着は（榮花咄）に禿も壹分の四五十づゝは浮世巾着に絶さずあり思ふに異なる巾着には非ざるべし禿などが持ゆゑに浮世の名あるにやうき世袋とは絹を三角に縫て綿を入て上の角に糸を付たる物なり何の所用なく小兒の翫物たり大島求女が說にむかしは遊女とたはむるゝを浮世くるひといひしなり傾城宅前には柳を二本植て横手を結ひのれんをかけそれに遊女の名を書て下にうきよ袋といふ物を自分の細工にして付し也これを世にうき世袋といひならはしたる也といへり此說いまだしからず先遊女屋の暖簾のことは（堺鏡）【中】當津遊女町の暖簾に紫の耳を付る事他所にならざる所爲とかや（本朝俗諺志）【二】今傾城町の暖簾に紫の乳を付ると乳守の外になしといへり又大坂新町の細見（澪標）に都島原の局むかしはやむことなきあたりより免なくては暖簾かくる事かなはず暖簾は柿染の布長四尺三幅にて縫分に柑子革の爪結（ツユ）あり當津の暖簾古は柿もあり空色もありし今は紺ばかり也紅絹にて爪結あるは新艘女郎と云しるし也など見ゆ暖簾に紫の耳付るはすその方一布つゝ分れたる處を綻ひぬために革を縫つけたるにて其圖古き繪卷物に多くみえたり乳もりに限るにあらず又遊女にたはむるゝ放蕩ものを浮世くるひともいへば彼のれんの耳に似て三角なる袋をうき世袋と呼なりこれ誰袖の一種にして掛香の袋なり又うき世巾着ともいひしなるべし屠蘇袋即これなり【粟島の神に手向るは女工の進むことを祈るにて三角の袋空虚にてはつるされぬ故綿を入るなりもとより所用なき物にはあらず下文にみゆ】うき世といふことはきんし聟といふ猿樂の狂言に聟とのはうきよ人といふこと有これは世情に通じたる今いふしやれ者の意なり（はなひ草）【寛永十二年】うき世くるひ述懐にあらず戀の世なり（鷹筑波集）【一】ひえ入もしらずうき世のわるくるひこたつのそばで契るまをとこ【是等遊女に限らぬを見べし】又（櫻陰比事）【四】同町にうき世男ありて此女を目にて忍び【みな好色ものを云ふ】（永代藏）【一】雛形に色をうつし浮世小紋のもやう御所染云々又【六】浮世山桝といへるは菓子に用ひしなるべし其外

浮世袋

暖簾の耳

屠蘇袋

は蠻人の衣服の紐釦なりと云り此說非なり猫睛はもとトンボ玉とは云はず(產業袋)に鳳天は唐物なり地あめ色にて兩方に紅のまろき照ありみ事なるもの也とてトンボ玉とは別に出せり(物理小識)にも猫睛のことを云て無活光を蜻蜓頭と云とある如くこゝにも唯るり色の玉の初め渡りたるをその形を取てトンボと云しなりサクラ玉をば大よそに其たぐひと思へりしなるべし○トンボウ玉(東雅)に鎖紐をトンボウなどいひ近俗にはボタンなど云ふトンボウとは其形をかたどりいひし也ボタンとは西洋拂良機國の方言の轉じたる也とあれば一種に限らずと見ゆ(產業袋)にとんぼ玉は地るり或は白きに赤き花のちらし紋あり燒物の如くみえて至極うつくしその昔唐より始て渡りし時世に珍らしく奔走せし中ごろ大坂に名人ありて作り出せしに唐物にちがはず其上唐より年々に多く渡りて人の用ひもなく今は以前の百が一つの價もなきやうに成ぬしかし最初に渡りしは人よく見わけて價も以前にかはるとなし

ボタン

○(鳩巢手簡)に備前池田新太郎殿家老池田大學巾着に大珊瑚珠つけたるを見られ氣に入らず一兩日過て新太郎殿巾着をさげられ大學を呼手づから巾着を賜り其緒じめは手前細工に候間左樣心得候へと申され大學頂戴して退て見るに緒じめはむくろんじを燒火ばしなどにて穴をあけたる也夫より大學右のさんごじゆさぐる事ならず國中の士も印ろう巾着の物すきすきと止申よし面白き義に候

前巾着

○箕山(大鑑)に前巾着は凡卑なれど遊所には能かなへり【これ寛文延寶のこと也醫者などの提たる古く見ゆ】其後久しく癈りしにや【賤小手卷】安永頃京攝にて前さげといふもの流行て一般に用ひたり巾着の上に紐通しを付帶革といふ物を付て前へ提るなり印形要用の鑰の類身をはなさゞる品を入至極重寶なる物にて能工夫なりしが江戸にてはさのみ用る人少なし【かくいへるは昔流行しを知らぬさまなり】(獲絨輪)に前巾着はとり置の睾丸、居風呂で人の燗する雪の昏といふ付合あれば今少しはやく江戸にも流行したるを知べし

酒顛、また照世杯【四回】將絕大的荷葉來包鹽云々こゝにてもそのかみこれを用ひしとあり（永代藏）
【六】越前國敦賀に年越屋某といへるもの山家へ毎日賣ぬる味噌はいづれにても小桶俵を拵へ此費限
りなし時に此親仁工夫し出して七月玉祭の棚を崩して捨れる蓮葉を拾ひ集め一年中の小賣みそを包め
りこの利發世上に見習ひ是に包まぬ國もなしといへれば專ら用ひたるを知るべし江戸には今これを用
ひざれどもこの故にや荷葉をもて味噌のうへを覆へば味そこなはずと云傳ふ

帶くるま

○（目覺草）に黃緞纐のきんちやくに蒔繪梨地の印籠さげからのやまとの緒とめして（色音論）なし地ま
き繪のいんろうにむらさき糸のから打をたれもきらはぬさんごじゆのおとめもろともひきこうで（寶
倉）【三】腰下物つぶの緒じめにばへのくわら鮫印籠に島巾着は隱者のさげ物なりと有つぶの緒じめは
木槵子をいふばへのくわらは螺殼の掛落なるべし又（同書）山の腰月もや雲の帶くるまと云は根付を帶
くるまと云り今は二物なり。（一代男七、）【寛文中のことを云處】ねづみやが藤色の糸ひらいんろらに色
革の巾着めのうのふたつ玉あら木細工のねつけ（諸艷大鑑）【貞享元年】天かはの玉ひとつ有疵物なれ

勘淸縫

ども四匁七分有之色よし勘淸縫の前巾着につけて云々【あまかはゝ亞媽港にて珊瑚珠を云】勘淸縫こ
れより古きものにはみえず（箕山大鑑）下ゲ物のものずき品多けれどこと〳〵く記しがたく其中に印籠
惣梨子地と無地の黑ぬりとを用ひず又大なるさんごじゆ初心なれど遊所にかなひたり云々おなじ思は
くながら金鍔さしたるより勝れりさげ物は好むとこのまざると人によるべし近代は紙入用ゆればさげ
ものゝ用すくなしと云り

緒じめ

○緒じめは（西廂記）粧臺窺問と云條に我做一個縫了、口撮合山【撮合山は荷包上壓口也】と見ゆ

とんぼ玉

○（木草啓蒙）にトンボ玉と云あり黃白色にして正中に猫睛の如き點ありこれ（集解）の猫睛石
なり又淡靑色の硝子にて櫻花などを畫きたるあり俗にくすり玉と云これを又とんぼ玉と云は非なり此

みな金にて打啣みたるものに虎の皮の燧袋をさげ云々】

印籠 藥籠

○印籠は（下學集）に印籠【篗同】と見え（林逸節用集）に印籠【印判印肉】と見ゆ（同書）に藥籠も出たり今堆朱などにて四方なる重匣を印幷印肉を入るゝ物といひ同しやうにて形圓きを藥籠なりとすいづれも唐物なれば其實は知り難し此二色本邦にてはちがひ棚の飾などに置また腰に佩る印籠は名のみにて其用は藥入なれば實は藥籠なり安齋云此物もしは信長秀吉などの頃軍中の用意に鎧の上帶に付る爲に作り出せし物にてもあるべき歟などいへるはわろし（尺素往來）に丸藥等の事を云て當世人々火燧袋之底面に小藥器之中必齎持之以不得貯爲恥辱候とあり又諸器を連ねたる處に印籠食籠とあるは印の箱也【今古き印籠に東山殿時代の蒔繪なりと云ものあり東山時代この物なし心得がたきもの也】安齋又云室町殿の頃殿中へ刀に火打袋付て參るとなし老人病者などは藥を入る爲に御免を申て付候由宗五記に見えたり今も御前へ腰にさげ物して出る事は禁制なり

やろう蓋

○筥の蓋にやろうぶたと云は藥籠の蓋のごとくに作る故の名なりとぞ籠にもあらぬものを印籠藥籠といふも心得がたし籠とはたゞこむる義にや又唐山より籠にて作りたる重箱渡りしをもとにして名付たる歟（遵生八牋）有小圓香撞三層四層者有掛吊腰子香撞五格三格者とみゆ掛吊腰子香撞といへる物今の印籠なりしからは其製なほ唐に倣へる物か（奇異雜談）にある旅僧古き堂の內に宿りて天井に女の礫にかけられたるをみむとする處藥籠より火打蠟燭をとり出し火をともし天井に登りてみれば云々あり印籠に藥入るは燧袋に錢をいれ藥籠を火打筥にしたるとおなじ

荷包

○きんちやくを漢土にて荷包といふ周祈が（名義考）に晋の輿服志を引て文武皆有嚢（中略）綴外加於左肩、乃負荷之荷非荷葉也、今謂嚢曰荷包、本此といへれど荷葉を用ひて物を包むとこゝにて竹箨を用るにひとし（酔菩提）【十一回】濟顚和尚に毛大尉新笋を食する處叫庖人又取了一椀、來用荷葉包、好付

かねつくといひて何にても打鳴してものいはぬ事をする也しまといふはしゞま也捷還と書てしゞまとはよめりやすらひたる心なり又（明星抄）は河海の說に隨て（日本紀）進退の訓にしゞまひとあるをとりながら猶それをしまにかねつくかたに取なしてよそへいへるなるべしといへり【又按るに樂歌櫻人の詞にその舟ちゞめよとありちゞめはとゞめなりちゞめは又しゞめともいふべし（玉勝間）に縮緬今世にもいふちりめんなるべし但し昔はちゞめんといひけんをちりめんとは訛れるなるべしといへり是も縮は志目万留の假名なりシヽチは横通也】（尤草子）しづめる物をとりのおんごしゞまのかね云々

むごん

○今も小兒が戯に茶碗などをならして無言になる事をするは古き事と知らる【手習子供が無言とて線香を燃し立る事は又轉りたるなり】

巾着【燧袋】印籠【荷包　帶くるま　勘淸縫　緒しめ　前巾着　浮世巾着　うき世袋　暖簾の耳
花袋　扭ふくさ　瓢簞根付】

巾着 燧袋

巾着は燧袋の名殘なり燧袋は（古事記）日本武尊の御事に見えたり後世に佩刀に是をつく古畫ともに多くみゆ漢土にも宋代武官五品以上の佩刀火打袋を帶る事あり古へ旅行には必持しもの也（後撰拾遺）等の集にみゆ又（太平記）に青砥左衛門これに錢を入て持しとあるは今の巾着を用ることひとし【後の事ながら（醒睡笑）に物書たるを燧袋に入て持たりといふ物語あり】巾着を漢土には荷包といふ是はもと爰にて竹籜を用るやうに荷葉もて物を包しが始なるべし【（名義考）紫荷囊條、晉輿服志、文武皆有囊綴綬八座、尙書則荷紫、謂之生紫、爲袷囊綴服、外加於左肩乃負荷之荷非荷葉也、今謂囊曰荷包本此ともいへり】其形古畫をみるに皆圓く口の處に襞積多くあり三角なるは後の製なるべし然るに燧袋は三角に縫ふものなり三角は火の形なりといへるはしひ事也但し今紙子服などに火うちといふものを付るは三角の形によりて名づく【古製に三角なるはなし恐らくは火打がまの形による歟（太平記）【卌三】柄鞘

しゞま

進を始て三日といふ日云々勝侍のいふに隨て渡由の文を書て觀音の御前にして師の僧を呼て金打の事の由を申させて其二千度參りたる事慥にそこに双六に打入つと書て與へたり【この物語(宇治拾遺)にも載たれ共それにはかねうつことをいはず】(宇治拾遺)【一】源大納言雅俊一生不犯の金うたせたる物語あり是は佛事をしぬるに不犯の僧を選み佛前にて金打て僞なき由を申さする也(義經記)【七】陸奥下りの處弁慶申けるは今度の道中上下向々の間笛をふかじといふ誓言をなし給へとて權現の御前にてかねをうたせ奉りて候へば少人の笛をば御免候へかし(鵯鷺合戰物語)に祇園林には一揆知音の衆みな死出立をし曼陀羅を着今度中鴨をせめおとさずば生てかへらじと金打をし神水を呑てその名幾人契る(甲陽軍鑑)【二】内藤修理と長坂釣閑口論の處侫人を作らぬをみたけの鐘をつけと云釣閑そこにて腹を立おのれが分として某にみたけの鐘をつけと百姓あてがひの申やう口惜き次第也云々(鷹筑波集)【二】いとかたうやくそくしても來もせいで打たるかねのばちやあたらん(大幣)【ふせう組】思ふまいとのかねうてばかねのばちやらなほ思はるゝ(松の葉)【裏組なよし】上略なんぞよそなたの物ぐねりなにとなりとおこのみやかねをうとかのふ(八虹點)前句付【年〱のこと〱】金うてどかねの罰やらやりやらでなどあまた見えたりかねうつと云より大小の刀などを打合する事もあるにや戯場院本などには多くあるなれどそは作者の巧意に出たることならむ(姫小松子日の遊)のおやすが鏡のきんちやうの類はまた一轉したる也【きんちやうと音にて云ともあるまじきとなり】(夏山雜談)【四】何にても仕馴たる業をふつとやむる事を鐘うつといふ諺あり御八講などの論義の時證義師鐘といへば威儀師磬を打ならせばはたと論義を止る也此意なるべしと云り佛家に無言戒に鐘つくと經文にはなき事とすされどこれは本邦にてふるきならひと見えて(源氏物語)【末摘花】いくそたび君がしゞまにまけぬらむものないひそといはぬたのみに(花鳥)に童べの諺に無言を行せむと約束して無言〱とうしまに

大なる大小なり貞享元祿に至りて細身にして長きがはやりたり其後のさま〴〵なるやう也

だんびら

○だんびら　太平記【卅二】神南合戰の條山名が郎等福間三郎七尺三寸の太刀タビラ廣に作りたるを
つばもと三尺ばかりあいて蛤齒にかき合せ云々

なゝこ

○七子　刀劔の金ものになゝこといふ紋あり帛にもなゝこと云るあり今七子と書り（裝劍賞奇）に金具
に細點をつくるより出て帛の織めも金具の細點に似たればやがてならひ呼るなり其紋の魚胎に似たる
をもて名けたるなるべし魚を古語にナと云へば魚子（ナノコ）の義にてノをナといふは音便にて古言にその例少
なからずと云り此說いかゞあるべき糸には一コ二コなど云とあれば帛の織かたより出し名にはあらぬ
歟

獅子に牡丹の金物

○又獅子に牡丹のかな物は（太平記）大塔宮入洛の處に緋威の鎧の裾金物牡丹の陰に唐獅子の戯たるを
云々などなり獅子は獸王ぼたんは花王なればとり合せたるもやうにて漢物なるべし

くゝみ

○くゝみ　今小づか笄の裏にのみくゝみと云ふ古く柄さや皆金にて哺みたるなど云は今云ふ胴かねな
るべし

きんちやう

○伊勢安齋人の問に答て云大小刀を拔て打合せて誓ふをきんちやうといふ古書に所見なし信長秀吉の
頃以來武士の大小を帶する風俗なりしより其事ある歟古代このとなく又漢土にもなき事なれば可然文
字もなし兩刀を打合する事なれば金打と書なり其意もし誓約に違（ヒガゴト）はゞ此のとく大小刀を打折て二度大

かねうつ

小を帶せざる身となるべしと誓ふなりといへりこの說臆度の非なり是はもと佛に誓ひてかね打事なり
（舊本今昔物語）【十六】ある者雙六に打負て渡すべき物なく只貯へたる物とては淸水へ二千度詣たる
となむありそれを渡さむといへは勝たる者是をうけとらんと約束するところに觀音の御前にして事の
由を申證におのれ渡すよしの渡文を書て金打て渡さば請取む負侍いとよき事なりと契りてそれより精

遊所にこれを嫌ふたとひ老人法師たり共合口の小わきざしわろし拵は紋など付る初心の至りなれど遊所にはもしはどきにも猶紋など付すかし抔して波鏇苔やすりの類を用おりがね栗形等に至る迄彫物うや〳〵しうして唯目にたつぞ宜き鮫はちりめんはつは岩石海子などよし卷糸は花色もえぎばかりを制す其外は好みに任すべし鍔も無地を制す又金鍔は武家の外いたく是を制す小刀柄の裏くゝみに限るべし下緒は紫よろしからず外は何にても用べしと是寛文中の至りせんさくなり（皆々物語）むかしは刀脇差の拵やう人の年相應に寸尺長短物ずきありて客の刀の刀掛にありても是は誰殿の刀ならんと知れたり近年はさのみ長短もなく太刀二尺三四寸位にて細拵はやれば皆々細く鞘ひらめ流行は皆々平く近年【享保中なり】四分一の縁頭はやれば皆四分一大かた引通しの柄なり是よきかあしきか心得がたし自分もの數奇せば十腰か十色に替る筈なるをまねをして一同になるは武道不心掛の事也、新井白石が佐久間洞巖に贈れる書簡に古人脱俗と申事心得有べく候歟老拙常に子弟等に申教候一條有之候衣服刀脇ざしのこしらへを始め常に申言ばにても世上にはやり候と申事を好み候が夫が取もあへず俗人と申ものに候俗とはこなたの訓にならはしなど申歟されば平生の物ずきをいかにも當世の俗をまぬかれ候と申ても異形のとにては猶も不可然候間何も〳〵不出入らぬ處などとくと心得候へと申事に候我等衣服のこしらへ五六十年いつも同しとに候料理獻立何もその心得にて世をわたり來り候風流風雅は別に又一段意味あるべく候事にや（賤小手卷）腰物も其頃（寶暦）遊客俗士の差たるはあながち身は吟味せず疵ありてもなまくらにてもかまひなく細身にて切羽鉏も燒付にして鍔などの吟味勿論なし三分糸の花色抔にて花奢に卷せ目貫も何にても貪着なく只七子の銀縁をさす人ありいかなる心なるか今も俗人の心得は皆然り拵は何となく物ずき相應に對の大小などさすもあれど身に於ては吟味もせず用に立てばすまぬ物と大悟發明して高を括りたるは浦山しきすましかた也と云り遊冶の少年も延寶天和頃迄は長

々其始は鹿島の住人に飯篠山城守家直兵法の術をつたへしよりこのかた世上に廣まりぬ此人中古の開山なりさて又長柄の始る子細は明神老翁に現し長柄の利あることを林崎かん介勝吉と云人につたへ給ふ勝吉長柄刀をさしはじめ田宮平兵衞成政と云者にこれを傳ふ成政これを帶諸國を兵法修行し其神妙秘術をつたへしよりこのかた長柄刀をみな人さし給へり

大脇指

○むかし町人私に大小をさすとはやりたり（見聞集）【二】金六といふもの町人に似合ぬ大かたなをさしたる事をいひ又（可笑記）【正保元年記卷三】この頃の町人ども皆侍を學びて二尺餘りの大脇ざし三尺餘りの大かたなてりかゞやくばかりのだてこしらへ眞十文字に指云々いへり【（室町日記十六）】秀吉公の時百姓等がわきざし停止の事あり後々も度々御法度ありて止ざりしを天和年中嚴禁あり】さる風俗故脇さしも長きがはやりたり（一代男）【七】寛文ころの事をいふ處町人こしらへ七所の大わきざしすこしそらして【按るにそれよりも已前にはそりなき刀はやりたり古畫に見ゆ】あるさめをかけ鍍の古鍔ちいさく柄ながく金の四つめぬきうつて云々七所こしらへとは緣頭目貫折かね栗形うらがはらかうがい此七所を對にして地がね彫ものを揃るなり

金鍔

○金鍔のはやりたる事寛永中の草子に多く見ゆ（色音論）にさめざや卷の大小に金鍔かけてさしはさみ（藥師通夜物語）花かいらきの鮫さやに金鍔大小打ちがへ（浮世物語）にたゝき鞘の中わきざし金鍔をきらめかし（嚢山大鑑）云々又其後立皷柄を好める事あり又角鍔もおなしころにや（錦繍緞）【元祿十年】

立皷柄

暖に京は羽をりを長くきて繪にかく鍔に障子霞める【其角】（產業袋）【享保十七年】柄の寸は當代みじかく立皷に柄糸のひしも大きく卷あげ風流伊達に仕たつ（竹丈點）前句付そろり〳〵とそろり〳〵こくわんくわつも昔を忍ぶりうこ柄（獲絨輪）腕まくりして噺す九十九立皷獨鈷と握る二王心【冠角】嚢山が（大鑑）は只遊治の具をいふなれ共其代の流行を見べし刀は直に脇指は長きを本とす腋ざしの短き

とも申候まだ革緒劒と稱し候毛拔形劒とも申候眞劒候故目貫をはしらせぬ爲に目貫に毛拔形を打て手に握らしむる樣に搆候一名四名に候云々又衞府劒とも申候云々（貞順故實集）に打刀を鍔刀とも申候去ながら打刀と申たるがよしさやは青漆たるべし覆輪は金にて候是本式にて候と有【金覆輪は胴がねなるべし】

目貫

○目貫（古事談）に肥前守景家と云もの水干裝束のよき事を云處赤つかの刀のまふたきに貝摺たる差てぞ家中には居たりける云々【貝を目貫にしたるなるべし】

駮柄

（新野問答）野劒の條に柄は銀の駮柄も候などみえたればのしつけの刀といふもこの作りなるべし昔は腰刀ばかりをさし太刀は供の者に持せしなり古書にも其体多くみゆさて太刀は足帶とりしば引股よせ鞭結びなにくれと製造むづかしく不便利なる故後世軍中にはみな太刀を廢て今の刀大小となり遂に平日もこれを指ことゝなれる也今

脇指

の脇ざしは昔の脇ざしの刀とさや卷と打刀と三色かねたるやうの物なり打刀も（室町日記）などに數多見えて長短さま〴〵に記せり今の刀の如きも多し其內茨組の事をいふ處三尺八寸の朱鞘のかたな二尺一寸のうちかたな同じやうにこしらへといへるは全く今のわきざし也それをかたなは打刀脇ざしは脇ざしの刀にていづれもそのたけを長くしたるものとするは非なるべし（卜傳百首）に今の世は太刀はすたるといひながらかたなも同じ心なるべし又脇差は幽齋（九州道の記）にわきざしの代をしとへはやすよしのなかご正しきめいの濱かなこれは今の脇ざしを云にや

劒刀

○劒も刀も通はしいふべけれど（和名抄）四聲字苑を引て似劒而一刄曰刀此間の小注に太刀【和名太知】小刀【加太奈】また兩刄曰劒、今按僧家所持是也とあればかの隱劒と云ものは兩刄なるべし又大小の名も爰に出たり古今ともに人の好みも異なるべし（甲陽軍鑑）【十五】處によりはやり道具有之と見え候尾州より上方五畿內迄は大略刀小く關東は何れも大刀と聞え候【北條五代記四】昔關東北條氏直時代

長柄刀

迄長柄刀とて人每に刀の柄を長くこしらへうでぬきをうつて柄にて人をきるべき体たらくになせり云

糸巻の太刀

寶集）に刀の柄巻たるは略儀にて候烏帽子上下の時はさゝず候又巻たるをさすも時宜によるべし加茂氏の（雜問答考）に柄を巻は軍用の時なりと云は誤なり古は軍の時の太刀に柄をまかず京都将軍の末さまより糸巻の太刀とて柄また帶取のもとを糸して卷たるもの出來たり是は私に風流の爲にしたるものなるべし

腰刀

○腰かたな（新撰六帖）正三位知家卿「今はわれまろはにとげるこし刀よにつかはれぬみとぞなりにし

刺刀

○刺刀（後撰集）【十九離別部】貫之「折〳〵にうちてたく火の烟あらば心さすがをしのべとぞ思ふ（曾我物語）【五】けはひ坂の女「いそぐとてさすが刀を忘るゝはおこしものとや人のみるらん返し梶原かげする「かたみとておきてこしものそのまゝにかくすのみこそさずがなりけれ

脇指の刀

○又脇ざしの刀といふもの昔ありしものなれ共今とは異なりこれは小刀よりも短く作りさま小刀に似て尻丸く下緒短し（大内問答）云わきざしの事隱劒とて人にみせざるやうに自然さゝれ候歟殿中などへはゆめ〳〵御さしなき事にて候云々今俗に身に親しく召使ふものをふところ脇ざしといふもこれを云なり（法曹至要抄）に一尺三寸を用とみえたり

打刀

○打刀といふ物あり（東鑑）に上總五郎兵衛懷中帶一尺餘打刀云々（平家物語）に乘圓坊慶秀衣の下に萠黄にほひの腹巻大なる打刀まへたれにさしほらし云々（壒嚢抄）【三】に三寶名義抄并順和名短刀又野劍と書てノダチとよむ倩これを思ふに今の打刀なるへきか云々（和名抄）兼名苑云刺刀【和名能太知】

大小野太刀

短刀也とあり又名もなくて大なるを野太刀と云打刀と云ふ名古きものに見えず近頃いひ出したるにや大人の短刀を長くなして野太刀といふ故に昔の短刀を今打刀と云とありされど（著聞集）【九】頼光鬼同丸をきる處大の童打刀をぬきて走り出とも見ゆ（新野問荅）野劒是は眞劒に候蒔繪野劒螺鈿野劒蒔繪螺鈿野劒三ッの品有之候蒔繪野劒は平生出行の時車に入歩儀には人に令持候云々蒔繪螺鈿野劒を平緖

つんぼ傘 ぼやを訛りしものか【五雜俎、十六、】梅詢久爲侍從、急於進用、晩年多病、石中立曰、公欲安平、惟一服清涼散耳、蓋兩府在京、許張青蓋也【散繖ミ同音にて青蓋を云日傘なり】

白傘袋 ○鹽尻に文龜十二年、許朝倉孝景持白傘袋幷敷毛氈鞍覆、將軍家令也、今諸大夫はさら也無官の社家も白袋傘をもたせ陪臣も毛氈の鞍覆を敷(秋草)に云京都將軍の代迄はから笠を布の袋に入て持せし也武家にて白かさ袋を持するとは公より御免を蒙りて持せし也御免なき人はあさぎの布の笠袋なり(宗五記)に見えたり日でり笠はあやゐ笠なり臺がさ立がさこいふと古書に曾てなし近代の風俗なり

あさぎの笠袋

日でり笠 ○江戸御城丸の內町人の笠きるを停止の事あり寶永六丑年五月九日常盤橋呉服橋鍛冶橋數寄屋橋日比谷外櫻田半藏田安清水雉子橋一橋神田橋右御門の內にては暑氣の節も天氣能時分は供の者笠着せ候儀無用に可仕候右の通被仰出候間町人の方は供つれ候者にても晴天の節右御門の內にて菅笠着し申間敷候

○揚万里舟が過安仁詩、一葉漁船兩小童、收篙停棹坐船中、怪生無雨都張傘、不是遮頭是使風【からかさを帆にしても三谷舟などいへる發句の意に似たり】

刀 刀 脇指【腰刀 打刀 大小 野太刀 さすが 長柄 大脇指 金鍔 立皷柄】

さすが きんちやう【かねうつと しどま 願はたし】

さやまき 古へかたなこいへるは小刀(チイサ)にて本名はさすが又腰刀又さやまきこもいふさすがは刺刀の略言なり【今小刀をさすがこいふは非なり】さやまき轉訛してさやまきこもいへり其製鞘を卷たるが本にて其形を鞘に刻むを鞘卷きるこいふたけ短く九寸一尺を限りこす柄を卷ず鍔を入れず鞘尻多くは方に切小刀かうがひをさす柄も木にて造りたる有りこれを帶ると今人の脇指さすが如し(古事談)【四】出羽守齊賴鷹を好むとの處にたけの直垂袴に九寸計なる腰刀のつかにくすねいこまきたる脇つぼにさし(貞順故

因千句）【寛文六年】我家はから笠の下天が下すぐなる道をおこし飴うり飴やが傘は今に遺れり

紅葉がさ
蛇の目傘

○紅葉がさ蛇の目がさ是はいと近き頃の物なり（産業袋）【京保十七年】天井ばかり青きを紅葉といひぐるりの青きを軒青と云【俗に蛇の目】とあり（我衣）に貞享頃より地のもみぢがさ出るきやしやなり天上青紙細く縁をとる云々元祿傘より蛇の目がさ出るといへり雨傘を紅葉といへるもすげ笠のもみぢより名付しなるべければ是又始めは日がさに用ひしにや然らは青傘のもとなるべし

青傘

○青傘はいと後なり（産業袋）この頃はやり事にてあゐの染紙一ツ色にはり日よけ傘とする仕やう紅葉傘の類なり物ずきの人仕始め今の腐儒くすしの族取あつかふ云々白紙張にして青はな抔引たるはなほ草にしてうるさし又ひがさ柄七尺大さ二尺一寸骨數五十本天上の間みな朱ぬり也云々右は長老かた法會規式の時の日傘なり子供の日よけかさ草なる物なれば定りたるとなし骨三十本四十本大きさも好む處に隨ふべしと云へり

女笠
三度笠

大黒傘
壺屋傘

○（塵塚咄）【作者元文二年の生れにて文化十一年七十八歳にて死す】婦人夏笠の事寛延寶曆ごろまでは女笠とて菅にて大きく飛脚の三度笠の樣なるを用たり紐はうしろのかたを輪になしてわげの下へかけ頷の下にて結ふなり是も浴衣と同樣に今はきる者なし【浴衣を雨衣に用ひしを云】近ごろは卑賤の婦女も青紙の日傘になれり又容体作る婆々などは藤にて編し々を用【つゝら笠なり】此笠は高價にて卑賤の婦は用ひがたし又近頃は町醫出家など青傘を用るもの多し我等明和年間京大坂遊歴せしに公家侍醫者出家等はみな青傘なりき近年江戸も京都より移りたりとみゆと云り（賤小手卷）其頃はやり物の歌丁子茶と五寸もやうに日傘朱ぬりの櫛に花のかんざし（櫻陰比事）【五】むかし都の町に北國むきの傘を仕込職人あり大勢弟子を抱へ次第に勝手よく壺屋といへる家名を世上に廣めける（我衣）に大黑屋の聾がさと云は名代なり云々あるは今大黑傘といふこれそのかみの壺屋がさなるべしつんぼがさはつ

に馬の驚ければよめる、「さしかざす身をからかさのあやしさにわがこまにさへおどろかれぬる（著聞集）【六】箏篥吹の條唐かさばかりなる雲云々【同十六】さぬきわらふたからかさ計の大さ云々（源平盛衰記）【四十三】唐笠法橋のこと【此外（年々隨筆）などにも諸書を引けり】など多くみゆ

遊女の傘

○古への遊女は常に傘さして船に乘たり【遊女の條にいふ】古書に唐かさをもかさとのみいひしとあり（太平記）にさして行かさぎの山を出しよりの御歌も傘によせ給ひし也笠に柄をさしたるがもとなれば笠とのみいふべきと歟今も唐かさをかさといふ

雨がさ　日がさ

○（貞順故實集）かさをさす時分の事四月一日より八月中さし申候又九月八日迄さすと中人も候時節にあるべく候哉同書雨がさの事朱の色こく候て骨と柄と黑く塗たるは位にて候朱色うすく候て骨柄黑きは其次にて候又油を引候まゝにて柄などの白きはかざりにて候云々日がさの事紋に月日など仕候人も候本儀にあらず候惣して紋のなきが能候自然若衆などは色々紋を出したるも能候とあり（榮雅物語）などに月出したるかさはひがさにて遊び共のさすなれば本儀にあらぬなるべし寛永頃の畫に小兒の傘さまく／＼の紋をかきたるに筒護りと絡などさげたる圖あり是は近世までもかくありそれ故神祭に出るねり子供のさしかけ傘其体なり又風流傘は文永加茂祭の古畫にみゆ是はたゞ見物の爲にて傘鉾などの如し（太平記）大森彦七の條に裝束の唐かさ程なるといへる緣（ヘリ）に帛（キヌ）など付たる唐かさをいふなるべし

風流傘

長柄

○（續山井）【寛文七年】春雨を、「雨かさを春の物とて長柄かな【盡情】古き畫巻物などに見えたるは更なり後世貞享元祿の始までも雨かさ日傘大人小兒おもに皆長柄なり【余が家にもこの古傘二三本まで遺りて有き】（諸國咄二）【貞享二年刻】幼き女兒をいふに乳母腰もとつきて入日をよける傘さしかけて行云々其畫も長柄なり又むかし說經師長き傘をさしたり一雪が（獨吟）に【寛文元年江戸にて】法の師のかたく傘月のかさ後の彼岸にとく辻談義また古き畫に大路にて食物など賣もの傘さしたり（宗

鉈屋笠

○鉈屋笠は（夷曲集）京のなたやといふ者發心して大なる鉦たゝき大笠きて京田舎ありくを見てよめる【近吉】笠かねも捨て菩提をさこれかし生木に灘や氣の毒な体【これが事のよし（武野燭談）に出たり】近頃空也寺の法師江戸に來り勸化しありきしか竹皮の異なる大笠をきたりなたや笠も此等の類なるべし

傘

○傘（和名抄）史記音義云簦は笠有柄也【俗云大笠】とあるを天正のころ堺の商人呂宋（ルソン）に渡りもて歸りしが始のよしいふ說は非なり（東雅）にかさの義不詳笠にして柄あらんには即今のからかさといふものゝ類なるにや其製のこときは知らず古書に藺笠の如くにして大なる物に柄あるを繪がきしを見たりきそれらの物大かさといひし物の製にやあるらん不詳といへり是前に引たる（內宮長曆送官符）に見えたる菅の大笠といふ物とおなじ【菅と藺とはかはれ共大笠といへるは同じ】思ふに柄は用る時さして常には取收むる物にや笠は今の唐かさの如く疊まるゝ物にはあらじ（續日本後紀）天長十年九月戊寅天皇幸栗栖野遊獵、右大臣清原眞人夏野、在御輿前、勅令差笠とあるも是なるべし（落窪物語）に男におほがさゝせて朴の櫃におこせたり又男君はがてうげに引つれてたちはきをたゞ二人出給ひて大笠を二人さして云々（後撰集）【戀六】男のまうでこであり／＼て雨のふる夜おほがさをこひにつかはしたりければ伊衡の朝臣の女いまき「月にだに待ほど多く過ぬれば雨も夜にこしとおもほゆるかな」雨も夜はたゞ雨夜なり（朱雀院塗籠御本伊勢物語）にこの山はうへはひろくしもはせはくておほかさのやうになむ有ける云々上ひろく下は柄一本なる形を云なるべし

大笠

からかさ

○からかさは諸書に多くみゆ（空穗物語）【樓の上】山の高きより落る瀧のからかさの柄さしたるやうにて岩の上に落かゝりてわきかへる枕草紙【十】からかさをさしたるに風のいたく吹て又隨身たちて細やかにひゞきしをのこのからかさゝさせて云々（散木集）【中】雨のふりければかささゝんとしける

ひでり笠　りや紅葉がさそりやかゞ笠よ〳〵冬は雪見にかつくひぢ笠、紅葉笠とはひでり笠の義にや（懐子集）しぐれてぞかしける余所のもみぢ笠（後山井）雨にきても見よもみぢ笠立田簑【是は傘なるべし後に出】（古今集）【秋下、忠岑】雨ふれば笠とり山の紅葉ばは行かふ人の袖さへぞてる、もみぢ笠とは照る笠と云ふ名と見ゆ

阿彌陀笠　○阿彌陀笠（宗因千句）見返しの笠の内をもちらとみて南無あみた佛戀はくせもの（續山井）佛の座雪に來てつむやあみだ笠【正慶】あみだ笠は笠の名にはあらず笠を仰いて後の方へ着たるが佛の後光めく故にいふなるべけれどさてはあみだに限りたることにはあらず思ふに（守武千句）に南無あみだ笠きぬ人もなしといへる秀句ありしよりあみだ笠は出しなるべし且かく着るは笠の縁(フチ)の物に障るによりて

螺尻笠　也（徘徊世話盡）旅部に餅食笠と云詞あり是も同し着やうにや釣人などは釣竿のさはりとなるゆゑ螺尻(バイシリ)といふ笠できたり（我衣）にばいじりはちく竹の笠元文よりはやる釣人の笠なりといへり【後にかうけいしと云ふ樂賣これを着てありきしとあり】

桔梗笠　○桔梗笠　（北條五代記）に福島伊賀守祭見物に出る處女に紅のそめかたびらさきの尖りたるきゝやう笠をきせて牛を牽する事をいへり其笠今神祭に唐人拍子(ハヤシ)する者の笠に似たるべし（鷹筑波集）【三】朝がほに日まけをさすな桔梗笠【吉數】（毛吹草）さく花のしんをやしめ緒桔梗笠【吉政】（佐夜中山集）桔梗はかりをもてはやすなり【付句】めされたる笠もいとよし踊ぶり【笑種】なほ古き徘諧の句とも諸書に見えたり（貞徳文集）乍無心之儀摺箔小袖宇都宮笠塗笠桔梗笠尖笠云々可被恩借候【踊の具といふ】古畫に大神樂打などの此笠きたるは笠を花形に造れる也これは名によりて形を作りしならむ風流なる笠は田樂法師に起る今の唐人拍子の笠はもと飴賣が朝鮮人の眞似したるにや田樂の笠は（古事談）【一】永長元年大田樂の事を録せり【田樂の條にいへり】

ふ深江は攝津の國の東なり古へより難波菅笠は名に聞えたり（延喜式内匠寮）御輿中子菅蓋一具と有て分注に菅幷骨料材從攝津國笠縫氏參來造営翳二柄同笠縫作單功十人とみゆ】（當流女用鑑）【四】貞享四年眞野のすが笠かゝへ帯追風あたりに芬々たり是なん都女郎云々其頃より行はれたり此笠今の殿中に似て頂尖りたり其後江戸にても武家町家ともに女の笠これを用菱川が畫にみゆ（松の葉）花見といふ小歌「花からうかと打むれて櫻ちりつむすげ笠やさし、上野山の花見なり」（松の落葉）【おせん物狂ひといふ半太夫ぶし】ゆかりの色や紫のちりめん手細むすびさげ誰しらすげの加賀笠をまへふかぐゝと着なしつゝ（賤小手卷）に女も夏はすげ笠をかぶりたり翁が幼年頃【延享寛延の頃】母の夏の頃物詣に

近江笠

笠をかぶり給へるを能見覺え居るといへりすげ笠はいづこはあれど近江の笠古へより名高し（巳）の謠曲にしからき笠をきその里に涙こともえは只ひとりとはうたへども前にいひし如くこれも文句には拘はらず黑き塗笠を持出る其外（うこう）（富士太鼓）の仕手最明寺皆ぬり笠を用（糸竹初心抄）【小歌】これから見ればあふみが見ゆるかさかぶてたもれ（コレノシン・ハヤア）あふみすげがさを（コレノシン・ハヤア）なんぼきよござる（コレノシン・ハヤア）（松の葉）なるぬり笠の歌は是をとれり又（小歌惣マクリ）あふみかはりぶし「これから見れば上野がみゆるゆしま淺草すみだ川あらしにつゞくかさかうてたもれうへ野あみ笠を【たゞ其邊にも賣をいふ名に負ふとにはあらず】又英一蝶が隆達が破れ菅笠しめ緒のかつら長く傳りぬ是から見ればあふみのや云々こ作れるは近江笠の古る歌を隆達がうたひしなるべし（事文類聚）古樂府詩云今世褦襶子觸熱向人家炙轂子云――笠子也集韵解云――不曉事云々あるは普通説なり（天香樓偶得）褦襶衣厚貌一云不曉事非也今俗人見人服粗重者曰――此即――之誤耳

紅葉笠

○もみぢ笠【傘にもこの名あり】（松落葉）【すげ笠踊】東から來るはなよめうれしおれがめあてのすげ笠うれし御供にこつゞくだて助が腰をよぢらすもみぢ笠云々又【四季花笠踊】月のゑがほにてつた

るは桃青が檜笠の句を襲へり

つゞら笠

○つゞら笠塗がさ（諸艶大鑑）【四】旅送りの處木地の平笠に紙緒を付て上着をつぼ折みな竹杖もしやれて云々【笠の緒紙を用ゆ前にもいへり】（俗つれ〴〵）【元祿八年印板】水口の八兵衞ざしの木地のつゞら笠に千筋こよりの紙紐とあり木地と斷りたるは塗たるもあれば也ぬり笠はそれより前にはやりしもの也（和漢三才圖會）塗笠用薄片板紙張之漆黑色とみえたるは古風なるなり猿樂には男女ともに塗

塗笠

笠を用また追分繪の藤花持たる女塗笠をきたり古き体と見ゆ（毛吹草）【正保四年板】花がさを塗笠となす霞かな（松の葉）小歌におかたぬり笠七年まいすげ笠にかへておめしやれサあふみのかさイヨコノさいたサ形はようてびやくらいきやうてサと唱へるは塗笠古風となりて老女の着る物となりしなり（諸艶大鑑）【五】老女のむかしぬり笠に觀世こよりの緒をつけ（松の落葉）【源五兵衞踊】ずんごくぼんだぬり笠云々又【傘踊】䎹殿は夏くべいとて夏は何をみやげにずんごくぼんだぬり笠そめなり〳〵いつそこがり笠ほそり笠とあり今のすげ笠のやうにて中のくぼみたる塗笠に紅紐を上に通して結びたる女笠享保二年花見の繪にみゆ然れ共右の小歌は元祿中うたへるにて其頃より行はれしなり

紐の付樣

○紐の付やうにも流行あり（一代男）【四】當世女といふ木地のつゞら笠に白き紐上に結はず【笠のうへにぬき通し結びたるを嫌ふ也】（風流旅日記）【三】水口の條一むかし已前はやりしつゞら笠今は見苦し云々此所今もつゞら細工名物なり貞享四年かくいへれば延寶四年ごろ流行しなるべし（西鶴榮雅咄）に浮世つゞら笠と當世風をいへるは天和頃なるべし此つゞら笠を女のきると貞享年中より廢れて後安永天明のころ又はやりて寛政中に廢れたり

菅笠

○すげ笠（一代女）【貞享二年發行】歌比丘尼のことをいふに黑羽二重のあたまかくし深紅のお七ざし

加賀笠

の加賀笠とあり【今も此所名產にて伊勢音頭にお坂はなれてはや玉造笠をかをなら深江が名所とうた

こゝのへといへり其形おもふべし（我衣）に薦僧の笠享保より小ふりにて深く作ると云り此說非なり寬延ころの江戸繪にこも僧を風流に書たるに美服きたれども笠いま浪人物もらひの着る前の處に物見の穴あきたる笠にて形も裾廣なり今のこも僧笠小ふりにて上下廣狹なく深く莟みたる笠は寶曆明和の末の頃の畫よりみえたり

小あみ笠

一文字笠

又小あみ笠と云あり形常の笠に異なり古き畫に鎗持の小僕などかぶれり（我衣）に後世はゝづき賣風車賣の子供の笠なりといへり玉緣の一文字といへるは丸き紙を中より二ツに折たるやうに頂の一文字になりたるなり師宣が繪に往々あり辻立の繪うりが編笠古風遺れり（二代男）【一】夜さへあみ笠をきてつれぶしの讀賣此草子の繪をみるに今と異ならずたゞ今は編笠を折てきるなり又坊間にて葬送に編笠を着ると通儀なれ共昔はさもなかりしにや（下手談義）に分限者の葬式質素なる年をいひて勿論水色の上下あみ笠などは怪我にもなかりき是をみて花麗は好人のせぬことと悟りぬ寶曆八寅十月廿七日總州小金一月寺武州青梅鈴法寺門弟共相用候深編笠以來俗人へ賣不申樣當地笠屋共へ可申付尤印鑑切手等有之候はゝ賣渡可申旨御觸あり【（曾我物語）（大名本）河津三郎が裝束云々筋黃にて裡打たる竹笠云々また五郎が裝束にも見えたり】

法性寺笠

○法性寺笠は（新竹齋）【三】藤森神事の處此五六町はいにしへ貞信公山の大德尊意阿闍梨に建て參らせ給ひし法性寺の結構さながら金玉の山なりけるをぞ中古より民家わらの軒ひきく背戸に松あふちの木高く茂り露雫のをやみせぬに習ひて竹の皮がさを能作り出しければ所の名所となりぬ云々誠や紫野の老和尚寺に詣給ひし時藪かげにされかうべの有しを〔涙ふる法性寺笠きて見れば皮ははなれて骨はかりなると詠給ひしとかや（雍州府志）竹籜笠大和大路古法性寺邊造之故法性寺笠といふ（本朝文鑑）支考が假字の詩には名におふ法性寺なれど利休の家の數寄にもあらじを我と風雅の旅にあそばゝ花のふときのよしの見せうぞ【注に法性寺笠は洛外の名物竹皮にてつくる多くは茶人の路次笠に用ふ】といへ

今は全く茶屋許となる大門口の外五十間道は編笠を店につるせしあみ笠茶屋なりそれも大かたに中の町茶屋にありたるよし大音寺前出町の茶屋は至て後のとなりといへるはいかゞ（二代男）【貞享元年】泥町のあみ笠茶屋とあり泥町は田町の舊名なりそこに茶屋ありて編笠を軒に釣たる圖天和頃の畵にあり（胸算用）【五】あみ笠一ッ十四文にうるこれは此五月三十六文で買て何々のせいもん庚申參りに只一度かつぎし其儘と云けるこれ元祿五年あみ笠の價直なり

編笠沿革　玉縁笠

○編笠沿革のとは（昔々物語）に女はかちにてありく時覆面のうへに玉縁といふ編笠をかぶりたり歴々衆いづれもあみ笠をきる万治の頃より玉縁といふ編笠その後寛文の頃松坂といふ笠延寶の頃熊谷笠薦僧笠などはやり八分ぞりはやる天和貞享の頃より編笠次第に止み皆々すげ笠になる歴々衆あみ笠の時分は陪臣菅笠をかぶりしが元祿の頃より大身小身ともに押并てすげ笠となる下々晴天に菅笠かぶらざる也むかしは何ほど強き暑氣にても雨降ざれば供する者すげ笠かぶるは一人もなかりし（我衣）に上總

でん中

より出るでん中といふ菅笠なり【按に上總廳南笠とはいへど其處にて造らず其近在千田米道又留などいふ處にて作る臼挽歌にせんだよなみは皆笠どころ笠の針めで目がかすむとうたふは是なり】伊勢よりも來る元祿までは女は紙を四角に折てあご紐へあて口をかくす正德よりなし武家は寛永頃まで有し

つゞら笠　ぬり笠

云々（世事談）【一】天和の頃はつゞら笠元祿の頃ぬりがさ都鄙ともにはやれり江戸にて寛文延寶のころはすべての女あみ笠を着たり古き江戸繪にまゝ見ゆ當世女のあみ笠きたらば氣遣なと云へしとあり

薦僧笠

薦僧笠と云は熊谷笠なり【今の薦僧笠はいと近きより也】（后日男）とも僧の出立をいひて熊谷笠とあり又（洞房語圖）に熊谷笠八所とぢ【八所とぢといふもこも僧の着たりと見ゆ】【（昔々物語）の熊谷笠こも僧笠と并べ云るは是なるべし（吉原犬枕）に深きもの熊谷笠とあり此笠深しといへども今のこも僧がきるやうなる物にあらず其頤が（賢女心化粧）【四】俄に尺八をけいこして云々揩鉢をみるやうな編笠を

町の條老若男女いせあみ笠近江すげ笠をきたるもあり（色音論草子）【下】めでたき御代のありさまをたれもきてみるあみ笠をさんとめしまのはをりこそ夏冬かけてはやりけり（浮世物語）【一】當世風をいふ處蘭柄の大編笠まぶかに引込（正章千句）二階の月に狂ひやむ袖、破れより露もるき笠目せき笠【二階は笠蓋と付狂ひて笠の破れたるより月かけもるなるべし】目せきは目の細かにつみたる編笠なり

目せき笠

（西鶴大鑑）【三】都の富士といふ時花出の大あみ笠をかつきつれたるは叡山の兒若衆【貞享四年正月發行の草子なり】八文舍が（色三線）【二】大盡出たちをいふ處朧富士といふ大あみ笠ゆたかに着て【これらその形を思ふべし】あみ笠の緒も質素なる事なり（一代男）【五】堺ちもりの條客人ひとりたゞゐよゝりはとねながら編笠の緒こしらへと有は紙よりなるべしまた編笠の下に紙のふくめんしたる古書あり是等は手輕きを風流とせしなるべし（東海道名所記）【六】知る人に行あはじとあみ笠の下にはながみをはさみてふくめんとししごろなるはな歌をうたひ云々【此と下にもいへり（誰身の上）【三】深きあみ笠引かぶりはな紙折て顏にあて日々にあげやとやらむへかよふ云々あみ笠人めを忍ふによければいつの程よりか遊所にかよふ者に其あたりの茶屋にて是を借す其家々の目印に燒印を押すこれを燒印の編笠といふ（新竹齋）【二】丹波口につけばやきゐんのあみ笠に人め包み（後日男）【二】ほそをのわら草履燒印のあみ笠ふかくかぶり（松の葉）【さはぎ歌三谷がへり】馬にも舟にもえのらひで手編笠をさしかざし又【同】二枚がたにもえのらいでやき印のあみ笠うちかざし丹波口にてけつまづいて云々此かへ歌のかたは朱雀がへりなり手あみ笠とはおのが笠にて借りしにあらず【笠盡しをどり歌に比丘尼のきぬはぬり笠よ云々（戀の手習）【三】きねば叶はぬやき印のかしあみがさのかさなりてうき世花がさかゞがさに】江戶には（洞房語園）【上】日本堤の諸玉ふらの一文字今は稀なり

都富士笠

紙緒

燒印の編笠

熊谷笠八所綴

○熊谷笠は深く八所とぢは淺し或云揚屋盛りなりし頃中の町は皆商業にて往々水茶屋やうの家出來て

こ有はあやゐの誤歟古へは此笠をえほしのうへに着たり後三年合戰繪などに見ゆまた田樂法師これを着る今流鏑馬射るに用るは風帶あり是は田樂法師の笠に倣ひたるにや田樂の笠には風帶あり其やぶさめのあやゐ笠とはいへども藤かづら或は麥わらにて作るさて此笠後世はこの射儀などにのみ殘りて其他は絕たるやうに思へどもその名と形こそかはれ編笠は即これ也あみ笠といふ名も古くみえたり（著

編笠

聞集）【廿一】一條院御秘藏の鷹の條にひたゝれ上下にあみ笠着たるのぼり人云々（源平盛衰記）【十九】佐々木盛綱下向の處世になき身なれば馬もなき次第脛巾に編笠をき腰の刀に太刀かつきて京を出（太平記）【十一】相馬太郎が落人となる處に破れたる草鞋に編笠きて（義經記）【六】判官くわんじゆばうのもとへ侍一人をだに具せず腹卷計に太刀はきてあみ笠といふ物うち着万事を賴むとておはしけり又【十二】白うちでの笠云々（源平盛衰記）【卅五】巴關東下向の條巴が關寺合戰の出立を云處ひた

白打出笠

ひに天冠をあてゝ白打出の笠をきて眉目もかたちもゆうなりけり安齋云白打出の笠は銀を打のべたる笠なるべし（宇治拾遺）に打出の太刀所々に見えたり（職人歌合）に白かね細工の詞に南鐐にてうちいてわろきとあり白とは銀のことなりといへれど非なるべしうちでは打出の太刀などの如く新たに作りたるをいふ古きは白からず故に白打出といふ也さて後世あみ笠時好に隨ひてそのさま色々にて名も亦多し（守武千句）けん物にみな後の世やねがふらむなむあみだ笠きぬ人もなし【昔は物見に出る人多くあみ笠をきたり古畫に目に向ふ處をきりぬきたるやうのあみ笠などあり是は物見る爲の設にて一種の製なり穴を切ぬけるにはあらず今も浪人乞食などの着る笠物見あきたる有それと同し笠なり】また「有明の月はいかにもひくゝしてかうやひじりのきたるかさくぎ【序でなれば書出つ是は檜笠の平たきあじろ織なるべし】貞德が（油加須）に結解をするやいせかうの錢わけてとるあみ笠のねは不同にて【いせあみ笠は名產なり】（京童）に老たる若きはたのそりたる伊勢あみ笠をかふり云々（東海道名所記）堺

笠　藺笠　あじろ笠　つぼね笠　市女笠　蓮の葉笠　竹笠　すげ笠

（和名抄）毛詩註云笠【力執反和名加佐】所以禦雨也とあり竹は箨にても身にても作るべし雨を防ぎ日をも遮るものなれど藺笠はたゞ日でりにのみ用ひしなるべし籧篨(アジロ)がさは竹も檜もあるべし又笠縫がぬひ作れるは竹の皮檜すげなどもて作りしなり名所に笠縫の里あり又浦をも歌によめり（甘露寺職人盡）笠縫が歌「名にしおはゝ我こそはみめ笠ぬひの浦淋しかる秋の夜の月「見えしとやうちかゝふくるつぼね笠すげなげなるはうらめしきかな」つぼね笠は含める形の笠をいふ【盛衰記につぼみ笠とも見ゆ】又市女笠とも云ふ是なり古へ婦人道をゆくに衣をつぼ折て此笠を着る其体古書に多し又蓮の葉笠と云るあり形をもて云なり（太平記）師直被誅條に見ゆ竹笠は（著聞集）に天竺冠者と號する者竹笠きたりと有すげ笠は件の歌にすげなげなるとこ菅(スゲ)を隱してよめり【（詩經）都人士の章に臺笠緇撮と有すげ笠なり本邦にて菅をすげとするは誤なり菅はかや也すげも簑に作るは山莎なり】【（內宮長曆造官符）菅大笠貳枚、柄長各八尺五寸、徑一寸二分、黑漆平文云々、骨二十枚漆塗、骨末押金薄、其體如蕨形、廻曲各五枚云々笠口徑四尺六寸二分【これは簦なり末に出たり】（安宅謠曲）にあや菅笠にて顏をかくしとは菅をあやに編るにや恐らくはあやゐ笠の誤ならむ】

藺笠

○藺笠は（延喜主殿寮式）に簑二十五領藺笠二十五枚とみゆ文安御即位調度の圖中に藺笠ありその傍に藺笠上葺檳榔と注したり【檳榔はびらうの假名なり棕櫚の葉に似たる物にて（本草）に蒲葵といへり（大和本草）に日向及肥前平戶に多し肥後にびれう島ありと云ふ】びらうは蒲葵なり本草にも可爲扇笠よしを云り【こゝの古書にも蒲扇多くみえたり】藺笠にびらうを葺たるは雨をも防ぐへき爲なるべし

綾ゐ笠、

藺は（和名抄）にゐと訓り疊の表に織る草なりこれを編作る故綾ゐ笠といふ（舊本今昔物語）笠道寺緣起に天智帝の皇子田獵に藺笠を着給へると又攝津國小屋寺の鏡を盜人のとりたる物語に綾ゐ笠頸に懸て下衆なれどもつき〴〵しく云々見ゆ（增鏡）に資朝も山伏のまねして柿の衣にあやは笠といふ物着て

次第に附會しあらぬことゝも出くるは常に多し】さて彼ころくついたる竹のつゑとは人の名めかしく作りしが俑を始めたるにて實は竹をいふなるべし布袋竹は杖にするものにて節の間五六分又は五六寸あるものなれは五六といふ也もと琉球より渡り西國より東國に移りたれば生れは西の國といふこれも昔つゑつくとはやりし時の小歌にて江戸のとなれば武藏野に住なごいへるか尺八といひ筆の軸と云はかならず其物に作るにはあらされ共竹になずらへて云なり(大和本草)【九】琉球竹またこさん竹と云琉球より來れり大さ杖鞭のとし其葉吳竹の如く節間或は近く或は遠し近きもの五六分遠きもの五六寸一本の內にて遠近あると如此筑紫にこれ有といへり漢名は人面竹羅漢竹なごいへりほていかといへるに似たる名なりまた專ら杖に用る故漢名扶老竹笻竹ともみえたり

○又按に小歌に輿作あり延寶の頃(洛陽集)に足𢪸や輿作すゝまず關の雪【春嘉】これは馬子か雲助か何れ賤き者をさすまた常の下男をいふか(同集)三月三日發句に「柳樽はかりなけれと輿作酔す【時笑】こもありそのかみ輕き者の名に廣くいへるを知べし然るに(好色徒然草)に龜山に花の六藏といふ馬子關におもふもの有けり中山道へゆかでかなはぬ事有て心ならず程經にけれは古鄕のとを思ひては悲まず彼女の事を慕ひて病に臥にけり【中略】關の小まんはゆうに情ありける女にて六藏に契りてより山川を越て龜山にかよひて二度と人にまみえざりしこそ心ざしやさしく覺えし是例のたしかならぬ一種にて六藏とは小六にやいぶかし【此龜山は東海道と聞ゆるに丹波輿作といふ時は丹波の龜山にや】

笠【藺笠 編笠 目せき 都富士 紙緒 燒印 沿革 熊谷 八所綴 薦僧 小あみ笠 一文字 法性寺 つゞら笠 紐の付様 すげ笠 近江笠 紅葉笠 あみだ笠 ばい笠 桔梗笠】

傘【大かさ からかさ 遊女の傘 風流がさ 長柄 紅葉がさ 青がさ 壺屋 ツンボがさ 白かさ袋】

はひうやりちやうやりふゑころくすゑじや一筆啓上せしめ候せんとは御狀を下されたれどもついしか返事もつかまつらいでさて〳〵ぶさたに思ひまいらせ候へと丶もかいてやれふでのじくだけころく（柴一本）氷川大明神の條小六と云は赤坂一ッ木村の馬かたなり美男にてだて者なり風流なる出立にて馬の口を取京大坂まで追ありく小六生れは西の國そだちは關東の武藏野に住と小歌にまで謠はれし小六なりとこの小六氷川大明神を信ずること淺からず此所に大明神を祝ひ奉りぬ小六死て後この宮に葬りしより小六の宮といひ傳ふ元此明神御本社武藏國八王寺の邊に木呂子と云處にあり爰の氷川大明神を此處に移す道灌の書に木呂子の某と云ことあるこれ實說にや（江戸鹿子）に氷川大明神次に同社一名小六社と云武藏國一ッ木村別當大乘院云々と有て小六の事をいはず【氷川明神は今井村また築地にも在て高御產巢日神を祭ると云高天原になりませる神三柱は天御中主神高御產巢日神なり同社はいづれこの內なるべしたかみを略しむすびのびを普通にてむすぶの神といひなせり（うつほ物語）樓の上「人しれぬむすぶの神をしるべにていかゝすべきとなけく下紐（取かへはや物語）宰相中納言にかたらふ處むすぶの神の契をたかへぬさまにおほしなりぬなどありむすぶの神といふより風流のともいふなめれど馬かた迄は誤りなり殊にこゝに葬らむともいかゞそれを人のあがめ祭らむはいよ丶あやし】手づな染を小六染といふも此馬かたによりての名にや又延享中に嵐小六といふ芝居役者が所作の肌ぬきに紅白の左り卷を染て着たるよりの名なりとも云り【又（松の葉）【三】によさくといふ歌また馬かたをいふ歌ありよさくは馬追などのと見えず伊達の與作といふも是らをとり合せて作りしなるべし馬かたといふ踊歌の文を淨るりに取しは竹本筑後が（あふむが杣）の序に世續曾我道行に馬かたいやよとをとり歌いれしと相應せず一番の瑕いま聞に汗を流す三十年前を後悔する作者の心藝道の熱心さも有べき事なりとあり世繼曾我は宇治加賀太夫が語りし淨るりにて近松門左衛門なり一度淨るりなどに入て

餘情杖　化粧杖　鵜野葭の杖　ころく

とて皆人このみければ木うり爪木をこるもの深山をわけて是を尋ね脊中に負馬につけて江戸町へ賣にくる當世のはやり物よせい道具なればとて若き人達買とりて炎天の道のよきに杖をつき給ふと誠に人の非聞よの掟をもはゞからざる振舞言に絶たり(中略)梨の杖とはほぞなり梨をむくに頭の方よりむきて杖をのこす法なり人にたくへては梨のごとく杖つくとも云り爰に六七年以前といへるは慶長の末または寛永の初頃にやかく夥しくはやりしもほどなくやみたるが其後大かた竹杖なり名古屋山三郎といふ土佐淨るり、互に深きなるとの沖に身は沈むとも君故と心のたけの杖を突云々【竹杖をいひかけたり】元隣が(寶倉)【三】杖の條わかくてつく人は病るか不禮か獵漁の爲にしてみなよからざるわざにこそ云々世を苦竹(ニガ)の杖よ國につくべき桀もまたずつかまくおもへばつくいなゝればつかず云々(一代男)若き人遊所へ行ところ大ざうりとりに笠杖もたせ【大ざうり取は小ざうり取といふがあれば也】(諸艶大鑑)【二】立髮の小者にべんがら島の風呂敷包竹のねぢ杖を持そへ(永代藏)【四】あたら世をつか〳〵と送り二十前後より無益の竹杖置頭巾長抦の傘さしかけさせ世上かまはず潜上男また【五】にも同樣の町人をいふに長柄のさしかけ傘に竹杖のもつたいらしくともありかくもたする杖を餘情杖とも化粧杖とも云ふ天和より元祿頃までの繪に細杖もたする者多くみゆ是なり(色三味線)【二】鵜野葭の細杖けしやうに突て【當世風の若き男なり】鵜野葭は蘆の一種大なるもの也津の國島上郡鵜殿村の名産なり(證類本草)蘇頌が說の深碧色者謂之碧蘆とある物なり篳篥の義嘴に用るはこの蘆なり

○古き小歌にころくといふ有り(糸竹初心集)【中】ころくぶし(ころくついたる竹のつゐころくもとはしやくはちなかはふゐころくするはじよろしゆのふでのぢくころく又【下】ころくうまれはにしのくにころくそだちさてむさしのにすむころく」此小歌古めかしくなりて後にはざれたるさはぎ歌に作りたりと見えて(松の葉)【三】ころくほつくり〳〵ついたるたけのつゐところくもとはしやくはちなか

ソブと訓せり（眞字伊勢物語）くりかへしを拵返と書りおもふにカセヒを使ひ用るをカセギカセグと活用する言葉なるべしカセヒといへる器物は枯木のやうなる形して鹿角に似たれば鹿をカセキともいひしにや唐土の虎頭棚といへる物の名おのづから似たり（著聞集）に猿を木に追のぼせてカセギに射たりといふ處を考ふるに木に射つけたるにはあらず猿は上より矢負ながら子猿を抱きて落くる事をいへり矢の貫きたるさまカセキに似たるなるへし【舟を係く牀桝をカシといひ刑罰具に枷棚テカシクビカシといふもシとセは音通にて其形カセに似たる故の名にやまた後代四民ともに業をつとむるをカセグといふこれもとカセヒをつかふ事より出し詞にや奉公を求むる浪人などをカセ侍又カセ者といふはカジケたるの略なるべし○鹿杖にまとのと鹿角を杖の頭に付たるもの古書に見ゆるは空也の徒なるべし

○冉按るにカセとは其形を云ふヒは物をヒル箕などの如しカセヒは用語を兼ていへる名と聞ゆカセギカセグの語はカセひるさまのせはしく勞するより云なり（散木集）山にあそひあるきけるにしかのひしる聲のしければ「かせかけてひしるを鹿の聲きけはねらふ我身ぞ遠ざかりぬるヒシルは車などのきしると云るシルにて鹿の聲を云按るにカセとは横手の出たる形カセと云物は箕などの如く物をひる物にや形は横手あるべし

○（古事記傳）【廿七】和名抄に鹿は和名加とあり（萬葉）に鹿と一字かける處は何れもカと訓て宜きを今本に皆しかと訓るは非なりしかと云處には牡鹿と書たり（和名抄）牡鹿さをしが牝鹿めかとあり云々然るにカセギと云を古き名と心得て書紀などにても然よめるは中々にひがとなり云々鹿をカセギと云とも正しくはみえたるとなし其はたゞ春日に祭る神の内なる鹿島神の東國より大和に來坐の事を傳へたるにカセギに乘てと云へるのみなれば是もかの父母をかそいろはと云と同し類と知べしと云へり

○（見聞集）【六八】見しは今江戸にて六七年以來高きもいやしきも杖をつく扨また桑の木は養生によし

江戸塗下駄

げたの跡みえて【重供】（胸算用草子）【五】冬の日和の道の爲にざうりの裏に木を付てはくと仕出しけれ共これもつゞきて世にはやらず正德ごろの冠付「たしかなり曲輪を名のる柳下駄【これ駒げたにや】（我衣）に寛永ごろ上方よりいろ〳〵の塗下駄を下す皆女下駄なり同頃和泉町新道にげほうの足駄作りの上手あり江戸塗下駄はげほうより始る然れども芝居役者はきて平人は用ひず（松の葉）の淺黄かたびらといふ淨るり、りんずはなをのあしだにて作りし笛には鹿もよる云々

瓢の下駄

○（續五元集）に狂詩の体か世捨人の月露の音瓢簞の履からびたり（庭路次などかりそめにはく駒下駄に瓢をもて作りしなり世捨人のからびたる体なるべし輕くはあれども瓢は破れやすしさて下駄に瓢簞を印に付たるあり是も輕き意を取れるなるべし山東京傳云くむかし瓢を腰さげの根付にしたるは傳へていふ轉ばざる禁厭なりこれに據て思ふに江戸の名物にころばずといふ下踏あり其下踏に瓢簞の形を印するも原かのまじなひの爲にするとなる故にころばずといふ名を負せけるにやといへりいかゞ有べき轉ばずは下駄に命じ瓢はたゞ輕き意なるべし）

杖

鳩杖

かせづゑ

撞木杖

杖【余情杖　鵜野葮の杖　ころく　輿作】

杖は（曲禮）などにも大夫七十致仕、則必賜之几杖また（後漢禮儀志）にも中秋之月案戸比、民年始七十者、授之以玉杖、長尺端以鳩鳥爲飾、鳩者不噎之鳥也、欲老人不噎とあり老人は勿論又行旅の具にて年わかき者常には持まじきなり（和名抄）行旅具、唐韻云、○横首杖也【（漢語抄）云懸加世都恵一云鹿杖】かゝれば今俗撞木杖といふ物なり（平家物語）に老僧かせづゑのふたまたなるにすがつてとあるなど古畫にて見れば二股のかたを地につきたり横首といふには背けるにやかせといふ名義詳ならず（古語拾遺）に以蘼柄作拃拃之と云とあり（和訓栞）に今も織紝の具にかせきといふ物あり（祝詞式）に金の拃とみえたるをカセヒとよめり（大神宮式）には金銅賀世比と見えたり拃は弄の俗字にて（聖武紀）にはモテア

の轉じたるなれど似よりたるとあり（三才圖會）に中有木者謂之複舃自關而東謂之複履

ひより下駄

〇ひより下駄のがら〳〵鳴る音を閣々然といへり（五雜俎）に閩の輿化泉漳の三郡には履をはきて草履を用ひず婦人多くは纏足せず女履には彩畵あり終日屋中を行て閣々然たりといへり琉球なども これに似て常にあしだをはくと見えたり（中山傳信錄）屋舍のことをいふ處入室必脱三板とあり三板とはあしだなり又婦女のことをいふ處足無所矯揉、或穿半襪、或着三板、これたびはき足駄はくなり

げいし

〇げいし（枕草紙）【一】祭りに出る童女のこの心がまへする處げいしぐつなどの緒すげさせうらをさせなどもてさはぎ云々【こゝの抄物に（和名抄）品々の沓の類あれどもこの名はなしとあるは誤なり下にみゆ】（同卷）定證僧都山科寺別當になりし條高きげいしをさへはきたればゆゝしく高し【此僧たけ高きをいふ】同卷【九】きよげなるわらはべなどのあこめいとあざやかにはあらずなへはみたるげいしのつやゝかなるがかはにつちおほくついたるをはきて云々皮に土のつきたるは緣を皮にて包みたるにやはなをには有べからずげいしは（和名抄）漢語抄に云屣屐久都々計乃阿之太一云屐子とある屐子は音を呼て通用したるにてげいし即是なり【げきしをげいしと云は わらぐつをわらうづと云に同じ】くつゝけのあしだなれば今の草履げたなり（舞の草子）景清にはいたりしけいちをとある所にぬき捨云々是けいちともいへり

足駄

〇（古事談）【二】隆國卿宇治殿に參らるゝに小馬に乘て騎馬ながら出入せられて是は馬には候はず足駄にて候へば可蒙御免といへるとあり馳馬を駄といふ義などによるか足下（アシダ）は本義なるに古くより足駄と書たもじ濁りて稱へしとみゆ後世になりては席駄【雪踏ともいふ】下踏さへできたり是駄踏の字義を取て足下の本義を失へり

駒げた

〇今駒げたと云もの昔は馬げたといへり（懷子俳諧集）【八】とひとはるゝや長路次乃内、庭の雪に行馬

長云奴伎都流の都流は棄(スツル)なり辭のつるにては叶はざる由いへり

緒太 ○緒太は(續武家閑談)毛利家の內室上京の行粧に輿には後に緒太の上履を道なり又細緒は(一代男草子)【七】中ぬきの細緒(色三線)【二】細緒のわら草履など有また(一代男)【二】かずせつたと云ふは(物類稱呼)に江戸にていふかはざうり【竹の皮にて作る】を九州にてうらなしと云東國にてかずざうりといふ今江戸にて千足といふざうりはわら草履の殊に麁相なる也これ員(カズ)ざうりの義なり

爪隱し ○爪がくしと云草履は吉原町の揚屋女郎はきたりとぞ向ばな緒の所反(ソリ)て足の指見えぬやうにしたる故に爪がくしと云(我衣)に此草履享保の始よりあり常の女ははかず女の裏付ざうり寛保よりはやる寛延二年には三枚五枚の裏つけ出來同三年止めらる

裏付ざうり

ひら足駄 ○屐は足下(アシダ)なり(盛衰記)【五】繩緒の足駄(義經記)【四】平あしだ等見ゆ(著聞集)小殿平六といふ者ひらあしだをはきて早道行を有ひらあしだは今江戸にていふ下踏なるへし又同書【十】遊女金高き

足駄 あしだをはきて走り馬のさし繩をふまへたると又【十六】あらがひして高きあしだはきて陣の口を通りすましゝ者のヿなど見ゆあしだにも高下は有べきなり(職人盡歌合)あしだ作りあり其足駄のさまさし歯の臍(ホソ)を表のかたに出せり歯一枚にほぞ二ッ有鼻緒たつべき穴は火筋のやうなる物を燒て通す處を畵けり古質のさま思ひみるべし臍を表に出したる足下(アシダ)は天和貞享ころの草子の畵にもみえたりはな緒とは漢土にもすべて高くさし出たる處を鼻といふ(本草綱目)履屧江南以桐木爲底、用蒲爲鞵、麻穿其鼻

草履げた 江北不識也とは今いふ草履げたなり(和名抄)には鼻緒とみゆ俗に前ばな緒横ばなをといふ横ばなをはあるまじき名なりあしだのほぞ出したるを露印といふ(宋書五行志)舊爲屐者齒皆達偏上、名曰露印太元中忽不徹名曰陰印かしこにもゝとはほぞを通して作りしとみゆ(物類稱呼)にあしだ關西及西國にてぼくり又ぶくりと云ふ中國にてぼくり又ぶくりと云物は江戸にていふ下駄のヿなりぼくりは木履の音

毛皮雪踏

をいふ處つめ袖に後帶もみの丹前をはき物にあてがひとみえたり又ねぢと云は今のばら緒の類にや
○今小兒の雪駄に毛ある皮にて作りたるもの有むかしは大人もはきたりとみえて（甲陽軍鑑）【廿一】に謙信より信長へ贈る書狀の內都邊の毛皮の草履はきてさゞめき渡らるゝ家の侍衆會釋（アシライ）たると輝虎との合戰は少違可申候云々（諸艶大鑑）【二】こいかうじの革踏皮毛雪踏をはき云々又（入子枕）【正德の草子】江戸雪踏京木履と有はその頃より地雪駄を賞しけるなり但し尻に鐵を付るとは（色芝居草子）に女房集て他の女房のうへをいふ處大津せきだとやら生杖（イギ）とやらであの人の尻にはかねが付て來たればそれだけの威勢云々あり世に石割せきだと云ふ是なり
○（惺窩文集）道春に（金剛經）の口義を狂吟二首文のしりに書て贈る「ふみしりて佛の道にゆくなとやこむがうをみな釘づけにして「道ふまんこんがうきやうのくぎづけをしらではしらむあしのふんぬき又（きのふはけふの物語）【下】聚樂にてこんごう太夫勸進能に芝ゐせん三十文づゝ取ければ（こんがうは二そく三文するものを三十とるはせきだ太夫か（丹鉛錄）陸放翁詩、遊山雙不借、取水一軍持、不借は草鞋也、言價錢不須借也（新錄）云陸詩穿林雙不借、楊作遊山誤、見瀛奎律髓山岩類、又履亦名不借又（委巷叢談）杭州にて隱語を用ることを云て諱低物爲鞋、以其足下物也、復諱報爲撤金錢云々（世の人心）【一】奈良草履屋を二足三文に仕舞と古諺を戲文に用たり

げゝ（在前）

○げゝといふはきものはいやしきものなれば下々の音なるべし（全浙兵制）（日本風土記）に僕人を契（ゲ）俄（ゲ）とあるは九州あたりにて草履取をしかいひしを傳へて書るなるべし
○次でに云沓新らしけれ共冠にならずといふは賈誼が（治安策引）古語云履雖鮮不加于首、冠雖敝不以苴履と云是なり【やれたる沓を穿沓と云（万葉）【五】山上臣憶良の長歌その序文不顧妻子輕於脫履云々ありて歌の中に宇既具都遠奴伎都流其等久ウゲグツは穿破れたる沓なりウゲはうがたれの約なり宣

うげぐつ

尻切

切てはむるよし也恐らくは尻切といふ名も是より出たるか凡草履は後の方先破れ易ければ其處の裏に牛皮を切て付たるがもとにて裏をすべて革にて張たるも猶小き革をその處に付たる物と思はる尻切の形即これなり然らば尻切とは尻に革の切を付たるよしの名にや【又おもふに古畫に女の草履の後のきれてほつれたるをはけるが往々見ゆ是初めより然るにあらずきれ易ければかくある也この故に尻切と云後に革を付るも其名を呼なるべし】是に依て今は雪踏の後みな鐵のかな物を付る尻切の革後に出たるは昔の質素なるべし(全浙兵制)の日本風土記に女鞋【十吉利公俄】など譯したり是みな九州の方言を傳へ聞たるなり(人倫訓蒙圖彙)に尻切師裏付といふ藁蘂を以て作り革の縁を付又は絹のおもてをも付るなり女の具なりと有いま京草履びろうどにて縁とりたるその遺製にやむかし男子も尻切をはきしとあれどそれは稀なることにて專ら女のはきものなれば潤飾して今に至れるかまた男もはく裏付これより出つ(雍州府志)雪踏に敷所の皮滑にして轉仆の患あれば重ねて革を其下に敷是をうら付と云といへるは非なり

鼻緒

○雪踏を席駄とも云へるは(浮世物語)うねざしたび席駄をならし云々(東海道名所記)【六】放蕩もの落ぶるゝ事をいひて二ツぐりの席駄をぬぎて尻切草履かたし〳〵はきて人の家の門に立云々二ツぐりとは二本鼻緒にや俳諧にはせちだといへり(紅梅千句)せちだ草履のおほき濱ばた【安靜】琉球に宿かす法はめづらしや(友仙)また同千句の內「庭きよめ置ど亭主のふあしらひ(友仙)せちだにやいとすへし路地口【秀吟】箕山が(大鏡)はき物は草履を本とす雪駄を次にす雪駄の鼻緒には、すり緒、ほそ緒、つぶねぢ、よしはら、二ツねぢ、三ツねぢ、丹前、生かけ、くりかけ、寸、などさま〴〵付來りぬれどわきてつぶねぢよし生がけ付をも用すり緒もよしはら宜しからず草履金剛共に小はな緒の雪駄立を用はなをふとく踵にあまらざるをよきとすといへり是等今知がたし其內丹前とあるは(色芝居草子)に當世風の娘

が高名不珍事なりみれば生足なり此足中は吾若年より戦場に臨む毎に刀の鞘に付たり今日用に立るこて下されけり(歌林雑話集)幽齋公太閤御所の御代にも御内衆の形義迄古法におきて給云々御供のはきもの皆足なかにて長きざうりはきたる者一人もこれなしと有これ室町家の古法なり(安齋隨筆)に條々

尻切

聞書云御供衆馬上にて沓をぬき足半をはき下馬すべし又足半に及ふまじくは惣じて尻切云々其故は尻切は沓の代なり沓を用ざる時は尻切又はわらの下々を用べしわらの下々とはわらの草履なりこんごうはわらざうり也藺にて作りたるをゐこんごうと云また緒太とも裏なしともいふ草履は二枚かさねなるを一枚にする故うらなしといふ尻切は革のざうり也と云圖を出せり其さま常の草履の形して後の所少く四角に表の革を截殘したり寺島氏が(和漢三才圖會)の尻切は前(サキ)を三角に尖らせあとのかたすぼくして是も後(シリ)に小さく出たる處あり(同書)雪踏の條下に今又有全以皮作者甚野卑也といへるは安齋説の尻切のとなり沓の代りとならば皮にて作るかた本式と思はるされども截のこしたらむは尻切とは名に負はぬ心地せらる(爲愚痴物語)【三】沼ノ藤六が事をいふ條に其頃迄はせきだといふものなくしきれとて表はぬきばを以て纖緒をば皮にて縫くゝみたる物なりと云るは又異なり

雪踏

○せつたは初め竹箨にて作りしなり(嘉多言)【四】雪駄をせきだと云はわろしといへど苦しかるまじきかせちだせつたなど云は耳に立てあしゝ是はまた無下に近き頃京の者が作らせてはき侍りしを利休といひし茶湯者が世にひろめてはやり出侍りしとかや竹のかはには自然と般若の文字侍ると云傳へて笠などにはせしかど足にはく物には昔は用ひざりしを末の代には色々と改りて古風をうしなふと是に限らずといへり或はいふ利休初て是を作らしめ雪中露地に入るに草履に濕の通らぬやうに裏に牛皮を付たりといへり此説非也(和名抄)屧草履とありて屧釘、唐韻云釘補履下也、今按、下賤人以牛皮補著屧下云太知波女、宜用此字乎とある物即今の雪踏也古くより有しものと見ゆ又按に太知波女とは牛皮を

こんず
あとつけ
ざうり
むしやわらぢ

足半

隨筆）に尻ぼそに作りたるげゝを圖す其旁に注て云長さ足二たけほご有て細長く廣さ足より狹し惣体わらを二ツに折て曲て平く三ツ組にするはな緒繩なり紙も卷かず甚麁相に作りたる物なり是は京都上加茂の神社へ御裝束奉る時其中にあり神前に奉るなりもごは此体なるを後に巧みを加へて今の草履を作り出したるべし或人云大和河内等のげゝは左の圖ご少異なりごいへり

○又こんずはこんざうごもいふ（物類稱呼）に關西にてあごつけざうり九州にてむしやわらじ又むしやざうりごいふ【小兒のはく物なり】をいへりこんずごは金藏にや藏字約めてよむは藏王權現なごの例なりこれも堅きにたごへたるご金剛ごおなじ是等のはきものは佛家より傳へたるにて漢土の製作にはあらず漢土にこの製なかりしヿ明らかなる證據なり（癸申雜識別集）倭人居所のヿを記しゝ處縘則無跟、如羅漢所着者、或以細蒲爲之云々いへり（續一切經音義）云、革履者西域皮底鞋也ご注せりこれ即（癸申雜識）の縘則無跟ごあるご同しヿ也【（漢書）雋不疑傳、躧履起迎、師古曰、履不着跟曳之而行言其遽也くつのかゝごをつけざるなり】されご漢土に製作なければ實は物異なるべきこごなり天竺にも履の類種々あるべし十六羅漢十二天等の古佛畵をみるに種々のはきものゝこんずに似たる又縘無跟ごいふべきもの往々見えたりこはまたくこゝにいふ足中なり常の草履は泥途をありくに後へはねかへる故に半より切たるやうに作れるを足半ご云ふ海蝦に一種大にして形圓扁なるつのなきものを土佐國にて足中ゑびごも此履にいふ似たる故なりこの履は桴に乘もの多くこれを用また思ふに古書には雜色牛飼なご足半をはきたるあり

○貞順故實集【上】主人に足半をめさせ候事是は小者の役にて候悴者なご仕候事はなき事にて候但小者なご居候はぬ時はそこに居合候悴者なごも取てはかせ申し候云々また軍陣に用意の事（信長記）刀根山合戰の條金松又四郎所々にて無比類働したり云々生足に成て血にまぶれたるを御覽じて【信長】汝

は草を用ひしならむさらば漢土に屝といへるもの〻類歟

わらぢくひ

○（金葉集）に和泉式部が加茂に參りけるにわらうづに足をくはれてかみをまきたりけるをみて神主忠頼が「千早ふるかみをはあしにまくものか「和泉式部これをぞしもの社とはいふと有わらぢに足くはる〻といふは俗言にあらずこ〻にわらうづとあるはざうりをいふなり【（和名抄）屩は草屝和良久豆とあり】ざうりとは廣くいふ名と聞ゆじやうといふは轉訛したるなり

○古畵を見るに耳一ッなる草鞋みゆ今も陸奥福嶋邊にては鞋に耳一ッなり古樣なるべし建長寺別源圓旨か（東歸集）【元享二年ころの序あり其中に】喜聞侍者歸詩に同人昨自遠方來、脚着江南三耳鞋、記得當年爲客處、携笻閑歩霅溪涯と云句あり【霅溪は水名吳興にあり此詩は唐土にて作れるなり彼處も江南には此鞋あり】

こんがう

○こんがうは金剛にてもと佛氏の堅固なるとに喩へたる語なりこんがう略きてこんごとも云り（物類稱呼）に江戸にてこんがう又のりものざうり小注に裏おもて共に藺の莚をもつて織たるもの也畿内西國にてこんごうといふ乘物ざうりの名はなしといへりゐにて織たるのみにあらず（可笑記）【四】こんがうと申すはき物はわらにて作るものなれば云々いへり此はき物の起りは世にむかし比叡山の安然僧

のりもの草履

正貧窮にして書を求る力なし依て金剛を手に持て草履を作りしよりこんがう草履と世にいひならはしたる也（元亨釋書）安然が傳をみるに悉曇顯密の博士なる由のみ有て草履を作りたる事はみえず但しこんがうこんずみな西域の製に倣ひたる物なれば佛家より出たるは論なし安然の說は非なり又げ〻といふも同物なり（平家物語）に馬には乘らで芥下をはきとあり（甘露寺職人盡歌合）ざうりつくりが詞にじやうり〳〵いたこんごうせめと有て其歌に「とがむべき人もあらしなゐげ〻はき雲ゐの月をのほりて

げ〻

やみん」とよめりゐげ〻は藺こんごう也いたこんごうはその圖を見るに上下角ありて板の如し（安齋

嬉遊笑覧卷二中

○器用　履【わらぐつ　草鞋　草履くひ　こんがう　こんず　足半　雪踏　尻切　鼻緒　毛皮草履
緒太　爪隱し　裏付　屐　あしだ　平あしだ　はなを　けいし　馬げた　瓢の下駄】

履　草履　わらぐつ　爪がけ　草鞋　鼻高　挿鞋　絲鞋

（事物紀原）に屩草履也、詩、糾々葛屨是也、唐韻曰、屝草屩、黃帝臣於則所造、世本亦曰於則作屝屩（和漢三才圖會）に三才圖會を引て云草履周謂之屨、夏謂之屝とあるはいかに誤りたるにか三才圖會には此文なし（三才圖會）曰、屝草履也云々（喪服傳）曰跪屨者粗蒯之屝也是屝用草爲之、注云、草履者屝屩通言耳、今云、屝屩相形以曉人也とて屝と屩との形狀を圖せり（和名抄）には屩を擧ず屩（史記注）云、屩草履也、和名和良久豆と出たりかの王思義が三才圖會なる畵をみるに屝はこゝのわらぢ也屩は今爪がけ【江戸にて雪中に用わらにて作れり】といふものに似たり　わらぢはもとわらぐつなれば履の形したる物なるべけれど漢土にも履屩通はして草履といへれば屝をわらぢといはむと論なし又釋名鞋解也、著時縮其上如履然解其上則舒解也といへるはかの三才圖會に圖せる屩のとをいふたに似たりわらぐつをなだらかに呼てわらうづといひ又轉りてわらんぢといふ（嘉多言）【四】草鞋とは木にて作り上を金襴などにて張たるやうの物なり寺院の內陳又は緣などはき侍るもの歟鼻高は桐木にて作り上を黑漆に塗たる物歟但又鞠沓の如くにて紐のなきやうの物歟革にても作ると云り鼻高は公家がた又出家にも用ひ侍る草鞋は天子着之給ひて臣下は不用但法中には用ゆとかやその外烏皮沓淺沓深沓などゝてさま〳〵侍る由なれど不知（新野問答）に草鞋は草を以て張申候（西宮記）曰挿鞋、主上及僧家貴女之所用と挿鞋に草字を用候は例の音をかりたるに候とあり思ふに絲鞋は糸を編て作る舞人の用るもの也挿鞋もとゝ

桑染のたび

ぞめのもめんたびはかれし云々（色三線二）大盡をいふ踏捨の桑ぞめ足袋に細緒のわら草履など見ゆ

絹足袋

○絹たびはいと近きものなるべし（后日男三）女の衣裳をいふ薄色の絹足袋三筋緒の雪駄音もせすありきて云々

さらさのたび

○（我衣）に寶永頃迄小兒の花たびなし正德ごろよりさらさもめんのたびを賣また享保頃小兒の沓はやる表黑もめん底は薄き馬革云々

皮たび

○（落穗集）に酉年大火已前は貴賤共にみな皮たびなり其後諸人皮羽織皮頭巾の支度專一とする故革たび高直になり末々の者男女ともに自然に木綿たびを用皮たびの時は切革屋にて調ければ看板は出さす木綿たび用てより足袋店できたりといへれど前に擧たる事どもを思へばさもあらぬにや但し江戸には下り足袋店出來しは此說の如き歟

ふとざし 略ざし

一統にはやりしなりと云へるは享保の頃なるべし】箕山が(大鑑)皮のふすべ色は品を嫌はず糸巻もよし木綿たびはふとさしばかりをきらふ畧ざしも又好ましからず淺黄の色こきをきらふ皮木綿ともに筒淺きを川深きは初心めきたりといへるは寛文中のはやり風なり其後貞享頃の繪を見るに筒長き足袋多し

とろめん足袋

うねざしはさらし木綿を絹糸にてさしたる也(人倫訓蒙圖彙)に木綿たびの地別にこれを織て河内津の國等より出す是を買取てそれ〳〵にさしに出す女のわざとしてこれをさす也幷にとろめん足袋綾小路通り御幸町より西の方にあり(佐夜中山集)【塵哉】立波のうねさしなれや鷺の沓また(二代男六)遊所の處にそれ迄はめせきあみがさうねたびにもみのくけ紐今のすあしに見合せをかしきともあつて云々(一代女)に歌比丘尼の出立をいふ處うねたびはかぬといふとなし云々(類柑子)小兒のとをいふにそれほどの小さうり糸わらぢ綾にさしたる足袋ともあり

うんさいたび

○うんさいたび(一代男七)浮世くるひの者をいふ處うんさい織のふくろたび中ぬきのほそをはきたまた【二】香具賣の若衆をいふにたかさきたび筒短にかすせつたをはき云々【是は江戸の事をいふ處なりたかさきは上州にや其頃筒短はめづらしきか又この製は東國より出るか】

すきやたび

○木綿たびをすきやたびといひしは茶人の好みたる故にや或説に長岡三齋に母公の作りて與へられしより始るといへり(望一后千句)朝げよりぬふ足袋は何ぞく色深き紫淺黄白木綿ある殿の(言行錄)【この殿寛文十年七十歳にて逝去】某といふ御小姓竪繻子の袴くゝりもゝたちにて羅紗の雨羽織數奇屋足袋高木履下人に長柄の傘さゝせ通りける云々原武が(雜記)【原武太夫といふ人の記なり】昔し遊所へ

黄色のたび

客の体をいふ茶宇の袴すきや足袋又云また坊主衆はみな百庵を學び着類等脇差のさしやう黄色なるたび今とても殘り百庵の祖とすといへり【百庵は初め寺町榮三といひし者なり住居あまたかふるにより て百庵と號す】黄色なる足袋むかしもなきに非ず(一代男五)さる大臣のしのびて三人同じ出立にて桑

頃まではやりし也（色芝居双紙）昔の娘をいふに紫たびに尻切をはき云々（我衣）に正徳ころ迄革たび兩種あり小人皮うすく肌こまかにてやはらか也唐皮なりしやむ皮も渡り革なり小人より厚くして柔かなり下品なり享保ころより渡り皮一切なしみな和革故しやむの如く早くけば立てあしし

木綿たび

○木綿たび（貞徳翁獨吟百韵）鹿もおよばし妻のかはめき漸寒き頃はとらする木綿たび意は木綿たびを譽て鹿も及ばしと含めり（色音論）【下】ながさきたびにねりのひもだてにあかぬと結びとめ此長崎たび木綿たびなり（日本鹿子）肥前國名物の内長崎木綿うねざし足袋とあり高麗ざしといへるも是にや（藥師通夜物語）高麗ざじの木綿たびおとかひ頭巾で顏かくし云々（西山宗因千句）まだ少年にかして過たりはなをふんで同く惜む木綿たび草りとりこひ櫻ちる雨○又箔繪あり意林庵が（清水物語）に出家の武道みめよきびくに木綿たびの箔繪とかやうの事は世におほかんめるといへるはふくりの銀箔といふ意に喩へたるやうなれども皆あることをいへる内なれば是も有し物なるべし（目覺草）には染わけたびに紫紐といふも見えたり

長崎たび

高麗ざし

箔繪のたび

染わけたび

うれざし

○うねざしもはやりし物なり了意が（浮世物語一）當世風をいふ處うねざしの踏皮にぼたんを入といへるは今のこはぜかけのやうにはあらず（東海道名所記）島原衣紋の馬場この處にさしかゝりては小袖の衣裏裾のみたれをつくろひうねたびの筒のたゞくれをなほし云々其頃のたび筒長きを知べし【（俳諧御傘）に踏皮などの緒にボタンといふ物あり是は花の姿を似せたるものなり繪にある花に準して植物にはならねども云々いへるは大なる誤なりボタンは蠻語ビユタンの轉じたる由合羽の條下にいへるを見べし

コハゼがけのたび

○今のコハゼガケはボタンより出しなり（八水隨筆）にくつたびのたびをコハゼかけにすることは予が父大坂に在りし時ふと拵へさせてより其たびやの作のやうにいひなし夥しく仕こみ江戸へ廻したるより

無紋の皮

ふすべ皮

熊の皮のもみたび

紫足袋

袋を名付て今に用ゆもとは襪なり襪にては常の草履ははかれずむかふにはな緒[illegible]二ッ兩方に付たる草履をはくなり足袋とは餘程製かはるなりといへりたび武家にて作りかへたりとは妄説なり（宗五大双紙）に足袋の事殿中へは御免候はてははき候はす又入道同朋は御免のさたなく共はき候無紋の皮ふすへ皮をば不可用軍陣の時はふすべ皮たるへし（貞順故實集）貴人御前へは革單皮なごめし候事如何にて候もとより本々の時はたびのさたに不及候とあり野服なる故なり（高舘草子）にくまの皮のもみたびしろがねにてへりかねわたしあくち高にふんごうたり是はつらぬきといふ沓なりあくち（アクチ）は開口なりふかくふみ込をいふ（和名抄）に深頭履（釋名）云韋履深頭曰報言其深襲覆足也その小注に今案此間云深履其頭短者謂之半韈とあれば靴（クロノクツ）の長きを深履といふとみえたり【東雅云たびとは當時野人の説（唐令）によるにあらす古畫に旅人鹿皮の半靴を付しを見るたびとは旅なり行旅の具なる故にたびぐつといひしと見えたり】（源平盛衰記）宇治合戰條熊皮のつらぬき安齋云つらぬきは鎧きたる時はく毛皮のくつなり毛沓とは別也つらぬきはたてあげなきもの也といへり（信貴山緣起）尼か乘馬する處に見えたり行旅に用る物としらる昔のたびはみな打紐にや（室町日記十）衣類注文の內紫たび紐はくれなゐ打ひもなり慶長ころの畵を見るに打紐にて色は赤靑色々ありたびの色も種々あれども紫たびとにはやりたるとあり（鷹筑波集二）すぬ萩はむらさきたびかはなの紐【一正】（尤の草紙）紫の物云々童一人有けるが紫鹿子の小袖をてうす紫のくゝし帶むらさきたびをはきにけり【くゝしは纐纈なり】（春臺獨語）に倩百年このかたの風俗を思ひくらぶるによその事はおきて江戶の人の風俗こそ殊に昔にかはりたれわがしたしき者の中に慶長元和の頃生れたるもの男にも女にもありて寬永の頃を年のさかりにて經たるといふ男は冬革のうかけ革の袴を美服としむらききを【紫といふ上に女はといふ字脫たるか】の革の襪子をはくをよきけはひとせりといふその襪子は我幼き時迄も殘りてありし也（世事談）に紫たびは寬文延寶の

し丁子ばかりぞめてたき誰袖一ッはほしさうでわろし二ッもふり袖にはよしとめ袖には似合ず夏の物なり（女重寶記五）匂袋【誰袋】匂玉【香包】と出たり（俳諧懷子）あた名高師の濱寺の兒波は袖匂ひの玉は頸にかけ【松安】又わが思ひ君が姿にかけ置て小袖匂ひの玉もきやしやなり【重賴】又床近み目にかけ物を心にて匂袋は蚊屋のすみ〳〵【重賴】匂ひの玉を蚊帳に掛るとは（諸艶大鑑二）阿武丸といふ船に八疊釣の紋紗の蚊屋乳緣ひごんす四角のから房匂ひの玉靡かせ云々（世の人心一）紅の大紐付てぶさに匂の玉を結び下げ云々是も蚊帳をいへりさて誰袖は延寶天和のころより衣服ひな形に多くあり二ッ連ねたる事つねの匂袋と同し三角なるは浮世袋といへり【巾着の條に出たり】

指の輪

○指の輪　唐山より渡りて近年こゝにて多くもてはやす彼品は白銅などにて麁末なれば近頃は江戸にては銀にて作らせ用ゆ何の用をなすとを知らず明人の（三餘贅筆）に今世俗用金銀爲ㇾ環ニ置於婦人指間一謂ㇾ之戒指一按詩注古者后妃群妾以ㇾ禮進ニ御於君一女史書ニ其日月一授ㇾ之以ㇾ環以進ニ退之一生子日辰以ニ金環一退ㇾ之當ㇾ御者以ニ銀環一進ㇾ之著ニ於左手一既御者着ニ於右手一事無ニ大小一記以成ㇾ法則世俗之名ニ戒指一者有ニ自來一矣といへり

足袋
襪

足袋【襪、熊皮もみたび、紫たび、木綿たび、箔繪染分、高麗ざし、長崎、うねざし、うんさいころめん、すきや、桑ぞめ、絹たび】

（和名抄）に單皮履唐令云爲諸履幷烏色爲重皮底履單皮底その小注に今按野人以鹿皮爲半靴名曰多鼻宜用此單皮二字乎（下學集）には踏皮とかけり又林逸（節用集）には踏皮同韈と出たり韈をたびとしたるは是などや始ならん（中山傳信錄）に婦女のとをいひて足無所嬌操或穿半襪とかけるは足袋の事なり（秋齋閑談）に襪の事束帶の時ははき衣冠の時ははかすこれは應仁亂の時よりの例にか今の足袋元來襪なり今堂上に用る襪の製大指のわりめなしそれにては用方あしき故武家にて大指のわりめをこしらへ足

ぞ其頃はやゝ華美になれるといへ共今の世に有べきとは見えず誠にとうとき風俗にや

懸香

○懸香は佛家より出つ（釋氏要覽）に四分云比丘房內具佛許用香泥々之猶具佛言應四角懸香とあり宋人の（談叢）に沈詹事といふ者妾を置て數年の後妾を里へかへすに曾て汚すとなかりしかは女猶處子のやうにありしとて時人沈詹事が行ひを賞て詩を贈るものあり其句に去日正宜供夜直歸來渾未識春愁禪人尙有香囊愧道士猶懷炭婦羞これ禪僧が香囊を座傍にかくるをいふなり（類聚雜要）に母屋調度の內香囊一流犀角二枚などあり香囊は丸く銀にて作り紐を付鈎(カギ)にてつる物なり懸角は犀角に彫物して金ものを付紐にてつる邪を避る呪なるべし然るを雜要に角造沈又次は以榎造て燒金して燒黑て調之云々あるは只其儀はかりにて詮もなきと也東山殿御柱飾に訶梨勒あり其形を訶梨勒の樣に造りたれば名となるなるべし是も香を入る物歟是らのたぐひは藥玉より作り出たる物ならん身に香囊を懸るとは古へ薰衣香を專ら用ひたれはかけ香には及ばさるか後世匂ひの玉などいふ物ありてかけ香とす寂照堂（谷響集）曰

匂ひ玉

日本俗香丸名匂玉世有名阿牟倍良薰丸之方是何名也荅是蠻語也羅山（多識篇）中載此事云土佐海上漁人採如蠟而凝者曰是鯨鯢屎也國守因獻于大樹今南蠻薰丸號阿牟部良者麝香鯨屎和合成之貴胡甚珍之云これ（本草）に載る處の龍涎なり其他諸書に散見す（類書纂要）に龍涎無香其氣近于臊能發衆香故人用之以和香とあり【（雍州府志）に香囊或は匂袋と云香の方に花の世界兵部卿等の名あり絹袋に盛し囊の左右に緒を付頭にかけて袋を懷にす故に是をかけ香と稱す今は其儀なく徒に懷におさむるを匂袋といふ】

匂袋　誰か袖

○又誰か袖とて今は剔牙杖を指す物ありもと是懸香の袋なり（卜養狂歌集）誰袖花の露匂袋を【梅の木はみめのきやらん花の露だが袖風の匂ひふくろう（同集）【犬の誰袖をくはへける處の繪に】かをりぬる匂ひもふかしたが袖とひけども君は犬のつらにく（松の落葉）【丹前歌梅揃石切といふに】ふりふつたふり袖のたが袖のかの匂ひ梅云々（壺のいしぶみ四）かけ香しつこきはわきがに似てにくし淺きがよ

の美談とせりと云り】これも正德四年甲巳五月十三日銀座年寄二人流罪被仰渡中村內藏助細谷太郎兵衛追放未明より與力同心中銀座町へ參り家財に封付壹岐守殿御掛りと其時の日記にあり內藏助後に御赦免あり剃髮して風竹と號す其蜩と徘徊の友たりと歟

僧位にてなる衣裳

○寛永のころ僧徒たてなる衣裳の事（竹齋物語）上人の出たゝれけるしやうぞくははなやかにこそ見えにけれ肌には緋さやの袷をめし上は鹿子のきはばくに紫小袖をめすまゝに御衣は緋ちりめん云々また目覺艸【寛永二年】此ころうき世渡りの若法師受戒のさたはさもあらでうら紫の小袖きてこつまうしろへ引まはし文金紗の半帶にしやきぬもじきぬ身にまとひ染わけ足袋に紫紐紅うらの丸頭巾黃纐纈のきんちやくに蒔繪梨子地の印籠さげからのやまとの緒とめして身なり足ふみふりかゝり人にかはれるをかしけれ【竹齋もこれも其風をにくみて書るなり】

○松崎堯臣が（窓のすさみ）に予幼かりし頃までは皆人夏は生平のかたひらに漆紋などつけ高宮の袴につもじ賣きたるを漆紋をつけ肩衣とし冬は下着といふ物別にきる者はめづらしく夏は綿ぬき小袖を袷にし冬は又わた入などにして着ぬるをまのあたり見たりしが元祿の半ばよりしきりに衣服美麗になりしを覺えし夫も今みれは遺風の有けるぞかし同書に平松中納言芭蕉布を得られて中院家へ分ち贈られける通茂卿これを着よしとて常に用ひられしか或時時量卿のもとへ是を乞て「賜はりし心はせをは被りけり今より後は何をかはきん其返事に一端贈り遣すとて「いはれさる心はせをは見せ置て破るゝたびの音信そうき前橋少將忠清朝臣執政の時殿中にて春の末にや有けん俄に同列のかた〳〵休息所に下りて下着小袖を脫て出席ありしに汗ばみれけれは其下着を欄干にかけて乾しけるに朝臣の白小袖のうら脊のあたりつぎ立たるをひろげ置き見苦かりければ其事を司る老女に殿中出仕の下着につぎたるうらは付へからずと有しに老女いふ時移りて左の如く仰ありとも我等が一生はなり申さす候と荅へしと

縫付させける底いたりに難波屋まけしと延寶の末の世語りなりし天和の初ころ此石川追放せられけるといへり【延寶九年十月改元ありて天和となる件のとはいまだ改元あらぬ內なり延寶九年酉五月廿七日石川屋家屋敷沒收せらる其時の書付に私共三人常々奢山の宿川端の屋敷分限に不相應作事仕致人集法外成儀不屆ニ付當月廿三日籠舍被仰付曲事にも可被仰付處御赦免被成家屋敷家財欠所被遊云々御追放被仰付難有奉存候若御構之地へ立廻り候はゞ拙者儀は不及申加判之者共迄如何樣ニ曲事ニも可被仰付候爲後日仍如件同廿九日喜多村役所にても申渡これあり其一件之者共一同罷出たり】（猿源氏芝居）といふ草子にも石川が妻のこと見えたり

○其蜩が（翁草）享保初め頃京師兩替町中村內藏介其外三人奢超過に仍て御咎に逢へりし事をいふ條ある時內藏介畵師光琳に謂て云來ル幾月東山に於て諸家の妻室參會の事あり定て綺羅びやかなる出會なるべし右に付て何ぞよき物ずき有らむ其趣向奈何と問光琳暫らく考へて爾々と敎ゆ內藏介諾してこれに隨ふ當日に至り家々の妻室花を粧ひ端の寮重阿彌が許に來り乘物を手ぐりにして奧へ舁入あまたの侍女前後を取まき靜に乘物を出たるさま天人影向の如し內藏介妻女のなど遲きと各まち煩ふ處に少し程あつて中村の乘物あないして操入みな〳〵あはやと其出立をみれば打かけ帶付ともに黑羽二重の無地兩面に下には雪の如くなる無垢を幾つも重ね着しするりと乘物を出て靜に座につけは人々案の外にぞ有けるさて其外の妻室われも〳〵と間もなく納戶へ立て前にまされる結搆なる衣裳を着替ること度々なり內藏介妻女も其たび〳〵着替るに幾度も同じやうなる黑羽二重白無垢なり一通りに見る時は何とやらん座中を非に見たるやうなれとも羽二重は衣服の絕品晴の會ゆゑ是を多く用意せしは蜀錦に增るよき物すきなり其外の侍女ら隨分美はしく飾りしかど侍女相應の服なり內藏介かたの侍女は外の內室かたの出立にまさりて結搆なり是光琳が物ずきにて中村の出立拔群にて一座けおされたりと其頃世上

りつきよ錢もちくびは名のみなりけり懐中重ければ衣の領前にひけて首すくむを云ふ今いふ錢領は本義にあらず

衣服の華美を競ふに

しのぶの細染

○寛文三年癸卯十月女院御所姫宮方の御服をはしめ江戸の女中かた小袖に至る迄其料物の限りを定めらるゝ事あり然れども何事も後ほど華美になる中に今よりは又百五六十年の昔奢侈なりし事も亦すくなからず（榮花咄）當世の事をいひて衣裳は目にたゝずして古代よりは格別にむつかし惣吉が仕出しのよしなる染さへ世にめつらしく奢りたるやうに思はれしに此ほど京に工み出してしのぶの細染といふは片面を六十五匁に出來す油屋きぬの本もろ半疋六十匁の地を六十五匁にて染ること中々身体うすき人のなるまじき小袖なりせめて其もやうが人もそれ程に見て晴着にもなればなり只紺屋が氣を盡してむづかしきものと粋なか間に知る計ぞかし（一代女）遊女がとをいふに小袖ゆるし色にして惣鹿子此辻をひとつ〳〵紙そくにて焦しぬき紅に染し中綿穴より見えすき云々あり是等は今神祭りに見る衣裳の如し又（同草子）當の女の服をいふにこの程の仕出しに縫切のさくら鹿子脇よりは染着ものゝ様に見せて中々百色の美糸を盡しけるこの一表金子五兩づゝにして出來ぬ萬のこと此如く人しらぬ物入次第に至りせんさくの世なりけり

○又遊女が下帶に鉛を付たること（元祿曾我物語三）扇風呂の條にばつとほのめかす空たき曙もやうの地白に茶りんずのしごき帶緋ちりめんの內衣裾（ユグ）に鉛のしづをかけすり足にあゆみ云々見ゆあそび等は格別の事なればいふに不及（武野燭談）に江戸の石川六兵衛といふ者京師の難波屋十右衛門といひし者とひとしき奢りものにて京に登りける時難波屋が女房きくとひとしく緋綸子に洛中の圖を縫はせける石川が女房出立て東山筋徘徊せし日黑羽二重に立木の南天の染小袖をぞ着たりける見合する迄もなく京の方こそ結搆なれ何の衣裳ぐらべぞと例の京童いひそしる能く見れば南天の實は珊瑚珠を碎きひしと

及候事宗吾記にみえたり男子まて如此なれは婦人は勿論の事に候歟是又ふるきを考へ古を學ふとはな
けれども自然とかくの如し治世の弊は奢にありと云は是等の事ならむ云々いへり按に形木は今の板し
めなどにはあらで摺形木にて形を摺ると板木を摺るが如くなるべし婦人小袖の裏もやう江戸にはやり

りん 半領

しは安永天明ごろなり又りんといひしものは（下學集）に輪日本俗謂二衣領裏一曰レ輪也一林逸が（節用集）
に輪【衣之一】とあり後にはそぎえりといひ今は半領といふ寛永以前の書には小袖にもはおりにもこ
れをかけたるが多し但しりんは襟のみに限るべからず覆輪の義にて袖へり裾のふきなど皆輪なり（平
家物語）に重盛公のさしぬきのりんに蛇のまとひし事をいへり（筵響錄）に指貫の裏の表へすこしなめ
りたる處をいふ歟と表の袴の輪といふは赤き裏のすこしすそへおめりたる處を輪といひたる事（寒驢
斷餘）にみえたり又小袖のりんといふは小袖のうちのすそにさまざまのきぬにて裾縫といふ物を風流
にしたるを輪といふと宗吾が記に出たり（尤双紙）の短きもの裙のまくつぎ袖ふくりん（佐夜中山集）ふ

袖口

くりんが尾花か袖に萩の花（俊暉）袖ふくりんは今いふ袖口なり人是を袖へりともいへり袖口にかくる
物をたゞ袖口といふべきにあらず

そぎえり

○そぎえりは（一代女一）踊子のことをいふ處紅がへしの下着に箔形の白小袖を重ね黑きそぎえりをかけ
て云々【同五】髪は角ぐり早川織にそぎえりを掛て云々自笑か（野白内證鑑）の序に親父も若い昔しは
六條の遊女町に絹の半領かけてさめ鞘に金鍔にせ金の扇をかざし花やられし云々（誰身の上）【四卷明
曆二年】今の世にも都がたにはひが〳〵敷法度はゆめにもなしされども遠國には其國の主の御ふれと
や或はきる物に半えりさす事を法度にし云々

錢くび

○次てに云今きぬ着るに領のをれたるを錢くびと云は錢持くびなり（犬子集）貧乏人は咲はれにけり衣
紋ばかり錢持くびにひきなほし【宗二】（後撰夷曲集）貧けなる者を見て「ひたるさに寒さにすくむえ

の女または古代めきたる者の外は袋を持するとすたれてせざりしやうなりされど元祿以後までもなきにはあらず絶たるはいと近きなるべし今はたゞ武家の小僕麻布の袋を持のみなり又今組香をきゝて皆きゝはづしたるを袋をかつぐといふも最後にたつをいふなり又古へも袋のみにあらず包みもあり（紫式部日記）にふくろつゝみとあり（源氏物語）【總角】使の祿をいふ處御つかひくるしげに思ひたれば

衣包

つゝませて供なる人になむおくらせ給ふ抄につゝませては衣包みのとなり今世の袋はそれを似せたるものなりとあり此説非なり袋はもとよりあり（下學集）に平包とある是そのかみの包みなり（雅亮裝束

風呂敷

抄）にひらづゝみのうはさしともあれば包みにもうはざしあるにや（福富双紙）に衣包みあり今世の風呂敷の如し楊万里が曬衣詩に亭午曬衣晡褶衣柳箱布襆自携歸この襆こゝの風呂敷なり【幣(ヌサ)袋のとは行遊の條にいへり】

すり袋

○（万葉十八）に針袋コレハタハリヌ須理袋今は得テシカ翁サビセム此スリ袋は色を摺たるにて何の袋とも知がたし或書に採桑老の舞の圖に老翁の面を被り狩衣の如きものを服し腰にさすがと云ふ物の如きに袋を結付たる火打袋と云ふ物の由伶人の家に云ひ傳へたりと云り

小袖裏模様

○小袖裏摸様の事（筵響錄）【高橋圖南明和四年撰】或人の問に當時婦人小袖の裏に様々もやうを付ると昔も有之候様先年承り候故又御尋申候答云裝束の裏にもやうを付るを裏形木と申候て古の雜色隨人舍人牛飼等着用事あり（永昌記）嘉永二年四月十七日賀茂祭雜色薄靑裏形木袴歟冬打とありまた（人車

形木

記）保元三年二月十六日小舍人童牛飼等裝束裏形木と云々（吉記）安元二四二十七隨身繭木裏形木上下云々此餘（玉海）（山槐記）等に出る是等は一日晴の風流にて格別の事歟當時關東はいかゝ不存候へ共京師難波の富家の婦人また遊君ていの者迄裏摸様と稱し泥繪をかき縫を施し東坡流の蘭竹の墨繪など風流美盡せりむかし室町殿の時節男子の小袖の袖にりんと稱して織物なとを付て美を盡しかたらひ迄に

うちがひ

うはさしの袋

師人の請を受て行處に法服をしてゆかは遠くて歩行の見苦かりければ懸衣にて平笠など打着て法服をは袋に入て持せて其請したる所の近からん小家をかりて法服をして寄むと思ひて行にけり又春畫に(袋法師)といふあり僧俗男女ともにこれを用ると知べし食物などは餌袋に入てもたると（今昔物語蜻蛉日記）などにもみえたりそれを(古事記傳)に餌袋の名は鷹より出つらめどそれに種々の物入るゝは古の旅に袋をもたるとの殘れるなるべしといへるは非なりさては此日記かける頃には旅に袋もたるとやみたりしやうなりいと近き頃までも袋を用ひたると古畫とも見ても知べし(夏山雜談)に打飼といふものは狩の時犬の食物を入て犬牽の腰につくる袋なり飢たる犬に手して食物を與ふれは手に食ひつくものなり是を地に打つくれば食物出るやうにしたるものなり此故に打飼といふとあるはわろし鷹にも犬にもあれ打飼ふ餌を入るゝによりて名つく地にうつとゝするは非なりまた古は調度なども多く袋に入たり(源氏物語)【東屋】屏風の袋にいれこめたる所によせかけ云々あり今思へは屏風なども袋に入るゝは似あはしからぬやうなり又琵琶琴等はもとより袋にいるゝを三絃は包めるものを見ず(色道大鏡)に其まゝ持ありかんは野体なり袋に入べきよしをいへり(三人法師双紙)にあたりもかゞやく程の上らうのいきやうくんじてさゝめき渡りたり下女二人つれてひとりをは先にたて一人をば跡にうはざしのつゝみもたせてとほり給ひし云云うはさしは袋なり(書札雜々聞書)云うはさしの袋へゐんさを入候て御持候事これは御小袖を下にもませじといふ故實なり女房衆は無之事也(豹文記)云小御衣には大略織ものを用候おもてむきへ出候はぬ故平人も此分にて候上ざしの袋も同前なり平人も常に用申候【小御衣は小寐卷也】(鷹筑波集)にたび人ごのを見れば大こく兩替の跡にさがれる袋もち【長次】かの大こくの袋持といふ諺をとりしのみにあらず常にあるさまをいふなり(一代女)【四卷貞享三年】或時下女に小袋もたせて行云々又女の奉公人藪入の處年がまへなる中間につぎ〳〵の袋をもたせり其頃は武家

し友禪が畫を見しに天和貞享のさまなり落款に鳳城東友禪齋筆とあり（風俗文選）に許六が徘徊文章のことをいひて縱横自在を盡したりこもひとつの趣意をたつる處なくては童蒙の丸い物づくしに落て果は松坂を仕舞となせる甚無下の事なるべしと有は丸づくしの歌ひものなり延寶巳年より伊勢踊はやり天和の頃さかりにて行はれたる踊歌の中に丸盡しあり其歌（紫の一本）に出たり衣服の丸盡しはやりしによりて此歌もできしなりまた正德寛保の頃光琳風の畫やうはやれり（娘容儀草子）に常の仕出しに替り光琳もやうに手をこめなどいへり

袋持

○人外に出るに供の從者に袋もたするを今は癈れたるふりなれどこはいともふるき事にて近く迄も其遺風は殘りたりき（古事記）に大國主神の御兄弟八十神ともに稻羽國に避給ふ條は於大穴牟遲神負俗爲從者率往と見え又（日本書紀）雄略卷に根使主を罪なひ給ひて其子孫を茅渟縣主に賜ひて負嚢とし給ふとあり（古事記傳）或人の云事功の人におくるゝ者を世俗に袋持といふも此故事によれり（和名抄）行旅の具に載これは古へは旅につかふ物を袋に入て從者に齎せ行と見えたり（西宮記）踏歌裝束條に又以衛府官人爲持袋者裝束如常また（禁秘御抄）得選の條に行幸之時持大袋内侍同車是不可然事第一也とありといへり（催馬樂）に庭に生るからなづなはよき名也ハレ宮人のさぐるふくろをおのれかけたり眞淵翁云からなづなはたゝの薺なりさぐる袋はなづなの子は三角にて袋の如くなれば宮人の腰にさぐる袋をおのれ莖にかけたりといふならむといへり今按にからなづなは葶藶なるべし薺に似て其實辛ければなりこれは子の形圓かなり（榮花物語廿四）いみしうおほきなるふくろつゝみなどもてさはぎとりいれさまよふ云々（紫式部日記）人のつぼねつぼねにはおほきやかなるふくろづゝみともゝてちかひ云々（古事談一）近衛院御時に殿上遊戯のあまり爲通朝臣等行通朝臣を袋の有けるに入て庭の山に置たる物語ありこれらみな衣嚢を入て持はこぶ袋なりふくろつゝみは袋と包みなり【下に云】（今昔物語）に法

して其紋不定といへり此說誤れり按に蠻繪もと舞樂裝束の紋なり蠻國より唐へ女樂を貢せし事多ければそれをこゝにも傳へてもてはやせし其服の綾なれば蠻繪といふその紋圓き故に盤繪の說起りしなり蠻國のもやうなるとは漢ざまにあらぬにても明らかなり是圓き繪の古きもの也また思ふに猿樂の狂言の袴に紋盡しあり是を狂言ばかまといふ是丸盡しとも云ふべきものなり(室町殿日記十三)衣服注文の内に丸づくしやぶれかうし摸樣のと見えたり寛永頃よりはやりしものにはあらず【或人慶安より寛文の頃行はれたりといへるは誤れり】此もやう後また行はれて天和貞享の頃の衣服のひな形にあり凡世に流行するものしばらく有てはまた昔にかへる物も常に多かり「秋の野の錦や露の丸づくし此句慶安元年刻したる(山の井)に出たれども寛永中の發句にて既に(鷹筑波集)に出て【北川平左衛門吉次が句なり】又輪ちがひの紋多し是も同じ類なり(去來抄)細きめに花みる人の顏はれて菜種いろなる袖のわちがひ自注に前句古代めかしき人のありさまなりとあり其外發句どもにある皆ふるき体をいへり又(胸算用)に今は世間に皆紋所を葉つきの牡丹と四ツ銀杏の丸女中がたのはやりもの云々あり【劇場にてあげまき助六の衣裳の紋これなり】今かど紋といふはこの名殘なり花の丸盡しの摸樣を友禪染といふ(松落葉)古今ぶしにいなり參の振袖ゆかしゆふせんもやうでそんれはへ又其頃の草子どもに友禪がうき世繪の扇のとあまたみゆ高平春トが著したる粉本の縮圖の末に友禪が畵あり其說に云友禪はその姓氏不詳衣服扇面疊紙の繪をなす都鄙遠近友禪摸樣といひならはす布上に濃淡の繪具を施す水に流し洗ふにすこしも繪具の落るとなし畵法の外に重寶を得たりといへり又(女用鑑)にこゝに友禪といふ繪法師ありけらし一流を扇に書出せしかは貴賤の男女喜悅の眉うるはしく丹花の唇をほころばせり是によりて衣服のひな形を作りて呉服師に與へし由いへり此說の如く友禪は法師なれは扇また疊紙などにはかきもすへし衣服の上繪まてはいかゝなり衣服の畵は友禪が筆をまねて友禪もやうといひしなるへ

友禪

の人心）五卷にみえたり是も其さまに似たるにこそ（衣食住の記）染にも上京物下京物は殊の外いやしめたり元文ころ花色に白あがり細もやうの縫入墨繪其後縞類に金糸紋其後大名嶋市松小六染丹後かすり縞二重格子赤小豆縞寶暦のころ裙もやう八寸もやう五寸もやう文字入の絞り染云々明和の初ろかう茶上田八丈鬖り島安永のころより縞ちりめんひがのこ八丈のまがひ縞ひは茶天明ごろ紫とび裏地は紅うら輕き者甚三紅とて色あしきながらも赤きを裏の第一に用ひしに元文の末より隱し裏とて紅うらに裙通りを外の色にてつぎしが後には裙通りを松皮立浪青海波の類を淺き御納戸茶に染分たるが寶暦の頃專らなりし明和ころより紫うらはやり安永天明に至りては裏もやう小紋むく專らなり（賤小手卷）翁が竹馬の頃扇屋染とて丸く四角團扇六角菱などに形を交へて其中に花鳥から草の類を色入にしてうつくしく染たり子供の着へき物にて專ら用ひたり多分絹なり今の板しめの類なり又横竪筋違に筋を立て其内に玉を大小いくらも交へ染たるを歌舞妓役者中村傳九郎がきたりとて傳九郎染といひ石疊は市松うづ卷は市村龜藏小紋横に雨ふり是にいろ〳〵の筋を染たる嵐小六が着たりとて小六染といへり其後親和そめ殊の外はやりたり安永明和の頃なるべし其頃より裏もやうはやり表は古風の縞或は紋付の無地に付たり夫より紅うらすたりて紫うら黑もやう裏を伊達とすといへり按に裏もやう京師にはそれより前にはやりたり祐信が畵の（謎の册子）はやり小袖とかけて野郎どゝく心は【裏にもやうがあるなど見ゆ】

模樣の變遷

丸盡し【蠻繪、友禪】　袋持【うちがひ】　裏摸樣【形木】　りん【そきえり、半領、錢くび】

衣服花美　懸香【匂ひ袋、誰か袖、匂の玉】

丸盡しの模樣　蠻繪

丸つくしの摸樣蠻繪はもと裝束の紋にて調度にも付たり（禁秘抄）清涼殿の篇に南蠻繪御厨子二脚式筥また朝餉の條に凡御調度等近代蒔蠻繪【白】又以白薄押蠻繪などあり壺井氏の説に蠻當作盤丸き紋に

く初心なり此頃は地茶地白かたの摸様漸々はやり出たれども是も又いつしかにすたるなるへし時のはやりもやうは大かた歌舞伎より出るなれは是を好みき給ふも破手に見えてあしゝ衣類は上代風の今の目には初心めきたるをき給ふ女中こそ心も艶にやさしく思はるゝもの也云々（松洛葉）に染色盡の土佐浄るりありうぐひす染といへるは今の鶯茶にやゆつりそめとの茶ふたへそめかうかきけんぼくろちや吉をりこんるりまがひぞめ染色かのこ打出しがのこしほがのこおほろぞめうき世ぞめしやむろかうそめ等みえたり（昔々物語）に小袖紋付無地縞の類はやるは遊女の眞似なり昔は常の女縫箔の光る小袖をきる故遊女は無地縞の類など着て常の女と風俗かはるへき爲なり云々いへり遊女常の女と風俗かへむとて無地縞の類を着しにはあらす寛文八年中三月町觸の内新吉原の者衣類絹紬木綿可着之附り遊女の衣類何地にても可爲紺屋染事かゝれば制ありてぬひ箔は着る事を得ざりし時なるへし

かき繪小袖

○かき繪小袖　衣服に畫をかくは昔よりあるとなれど是は墨繪をかきたるが流行したり友禪とて仕いでしが始にや（椀久物語）白じゆすの長ばおりに京の幽禪が墨繪の源氏人の目にたつ程なれ共其頃いまた世に衣裝法度もなき時ぞかし云々元文寛文の頃（狂歌集）に白むくに源氏繪かきたる女中の雨にぬれたるを見て「白ねりに墨て源氏をカキクケコ雨にあたりて身はラリルレロ（諸艶大鑑五）十八九なる大振袖の娘肌に黄うこんのひつかへし中に玉虫色のりんず上には福島絹を空色にして墨繪の山水朱印を紋に付て曙染の裏を貝の口にくけあはし帶に木綿の小倉嶋しかも細し釘けづる弟子もせましきものなり（西鶴織留二）近年書繪小袖を仕出し佛分限となりぬ（鎌倉草子）【正德二年】年の程は卅四五白ぬめのひつかへし中に淺黄ぬめ上に樺ぞめの龍門唐子盡し墨縫云々

後室もやう

又後室もやうといふもあり是は模樣を白あがりにして上繪を墨ばかりにて書たるなり（一代男四）後室もやうのきるもの大わたぼうし云々延寶八年（洛陽集）礒のみるめ後室もやうや霞のきぬ【桃林】曙染は今と同しき歟

紅染の抱へ帶

又紅染の抱へ帶は（世

地無小袖 へる打しき（望一后度千句）春の日の光りかゝやくこし車はくの小袖のうらゝなる体地無と云はすへて明たる處なく箔のもやうあるをいふ（慮栗）【天和三年撰】いでや春地なし小袖のかい取せる【信德】（昔々物語）六十七年已前女中地なしと云小袖持さるはなし惣身を金箔にて一面に松かは菱のやうに箔置たる小袖なり婚禮又は年始など男の熨斗目きる時は女は地なし也とあり松皮菱に限れるにはあらず（賢女心化粧五）地なしの鹿子ともいへり是はひたかのこなるべしされども地なしといへり（諸艶大鑑五）四十三四と見えし女房地なしの昔着物に金入の帶して云々これ天和中武家屋敷女のさまなり又（后日男草子二）國姿ものに備りしすがりと見えて紅嶋の下着に紫鹿子中着を正風にして上は地なしの菊そろへの小袖云々是ははくの小袖にはあらぬやうなり惣もやうのひたと付るにや（娘容儀册子）よめ見あひの處おり紋と地なしの小袖云々【享保中冠附、ひつかいか匂ひ小袖のうろこ形】

金糸 ○金糸は寛永中にも見え又金紗の織やう唐人より傳へしは元和中の事なるよし（堺かゞみ）にいへり金紅を繡に用ひそめしはいつの程にかあらむ縫箔のきれの遺りたるもの往々ありその繡いと拙くみゆるはみな片糸にてぬひたるが古くなれるから見苦しきなるべし箔はやみて後繡ばかりとなりても其工人を縫箔屋と稱ふるはむかしの名殘なり（室町殿日記五）三好筑前守義長か妻の衣裳を京にもとむる處の注文に表は無紋の綾裏は國紬又表は國の長濱染裏は丹太山絹又奥紬兩面無紋黑付紅梅の帶五條とみゆと質素なるとなり

染色 ○染色（女重寶記）【元祿九年板】女中の衣裝そめやうは上々かたは昔が今にかはるともなく地赤地白の縫はく入段子繻珍綸子惣がのこ上代風にて今の世にこれをきればやしき方田舍風とて京のかたにて笑ふとなり都の風も時世に移りかはりて時々のはやり染も五年か八年の間に皆すたり中頃の吉長の小色そめ友禪そめの丸づくし上京八文字屋染の山道す崎下京染の打だしがの子今見ればはや古めかし

縫物小袖
箔の小袖
石疊小袖
鱗形小袖

てふせくみしよろつにしさはきあへり【こゝは白さうぞく也】【卅一、てん上のはな見】つくも所にて女房のもからきぬにゑかきつくせりゑなごいみしくさせ給ふ【卅二、歌合せ】紫のふせんれうにあをきざうがんをつけて伊勢の海といふさいばらをあしでにぬひたり【同卷】ほりものゝほねにざうがんのかみをはりて題の心をさま〳〵に書たる扇云々按ざうがんは鏤嵌にてほそかねをうづめてもやうを作るなり衣なとにはこれを用るにあらず箔を細く截て付るをいふ青きざうがんなどいふは青色にて細くゑかき或は摸(カタ)などにてすりこみもしたるにやこはもと金銀の箔を細くして用ひたるよりそのやうに細くもやうつくるをしかいひしことゝしらるうすものなどに多くざうがんしたるを後世にはうすものゝ名と心得たるにや(侍中群要)に下襲夏象眼とあり(著聞集)などにふた藍のざうか又深みどりのざうがといへるもうすものゝ名なるへしと(和訓栞)にいへれどそはひがとなり箔に細がねといふと畵家には傳へていへるとゝみえて(貞享江戸鹿子)に佛繪師細金善兵衛細金重右衛門といへる者あり(人倫訓蒙圖彙)に細金師諸の彩色に有事なれとも專ら佛像の繪に是を用金銀の箔を細に刻みて衣紋をなし花の筋をわかつ細金師は繪師に隨ふなりといへりまた螺鈿は青貝の粉を蒔なるべし是即縫箔なり縫と箔とは上に引たる文にざうがんをつけて云々あしてに縫たりとあるこれなり(簾中舊記)【東山の代に平貞宗記】箔繪縫物なとしてうらあかく云々五月一日ひるは繪ぬひものゝすゝしうら云々(豹文記)縫物の小袖の事男は人により十四五まで着候下々の人は不可有着候又はくの小袖の事同前也貴人御息御用勿論候とあり箔の小袖は糸の縫紋なく金銀の箔にて摸樣を付るなり(孔雀樓筆記)【清田君錦著】義祖母衣服の書付にはれ着十二の内地赤地白地黑石疊の小袖鱗形の小袖地無の小袖なとあり石疊は黑地に金の石疊鱗形は黑地に金の鱗形をひしとおきたるものぞ石疊鱗形はその時節式正の衣服と見えたりといへり是そのかみの箔の小袖なり(鷹筑波集二)すり箔の小袖を見ては物思ひ【良德】妻のためとて縫

の奥方京都一見に登らるゝ行装一には先垢とり【是は鞍の上に油單を敷くらを包むなり】二には御田笠に水引付たる但包絹なり【是は田植笠のやうなるに水引付たるは顔を隱す爲なり】三には了衿有て四には打掛あり五には手覆足袋覆面あり是女中騎馬の作法とすとあり（おこたり草）に和州の民俗新婦來る時婚姻の席へ手覆して席に付なり分限に應じ錦繡をも用ゆ紡績農事を不忘いとまなく勤むるの姿をなす（女重寶記）女衣服門に手覆足袋と出たり（建保職人盡）の巫女手覆してむねに護りをかけたり其外女商人などみな手覆あり

足袋

○護身（マモリ）は（後撰集）にまもり返し遣すといふ歌あり又（東鑑）に往々みえたり此かけ守は胸にかくるなり其体（後三年合戰畫）などを初め古畫に多く見ゆ遊女もかけたり（簾中舊記）御中臈役者なり物ニッ小袖はかまむねのまもり御かけ候てきぬをめし候大上臈はゑぬひものをめし候てむねのまもり御かけ候て御袴めし候云々あり今俗にも婚禮の時よめのえりに愛敬の守りとてかくる儀あり古は常に胸にかけしなり愛敬むかしは轉倒して敬愛といひしとみえて（沙石集八）ある僧愛染の法に付て敬愛の秘法を習ふ條眞言敬愛の法と申も佛法の眞實を習ひ本覺に冥する心地をひらく敬愛と習ひ侍り云々然るに世間の人思ひあへる男女の中らひ思ひあへるばかりを敬愛なんと思ひならはし侍それも眞實の佛法の敬愛の德川何れにも渡る事は餘薫にてこそ侍れ次てに云もと小兒の守りは今いふぎをん守りの如く鈴を付たり（懷子集九）鈴虫や小森か花の紐守り【一正】さるべき人の子乳母などの付添たるはさしかくる傘に筒護を付たり

護身

○縫箔　（桊花）【卅七けふりの後】ふせんれうのもからきぬざうかんうすものなどかねして作りたる菊の折枝松などぬひたるいとをかし云々此卷のみならず衣服にざうがんといへると往々見えたり又らでんもあり【七、とりべの】わかき人々は縫もの螺鈿など袖くちにおきくちを白かねの左右のいとし

縫箔
ざうがん

ひら雪これや地白のかつぎかたびら（若菜合歌仙）【第五】被うり被いた形を見せにけり【横几】
○方以智（通雅）云儀禮士昏禮加景注景之制如二明衣一加レ之以レ行レ道禦レ塵智謂非レ禦レ塵以爲レ蔽也北齋納后禮有二所謂加褋去一レ褋即此字今俗親迎冪二其首一曰二蓋頭一詩絅衣一作顈衣䌹衣景衣加幪亦尙レ絅之遺
○（通典）杜祐曰議婚姻王化二人倫一之本拜時之（婦禮經）不載自二東漢晉一及二于東晉一咸有二此事一按其儀或時艱虞歲遇二良吉一急二于嫁娶一爲二此制一以二紗縠一幪二女氏之首一而夫氏發レ之因拜二舅姑一便成レ婦とこれ時を失はんとを恐れ娶るとの急きに禮を備へず事そぎてせしとの後世通行の儀となれるなり
○（儀禮節畧）云呂東萊婚禮壻婦交拜後擧二蒙頭一遂就レ坐　按（內則）女子出レ門必擁二閉其面一蒙レ頭即擁面也俗謂二之蓋頭一以レ錦爲二方帛一橫直四尺女辭二父母一拜畢即以レ帛蓋レ頭升レ車至二夫家一交拜必姆爲去レ帛乃合巹此俗之近レ理可從者

むしのたれ衣

○又婦人旅行の具にむしのたれ衣とてかたらひの絹を笠に縫付て頭より身に掩ひて着る物あり古畫に見えたりむしとは蒸の義蒸衾（ムシフスマ）などのむし也【醒齋諸書を引ていへれはこゝには云ず】

搔取

○搔取は（安齋隨筆）に內裡女房畧儀の時は唐衣裳を着せずして小袿を表着の上に打かけて着る也是男の衣冠又直衣をきるが如し小褂は小袖の如くにて廣袖なり裏もあり地は綾にて色は時節によりさま〳〵あり地下の者武家の女はかの小褂の代に小袖を打かけて着るを打かけともかいどりとも云ふ打かけたるに小袖のつまのひらくを取おさめて手に搔とる意なりといへり（望一千句）むさしのやうらゝに雨のふるわらぢすそかいつぼりかへる草かりかいと云ふ詞即これなりつぼりはつぼをりの畧なり

かいどり

胸の手覆

○手覆は古きふりとみゆ（狂言記拾遺三）すゝ竹のつめたに織物の手覆といふ事ありつめたとはおひえの義布子をいふなるべし乙州が（それ〳〵草）にむかしの京は高位高官の宮女もすゝ竹の布子に織ものゝ手覆にておはせしとかや是は何によりていへるかおぼつかなし（續武家閑談）永祿三年九州の或諸侯

清水へ常に詣ける女示現をかうむりて旁の屛風に白き衣をうちかけて有けるをは落してうちかつきやがて下向すことありまた小童も女の如く衣かつきしたり古書にみゆ今も牛若丸五郎丸が体を畫くに白き衣をかつけるも是なり女に紛れて出立のみにはあらず（春臺獨語）に唯京の婦女のむかしより蒙衣するのみぞいまた江戸に移らぬ云々いへるは非なり（落穗集）に下女三四人若黨挾箱持なご召つれ候歷々の者の妻女こみえ候女中までも瓶のかつぎこ申物をかぶり紫の染皮足袋をはきてありき申候七十年はかり以來は右のかつぎかふりたる女中は見かけ不申種々の者の女房娘までも乘物にのらでは不叶樣に罷成候（昔々物語）に明暦の頃まで針妙腰元かつきを戴きありきしに万治の頃より江戸中かつき透こ止め酉年大火事以後より此事斷絕に及ひしなりこあり【（關秘錄）にかつき江戸にも有しか昔岩間八十郎こいふ浪人ありて女をまねかつき着て仇をねらひしより止みしこいへるは誤りなりそれは寛文六年午十月のとにて人相書あり神田白龍子が（雜話筆記）に承應年中迄は江戸の女も京の女のとく物詣には被こいふ物をかふりしこ也然るに承應年中增上寺に於て崇源院殿の御法事あり折節戸次庄左衛門林戸右衛門藤江又十郎なごいふ浪人芝札の辻邊に住しか被をかふり參詣にまきれて時の老中松平伊豆守殿を窺し處事顯れて皆誅せらる是は正雪忠彌等が一亂の翌年承應元年の事にて芝浪人の亂こいへり薩州の人（三曉庵談話）こ云ものに薩州なごも昔は被衣をかぶり候へごも當時はやらず云々元祿三年午九月十八日評定所より御觸古來よりのかつき用る者あり近年綿帽子かつき候やう体不宜相見え候依て極月一日より古例の筋のかつき相用候樣にこの義なりこ云へり

○今世新婦の綿帽子きるはかつきの畧なり今こてもよきあたりにはかつきを用ゆ京師にもはやりて町家の者迄も着たりしは元祿の末頃よりにや（后日男草子）に肝いりかゝが女の見やうをいふ處當風のきぬかつき女のさかをかくして首筋の黑きも見えず云々（夷曲集）【光廣卿】綿やうしてひらりこ散すた

りて神祭る時なごにのみ着たりと見ゆ（万葉三）大伴坂上郎女祭神歌によめり】

壺裝束

衣かつぎ

○古の女歩行にて他に出るに壺裝束したりよき人のかちあるきはなかりしか中古よりこれあるにや其さまは垂たる髪を小袖に着こめて兩のつまをつぼをり前にはさみて市女笠きるなり猿樂の女のさまなり（源氏）【葵】に髪きこめたるあやしのものともあり又衣をかつきたるものを衣かつきといふ（枕草紙）の心ゆく物の條されぱとてはしめつかたはかちありきする人はなかりきたまさかにはつぼさうぞくなごばかりしてなまめきけさうしてこそありきしか云々此ころ其折さし出たる人のいのちなかくて見ましかばいかばかりそしりひはうせむ又見くるしき物の條につぼさうぞくしたる人のいそきはしるなごあり衣かつきは（建保職人盡）【六番】ひとめみしかはらけ色の衣かつき我に契りや深草の里今川了俊の（和歌不審）に內裡節會の夜爲兼卿きぬかつきを懸想せられしと又爲世卿も似たる物語あり（歌林四季物語）所々の机丁のかたへのきぬかつきの女なと云々（徒然草）ある人任大臣節會の條六位內記康綱きぬかつきの女房をかたらひて同書淸署堂御遊の處いかなる意趣かありけむ物みるきぬかつきの云々（文段抄）に今も節會なとに官女ならねど物みる女房のきぬをかつぎてあまたあるなり（唐書）車服志帷冒創于隋代のことを云て初婦人施二羃羅一以蔽レ身永徽中始用二帷冒一施レ裙及レ頸坐レ檐以代二乘車一命婦朝謁則以レ駝駕レ車數下レ詔禁而不レ止武后書帷冒益盛中宗後乃無二復羃羅一矣宮人從レ駕皆胡冒乘レ馬海內傚レ之至二露髻馳騁一而帷冒亦廢云々唐の代もはしめ婦人身を掩ふ服ありしが後はひた面にさし出たりと見ゆ（三才圖會二）面衣前後全用二紫羅一爲レ幅下垂帷他色爲二四帶一垂二于背一爲二女子遠行乘レ馬之用一亦曰二面帽一按に（西京雜記）趙飛燕爲皇后女弟昭儀上極三十五條有金膝紫羅面衣則漢已有面衣しからは其始なほふるきとなり

○昔は後世の如くかつきとて別につくりしにはあらず見ゆもとの當服を着たりしなるへし（沙石集二）・

あり（塵塚ばなし）明和二三年の頃大坂より吉田文吾と云人形遣ひ下り長羽織きたるを皆人わらひけるが其時分より段々長くなり近年に至り小袖に少し短かき程なり又文化七八年に至りて短くなれり【（窓のすさみ二）御旗本の士十二月の末にや一万石領せらるゝ列侯のもとへいひやられしは正月の役にのしめ小袖借用申度とありしかは其荅に我らも一ッならでは持ず候掃部頭どのにて借りて遣すべしとて其由を通ぜられければこなたにもかへはなし但し子持筋なるを持て候間是にてもよくはかし申べしとてかされければ夫を用て晴のつとめすみけりすべて寛文明暦の頃迄は國初の遺風有て上下質素なる事とも言傳ふる是にてみれば誠にさありけるにや此説また戦國の時の事なるべし松崎氏時勢をしらず】

淤須比壷裝束【衣かつを、搔取】手覆【胸の護身】縫箔【ざうがん地無小袖
染色【かを繪小袖】後室【もやう、裏の色】

をすひ

淤須比といふ古服のと（古事記傳十一）に後世の婦人の被衣などの如く頭より被て衣の上を掩ひ下は襴まで垂ると見ゆ上ッ代に男女共に人に誰と知られじと面貌を隱す料の服とみえたりと悉しく注せり貌を隱すものにしあらばいつとても着たるべし然るを奈良の都の頃に至りては男のきるものははやく絶て女の古への禮服の如くになりて神を祭る時などにのみ着けるなるべし右の如くなれば是を有職家にてかくし絹と名くと或物に見えたるは古への道によくかなへる名なりかし【神代にオスヒと云服あり男女共にきたりとみゆ面貌を隱す料の物と見えたり八千矛の神の御歌にオスヒヲモイマタトカ子バとあり又美夜愛姫の歌に我ケセルオスヒノスソ云々（太神宮式）帛意須比八條長二丈五尺廣二幅などみえていと長きものなり後世の婦人の被衣なとのやうに頭より被るにやオスヒとは襲ひなるべしと云り上代にはいつとても着たるへし然るを奈良の比なとになりては男のきるとはなく女の古の禮服のとくな

かくし絹

りしに又廿前後になりて流行出たるを見ればいかにも當風にてだてに覺えし其色に昔も今もかはるとなし人情のうつり行ありさまはかなきものにて更に定りなし袖口もふとく括ると又はやり突袖したる時りんご立て袖の折ぬやうにしたり人によりて袖口の綿の中へはりがねを入てくゝるも有とが初めの芥子ぐゝりから見れば表裡の違ひなりといへり

羽織

〇昔より長短さま〲にかはりしは羽織なり古畫をみてもいたく替れるは知るべけれどもさもあらぬはしれがたし大かた寛文已上は長きやうなり其内にもかふむり羽織などいひていと短き一種あり延寶已下はすこし短くなれり西鶴が（榮花咄）には黑羽二重に三寸紋紬の大縞の長ばおり貞享頃をいふ（芭蕉文集）四條河原の涼みとて云々男ははおりを長く着なしてといへるは元祿中の風なり（錦繡緞）【元祿十年撰】暖かに京は羽織を長くきて【沾蓬】此句其頃江戸には短きをきたりと知らる許六が（風俗文撰）【寶永元年撰】去來が誹に短はおりに長刀足ばやにすべり出て云々元祿末には短くなりしと見

短羽織

ゆ（本朝文鑑）【享保三年撰】太田巴靜が猫戀箴に果はのら猫のうき名に立て扠こそ今やうの短羽織に出立云々（衣食住記）に享保頃二尺二三寸元文には段々長くなり二尺五六寸三尺に餘る明和の頃短く享保にかへる安永の末天明に又丈長く身巾ひろし元文頃長紐足の爪先へ屆く云々（賤小手卷）延享寛延ころ今の通り並の羽織なりしが彼の文金風になりてより長くなりやがて對丈ぐらゐなり忽ち長ばおり止て短きがはやり出たり角袖とて袖も太く丸みはわづか五分許丈は居りて裾の疊とすりはらひ位の短か

長羽織

さなり遊人俗客專らこれを着たりしがいつとなく又長羽織になり其後並の丈に成り紋處もくづし紋にして色々物ずきに付たり其頃世に鳴たる紀逸が高点の句に身代のくづし初めは紋所といふ句ありと云へり此句は川柳点なるへし紀逸の点の句は（江戸枝折五）人の身のくづし始めは一ッ前といふ句なり後に是をやき直して紋處の句にしたりとみゆ露丸川柳などが点の句にもゝと（六玉川）に出たる句ども

織島　八丈

松染寶暦ころ入子稲妻あられ万字南京染そらき染明和の頃古手がへし鹿子安永天明青茶小紋菊多揩その外織物さま〴〵大かた此頃まで郡内丹後八丈上田の類なり享保には八丈は甚少く八反がけなどもありしかど中人以下は着るとあたはずたま〳〵あるも黄八丈無地又は横島ばかりなりしに段々はやり出て竪じま格子とび色黑手好みに隨ひ織わたす昔の菊多すりなどは小切も見えず又裏の色は淺黄白萠黄すみる茶なりしが元文ごろ黑うら煤竹寶暦ごろ御納戸茶千歳明和に紅のかくし裏額うら安永天明の初め花色もえぎ昔のにかへる

襦袢

○(同記)に襦袢も色々なりし【按に襦は短衣袢は近身衣と字書にあればこの服に當りたる名なれども出處未考へず(龍圖公案九)剝去襦衫見兩乳下垂とあり褊衫はじゆばんなるべし】元文ころ樺あさぎの小手袖なりしが寶暦には花色中形染本袖或は廣袖明和には五分長さて袖口の外へ出るあり又安永ころ

胴着　帯

胴着と號し緋羅紗猩々緋すためんにて襟袖なしの胴着あり又帶は元文ころ丹後琥珀晝夜織寶暦には黑こはく縞眞田云々天明ころ緋はかた世に腹切帶と稱すひごんす紫とびはどは二寸五分なり元文ころには四寸五分より段々廣く又寶暦より狹くなり安永初めには丸ぐけ帶の如し天明に至て元文にかへり廣くなる又云安永天明衣服の紋處太く二寸三寸に變る其頃はやり物をよせて三寸紋五寸摸樣に日傘こはだの鮓に花が三文とあり是は寶暦のころ丁子茶と五寸もやうに日傘朱塗の橊に花のかんざしといひしを學びたるなりまた前の襦袢の內に管じゆばんなし是は嵐雪が(玄峯集)に竹婦はなれて抱よけれどこと人やねたまん涼しくて獨り寢んには「汗に朽は風すゝくべし竹じゆばん」といへる是なるべし

袖口

○(賤小手卷)に袖口も芥子ぐゝりとていかにも細く括りて色も淺黄など專ら用ひたりしに翁が八ツ九ツの頃よりはや淺黄は廢りて昔ものとて人は嫌ひたり寶暦の頃より又淺黄はやり出て遊人などは專ら用たり人の心はいかなるものぞ我ながら計かたしすたりたる頃はいかにも古めかしく子心にも覺えた

なるべし名義いまだ思ひ得ず雙紙を綴るに鶯といふ具あり同集に鶯で歌書をやとづる糸柳【定時】また(堀河百首)題狂歌【安井了忠】鶯よ双子のこ口とぢおくとなれが名残りし鳥にしらすな今も帶などくけるに竹にて短く篦のやうなるものを作りさきを二ッに割かけて縫ふべき處にはさみてくける也これをうぐひすといふ又褻匙(セツカヒ)を女詞に鶯と云はもと香式にうぐひすといふ物あり組香の包紙をさす串なり是を鶯といふとは(續後拾遺集)【春上】順徳院御製あかなくにをれるはかりそ梅の花香(カ)を尋ねてそ鶯のなくといふを取て名付といへり味噌を異名つけて香といふによりて又せつかひをもしか名つけたり又かの串おなじやうに竹に作れば雙紙とつる物をも其名を用ひて呼るなるべし鶯には縫てふ緣語もあり竹をねぐらとする説もあればかた〳〵取て名にはしたりけん鶯歌は形せつかひのやうなるによりて名づけしか又(古今集)に折つれは袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯の啼などよしあり

つぼ袖

○つぼ袖(續山井)花瓶にもさすやつぼ袖初尾花【常信】袂なき袖なるへし江戸にて鄙き詞に竹筒をたけヅヽぼうと云つぼ袖を筒(ツ)ッぽうと云は竹筒よりいふなるへけれども壷袖の轉じたるなり

筒ッぽう

衣服流行の染色

○(衣食住記)【享保初より天明に至る六十餘歳の人の記なり】男女衣服流行の染色悉々くあり今その大畧を錄す享保の頃は小袖の仕立丈長からず丸袖にて袖口にこよりはりがねを入て芥子ぐゝりにしやんと縫立袖ぐり黑すみる茶ゆきは短し染色は黑とび黑とび茶ぎんすゝ竹なとなり元文の頃丈長く袖少し大く御服袖口とて針かず少く縫ゆき長く黑袖べり色は檳榔子くり梅藍みる茶木賊色寶暦の頃袖口いよ〳〵ふとく角袖にへり御納戸茶身はゞ狹くふき女のふきの如し染色は御納戸茶千歳茶すゝ竹なり明和の頃より袖口廣く袷の如し染はるり紺こんぎゝやう藍鼠花色安永天明の頃は身はゞ廣く借着したるが如し染色ひわ茶紫とびなり小紋縞さま〳〵服の地合等繁多なれは悉く擧がたしたゞ一二を記す享保頃小紋花色の櫻ぼうふりあられ輪違ひ安永天明の初にまた流行る元文にあふぎや染上代そめ豐後絞市

袖覆輪　殿中流六方がゝり　紋所　二つ紋　鹿子紋　ぬひ紋　そぎ袖　かます袖　鶯袖

んと云るは袖口の小き也袖口廣くなりしは丹前風より起る】（永代藏）に京師室町に藤市といふ利發なる者ありて袖覆輪といふ事此人取はじめて當世風俗見よげに始末になりぬといへり又三井九郎右衛門が店の事をいふ處龍門の袖ふくりんかた〳〵にても物の自由に賣渡すなどみな袖覆輪といへり（五元集）に袖うらや茄子よりげに白ぐゝり【其角】袖口は（尤草子）時代【寛永】始りしとみゆ箕山か（大かゞみ）近代は若輩の人好み來るは殿中流六方がゝりなどいふ是は袖のゆき短く大袖口丸袖口針金入身の裾廣く小裾高し裏を深くふかせてすそのたけはるかに短きを本とす紋所大に襟の綿厚きを用ゆされども時々の風俗に隨ひ此姿を其まゝに用る處もあり又廢れたる處もありとかくはやるに任せて用べし此ごろはそき袖すたれて丸袖に移り丸袖すたれて隅入袖下長きを用ゆ身のたけ長きは優にはあれど見かけ重し若輩の人は短きもよし云々大紋處すたれて成ほど小き紋を又付二ッ紋をも用ゆ所詮時々の風儀なれば常住の格に定めかたし云々かくいへるは延寶中の流行なり又云鹿子紋處風流なり自然に着すべし鹿子の小ちらしなりぬひ紋處また風流なり成ほど小くして二ッ紋などよろし縫糸は地に隨ひて用ゆ其中に黒き糸を第一とす小裙の內のかくし縫男服にはこれを制す云々鹿子紋は紋所を鹿子にしたるなり万治寛文ころの袷にみえたり（好色盛衰記）月代をそり下て八寸袖口の大臣仕立の衣裳【貞享の風なり】（壺のいしぶみ四）いにしへの袖はそぎ袖なり今の袖はかます袖なりそぎ袖はあしくかます袖もあしゝ中をとりてすべし云々寶永元祿ころ前句附、色々になる〳〵、そぎ袖は花立はなの大昔、又そろり〳〵と〳〵と、縫紋のむかしをくごく松か岡また鶯袖といふあり（鷹筑波集二）梅ばちや鶯袖のもん處【正平】（佐夜中山集）手々にとりぬる胡鬼の小姫御塵をだに鶯袖は付やらて【林元】そめなさん梅かたびらのはやれかし鶯袖をぬきかけ踊【玖也】（松の葉）長歌けんごしうと云あり其內に行て三消のまかきの內に花のいろ〳〵その小紫きくに初音の鶯袖をひく手いく度わすれもやらで鶯袖はふり袖

の下女赤前だれを着たり

○（源氏）【浮舟】けふはみたれたる髪すこしけづらせてこき〻ぬに紅梅の織物なごあはひをかしうきかへてゐ給へり侍從もあやしきしびら着たりしをあざやぎたればその裳をこり給ひて君にもきせ給て御てづう參らせ給ふこありよききぬにてうづか〻らむをいこひてあやしき裳をきせたるは前だれ着る意こおなじ

衣服白色の流行

白色　衣服したて【袖歌、紋所、そき袖、鶯袖、つぼ袖】染色【襦絆、胴着、帶】羽織【長短】

衣服すへて白色のはやりしは寛永中より万治寛文の頃に盛なり（竹齋物語）【寛永】若衆を念かけたる男の條に出たつ其日の裝束は地白の衣にゐんこうが水にすめる月かげをこる處をそめたるあわせを着わきざしばかりにて云々（耳塵集）に古き歌舞妓狂言をいひて傾城買が出立白加賀に銀箔のもやう付たりこありまた（椀久物語）に白しゆすに墨繪の羽織着たりこいへり又俠客に白柄の大小をさせるを白柄組こいひ三谷馬の駄賃付にも白馬は並駄賃より高しこあり又衣服白うらもみうらも着たり（色音論草子下）廿あまりの侍のあさぎの小袖もみのうらりんずのおもて白うらのえもんけだかくつくろひて（藥師通夜物語）【是も寛永のさうし也】をさなき時より樂をしてりんずやさやにはぶたへをけんぽふ染に

衣服の仕立

紅梅のもみ

數をしてうらに紅梅もみを付花かいらぎの鮫ざやに金鍔大小うち違へ云々紅梅のもみこは今いふもみなり其頃衣服たけ長く身はゞ廣く袂をそぎゆき短く袖口狹し（女鏡）【慶安三年板】小袖のしたてやう身廣すくればみなりあしきもの也すこしせばきをかんこすかたのゆき袖の下長きもいなかめきたり又短きも賤し【すへて教訓めけるものにはあし卑しなごいへるが皆其時の人の好めるなり

○（浮世物語）【明暦万治の頃】放蕩者のとをいふ處人めをもつ〻まず袖のなり大そぎにそぎてつま高く引まはし【前あがりに服を着るここ此頃より貞享頃まてしかり】こ有り（尤草紙）に短き物袖ふくり

赤前だれ

（字鏡）に負見帶とありてスキと訓り本居翁云スキといへるをもとにて袖をかゝくるをタスキといふなるべしといへり次をスキといふは古言也後のかな文にもつき〳〵をすき〳〵といへり故に（古事記万葉）等にもタスキを手次とかけり

○宋人（暘谷漫錄）に厨娘とて調味の伎をもて奉仕する者の事をいひて厨娘更團襖闊裙銀索攀膊椊臂而入云云これ銀のくさりなどの手すきなるべし

○前たれは（壒囊抄三）韠の事これを前だれとよめり（韻學集成）韎韐士服蔽膝之衣とはみえたれども詳ならず唐山には護膝また蔽膝などいへる是なり昔の前だれは大かた赤前だれなり（尤草子）赤き物の内茶屋のかゝの前だれとみゆこれは茶師なるべし（狂歌咄二）宇治のとをいふ處茶師の家々數十人の女赤前だれ一やうにといへり又そのかみ八瀨大原の原の女どもゝ赤まへだれを用ひたり又（狂歌咄五）白布のぼうし赤前だれして柴木をいたゞき云々（寛永發句帳）山姫の赤まへだれお下紅葉【重時】（籠耳册子五）ある侍友人の家に行て化物を見たりと物かたりする處野路の一ツ橋を暮六ツ過に歸りしが川の中に女一人すご〳〵とたちて髮をみだし腰より下は血にそまり通る者をなつかしさうに見送るほどに何者なるぞと咎めければ忽きえうせぬと語る其家の下女そばに茶をふりて居けるがこれを聞てその時川中に居たるは我にて候赤き前だれしていがきに物を入て洗ひ居しがおまへのお通りなされたるを見るたりさりながら何者とも御申なされず只走りて御通りなされしものをといひければ笑ひになりて面目を失ひけるとあり茶屋などにあらぬ常の人家の下女も用ひたるを見るべし（小栗說經）車引の段赤前だれか姥が茶屋云々其外はたごや女などは更なり（松の落葉）【四條凉八景】ひゝく芝居の朝太皷あかねさす日の赤前だれすしに出立し賤の女が云々是は芝居の札賣女なり（古今夷曲集）赤坂にて【保友】出女が赤前だれの赤坂のあかぬ姿にとまる旅人今も娼家の中居などいふ者皆これを用ゆ昔の繪よの常

鉢まき

た股立取てありく馬上の人も股立取て馬に乘柿の三尺手拭にて鉢卷して往還するもあり今は此体にてありく人なし（落穗集）にも酉年回祿に澁手拭の鉢卷したる侍の事をいへり【柿手拭は澁ぞめ也】鉢卷も男女ともにふるきふり也田舍の女は木綿の單なる物を帶したる上に着鉢卷するを禮服とす今も武州近在また下總邊にて婚姻など賀祝の事ある時は其家また親族の婦はつせといふ歌をうたふにその体なり【はつせのとは舞樂の條にいへり】（女重寶記）女衣服門院綿帽子顫卷（ハチマキ）とあり【むかし女は膏澤を用ること少なければ髮亂れ易き故包みもし鉢卷もせしなり道三の（養生物語）に夜いぬるには頭巾は毒なり鉢卷よしとあり昔人は髮に油け少きゆゑ髮亂ればいぬるもかやうのことあり】今駕籠かく者に手綱染のやうなる布をたゝみて揷むは鉢卷せむ料の手巾なり乙州が（それ〳〵草）に六尺は鉢卷に懷をあつけ鎗持は髭を是とすといへり】鉢卷とて頭に桶の箍（タガ）かけたるやうに手巾をしときて結ふのみにはあらず頭を包むはみな鉢卷なり古畫には六尺の鉢卷種々の形あり】又神佛に詣る行人の頭つゝむも手巾なり今は三尺手拭といふもの旅客の腰帶としまた賤者のひとへ帶となるのみなり昔も武家の小者など布のしごきたるを帶とするさま古畫に見えたり是も手巾なるべし（我衣）に三尺帽子とて木綿にて頰かふりし又帶にも用ゆ古へよりあり後に廡にていろ〳〵に染たるを三尺手拭といふ元祿より五尺手拭になるといへるは誤なり廡にて色々染たる手巾古くよりみゆ（一代男一）ふきかけ手拭とあるは今もある帽子ぞめなるべし唐山の手巾は大かた竹布なり長サ四尺巾一尺ばかり兩端六七寸種々に組て織たり木綿よりは強（コハ）し故に長崎に來る商客は皆此方の手巾を用となり（鎖夏錄）曰篁竹葉疏而大、一節相去六七尺、出九眞、彼人取嫩者、硾漫緝積爲布、謂之竹疎布と是なり

たすき
前垂

○手すき前たれ（外宮儀式帳）に木綿手次前垂懸氏天神日蒙氏云々あるはゆふだすきの前に垂るゝをいふなり（和名抄）に式文を引て襷をタスキと訓り袖をかゝくる山の和名なるべし（書紀）には手繦とあり

はあらずとあれども（好色盛衰記）また師宣が畫ける（一代男）の内遊女が湯具に紐付たり（胸算用）【元祿五年】湯具も本紅の二枚かさね白ぬめのたびはくなど町人の女房の分として云々いへり合せに作りたるも有とみえたり

手拭　かつら包【五尺手拭、三尺、四尺手拭】鉢巻　手次（タスキ）　前垂

手拭　掃布

（延喜式）に設打掃布一條、納楊筥、打掃布は手巾なり（和名抄）澡浴具、手巾、和名、太乃古比、【字鏡には觽また帍を太乃古比とよめり昔も下賤の女は手巾を頭にかぶりたり其さま古畫に多くみゆ又猿樂狂言の女形ゆぼうしを着る是なり桂女などがかしら包めるも同じ（甲陽軍鑑十一）永祿三年三月中旬景虎小田原へ押込蓮池迄亂入心もしらぬ關東侍大將に少も機遣なく甲を脫白布手巾を以桂包といふ物に頭を包み朱さいはいを取て諸手へ乘わり云々又同書【九】笛吹（ウスヒ）峠合戰【天文十五年九月】勝時を執行其儀式云々さいはいは御屋形持給なんてんの御手水入は金丸筑前太布の御手巾飯富源四郎如此有之また【十二巻】花澤城攻【元龜元年正月】甲州勢北條常陸守が侍大石遠江といふ者を生捕る處に白手巾の長きを以て縛り御前に引すゆとみえたり桂包といへるは鬘づゝみなり桂女に限れるにあらず音の同じき

かつら包

によりて桂とかけり手巾長からねは桂包ならず（紅梅千句）をどりに出さぬうら盆の宿、花ぞめの五尺の布や惜むらんこれ又手巾にて踊りて用るなり不角が（江戸惣鹿子序）にすこぶる汗道具五尺手拭をしぼりぬ云々手巾はむかしは短きはなし三尺手拭は（室町日記十三）にもみゆ三絃の書（大幣）端歌の內に

三尺手拭　五尺手拭

くれなゐの三尺手拭かたみにせよとておいてゆく又（犬子集三）三尺ばかりあひをおく中手ぬぐひを投つけあふも契にて（松の落葉）小歌【五尺手拭】五尺手拭中そめておれにくりよゝり宿におけといへるは古き三尺手拭の小歌をざれて作り替たる也また四尺なるもあり（誹諧懐子十）汗を入るや茶屋の腰

四尺手拭

かけ憂旅を四尺手拭手に持て（昔々物語）に昔は往還する侍衆上下を着し或は袴はかり着て步行も大か

○たのしみは夕顔棚の下すゝみ男ほてゝら女はふたのして此歌はあまねく人のしりたる歌なれども何に出たるか未だ考ず(和訓栞)にてゝれ綴(ツヾレ)の俗語なりこもいへり或は褌をよめり今加賀人は綿絆をてゝらこいふこいへりさりながら此歌女の二布せむには男は褌にてあるへけれど褌をてゝらこいふと未詳(異本四季物語)七月條にかやかふすぶる賤の女もすゝけたるはたへあらはし女も男もさゝやかなるもはぢかくしもやらでこもにこぞりつごひて云々此文なごによりて彼歌は作りしにやさゝやかなるもこは(和名抄)にちいさきものこいふに似たり

下裳

○女の湯具をしたもこいふ(后宮名目抄)に御したも下裳こかくこれは御ゆぐのとにてした〳〵にてはおゆもじなご申侍るは無下の事なり爲家よみ侍る歌にも對のみやをいはひ奉りて御産湯ひかせおはしまし侍るこきに「波よする松のしたもに万代こなれきてなくや友鶴の聲こつかふまつりける此こゝろばへなり云々ありこの下もは湯卷なるべし又(小柴垣)こいふ古き春畫あり其繪をみるに下裳みえす又古畫に狂女裸体に紅の袴きたるを書たり(舊本今昔物語)に女瘡を醫師にみする處其腫頗心不得見ユレハ袴ノ腰ヲ令解テ前ノ方ヲミテ毛ノ中ニテ不見云々是らも下裳はなきやう也されば下裳は後に出來たるものにて古への女は下賤なるも袴きればたゞ肌着を紐にて結べるなるべし【男子の如く褌を用るに及はざるか】其紐即下帶なり【(和訓栞)に万葉にふたりして結ひし紐をひこりして吾は解みすたゝにあふまで(伊勢物語)二人してむすびし紐を一人して相みる迄はこかじこそ思ふの意にて(古事記)に汝所堅之(カタメシ)美豆能小佩(ヲモノ)者誰解こみえるに本づけり小佩も下紐なり思ふに下紐は小兒の付ひもの如く肌着に付たる紐なるべし又は今下しめこいふ物のやうにむすびたるにてもあるべし古へに下帶こいふは是なり前條併せみるへし】應永にかきたる日高川の繪卷物には女裸にて今の湯具めくものを着て河に入らむこする處を寫せりこれ下裳なるべし(吉原徒然草)ふんごしははゞ廣なるがよし湯具に紐付るこ色里に

に御明衣一今木一とみえたり今木は詞に付て訓を借たるなり婦人湯あぶる時はこの服を著けるなるべし（貞順故實集）に身拭と申よりは御湯かたびらと申は上り候とは詞の上下をいふ湯かたびらを身拭ともいひし也【手拭といひて湯に用ると同義なり】後世略して湯かたと云（猿樂狂言記）などにも見えたり（堅一千句）けいせいのくごく風呂よりあがり來て湯かたの袖も匂ふかよひ路【功德風呂とは施行風呂なり（備前老人物語）に渡邊水庵は風爐屋の竿に湯帷子わり下帶あまたかけ置風爐屋を焚く時は男二人板の間に置て垢かき二三人おきて用事とゝのへさせ風爐屋の口にしかと番をする爲他の下人一人もあがり屋へ入れず常に往來する浪人其外も入かはり〳〵終日に風爐を焚くあかりにや入込人なければ腰の廻りの道具衣類に至る迄見苦きを耻るともなく又一色も取ちらさんと思ふ事もなく心を安んじゆるやかにあらじめんとなりといへり此わり下帶は湯に入る爲に設くるなり（見聞集）にいへる割かけたるふんどしなるべしこれを思へは今わりふんどしと云はよの常のをいへどもとは此名にて今用るをいふにはあらじ】

風爐ふどし

湯に入とき用るを風爐ふどしと云（犬子集）【寛永十年撰】わかれを惜みひくはだの帶、いつかまた逢んとかたる風呂の口（佐夜中山集）【斤句】さぞ出替を待し六尺、風呂のうらせはきを何としたの帶（一代男草子七）遊所のことをいひてふんどしのかきかへもなき人ゆく所にあらずとあるも湯具の事とみゆ又女の湯具は（宗因千句）ほの〳〵と赤ゆぐほせる春の日に湯をあかりゆくふりをしぞ思ふ【前に引たる遊女越中が客湯に入るに下帶まではづして入らむとすといへるは有まじきよしをいへる也其頃とても野体の者はさなきも有べし】男だに褌をかきて湯あみすれば女はさら也さきつ年上州草津の温泉に浴しにまつ旅舍につく時やどり居る間用ふべき調度借もし買もする其内に定りて人每にひさく一柄下帶一筋は必買て浴するに用ゆ今は世人丸裸にて湯に入るならひ故その所の者も客人も是は溫泉なればかくする故あるべしとて男女ともに湯具して入れ共これ溫泉に限りたる事にはあらず

以布或紬、縫成小袋、嚢其玉莖、名曰法檀那和皮、上穿其褌云々】

早川

○(守武千句)に町へ出るはいかめしく見ゆ手綱をはかゝず褌はほころびて(伊勢物語)におかし男藝にもならぬすまふをとりけり云々ちりめんのたんなをしめところあしふみ出てとりぬ(醒睡笑)に宗長法師あるかたにとまり曉いそき歸るとて下帯を忘れおかれしを持せておくりければ「思ひきやおとすたづなの濱風に浪より高き名のたゝんとは(懐子集十)心ゆるまるたんなゆるまる早川の水につれつゝおよき越【早川は赤ふんどしをいふ(尤草紙)赤きものゝ内早川主馬のふんどしと見えたり此人色よきふんどし常にかきたれば名に立て聚樂の城ふしんの時京童の小歌に作りたるとぞ後に早川といへば赤きふんどしのとゝなる】正章か千句相撲とり〳〵あかれこし中、かへさるゝかたみのたんな露けくてなど有りもと手綱はえぼしにもかき鉢卷にもしたる物なるに後世は專らふんどしのとゝなれり又(見聞集)にみにたる如く昔は相撲とりならでも地厚き織物をふんどしに用ひたり(諸艶大鑑三)浮世ぐるひの者をいふ丸裸になる時緞子の下帯云々かゝる少年などは貞享ころ迄も此風あり

湯具　**ゆもじ**　**湯巻**　**湯帷子**

○ゆぐといふは男女ともに前陰を顯はして湯に入るとはもとなき事にて必下帯をかきかへて湯に入るゆゑ湯具といふ女詞にはゆもじとも云べし或はいまきなどいふは湯卷にて湯殿に用る具にはあれど異もの也又今ゆかたといふは湯帷子なり(和名抄)澡浴具に温室經云澡浴之法用七物其七曰内衣【和名由加太比良】(論語)注曰明衣以布爲沐浴衣也とみゆゆまきは(榮花)【卯花】中宮彰子後一條院を生たまふ處女房みな白き装束ともにて御湯殿のいまきなどみなおなじとなり(紫式部日記)御湯どの宰相の君御むかへゆは大納言の君【源遍子】ゆまきすがたとものれいならすさまとにおかしげなり(禁秘抄)【恒例毎日次第篇】凡禁中著湯卷上臈一人典侍一人也是候御湯殿故也云々壷井義知云湯卷は白生衣也云々ゆといいと普通ずる故いまきとも云といへり(東鑑)建長四年壬子四月一日の條

の緋ちりめんの二布をときはなしそれに紐付て與へしより此風を越中褌と云越中國より始りしとは大なる俗説なりと云り

○又或人云秋元越中守殿舊領は上州惣社といふ所一万八千石の時居城ありしなり秋元光巖寺と云は菩提所なり爰に利根川を引て用水としたる天狗岩堀割などいふ所ありもと此處水少く旱損多きを患ふ君侯其邊を見ありき地理を考て今の如くに堀られたり其時數多の人夫大かた丸裸なりしかば人別に下帶一條を與へらるゝに布多く費ける故三尺に切て紐を付て作らしむ越中ふんどしといふとこれより起る今其地この殿を神の如く祀るといふこれらの説みな非なるべし

○紀長谷雄の繪卷物は筆者不知光信前後の物と見ゆ雜人までも皆總髪にてもとゝり丸くして頂にある其中に小童たふさきかきたり前下りあり越中ふごしの体なり此さま二人みえたれと皆かく有を知るべしもとこれむつきより起りしなるべし

もつこふんどし

○もつこふんどし（明良洪範）に伊藤三白といふ老醫細川三齋公に軍物かたり承りし序に深手負又は打死せし者下帶なきよし諸人申候たとへ分捕致し候も甲か大小の類をこそ取申べきに何共合点まいらぬ儀と申候へは成程其事實正なり是は醫者などは其理心付べき事なり都て人の身体は血氣にてたもち申者也死候へば骸は肉落るなり就中戰死は血も多く出病死とは異にて結び付しものたまるべきやうなし下帶とても落申もの也それ故功者なる心掛の者は下帶の結めと前の方とに緒を付て首へかけもつこふごしと申て用ひ候是死後も脱落ぬ用心なりと被申候とあり製は異なれども今の名は是より出【是等の物語より作の越中ふんどしの異名も起りしか】

○今相撲取すまふとる時たふさきをかくに先疊紙を前陰にあつるは褌を固く引しめる故なり戰場なとにはさる事もすまじき也何を以ていへるにか（全浙兵制）に我國の風俗をいふに夾青紙一幅、掩其穀道、

ふさきとする手綱もまたこの如くちから綱にすへき布をたふさきに用たるなるべし(職人盡)舞まひなごが立えぼしの懸緒のさま手綱かきたるやう也また思ふに(和名抄)の知比佐岐毛乃たふさきと同言と思へるはひがことにや

越中ふんどし

○今のふんどし(見聞集)に愚老若きころ迄ははたの帶は麻布杯にて四尺程に切中より二ッにわり割たる方を腰へ廻し前にて結びたりしが當世の下帶は替りたり皆人ねりはぶたへなどのやはらかなる物を腰へ引まはし片むすびになせり色好みの人達はどんす繻子あやしゆすなどのはゞひろものを二ひろ餘りにきり腰へふたへにまはし後にて片むすびにとめ前へ長くさげ海道あるくとては裾をからげ股尻を人に見する下賤の小者のたぐひ迄もすると見えたりといへり【此老人若き頃とは天正年間のとなり】今の下帶の製は慶長よりと知らる古き相撲の畵を見るにたふさきみな前さかりといふ物なし此老人のいへる下帶やゝ似たり(曾我物語)に河津は股野が前ほろをつかんでさしつけ云々あるも前の處ほろに似たればいふにて今の前さがりといふものにはあらず【但し古畵なるは一幅を割たるとは見えず他の布を添て紐とし是を前に當てかく處を圖せり後ろは布を狃て結べり大よそ今の越中ふんどしに似てそれをうしろ前にしたらんやう也古へも相撲なとに用るは常のとは製し方もかはれるなるべし常の着用も二重廻りは箕山(大鑑)に男をたしなむものは下帶二重まはりを用といへり

○次て云今の越中ふんどしは古体なるを簡便に作りしものか按るに(茶事指月集)に三齋翁亡羊に物語の内に脇さしの鞘形を予か鞘は越中流とて人のゆるしつるに云々あり又貞徳が(歌林雜話)に彼殿は何事も【幽齋翁を云】古風に掟たまふとあれば此ふんどしも恐らくは彼越中流ならんが乍去諸説まち〳〵にて是非をしらず(みをづくし)に延寶年中木村屋又次郎抱に越中といへる太夫ありある時あげやにて我が相方の客風呂へ入らむとせし時下帶まではづして入らむとせしかば見苦とて俄に思ひ付湯具

彥帶は引帶なり】（居籠工隨筆）東帶衣冠の時下襲の切を細くゝけて內衣にしむるなり又云紐と云は袍の人紐文筥の紐笠の紐短くして二ツあるものゝやうに聞え緒は玉の緒太刀の緒甲の緒など長くして一筋の物のやうに聞ゆるなりさて下紐は下帶にもあらずまたたふさきふみとをしにもあらず（万葉十一）旋頭歌の下に狛錦紐片叙床落邇祁留明夜志將來得云者取置待これ今の童のつけひものやうに內衣に二ツぬひ付たりそれかかた〳〵落居たることもよみ又落たる紐を我縫つけむとよめれば付紐のやうになしたる物に極りたりと云り

たふさき

○たふさき（著聞集）坊門大納言忠信交野の御狩に馬にのりて淀川に入り水れんのめでたかりし事をいふ處にかやうの用意にやかねてたふさきをなむかゝれたりける（同書）に畠山庄司次郎と長居と相撲の處それも【長居なり】立てたふさきかきてねり出たりとありそのたふさきのさまは相撲人の古畫にみえたり

手綱

○手綱（源平盛衰記）に木曾義仲院宣の御使に小袴懸直垂烏帽子に手綱うたせて出あひしと又藤九郎盛長賴朝卿の御使にて瀧口三郎利氏同四郎利宗がもとへ向ひし時御使も憚からず烏帽子に手綱うたせて惡口せしとてこれを（春湊浪語）に東の武士のふつゝかなるも必頭をあらはさず烏帽子にかゆるに手綱をば打かけたるなりと云り安齋これを辨じて云烏帽子に手綱うたせてと云はえほしのかけ緒ゆるみてえぼしの動くをいふなり侍烏帽子のていを云なり馬に手綱うたするとは手綱をゆるく持て馬の頭のうなづくにつれて手綱のゆるぐを云なり其如くえぼしのがたり〳〵と動くを云これたとへに云たるにて古の俗諺なるべしと云り今按るに此說も非なるべし古書に甲衣を着たる者烏帽子きて上に鉢卷をしたるあり【引たてえぼし也】是を手綱うたせとは云なるべし侍烏帽子にも鉢卷したるは（曾我物語）敵打の條に十郎は白き手綱を以て鉢にかきつゝ白帷の腋ふかくかいたる云々是上にいへると同じ事也た

と同言なり(和名抄)鞍馬具に絆【保太之】とある是なり馬をとゞめ置具にて其さま似たるよりいひ出

手綱

しは賤き名なり手綱ははだばかまたぶさき等の名あり手綱は(春湊浪語)に犢鼻褌と同じ類なれ共短き肌袴なりといへるはいかゞあらん(八幡殿着鎧次第)に手綱と見え又(曾我物語)相撲の處に手綱二筋より合せなどあるは強くしむべきものなれば平常の紐にはあらぬにや猶下に見ゆ

はだばかま
たぶさき

○(和名抄)に褌、方言注云、袴而無跨謂之褌【和名須万之毛能一名知比佐岐毛乃】とありて(唐韻云)衳【揚氏漢語抄云衳子毛乃之太乃太不佐岐、一云水子】小褌也とみゆ是を(秋草)に毛は犢鼻褌也はだばかまの下にかくたぶさきといふこと也云々はだばかまは褌也犢鼻褌といふも(源平盛衰記)に【宇治川先陣の條】はだはかまをかきと有褌は長短かくして膝の邊まで至る袴なりといへり(和名抄褌)は一條にして其條下に衳も出たり衳は褌のなほちいさきものにて必しも衳の下に衳子を着るにはあらじ【今も其製種々あるが如し】さはれ毛とあるは廣く袴のことをいふと聞ゆまた(春湊浪語)に盛衰記に難波六郎が

下帶

布引の瀧にいりし時に紺の袋をせしとある袋字にした帶と訓せしいといぶかしき後代に付たる訓にや尤もふるき歌に井手の下帶また下の帶の道はかたく〳〵などよみて下帶といふこと其名なきにはあらねど是はたゞ常の帶のことなり(清輔奥儀抄)うへしたに帶をはすれば下帶とはいふなりと見えたり今の俗にいへる下帶といふことはふるく聞えずと書り按るに(和名抄)衿帶陸詞云【衿和名比岐於比】小帶也釋

ひきをび
彦帶

名云衿禁也禁不得開散也とみゆこれ古にいへる下帶にや又今小兒のつけ紐を彦帶といふも此ひきおびの轉にや(誹諧溫故集)に一漁が句を擧て彦帶を母はひかへて柳かなゝどいふもおもへば彦帶はひこふる帶にてひかへの義なる歟【(古事記)八千矛神の御歌に比古豆良比とありツラヒは即つりを延たるなり今世に引づると云なり(源氏)【若葉上】猫のつなゝかく付たる云々逃んとひこじろふほどに云々【夕霧】惜みがほにもひこじろひたまはねば云々など見ゆ然れば今引しろふと云とも本是なり小兒の

にもと女形前帶するヿ昔は曾てなし是近代のヿなり明暦のころ東山邊の茶店の者いそがしさの餘り後へ廻す隙さへなく其儘に居たりしに其風傳へ移り今世間一統となるといへるは妄說なり前帶のヿ前にいへるが如し且つ結め前にありては立ふる舞障りとなる故片脇より遂に後ろにて結ぶヿは始りけんヿに帶はゞ廣くなりては彌便利になりて習となりたるをざれたる方にこれを好みしと見えて（一代女三）

後帶　後帶はきらひなれどもそれ／＼の風儀にかへて黃唐茶に刻み稻づまの中形帶云々あり是は武家風なり嫌ひなれどもといふにて前帶の事知へし（同草子）【老女の隱家といふ條】むかし小袖に八重菊の鹿子紋をちらし大内菱の中はゞ帶前に結び（女重寶記）【元祿九年】帶のヿ結一はゞに大ぢらしの染帶長さ八尺にして前結びこれ今のはやり風なり帶は中ごろはやりし茶繻子花色繻子など老若にかよひて目にたゝずよきものなり元祿八年板行の師宣が（百女圖）に前帶なるが多し袖とめぬ女にもあり或人云寶曆の頃江戶町二町め兵庫屋に志賀崎といふ遊女あり帶はゞ二尺五寸にしてかるた結びにむすびたり世に帶志賀崎と異名を呼り（歌舞妓事始）に男の如く四角にするをかるた結といふ平十郎結といふは三代め村山平十郎といへる立役者が結び出たるより初る路考結び二代め瀨川菊之丞初めたりといへり（元祿

疊帶　曾我物語三）白じゆすの疊み帶結び先一文字にしてといへるも似たる結びやうにや疊帶とは心なしの帶なるべし

晝夜帶　○兩面かはりたる帶（江戶名物鑑）に兩面帶夜晝の帶もとけつゝ閨の月といふ句を出すこれ晝夜帶なり

鯨帶　又鯨帶ともいふ天和中板行の（題林一句）に鹽吹やあせのうらきの鯨帶とめゆ只兩面かはりたるばかりにあらずもと黑繻子に白裏合たる故に鯨といひ又晝夜の名もあるなり（昔摸樣龜山染）【八段目】白いと黑と巻付たら鯨帶みる樣でしまりがよかろ【明和七年の淨るり】

ふんどし　○ふんごしはふもだし也とぞ（万葉集十六）乞食者詠に馬爾已曾布毛太志可久物云々ふもだしはほだし

寸位男帶はゞ二寸五分位尤糸さなだと云は只一枚に織たる物なごや織は袋打なり云々右いづれも夏帶地なり是今も常にあるものにて彼小玉打とは異なり名古屋帶そのかみはやりしと見えて（椀久物語）に重打の紫帶といへるは是なるべし（入子枕一）小倉しまの帶をやめてなごや帶云々見ゆ

帶の結びやう
前帶
はさみ帶

○古は帶紐みな前にて結びしなり是自ら順にして本義なるべし近く猿樂狂言の女みな前帶なるにても知べし寛文の頃までは女も多くはさみ帶にして居たりつき込帶ともいへり箕山か（大かゞみ）につき込帶といふと昔はなかりつれど近代京より始る帶さきを結ばずに折込となり是傾城に一段と取あひたるものなり結び込たるはかたし立居にしやらほどけして帶を引廻しながら座をたちたる体おのづからにて風流なり又云帶の結びめは眞中より少し右の方へよせて結びたるがよし（風流徒然草）昔は帶のはゞもせばく胸高なりし故尻小く見え立に結びめもなくついはさみたる故取なりも細く丸く腰の平たきよね一人もなし當世は帶も繻子の一幅をふじ三重のあたり迄引さげむすびめは大なるまな板の如し夫故すそ廣にあづちなごを立たるやうなりせいひくきよねは一入取なりあしゝといへり秋色が句にむかし遊女さし込帶や雪の峯遊びは常の女とちがひ帶のはゞなごもとに廣かりしとみゆ（西鶴置土產三）土人形をいふ處遊女にしては帶がせましといへり

吉彌結び

○吉彌むすびといふは（西鶴大鑑六）東洞院の浮世紺屋の娘すがたのお春といへる名とりあり上村吉彌これをうつして一丈二尺の大はゞ帶くけめの角に鉛のしづをかけ世に吉彌むすびとはじめて今にはやらしぬ（虛栗集）かなはぬ惡を祈る淸水【嵐雪】山城の吉彌結びに松もこそ【其角】菱川やうの吾妻俤【嵐雪】（雨夜三杯機嫌）といふ野郎評判記の序に砂は岩となりて吉三風の衣を肩にかけ金は山となりて吉彌流の帶を腰にまとふ云々水木辰之助を評する處とり〳〵上村吉彌ともいふべしなご見えたり（吉原徒然草）には吉彌結びはもと玉章結なり吉彌が結びそめしといふは誤なりといへり（歌舞妓事始）

結たりし故なり【（天和笑委集）上野花見の條に品こなるたて染に一尺五寸の大振袖ゆき短くつま高く當世やうのみせばに仕立二ッ三ッ四ッ重ね着て一ッ前に引合せ小つま揃へて着たるもあり腰に餘れる丹前帶うしろへきりゝと引廻し吉彌やうに結ぶもあり前にまはしてかるたむすびにしけるもあり

丹前帶

（一代男）に紫のつれ左りまきと云るこれ丹前帶なるへし（産業袋）【享保】帶地類繻子【縞無地】紋賢(モンケン)或ははかたなご幅二尺五寸たけ一丈また一丈二尺帶だけに織出す二ッわり女帶三ッ割にして男帶とす【中略】もうる帶地の織切或は一丈二尺とひ金入色糸入これも二ッ割なり糸織といひて女帶にさつま織小石織市の屋織男帶に琥珀みよし斜子(ナナコ)はかたさつま丹後其外數々多し提帶地厚板の帶といふ上物は六寸幅に織切にしてあり次は幅にて仕立る三割にして賣出す中入紙を用とあり六寸はゞなれば仕立ては三寸足らず是昔の常の帶はゞなり

組帶

○組帶は（女房衣裳次第）に云帶はいつものが可然候夏は又すゞしの帶をも用候次にくみ帶は仕まじく候賤きものにて候云々かくいへるにて女の用ひしとしらる男子のもちひたるは（室町殿日記十九）諸方の溢れもの黨をなし都に徘徊する事をいひて此者ども愛宕へ參詣すべしとて一やうに出立ける赤はだかにあかね染の下帶小玉打のうち帶を幾重ともなくまはしてしかとしめ三尺八寸の朱鞘のかたな云々この小玉打丸組なるべし又（一代男二）寛永ごろの男達をいふ處染分の組帶せかいらげの長脇差云々これまた似たる出立なり（櫻陰比事）に昔都の町小川通りに車うち迪名とりの糸屋ありといへり（竹齋物語）にある上人の裝束をいふ處御衣はひぢりめん帶は天下にかくれなき二條通の百足屋が上人さまの御帶とてこり分心を盡しつゝしんくの帶の八ッ打に金しやをませてぞめされける云々此丸組帶を女童も用ひたり又兵衞が遊女をかけるに此帶見ゆこれを名古屋帶とするはいかゞ專ら肥前名護屋にて打た

名古屋帶

るのみにもあらず且つ名護屋帶と云はまづはさなだの袋打なり（産業袋）に名古屋帶女帶は總付はゞ四

まのあたり見しとなり古きを知たる人あらば尋問へし云々（昔々物語）女中の帶皆金織の巾三寸長七尺五六寸なり又純子繻珍の帶も皆おなじ巾丈なり半下(ハシタ)は木綿金入として針妙腰元の帶長さは右に同じ寛文末よりはゞ廣になりて延寶の頃彌廣く純子三ッ割二ッ割などにて長さ一丈二三尺になりぬ費なる事共なりといへり但し遊び女の類は早く廣き帶用ひしと見ゆ（吾嬬物語）【寛永十九年遊女の事をいふに御物ずきなるかたびらに色々の御帶の廣さ五六寸あるべきを前にて片手結びになされ云々（東海道名所記）西坂の條遊女がましくて來るを見ればつくもの如くなる髮むさ〳〵とたばねなまじゐにはゞ廣き帶を腰にまとひ云々【（女鏡）に廣過ればはしに見ゆることはかゝるをいふ也】西鶴が（一代女）【貞享元年】當世の風俗身の程をしらぬそかし一丈二尺の帶むすぶも氣のつきることぞ昔は女帶六尺五寸に限りしに近年長うして物好みよげに成ぬといへり爰に昔と指すは寛永頃にや一丈二尺の帶幅をいはざれ共二ッ割なるべし物の移り替るは常なれど其内わきていたく變る時ありと思はる天和貞享のころ即是にて帶廣く袖口大になりなどしたる此時なり（紫一本）に淺草並木の茶屋女をいふ處たて染小袖はゞ廣帶尻のとがりに引かけてぜいをやり云々（芭蕉文集）納涼の辭に女は帶の結びめいかめしく男は羽織長く着なし【女帶結びめ大になりし頃なり】（誰袖海）【元祿十七年】花色しゆすの二ッ割紫ちりめんの

かゝへ帶

かゝへ帶云々又胸高なる帶つき【皆其時のはやり風なりかゝへ帶は今いふしごきの腰帶なり胸高は（昔々物語）にて帶ははゞ廣胸高に尻を長〳〵と出し歩行ざまごた〳〵と身しなもなくと云り】（俳度曲）【享保七年刻】繭入に押賣するぞふくさ帶といへるはかゝへ帶をいふ歟今腰帶ならでも縮緬類の帶をふくさ帶といへどそれにはあらじまた帶に鉛を入たる事あり（一代男）【卅三歳の條】女帶をいふ

鉛のしづめ

處帶は紫のつれ左よりまき結びめ後にくけめのすみになまりのしづめを入とあるは帶の端さがるやうにしたるなり是を吉彌結といふ【後に出】結びめうしろにとはりいへるもと脇のかた前の方なとに

色ふかしと見給ふ【典侍のもとより落たる帯を源氏へ返したるに頭中將の帯にて源氏のにはあらず】（花鳥）に聽直衣人者は直衣のきれを帯に用ひたる也とあり但し女の帯のさためにはあらず（七十一番職人歌合）に帯うり、人妻にかけし衣の細帯のくけ地もあらば嬉しからまし其頃女の帯も男帯の廣さ二寸ばかりもあるらむと見ゆるを左右はいつれにても脇のかたにて片膝に結びて下げたり古畫ども見てしるし（豹文記）に昔は六ツ割の帯を被用候つるを慈昭院殿様の御代より相止られ候人によらざる義

八ツ割帯

か（女房筆記）に古は帯六ツ割にて候しじせうゐん殿御代より八ツ割になされ候人によるべからす候【慈昭院殿は東山殿義政公なり寳徳より文明の頃】とあり此頃は古くよりやゝ廣くなりしを改められしならむさて後世に至りては廣くなりしと見えて三弦の書（大幣）とり組の歌に京では一條やなぎやが

四ツ割帯

娘よつわり帯をたすきにかけて【此歌は文祿慶長ころなり】帯地の幅凡全幅二尺五寸を四ツ割として見れば巾三寸許の帯なり（落穂集）に就中殊の外樣子かはり候は上下共に女中の帯にて有之我等若き頃迄は万の巻物を三ツ割に致し絹羽二重の類は二ツ割と定りたる如くに有之別て高田やうと申候三ツ割を又三分狹にくけ其端を詰押込て差置候如く有之候處四十年許以前より巻物類を二ツわり絹類は一幅を其まゝにて用うしろの結びめなども夥數大に致候（女鏡）【慶長板】帯は廣きもせはきも時のはやりに從ふ廣すぐればばしに見えて鄙きものなり又ちいさすぐれば腰もとあしくおよそ二寸五分たるべし染やう大ちらし抔はばしにて宜からずこれもしんにたてなるをほんとすのりのこはきは宜からずさげ帯

鉢の木帯

なとは格別なりそれも柔かなるをすべし（春臺獨語）に婦女の帯は金襴を美麗の限りとし黑地に梅櫻松を處々に織付て是を鉢の木帯と名付て珍重しけり廣さ纔に鯨尺二寸ばかり紙を心として綿などいるゝ事なし四月より八月まで婦女の禮服に綿にて廣さ鯨尺の八歩ばかりなるを後に結びて垂るゝをつけ帯

つけ帯

と云今のつけ帯は昔の常の帯よりも廣し今人に昔のことを語れば虚言と思ひてつゆ信とせずこれらは我

假面にて半面とは異なり半面は（天祿識餘）に元仁宗宴群臣於長春殿、供事內臣進饌有咳病、帝惡其不潔、命爲疊金羅半面閣之、許露兩眼、下垂至胸、自是進饌者以此爲例また（通雅）衣服類、屏息、奉獻以掩鼻者、遯園曰、太常供奉祭品如羹醢之類其奉獻人、口鼻用物作長袋繫頸後、俗名抵鬚、非也、志名曰屏息、太廟以黃羅、他祀以紅紵絹爲之、こゝにて祭祀に細男が覆面する事あり神功皇后異國を征伐し給ふ時磯良といふもの覆面して舞へるより起れりとぞ皇をいやまひてしかせしなり

ほゝかぶり

○（俳諧懷子）【付合】立かへりみる塗笠の內、ふくめんを誰ともしれぬ姿にて【寬文のころ迄もぬり笠の下に手巾をかぶれり】（昔々物語）召仕女の針妙こし元も外へ出るに顏をふくめんし又綿にて包みありく也【（奉使俄羅斯日記）遇疾風揚沙、目不起視、須用臉罩、これまた覆面の類なるへし江戸近來大火たび〳〵あり燒原にて風灰をあげて目に入る故老人などは目がねをかけてありくを見て頓てうすき硝子をいさゝか目のあたる處に用ひ紙をもて目がねのやうに作りたるを灰よけとて賣ると初まれり文政年中より起る

○古く笠の下にふくめんしたる是をほゝかぶりといへるにや（太平記）師直誅せらるゝ處に蓮葉笠を引切て捨るに頰被りはづれて片顏の少し見えたるを云々あり又今いふほゝかぶりは（似勢物語）【寬永中の草子】おかし男ほゝかぶりしてならの京かすかの里に酒のみにいきけり云々（五元集）名月や居酒のまんと頰かぶり明曆二年丙申二月廿四日町觸跡々より如申觸候ほゝかぶり頰覆面彌法度候間あみ笠の下又は編笠なしにも堅仕間敷候むかしよりこの法度は有しなり

帶

帶【かゝへ帶、鉛のしづ、小玉打、名護屋帶、結びやう、前帶、彥帶、下帶、手綱、はだばかまたぶさぎ、烏帽子に手綱、越中、下裳、湯卷、早川、湯具】、

古の帶はその服の截餘をもて作れるにや（源氏）【紅葉賀】おびは中將のなりけりわが御なほしよりは

角なる絹の切の角々におもり付て落ぬやうに拵へかぶりしとぞ元祿の頃加茂川のしほ水木辰之助工夫して縮緬にて風流にこしらへ色は紫に定めたりと云り（塵塚咄）に我ら若年の頃は瀬川ぼうし船綿ぼうし其外流行の綿ぼうしを貴歩行けり是もいつか絶てなし諸侯の奥方他行の時供の女ぼうしを用る家おほし

船綿帽子

又一向宗門徒の婦人角かくしとかいひて寺參りにかぶるもの綿ぼうしの遺風なるべし【（長崎歲時記）一向宗御正忌とて男子は肩衣を着し女子はさらし木綿或は布西洋布の類を以て頭にかつき是をおよほしといひ俗にすみ手拭また角かくしと異名す新婦兒女といへども皆是を用ると云り是は寛政丁巳の刻梓なり【（江戸名物鑑）に帽子屋に瀬川わたと有り彼が紋所結綿なればかた／＼名とする歟世にありふりたるものも歌舞妓に用ひぬればそれに名を奪はれて役者の名を負ぬる類いと多し澤之丞ぼうしは前條にいへるおもり頭巾の類瀬川屋ぼうしは屋敷女を學びて着たるとなれば其時始めたるにあらぬ事知べし小きんぼうしはこきん綿にて卽てぼそなるを彼（伎藝古實）にはこれをも藤井古今といへる女形より始れりといへり非なるべし

角かくし

覆面

○古へ女は外に出るに衣かつぎ深き笠を着下さまなるは桂包みなどして覆面はせざりき永正大永已後手巾やうの物を頭にかぶり上に笠きたりこれ覆面の類なり（職人盡）の繪などに賤き者は覆面して笠きたるが多し其外祭りには細男の覆面舞樂には按摩蘇利古の象面ありおぼつかなきは（源氏）【夕顏】源氏夕顏をかたらひ河原院へゐて行たる處に顏は猶かくし給へれど女のいとつらしと思ふへければ云々これは源氏が夕顏に顏をかくして見せざるなり（細流抄）にふくめんをたれて面をかくしてありくとある也（花鳥）かりきぬの袖などを覆面にせるにや又扇などさしかざし半面にかくしたる心かといへりいかさま覆面にてもせざれは誘ひ出してこれまで隱し居らんとかたかるべしされどかやうの人のふくめんしたるは古畫などにも見及ばず覆字おほふと訓ときはフウの音なれどもふくめんと云來れり象面は

少したけなる女は綿ぼうしなり

うたき綿

○うなぎ綿促綿と書は（神代紀）所嬰ウナガセル（万葉）に宇奈雅流珠（ウナゲルタマ）のなど云も頭にかくる也さらは頭におく綿は何をもいふべき名なり又按に（和名抄）髻髮和名宇奈爲俗用垂髮二字云々ありウナ井綿にや左右垂たるをもて名付るならむ

ぼんぼり綿

又ぼんぼり綿は丸わたの薄く透たるをいふにや（續山井）うす雲はぼんぼり綿か月の面【有之】又（後撰夷曲集）遠山のいたゞきにあれば面白くぼんぼりと見た雪の綿かな【滿水】（天和笑委集）上野花見の女を云ふ内御所女中は云々ぼんぼり丸綿わけよくかぶり云々

澤之丞帽子

○（吉原徒然艸）に澤之丞といふ野良帽子の左右をたれてかつぎけり小娘をごり子などの帽子の最初なり元祿の初の頃よりひろまりけり【澤之丞本の名は荻野左馬之丞なりしを江戸に下りし時改名元祿十四年（諸藝太平記）に按に澤之丞數年江戸に居て諸人ひゝき强く女の扇櫛笄のもやうも桐の紋を付たり元祿十一年茸屋町に鬘付みせを出し其次卯の年顏見せに袖崎いろは市村座へ下るこれ齡厄年を越たり澤之丞はかれに二ッ劣れりとあれば年此時四十二に近き頃なり巳年は即此双紙の時十四年なり此時又上方へ歸れるは江戸にていやましに行はるゝによりて京より前銀を打て辰の年冬山下座へ呼よせ已の正月二日より出て評判よしと云り】（類柑子）に辰之助が猫は焦尾琴のしらべに踊り澤之丞が帽子は菊の宴の紫に匂ひて二度の藪入をかざらずといふをなし云々八文舎が（歌舞妓故實）に澤之丞帽子元祿の初め澤之丞といふ女かたかつぎ初たり左右に鉛のおもり付たるよし依ておもり帽子といふ

瀨川帽子

瀨川ぼうしと云は先瀨川菊之丞享保十九寅年中村座にて生肝の狂言屋敷女中風俗にて切落より出し時初てかぶれり其頃より專らはやる云々

紫帽子

又云歌舞妓にて用る紫ぼうしはそのかみ鳥居庄七といふ女方始む是ひらりとさげてきせたるよし

やでん帽子

又天和の頃玉川千之丞といふ女形黑きぼうしを上にて折込左右へさがらぬやうにしたりそれより加茂川のしほ兒傳兵衞といふ者これかつらや傳兵衞なり工夫してやでん帽子とて四

きに白きぬともにうつもれてかしらに菊のうへおほへて綿ひきちらされたり【皆保養のためと見ゆ】

綿ぼうし
種々

○綿ぼうし義敎將軍永享四年四月（富士御覽記）ふしのねも雪そいたゞく万代によろづよつまむ綿ぼうし哉飛鳥井雅世卿今川範政が綿ぼうし献したるにつけてよまれたるなり（歌林雑話）に丸十二三の時綿ぼうしをかつきたるを遠くよりみつけてさん〳〵に叱られし此年迄さのみ頭巾をもせぬは此高恩なり〔これは貞德幼年の時紹巴に叱られたることをいふ也その頃少年綿ぼうし着たるにこそ〕（物類稱呼）に綿帽子江戸にてゝぼそといひ堺にてときん綿といふ肥後にてゝぼそといふは腰帶のとなりと有わた帽子種々あり（鷹筑波集）にかねうちなくてぬめる人かはおはくろを付ぬもかつくうなき綿（寛永發句帳）雪やけさそのまゝ櫓の額綿【照皇】（一代男四）紀州加田の風をいふ處紫のわたぼうしあまねく着ることにぞ有ける（産業袋）【享保十七年板】の〔五〕丸わた此ころとの外大きなるあり船わた手ぼそといふなり古今綿あるひは頬包とも云なり促綿（ウナギワタ）うこん淺黄の染綿にても作る此類近代いろ〳〵に作るといへり手

手ぼそ

ぼそは船わたといふにて其形しるべし自笑が（色三線五）めかくしする處紅打の手ぼそにて目をかくしといへるも綿にて作れるなり又絹にて頬かぶりすることもはやれり是もしごきの腰帶も共に手ぼそといふ細き義なり（松の葉）【半太夫節狂女】上野花見の處もしほかく袖ひとつまへ繻子や唐あや白ごんす縫すり箔のはゞひろをゆかりの色や紫のちりめん手ぼそ結びさげ云々是は腰帶をいふ（丹前能五）伊勢道中の處傾城と打見え綿ぼうしの上を淺黄ちりめんにて包み又（松の落葉）四條涼八景【加賀節】紫ぼうし御所かつぎ思ひ〳〵のだて姿（衣食住記）に元文の頃迄は綿ぼうし丸わた舟わた瀨川わた其後ちりめん羽二重紫ぼうし淺黄ぼうし白練に紅裏ぼうし寶暦のころ黑ぼうしお高祖頭巾それよりむきつらになりたり元文頃まては女のかぶり物なしに出ありくとなかりしにいつとなくかふりものは止み安永の頃よりそろ〳〵と御堂ぼうし御堂わた一向ぼうし共いへりとあり若き女白練紅裏のぼうしきる頃も年

宗十郎頭巾

頭巾のしころが七の圖まで下る百姓は身帶のさがるも又それ程髭の毛のうへにあがる程馬鹿もあがるもの云々このしころの頭巾は即ち宗十郎頭巾といふものなり（類柑子）小兒のことをいふ處しころ頭巾のおかしげなる云々これは比丘尼などの着るしころ短き頭巾なるべし

帽子

帽子【ゆぼうし、綿ぼうし、種々、てぼそ、角かくし、覆面、こきん綿、紫ぼうし、澤之丞ぼうし、瀬川ぼうし、舟わたぼうし】

ゆぼうし　桂帶

猿樂狂言にゆぼうしといふは木綿帽子なるべし後には桂帶ともいひ其包みたるをかつら包といふ（昔々物語）に昔の淨瑠理のことをいひて人形の拵へやうも女の主人には髪をすべらしかつら帶かけて召仕まで如右云々ありこれは室町將軍の頃の風俗なれども寛文以上の淨るりには然ありしなるべし（夏山雜談二）西國邊にては賤女は物詣などする時白布もめんの類にて長き鉢卷をして前にて結びさぐるなり古の賤女はかくせしにや能狂言の女は鉢卷をするなり（春湊浪話）に今世婚禮の時桂女といふものを供につるゝ是は鬘女といふ桂女と誤れるにや徃古は玉かつら木綿かづら花かづらなどありて卑き女は木綿かつらせしと万葉以來歌にも多くよみたり後世京都將軍の頃までも布をもてかつら卷といひて乘輿に從ふ半女など常の事にてありし故なりといへるが如く帽子はこれより起りしものなりよき人は衣かつぎ賤女はかつら卷したりそれより帽子となる古書にかつら卷の体一様ならず又五色の筋など染たるもあり又黄なる無地もありもと手拭をかぶれるにて今世も同じことながら古は手拭もいと長く婦女膏澤を多く用ひざれば髪散みだれ易き故に頭を包むを常としたる也その風後代に式正の如くなりし也そは是のみにあらず（續山井）屆かぬや山のひたひのかつら帶【秀成】

綿を戴く

○綿を戴くと（取かへばや物語）産婦をいふ處子持のきみいみじかりつる事のなごり綿など打かつきところせげにくゝみふせられてね給へる【これらは常のことにあらず】同（一）同やうの處色はくまなく白

巾等止むほゝかむり表ちりめん小紋或は黒ちりめん紅裏たけ三尺餘りまた後を縫てかぶるものあり（江戸名物鏡）覆面頭巾づきん程白きものなしけさの雪【女花虹】

頭巾に作り髭

○又頭巾に作り髭は浮世ぐるひする者のために設く（諸艶大鑑八）吉原日本堤の事をいふ處忍ぶ人の爲とて懸髭布頭巾賣など云々又（誰袖海三）同じ處のヿをいふに頭巾に作り髭かけて戀の奴姿となるもあり

おもり頭巾

○おもり頭巾（榮花咄）におもり頭巾留針其碩が草子にも同じ如くあり是はひらり帽子のかへり易ければ左右の端に鉛のおもりを入たる也【猶下にいへり】

こしやう頭巾

○こしやう頭巾（鹽尻）惡黨の漢名を擧たるに艸寇【オヒハギ】闖香【我國ニイフコセウ頭巾の類也】といへり大坂聚樂町に梅の澁や吉兵衛といふ者こしやう頭巾の本人なるが元祿二年四月十九日大赦に逢て獄を免がれしが同五月十九日天王寺屋久兵衛といへる兩替店の召使長吉を殺害して六月十九日捕へらる其始末うるさければ記さず【（茜染野中隱井）といへる淨瑠璃是なり】難波長吉踊といふ唄あり此事を作れり一雪が（新著聞集）梅澁吉兵衛といふもの胡椒づきんといふ事を始て仕出す程の大惡黨なりといへれどこれ始にあらず延寶八年撰みし（洛陽集）に胡椒頭巾すりあやなし年の暮【梅水軒】かくあれはもとより其稱はありしなり頭巾にて面隱し又は人をかごひて頭巾を打きせなどしたるにや胡椒は辛きをいふ山椒太夫の號にひとしかるべし（草廬雜談）に唐書の王君郭が傳に負竹笥如魚貝內置逆刺見鬻繒者囊其頭不可脫乃奪繒去民間に云つたへたるふくろ頭巾といふものゝ類なるべしこの袋頭巾と

袋頭

いへるは即ち胡椒頭巾なるべし（芝居役者伎藝古實）に宗十郎頭巾は古助高屋いまだ宗十郎といひし頃梅の由兵衛の時かぶりしより今に其名を殘すといへり此狂言に用る頭巾小さき鎖（ジャウ）を付たり胡椒を小鎖に取なしたりとみゆ【彼剪徑（スリ）のきたるもしころ頭巾にや知るへからず【（敎訓下手談義二）ちりめんの

はげが頭巾

○はげが頭巾これは頭巾の名にはあらず老人の禿頭に着たるは戀ゆゑか寒き故かと難じたるなり【以上】(寶倉)に出たる頭巾ともなり

○(一代男双紙【天和】頃髪は水引かけて黒しゆすのきごく頭巾【女の着たる也】(一代女册子)【貞享三年】女奉公人數人の處きごく頭巾より目ばかりあらはし(誰袖海)【元祿十七年】貴賤群集の女の中

風呂敷頭巾

云々深う人目を忍ぶと見えてきごく頭巾に顔かくし云々この畵のさまをみるに覆面を付たるにあらず今の風呂敷頭巾に似たるを頬かむりしたるやうなり(春臺獨語)に婦女むかしはきまゝとて黒き絹にて頭面を包み目ばかりを顯はしける其後絹にて頭面を包みしは我廿あまり寶永頃までしかなり今は小き綿を頭上に頂きたるのみにて面をば打さらしはれやかなる皃にて道を行さま面はゆげとも見えず男は面をあらはすべきものなるに此頃はあみがさ眉迄かゝるをかぶるは珍らしからずかぶとの如くなる帽子をかぶりて面をかくすもあり常の頭巾に覆面の如くなるものを綴り付て目ばかりをあらはし道を行

おこそ頭巾

もあり(賤の緒手卷)に頭巾も品々流行たり大底大黑の如き括り頭巾に少ししころを付て襟をかくし用ひたり年來の人に役人などのかぶりたる也其後宗十郎頭巾角頭巾目ばかり頭巾がんだう頭巾袖頭巾は遊客の用るに至極よろし禁あつて止む女のかぶるには髪そこねずして甚よかりきと有これおこそ頭巾なるべし(五元集)に童にはしころ頭巾や煤拂ひといへるは彼大黑の頭巾に似てしころ付たるをいふな

袖頭巾
大明頭巾

るべしおこそ頭巾は袖頭巾なり(我衣)に寶暦元年大坂より中村富十郎といふ若女形下る寒風を防がむためむらさき縮緬にて帽子を作りたり時の若き女これをかぶり男もかぶるものありし其時是を大明頭巾といふ甚見苦しとある是なり晋隱元頭巾といひしも是歟袖頭巾といひしは享保十九年印本(櫻鏡)に花盛りそれかあらぬか袖頭巾といふ句あり寶暦元年よりは十八年前なり彼俳優に始るにはあらず又其

きまゝ頭巾

着たるさま日蓮上人の像に似たればお高祖頭巾ともいひしなり(我衣)又云寛保三年頬かぶりきまゝ頭

しかゝる珍しき物を地下におさめおかは後の聞えもあしかりなむとて國の守へさゝぐるに國守御留守にてしばし待て廣間に居る忠節の者なればとて御膳給はりけるに件の神變奇特の頭巾に汁を次て出しけれは在所者肝をけしすべきそしやうもなくて在所へもどりしと也と云りこの長老問答の繪有てその處にともかうもの沙汰と書たり金色とは提子なり（林逸節用）に出つともこも頭巾を奇特の異名と呼ふはそのかみ此物語ありてこれを取たるにや此頭巾もこの名は頗富なり一物にて三名ありこれを思へば寶倉に多く出たる頭巾同物別名にもあらんか】其後大和貞享ころ專ら女の着たる頭巾にて今時はきごくと呼り又氣まゝともいへり（五元集）に目ばかりを氣まゝ頭巾の浮世かなといひしは元祿のころなり

をくそ頭巾　がんだう頭巾

○をくそ頭巾は苧屑にて製りたるなり（物類稱呼）に江戸にて枲(カラムシ)づきん又がんだう頭巾といふを北國にてぼうしと云ひ又をくそ頭巾をくづ頭巾といふ武州秩父にてちよつべいといふとあり越後にては菅(スゲ)を以て作る輕きを便とす是をいつばいと云ふちよつへいもいつぱいも共に胄の頭盔(トツパイ)になすらへて名けたるを訛れるなり又山岡頭巾ともいふ（洛陽集）人かひの名にや穢れむほくそ頭巾【脊澄】人かひは人かごひ也がんだうは强盜なり

山岡頭巾

なげ頭巾

○なげ頭巾（鞭草）にひか〳〵光る投頭巾たてなる麻きぬ着て躍れば木曾をどりともいふべきか（佐夜中山集）心ひとつになげ頭巾着て。いへばえにいはれぬふりよばか踊とあれば踊に多く用ひしとみゆ又（同集）に投頭巾ゆるし給へや人〳〵よ【信元】四角に縫たるを後の方へ折てきる頭巾なり【傀儡師人形また今小兒にも着るあり】又いと長きもあり難波にて俠客などの着たるも其始（東海道名所盡）けんくわ買の奴といふに投頭巾をやりおとがひ迄引かぶり云々（歌舞妓事始二）黑舟頭巾と云へるは立役姉川新四郎始めたりと云へる是なるべし但此の者より始ると云るは非なり（温故集）に日光へ思ひ立に雀子も笑へ旅出の投頭巾【蓮谷】

置き頭巾
ほうらく頭巾
をかざき頭巾
熊坂頭巾
もつかう頭巾
隱元頭巾
御高祖頭巾
奇特頭巾
氣まゝ頭巾

はてや丸頭巾【柳居】（佐夜中山集）紫にそむるや藤の丸頭巾【英総】僧徒の頭巾なり鞠頭巾といふは少し異なり（寛永發句帳）寒きとも誰かゆるしの鞠頭巾（風流後日男二）くだんの大臣丸頭巾にて床柱にもたれ【侈れるさまなり西鶴が（置土産）一大臣置頭巾して書院毛抜を持云々（永代倉）に旦那と呼れ置頭巾云々】古き繪艸子を見るに置頭巾大かた丸頭巾とみゆ【もと僧徒の頭巾なれ共流行おのづから如此】これをほうらく頭巾ともいふ（一代女五）この親父衣裏に綿ぼうしをまき夏冬なしのほうらく頭巾云々ほうらくは豐樂にや

○をかざき頭巾丸頭巾にしころ付たるを熊坂頭巾と云もしこれにや短きも長きもあるべし長きを熊坂といふ

○もつかう頭巾其形おもふへし

○隱元頭巾は今御高祖頭巾といふものにや此禪師は承應三年來朝す元隣が今やうといへる寛文中よりなれば當時のことなり

○奇特頭巾これは前に覆面を付たる也（同元隣が作の（誰身の上六）是は明暦二年撰なりおごけたる物語あり文長ければ畧してしるす昔さる人田舍へ金色(カナイロ)を贈りしに田舍にてこれをしらず皆々打よりて寺の長老に尋ねしかば長老も是をしらねども識りたるふりして云やう京には近年六角堂の辻風とてつよきから風吹て太佛のつりかねなどをも吹ちらせは洛中其風を防かむことを神に祈りしに夢想ありて此頭巾を賜ふ名付て神變奇特頭巾と云間て云頭巾はさることさふらはむ此上に反(ソリ)りたるはしの樣なる物は何にて候ぞ答云この頭巾をも取て行ほどの風なればひかへのほゝ當なり又問云くちばしのやうなる物はいかに答云これは人の物いふを聞ための耳の穴の口なり又不審して問云さあらば兩方にあるべきを一ツあるはいかが答云兩方にありては夜臥に枕につかへてあしき故なりと云けるに一在所の者ども感心

巾わかれを急ぐ鳥の聲こそつらにくけれ露は袂よをかさき頭巾情を荷ふもつかう頭斤今やうのとなから緣につるれば唐の物くふ隱元頭巾ふしぎにこふや奇特頭巾賤山がつのむくづけきも心をみだす苧くそ頭巾おもひの淵にあこがれてはかなく身をもなげ頭巾こそいと哀には侍るなれはけが頭巾は戀か寒さか花の顏のほあてかくす八重霞、寒風防得一團結若輩任心被無由病氣狂言踊場外貴人頭上不曾尤さいへり此一條頭巾の名多く出たり先はじめに老人病者の外は憚るとをいひたるも其頃若き者うき世ぐるひには格別つねには着るとを我も心ならず人もとがめたるなり（建武年間記）於陣中可加制止條々一俗人異頭異形事一用簑帽子事とふるくも見えたり

ともこも頭巾

扨ともこも頭巾は今出羽國秋田にて用る一種の頭巾あり惣体江戶の婦人當時用る頭巾に似てうす綿を入顏の出る處左右に細き紐を付たりこれを前より後に廻して結べば顏と目ばかり出るこれを方言にともつたといふは呼やう訛れり此頭巾やゝ古し（犬筑波集）に頭巾をだにも今はかつがすともかうもせし昔こそ戀しけれ（醒睡笑）に大晦日に幼き子に敎へて元日の朝わが此頭巾を手に持たらばとゝのともかうも頭巾をもたればといへと云々（世話盡）（明曆二年板）戀の詞の內ともこも頭巾を出せり浮世ぐるひに用る故なり（衣食住記）

覆面頭巾

元文ごろ頭巾しころを付しころの端にボタンを付顏を覆ふ是を覆面頭巾と號し異名をとうもかうもといふ制せられて止と云りされども明和八年（江戶名物鑑）（副板の時より已前有來りし物も多し）にふく面頭巾出たりともこもとは若き者の着へきにあらぬを侵して用ふる故ともかうもあれと云意をもて呼なり

ほあて頭巾

○ほあて頭巾は頰當なり（室町日記）に頰かくし頭巾とあり古畫に往々見ゆ

○角頭巾【前に見ゆ】（洛葉集）ちりめんや朽し碁打の角頭巾【如風】かるい世やうつふし染のすみ頭巾【自悅】（佐夜中山集）おのづから白髮やそむるすみ頭巾【宗次】丸顏になるや額のすみ頭巾【塵言】

丸頭巾

○丸頭巾（見覺艸）若僧の出立紅うらの丸頭巾云々裏あかしたてな人丸頭巾かな【玄札】色々の頭巾の

出頂頭巾　桂包　角頭巾　長頭巾

表は黒うらは淺黄色紐あり後にて結ぶといへり其圖をみるに大帽の絹を折て作れるなり實にも瞽者のほうしに似たり【此と別に考あり長ければこゝには略く】(源平盛衰記)にシユチヤウ頭巾所々に見えたり出頂頭巾なり其圖は(後三年合戰繪)に見ゆ剃髮の者法師者なごのかぶれるなり紺布にて將棊がしらに縫たる頭巾なり是又ときんより出たるなるべし其外鷹飼は錦の帽子を着僧尼ははなのほうしを着る是等みな頭巾なり又他物を頭巾に用ひたるは奈良法師山の衆徒等袈裟をもて頭を包み賤の婦は手巾にてかつら包みをなすかつら包は(室町日記甲陽軍鑑)なごにもみえたれども昔は賤女なべて頭を包みたるが後に桂卷と書は桂女にのみ其風殘りたれば然いひけるなれごかつらは長き意にて髮をいふなり桂女のとにはあらず万治寬文の頃までも下女なご頭を桂包にしたるさま其頃の繪にみゆ

○角頭巾(スミヅキン)(藥師通夜物語)【寬永廿年艸子】醫者の服をいふ處長胴服に角頭巾【(竹齋物語)富者のさまをいふにしゆちんの頭巾をかぶり肩をならし云々角頭巾か】(新竹齋一)くだらぬ理屈あわう口引ずり羽折長つきん是貞享の初の草子なるに其頃までも醫者の風俗おなじさまなり但し角頭巾と長頭巾は異なるべし【因に云醫師は昔大小刀をさすと更になし又駕籠にのらす近世まで然りこそ元文元年板の前句附光りかゞやく〳〵上古とは違ふて今の醫は衣なり又(藥師通夜物語)このわたつみて雪をしのがむ。年よりはかます頭巾を引かぶり

○山岡元隣が(寶倉二)頭巾の條に甚哉わが衰へたる事そのかみはかく〳〵にかぶりてもわが身もあるまじきとのやうに思ひ人も諫めつるに此頃は人もゆるし我もおしはれてかぶれるぞいとかなしきあみ笠に夏頭巾は世にをこがましきとにいへれごやゝもすればなほかぶりて持病まじなふぞせんかたなき此わが述懷はこもこも頭巾のこもこうもせよ浮世ぐるひの若ものばらの寒さの外にかぶるこそ一かたならずおかしけれ世を忍路のほあて頭巾ひしきものには袖をして葎の宿にもすみ頭巾逢夜や心丸頭

五寸面前長二尺八寸云々これら僧家頭巾のもとなるへけれど字書に巾本以拭物後又着之於頭といへり今手拭をかぶるが如きこれその始なりときん今はいと小さくなりて頭巾めかす異ものゝ如し古き繪などにてもみるべし形大にて頭上をおほふ今の製といたく異なり昔の山伏は頭剃たるはなく常に髪を亂して其上に頭巾をきたり（砂石集六）榮朝上人說戒の條男かとみればさすがに袈裟に似たる物かけたり又烏帽子にもあらす童にもあらず法師にもあらずさるものゝ候ぞやと山伏の有けるを見ての給ひければ云々此烏帽子にもあらずとはいへる下には必脫文あるべしさて童にもあらずとは散髪なるさまをいふなり又（著聞集）興言利口の部に法師と鑄もじと山伏と三人一宿にとまりて山伏いもじが眞似して遊女がもとによばひするとをいへる處に人しづまる程に此山伏おきゐて髪をもとゞりにとりいもじ男はたゞよくねいりぬ法師はそらねいりして此山伏がふるまひを見ゐたるほとにもとゞりとりはてゝねいりたるいもじが烏帽子を取きてけりさて遊女が寐たるぬりごめのもとに至り云々あるをもて山伏散髪なるを知るべし又（太平記）大塔宮熊野落の條に御供の者迄も皆柿の衣に笈をかけ頭巾眉半にせめ其中に年長せるを先達に作り出羽なる山伏の熊野參詣する体にぞ見せたりけり又同條の末に片岡八郎矢田彦七あら熱やとて頭巾脫て側にさし置實の山伏ならねば月額のあとかくれなし云々あり頭巾眉半にせめとかけるは似せ山伏となりて月額かくさんが爲なり又頭巾ぬぎたれば月額のあとみえしといふにてときんの大なるを思ふべし眉半の字まゆはづかにと讀べくや（えぼし折双紙）やげした小六吉次が宿を見とゝくる處かきのすゞかけ觞磨のときん眉はづかに引こうで云々あり眉の少はがり見ゆる程にき込たるなり（狂言記）つたう山伏の詞にときんといつは一尺計の布を黑く染ひだを取てひたひにあつるをもつてときんと云とあれば猶後の製なり古畵を見るにえぼしのやうなると燕尾帽のやうなると二種あり是もと一物なるべし或人云上古の折頭巾の摸（うつ）しあり其形は今世撿校座頭の被る燕尾帽の短きものなり

ときん

烏帽子

折頭巾

めりやす

武家方の女中を見習ひ都に雨合羽きる女も見えけるといへり又祐信が畫本にも見えたり其頃なるべし

○メリヤス手覆を木綿にて袋に織たる物をメリヤスといふこれは和蘭人足にはき其上に半もゝ引の如きものをきる下にはくものをメリヤスと云ふ半股引のやうなるをブロックと云今は和蘭もイギリス風を學びてメリヤスの上に尋常のもゝ引のやうに長きをきるメリヤスと云はホルトガルの詞和蘭陀にてはコーストといふ延寶の頃（洛陽集）に唐人の古里寒しめりやす足袋【眠松】といふ句あり今メリヤスの手覆行れて武家に專ら用ゆ又近時はこれを仮に大小刀の柄袋に代ふ其さまいと見苦しけれ共これも流行風となればさ迄も思はず（八水隨筆）に松平大學頭殿殿中頭城の節つか袋に甚だ小き傘を大小の上へかさしゝとなり定て深き思慮も有へけれど外見不雅なりといへりこれは享保の頃にや思ふにこれはたゝ紙をたゝみたるまでにて傘の如く竹の骨あるにはあらぬ成べし

○長崎の俗にメリヤスを田易と書となむ其故をしらずと云り按るに田は甲の誤りたるにや音聲の甲乙をめりかりと云ふ其義を取て甲易（メリヤス）と書たる歟されども甲はカリにてメリハ乙なれば乙字を書くべきを甲を書るは誤りにや又文字は甲乙と書き訓はメリカリと例にいふがならひなれば訓のかたになれて甲の字を書しもの歟【婦人手覆の條にいへり】

頭巾

頭巾【ときん、桂包、角頭巾、長頭巾、おこがひ頭巾、ともこも頭巾、ほあて、丸頭巾、熊坂頭巾、岡崎頭巾、隱元頭巾、きごく頭巾、をくみ頭巾、なげ頭巾、こしやう頭巾、頭巾に作り髭】

○頭巾は山伏が着るときんと音はかはれ共其物は同じ（衣服令）に一品以下五位以上並皂羅頭巾云々（事物紀原）に云古以皂羅裏頭號頭巾とあり今の冠のもとなり（和名抄）冠幞頭の外に（唐令）云諸給時服外則頭巾一枚とありて和訓なし音にて呼なるべし又（和名抄）内典云世尊新剃頭髮以衣覆頭々巾之緣是也とあり（釋氏要覽）云增輝記に云僧無冠經或用頭巾當以全幅褐布杠氏呼布帽用布五尺三寸背後長二尺

に時雨の雨合羽又勝羽（かっぱ）とも書て字も定まらず寛文八年戊申三月町觸の内毛織の羽織勝羽彌無用之事とみゆ

懐中合羽

懐中合羽は（永代藏六）江戸中橋に三文字屋といへる人むかし懐中合羽を仕出し其より馬道具を仕込といへり

○合羽長短の事（衣食住記）木綿合羽元文頃迄は武家は紺黒の半合羽なりしが町人は紺花色小倉織肥後木綿などの長合羽元文の頃武家も長合羽になる其後木綿のかすり織芭蕉布葛布歴々は享保頃より羅紗羅脊板寳暦の頃より黒琥珀七々子織黒丹後等なり（俳諧葛藤）【下葛藤は唐土の俗語なればこの集の名も字音に云なるべし】降にしも五月雨男たて合羽

女合羽

○女合羽とは小川氏老人の（昔咄）婦女の雨衣の事寛延寳暦の頃迄は浴衣を雨かけに着たり大なる紋を五ッ六ッも附たり伊達もやうを染しもあり近歳は下賤の女も浴衣などは笑ひて着るものなし皆木綿の袷がつぱをきることになりぬ又男子も近年は夏かつぱとて葛布芭蕉布の類を以て作る富饒の人は琥珀どろふくれん等にして拵へきる此夏合羽も寛延の頃はなかりしなり婦女は夏カッパはいまだ着ざれども遠からずきるになるべしなどいへれど江戸には元文の頃より女の合羽ありと見ゆ（吉原徒然草）巴屋の玉川は全盛のたのしき女郎にてそのとゝなく過禮を好みたりかふろ小鷹を風流にしたてゝ使ひけるに雨の降ける折笠ばかりにては小袖ぬれて見苦しとていたいけなる合羽をめでたく拵へ着せたり上古より禿の合羽なしとこの儀にて二三度きせたりと云と見え（我衣）には正德の末に至りてふり袖も木綿合羽を着す袖長く内袖を緋じゆす緋どんすにてしたりさゝ縁紫この頃なりとも舞子より始るか上人の娘は駕籠にのるとなれは下﨟の始むるに究れり野郎役者の風を似せたる歟といへるさも有へし又男女共にえりなき合羽を着すると享保七年の頃俳諧師着始る元文頃より女多く着したり尤堺町邊の者多しと同記にいへり女合羽は京師には今すこし早く着たりと見えて享保二年の草子其碩が（娘容儀）に近き頃は

雨皮　油單　簑

單及雜物並令少府監支造とあるは字のごとく油をひきたる單被なるべし(枕草紙)まさひろはいみしく人に笑はるゝ物かなといふ處とうだいの打しきをふみてたてるにあたらしきゆたんなればつようとらへられにけり云々ありあまかは【雨皮】といふもの是また油單なり(海人藻芥)に雨皮は生絹を淺黃に染て用之と有り修驗者などの用る雨皮は厚き油紙なり(宗吾記)に雨降候時御輿にゆたん掛られ候事は公方樣御輿には見及申候はず候御旅にて一段雨ふり風も吹候へば掛られ候由に候左候へは御供の衆も蓑をめし候云々今世大家の行列に蓑箱とて持する蓑を着しゆゑなり然れども是は下賤の服にて軍中などには是を用ゐたり(太平記十八)金ヶ崎後攻の處其勢吹雪の用意をして物具の上に蓑笠を着などみゆ武家に軍陣ならでも蓑を用るはその遺風にや今の合羽は慶長の頃紅毛人の衣服袖もなく裾ひろきカッパ

坊主合羽

といへる物を學びて紙にて作り油ひきてカッパと名付く今の坊主合羽といふ物なり其後また油をひき袖を付たる紙カッパ出來て又木綿羅紗等の合羽は出來るなりと(四季草)にいへるは誤りなり木綿等のカッパはもと道服より起る古書に今の木綿合羽の如きものを着たるかたあり是道服なり後これを雨羽

雨羽織

織ともいへり正三道人の(因果物語二)武州神奈川の宿にて旅人宿をかりて亭主の雨羽織を着て出たる物語りあり【正三道人は明曆元年乙未六月七十七歲にて終れり】然るを其服蠻人のカッパに似たれば是をもカッパと呼で雨はふりの名は隱れたるにや紙にて作れる袖なきは元よりカッパと云しものにて後の物なり紅毛の國の書をよむ人に聞しにカッパはホルトガルの詞にて紅毛には是をヤスといふホルトガルは爰に通信したるとはやく和蘭の來らさる前にありしかば其國の詞今に遺りたるが多しボタンがけのボタンといふ物も彼カッパに付たるビユタンといひし物を訛りてボタンといふなり是もホルトガル詞なりとぞ【(東雅)にボタンとは西洋拂郞機國の方言の轉じたる也といへるは非なり】(俳諧懷子五)露もきかず水くゞるとは龍出かつぱ又宗因が千句に古句のことばずしかへしつゝ世にふるは更

參の時の十德には常の巡方のごとく【今按るに巡方は素襖の畧書歟】紋を付申候又地紋にも付る人候歟袴もうしろ腰と又兩のもゝだちに付候是も地紋にも仕候云々又（同記）に馬上の時返しもゝだちを取候事京中過候へは取候又（今昔物語廿九）年卅はかりなる男一人椎鈍色の水干に裾濃の袴きたるが袴の喬取て高く夾みて前に大なる刀現にさして云々（そばとるとは股立を取るなり）

尻からげ　はしよる　ぢんぢはしより　東からげ

○次でに云江戸にて尻からげるといふ又はしよるといふは衣の脇を端をるなり又ぢんぢばしよりと云は老父端折なりかゝげやう異なりあづまからげともいふ（融）の謠曲にあつまからげの鹽衣（拾葉抄）に一條禪閤御説にあづまからげはかゝげなりかゝげをからげとよみ誤る也云々（韵會）云褰裳渡水由膝以下曰揭（新後拾遺）に賤のめがあづまからげのあさ衣ふたまた河原さぞ渡るらん以上からげは今も物を括るにいふからめあぐるの義にやかゝげとせでも有べし（守武千句）西へきぬるは衣をもきず、人はいつあづまからげに成ぬらん（望一千句）しよぼぬれて月をやごせるしは衣あつまからげの冷しき袖

せたからげ　東からげ

○せたからげと云もこの事なり（嘉多言二）急かばまはれといふ諺の條に近代の歌に武士の矢橋の舟は早くともいそがば廻れ勢田の長橋せたからげといふ言葉も此處をまはる時よりいひそめたるにや（鷹筑波集）つりかねを勢多からげしてあげゝらし龍宮よりも歸る秀鄕ころもの左右のつまをとりて前にて帶にはさむともあり賤の女のあづまからげといひしは是にやあづまからげとはすべて衣をかゝげて帶に挿むことを廣くいふなるべし又勢多折ともいふ（康富記）【嘉吉三年五年廿八日六月會】叡山祭に力者雜色等各脫白張勢多折に成その小注に烏帽子ばかり着之と見ゆ

合羽

○合羽といふ物は古代なきものなり昔は蓑を着たりと云は一わたりの說なり古へその物なきにあらず（和名抄）唐式云三品以上若遇雨著雨衣氈帽至殿門前その分注に雨衣和名阿萬岐沼今按一云油衣（隋書）云煬帝遇雨左右進油衣是とあり油をひきたる衣なるべし又同書厨膳具に油單唐式云鴻臚蕃客等器皿油

これも小袖の裾をいとへるにて美服する者にはさもじき心なると彼脚半と何れか異なるべき其碩が双子に花見がへりをいふ處宵やみうれしく早乙女が田の草とりに行如く裾まくりあげとれが奧樣やら食たきやら打まじりて風俗みだれ云々といへるが如し】

かるさん

○かるさんは（義殘後覺五）伏見にて比丘尼相撲の條にかるさんを着たりとありこれも蠻服に習ひて作りたる物か其名蠻語のやうに聞ゆ（鷹筑波集）きてみれば氣もかるさむぞ藤ばかま【此服にはあらねど】（新著聞集十七）卒爾の禍といふ條にかるたの札かるさんといふもの我子供も持たり云々いかなる物にか】元祿頃までも股引はなく皆かるさんを用ゐたり明和二年川柳点の句かるさんで心中のぞく料理人などありてすべてせはしき働きする者は皆はきたる物なりしが今は廢れて髮結など得意の方に乞ひてかるさん作る料を集むこれをかるさんむじんといひ習へり今は名のみにて尋常のもゝ引を拵へてはくなり昔の繪草子どもに見ゆる髮結はみなかるさんをはきたり【踏込も裾ぼそといひて下を細く作れどもかるさんの樣にはあらずいはゞ袴とかるさんの間のものなり】今の吳服屋の下男などこれを着る

はつぴ

○はつぴ（下學集）に法被打敷と有【林逸（節用集）に法被半臂と並ひ出】僧家の服と見ゆ今はつぴといふものも是になすらへし名歟安部泰邦卿（東行話說）荒井のわたりの條にかこの者みな大嶋のはつぴをなむ着たる云々あり水主などの着るかんはんを云なるべし今役人屋敷の人足などか着る單衣の半截なるもしか呼なり（貞德文集）に御能の裝束法被半切長絹大口云々いへり

もゝだち

○もゝだち袴の左右の明たる處なり（今昔物語）醫師治女瘡疾に女袴の股立を引開て見すれば股の雪のやうに白きに少し面腫たり云々（平家物語）に小松殿指ぬきの中にくちなわ這入たるを股立より手をさし入て右にて蛇の首を押へ左にては尾を持給ひて上日のものを召たるとあり（貞順古實聞書）條々に社

立つけ

立つけは武家の着る事にて有りしが踏込といふ物はやり出て元文の末より立つけは下等のもの丶きる物になりしされども御番方の衆は古法故か踏込に括る紐を付置入用の節は立付になるやうに仕立用るなり初めは股引脚半と二物なりしを其後のべ付に拵へボタンかけの股引となりしも象渡りし後は象股引とてボタンがけは廢る【象の江戸に來りしは享保十四年酉五月廿四日なり】（江戸名物鑑）象股引股引も懐ひろし年の市また享保二年丁酉十二月十八日町觸御鷹野に御成之節名主は羽織はかま家主は羽織立付云々あり此頃は立付下等の服となりし歟然らは上に引る筆記に元文の末といひしは非なり又寶暦頃の繪本に鳶の者などをうつしたるにみな脚半の如く上下に紐つけ合せめにボタン付たる股引をはきたり大工さくわん等はかるさんを着たりそのかみの股引は右の製なりしを象股引より始て筒に作りしなり角町裁また其後なり【是とは異なから住吉裁と云は津の國住吉の社に裁縫の樣式あるやらむ其

ぱつち

と（めのとのさうし）に見ゆ【パッチは明和の初より出來て安永に專らはやりて用る事となれり【太田南畝つねに戯れていふ我は史記とパッチハ持ずすむなり】

野袴

女の脚半

野袴は作事方にて常のはかまに裙縁を付て用る是を野袴と云ふ踏込野袴パッチ皆近世出來たる物なり又女の脚半は享保二年（娘容儀草子）に昔は八瀬大原の女ならでは脚半といふものははかざることなりしに近年の女世智かしこくなりて歴々の奥樣まで小袖の裾をいとはせられ紅の脚半蹴かへしに見えて其女中の下心思ひやられてさもじかりきといへり【今は老婦は白き脚半にてありくは見えたれど其外にはなしまた茶屋女などの年たけたるはパッチをはくあり幼き女子は良賤ともに紅のパッチをはき花見野がけに出また近頃は老幼をいはずすべて其年頃相應の染色もやう付たる湯具めくものを裏付て合せに作り湯具のうへに卷て野路ならぬ處も夕暮より小袖の裾を高くはせ折かの腰卷のみ出してありく中より下つかたの者は目蒼に及はず家を出る

けだし

より其姿なるも多しこの腰まきを蹴出しと名づくおもふに歌舞伎の女形が用るものより思ひよれる歟

ぶれ旅たちつけの裾はぬれ〳〵（浮世物語二）天王寺まうでの處晉請奉行とおぼしきが六十餘りなる男たちつけを着て杖をつき云々（誹諧懷子五）【明曆二年撰】たちつけをきたるを見て、たちつけや萩をしからむ鹿の皮（同集八）道のべの宿から出る旅のつれしばしとてこそ立付をきれ【保友】（西鶴織留）に年がまへなる男子細らしく小脇差に大巾着さげて皮立付を着て何にはよらず世間に合点のゆかぬ事あらば問て見給へ談合相手になるべしと口廣く云まはりぬ按るにたちつけは裁付にて股はき脚半を合

もゝはき 脚半

せ作りたるものなるべし作り付といふ事とひとしくしたてつけたるなり（宗吾記）に御小者もゝはき脚半は十月五日内野の御成より三月三日迄被用候、又云、大口直垂を着候時は誰も脚半を着候惣して赤すね見え候は尾籠なる事に候とあり今猿樂狂言に袴を高くゝくり脚半をはきたる体ありもゝはきは股にはくなり【はくはもと帶る事なれども轉りては着る事をもはくといふ足袋はくなど是なり】股まで

もゝぬき

入るはゞきとするはいかゞもゝはきを股ぬきともいふにや（東鑑）壽永元年六月七日の條にいふ以二股解沓一差二八尺串一云々（宇治拾遺九）常まさが郎等佛供養の條に太刀はきもゝぬきはきて出きたり【こゝにもはくといへり】とありされどもゝはきは今の半股引の如く思はれもゝぬきは股解沓と同じかるべければもゝはきとは異なるべし思ふに（信貴山緣記）の繪に熊の皮にて作りたる沓の膝ぶしの下までかゝる物見えたり（和名抄）に深頭履とあるものならむもゝはきとは股まで入るやうの物にや

もゝ引

○今のもゝ引は右の股ともを猶簡便に作りたり（義殘後覺七）朝鮮軍のことをいひたる處異國の馬乘は獸の皮を股引のやうにこしらへて鞍の手に聢とくゝり付て太股までぐつすりと踏込み云々いへり杉田勾當（望一后段千句）にいそぎ舟よりおるゝ馬かた鹽ひればもゝ引たにもぬれ〳〵ず（衣食住記）に享保の頃までも絹紬羽二重色は淺黄もえぎすみる茶などの股引または脚半なりしが寶曆の頃よりパッチ流行お納戸茶明和の頃より茶色に替り股引脚半は廢り武家町人等しくパッチ尻つまけ專らなり同記又云

張殿　聞えず（今昔物語）尾張國司五節參らする處に守もとより物の上手なれば物の色とも打め針めいとやすく調て奉る（枕草紙）たゝのふの裝束の處いとかく縫たる糸針めまでやはみとほしつると笑ふ

針わざを習　○幼女の針わさを習ふ各々我家にて學ぶとにて師をたてゝ是を敎るものはなし然に京浪華などにはその師を業とするものあり（色芝居草子）當世娘をそだつる樣をいふ處寺あがりから物縫の師を尋ね云々

仕立屋　あれは是もきのふけふの事にあらず漢土には仕立屋を裝紅といふ（杜騙新書）【廿二類】裁紅不善假充做一領太長穿不得とは仕立屋のわろきなり女工を女紅といふ故に是を裁紅といふなり

かぎざき　○今かきざきと云を古はかけやりといふ（枕草紙）にほそやかなるわらはの狩衣はかけやりなどして云々鬆破なるべし

夜なべ　○夜なべ（ちかや草）によなべと云と伊豆にては家週りに夜々打寄ゆるりに鍋をかけ仕事をする故に夜仕事するをよなべといひ習はせりと云り此說非なり田舍に鍋を用ると常なり夜のみに限らず是は夜を並て仕事するの名なり

絹布丈尺　○絹布丈尺（續日本紀）和銅七年二月庚寅制以商布二丈六尺爲段衣服にも昔は曲尺を用ゆ寛文四年甲辰七月十二日絹紬の事大工曲尺にて長三丈四尺巾一尺四寸木綿の事大工曲尺にて長三丈四尺巾一尺三寸右之通跡々より御定の處近年猥に有之間向後此寸尺より外不足に織出すに於ては可爲曲事云々是を流布の年代記には寛文五年絹木綿の丈を二丈六尺に定むとあるは誤なり

たちつけ　もゝはき【股解】　かるさん【もゝ引】　はつぴ【もゝたち、東からげ、せた折】

合羽、油箪、雨羽織、簑類、めりやす】

たちつけ　（義殘後覺）【文祿五年跋あり】前橋七九郎といふもの武者修行に出て長刀をつかふ處に菖蒲革のたちつけに鉢卷をむづとしめ襷をかけといへりもと旅中の具なり（半非卜養千句）ふる雪に夜通を行は泥ま

狀、（香祖筆記）に云潘氏記聞に唐明皇柳婕妤妹、適趙氏、性巧慧、鏤板爲雜花、打爲夾纈、代宗賞之命宮中依様製造とあれは唐の時より板じめにもしたるなり又辻といひしはつぢが花を染し故なり【灯籠の條にいふ】

針
すくる

○針に糸を付るをすくるといふ（古今）【俳諧歌】よそながら我身に糸のよるといへはたゝいつはりのすくはかりなり僞を針にいひかけすぐるによせたり（清少納言雙紙）心もとなき物の中にとみの物ぬふに暗きをり針に糸付るされどわれはさるものにてありぬへき處をとらへて人につけさするにそれもいそげはにやあらんとみにもえさしいれぬをいで只なすげそといへどもさすがになどてかはと思ひ顔にえさゝぬはにくさゝへそひぬといへり物の柄などにのみすげるをは今もいふとなりまち針といふともやゝ久しと見えて（續山井）たて置や千代をまち針門の松【員成】

まち針

播磨針
御簾屋針

○針は京師姉小路の針世に名高し谷川氏云（赤染衛門集）に播磨より來る人の針をおこせてと見ゆ（新猿樂記）に諸國名産を擧たる中にも播磨の針とみえたれば播磨は針によれる名なるべしと云り上代より針を出せしにやそは知るへからず又大津追分池側針聞えたりといへども中世三條河原町御簾屋が針最よしと（雍州府志）に云り昔は京師ならでは是なく何方にても是を求めしとなん（江戸眞砂）に片山吉兵衛と云者小間物屋より下り針をうけて賣あるき多く利を得れども問屋に針少く商ひ續かざるを憂ひて上方に登り針を買て駄荷にしてもて來て賣れり頓て針店を出すと云り是元祿以前のことゝ見えたり然共そのかみ江戸にも針師なきにあらず（見聞集）に小き針に耳穴あくるを不思儀と思ひけるに當年（慶長十九年か）甚三郎と云人上方より來りみせ店にありて針のめど明るをみる云々めどかけ針を明人の（笑禪祿）に破鼻子といへり

打殿

○古へ打殿張殿などゝて男女の裝束打のり板びき糊などする家はあれど今の如く仕立屋といふものは

云なり（後撰）【戀一】もみぢと色こきさいでを女のもとにつかはして云々ある歌あり又哀傷法皇の御服なりける時にび色のさいでに書て云々あり契沖云さいでは裂出にて俗に云たちはづしなり又裂栲タヘ反テかとも云り（枕草紙）にあたあゐえびぞめなどのさいでのおしへされてさうしの中に有けるを見つけたる（古事記傳）にもさいでは裂栲今古手と云も古栲にて共にタへの約なりと云り然れ共さいで裂出なるべく又古手などは古の栲などの名もて云べきにも非ず（落窪）大將殿より少將の君の御裝束今はとくし給へとゝには內の御事にいとまなくなむとてよき帛糸あや茜すはう紅藍など多く奉り給へればもとよりよくし給へりけるをなればいそがせ給又中の君を藏人の少將にあはせし處女君いそぎ染させ裁ぬひし給にも昔思ひ出られて「きる人のかはらぬ身にはから衣たちはなれにし時ぞ忘れぬとゐはれたまふける又（同物語）人々にろくつかはす處おとな三人には絹四疋綾一疋蘇枋一斤わらはにきぬ三疋すはう下仕には絹二疋すはうそへてとらすれば云々あり皆染草添りこれにても染物やといふもの今の如くにあらぬこと知るべし

紺かき

○紺かきなどの職は昔は皆女なり（職人歌合）などはさらなりいと近く貞享元祿までもかし有しは（人倫訓蒙圖彙）にも女を畫けりまたむかしは紺屋にはさま〳〵のそめせざりしなるべし後世は紺ばかり

ただぞめ

染るをだぞめといへり又染草を製法して賣とは近きことゝぞ（江戶名物鑑）【明和八年】調合染草、駒下駄て花ちる庭の手染かな

衣の模樣

○古へ衣にもやうをつくるはくゝし又は摺こみ板じめなどにて有りしなりくゝしは纐纈にて今いふしぼりなり目ゆひと云は鹿子なり四ッ目の紋など云は四ッ目結なり纐纈は板じめにもしたるにや（事物紀原）纈と擧て事始曰、夾纈徹子造（二儀實錄）曰秦漢間有之、不知何人造、陳梁間貴賤通服之（潘氏紀聞譚）曰唐代宗、寶應二年、吳皇后將合祔肅宗陵啓、舊堂衣服繒綵如撮染（ツカミソムル）成花鳥之

きものにして紫すそ濃のさしぬき菊をぬひたり又同書【あすか川】花山院少將たゞすゑは師繼の御子なり櫻のむすび狩衣白糸もて水をひまなく結ひたる上に梅柳をそれもむすびて付たるなまめかしく(源平盛衰記十一)繪かき花付たるさふらひども出入て院宮のごとくにぞ有ける(續山井)糸さくらこやさほ姫の花結び】後世に至りそれ〴〵の職人出來て結び花屋といふものあり糸ばな作る(色音論艸子)江戸通り町の條かゝる屋敷に劣らぬはむすび花やにから物や云々【今はむすび花やといふ名目なし(江戸鹿子)に通り町に組糸屋多くあり昔は糸屋なども花を結びしか(雍州府志)に作り花師一條烏丸西入家、造之、所著長絹之菊花等、在此家、於今處々、製諸品、與眞花無差別といひ(江戸鹿子)作花師本所祝言方九左衛門淺草かや町惣左衛門尾張町甚右衛門抔見えたり竹内九左衛門は御糸花師二連木九左衛門なるべし(職人圖彙)に造花師諸の糸をもてつくるむすび花ともいふなり又は紙を以てこれを作る所々に住すといへり按るに後世は物ごとに巧みになりて花を作るも薄き木に練ぐり糸を糊にて張そを截て花葉を作るされ共むすび花ともいふこと有は古く糸もて結び花の形作りし稱への名殘なり

染物

○染ものなども手づからしたり(源氏物語)【手習】かの人のいひつけしごとなどを染いそぐ云々【紀伊守が布施の裝束を尼公にあつらへたれば尼公のいそぎ作るなり】【箒木】指くひの女のことをいふ處たつた姫といはんにもつきなからずなばたの手にもおとるまじくそのかたもぐして云々女の物よく染るを立田ひめといひ織縫よくするをたなばたに比するなり】又これ御覽じいれよ物をいとうつくしくひねらせ給へはとて云々(落窪)物ぬふ事を習ひけるがいとをかしげにひねりぬひたまひければ云々(花鳥)にきぬひとへのみゝをひねるとなりと有【今按るに一針ぬきにあらでつゞけて縫をひねると云にや今常に縫ふわざなり又おもふに鬘は髮毛をつなぐわざなるをかつらひねりといへり然らば是も糸をひねりつぎてぬふとにや】

さいで

裁縫にても布にても裁端をさいてと云今も塗師方にて漆を拭ふ布裁をさいでと

なり】（清輔朝臣集）女をうらみて今はあはじたゞちかごと立て後もとよりけに戀しかりければ青き筋ある紙にてかへるのかたを作りて書付てやりける物の形を紙して折る事むかしもさま〳〵ありしなるべし】

あはひ結

花結も何くれと品々のむすびやうあり厨子棚泔坏（ユスルツキ）の臺などの打紐をあはび結と蜷結（ミナムスビ）とかはる

蜷結

〳〵結び並べて地板に取付て其餘りをあげ巻に結びてたるゝなり皆その形によりて名付るなりあはび結をあはじ結などいふは誤れり（徒然草）にみなむすびといふは糸を結びかさねたる蜷といふ貝に似たればいふと或やむごとなき人の仰せられにきになといふは誤り也といへり【みなは（和名抄）に河貝子、和名美奈云々俗用蜷字非也と有り蜷川氏もになにはあらじ】（桃花蘂葉）に杉の横目の扇のとぢたる糸の餘りをあはび結にして有り（釆女記）に御こふあわにすはりてといふ女房詞にあはといへるなり又総角は其圖（文公家禮）に見えたり其言云、用白絹一疋、結如世俗所謂同心結者云々あり又めなと結は（鷹

めなと結

筑波）佐保姫のめなと結か糸柳（夏山雜談）にめのこ結はめのこ結は女子結なりめのこ筭も女子算なりといへりしからはめのこ結はめのこの義歟恐らくはめなとを訛りてめのこといへるならむめなとは猶蜷子結にやあらん是等みな女のわざにむねとすることにて（源平盛衰記二）清盛息女の條に歌よみ連歌しゑかき花結あくまで御心になさけおはしますといへり惠命院の（海人藻芥二）兒の裝束をいふに狩襖等の付等結花後には略之云々狩襖水干直垂等着用の時は髮を下るなり髮にさはるに依て付物等の菊とぢをば令略也云々（北山院御入内記）衞府の長一人白綾の狩衣花をつく又すはう織物の袴花をつく（十二段淨瑠璃）縫ものゝ段牛若が裝束を譽る處弓手の菊とぢつぼみし時めてのきく綴さつとひらき蕾み開きのその有さまは日本名譽の花むすびがひきよくを盡して結はれたるとも是にはいかでまさるべき（驪驢嘶餘）に空色の水干其時節に似合たる結花を菊とぢにして云々（榮華）【音樂】女房のさうぞをたるをいふあるはいとゆふむすびからぎぬなどの云々（増鏡）【烟の末】作氏左兵衞のすけ親朝はむすび狩衣に菊をお

みゆ。

○（落窪）うへのきぬ打むとて云々少將ひかへんとの給ふ女君見ぐるしとの給へと猶ひかへさせ給へいみじき物しそ丸はとて向ひて折せ給ふいとつきなげなる物から心しらひの用意すぎていとさかしらなり女わらふ〳〵折る【ひかへさせて折め付るなり物しそとは今も此わざするものをおものしと呼これなりよく心得たるを云ふ】

苧をうむ

○又（古事談六）一條院御時伴別當といふ相人の條美麗なる妻の不思氣色にて大なる皮古に寄懸りて苧といふ物うみて居たる【此物語（今昔）にもあり苧をうむなど今と異なる事なし】

花むすび

○花むすび今いふ結びかたにて花形を結び調度を飾り衣服の付物に用ひて女工の肝要のとなりこの故に女の能を云には書かき花結びと云り（万葉四）玉緒乎沫緒二搓而結有者在手後二毛不相在目八方（伊勢物語）に絶て後にもと四ノ句をかへたり（拾遺集）春くれは瀧のしら糸いかなれやむすべども猶あはにみゆらん（枕草紙）うす氷あはに結べる紐なれはかざす日かけにゆるふばかりをあはをは合緒なるべし合せよるなりあはにむすべる沫によせたらむには假字違へり（源氏）【あげまき】中の君組などしはて給ひて心葉などはえこそ思ひより侍らねとせめて聞え給へばくらうなりぬるまぎれにおき給ひてもろともに結びなとし給（細流）に心葉常には金にてするをこれは糸にして給ふなり】（公事根源）に灌佛の時殿上に侍ふ女房の布施とも色々に結ひたる花につけて風流なごあるを衣筥のふたに入て臺盤所より出さるれば藏人とりて殿上の臺盤の上に置（玉造小町子壯衰書）に翠黛之薰括百花、而餘室中、（續詞花集）藥玉の料に人のもとに花結につかはしたりけるををかして結ひて奉れり云々宗牧が（東國紀行）御菓子のかさり花むすび葉の繪やうなど目もあやなり【是は心葉なり但し花結の葉とあるは心葉と有しをうつし誤れるか】（烏帽子折草子）に瓶子一具てふはながたに口つゝみ【これは今いふ折かた

持出るを目にはみれども身にふれがたし其時節は關東みだれ國郡在々所々まで私の弓箭をとり爰かしこに關をすゑ海道往來やすからずされども高野ひじり笈を負て關東へ下る是は弘法大師修行のかたちを學へるひじりとて弓箭の中もあけて通すその笈の中にきんらん錦のきれはしあり此ひじり言けるは是は高野山寺々にて三世の佛を繪像にうつしかけ置給ふ表具のたちのこしなり此金襴にしきを少しなり共身にふるれば穢を除く故に佛神は常に御影をうつし給ふ惡魔厄神はおぢおのゝくと語れは此錦の切を一寸二寸ツゝたかふ買てをさなき人の守袋の端などに縫付し也今の世にみる美々敷事どもをば我等若き頃【今按に天正文祿の頃を云】の人達は夢にもしらず人語るともいかで誠にせむといへり太平の世のたのしきを思ひ奢侈の心を愼むべしこの故にや後に吳服商ふものにひじりと稱するものあり

法令綿

○法令綿（はふれいわた）は【安齋隨筆】に京都吳服屋菱屋新兵衞云ふ木綿を京都にてはもめんわたとも又唐わたともいふ法令は大和國奈良の地名なり此地にて作る木綿を多く江戶へ出す然るに勢州其外の國にて作るをも皆法令綿とよび習はせりといへり【はたつもりといふ木を法令といふそれを法令と書は誤りなり此木を畿內美濃尾張等にてリヤウブと呼ふ法令はこの假字なり遠州などには訛りてキヤウブと呼ふ此木漢名は山茶科といふとなむ】

裁縫

○古への女は裁縫するに手づから綿をつみ糸をよりしなり（源氏）【野分】に者たちなどするねひごたちおまへに【花散里のなり】あまたしてほそびつめく物に綿ひきかけてまさぐるわか人どもあり【細流】にほそびつはぬりをけなどのたぐひ歟といへれど古は諸の器物も一々備はらす彼是借用ゆること多し糸をよる事は（浮舟）に火あかうともして物ぬふ人三人ゐたりわらはのをかしげなる糸をぞよると有り（石山寺緣起）の畵に物ぬふ處に糸よるさまをかけり又（枕草子）に心ゆく物の條うるはしき糸のねりあはせぐりしたると有も物ぬふ糸にこそ【今ねりぐりといふは二タ子にあらず合せぐりは二タ子糸と

れたり】

綿うつ具

〇綿うつ具の事(永代藏五)朝日の里に川ばたの九介といふ小百姓あり工夫深きものにて女の綿仕事まだるく一日に五斤ならではこなれぬ故もろこし人の仕業を尋ね唐弓といふものを始て作り出し世の人に秘して横槌にて打ける【これは貞享五年板行の冊子にて大かた其頃近きことを記せり】とみゆ(天祿識餘通鑑)梁武帝木綿皂帳史照釋文云木綿江南多有之、以春二三月下種、旣生須一月三薅、至秋生黄花、結實、及熟時其皮四裂、其中綻出如綿、土人以鐵鋌碾去其核、取如綿者、以竹爲小弓、長尺四五寸許、牽弦以彈綿、令其匀細、卷爲筒、就車紡之、自然抽緖、如繅絲狀、織以爲布、按此即今之棉花也云々、而以解木綿則非也、其曰竹爲小弓、長尺四五寸、今之制棉花弓、長五六尺以羊腸爲弦、彈之聲如晴雷、邱文莊謂、綿花、元始入中國、始末考、史照之說也、もろこしにも始めは弓の制小さかりしとさもあるべきなり】(見聞集)又云愚老若き頃諸人の袴もめんなり今の時代は麻なり扨又この頃絹のうら付袴はやらぬ【按るに(豹文記)作者は天文祿の頃の人也其書にもめん袴の事人中へ着候事不可有之候當時は袴用候本になき事にて候又云裏付たる肩衣の事らうぜきなる義に候人前へ着候事ゆめ〳〵不可有之候と有り裏付上下をうら打の直垂の準據なりといへるは後の押あてなり】又云安房國と相摸は年久しく弓箭をとり終に和平の義なし天正十八年七月小田原沒落已後天下一統となる我房州へ行たりけるにもめん布をみせ棚につみかさね置たりこれをかはんと取てみれば横狭く竪長し是は見始め何と裁縫と問へば脇入して縫ふといふをみれば實にも房州一國の人みなわき入して着たり是等の事專なき義なれども近き頃世上に移り替る事今の若き衆しらざる故記し侍るあだち絹常陸紬加賀絹伊豆の八丈絹など大名衆其外にも有德なる人達は着給ひぬあやごんすねりはぶたへなどの京染きたるをみては此人は京氣のものを着たりといひてほめ羨みし也きんらんにしきなどは古き宮寺のをさめ物を袋に縫て入置を祭の時かんなき

絹のうら付袴

木綿

○木綿、攀桂花、といふはパンヤなり時珍は木綿、有草木二種、といへり其名紛らはしければ（典籍便覽）などには草綿木綿と分てりこゝにてはいひなれて木綿にて通ずるなりパンヤは常に用ひず和産もなければなり綿の種本邦に渡りしことは（日本後紀）、延暦十八年七月庚午、是月有一人、乘小船漂着參河國【中畧】大唐人等見之、僉曰崑崙人、後頗習中國語、自謂天竺人、常彈一弦琴、歌聲哀楚、閱其資物、有如草實者、謂之綿種（類聚國史）に同十九年四月にも種を紀伊淡路阿波讃岐伊豫土佐及太宰府等諸國に賜ふとあるは今の木綿と同物なりやいぶかし今のもめんは文祿年中に渡ると云ふ木綿なき時は貧士賤民みな麻布をかさねて寒をふせぐ近世その種渡りて南北ともに土地に宜く四民寒苦をまぬかる誠に萬世の利群國の寶なり唐土にも宋の末始て種を南蠻より傳へたりとぞ丘瓊山李時珍諸說有然りと（大倭本草）にいへり（陔餘叢考三十）古書は棉花のはやく出たるとを云て、然則棉花布、自古有之、何以邱文莊、謂元初入中國、蓋昔時棉花布、惟交廣有之、其法倶未入中土、云々また（輟耕錄瑯琊代醉篇）等を引て合諸說觀之、蓋其種、本來自外蕃、先傳於越、繼及於閩、元初始至江南、而江南又始於松江耳こゝには（見聞集三）我若き時三浦に六十ばかりの翁ありて語りしは大永元年の春武藏國熊谷に市の立しに西國の者木綿種を持來りて賣買す是は重寶の物かなと買とりて植つれば生たり皆人是をみて次の歳また買取て植つれば四五年の内三浦に木綿多し三浦木綿と號し諸國に賞翫す夫よりこのかた關東にて諸人木綿を着ると語る然る時は木綿關東に出來初る大永元年より當年慶長十九年まで九十四年このかたとしられたりと有れば文祿年中渡りしといふ說は誤りなり【慶長十九年は文祿元年より僅に二十三年なり且三浦氏の記大永元年始て渡りしといふにはあらず西國の者關東にもて來りしなれは西國にはそれより先に種そめけむはいつの頃にか但しその程近きとにては有べし【朝鮮には洪武二十二年大元より種來るよし（東國通鑑）に見えたるにこゝに文祿に渡れりといふはあまりにおく

一ちやうら

も布はあるに依て國裏といふ歟悉く公家より出る詞なり布子をば綿入ともいふなり是はおひえといふも義ちがふなりといへり布子をおひえといふも義違ふにあらず北の物よりうつりたる名なり(續山井)に身に覺え冬は來にけるおひえ哉【幽歩】(女重寶記)には御卑衣と書たり【女詞にてお冷といふをかく書るはわろし】(後撰夷曲集)貧しきが寒しといひて冬の日にいくつきぬれどおひえ成りけり【太極】(落穗集)に江戸の昔をいふに鄉村の百姓どもの義は目もあてられぬ有さまなり男女ともに身に布子と申物を着し繩の帶を致し藁にて髮を束ねたる者ばかりのやうに有之候由其時代の武人の物語を我等承りたる事に候といへり是は友山猶其むかしを思はす其頃布子きたること江戸鄉村の百姓のみに限らんや木綿出來し始を以て思ひ見べし【木綿のこと下にあり】

○(袋草紙)に俊総朝臣伏見に侍りけるに夜もすからありきけるにあやしの者の童子の地にふせりて讀けるは「こはた山すそ野の嵐寒ければ伏見の里にいこそねられぬ是を聞て小袖をぬぎて給ひけるとぞ下﨟の着るつゞりといふものはこはたと云とぞおもふに野州日光山などにコツパタ嶺ばりと呼ふ木ありこれらも其木皮を大布などに製したるものにやさらばコハタとは木膚の意にや

○今部屋かたもの丶一ちやうらといふことは衣服もたぬもの丶只一つあるやうの事いふは後に轉りたるなり(西鶴大鑑六)三月三日は天王寺清水汐干などいひて遊ふ日なりましてその上ッかた一ちやうらを取出して思ひ〳〵出立云々あり多き衣の中によきを然いへるなり(後撰夷曲集)【雜部】おはしたの下にかさねし着る物はおのが名にあふいちや紅梅【半女の名に紅梅と云は多しまた紅梅は紅絹をいふ是はよろづの色の内に一とするなり次でに云謠曲外百番小林といへるにこの一ちやうの紅の母衣かけといへるは(鴉鷺合戰物語)に八の八尺の紅の大母衣またこの一ちやうの大母衣も見えたり是は八布八尺十布一丈なり

るは無紋なりこれに依て染小袖と云とわざある歟又古書にありといへるは片身がはりの服なり是も（貞順古實聞書）に片身替の給の事男は廿四五迄不苦候女房衆は白紅またはうす紅梅など常に被着候これらも片身がはりと申候と有り（七十一番職人盡）魚賣の女片身を着たり其餘古書に徃々あり又無地禁制なるゆゑ衣の腰を明る今のしめかた色などいふものはそのかたなり（太平記）中殿御會の條本間左衞門太郎義景地白紫の片身替りの直垂に金銀の箔にて十六目結を押紅の腰に白太刀を帶云々あり腰といふは帷子の腰なり

はり綿

○（落窪）に綾のはり綿のなへたるを着せ給へは風はたゞはやになるまゝにいかにせましと思ふにすこしうれしと思ふとありはり綿とは綿入の事なるべし

布子

○布子はもと麻をいふなり（狂言記）【法師物ぐるひ】織たる布はなに〳〵云々十德布子の面こかたびら（同拾遺）すゝ竹のつめたといふこと有すゝ竹色の布子なるべし布子をおひえと云つめたと同義なりおひえと云は（見聞集三）見しは昔關東にてのていたらく愚老若き頃迄は諸人の衣裝木綿布子なり麻は絹に似たればとて麻布を色々にそめ綿を入おひえといひて上に着せし也【原本おひへと書り冷の義なるへければへをえと改む】布は出所多し木曾の麻布は信濃にて織り手作は武藏によめり【中畧】昔綿を多く入て夜の物とて夜着にする是をおひえとも北のものとも名つけたりまた異名を布子とも綿入ともいふなり此詞みな公家より出たり今やんごとなき御方は布子おひえの沙汰はしろしめさすといへり（庭訓徃來の抄）云北の物といふに一說あり織物板の物古びたるを張拵へて國裏を屬るなり綿を多く入て夜の物とて夜着にするなり又おひえなどゝもいふなり然るに彼夜着を北の物といふ事は裏に越後をするに依て北の物といふなり又おひえといふことも冬は北より來るものなり越後國は即北なり云々惣じて國裏といふは越後より外につくべからず絹裏の外をば只裏布の裏なんどゝいふなり又何くの國に

短はふり
ひきずり
はふり

云褑衣褠分也、（通雅）曰上馬衣、分褠、曰四褑、唐宦者、褑衫侍從是也とみゆ西鶴が（二代男五）筭くづしの布子に馬のりのあきし木綿羽織云々【これらのこと雑考の内にいひもらしつれは聊爰にかいつく】

袖また短きはふりは（尤草子）短き物の內にかはほりばふり有そのかみ行はれたる物なり其後ひきずりばふりとて長きがはやれり今に至るまて長短時々かはれり（春臺獨語）寬永の頃冬は革のうちかけ革の服を美服としたりといへり彼かはほりばふりも革なるが古書にも見えたり明曆回祿の時ある諸侯一人のみ革の羽織を着られたるよしみえたりいと稀なる美服と知られたり

小袖

○今世には小袖は綿入布子は木綿の綿入をいふ然れどもゝと小袖は大袖に對したる名にしてすべて袖の下をまろく縫たるをいふ袷にても綿入にても單物かたびらにてもいふへし大袖といふ名目はなけれども

衣袙

衣袙(キヌアコメ)などに對して云なり衣と袙は長短の分ちあれども綿入らず袖大にして四角なる廣袖なり小袖の上にこれを着て裝束の下着とす（宸翰裝束抄）衣の事或は袙とも稱之云々有り

染小袖

○（筆のすさみ）に古は公武貴賤ともにすべて白衣にて有しとみゆ鎌倉武士の染小袖といふものあれば染小袖は鎌倉の時分よりの事とみゆ典藥寮北小路越前介所藏に其家の先祖の人の畵像あり天文年間の人なり着するは帷子にて右の片身は地白に花色にて燕子花の惣模樣なり左のかた身は二寸ばかりの弁慶縞なり紋は一所に三ツ、付てあり上の一ツは足利拜領の引兩なり二ツは家の紋の巴二ツ付たり相口をさして頭は今のあたまなり狂言の花子の衣裳などゝいふべき摸樣なりこれら卽鎌倉武士の染小袖といひしものの遺製ならん云々按するにこの說誤なり

白小袖

（豹文記）云白き小袖の事平人は不可着候公家は御用候（貞順古實聞書）白き小袖の事ただ人は着不仕候但平人には大かたびら着候時は白小袖を用候ても不苦候歟亦出家等は不苦候（豹文記）に又云無紋の小袖の事畧儀に候間殿中又は貴人の御前へは無着候私にては可着候歟とありこれ禁制なれば小紋などを染て用るなり無紋は織色のみにあらず無地に染た

胴肩衣

衣ばかり着て帶をしめ袴を着ざる躰あり賤者の着たるかた多しまた（甲陽軍鑑）【十一卷に二處】ごんすの胴肩衣と見えたるも袴を具せざる物とみゆ一向宗門徒の肩衣も似たるとながらそのかみはさる事もなかりしと見えて古き繪草子どもに彼宗徒のさま畫けるに皆常の上下の服にて肩衣ばかりはをりて着たる躰見えず但延寶三年開板の難波名所をかける（蘆分舟）に肩衣ばかり着たるも見えたれど町人も輕き者のさまにてさるべき者はみな上下を着たり思ふに此宗門のならひ年中佳節も他に異にとそぎて物するなればなずらへて肩衣ばかりを用ゐしは町家にも殊に賤しき者よりなるべし【かゝれは此事浪花より起りしにや】（俳諧案糸）に門徒寺の太皷たゝくに觜てかいさまにこそ着たれ肩衣然るを古の懸肩衣といふとの遺製などいへるは非なり【女の御堂帽子は帽子の條にいふ】

羽織

○事繁き世となりて簡便に從ひ上下肩衣はふり等の服を用ゐることゝなりぬはふりは安齋の說にはふりと書て詞にははをりといふなりあふひと書て詞にはあをひといふがとしといへり（古事記傳廿三）斬波布理波布流と屠と同じ【上卷】八俣の遠呂智の段に切散其蛇者とある散をも波布理と訓むべし云々波布流は散す義なるといよゝ明らけし俗言に物を棄るをほをると云ふもはふるを音便にしか云ふにてもと同言同意なりといへる是なり此服をもと道服と名く法衣を道服と云とは異にて行旅に用て塵土を避る故に名付けまた胴服といふは胴ばかりおほふとなれば今いふ袖なしばをりなるべし

ぶつさきはうり

○又今俗にぶつさきばふりといふ物を已れさきに陣羽織の類なりと思ひしは非なりこは馬に乘ために作りたるにて猶道服なり（鷹筑波四）馬のりこそは多く見えけれ【直之が付句に】袖なしの道服の背をあけすぎてとあり脊をあくるを今も馬のりをあくといふ然れば胴服は袖なしの道服なり俗に殿中ともいふ【小兒の殿中じや張り肱じやといふは此はをりを着たるさまなり】馬のりをあくると（通鑑綱目集覽）曰、馬周上議、請褊袖褾襈、爲士人上馬服、開胯者、名缺袴衫、庶人服之、即今四䙆衫、釋文

直垂等の服上下同色文なるを云なり【淺黄の上下は（今昔物語）三善清行怪物に逢ふ話にみゆ】近く猿樂狂言記などにも素襖を上下といへり今は上下といへば一種の服に限りて心得られども獨寛文中の年頭御禮の觸書にさかやきを致し麻對の上下を着し云々あり今よりみれば書やうくだ〳〵しきに似た

衣肩

れどもかく有べきとなり裁縫も古は肩衣襞積なし近ごろになりてはいたく替れり（春臺獨語）に昔は男の肩衣といふもの麻の幅鯨尺の八寸ばかりなりしに貞享元祿頃より幅一尺に及びたり（衣食住）の記といふものに享保迄は肩衣廣からず元文の頃より横麻のかた衣廣くなり鯨ひげを入れ肩を一文字に仕立小舟に帆かけたる如く地合も享保元文迄は目すきばりとしてしやんとして音なきやうに粘かげんを好みしに明和の頃より粘強く紙のぼりの如くなれり袴も武家と町家は違ひ襠（マチ）を下げたるをば町人仕立と卑しめしに天明の頃は町人の樣に仕立急に馬に乘ると成がたし

つぎ上下

○つぎ上下などは享保迄は甚の畧服にて暖氣の時など着用し冬は決して用ひざりし元文の末御役人平日は染上下に不及つぎ上下小紋縞類取交用候樣とありてより押並てつぎ上下着用になりし天明の今は

麻上下

歷々も極寒に用ることあり（賤緒手卷）に寶曆の末までは麻上下はよせひだとて兩膝の中通りへいかにも細くよせて仕立たるがはやりたり常のはかまも今の如く二ひだ開きなどいふことなくて馬のりばかまの如く手を入て左右へ廣げてすはりたり（八水隨筆）【何人の撰なることを知らず或人云享保元文の頃大御番を勤めし人の記なりと云さもあるへし一小册也】にはかまの仕立に彌左衞門だちといふあり是御仕立同心池水彌左衞門なり憲廟御在世に召出されたり其孫今藤七と云竹村八郎兵衞殿御納戸吟味役の節咄されたりとあり近來は神田三河町廣嶋屋が仕立よくて勤仕する人など彼したてならでは着する

馬のり袴

となし麻上下同樣にて二のひだ開をよしとす馬のり袴は十番仕立とて腰の下へ紙を入て仕立るも同頃よりなり十番に一軒ならでは無りしに近ごろは何かたにてもその通りに仕立るなり又古書をみるに肩

てんとくじ

て帷に紙袋きてねるに足も身も冷ず云々ありふすまは（万葉）に敷衾とあるをもて臥衾なりといへり其状はふすま障子といふにておもへば今のかゝみ蒲團の如く緣をとりたるにて形は方なるなり民間には多く紙ふすまを用ひたり（著聞集）に安養の尼の許に盗人の入たる處尼うへは紙ふすまといふものばかりを引着て居られたりける抔見えたり紙被を今江戶の俗にはてんとくじと云古に日向ぼこりを天たうぼこりといひし如く日の暖なるをよそへて天德といふなるへし【天德寺といふ寺ある故に戲れて天德じといひしなるべし且ツいやしき物なればあらはにいはざりしとゝ聞ゆ】松月堂不角住吉奉納【三吟百韵】無一もつ後生願の猫かふて【千翁】かぶる衾も天德寺なり【泰角】西翁（獨吟百韻）あらはれにけり悋氣いさかゐ我戀はやぶれ紙帳の中々に（塵塚咄）【元文二年に生れし老人筆記一名飛鳥川と云歟】昔は夏近くなれば紙帳賣冬になればてんとくじといふ物を商ひたるが今はすくなしと云るは賣ありきしならむ（向が岡）【延寶八年刻板】夕立やあるが中にも紙帳賣といへるにて知べし明和二年（千柳点）紙帳うり塗師やに賣るがしまひなりとあれば此頃までも有しなるべし

搔卷

○又（沙石集）に【眠正信房の條】ぬれたる小袖をふせごにかけて焦れたる處あさましと思ひてかひまきて持て參りぬとあり搔卷にてかいのかななるべしかいもちひなどのかいなり今江戶にて夜着の小きをかい卷と云ふも詞同じ【（明良洪範）に酒井空印の家士草野文左衞門はもと丹後の田邊の城主京極家の臣なり若州へきたりて三四年の間は臥具といふものなく夜分いぬるに有合せし綿衣を引かけて伏ける五年ほど過て漸く夜着を拵へけるに世に用ると異樣にて其製四布にして半は袖なく敷物とし片身に袖ありて夜着とすこれ戰國辨用の製にて片袖の夜着と號して用るよしやことなき御方もこれを御用ひありしとなむといへり

上下

○上下の服といふと（古事記）【應神記】に見えたり漢土に上衣下裳といふ同義也後世にていはゝ狩衣

闕腋
縫腋

夜着

蕉をはせをばといひ（拾遺集）物名に紅梅を隱してこをばいと讀るなどの如しと有り（衣服令）を案するに武官の袍を闕腋といひ【兩腋を縫ふさがず】文官の袍を縫腋といふ【兩腋を縫ふさぎてすそに襴あり】闕腋の袍には襴なし是を位襖と記したり位によりて色の定めある故なりいづれも綾をもて製るなり素襖は布にて製る故その形少異なれ共みな上に着る者なれば准へて名づくるとなむ又（春湊浪話）に素襖といふは今の布衣といふものゝ名なり稱名院おとどの（細流抄）に當時すあをとて著するは狩襖の裏をのけたるものなりと注し給ふにてしるへし狩衣を布衣とも狩襖ともいふみな一物なることは諸記に明らかなり云々素襖といふも狩衣に裏も文もなく飾りなければ其名を呼ふ是を布衣といふは後代の誤なりといへり（源氏）〔關屋〕旅すがたどもの色々のあをのつぎ〳〵しきぬひ物くゝり染のさまもさるかたにをかしうみゆ（細流）狩襖也面布にて裏絹なり昔はぬひものなどをもするなり又くゝりそめしたるもあり當時すあをとて着するは此あをの裏をのけたる物なり又直衣といふもの古書に見えたるはみな夜の衾のことをいふなるに後白河帝の御代のころよりや武士の服の名となりて今にいたれり（秋草）に古は官位なき侍も式正の時は素襖をぬきて直垂を着しけるなり將軍家御所の御弓場始には矢取の中間直垂を着すべきよし（大的躰拜記）に見えたり右の如く古は誰々も着したる服なれども御當家に至りて武家禮服の階級をあたらに定めたまひて侍從已上は直垂四品は狩衣諸大夫は大紋重き役人は布衣其外は素襖と御制法を立られし故今世武家にては直垂貴き服となれり古の風俗をもて今の御制法を沙汰することなかれかやうの事今の服を以て古をおもへは心得かたき事有といへり

○昔は夜着なんど別にあるは希なるにや常の衣をかさねて着しこと見ゆ（沙石集八）或入道法師の物語に小所領知行せし時の事かけず病者にて身冷云々女童部が衣かさねて候が猶肩ひゆる儘に小袖を肩にかけて足冷てわひしければ小童部あとにねさせ侍りしが所領得替の後はひたすら暮露々々の如くに

十二單

服を十二一重といひ或はそれを非也として五衣といひ又五ツかさねと云ふ倶に綾にて裏は平絹の紅なり（官女飾抄）にしかるべき御方は七ツも八ツも十も時によりてかさねられ候只今の人は五ツより外はいたく用候はずと有り十二ひとへといふ名も（源平盛衰記）に女院は御焼石と御硯の箱とを袂に宿し入御身を重くしてつゞきて海に入らせ給云々彌生の末の藤重の十二單の御衣を召云々（増鏡）正應三年睦月一日の條に宮はこき紅梅の十二單の御衣に同色の御ひとへ云々【（俳諧懷子）（十）袴めしたる人のいこしさ、中立を十二ひとへにたのみより、などいへり】（榮花）【わかばへ】万壽二年正月大饗に女房達つほねより内に参りこむ處参るほどきぬのそすなどこらせまゐるをみなはあふぎもえさしかくさず衣のごちたくあつければたをやかなるけもなしからぎぬはやがて著つるまゝとほころびていぬればすべなくてこのむとなければどむらど糸じてかけためる云々【すそを人にとらするは衣おほくきぬのから衣も綻ぶるまで着つればなり】つまかさなりたるほど一さくよばかり見えたり【なみゐてうち出したる衣のつまなり一尺餘ばかりは厚く高きをいふにはあらずかさねのおめりたる處の巾をいふなり】一人に一色をいつゝ三色きたるは十五ッ、六ッ、七ッ、おほくきたるは十八廿にてそ有ける云々【入道殿此よし關白殿にたづねられてむつからせ給ふ處】きぬは七ツ八ツをだにやすからぬ事とおもへば中宮大宮などには皆申しらせていみじき折ふしにもたゞ六ツとさだめ申たるをあやまたせ給はぬにこの宮【妍子】こそとやぶりにおはしませ云々見えたりこれらはとにめづらかなり（庭訓）美精好裳安齋云裳婦人の禮服なり今三月三日の内裡ひゝなの女房の後の方に扇をひろげたるやうのものをかけたるは裳なり

素襖

○古へ賤の男といへどもみな烏帽子に素襖を着たりあをといふは字音なり（玉篇）襖烏老切、襖袍也と有てうへの衣なり【高則誠が（琵琶記）に趙五娘か墳を築く段に鮮血淋漓衣襖などあるはたゝ衣のとをと云】本居翁云（和名抄）襖子を阿乎之とあるはうの音ををに轉じて御國言の如くいひなせる例にて芭

なれは袴はいはざる也裙裳は上下の名異なるにて一ツ者也【(和名抄)に分て云は漢ざまにて此方にてはたゞ裳也モとは本居氏云纒衣マキソの切まりたる名にやあらむ腰にまとふ服なれはなり裏シタの裳もまとふものなりと云り又褶をヒラミといふは(日本紀)の訓なり(催馬樂)にうはもといひ(梁塵秘抄)裙にしひらともいふと見えたり(神祇式)には表裙と褶ヒラミと二物たり(藻鹽草)に裳うはも女は袴の上に袴を着るなり褶也といへるは後のことなへ(東雅)に云推古天皇十三年の記に諸王諸臣に命して大褶を着せしむと見え天武天皇十年の詔に褶をきる事を停めらる又大寶の令に至りては親王諸王諸臣禮儀の時深緑深縹等の紗褶あり云々これ又婦人の服のみいひしにはあらずといへり後には男の服するとはなく女にのみ遣りたり中古は専ら褶を裳と云へり(源氏)【末摘花】常陸のみやの古風なるをいふ處女房白き衣のいひしらずすゝけたるにきたなげなるしひらひきゆひつけたる腰つきかたぐなしげなり【蜻蛉】かぎりあれば宮のきみ【式部卿の御娘なれば也】なとうちいひて裳ばかりひきかけ給ぞいと哀なる【抄】に女裳から衣きたるは男の裝束したると同じ禮なりうちぎに裳をきたるは男の小袖に袴ばかりの出立なり(浮舟)侍従もあやしきしひらきたりしをあざやきたれはそのものをとり給ひてなど有ヒラミとはひらめく意シビラ後びらなるべし(裝束要領抄)に裳は白羅の裳地摺の裳下濃のも纐纈のも目染のもいろ〳〵(西宮記)に見えたり然るに今世には常の裳の中に纐纈といひて各別のものなり是もその子細しらず昔の纐纈といへるはくゝりぞめの事なり雌結雄結有て纐と纈別となる(延喜縫殿寮式)に見えたり(衣服令義解)に五色の交綵を以て纈の文を作るといひ(和名抄)に纈は帛を結ひて文彩をなす云々凡纐纈は裳に限らずからきぬにもする也各其きぬの地をくゝり染にするとなりと承り申候と有り上に引る承和の(令條)に女所服裳夏之表紗とある即褶也その頃は褶をば男は着ざりしとみゆ又これを見れは夏日に用る物のことし裳のみにあらず衣キヌも後世の如く多くかさねきるとはあらぬなるべし今俗に宮女の

しひら

纐纈

かくあれども大口の袴など表袴の下にかさねきる事あり（枕草紙）に大口ながさより口ひろければはかまあじきなし（和名抄）唐令云慶善舞四人、白絲布大口袴、和名、於保久知乃八賀万、一云表袴とあるをみればもと俳優の爲の服にてかつ表に着たるもの歟【大塚氏云大口は四布にて裾口に襞積なし上の紐付にはひだある故に口廣し云々】前張の大口も裁縫束帶の下に用る大口にかはりなし是は前を大精好にして後ろを尋常の精好にする故まへ張ていと廣くみゆるなり猿樂の大口は後ろを大精好にするより定基卿うしろ張と戯れ書給ひしもの是なり前張をうしろ前して着せしものにて興あるありさまなり云々大口は下に着たる袴にて短かくして風情なき故表袴さしぬき等を畧したる時見よからんが爲に前張に裁縫したるよしなり尤公服にあらず內々の服に被用なり下袴腰次は指貫のすそを張せんが爲に古の大口を長くしたるものなり是も風情をこのみたるよりの裁縫なり大口の外は表の袴下の口をせまくして又實はすそかゝりなり指貫勿論下括りありすそ廣きは大口と限る故の名なるべし

大口

○（新野問答）大口とは束帶の時表袴の下に着候袴なり幼年の人は生袴をふしかね染にて用候云々十六才以後紅を用申候紅張大口は別物にあらずはゞはりたる大口に候云々畢竟短き下袴に候なり前張一名前張大口とも申候童子半尻を着候時着用の袴なり云々是に對して申候はゝ只今猿樂大夫着用の大口後張の大口とも可申なり一笑々々大口に平絹を用精好をも用候建武元年制符地下輩精好大口一切停止の由玉英に見え申候云々

○安齋云室町殿の時將軍も侍も直垂の時は袴の下にかさねて着せり大口計りをも着する事有り云々

○（圓光大師傳）漆の時國か夜討の兵と戰ふ處大口の袴きたり（癸亥隨筆）大口の袴の說は非なり

襇褶

○又（令）をみるに女服裙ありて裳なく褶ありて袴なし（和名抄）裙裳釋名云、上曰裙、下曰裳、【和名毛】と云ふ袴の條に釋名云、褶【音邑、和名字波美見、本朝令】襲也、覆袴上之衣也とみゆ女の袴とする者は裙

紅袴

之儀制應與唐同、後代當效【其生年を記さゝれば定かならねど其年を七十余歲と押あつるに天平寶字のころの人なるべし猶僅の間なり】裾は下襲の尻なり古は纔着とてわづかばかり地につく長く地に曳ことはなかりしをやゝ長くなりて後代大臣は一丈五尺に至る其已下も准じて長しこの故に下襲より續きてはその領下にひけて惡きによりて別に切はなして用るなりとぞ式正の服だにかくのごとし春野の時いまだ古に遠からざるに當時古風をしれるものすくなきは流行のすみやかなるを古今おなじ

○（万葉）【十七】池主家持か歌を和する長歌春野爾須美禮乎都牟等之路多倍乃蘇泥乎利可弊之久禮奈爲能安可毛須蘇妣伎乎登賣良波云々摘草に出たるさまなり安可裳（アカモ）は紅袴をいふ古より中古まで下女といへども紅袴を着たり（衣服令）無位宮人の制に緑縹紺纈及尋常則服之、若五位以上女、除父朝服、以下色者、通得服之、其庶女服、同無位宮人とあり（枕草紙）にげなきものゝ條にげすのくれなゐのはかまきたると見え（宇治拾遺）【二】越前國敦賀の女を觀音たすけ給ふ語にくれなゐのすゞしの袴一ッあるを是をとらせてんと思ひてわれは男のぬきたるすゝしの袴を着て此女をよひよせて云々こゝろざしばかりにこそとてとらすれば【此女の母につかへたりし者のむすめに袴をとらするなり】（江談抄）に花山院御時被禁女房以下袴とは見えたり（沙石集）にある所の連歌、饌所の雜仕も赤裳をぞ着ると云句に大海老のからむきおける中にゐて

○（續後紀）承和五年十二月彈正臺奏、朝服之色、明在法條、而今會集之時、有緑無縹、僭上之弊遂致失敬、云々紫緋之品、其然易就而止、緑縹之次、其類猥多、難得而紀云々【令を考ふるに服色緑の次は紺また次は縹なり故に僭上なり紫と緋との間に蘇方あり是らはいやちこに正し易く緑と縹とは少しの濃淡によりてまきらはしければ正しかたきにや】同七年三月乙未勅、頃者風俗澆漓凋弊相屬、省費之術儉約是憑、宜自今以後女所服裳、夏之素紗冬中裾、不論貴賤一切禁斷、一裳之外不得重着、京畿七道准制禁斷、

嬉遊笑覧巻二上

服飾　古服　紅袴　大口　褶【しびら】　十二單　素襖【上下、肩衣】　羽織【馬乗、胴服】
小袖　布子【おひえ、いつちやうら】　木綿【法令】絹裏付袴　花結　裁縫【染物】

古服

（持統紀）四年四月朝服の制あり詔曰云々綺上下通用帶白袴其餘者如常これ庶人の服色なり（續紀）慶雲二年十二月、有勅令天下脱脛裳一着白袴なにごともみな唐に擬せられしかど猶左衽のとのみ改まらざりしこと見えて養老三年壬戌初令天下百姓右襟、云々とあれば是より已前大かた左衽なりし事しるし是も又先にも命令有しが行はれずやう〳〵此頃其風すくなくなりしを猶制令ありて改りぬるにや又（續紀）天平二年四月庚午詔曰云々自今以後天下婦女、改舊衣服、施用新樣とありその裁縫のやう（令義解）に見えたり【此時大寶令を撰れてより三十年に近し】

〇古へ男女互ひに衣をかりて着しとあり（万葉）【一】大行天皇幸于吉野宮時歌【此大行天皇は文武帝にや】宇治間山朝風寒之旅爾師手衣應借妹毛有勿久爾などみゆもとより褻のとにて外に用るにはあらじ魏尙書何晏は好みて婦人の服を着たりとなむ和泉式部があをかりしより思ひそめてきと云るは女が男服をかりたるなり

〇唐制に倣ひ給ふとも時勢につれて移り變るも多かるべし（續後紀）承和五年三月乙丑、散位從四位下池田朝臣春野卒、春野者天應以往人也、云々、春野宿禰、能說故事、或有採容、此十年冬、將有大嘗會事、天皇欲修禊祓、幸賀茂河、春野以掃部頭奉鹵簿陣、看諸大夫所着當色、其裾曳地、大笑曰、是尋常之裝束、非神事之古體、便指自所着、爲古體之證、其裾、離地差高而袴襴露見矣、諸大夫皆慙、曰古

の鏡の授翁是なりとて妙心現住大晃の記文ありされど此授翁は藤房に非ず同名の人なりと先哲論じたり

鏡筥椰葉を入る

○すべて銅を磨くに梅の酢を用ゆる如く鏡なども昔は柘榴を用ひたり（七十一番職人歌合）、かゞみとぎ、水かねやざくろのすますかげなれやかゝみと見ゆる月のおもては（犬子集）秋は柘榴の實を好む人、月ほどな鏡のくもりとぎ拂ひ（佐夜中山集）月のかゞみとくや木末のざくろ粒、また鏡の筥に椰の葉を入ること（俳諧毛吹草春部）したの葉を椰にもちひのかゝみかな（宗房）寛永以前はやくこの事あり風波靜まるをなぎといふ波なければ水鏡の如しその名詮を取ての事と見ゆ（江戸枝折）、に椰の葉に今玉虫のうしろ向といふ句あり玉虫は白粉匣に入る故なり

手そらなる十年季〔秀億〕朱ぬりの櫛は誰かみつらん〔渭舟〕四角めきたる大形に歯を深くひきたる櫛米仲が〔獨吟歌仙〕に閻の地藏を唄ふゆりすて角櫛を下駄の歯などゝさみせられ〔是享保中の作なり〕寶曆頃にもはやりけるにや其頃の畵にみゆ遊女の二枚櫛は其後なり櫛の形は同じ様なり櫛押への出來しもその頃なり帽子針の頭を曲たるやうに作る頭の丸き處に紋などほるなり銀にて作る明和二年前句附廣いとかなく〳〵當世は軒端にあまる櫛が出來

菅原櫛

○安永中平賀源内、菅原櫛といへるを工夫し出しけるころ或人狂歌を贈りける、醉て來て小間物見せの御手際は仕出しの櫛もはやる筈なり、返しかゝるとき何とせん里のこま物や伯樂もなし小づかひもなし此櫛も瞬息の間のことゝ見ゆ今其形狀をしらず寛保三年亥四月廿八日村觸女の櫛笄に金銀のかなもの高蒔繪等致し前々は無之かんざし櫛押へ抔と名付拵出し不届に候向後櫛笄古の小形を可用云々櫛押はこの時止て後寛政の初用る者もありしかほどなく廢れたり

さき笄

○さき笄、〔金龍山千本櫻〕といふ繪草子に〔享保十九年〕吉原の遊女兵庫曲にさしたる笄本一ツにて末は二ツに分れたり是さき笄なるべし今京難波の婦人の髮にさき笄といへどもさる物も用ひずもとはこの笄を用ひて結べる髮なるべし

鏡、花形、丸鏡

○鏡、古きは花形丸かゞみ皆柄はなし漢土にて菱花と稱するも花がたなりこゝには後世便利に隨てみな柄あるを用ゆ〔信長記〕に鏡背の天下一の銘を禁ずるよしみゆ今の如き柄ある物其頃は有しなるべし〔五雜俎〕に長柄小鏡といふ事見ゆれど彼處には稀なりと見えて畵などにかけるは皆柄はなし明和四年丁亥正月下野國都賀郡西見野村曹洞宗長光寺境内の山崩れし處より堀出したる古鏡に柄あり兩面に文字あり表に興國四年壬午三月不二行者授翁現父藤二品宣房の福壽を祈るよしを誌し裏に整衣冠、尊瞻視の六字あり此鏡今京師妙心寺の什物となれり其故は妙心寺二世授翁は萬里小路藤房なりと云ふ卿と

州床志）に櫛箆は處々に造る家ありその內にも京極二條北なる舟木屋が造るをよしとす〔〈職人圖彙〉に舟木長門とあり〕舟木は長門國の地の名也そこより黃楊伊須等の木を出す近世は櫛笄玳瑁象牙にて造るといへり〈職人歌合〉に筑紫櫛とあれば昔より西國の名產とみゆ〔或云薩州山中蚊子木多し其老たるは木心みな黑しこれをイスと云て櫛または筋などに作る諸州へ出すこの木燒に灰となし造酒屋に用ゆまた其灰汁を肥前の陶器に用云々〕〈胸算用雙紙〉小判二兩のさし櫛いまの直段の米にしても大俵三石あたまに戴く云々〈世の人心草子〉すき通りの瑇瑁のさし櫛を銀二枚であつらへ銀の笄に金紋を居させ珊瑚珠の前髮押へ針かね入の七髻をかけて〈一代男草子〉常州のとをいふ處べつかうのさし櫛花の露といふ物も覺へて〈入子枕草子〉下女のとを云ふにひつこき髮もまへづとにやはらけ三分五厘の木櫛も頭痛のなほるものにさしかへ〔瑇瑁をいふにや〕また〈世の人心〉にべつかうの惣すかしのさし櫛と見えたり〔天和貞享のころなり〕透しの櫛は其後元文頃より近く天明迄も行はれたり彫工東雨安親は奈良辰政が弟子にて出藍の譽あり安親が女子に彫て與えたる透しの櫛あり假鍮にて形角なりみねの所狹く齒長しおもてに水仙の折花をすかしに造りたり安親は寬文中の生れにて延享元年身まかれり此櫛は寶永正德頃にも造れる歟〔此櫛細工さまで密ならず安親が風は人の知る所なり〕其後はやれるは齒の處玳瑁水牛にてたけ短く面を廣くして銀の覆輪種々の摸樣をすかしに造りたる〈我衣〉にべつかう高價にて寬保頃細工人に上手出來て水牛の色よきにべつかうの黑班を入て上べつかうのまがいに賣と云れど朝鮮べつ甲にてまがい作る事はその先よりあり

庵形のさし櫛

○〈元祿曾我〉に庵形のさし櫛といへるは木瓜形にや又は紋所の庵がたにや中の圭角たるには有べからず〈同草子〉さし櫛たいまいに珊瑚珠の切入といふも見えたり〈賤緒手卷〉に寶曆中朱塗の山形の平たく橫へ長きをさしたり〈鸚鵡輪〉髮むさし野か朝日笄といふ句あり是朱ぬりなるべし又〈葛藤集〉証文に足

をなすもの歟一ッはみねを鳥の形に彫たり此等親しく見ぬ物なればその新古をしらず象牙の櫛古くは（延喜彈正式）に凡内命婦三位已上、聽用象牙櫛また（雜要抄）に大治五年二月廿一日中宮藤聖子、立后料、待賢門院に令申請給時、以牙作令進給と見えたり後世民間に行はれしは（椀久物語）女乞食のことをいふ處にこの淺ましき身となりても黑髮そゝげず一筋元結かけて象牙の半をれたるさし櫛これくせもの昔のおもはれ云々（一代女草紙）象牙のさし櫛大きに萬氣を付て拵へ云々、その後元文ころ象牙櫛笄はやる（其頃のもの今もまれにあり（賤緒手卷）には寶曆ころ象牙くし笄はやり蒔繪したる奇麗にてよかりきといへり、猶しばらくはやりしとみゆ今も吉原にて松葉屋半左衞門方には正月二日遊女ども象牙の櫛をさし昔の餘風ありとぞ

覆輪の指櫛

○箕山が（大鑑）に金銀覆輪の指櫛みえたり又（諸艶大鑑）に白目ぶちのさし櫛淺黃緒の雪駄とあり（これ天和の末なり）今兒女のもて遊ぶとする白目しやりなどにて伏輪したる是なり（我衣）に享保に至て木櫛大かた薄手になりたりみな蒔繪あり正德頃厚むねの木くし流行棟に金銀粉にていつかけをしたり甚たよろしく見えたり（松の落葉）に（生島新五郎が所作事）市野やといふ歌に京のみやげになに〳〵もらふた蒔繪のさし櫛きりのたう云々（桐のたうを蒔繪したるなり）

玳瑁

○琉球の俗常に玳瑁を簪とす（中山傳信錄）に風俗をしるし處、婦女小民家簪用㆒玳瑁㆒長尺許倒插㆓髻中㆒翹㆓額上㆒髻甚鬆前後偏墮疑即所㆑謂㆓倭墮髻㆒也云々あり（（茅窻漫錄）などに倭墮髻をことの下げ髮といへり）銀は良家ならざれは用ることならぬよしなり（琉球國志畧）（中山竹枝詞、汪楫）道是佳人亦復佳、一生赤脚守荊釵、脊來忽作商人婦、竟戴銀簪不脫鞋、その注に土妓不㆑得㆑簪㆑銀道遇㆓官長㆒必脫㆓草鞋㆒跣足據㆑地云々又徐葆光がおなじ竹枝詞に裹子垂々不繋腰、招風長袖學芭蕉、不知螺髻東西墮、玳瑁簪長尾倒翹、など見えたりここにて專ら玳瑁の櫛笄を用るはこれらの風をうけたるにや（雍

玳瑁の櫛

なり」そらいたる櫛とは彫櫛にて三日月形をいふなるへし漢人は八字といへり（剪燈新話）、八字牙梳白似銀、註に赫胥氏、始造二十四齒梳、後世雜以象牙玳瑁爲之、其制如八字、また（右京大夫家集）（建禮門院女房」屋しまのおとゞとかや此ころ人は聞ゆめりその人の中納言ときこえし頃五節に櫛をこひきこえたりしをたぶとてくれなゐのうすやうにあしわけをふねをむすびたる櫛さしたるがなのめならぬにかきておしつけられたりし、あしわけのさはる小舟に紅のふかき心をよするとそしれ云々櫛に結ふといふは（枕草子）〔うれしきもの〕さし櫛むすばせてをかしげなるも又うれし（抄）に、さし櫛作らする事にやと云り定かならぬなり按るに結ふとは物の形を糸ばなして造りて櫛のむねに付るにや（落窪）【四】こがねして透箱をころも箱の大きさに結へるに朽葉のうすものにつゝみて入たり云々これすかしのある筥を黄金にて彫造れるなり因て思ふに手をこめて作れるを結搆と云如く巧みに造れるを結ふとはいへる歟又櫛をもかんざしといふ（源氏）【絵合】朱雀院より梅つほに御繪奉らせ給ふ御返事に昔の御かんさしのはしをいさゝか折てとあるはむつかし梅つほ齋宮にてくだり給ひし時の別れの櫛のことをいふなり又【若菜上】女三のみやの御裳着に中宮より櫛のはこ奉らせ給ふ處、秋好御歌、さしながら昔を今につたふれば玉のをぐしぞ神さびにける朱雀院御覽じつけて云々けにおもたゝしきかんざしなれば御返りも昔のあはれをばさし置て、さしつきに見るものにもかよろつよをつげのをくしのかみさぶるまでこぞよろこび聞え給へるともみえたり又釵を櫛ともいへるは（新撰六帖）の光俊が龜の歌、河の瀨にうきたる龜のさし櫛ぞ見し世ながらのしるしなりける、是は（捜神記）に見えたる江夏の黃氏が母黿と化て深淵に入しが折々水面に出るに銀釵はもとの如く頭にありしといへる古事をよめり

○此頃政子がたと云櫛はやれり是は鶴が岡に政子の遺物あり其圖（新編鎌倉志）に出たり又或諸侯の藏物に紫檀にて作れる古き櫛二ツ有り一ツは形圓く傍に短き柄ありて自在に動く今の毛筋通しなどの用

へるを下さまの常に用ひん事はいかゝなり」

櫛

○櫛は古もさま〳〵あり黄泉の段に櫛は伊邪那美命左右のみづらに櫛さし玉ふと見え湯津津間櫛と云この男柱を引欠て火燭し玉ふ男柱とは櫛の左右の端の大なる歯を云ふ櫛の歯長かりし成べし火々出見尊も櫛を燃して豊玉姫の御子産ますを見給ふと云あり湯津は五百箇の約にて歯のしげきを云ふ爪とは借字にてかつまの上略、かつまは堅津間、にてクッはつと切る櫛の歯のしげくて間の堅くせまれるなり无間勝間の小船も此意なりといへり（延喜式）などに見えたる槟榔は蒲葵にて作りしにや五節に用る

彫櫛

ゑり櫛は（類聚雑要抄）に彫櫛形黄楊にて作る髪上の時用之また牙もて作りしも有とみゆ彫櫛の形は今いふ三日月形にて様の入たるなり〔木瓜形なり〕又（同書）銀にて伏輪ある細き形の櫛ありまた螺鈿櫛あり此櫛は木瓜形なり伏輪は今銀むねといふと同じ又糸金の櫛はらひ白猪の櫛はらひあり長き筋を集め中程の金物には括りたる其形水引を束ねたるやうなり〔今民間の櫛はらひとはいたく異なり〕さし櫛は

螺鈿櫛

さし櫛

（清少納言雙紙）に七日里人の白馬みむとて車きよげにしたてゝ見に行く中の御門のとしきみ引入る程かしらども一處にまろび合てさし櫛も落ようぃせねば折なんどして笑ふもまたをかし（紫式部日記）にひかけをまろめてそらいたる櫛どもしろきもののいみじくつま〳〵をゆひそへたりすこしさたすぎ給ひにたるわたりにてくしのそりざまなむなを〳〵しきと君たちの給へば云々（榮花）〔衣の珠〕弁の内侍いみじうさうぞきてさし櫛に物いみをさへつけて云々（枕草子）端午の條若き人々はさうぶのさしぐしものいみつけなどしといへるも同じとなり〔河海に（忍草）に物差出て付るよしそれをもひかげといふにやひかげは女雑ともいへり故に後には白糸などにて組て心葉とすとなり（類聚雑要抄）云五節童女の頭に物着付る事二所に付之左は耳の上程右は顱後に寄て付之其故は用差櫛時は此物着の上に横さまに差なり（まさすけ装束抄）に云たうにち〔當日〕はさしぐしといふものを右の物着のかしらに横さまにさす

耳掻

おほかれどかやうにいひたる處もすくなしかんは髮さしは面ざし目ざしのさしにて俗にかしらつきといふがごとく髮つきといふほどのことならんと思へどそれにてはこゝの文にかなはずよて是はしばらく（細流）などの說に隨ひてかんざしすべきあたりとせんかさてかうがいは（類聚雜要）に櫛筥一雙懸子の内に、平髮掻、細髮掻、と有り又唐櫛笥懸子の内に紫檀平髮掻ありその形よの常のかうがいにかはりたることなし耳掻は耳抉とて別にあり茶杓の形に似て反たり銀にて作るとみゆ又今用るかんざしは（好古日錄）に貞享年間御厨子所預り故備前守はじめて工人に造らしむ後僅に十數年にして宇内に弘まりたりといへり是說誤りなり高橋圖南老人は御厨子所預若狹守紀宗直といふ人なり若かりしほど北野に開帳ありしに或商人の高橋家に立入しに圖南それに教えて釵に耳かき造りそへなばはやるへしといはれける故にやがて作り出しつるに果してよく售ぬそれより世に普くはやりたりといふとを屋代輪池翁その家にて親しく聞れたりとぞ圖南老人は寶永の初め元祿の末ごろに生れし人なれば若きころは享保中なるべし（我衣）に享保頃よりかんざしと名付る物上耳かき下髮かき銀にて作るとありて今名古屋うちといふかんざしの形して足の股の間廣ろき物を圖せりその說符合す〔又その頃の一枚繪などにも見えたり〕（日錄）は聞誤りて記しゝ事と知るべしそのうへ笄の字書たるはかんざしとはよみがたし但團扇あふぎ等のかんざし耳かきなきは正德ごろの草子の畫にみゆ

花かんざし

○女童の花のかんざしの始は（我衣）に元文寛保の頃には舞子金銀にて梅の枝にて色紙短冊を付てさす往來すれば音のするやうにこしらへたり延享元年停められ其後象牙角鼈甲等に拵へたり又寛延頃より已前も花かんざしさすといへり然るを寶暦の初めよりはやり吉原の禿に傚ひてせしなど云は一度止て後の度を始と思へるなり吉原の禿も舞子に傚ひしものとしらる〔このかんざしは古雅に近し（源氏）【若菜上】四十の賀にかざしの臺はぢんの花そくこがねの鳥銀の枝に居たる心ばへなど殊に結搆にい

る紙のはりこ同はりこのたぼさしは烏賊の口より出るとびからすといふ物のやうなる形なり曲のはりこは島田丸曲島田くづし等ありそれも曲の大きなるがはやりてはりこも大に造りたりしがやがてまた曲小くなり次第にはりこも意巧を加へてのぎ筋を毛筋の如く付て作るたぼさしも色々かはり上方のつとさしにならひはりがねを紙にて卷き漆にて塗たるもの今用る所なり」（蕙卿贅筆）、余爲諸生時、見婦人梳髮、高三寸許、號爲新樣、年來漸高、至六七寸、鬆鬆光潤、謂之牡丹頭、皆用假髮襯墊、其重至不可擧首、又仕宦家、或辮髮、螺髻、珠寶錯落、烏𩍐禿揭、貂皮抹額、閨閣風流、不堪寓目、而彼自以爲逢時之制也、

髮搔（かうがい）

○髮搔（源氏）〔槇柱〕姫君ひはた色のかみのかさねたゞいさゝかにかきて柱のひわれたるはざまにかうがいのさきしておし入れ給ふ〔髭黑の大將の姫君なり〕（榮花）【初花】沉のくし白かねのかうがひ云々びんかきたまふべき具云々（和名抄）冠帽の具のうちに櫟鬢また䯻字を擧て和名、加美賀伎、とあり（櫟鬢は導なり（天祿識餘）、簪導字出隋書、釋名曰簪建也、所以冠於髮建也、導所以櫟鬢髮使入巾幘之裏也、導古者男女皆用之（禮）云笄總拂髦、（詩）云象之揥也、拂髦、象揥、今之篦氏、魏明帝與諸葛恢（書）云、今送犀導小物耳、是情發于中、而寄于物」と實方中將行成卿の冠を打おとしたる時行成卿守刀のかうがいを拔て鬢搔つくろひし事は（十訓抄）に見えたり又中關白賀茂詣の時醉て車中に寢て冠脫たるを入道殿に起されて驚き扇の妻にて鬢を搔ければ猶水鬢の如しと云と（古事談）にあり（水鬢とは水にて撫付るにや」

かんざし

今女の用ゆるかんざしの形もかうがいなり、かんざしに二義あり揷頭花は髮刺の義風流に花を折てさしたるがもとにて是を細工に作り意巧を加えて樣々にするなり年賀などに用るは老をかく意なり又翡翠のかんざしなど云は綠髮の義なり分ていへば翡は赤き色ながら是は漢土にも帶說とて例ある事なり（源氏）などにあまたかんざしといふと見えてみな髮をいへりその内（榊の卷）に藤つぼのとをいへる處かんざしかしらつき御くしのかゝりたるさまかぎりなきにほはしさ云々女をほむるに髮をいふは

おさふね
銀杏曲
糸巻
結び髪
わりがらこ
かつくる返し
くし巻
たにしやこ
めうと曲
唐人曲
おばこ結
禿
ちごわ
から子
おとしばら
くるりおとし
鬢さし
小枕

はづしの直なるにて平めたる髪の本末同じくする也（松落葉）丹前の部に曾我五郎と云ふ歌かつ山がかみの結ふり手替に云々〕おさふね〔丸曲の左右に輪を出したり〕銀杏曲〔もとは島田を銀杏の葉のやうにしたるを名付しが一種の結かたあり〕糸巻〔是も形によりての名なり〕其外結ひ髪には〔髪をとり分て鬢たぼをせざるをむすび髪ともいへるは近俗なりゆうも結ふも同じながらかくわかてり〕わりがらこ、かつくる返し〔天神結ともいふがそのかみ金水相といひしもこの類にや〕くし巻〔（武野俗談）に寶暦中淺草寺地内御ふく茶威に湊屋お六とて名題の女あり常に結びかみにしたり上手にて櫛を逆しまに巻こみむすびけるくし巻と名付く此まねをして江戸中の女結ぶとこなりたり云々川柳點櫛卷にするのが娶のくづしぞめ〔明和二年露丸評（万句合）くし卷は下女にゆかたをかいこませ〕田螺蝦姑〔いづれもその形に似たり〕めうと曲、唐人曲、おばこむすび、樂屋結、なごなり風は色々あれど小女の島田年高きはみな丸曲はかはらず〔江戸は丸曲、京難波にはさきかうがいは定まりし物なり丸曲は勝山より出て勝山はかうがい曲より變じたりさきかうがいといふもゝとはかうがい曲なり二種出る所同じ〕又稚女は禿〔髪の末を揃えて切垂るなり古き姿なり（續五元集）禿ひたひは眉かけてつむ誰を誰か文珠普賢にうつしけん〔晉子〕兒輪、から子〔正章が（千句）にからわとあるぞ然るべき〕菊曲、茶筅等なり此外猶有へし髪を以呼ふ稱多きは古より然あり童子をうなゐと云は垂髪の貌、其外、總角あげまき、髫めさし、童わらは、も髪をあげらかし居る故の稱なり鬢髱にはおとしばら〔茶釜ともいふ鬢さし有し時の名なり此頃は鬢さし廢れて皆此風になりてもこの名を云ものなし〕ぐるりおとし〔おとしばらは髪三ッ分にこれとも是は正中の芥子をとるのみにてびんたぼひとつに出す也〕鬢さしは安永八年はやり出て此頃すたれ小枕は町方にて文化の初ころよりすたれて用ひざれども今は髪少なき者多く小枕付の入髪をば用るなり小枕もはじめは付木などを輪にして用ひたり寶暦明和のころなり〔寛政中より曲の中に入

きわ墨

たひ、小ひたひ、丸ひたひ、火燈口、すりあげひたひ皆人々の生れ付に應じて計らひ作り給ふべしきわずみはなるほどうすく〱と高根の花に霞のかゝれる躰に小額より上にて引すて消すべしといへり彼十河額などの行はれたる寛文巳上のやうに剃込事は廢れたり古き前句付、開きたりけり〱、かいるまた四十女の破風びたひ近頃また剃るとはやり眉をも細くそり付る）昔は剃のみならず深そぎの遺風にや前髪を多く截りたりかたき油もなき頃なれば散り亂れたる躰多し

片はづし

○今見る處の髪のふり主殿の風は片はづし（是もとかうがいわげにてかうがいを拔く時は下ケ髪となるやうにすべきなり今はつけしたる地とかいふ有て片はづしとは異なり）もみぢあげ島田くづし少女は針打の島田文金ともいふなり（むかし淨るり語りの行はれて文金といひしは男の髪にてはけに竹串を入たり針を用るも同じ女子の針打も針は怪我あらむとて小き楊枝などを假に用ゆこの文金風は其始辰松より起る（我衣）に女の髪に辰松しまだは享保中はやるとあれば男の髪に辰松風はやりし同時に是もはやりたる也さて後に文金風とてもてはやす頃女のかたも辰松とはいはず文金といひしなり辰松は元結を針にて留たり文金とは元文元年文字金鑄られたればこの時より唱えたる名なり）其外かはりたる結ぶりもなし髻のかたち昔とは異なれどかの鴟つとの遺風なり（長く細きが圓扇になりしものなり）坊間

勝山　丸曲

には種々あり勝山とて丸曲の高大なるをいひしが今は廢れたり（今時は品々あれど先定りて少女は島田大女は丸曲なり島田は古き結ぶりなれどもこの丸曲はむかしなきものなり勝山の變じたるなるべしいと近き事なり勝山も昔のは今いふものとは異なり（女重寶記）に丸曲の名あり是は勝山を云にて今の丸曲にはあらず勝山が事は後にいへり遊女の名なり（吉原徒然草）に新造などの髪を結ふに下より上へあるへいたうのやうにまげて笄を横さまにさす事は常の事なり是は古へ勝山といふ女郎のゆひ始めけると也といへりあるへいたうといへるは古風の菓子にだてまげと云る是なり今いふ勝山とは違ひて片

しゆすびん

に今時の女は髻さしの何のとあり」胴脉が〔太平樂府〕〔明和六年〕婢女行に滅多偃伏金丞相、無正張出燈籠髩、灯籠びんは兩鬢を張出し毛筋を透したる也しゆすびんは毛筋をすかさぬなり〔居行子〕に女中の髪もしゆす鬢、鳥籠びん、張添、櫛添、釵いれ、鬢脇鬢、よと色々のはやりとかはり行き昔なかりし中分巳上に女中の髪結所々に出來放蕩な女は皆髪結にゆはするやうに成りぬといへり〔是は京師の

女髪結

人安永五年の作なり」遊女が丁頭などは昔より髪結にゆはせし事とみゆ江戸にて女髪結は安永七年頃深川茶屋むきにて上方風の髪ゆふ女ありしが其後所々に女かみゆひ出來れりと云ふ遊所の女童がとは〔諸艶大鑑〕に遊女が禿に髪ゆはするに太夫の禿より天神かこひつぼねの禿までかみ結が一月の賃錢高下あるとをいへり〔是は男髪結なり〕江戸に女髪結できしは天明の末寛政の初ごろよりなるべし賣色たぐひの者ごもの結せしとなりしがやう／＼行はれて今はいづくの端端までもあらぬ所なく破手なる者は結するとゝなれりしは上方より移れる悪風なり

ひたひ付

○ひたひ付の事昔は首飾なかりしが額を剃るに樣々あり〔女鏡〕〔慶安三年板本〕ひたひをそるとは大事のものなりひたひのなりあしければ顔のしほなくなるものなりすりたるきは見えぬやうにせらるべし人によりて生れつきのまゝこそよけれ生れつきによりてなりあしくば又すれるもよしかまへて／＼むさとすり給ふへからずといへるにて當時いたくそり過る習なるを知る箕山が〔大鏡〕に額の取やう丸

十河額

きにしくはなし云々瓦燈がたはかまごしわろし髪ずらうすき人は十河額にとる年たけたるはくるしからず十河額はむかし十河氏の男子よりはじめたる也さりけれど女の額に用ひきたりて中頃までは女中これを好めり今もよきにはあらねど置ずみくろくせんよりはまさるべきかといへり今按るに髪うすき

總頭一に總髪に作る

人用ゆとなればよほどそりこむなるべし其形は圓からず方ならず撫角といものゝ如くならむとがうは總頭〔一に總髪に作る〕にや十河氏の説はいかゞと或人いへり〔重寶記〕〔元祿九年〕額の作りやう、大ひ

城無間鐘）といふ院本に男の心はかりめのかもめつとこそかはゆらし又つくろひなしのかと嶋田など有り（獲縦輪）顔のもみぢを高雄には何あの君の髻に事問ふ都鳥（千詠）また、初上り是見よ顔の妾をつれ紋の撫子髱で日覆ひ、又姿みぶりを作る振付髮水入を汨羅にしたる粽髷（利角）これらは作意の名とみゆ

たぼさし

○踊歌とりわけ亂れ髪せんまつわけにゆふ櫛はゐすのみづぐしつげのくしさつまがたぐし蒔ゑぐしわらで束ねた洗がみあづませみをれ引出しはでに見ゆるはとんぼわげこれはまひこのかみのふうこしもと風と打みえてつとふつさりとこしまだに剃らでつりかみ二重わげこひにやむ身の茶せんがみさて色里のよねたちはむな高帶をしやんとして里の習ひかくるわのくせかいかな女郎しゆもなげ島田須磨や明石も兵庫わげとりかけがみの物思ひ二八にたらぬふり袖もつまに逢夜はさげがみよねみだれ髪のはづかしや引こきかみにつとなしは亂れて物を思へとや思ふ心はさま〳〵にもとゆひゆるさぬとけわげやこゝろぐるりと丸わげをきてみよかしの云々

とうろうびん

○（物類稱呼）に畿内にてつとさし東國にてたぼさし中國西國ともにつとはね土州にてつとさし又つとばり加賀にてつとかうがいと云といへり此器西鶴等が頃には未だあらず上に引る（榮花咄）にかぞへ並べたる内にも前髪立といふ物は有り（或説に若衆も髱さし有といへるは非なり）其債が鯨の墨道といひしが始なり（賤の緒手巻）に延享の頃なりけり女子のたぶさしと云物初て流行出て京より下りしを母を初め女子どもめづらしがりてもてはやしぬ鯨にてこしらへたる物なり二種圖を出せり（我衣）に三種圖あれども畵樣わろし（予も二種を藏す）（四天王伶人櫻）といふ淨るり（中村阿契作）第三うるまの六齋市の處おやつは何じやわしや髱裏と鯨の張出し是がないと燈籠鬢が出來ぬゆゑ太儀した云々つとうらとはたぼさし張出しは鬢さしなり（鬢さしは寶暦中より出來たり安永二年の双子に世話やき老母が詞

し(佐夜中山集)〔寛文四年撰〕名は白きくの花もしをみよ〔林宗甫〕秋風の吹あげにゆふ髪かゝり又きれたとはいへどきられぬ我思ひまたゝはつくる後家の水かみ〔たはたわと云べき事上にいへり〕(物類稱

しめつけ島田

呼)に關西にて髪のつとを東國にてたぼといふと有りたわは古言なり俗(つれ〲)にしめつけ島田かみさきもおなじたけにしてまん中にひら元結をかくる云々ふき前がみくぢらのひれのまがりたるものを入て髪の動かぬやうにす(元祿曾我物語)しめ付島田は髪先も跡も長みおなじ程にして中程より元結を二筋かけ云々(誕生日)といふ前句附に夜もほんのりと明かゝるなり、口ゆがめ平もと結をしめ付るといへるも此島田なるべし按るにこれはつとを長く出さず今引ッつめといふと同じ(一代女草子)にも

なげ島田

つとなしのなげ島田と有り此風は世はみなつとを長くする頃それにかはりて遊女踊子どもはかやうに結たりつとを出さぬゆゑかみさき長ければあと先同じほどに結なりなげ島田とはなげ首などのなげの意にてこれは後へ倒るゝ形を云ふ元祿八年板本の(菱川師宣)が(百人女)のうちなどにも見えたり(塵滴問答六)女子の髪を取あぐるに上臈のさげ髪を始めとして、あげ島田、なげ島田、かたわけ、からこ、かうがいわげ、兵庫ぐるわげ、など樣々(鎌倉記)〔正德二年草子〕太夫が風をいふ處に大嶋田に八分の平もと結をかけ吹びんに小額きはずみこく生ぎはをみせず(後日男)〔同頃〕吹びんのしづみやうにて地髪の少きをみる(俗徒然)にもふきびん見えたれば髪を出すと元祿の初よりとみゆ(一代女)〔貞享三年〕當世の下ケ嶋田惣釣といふ㕝を結出しさる御方に御梳にみやづかへける其時にかはり兵庫曲ふるし五段曲みにくしといへり按ずるに惣釣とは鬢たぼを分ざるなり〔好色盛衰記〕に野郎をいふ處、惣釣に結たる髪の曲め云々有り是にて知るべし(娘容儀)に當流の釣島田針かね入の七元ゆひと云ふ此類なるべし(諸艶大鑑)島原大踊の處、太夫天神のこらず髪つゝこみ大振袖いづれも美少人のごとく〔これは若衆

鷗づと

に出立しなり禿のあたまに之あり若衆も女のごとく鯨の前髪立を用ひしならん又鷗づとは紀海音が(傀

遊若（續川井）あやめ草まくや兵庫のかみのわげ（可全）など多く見えたり

やつし島田

○島田は（東海道名所記）馬かた島田のとならばを髮結たる事をよみ給へかしといふ男是に心付て、はたご屋の女は塵のつくもがみせめて島田にゆふよしもかなとよみたりげに〳〵春元の發句に名にゆふや氣にも島田の柳がみ云々（源平盛衰記廿）八牧夜討條八牧には折節勢こそなかりけれよき者共の在けるは伊豆國島田の宿にて遊ばんとて十餘人出ぬ殘る者ども十人許には過さりけり島田の宿その頃遊女くゝつめなどありて遊所にてありしなり島田曲にも種々あり（一代女）につとなしのなげしまだかくし結びのうき世もとゆひ云々（女重寶記）にかみの結やう、兵庫、ふきあげ、角ぐり、ぐる〳〵、丸わげ（此は勝山を云ふなるべし）五段わげ、下げ髮、かうがい大島田今はやるやつし島田此外さま〳〵の結やう有といへども〳〵はさげ髮町風は京も田舍も島田かうがいわげの二色上らうも下らうも押なへてゆふことに七八十年このかた（此書元祿九年の板）に及べりわきつめのやつし島田はわげらしくして目に立ふり袖のかうがいわけはおとなぶりていなものなればそれ〳〵に結給ふべし嶋田かうがいともに高きに田舍めきたり云々前がみも高くはゞ廣くわけたるは見にくし鬢もおし出す事過たるは鳥かぶときたるやうにてみぐるしびんのはへさがり切そろへたるは古風なり生したてゝびん付にてかきあげたるよし首筋のはへぎははすりあげたるはいとはしたなしすりたるあとへ白粉よごみてみるもうたてしはへぎはなみよく拔そろへたるも人形の首をみるやうにていやなり目にたぬやうに大かたに拔べしと云り（前かみ高く云々前髮立といふ物有て立るなり當時の畫をみるに女も若衆も皆前がみ高し鬢も押出す事云々この鬢といへるはつとのとなりふるき鬢のさまにあらずびんのはへさがり切そろへたる云々これ寛永より寛文ごろ專ら有りし事なり（我衣）にもと上は寶永より始れりと云れど此時生す事を云るかくのとし首筋のはへぎはとは今いふえり足なり）やつし島田とあるは今いふ島田くづしなるべ

角ぐり さきかうがいと云類なり角髻は（虚栗集天和三年）黒鯛くろしおとく女が乳（芭蕉）枯藻髪さゝへの角を巻ならむ（錦繡緞元祿十年）神なりの鳴らざる年は端居して（遠水）行水の後ぐるに結ふ髪（岩翁）寝せし子の何に襲てすゝり泣（其角）（我衣）に正徳のころかうがいの先を反し角ぐるに結といへれど角ぐる其前にあり反したるかうがいの形は兜の鍬形の如し其外、島田、傾城、兵庫、遣手、丁髻等なりまた額つき

兵庫曲 は丸額、火塔口とあり火塔口は今いふ雁かね額なり（一代女）には火塔額と云りその内兵庫曲は寛永頃より多く見えて大かた遊女が髪の風なり兵庫といふよしは（庭訓）などに兵庫鏁と見えて太刀のおびとりに用ゆその鏁の形なりといひ或は江戸大橋柳町に遊女屋ありし頃兵庫屋といへるより起るなどいへるは皆非なり按るに兵庫曲はもと一つなるを分て二ッにも結へり兵庫樽と云ものあり其形この樽に似たれば名付るなり其樽は片手の桶なり今江戸にては猿頰といふ桶のとなり〔これを兵庫樽といふは播

島田曲 州の酒造る所にて用る器なればいふにや〕島田曲は古しと見ゆこれも歌舞妓に島田甚吉といひしが結初たり又は島田といふ處より結出したりなどいふ皆非なりこの曲はふるく童子の髪の結さまに似て古畫に多しよりておもふにしめ手輪の轉語なるべししめは緊るなりたわは髪の曲れるをいへり前のたわの處にいへり〔庭訓兵庫鏁、安齋云太刀の總体柄も鞘も或は金或は銀のゝべがねにて包むなりおびとりに鏁を付るなり兵庫寮と云は武器を作る事を掌どるゆゑ武器を作る細工人兵庫寮の下に付て在なり何れも上手を撰み置なり兵庫鏁は兵庫寮の細工人に作らせたると云事にて名付るなり下手の作りたるは鏁ちぎれ損ずるなれば上手の作りたるを賞美するなり〕

○兵庫は（犬子集寛永八年）兵庫のものよ只御免なれ（重頼）けがをして行女房の髪のわげ〔御免なれ兵庫の者といふはそのかみの諺なり明暦二年刻板の（世話盡）にも出たり今俗ゐなかものなれば御めんあれといふほどの義と聞ゆ〕（鷹筑波集）大名や兵庫あたりにつきぬらん（山川長元）かみをわげつゝ出立

數々なり是に氣を付て見しに首筋より上ばかりに入る物十六品あり云々まづ髪の油髪つけ〔髪つけは鬢つけの誤りにや〕長かもじ、小まくら、平元ゆひ、忍び元結、かうがい、指櫛、前髪立、紅粉、白粉、齒黑、黛（きはずみ）おもり頭巾、留針、浮世つゝら、笠、云々（枕畫）踊の歌、黑かみの中にまきこむ小枕や括り枕や木枕を云々〔昔予が知れる老女などに發燭（つけぎ）を丸く輪にして長さ五六分許なるを用ひしものあり〕後に其積も此文をまねて（賢女心化粧）に始六十年以前の事を〔延享よりなれば貞享頃に當る〕定規にしてむかしも今も同じやうに思はれ嫁の髪みるに髪の中に鯨の墨遣を二三本も入らるゝは何の爲にせらるゝぞ我は此年まで髪の中には小枕の外は蒔繪の木櫛に黑き笄をさして花をやりしに嫁のあたまをみれば透とほる玳瑁の櫛をさして笄の前にかんざしとやら云物をさゝるゝは何の用にたつことぞ時代ちがひ姑の目からは辨慶が七ッ道具をあたまにいたゞくと思はるゝは無理でなし凡そ首筋より上ばかりに入る物廿一二品もありかりそめに出るにも身拵に隙なき事思はれける先髪の油びん付、ぎん出し、長かもじ、小枕、平元結、忍び元結、笄、かんざし、つと出し、指櫛、前髪立、べに、白粉、花の露、まゆずみ、きはずみ、おもり頭巾、とめ針、加賀笠いたゝき同くけ紐あらましさへ此通りぞかしかく有は西鶴がいひし貞享より六十年に及べり其内かはりたる物は笠とかんざしすみ遣なり（六玉川）に、道具みせほどこの頃のかみ形、といへる句あり〔墨やりのこと下にいふべし〕

〇髪の結ぶりは（春臺獨語）に寛永の頃までは婦女細き麻繩にて髪をつかねてそのうへを黑き絹にて卷しに其後は麻繩をやめて紙にてゆひ越前の國より粉紙にて元結紙といふものを作り出して海内の婦女みな是を用ゆそれよりきぬにてまく事もやみぬと我父正しく是を見て語り聞せりとあり（女用鑑貞享四年）髪のゆひぶりを畫ぎたる處に御所風とあるは今いふ島田くづしの如しこれはもとさげ髪をまき揚てかうがいして留置これを拔ば下ケ髪となるやうにしたるが始めなり笄枝曲（かうがいまげ）とあるは今京難波にて

髪の結ぶ

御所風

かうがいわけ

髮結鑑札

浪人在々へ陣幕を持あるき人通りある所には竹木の枝にはり廻して結たり長暖簾はこれに本づく江戸の始は赤羽根の床最初なり其頃これを一文ぞりと云といへるも附會なり長き暖簾かけしは結はする人の顯はに見ゆるを厭ひて其初めは幕を用ひたる事も有るべし〔今の葭簾ばりの如く幕を用ひたるは是のみにあらず〕今江戸の髮結房總の人多ければ里見家のことをよせたり但し件の書付にも芝口邊といひこれにも赤羽根といへるは符合せりその邊より始りしとはみゆ髮結鑑札は寛永十七年庚辰二月下さるゝといへども其後人數多くなり札なき者あまたなりしかば明暦元年己未八月御調べ有り萬治二年己亥正月振賣定めありし同時に髮結にも札を渡し一ケ年に師匠は金二兩弟子は金壹兩づゝ札錢被召上る事にて有けれども行屆かず依之其代りとして橋火消致候事と成る享保廿年乙卯二月橋火消御免にて御番所へ出火の節驅付可申と被仰付安永六年酉九月三年寄へ壹ケ處廿人づゝ出火の節驅付被仰付文化九年申十二月に牢屋敷へも三十人づゝ驅付可申樽役所にて申付る

○（風似文）選南行記に宮川の渡りを越て代垢離の子共は蛙の如く一錢剃の鋏は蟹に似たり髮結の腰にしだるゝ柳かな、聖〔聖とあるは李由なり〕（輕口咄）に田舍もの京に上り宿の亭主にいひけるは三條の橋づめにて月代そり髮を結て十文取たり京は物の高き樣に聞しに違ひてやすきとと云ふ宿主いや夫は高うござるそれよりあとの白川橋では七文でぼうずにしてくれますといへる咄ありこれは元祿の末の價なり白川橋は乞食の居る處なり今世朝早きものには豆腐屋を喩ふる如く昔は髮結をいへり（洛陽集）世中や朝寢に髮結花にかせ〔秋月〕又初秋の句、髮結と青大豆賣と白露と〔信德〕是はみな早起のものを云なり（京羽二重）髮結もさそ朝顏を仕舞まで〔立植〕（江戸名物鑑）髮結やおのがあたまは枯野吹〔十車〕げに紺かきの白袴と古へに云りし類なり

婦人首飾

○婦人首飾昔は首飾なし（榮花咄）に今世の女昔しなかつた事ともを仕出して去とは身をたしなみ道具

けり／＼みやこ鳥若しゆの髻のかもめ尻師宣が繪に若衆の髮結ふ圖あり元結を額の上よりかけて領の下にて左右の端を手にて押へ居て髮を結はするなり（賤の緒手卷）に男の相應の生れ付にて前がみのある內はおさへ元結こて頭の上より元結をかけ左右へ分て耳の後より下げ兩手におさへ持て髮ゆはするなり是は搔下けびんこて若衆はもみ上の處へびんを搔さげそれより丸く上へかき上げてさて髮はその好次第にゆひたり

御うちき

○天子の御ぐし上る者を御うちきこいふ（枕草紙）山の井の大納言めしいれてみうちきまゐらせ給ふ（源氏）【紅葉賀】にうへは御うちきの人めして云々（花鳥）に云（藏人私記）云御髻御鬢事侍臣之間、撰其事之人供、無定例、皆着當色袍、謂之御袿、今按に御もとゝり御びんにまゐる人は紫のきぬの直衣を着て伺候するを御うちきの人こ云なり云々古くは民間にはかみゆひなご云ものはなしみなみづから

髮結床

結ひし成べし後世便利に隨ひてさるものも出來しなり（雍州府志）に凡每町有二髮結床一諸人來令レ結レ之又巡二市中一取レ錢剃二月額一是謂二一錢剃一（宗因千句）〔寬文六年〕扨も／＼の床ちがひ棚、かみ結やよき市人こ成ぬらむ（元祿曾我物語）に一千剃の床に腰をかけ云々これに一千こ書たるは當時一錢にて結ばされば名の當らぬ故かく書るなるべし一錢職こいふ事は（髮結由緒書）こいふものを見しに往來住宅雨

一錢職

落より三尺張出、長暖簾四尺二寸、縫下け五寸、腰障子三尺餘の寸法こ相定致渡世候云々北小路藤七郎こ云浪人三河國原村にて御髮を揚奉り金錢一錢被下置依之一錢職こ唱へ申候其後江戶繁昌に付藤七郎芝口邊に罷在一錢職致居候處先年之儀を以伊藤熊藏樣御取次にて靑銅千匹頂戴致し其後萬治年中藤七郞より四代藤左衞門神田三河町へ引移御府內壹錢職分株敷御願申上候處願之通被仰付燒印下ケ札等被下置候云々息男幸次郎幼年に依て由緒書與之享保十二年九月北小路宗四郞基之こ有之一錢職由來もこより取るにたらず是はそのかみ一錢の賃にてありしなりまた（我衣）に髮結の初は寬永の頃里見家の

是を雇ひて額髪を抜しむ鑷工家内に要事ありて歸らむとを請ふ通人これを今しばじと留めて金壹分を與ふやがてまた歸らむとすれば又金を與ふ二時に至らずして金子あまた費したりとぞ是とは殊ながら同日の談とはいふべし（尊卿贅筆）に顧正臣とて驟に富るものあり豪興を發しさま〳〵物するに牡丹亭記の狂言を興行す一少年に髭を剃らせて杜麗娘といふ女形をせさせんとす少年辭して云ふ俗語に鬚一莖を去らんには米七石を償ふといへりさもあらば命に任すべしと顧氏笑て云これ細事なりいと易しとて一人の小者に旁より細かに數へさせて鬚を剃らしむるに四十三莖ありければ立ごころに白米三百石を其家に送らしめしとなむ

童子の髪
喝食姿
兒姿

〇童子の髪、安齋翁が（秋草）に云古代は童子も中剃なく髻を結て後ろへ長く垂て置たり髪の先をば肩の下邊にて切るなり是を喝食姿といふまた髪の先を切らず婦人の如く下げ髪にしたるも有り是を兒姿といふ兩樣なり武家にて多くは髪の先を切るなりと云り寺の兒喝食もこの通りにておの〳〵後見の法師有て髪をも結ふなり世中野郎あたまとなりては俗家の若衆は中剃をしたりこれも髪の風時勢によりてかはりぬ慶長のころは前髪のさきを切りて左右へふりわけたりまげは髻に元結多くまき二ツまげにしたるもありまた茶筅なるもありつとは出さずまげをつゝこみに結たるもあり其うち武家と町方と野郎との風もあるべし寛永の頃も大かた此やうにてありしが萬治寛文の頃より次第につとを出し女の髪のごとく鷗髱（かもめつと）などになれり西崔（大かゞみ）三條の橋なる床に白鷺の清八とて手妻もすぐれて折柳とて一流結出し髪先二ツの曲きよらなればあまねくこの床まで來りて若衆髪を結へりと見えたり（天和笑委集に鶺鴒やうなどの名あるもつとの形を鳥の尾に准らへたるなり折柳とは柳の髪といふより名付しならむ昔は男風行はれて若衆は女よりも粧へり（松の落葉）丹前の部、若松風流「わげの前髪ふと元ゆひのしかくまきはでな小性衆はこれこれ享保の頃までも若衆のつとはかもめ尻なり其頃前句附に匂ひ有

鷗つと

鶺鴒やう
折柳

こなりといへり（卷びんは文金風のびんつきなり」（我衣）に芝の肴賣日雇取なと正德頃まで三ッ折かへしと云ふ髪なり元結一寸まげ一寸はけ先一寸三ッ折なる故なりつゝ込といふは元祿ごろ杉木屋風なりといへり「つゝ込といふは近くも結たりとかやある髪結云つゝ込は元結一寸余まく故油にて元結の汚れぬやうにする手際なり元結三筋ほど續くなり元結の汚れがちなるをきらひて坂倉屋源七といふ町人は銀のはりがねを用ひたりといへり」小額を置ひたひ少し角を入拔たるも寶暦頃よりこそ明和七年（娛息齋集）屋船强飲畧語遊、下撫本田自風流「（耳袋）に安永の頃奇怪の人あり其名を自稱して通人といふたとへば鵺といふ變化に似たり口は猿利口にして尾は蛇をつかひ姿とりのとく啼聲唄に似たり多分酒を食として世上を一呑とするあたかも眞崎の田樂を奴に與ふるがとし忠といへば鼠と行すぎ孝といへば本堂のやねをふり向く燕雀なんぞ大鵬の心をしらむや小紋がへしの三ッ紋は紺屋へ三表のはたらきを與へ半えりは仕立やの手間損三枚うらの八幡黑は世上眞くらな足元ごんぶりたばこ入と落し木綿手拭長にもふきたらす穴しらずの穴ばなし親和ぞめの文字しらず俳諧しらずの俳名通人の不通なるべしかくのごときは親類不通の通なるべし」（半日閑話）安永元年の條近來男子の風甚殊にて髪は本多

下撫

とて中剃を大くし髷を高く結ふびんは下びんとて油を付けず櫛の齒を入れ毛筋を通し後の方は油を付て其堺を鹽畧と云ふ眉は三日月にて細く衣服は細袖うすわた重ねてきるに便す此ころ諺に云疫病本多竊眉宿なし姿と云ふ其ころ千柳点の發句に「うしろからゆるいかみだと如來いひ」本多善光を當時の頭つきにいへるなり

わッち

○源内が（しやれ草子）の跋に孝悌忠信を口に稱し身に行ふ君子有は當世これを號して野夫といひ武を知り國家を守る者を人嘲りて新五左と云ふ又此識りを免れんと思ふたわけはぬしといひわッちと唱へ顏は白きをいとはず脇ざしは細きをいとはず云々いへり其頃ある通人と稱する者心に協へる鑷工あり

合せ鬢

あたまなり「これ上にいへる半太夫が風を直したるあたまなり」（居行子）後篇三十年ばかり以前は男の髪合せ鬢といへば遊治郎のやうにありて愚も若かりし時はしかられたりき移り替り今は昔風となり時々のはやり鬚のぞき、のんこ或は宇和島ふかし鬢、巻鬢、などいろ／＼に替りゆくといへるは安永五年のことなればこれ延享中をいへるなり「（塵塚咄）に我等若年の頃武家の前髪の者は

かき鬢

かきびん年老の者はあはせびんに結たり左右のびんがみを髻の下へ合せて由は別に束ぬるなり此兩樣近年は更に見えず今も歌舞妓にて由良之助は合せ鬢にするもありといへり」また（賤の小手巻）に享保に宮古路といふ淨るり語り下りその淨るり行はれそれが風を學びて

文金風

文金風といへり（下手談義）に時代々々で伽羅油も付ねばならぬがそれも品が有りその巻鬢おいてくれ小袖のたけが長いその大脇差は居合拔の藥賣に拂てやれ一つ前に着るものきるな前帶もするな云々又豐後ぶしかたりの事をいふ處、律儀の息子も一度この門に入れば忽びんの毛さかだつてまけは頂上にあがり眉毛拔て業平に似たり羽おり長うして地をはらひ見る者驚歎せずといふ事なし（賤の緒手巻）にも豐後ぶしの流弊次第に淫風に移り遊士俗人の風あらぬものに成行て髪も文金風とてわげの腰を突立元結多く巻て

まき鬢

まき鬢とてびんの毛を下より上へかきあげ月代のかきはにて巻込て結たり衣類對たけの羽織を着長き紐を先に小さく結び下駄のはにかゝるやうにして腰の物は落しざしにさし懐手して駒下駄をはきて市中をぶら／＼とあるきたり（江戸名物鑑）春の目にくらべん紐や羽織連「彡香」これをいふ也「（我衣）に元文元年より上がた淨るり太夫の風を學び髪は油がため毛筋われめなし元結多く巻入かみ少し人はけ先竹串入る都風呂風とも文金風ともいふとありこれ先に辰松風といひしものにて少しはかはりたらめど此時始にはあらず自笑が（色三線）に向から來る男當流の跡あがりのあたま云々あり」（緒手巻）又云

豆本多

豆本多といふは至極髪をつめて尤すくなくしてわげいかにも小く豆粒の如く結なり云々又巻びんとて云々いづれも文金風より後のこ

はれり（諸艶大鑑）に俄に厚びんはきかけの帶がおりしたいなどいへるは此頃より厚きも始まれり〔能役者はむかしより厚びんなればこれを學ぶもの多く其風に倣へり〕されども今の如くにはあらず又前をば廣く剃れども後を多くそらぬにやはけ大かたふとしはけを上にそらしたるを（我衣）に蟬折といふと有り是は天和ごろ專ら見え元祿中もこの躰なり師宣が畫を見べしこのはけ先を廣げたるが箕山がい

はけ

へる銀杏がしらなるべし今の曲の後をいふにはあらじ髮先をはけといふは何の義かおもふに海鰌の尾に近き處の白き肉は味すぐれたりこれを尾ばけといふ又山などの長くなだれたる處を東國にてはけといふとなむしからば鰌の尾に近き處の形をいへる也よりて髮にはけといふも是にも末の義と聞ゆ髮の先をひらめ櫛にてけづる時其さま刷子に似たる故かと思へどさにはあらじ（我衣）に寶永ごろ淨留り太

ばちびん

夫江戶半太夫ばちびんにてはけ長くたてかけといふ中ぞり有り〔元祿の初め中村傳九郎といひしが此風にて云々半太夫が風をすこしなほしたるもの歟〕と云り（世事談）に頃日辰松風とて元結をこと〳〵しく長く卷き月代の上のかたへ高く曲をもつたてたる風あり辰松は人形つかひなれば仰くに曲の方襟の中に入亂るゝ故髮を高く結なり此風世間にはやりてうつぶきて業をする者もこれを好めりうつふけば常のかみも高く見ゆるをましてそらさまに結たる髮見るだにもうたてかりける〔かくいへるは享保

あはせびん

十八年なりこの髮は曲の元結を針にて留しとなり〕原武が（雜記）に其ころ世の風俗は皆あはせびんはやる曲の下にてびんを合せふと元結にごたひづけ巾着欝とてまげの下にしはをよせ云々その中に此方共の風俗は元結二寸ほど卷たてまげは針打大ばすに元結かけ云々〔これ享保末の事と聞ゆ〕（賤の小

ぞべ本多

手卷）〔作者不知延享前後の事を記せり〕ぞべ本多とて中ぞりをいかにも廣く剃りかみの間より中剃のみゆるやうにして根をゆるくわげと一との間僅かにして月代へのぞきたるやうに卷かけて置なり多く堺町邊のかぶき者のあたまつきにて歷々にも若き人たち隨分そのごとく結せて勤むる者も有り不相應の

町奴

れを羨み町奴なごゝて有しが歴々の奴こは風も違たりこいへり此町奴の風元祿頃迄遺れり（唐犬組の十兵衞こ云ものは享保まてもながらへたりこぞ寶永七年庚寅四月六日御觸先年有之候男立の類並鳶之者等日町人方へ參り何角ねだりケ間敷儀申町人ども難儀致し候よし相聞候云々なご其名殘有しなり）

赤阪奴

赤坂奴こ云は徒若黨中間等なり（紫の一もこ）市谷八幡の條にさのみ祭は結搆にはあらねご祭に出る男はみな旗本衆に奉公致し山の手の奴こ人のまねる男ごもなり云云當世はやり詞こ云もみな山の手筋より出る也それを堺町や木挽町にてまねて諸人に見せて遠國迄もしるなり（戲場にて坊主小兵衞こ云しは專ら奴の狂言をなし頭も其如く剃たれは坊主こ呼しは前から見ればさも見ゆる故なり又昔し狂言に、セリフ、又ツラチこ云て物を言述る事あり今もしばらくこ云ふ狂言なごの如し彼奴に扮するも必ずこれあり六方の奴言ばなりそれ行はれて種々の賣色にもそのまねをして賣たり元祿九丙子（若葉合）

【常陽歌仙の内】蹴合せに是か鬪なり沼樹鷄啼し口から六法な僧】

男子髮の結ふり風

○男子髮の結ひふり織田の家記に將軍上洛の處信長令して信長に同心せむ者は月代を廣大にして半頭を剃下鬢をすべしこあるは廣大に頭をそりてはおのづから下髻こ成なり其頃の畵をみるに髻ぼんのくぼのあたりにして丸め束ねたり其後次第に頭を剃て糸鬢さへ出來たり箕山が（大鑑）に鬢の厚さは賤からねご初心めきたり糸ひんに剃さげたるは健に見ゆれこ凡卑なり細して手先のあがりたる猶賤し鬢はたゝ厚からず細からずして直なるよし是をわけていはば細き方によるべし生さがりは無かたまさるべしおくれ髮は一筋ありてもあしゝ云々髮の結やうは立髮銀杏がしらふこ元結これ六法むき陽氣ものゝ好む歲なり少年の內は元結細さを用男になりては初心めきたり然れごもふこ元結の類には非ず細からずして太めなるを少し卷く卷き過しは深く嫌ふ小切目に位立る男ならば髮短かるべしこうたうなるはわげを出して髮先長かるべしつごの有はよろしからずこれ延寶中に云へるをなりびんの廣狹も色々か

げあくまてむくつけ云々有り又（百物語）にはけんくわ賣をいひ立て奉公したる者主の子の供して錢湯に行き我にかゝりし口論を他にぬりて遁れたる物がたりあるはけんくわ買のうちをいへるなり（東海道名所記）にけんくわを買にくる奴とも見え（洞房語園）に万治寛文の頃町々に六法男達と云者徘徊して各一組の異名あり鶺鴒組、吉屋組、鉄棒組、唐犬組、笊籬組、大小の神祇組、などゝいふ者共吉原へ入込拔折羅狼藉の事共度々に及ぶ（同書）日本堤謠の中に或は白柄ハッハの大小よしやが風の摑ざし（一代男草子）はさみ箱もち小者とめしつれよき風の大男はかま高くすそ取て大小よしやがゝりに編笠ふかく着てなどもあり此よしやといふとは浮世ぐるひばさら風流に出立をよし人は何ともいはゞいへと他の顧みざるをいふよしやわざくれといふは其頃のはやりことばなり（洛陽集）（延寳八年自悦撰）よしや渡世砥水流るゝ若たばこ（元好）是もそのかみ烟草をそしる者多けれども行はるゝ故それをかへりみず刻みて賣をいふなり（古今）戀歌の終に、流れては妹背の山の中に落るよし野の川のよしやよの中といふ歌ありよしやとは是非もなきといふ意なり此よしや組も誇らるゝは是非もなきなり又慶長頃惡徒タバコヨリ組をなし捕へられし事あり今はよしや組をさして云るなり鶺鴒組とは（卜養狂歌）にせきれいの讃に、當世のよしはらたゝき女郎たゝきこのとりのぼも岩たゝきかな、と是なりはやり詞の女郎たゝきといふよりせきれいと付たるなり鶺鴒は庭たゝき岩たゝき等の名有りとりんぼは烏といひかけたる也とりんぼのとは吉原の條にいへり又大小の神祇組とは或說に仁木某と云人其魁たるによりてしんぎ組といふとあるは誤なり是は誓詞の言に日本大小神祇組とあるをとれり其徒を結ぶ誓詞なり（昔々物語）に奴の事をいへる趣は大身小身の歴々にも奴あり下々は中小性徒若黨中間に迄も奴あり身を勞する事を厭はず忠直なるを第一とし專ら武を勵み意氣あるをいふ歴々には其頃奴の番頭ありて十三ケ條の條目などあり是にかなふ奴をよき奴と云ふ故に何れも利發ならざるはなし其頃浪人また町人にもこ

六法男達

よしや風

鶺鴒組

大小神祇組

馬咎
笠處々
鞘當
喧嘩買

奴詞と云ふ今もその詞遣りて常にいひなれたる有り件の(百物語)に奴俳諧を載す甕水にあたまかつぱる氷かなしやつら寒き雪の明ぼの(此類の詞遣ひを奴はいかいといふ)(松の葉)の山谷踊と云ふ長歌にたてもうはきも命の内よサやがて死ぬ〳〵ひつぴけうんのめさはげあすをもしらぬ身に(古今夷曲集)月を奴詞にてよめる「よみ人しらず」片脇へつこそびけらふみたくないに邪魔入申す月のむら雲この奴と云ものゝ起りは茨組の徒の悪風より出たり鞘あてなどゝいひてこれを咎め口論する事なりされど慮外を咎めて免さぬは武家の古きならひにや(古事談第四)義家の郎等美濃國にありしが國房が僞に笠咎めの間弓を被レ切と云こと又(今昔廿五)平の惟茂が郎等慮外馬咎めに射ころしたる男の子の爲に殺されたる物語ありまた(師門物語)國司の法制をいふ處、悪等もの罵合笠とがめおしあひ行跡町さうどうあしき事を失敗して云々これ後世鞘當の類なりされど鞘當はけんくわをかひてしかくるもあり(鷹筑波集)小尻とがめの喧嘩出來たり、若衆のりんきや酒のゑひ心地、また同じ頃の句に螢火の小尻とがめや月の劔(一代男の草子)芝居町のぞめきをいふ處、戀も遠慮もむしやうやみに見知ごしなるわる口あるひは小尻とがめ又は男立云々(二代女)小尻とがめ出かし逢其外小尻あてともあり(俳諧染糸)長きものやみる人ここに恐るらん鐺とがめをしても益なし(温故集)に萬民太平を唱ふといふことをさや當をさする御代かな山ざくら(貞佐)前句附に、たがひちがひに〳〵、鞘當に細道なればむねに持(五元集)に衣に鐺そこのき給へけんくわ買、喧嘩買といふは(室町日記)に浪花にて有德なる者共の子供さるべき剛の者をかたらひ百人百五十人ばかりにて堺大小路天滿を始として人だち多きかたを撰びて異形異類の出立にて喧嘩かはふ〳〵と五人三人づゝ觸て廻りける諸人おそれおのゝきけるをそのころ高橋作左衛門といふ浪人出あひてその中にて勝れたる者を二人切殺しければ其餘の者共かさねて一人も出ざりしといふことを記せり其躰をいひたるに大の男のつらつきまなざしいかめしきが頭は半頭にして頬髭うはひ

男の髪切ことありと云るは是等の遺意にやあらん」人こらさむとてするを法躰にならむとてするとはもとの起り異なれども髪をきる事は同じ〔今井人といふもの丶散切はいと近き頃人と〔一本穢多に作る〕あらがひしてまけになりしより始るとぞ」

だて風

○だて風だてとは立なるべし物をたて通さむとするをいへり（夫木）に〔寫家〕いさゝらば茂り生たるとがの木のとが／＼しさをたて丶過さん（著聞十五）西行法師の事をいふ處に世をのがれ身を捨たれども心は猶むかしにかはらずたて／＼しかりけるなり（沙石集六）山伏はたて／＼しきものを又ある女房の腹あしくたて／＼しかりける又【五】學匠之怨解と云條、便宜をかゝひて太刀を拔て走りかゝりけるを何事ぞと問へば一日惡口したりしためしたてんずるぞかしといひけるとあり恥しめられし憤りを報ぜんとなり此たてんずるといふ詞たて／＼しきといふたてと同じ後世たもじ濁りて云は男立腕立健氣立などと云よりいひ習へりさるを伊達氏の小者が風なりなど云は附會の說なり〔世に人とたてつくと云は楯を築に矛楯の意なり歌舞妓にて闘の學びをたてと云は只立はたらくの故なり立役は重立歟〕たて風是を奴と云ふ

奴俠士

○奴と稱するに一種奴僕のとならで俠氣にして腕立し血氣の勇あるを云ふ（百物語）に或人の語りしはあづまのやつこを見侍しが昔に聞しに十倍せり六尺餘の男大ひげをねぢあげ先はだには牛首布のかたびら着上にふと布のしふぞめに七八百がのりをかい馬の皮のふと帶しつかとしめくまの皮の長はふりまつすくなる大小十文字にさしこなしたるけしき身の毛もよだつばかりに候ひし〔これは殊に其躰をしたゝかに書たるながら古きかぶき畫にこの躰多く見ゆ〕（似我蜂物語）今の都のはやり物といふ諺の中にやつこたゞ中道心者〔これは寛永頃の事にや〕とは男立べき最中出家するを云ふ其角が鉢扣の歌に七十古來稀也とやつこ道心捨ころも有も是を云なり奴は物ごとにいかめしきを好み詞遣ひも一種有て

喝僧 有髪僧よりいふ歟又喝僧とも書り（和爾雅）には髯僧、今俗稱蓬髪者爲髯僧言似僧故爾といへり正章が（獨吟千句）に流石うき世を捨ね牢人がつそうも筮を付つなでつけつ（撫付是なり）自悦が（洛陽集虫）の句の中、蚌兒や喝僧の秋果もなし（自悦）古き前句付に（此大ぜいの內であらふぞ）撫付をかき手拭を引包み、また四方髪ともいふ（寛永發句帳）にあづまやの軒のあやめや四方髪（親重）もとゆひを

一束切 切は入道して法師とならむとするあらましなり一束切と云ことありこれはいはゆる散切なり（太平記）矢矯鷲坂手越河原鬪の條將軍は矢矯の合戰の事を聞及候ひしより建長寺へ御入候て已に御出家候はんと仰候ひしを面々樣々申留て置參らせて候御髻結は切せ給ひて候へ共いまだ御法躰にはならせ給はずと申ける（中畧）さては一門の浮沈この時にて候ひけるさらば力なし尊氏もかた〳〵と共に弓箭の義を專らにして義貞と死をともにすべしとて忽に道服をぬぎ給ひて直垂をぞ召れけるされば其頃鎌倉中の軍勢共が一束切とて髻を短くしけるは將軍の髮を紛らかさむか爲なりけりとあり髻結は（延喜式）に見えて髮結ふ組緒の事なれば夫を切て髮を放ちたる成べし又頭髮を手してもとゝりに取り手に餘りたる末を剪去とならむといふは皆非なりこれはもとゆひの根より截たるなり手一束の末を切たらんは少し短くとも紛らかされぬとはあらじ又もとゆひの組のみ切たらんは諸軍勢の髮を切て紛らかすには及ばぬとなり又古へ髮を切て人を辱かしめたる事（古今榮雅抄）に業平伊勢の齋宮を犯し又二條の后と密通しけるにせうとの人々いきどほりてもとゝりを切て長髮のほど東の方に下向すと云る說も有りまた（著聞集）に秦の兼任貧しかりける頃ひとり從者を召次の長になりし時年ころのふてごとをやすからず思ひ念しけるが日頃の腹をすゑむとて其從者のもとゝりを切しとみゆ又（源平盛衰記）熊野山御幸の條淸盛入道難波妹尾に下知して攝籙基房公（松殿）の供奉師峯高範等がもとゝり切たる事また（長門本平家物語）師高燒拂湍泉寺條に寺の大衆怒りてとねりのもとゝり馬の尾を切ことなど有り（遊里にて惡性

り革のはふり袴も有り紋は大かた横筋のあはひ廣きに小紋を其間に付たる多し大形なる摸樣を色さしに染たるも有り編笠は扁たきも長きもさま〳〵みゆ足袋は革たび燻（くすべ）小紋無地いろ〳〵にて皆打紐を付〔紐長きを巻て結ぶ色は赤青色々なり〕帶は幅大よそ鯨尺一寸ばかりもあらむとみゆるを前後に結めの見えぬは結びめを下に挾みたるにや武士は大小刀の下緒を帶の下に挾めり下部の男は散髪なるも多しいづれも膝まてなる短衣を着たり〔服は無地又は横筋又は白く腰明たるなどなり〕主の刀を持また鎗を持し、女はよき人とみゆるが髪を深そぎして下げ髪を衣の下に着込て衣かつぎしたり帶は男帶の幅と同じ常の女は前髪を眉の上になる程に切て前さまに垂たり髱たぼなどは出さず丸く束ねて襟の後にあり首飾のたぐひすべてなし衣服はかつぎの衣もやうさま〳〵なれどくゝし染の間に花などあり上着横筋ふとく細く色々にて其間色がはりしたるが中に小紋付たるもみゆこれは煉緯〔今云熨斗目〕又染たるも有べし供の女は頭にかぶり物なく長柄の傘をかつぎ又は色々の絹を續合たる袋を負たり是も衣服は横筋なり〔按るに（竹齋物語）に舟歌〔上畧〕おわかい衆のお女郎衆達のなりふりは肩にかのこのだんだら筋腰にうきよのぬめり筋なう腹すぢいたや腹いたやといへる此筋の服の事なり〕

市女笠

又女の笠は市女笠にて下にかつら布を二布合せて縫たるを後の方に尻の下までさげたるも有り又手拭を笠の下顔の左右に肩のうへ迄さげたるも見ゆ白き帽子を冠りたるもあり又男の肩衣幅せばくひだなし小袖の如く袵をかき合せて着る紋所の下横筋を染たり

總髪 撫付 散切

◎總髪昔は武士髭はさらなり總髪のもの老人などには殊に多し天和貞享ごろ迄は專ら有之猶其後も往々見ゆまた髻せず垂たるも有り（武道傳來記）などに散切と書り今いふ撫付なり〔總髪をも總ていふなり〕又俗に殘截とも書けどもかつて何の書にも見えぬ字面なれば近世の押當文字なるべし〔武士の散切は（義理物語）にも見え散切の女童は（三代鎌倉記）といふ草子にも見ゆ〕又がつそうと云は髮僧にや

を好み侈りたるさまなり今いふだてものなるべしそも無法狼籍なるなり後にははすはといふをなどの如く用ひたるにや（去來抄）に俳諧付合の事をいふに、白粉をぬれども下地黑い顔役者もやうの袖の蕪もの、この前句今やうばしやらの女とみゆといへり又土佐ぶし上るなり（草摺引）に扇うちはのばさら繪にも云々是は前にいへる意也

のけえもん 後えもん

○（北條五代記）昔關東北條氏直時代まで諸侍の形儀異やうに候ひし上下のひだのためやう衣紋のかきやうに至るまでも小田原やうとて皆人學べり云々（鹽尻）に天文以前在國の武士の風俗云々衣裳も素襖をのけえもんとてうしろへ引さげし小袖ばかり着する時も背の見ゆる程に襟をのけて着するをよしとす袴腰のひきのけて後えもんとてうしろ腰の間五六寸ほどあり又長柄刀とて柄長くして腕ぬきを入柄を目の先にさしつかふる程にさす〔これは北條五代記によりて書りと見ゆされども異同あり〕そのさま殘れるにや慶長の頃浮世又兵衛などがかける繪かゝるすがたありて今より見ればいとをかしといへりのけえもんとは今ぬき出しえもんと云

錢持首

○今衣の襟の裏にまれ表にまれかへりて重なれるをぜに首と云は非なり（犬子集）に貧乏人はわらはれぞする、衣もんをば錢もちくびに引なほし（誰身の上）說法する僧の事をいふ處あるは高座にのぼり錢もち首なるころもの襟を引なほし衣の衿を前へ引つめて着るをいふ懐の重きさまなりのけえもんとはうちうへの違ひなり

慶長風

○慶長の頃の風を古畫ども見て考ふるに男の頭つき鬢狹くさかやき大に剃り或は半頭若人は前髮薄く殘し中剃をしたりいづれも額は角をいれて拔く髻は腦後にして曲を丸く束ねたり衣服は廣袖もあり半身の服を上に着て其上に帯をしたるも多かりこの服はなちて着る時は是はふりなるべしたけの長さも短きも有て一樣ならず其中に左右のえりを帯のあたりによせてとめたる樣に見ゆる有

り若やかれけり髭ひげをりんと作りて錦きて蜀の江よりや來る船頭、又かの澤にちつくりと咲かきつ

ひげまん

ばたひげまんをする野守なりけり、ほゝげたり毛抜をひとつ取らさばや、ひげまんは髭自慢なり卑下と書てその意とするは後の押あてにて非なり

婆佐羅(ばさら)　鎌倉風　錢首　慶長風　總髮　散切　一束切
奴　俠士（せきれい、よしや、大小神祇組）　馬咎笠咎　靮あて　喧嘩買
男子髮の風　婦人の首飾　同髮の風　かうがい、かんざし　櫛　鏡

古より移り變れる時勢粧のと委しくは知べからねども武家盛りにして鎌倉風行はれてよりやゝかはれることも多かめれど猶四民ともにえほし着たる迄は古風にいたく異なる樣も見えざるにや應仁のみだれより後は戰國の餘風改らず大小沿革せし事も多かるべし

鎌倉風

○太平記【廿一】公家の人々鎌倉風を學びならふとすれど二物の中間にして都鄙に歩みを失へる人のごとしといふ事前條に引たりまた建武元年落書に此ごろ都にはやる物まな板烏帽子ゆがめつゝ氣色めきたる京侍云々尾羽おれゆがむゑせ小鷹手毎にたれも居たれど鳥とる事は更になし鉛作りの大かたな太刀より大にこしらへて前さがりにぞ指ほらすばさら扇の五ッ骨ひろ腰やせ馬薄小袖云々下衆上臈のきはもなく大口に着る美精好鎧直垂なほ捨ず云々又同時の法度條々に一鎧直垂蜀錦呉綾番紗金襴紅紫之類、細々警固之時不可着用、一精好大口一切停止之可用練大口と有り大かた猿樂能にみる所のさま

ばさら

したる成べし又ばさらといふは（太平記）に佐々木道譽が一族若黨ども例のばさら風流を盡し西郊東山の小鷹狩してふありばさら風と云とそのころのはやり言にて猿樂狂言の詞などにもあり婆娑の義にて狼藉なるをいふにや五骨の扇は中啓にや末廣がりたればばさらといふ歟今もちりみだれたるやうの事を俗にばさけるといふなり（鴉鷺合戰物語）けしからぬ事ばさらにて練貫の母衣をかくといへるなどは美

も多かりもとより此躰男立のみの風にもあらずよき人も好めるあり下郎の風となりしは後の事なら
（醒睡咲）に大名の世に勝れて物見なる大鬚を持給へる有り餘りにひげをまんじ云々いへる物語も慶長
ごろの事なるべし下郎のひげのとは（缺唇物語三）下らうの形きよらかにかほけだかく頬ひけ有てしん
じやうに生れつきたるは其身に損ありてさらに益なし心は躰に順するものなれば形にまよひて身をか
ざり云々大道寺友山云ふ七八十年已前其時代にはもみ上ケの頬髭と申義はやり尤侍の内にも有之候へ
ども先は徒若黨小者中間の類あまた有之候云々これ寛永正保慶安のころを云ふなり（東海道名所記）
〔萬治元年〕うは髭を松蟲の聲にひねりあげて面のかゝりかまきりの如くにやせたる男云々〔作り髭は
松脂を蠟に和て是を付け空さまに髭をひねり上たるなり〕松蟲の聲とはりんとはねさせたるを詞をあ
やなしていへり後髭の剃ることに成ても奴は墨にて髭を畵く是を作りひげと云ふ（五元集拾遺）西瓜く

作りひげ

ふ奴の髭の流れけり（色芝居冊子）あいごの若になりて三條勘太郎か鈎り上らるゝを見て御道具持の髭
を泣落させ云々同じ頃冠り付、筆とりて世をあやつりの作りひげ（松の落葉）田舍衆いかな客衆よりも
ひげの角さまおいとしお歸りのあと見ればびんつけ一貝はなげぬきおぐりのさうしを置れたこれが花
かやたとし今宵のつとめか云々（矢根鍛冶后集）よき作意とて譽られにけり、花の山奴がひげの假り硯、
此体赤坂奴に殘れり

糸鬢奴

○延寶天和の頃に俳優坊主小兵衞が糸鬢あたまにて異名を取しも其ころ師宣が浮世繪にいとびんのあ
たまの奴多く見えたりその風に傚ひたるなれど是は俳優ゆゑ名を得たり又それを眞似て同じ異名を取
りしも有り此あたまも（見聞集）に昔にかへる事もあるべければと戯れにいひたりしもあたれり（誰袖

ひげ奴

海）にさる御屋敷に有付き只今は與五平と申御門役云々昔の倖今のひけ奴と成てうす鬢の一筋に心な
き身とおもへども云々（雨夜三盃機嫌）狂詩に扈從連髭自慢など枚擧しがたし（宗因千句）奢られにけ

代は立髪を第一とす（風流には第一と也）然りといへども世に勤むる者などはなりがたき躰相なれば是を用ゆる人すくなし病氣保養の内など云より外なし相撲とりなどは平生かくもあらん彼に類するもおこがまし役者さへ作り立髪を用れば兎角まれ〱の事なり（かぶき者もかつらを用ゆるこの事なり）（松の落葉）手合相撲してゝん立がみちから自慢云々（諸艶大鑑）立髪の小者べんから島の風呂敷包に竹のねぢ杖をもち添云々此躰の草履とりむかしのはやりものなりこれを作り奴ともいふ（東海道名所記）當世の作り奴にはき替の草履をもたせ云々又りつぱ草履とりなども云ふ丹前の餘風此奴みな頬髭を作れり

頬髭

○頬髭は（河海抄）にかつらひげおもつらひげなりかつらをかけたるやうに生ひたる也などいへるとはかはりて作りやうあるなり（見聞集）にむかし愚老若き頃關東にて髭はへたる人をば面にく躰ひげ男といひてほむる故に皆人ひげを願ひ給へり云々髭はへぬ男は一期の片輪に生れけるとの無念さよ女つらと見らるゝ口惜さよと人の餘所といふをも我ひげの事かと恥かしさの思ひ顔にあらはるされば天正のころほひ小田原にて岩崎嘉左衛門片井六郎兵衛といふ者ざれとをいひあがり嘉左衛門に髭なければ六郎兵衛あの髭なしと悪口しければ即時にさしちがへて死たり男たる人髭なしといはるゝは憶病者といはるゝ程の恥辱に思ひ給へりこの十四年このかた頭に毛のなきをば年寄のきんかつぶりはへすべりなどゝあだ名をいひて若き人達笑ふ扨ひげはへたるつらはどんなつらえぞが島の人によく似たりといひならはし上下の髭を残らず毛抜にてぬき捨る然る間笠を着頭包みたる人をみれば法師とも男女とも見分がたしされども昔にかへる事もあるべければ異相なる人有て頭毛を抜髭をはへさせたらんにはみな人ひげはへて昔男の業平とやいはん云々（慶長年間に記したる也）かくはいへれど悉くさありしにはあらず但この頃より髭をそる事にはなれりとみゆ此後も猶浮氣の若ものは男立の風をならひ出立たる者

枚にて文などの如くに卷て又その上を結候へば三々九にて候髪のうらを柳の板にあて候て三刀にはやす也又五刀七刀にも能々はやし候を三度もみ候て息をしかけ候て採申候扨又上の方の結目を解て根の髪計にて烏帽子を着候その後上下を着し候て祝ふなり〔上下は素襖なり元服のと（秋草）にも出たり〕是は正しき躰なりそれを（北條五代記）に髪末をもみふさの如くにし或は入髪してもみちゞめ花ぶさのやうにするといへるなどこれ茶筅髪なり（老人雜話）に信長美濃の齋藤が所へ聟入に行し路すがら廣袖のゆかた茶筅髪なりしを迎に出たる山城が家老其樣を見て肝をけしたる由見ゆ今夫(つま)に離れたる婦の茶筅髪といふをおもへば前に向ふも後に仰ぐも茶筅の形したるをいふ名なるべし織田家にて御茶筅といひしも〔信雄の幼名〕髪の風によりていひしとしらる（鷹筑波）〔安井正親〕しな〳〵の茶筅がみでや木曾をどりとあるにても種々あるを思ふべし元隣が（寶倉）に茶筅かみはなめ氣なるものなれど少年の風呂あがり思ひ捨がたきものにして小歌（松の葉）〔源五兵衛踊〕薩摩源五兵衛は目に立男ノホヽンニホしやれた髪付ちやせんがみ寐て又起きても茶筅がみ又〔小野村彦惣踊り〕あまた茶筅ふともとでほそもとでふともとほそもと引しめて地下でひとりのだて男（榮花咄五）月代剃て茶せん髪三ッ着る物ひとつ前云々（丹前能草子）茶筅髪ゆたかにかゝり着小袖もすこしはせんしやう（賢女心化粧）夫婦いさかふ處亭主は茶筅がみになりて云々などあるは殊更に結べるにはあらで髻の放ちたるなり〔もとゞりのみしてわげざるをみな茶筅髪といふ〕

立髪(おつがみ)

○古へおつかみといへるは今立髪といふとひとし（古事談三）首おつかみといふほとにおひたる法師云々（著聞十七）かみおつがみなる法師一人ふしたりけりと見ゆおつかみは怕ろしき義にや今もおぞ毛振ふなどいふことあり髪毛久しく剃らで長う延たるをいふ是はおふし立るにはあらでかくなりたるなり立髪はことさらにおふし立るなれど是も初め故ありて久しくそらずのびたるをもいふ箕山が（大鏡）月

べしたるはいやしひきからずと見ゆる程を知べし角は蛤角に取べし猶額の至極はおのれなりにきはたゝずして鬓さきのみきしりと取廻したるを最上とすなど云りかの大額を世人好みしかば寛文二年寅七月町觸に町人若き者大ひたひ取候者有之自今已後無用可仕事とあり其後も（洞房語園）男立深見十左衛門と云もの延寶年中浪花の宗因江戸に來りし時十左衛門其社中に入それか發句に名月やきてみよがしの額際といへり額を廣く抜あげたる故なり其句の端書に（上略）治る御代の月はさえて仲のおぼちは艶色の最中前から見えぬ額際を來て見よかしと謠ふはたそ深見十左衛門と有（其頃吉原にて小歌に唄ひしなり此事（俠客傳）にも出たり）此者髭を生したる故髭の十と異名をとれり（同書）一麿が鯨の發句の端書に髭の達人は唐土に關羽日本に朝比奈宗祇女郎買に無体あり十あり云々また唐犬權兵衛といふ男立も頭付の異風なるによりて名高く唐犬びたひと云と今にいひ傳ふ（此額かの箕山が百會の穴迄取あげといへるなるべし）これは十左衛門などより昔のとなり（一代男草子）に承應年中の事をいへる處其頃世之助は江戸に來りて唐犬權兵衛かかくまへて有けるあまたつき人にかはり男もすぐれて云々あり（事跡合考）に天和ごろ迄町中に男達といふ臂突ありておの〳〵黨をなして徘徊せし奴の中享保の始凡九十歳ばかりなるトウケの組の十兵衛といふ男達の某云々みゆ唐犬組なるへし）此男立の悪風俗は室町將軍の時より盛なり其ころ悪徒さま〳〵異風をして半頭（はんかう）などもありこれは若き武士にも多く有て古畫に見ゆ常の奴あたまの中程に横に毛を剃のこして俗に是を障子と云ふこの障子の處までそりてうしろの方は剃らで置くこれ半頭なり今も武家の輕き者に此障子の髪を鬓と同じ長さにし結込は常の樣なり是を短く切てはんかうと名付るもの有り又半かう剃とも云ふ（相撲の條にいへり）

唐犬びたひ

ハンカウ
半頭

茶筅髮

○茶筅髪種々有にや（洛陽田樂記）には是を放髻と云り又烏帽子したは貞順（故實集）元服の事髪の根を三重に結候てわなに留候又〔　〕計置て右のとく又結候結留はぼんのくぼの方に有べく候其先を引合二

剃らしめて野郎と呼ぶそれが帽子を今もやらうぼうしと云ふ是なり野郎はもと薩摩詞なり坂部胡兮が(到來集)(延寶四年刻)根は堀な花はやらうぞさつま百合とあるも其事なり想ふに漢土にて風流なる男を遊治郎といへり是等もとづく處にや俳優を專ら呼びたらむうへは常人の同じくさいはむはいと恥べき稱なり(醒睡笑)ふはとのるといふ條、初め鍛冶やなるもの鞠を好み殿上人の風を學び五躰づけの頭をひたものしけり人々そのあたまの逸興なるをみつけ不審しあへり刀の中心にてやきたる故に備前長船祐定作といふあとありといへりかぢやなれば職分の刀の中心を燒がねにして月代を燒しなるべし今にてはおもひもよらぬ咄なり彼けつしきにて拔たる處黑血ながるゝなど云るを思へばかゝるとありもすべし其時の人は聞得しとゝ見ゆ五躰づけは今も髮を引つめて髻を高く結べるをいふ

額をぬく

○額をぬくに樣々あり(俳諧嘉多言)にそがうびたひといふ事は十河殿といふ武家の人の頭つきよりいひ出たる事とぞ無下に近き世の事なり(此書慶安三年の板)三好に與したる十河氏なるべし或云此說非也そがうは総髮びたひなりといへり千前軒文耕堂合作の淨溜理(小栗判官車街道)池庄司か島原に來る處にほうろく頭巾取のくればそうがう額の惣白髮と云とあり是も十河の說を取らざるにやされどまづ普通の說に從ふべし此風を女も學べり(下の婦人けはひの處にいふ)(安齋隨筆)錦芥抄を引て云額を四角にせしは越前の追手といふ相撲のせしを皆學びてなり昔ははふがみひたひとて丸らかに少し拔し也

はふがみ額

此說の如くなるも本は男達の風にならひしなりと云り(安齋は古風には額拔となしと思へるよしかくいふなり丸らかにぬきたるは月代なり)はふかみとは物の端をはふといふかみは髮にや又みやびたるとに花香實と云ことあるそれにや寶山が(大鑑)に額は大ひたひに百會の穴まで取あげ角を錐さきの如く尖らせて拔上る事六法むきの輩是を用ゆ此道の一派にありといへども多くは卑賤の所作なり小者中間これを專らとすれば彼に比せんは口惜かりぬべしされども額はひらきかかり高き方まさる高くとりす

ぎばこの月は日もなし九十月はいかでかはとてつかふまつらせつるを云々（抄）に近代まで沐浴に日を擇びしとなり先正五九月を忌み又十月はかみな月とて忌なり】今俗に身のうちをけじ〳〵に這はされたる處の毛ははげておひずといふ或云此俗說は下食時（けじきし）を誤りたる也下食時とけじ〳〵と聲近きをもて

蚰蜒

云是しかるべからずけじけじは（本草）山蛩蟲の附錄なる蚰蜒なり此蟲人の耳に入る事あれば一名入耳ともいへり但しその這たる跡毛のはぐるよしは見えざれどもこゝには昔よりいひ傳へたり實に此虫の這たる處腫て瘡となることあり（鷹筑波集）けぢ〳〵にとこねぶられてよめがはげ又（紅梅千句）に守宮のしるしはげたるぞうき〔季吟〕けぢけぢが留主する部やに這廻り〔長頭丸〕とあるにてもしるべしこれら皆けぢの假名を用ひたりこれも下食より云名ならばけしのかなゝり

鑷子

○鑷子髭を作る事を好むころ書院のたばこ盆に毛拔を添置たり是を書院けぬきといふ明曆二年の刻梓（世話燒草）になむぼうか冷る書院の內ならん月にくさめをするはな毛拔、南方は毛拔の異名なり漢土にても白髮を拔くこれを鑷白といふ楊誠齋、鑷白詩、止酒愁無那、哦詩意已闌、鑷髭非急務、也遣半時閑また莫把菱花鑷白髭、歡君留取伴唫詩、錦囊若要添新句、繡口如何減素絲、宋の彭淵材と云もの狄梁公の像を見て其相を學ばんとて刀鑷者を呼て眉を剃しむといへり刀鑷者は髮ゆひの類なり〔刀鑷をかみそりとけぬきと二物と思ふは非なり剃刀は專ら用ひずけぬきを云ふなり此頃頭を剃るとはなし刀圭といふも二物にはあらず〕

さかやき

○さかやきそりしあたま古畫にみえたるは〔月代は上にいづるが如しさかやきは月代の廣がりたる名として分つは混じてまぎらはしければなり〕今の如く鬢狹く殘して剃たるはなし其さま寬文の頃の歌舞妓役者のやうに中程を細くそりたり又前がみをおきて中剃したるもあり結城合戰の繪に結城七郎氏

野老あたま

朝が躰其外（春日驗記）などにも頭そりたる者見えたり今はこれを野郎あたまといふ歌舞妓若衆前髮を

ひもならはぬ坂東聲をつかひ着もなれぬ折えぼしに額を顯はして武家の人に紛れんとしけれども立振まへる躰さすがに媚きて額付のあと以の外にさがりたれば公家にもつかず武家にも似ず只都鄙に歩みを失ふ人の如しと有り額のかたを多くあくやうに着るが武家風のえぼしの着やうとみゆ故に額付のあと以ての外にさがるとはいふ額の髮際を拔たるとしるし是いはゆる月代なり（平治物語）（京師本）牛若奥州下向條に遮那王は十六と申す承安四年三月三日曉鞍馬寺を出けり云々其日近江の鏡の宿に着て夜半許に髮を我と剃上ひごろ懷に持ける刀をさし常にされてさしけり烏帽子のほこり押拭ひ着たりしと有り〔常にされてさしけりとは誤り有へしされては戯になりさしけりはきけるの誤りにや〕元服に髮を剃上るは烏帽子着て髮際の出ぬほとに剃なり剃たるは毛の生るとも早ければ拔きもするなり此にて（撰集抄）（砂石集）等のさかやきの文も心得べし（犬筑波集）番匠の遁世したるなりをみよひたひに殘るてをのさかやき、額ぬきたる者の法師あたまみなかくありさかやきとは冠明の義といへり又逆上をいとひて剃なれば逆息なりといふはわろし（小右記）に大夫名隆家の訓讀云伊部乎佐加也加寸、尤有興事也とあとさかやきもかゝる祝詞などにもよれるにや〔（源氏）【明石】入道領所の山水を云處に時々につけてけうをさかすべき云々（細流）に可催興の心もありこれ榮やかすなり花のさくと云もゝと是也〕さてさかやきをひろくしたるは昔もあれどみな武夫のいやしきもの其他も下部の者には徒々ありしと見えて後三年合戰畵などを始として古畵どもにかけり其風の普く廣まりしは足利義昭公上洛の時信長令を下して俗をなせり永祿十一年の事なり織田家の記にみゆ（和事始）は是を誤りていへり

けつしき

○けつしきの事は按るにけしき也曆日に下食あり此日沐浴すれば髮毛落るといふ（拾芥抄）に諸頌部、下食日沐浴の誦あり妙善王、金著女、追杖鬼、參尾王、波羅々鬼かく誦すれば髮ぬけずとかや彼器は髮を

下食日

拔ための物なれば下食と名付たるにこそ〔（源氏）（あづまや）女君は御ゆするの程なりけり云々けふす

元結も目にたゝず出し髪も少しつゝ有ておくれの出たはうらさいもの云々（我衣）に寶永より油元結店多く出來たり元祿前より元結引ありといへども買ふ人まれなる故多くはなしといへり

月代

けすしき

○男子月代のことを（秋草）に今世の中剃（なかぞり）のことゝするはいかにぞや兼實公（玉海）に安元二年七月建春門院崩御の記に時忠卿自件簾中出首（其鬢不正月代大見苦面殊損）示左大臣以下云（下畧）（年山記聞）これを引て云時忠卿は女院の兄なれば御簾中へ出入せられたるべし月代の事ふるきものには此記に初て見えたりといへり又（撰集抄砂石集太平記）等合せみるに月代とは額を拔たることなり（和事始）に月代は北條氏執權せし頃より始まるにや云々昔はけすしきとて髪を拔ものを以て額の上を少し拔しに信長公髪をぬきて益なく頭の痛むことをうれいて剃刀を用ひしなり其古へは髪を剃ることを僧尼の外はきはめて忌々しき事にせしとかや此說誤多し安齋云此說信じかたし（和名抄）鑷子は見えたれども鼻毛を拔に用ひしなりけすしきとて髪をぬく具又は額をぬく事古書に見ざることなり寛永正保の頃血氣の勇を好み腕立する者より始るよしいへる是また誤なり月代は額髪を剃もし拔もしたる事にて烏帽子冠を着て額に髪毛の見えぬ程にしたるなり鑷子をはなげぬきと（和名抄）にあればとて髪毛を拔かぬといふことやあるべき婦人の眉毛は是をもて拔くにあらずや髪を拔し具は三浦氏の（見聞集）に愚老若きころ關東にてをのこの額毛頭の毛をば髪剃にてもそらずけつしきとて木を以てはさみを大に拵へ其けつしきにて髪毛を拔つればかうべより黑血ながれて物すさまじかりしなり頭はふくべの如くにて毛のなきを男の本意風俗とす云々（此作者永祿八年に生れし人なれば若き頃は天正中の事としらる）同作（北條五代記）にも鉄漿にて歯を染又けつしきとて木にて剪刀を作り首髪を拔うすろがし鬢毛を五味子かづらにてかため髪の末をもみふさのごとくに結び或は入髪とて別に髪末の如く作りもみちゞめて花ぶさのやうにせしといへりけつしきのこと下に云べしこれ鎌倉柳營の餘風なり（太平記）天下時勢粧の條公家の人々いつしかい

青絲髮、方袤眞心不嫁人、この類いくばくもあるべし（今物語）に松殿（基房）の思はせ給ける女房かれ〲になり給ひて後云々日比つきせぬなげきもあらはさめと思ひつよりてたけにあまりたりける髪を押切て白きうすやうにつゝみて、今更にふたゝびものをおもへとやいつもかはらぬおなじうき身に、と書付て御車にいれて恭らせたりけるされば心中とて髪をきる事もいと古し

元結

○元結、組を用るは式正なり後世も民間には紙よりを用る友山云今時もてはやし候文七元結と申もの以前は無之上下ともに手前にてよりこきをいたし用ひたるとにて候（春臺獨語）に婦人は麻縄を用ひたりと有り其後（世事談）に若衆女の長く用るは平元結とて紙を一寸ばかりにたちて卷そへしなり（類柑子）に其角が茅場町の栖の隣なる閑地にて車をしかけ元結をこく事をいひて文七といふ者元結こく處に成ぬるなり云々文七にふまるな庭のかたつふり、元結のぬるまはかなし虫の聲、大絃はさらすもとひに落る雁、かゝれば文七は元結しごく者の名と聞ゆるに（世事談）に櫻元結寛文の頃より起る紙捻を長くよりて水にひたし車にて縷をかけて水をしごく故にしごき元結なり又文七元結といふあり是は紙の名なり至て白く艶ある紙なれば此紙にて製するを上品とすといへり此説然るべしこれを製る故に元結こきをも文七と呼しと見ゆ（好色盛衰記）に烏丸に江戸もとゆひや有と云り（國花萬葉記七）武藏國名物類の内髻結根本江戸に初る今世京都大坂にて專ら是を作る

文七元結

はね元結

○はね元結今あるものは近頃のものとみゆもとは今いふ長なが紙のたちし樣なるして結たるがその末上にそりたるさま古畫にかけるがある是なり思ふに今はんがけと兒女子のいふめる是ははねがけにてはね元ゆひを省き云なりかくて後色々染紙して作れるも出來つるなり（一代女草子三）金紙のはね元結といふ條あり反せんが爲にはりがねを入たるなり（世の人心一）針がね入のははね元結と見えたりみな若ざかりの婦女が用ひしなり今のとく女の童のみの物にあらず（色芝居草子）やつはり髪は大ていにはね

尺にするなり今按るに（末つむ花）の巻に此人髪の長き事見えたり古へかみの長きをめでたるから物語等に多くそのとをいへど古人とてみな髪の長かるべきやうなし長きものは皆捻りつきたるかづらなるべしきぬのたけ九尺といふもおぼつかなし古畫などにもさばかりなるをみず（本文の九の字も恐らくは七の字にや」（枕草紙）むかしおほえてふようなるもの七尺のかづらのあかくなりたるなどみゆ

おちやない

○（職人圖彙）におちやないは都の西當盤といふ處より出るとかや女の頭に袋をいたゝき髪の落をかひかもじにして賣買世渡るわざとす夫をおちやないかといひて町々をあるくなり晝の八ツ時より出るなり是古へのかづら捻りと同じ今はかつらやはあれど落買と云ものなし女の業に定りしものゆゑ（籠耳草子）に男女所業のかはれるとをいひて御池長者町には男のせんだく綿つみありやがて女のかご舁男のおちやないも出べきにやとあるまじきをいひしかどおなじ業なるかづらやは男の職となれり（昔も歌舞妓のかづら師は男なり銅のかぶりものにかづらしつくるは女にはかなはず」おちやない古くは（鷹筑波集）たけのかつらをもてるおちやない、といふ句に、桶ゆひは不斷こがしやのみぬらんといふ付句あるを思ふに昔よりちやとも呼りとみゆ

女子髪たきる事

○（古事談）に惟成辨清貧の時その妻よくはからひて恥をみせしめず惟成いまだ秀才雜色たりし時花逍遙に一種一物しけり惟成には飯を宛たり妻みづから髪をきりて交易し物をとゝのへたるとありもろこし（琵琶記）には蔡伯偕が婦の趙五婦髪を剪て親を葬る料とする事を作れり又まごゝろをあかさむが爲にしたる事は唐の鄭啓が（傳信記）に楊貴妃常に嫉娟にして玄宗といさかひければ高力士に命して車にて其里第に送らしむ貴妃うらみ悲みて髪を剪て力士にとづけて云ふ珍異の物はみな君の賜ものなれば献るに足らずこれは父母の生る所なり是を捧げて妾が悲めるおもひの萬一をのべよとて贈りければやがて又召歸されぬ又（元曲選）に李素蘭といふ妓李玉壺といふ男の爲に髪を剪る詩あり結句に今朝截下

髲〔須惠〕　元結〔撥元結〕　月代　けつしき　鑷子　額を拔　下食日
蛐蜒　さかやき　野老　十河額　はなかみ額　唐犬ひたひ　半頭
茶筅がみ　おつがみ　立髮　頰髭　ひげまん

かづら須惠　髲は〔和名抄〕釋名云、髲〔音彼、和名、加都良〕髲少者所以被助其髮也、俗用鬘字、非也、云々また假髻、釋名云假髻〔和名、須惠〕以此假覆髮上也、釋名今の本は假髮に作るは非なりいづれも入れがみと呼ものなれど髻はもとゞりなれば假髻は今曲といふもの丶そへがみなるべし須惠とは末の義にや〔類聚雜要〕五節理髮の具に末額髮とあるも是なるべし〔今そへといふはすゑの轉語と聞ゆ又かづらをえひかづらと

あげかつら　もいへり〔源氏〕〔初昔〕花ちる里のさまをいふ處御ぐしなどもいたくさかり過にけりやさしきかたにはあらねどえひかづらしてぞつくろひ給ふべき其〔抄〕に伊奘諾尊鬘をなげ給ひければ蒲萄となるそれよりかつらをえひかづらといふと有りえびとは長き毛をいふなり蝦をえびといふも是なり蒲萄も蔓の長

かつらひげ　ければこの名あるなり又大ひげなるかつらひげと云は〔椎がもと〕の巻にとのゐ人ぞかつらひげとかいふつらつき[illegible]きなくてある〔三十二番職人歌合〕にかつら捻、花かづら落かみならばひろひ置ひねり

かつら捻　つぎてもうらましものを、又うつくしくかゝれとてしもうはこせはよめがかつらをひねりさりけん判云歌かみのゆう〳〵となひやかなるさまたがねくたれの枕のうへたがうしろでのふさやかなるそきめにもかゝるしなは有かたくこそ見え給ふれかづら捻といへば賤きやうなれどかの常陸のみやの御むすめ我落がみをこそ薫衣香の壺にそへて乳母の侍從にもたびけれ賤きあまのすさみにもたえましき道のすぢは詞の玉かつらにて侍りけりとあり〔源氏〕【蓬生】末摘花のめのとの侍從に給ふべきものなくてわが御ぐしの落たりけるを取あつめてかつらにし給へるが九尺餘にていときよらかなるを丶かしけなる箱にいれて云々〔細流〕に九尺あまりばかりにてとよむなり昔は衣のたけ九尺なりさればかづらも九

粉のことなり按に和蘭人も髮に白き粉をふりかく其品何物なるかいまた聞かず地方の風俗にて少年も老成の姿をなすを貴ふにやこ云ふ

五味子髮　びなんかつら

○五味子髮を結ふにびなんかづらこて南五味子の莖を水に漬しそのねばり汁を用ゆ（北條五代記）に髮をばびんなせきにびんを高くつけあげ給へりこ有り又猿樂能狂言に麻生こいふあり揩子木をひなむせきこて髮を撫付る狂言なり（色芝居草子）に髮はそぼろの時より丁子油山吹ねりさねかづらは干あがりてから蛞蝓のはふたやうにきらきらして見苦しきと紙漉のころゝをつかはせ云々びなんかづらを水に漬て用る器鬢水入こいふ塗物も金物もあり形圓扇なり難波なごにはびん付入れこもいへりこ見えて大坂版の前句付にさても結構な日和さまかな、月代へ鬢付入を頂きて、是は小判金の形に似たるに依て云り」（鹽尻）に今男女盛に五味子を用ひて髮をかたむこれも中世よりせし事こぞ頃日は三州某の谷びこかや是く一時の妖草こいふべきにやかくいへりしも廢れて今は久しく成ぬれご近頃まで油店の看板なんかづらを取つくしけるこ京師難波東都は更なり所々の都會及び田舍の末々迄是を用ひざるはなしにかづらの束ねたるを置たりしがそれもいつか皆うせて唯兩替町なる下村の店にのみもこの儘におしろいの看板の上にのせて有りそのあるじに尋ねければ今も稀にはこれを求めにくるもの有こぞ

びんつけ

○びんつけこいふは上にいへる伽羅油なり故に是も下村なごの油の紙袋には今もきやらの油こ記したり箕山が（色道大鑑）（延寶六年の序あり）びんつけは花露伽羅油を用ゆ〔かたきもやはらかきもなべて鬢付こいふすき油なごの名はなし」油は松脂煉は髮枯てあしゝ蠟ねりをよしこす又髮を梳る事を云處に油は木の實を第一こすし梅花これにつぐこいへり（職人圖彙）に口上商人よろつの合藥並に鬢付のたぐひ諸方の市法會の場に出て辨舌をもてこれを賣これらは天和貞享頃のことなり是今やしこ呼者の類香具師こいふ者也

花の露

の兒小性などは格別其外は上下ともに年若き男の髪に油付るをばなまぬるき儀に致候となりてその時代にはもみあげの頬髭はやり侍にも有之候へ共先は徒若黨小者中間の類にあまたこれあり其輩蠟燭のながれをとき松脂を加へ伽羅油と名づけ用ひ候此節も伽羅油入用候へば藥種屋へ申遣し調へ候今時の如くなる伽羅の油店無之候（昔々物語）に女など伽羅油付るとゆめ〳〵なしさるによりて伽羅油賣所江戸中に六ヶ所にならではなし目藥貝ほどの貝に入て賣を一年二年にも用ひ若衆など多く付るは二ヶ月ほどに用ゆるもあり伽羅油付るを恥のやうにしたりとあり（世事談）に正保慶安の頃京室町髭の久吉賣初む其後三條の市宇賀縄手の五十嵐これを製す江戸にては芝の大好菴脊虫喜右衛門など始なり（我衣）に寛文中日本橋室町一丁目に若衆方中村かつま伽羅油店を出す其少し前麹町へ谷島主水といへる女形油店を出すこれ油店の元祖なるべし其碩が（賢女心化粧）といふ草子に姑（しうとめ）六十年以前の事を定規にして嫁のかみゆふをみるに伽羅の油を付らるゝがあれば武家がたの中間奴などが髭にこそ付る物なるに女のあたまに付るとはあんまりけうとい事なり云々又香具屋といふ者有て振うりにもありきたり西鶴（大鏡）にみゆ又（一代男草子）に匂ひ油は油賣あり小栗の說經に後藤助國と云ふ香具屋の事みゆ（吉原徒然草）によきゝやらの油は香具に念を入れ背虫が油はいたく松脂をつかはず又したるき女の顏花の露にて光らせたる云々此花の露と云も藥油にて面につやを出す者なり彼（一代男）に芝神明前花の露屋十左衛門と見えたり（江戸鹿子）に伽羅油屋花の露屋神明前大好庵同門前町林喜左衛門とあり十左衛門といふはなきをしかいへるは戯作なり（佐夜中山集）〔松江重頼撰〕わかき時もつものとてやびんかゞみきやらの油もかくし女房（重長）

○（環海異聞）オロシア男女髪には油を付る「ホマク」といふすき油の如く何にて製するかしらず少し樟腦臭し油を付たる上へ「ヤーホルキムツカ」といふものをふりかけ置ヤーホルキは一種の芋也ムツカは

下に着給ふうす色の衣透うつりたるがいろの如くに見えけるを筑後守貞能見とがめて何とやらんあれ淨衣のよにいまはしげに見えさせましまし候急ぎ召かへらるへうもや候らんと云々いへるを（草牟春備）に引てこゝにいろといひたるは鈍色の事なるへしにび色は喪服の色なればにびいろといふだにいまはしければいろとのみいひたる成べし今も田舍に喪の衣をいろとのみいふといへりさらば今の女詞に紅をいろとのみいふと淺ましくいまはしきなりと云り（源平盛衰記）には薄あをの帷子を下に着給へるが淨衣にすきとをりて諒闇のいろの如くに見えければとあり越後などの俗に葬禮に白きもめんにて製したる短衣を上に着るこれをいろといふ今日光山にて土人の野邊送りを見しに女は白き絹にて袖をたゝみたるやうの物を首にかつげり是もいろといふ）

〇因みに云ものきぼしとて爪に白點出來るを衣服を得る兆とす（格知鏡原）に（物類相感志）、人或爪甲上、生白璣拂々然、謂之爪花、得服飾之兆、俗人爲驗常無失、とあり（六玉川）三篇むつことに問かけてみる爪の星これ衣服を望むなり

香澤

〇膏澤（和名抄）、澤、釋名云人髮恒枯悴、以此令濡澤也、俗用脂縣二字（阿布良和太）（古菟玖波集）にあぶら綿をさしあふらにしたりけるにいとかうばしくにほひければ（上西門院兵衛）灯火はたきものにこそ似たりけり（待賢門院堀河）丁子がしらの香やにほふらん、古は綿に香油を漬し置て用ゆるのみなり後には是を竹筒に貯へけるにや（宗鑑山崎にて竹の油筒を作りて售しとかや）（望一千句）竹の筒ふりふられぬる中はうし髮の油に泪たりそふ

伽羅の油

〇伽羅の油などいふかたき油はいと近きことなり（女鏡）に髮に油をつくるに常の胡麻の油を付侍れば殿によりてきらひ給ふものなりくるみのあふらをとりてつけ給ふべし第一黑くなりにほひせぬものなりと有り油を用ることとすくなきを思ふべし（落穗集）に寛永の末正保の頃の事をいひて伽羅油は前髮立

手足卵、靚粉澤于胸臆、以喩失其所施、後世妓女、金翠綴足、粉澤靚胸蓋恒飾耳といへるなどめづらしとするにたらず胸におしろいつくること今こゝにては遊女のみならず上下ともに女の常粧となれり(篗絨輪)釣らせて駕籠に辨當が乘、花揃に花見女の骨牌紅粉、濃粧をいふ也

○(環海異聞)にロシア婦女臙脂を著る者あり唐山より渡る紙へつけたる懐中べになり光太夫云兩頰へ著て唇へは不付漢土に習へるなり

つめべに

○爪べにとて爪の先に紅をさせども爪を染るがもとなり(剪燈新話)、四時詩、要染纖纖紅指甲、金盆夜搗鳳仙花、注に女子採花塗指甲、則如著臙脂、この脂甲を染ると(癸辛雜識集)そのほか諸書にみゆこの故に其花に染指透骨指甲等の異名あり(廣東新語)有歌云、指甲花連指甲草、大家染得春纖好、(大和本草に鳳仙花女兒此花と酢漿草の葉をも合せて爪をそむと記せり筑紫あたりには其如くする故につまくれなゐと名付るなり

寒べに

○(女郎花物語)にふかつめとりたる指の先そりかへりたるやうなるにべにいたくさしたるはむくつけくさハこそ見え侍れ(女鏡)(慶安三年刻)爪のきりやうふか爪好み給ふべからずべにいかにもうすくさし給ふべし(女重寶記)(元祿九年)白粉にかぎらず紅なども頰さき口びる爪さきにぬる事うす〳〵と有べしこくあかきは賤しく茶屋のかゝにたとへたり濃きにあかぬものは齒くろなり又寒のべにを賞する事は貞德(獨吟百韵)障碎をやしはすの月の天狗ども紅粉に木の葉の散てまじれる自注に師走紅粉木の葉天狗といふ寄合せなり(懐子俳諧集二)色見えてうつろうものや寒のべに(山田女)又【九】爪べにをさすは蝦手のもみぢかな(良春)(佐夜中山集)べに染の手を血の色にあやしまれとりぬる爪もふかきたしなみ(重明)今女の詞にべにをいろと云は忌べきことばなり((平家物語)小松内大臣熊野詣の段要を撮て錄す岩田川に着しに夏の事にて少將維盛已下公達兩三人河の端に涼み水に戯れて淨衣ぬれたれば

〱の名あり黛眉みか月眉わすれ眉かすみ眉大かた眉きしたて眉是は幼き人につくる眉なりから眉これは年たけたる人の作る眉なりいつれも眉は左より作りはじむるものなり右より作るべからずなど見えたり又

きは墨

きは墨は髪際に塗るなり（重寶記）にきは墨はなるほど薄々とあり又是をおきずみともいへり

べに

○べに（和名抄）釋名云〔赬粉和名閉邇〕赬赤也染使赤所以著頬也〔今按赬即頳字也〕と有り（本草）を考るに燕脂に四種あり時珍云一種以紅藍花汁染胡粉而成蘇鶚（演義）所謂燕脂云々出西方中國謂之紅藍以染粉爲婦人面色者也とまた同條附方に坏子燕脂とある是なり赬粉はこれなるべし然らは今いふかたべにに胡粉を雜へたるものなり胡粉とは粉錫の一名にて〔京おしろいなり〕畫家に用るとは異なり〔畫家にごふんと云は蛤粉なり〕べには和漢ともに古へ面の色を粧ふ具にして今の如く唇に塗ことはなかりしと見ゆさればこそ粉をくわへたんめれ（源氏）【常夏】近江の君のことをいふ處べにといふものいとあからかにつけてかみけづりつくろひ給へりと有も顔を粧ひしなり道輿准后の（廻國雜記）にべにが谷をとをりてけはひ坂をこゆとて顔にぬるべにか谷よりうつりきて早くもこゆるけはひ坂かな（守武千句）いとどだに貌の赤かる人なれやほほさきのみかべにさへもうし漢土に天子諸侯の媵妾月事ある者は丹を面に注て其しるしとす是を

的

的といふ其後月事にもよらずこれを面粧とすと（輟畊錄）などに見えたり（學齋佔嗶）に鳳州遁迹山の一洞より出たる古鏡の銘文の中に當眉寫翠、對臉傅紅、」と有しとなむ（色芝居）といふ草子延寶のころ石川某か妻の事をいふ條おしろいの上に紅粉を隈どりはへ際黑々と眞孤だらけに彩色す又近く享保頃までも

頬紅

頬紅とて紅と白粉を交てぬれり白粉ばかり粧ふは遊女のことなりとかや〔上の双字も寶永の時書るなればそのころのさまなり〕近頃は紅を濃くして唇を青く光らせなどするは何事ぞ青き唇はなきものを本色を失なへりそれゆゑ時勢粧を畫く者女の唇を草の汁にて塗り濃彩には綠青して彩りぬ周の時に有しといふ黃眉墨粧あやしむべからず（天祿識餘）に剣總云、綴金翠

は捨て貝は女中に尊まれ

眉作ると眉引

○眉作るとを(秋草)に(日本紀)仲哀天皇八年秋九月云々愈玆國而有寶國、譬如美女之睩、有向津國(睩、此云䐢用弭枳)と見えたりまよひきは眉引なり新羅國をほめて美女の眉引にたとへたるなり眉引はまゆすみ引て眉を作るをいふなり仲哀天皇の御時既に此譬とあれば其始は猶前代よりの事なるべし(萬葉六)大伴家持、初月歌、振仰而若月見者一目見之人之眉引所念可聞とみえたりといへり按るに睩は宋玉が(招魂賦)に蛾眉曼睩とあり眉引は眉を畫くとにはあらず寶國などいへるは新羅をほめたるなれど眉引は遙に見えたる狀をいふのみほめたるにあらず初月のごとき眉を美女の眉引といふにて引とはおのづから引たるなりもし畫きたるならば美女にはよるべからず今俗には引眉などいへど古はかくとこそいへ引とはいはず(引といふは畫くにあらず)(新撰字鏡)に黛婦人飾眉黑色也、萬與加支とあり眉を

黛

畫くはもとの眉を鑷子にて拔きさりて(今はみな剃となれど古くは拔ものと見えたり)畫くにてこはいと後の風俗也漢劉熙釋名曰黛代也、滅去眉毛以代其處也とも見えてかしこには久しき事としらる(唐書)車服志に、文宗即位して詔を下す內に楚高髻儉粧去眉開額と見えたりこゝには唐より傚へるなるべし邊鄙には今も眉をさらざる處長崎平戶近江の君が畑奧の柳伊勢の員辨の邊一村の婦人眉をそらず齒を染すといへり其外猶あるへし蝦夷はもとより然り是を田舍には容飾をせざる故といふべからず風俗は容をみがくにはよらじ(鹽尻)に長崎の婦人は男の如く眉毛を生し常とす年老たる女房の顏をかし平戶も同じさまなりしが近年國主より令して領內の女房を剃侍るとてめづらかなるやうにいへるよし云々見えたりされど今も老女など剃らて居るも有りとか是もやう〳〵に改るにやあらむ

しん

眉に色々の名あり

○眉にシンと云は心字なるへし黛をいふ(女重寶記)に眉にしんをいるゝと霞の中に弓張月のほの〴〵と出たるが如く引給ふべし(後世は引くといへり安齋これによりて古言を誤り解けり)凡そ眉にいろ

辰砂

に辰砂出けるにや水銀は辰砂を燒てとるなり今は伊勢より水銀出ざれども其國射和（いさわ）にてはらやを製すると他州に勝る辰砂今和産なければ唐山より渡るを用ひ京師より水銀を伊勢に送りて作らしむ今の法は慶長の頃泉州堺の錢屋宗安また小西清兵衛などの明の法を得て白粉を製すといへり〔（後漢書）華佗傳に五禽の術をいひて起作一禽之戲而汗出、因以著粉、といへりあせほに天花粉を著るが如し晉の何晏が粉を手にはなたざりしも此なるべきを專ら好色のことにいへるなるべし今男子にも夏日汗ばむを苦みて粉を用るものあり但葛粉などなり〕

玉虫

○玉虫を白粉の中に貯ふると（北戸錄）云、金龜子甲蟲也、五六月生於草蔓上、大於楡莢、細視之眞金帖、龜子行則成雙、類壁龜耳、其蟲死則金色隨滅如螢光也、南人收以養粉云與汞粉相宜、こゝにて玉虫を粉匣に收むる事と似よりたれば（大和本草）に金龜子を玉蟲に充たれども誤りにて金龜子はこがね虫なり玉蟲は（本草）皇螽の附錄なる吉丁蟲なりといへり玉虫を貯ふる事古き事にや異本（四季物語）虫撰みの條に形りは美うして玉虫などいひていみしけれどきり〳〵すはたおりかうろぎにさへおとり聲たてぬもあれど此虫はやごとなきさちあるものにて宮のさうにて何くれの御房にも御くしげの中なる白ふんの中にまろびて骸は人をさへ野べにすてためるならひなるに十とせはたとせの後まても御ものゝ中に包ませおかせ給ふことよ云々みみ漢土に媚藥といふとあり（本草）にも往々見ゆ其物を貯へもて

媚薬

ば人にめでいつくしまるゝことあり玉蟲も是等の意にや（北戸錄）蝙蝠の條下に媚藥種々擧たり蟲もあり草もあり（諸艷大鑑）に手なれし鏡臺引出しゆかしく見るにはらや宮に玉蟲云々（江戸枝折）椰の葉に今玉むしのうしろ向また眞珠をはらやに雜て置けば其珠分身して數多くなるとて兒女のするとなり（懐子俳諧集十）白粉箱のふたの明くれいつの間にぶんじにけらし貝の玉（重長）また前句付、わたつ海一倍になる〳〵死て又子をうむ箱の貝の玉、これは子安介とも聞ゆれど又（口寄草）匂ひこそすれ〳〵、身

桂粉

畧紀)七年、吉備上臣田狹、侍於殿側、盛稱稚媛於朋友曰天下麗人如莫吾婦云々鉛花弗御蘭澤無加云々とあり猶これより先にもあるべけれど明文なければいつの時よりとも知るべからす是を例の漢文にならひたる虛飾の文なりとせむは誤なり其故は神功皇后より以來韓地の貢物絶ざれは鉛粉もあるべく又韓吳等の國よりこゝに來れる女などもあれば必す齎したらん又便りに就てとりよせなどしたるとも有べきなり鉛粉は沙門の製造には似げなき物なれど漢土にも(嶺外代荅)に西融州、有鉛坑、鉛質極美、桂人用以制粉、澄之以桂水之淸、故桂粉聲天下、桂粉、舊皆僧房罨造、僧無不富、邪僻之行多矣、厥後經畧司專其利、歲得息錢二萬緡、以資經費、群僧乃往衡嶽、造粉而以下價售之、亦名桂粉、雖其色不若桂、然袿以故發賣少遲、といふ事あり

白粉　はらや

○さて粉に二種あり故に(和名抄)にも粉と白粉と並べあげたり(本草和名)に粉錫、和名、巴布爾とあり粉錫は今京おしろいと呼て婦人の顏に塗るものなりしからは粉は水銀粉にて今はらやとも伊勢おしろいとも呼ぶもの是なりもしは物異なれどもはらやといふ名は巴布爾を訛り呼べるにや知べからず孔志約が(唐新本草)の序を作りて鉛錫無辨とは陶弘景が非を斥したる辭なり弘景だにさる事ありましてこゝには誤稱もあるべきなり

おしろい

○しろきものといふべきをおしろいといふは女のもてあつかふ故におもじをそへ下を畧するなり此名も近俗にいへるにあらず(四季物語)異本に正月の條空のけしき夜べ見しにはかはりてはなだの紙におしろい付たるやうに處々しろう見なされ云々有り

水銀

○(續紀)元明天皇和銅六年五月癸酉、令大倭參河並獻雲母伊勢水銀輔仁の(本草)にも水銀、和名美都加禰、出伊勢國といひ(今昔)に京に水銀商するもの伊勢國に年來行通ける物語あり(七十一番職人歌合)汞ほり、あちきなやにふのみ山にほるかねのみづから人に思ひ入ぬると見えたり此頃迄も丹生山など

てみればあまのほごにふさ〴〵とかゝりたり眉ぬきかねつけなど女びさせたれば云々（年山記聞）に時房公日記（建内記）を引て云永享三年十二月に予女（九歳）有祝着事齒久呂美三筆予付初之眉毛ぬく事母是を拔次に三獻云々（海人藻芥）に鳥羽院已前男の眉を拔鬚をはさみかねつくると一切なしと見えたり但（枕草紙）（白馬を見る條）とねりが貌のきぬもあらはれしろきもの丶ゆきつかぬところはまことにくろき庭に雪のむら消たる心ちしていと見ぐるしとみゆかやうの事は有しなり貌のきぬとは顏の地はだなりといへり觀るもの丶ためにつくろへる事としらる（漢土には男人脂粉を傳ると漢の代よりあるよし（野客叢書）などに見えたり）（筵響錄）に平家物語に東の武士の平家の通盛がかねつけたるをみてあつはれみかたにかねつけたるものはなきをと申たりし事のあれば武家はつけぬ事分明に見え侍る室町殿の時分は武士もつけたるなり當時は昔にかへりて武士はつけぬ事となりたり云々室町家前後一向下部は不染候へども中分の人よりは染候歟白齒者と書てあをはものと讀り白馬をあを馬といふが如しとの白齒者と申は下部のとなり此首をとりたる時の事（甲陽軍鑑）に見えたり（宗吾記）にもかねをつけぬは狼藉なりと有といへり（甲陽軍鑑十九）かね黑に匂ひ留たる頸といふともみゆ又（おあん物語）に首とりたる者に誂らへられてその首にかねつけてやりしなども有りよき人の首と僞り手がらにせむとてなり（北條五代記）に首實撿の時はぐろの首をば侍の首とて先上へ懸たり（遺老物語）に永祿已來出來初る事種々の中信長公信忠卿昵近の士齒にかねを付シキレはく事と有り

○（女郎花物語）に厨子棚黑棚置物云々黑棚にはもとゆひの箱小すみあか水引箱わたし御はぐろ箱などよの常のさまなるべし云々わたしとあるはぬきすにやと思へど今のわたしがねなるべし

○粉（和名抄）云之路岐毛能そのはじめ（持統紀）六年閏五月賜沙門觀成、絁十五匹綿卅屯布五十端、美其所造鉛粉、とあり此によりて世に此時より婦人顏におしろい付る事も始ると云は非なり夫より先（雄

髮置

○かみ置のこと安齋云小兒胎髮をそりてより二三歳に至りて髮置こて祝ひする事國史類古物がたりに見えず〔このこと非なるは上に引るこ共を見べし〕（東鑑）（島津本）仁治二年六月十七日若君御前御生髮也武州脊布衣令參仕給毛利藏人泰光左衛門大夫定範以下父母兼備諸大夫侍候云々若君は賴經の若君賴嗣なり時に三歳なり（蜷川親元殿中日記）寛正六年十一月十日條に姬君樣一兩日中御髮置御祝云々これ東山殿義政公代の事なりこいへり後世十一月を此祝ひに用るもこれらの例にや又思ふに今世七五三の數をこれらの儀に用るは何の故にか（群碎錄）に男子入學多用七歳五歳盖俗有男忌雙女忌隻之說至冠笄亦然按北齋李渾弟繪六歳願入學家以偶年俗忌約弗許云々則其來久矣こいへり

帶ときに橘を用ゆ

○帶こきに橘を用ゆ（五元集拾遺）貞德翁五十年忌元祿十五年壬午霜月十五日懷舊の心を述侍る帶こきも花橘のむかし哉此橘は昔をいふのみならず（日次記事）云民間三歳小兒髮置令蒙綿帽子是謂白髮挿松枝並多知波那於其上こいへり（俳諧綾錦）【卌六番合】かみ置左笠重き雪のしらかや花元結【青里】右かみ置やしだり初めの糸柳【布仙】是等は綿ぼうしにはあらず麻を用ひしなりある老女の物語を聞しに予が髮置の時扇を開き柄のかたに麻苧を長く下げて色水引にて扇に結付たるを頂に置て產土神に詣てき予が祖母は京都の人なればこれは定めて上方の風俗なるべしこ云へり（寶曆の末の事なり）

たすきがけ

（江戶砂子）に女兒の祝ひに白髮又たすきがけこ號して麻苧眞綿に末廣松梅の作り花を五彩の水引を以て飾り結びかつがしめて生土神へ詣つるよし見ゆ

黑齒

○黑齒の事其始定かならす（和名抄）容飾具の（文選）の注を引て黑齒國在東海中云々故曰黑齒〔俗云波久路女〕今婦人有黑齒具故取之これにて古へよりあらざりし事しるし物語ぶみには多くみゆ（堤中納言物語）虫めづる姬の卷に人はすべてつくろふ所あるはわろしこて眉さらにぬき給はずはぐろめさらにうるさしきたなしこてつけ給はず云々（こりかへばや）にかしらあらはせなごして髮もかきたれなごし

髪のたわ

○髪のたわ（金葉集）【戀上】物いひける女の髪をかきこして見けるをよめる津守國基朝寝がみたが手枕にたわつけてけさはかたみにふりこしてみる（季吟の抄）にたわつけては手ならされし心なり（隣女晤言）に（源順集）にわすれすもおもほゆるかな朝な〳〵ねし黒髪のねくたれのたわ又（宇津保）【藏開】にもたゞおほとのごもりなば御ぐしにたわつきなんずと云々これら手ならされしといふ心にては聞えず髪のたぶの出來るをいふなるべし都にては是をつとゝいへどあづまにてはたぶといへり（源氏）【若菜下】御ぐしすまして露ばかりうちふくみまよふ筋もなくといへる同じとなりといへり是は撓の義にて山にたわといふ處あるもおなじ手枕に髪のくせ付たるをいふ後世はかみのうしろに作り出すをたぼといふ是はいかさまたわの訛りたる詞なるべし

髪を洗ふ

○古へ婦人引つくろふには必ず髪を洗ふ（源氏）【若菜上】紫のうへ明石のうへに逢ふ所明石の君のはづかしげにてましらはんをおぼせば御ぐしすましひきつくろひておはするたぐひあらじと見えたり髪洗と（東屋）にもみゆ（枕草紙）心ときめきするものかしら洗ひけさうして香にしみたるきぬきたるなどあり

髪上と裳着

○女子髪上と裳着と同時と見えたり（大鏡五）太政大臣公すゑ御裳着の屛風に公忠の辨行やらでとよむはこのみこの宮なり貫之などあまたよみて侍りしかども人にとりてすくれのゝしり給ひしかとよ（貫之家集）延喜十八年二月女四の宮の御髪あげの屛風のうちの召にて奉るとて云々これ裳着といひ髪あげともいへり（後拾遺集）【賀】人のをさなきはら〳〵の子どもに裳きせかうぶりせさせはかまきせなどし侍りけるにかはらけとりて【源重はる】いろ〳〵に云々大かた着袴は三歳にや（河海）に皇子三

袴着　元服

歳袴着の例多く出たり元服は十二歳なりあげおとりといふとは（花鳥）に童にてみめよかりし人の冠して見おとりするをいふなりといへり髪あげの畧語なるへし十二歳元服は漢土の古禮なり

こもの〳〵しくあさやかなるやうだいにもこゆひはへたる髮のさがりは常よりもあらまほしきさまし
て云々又うすものゝうはぎかざりのもからきぬさいしさして白きもこゆひしたり【(狭衣)賀茂祭の條
齋院からなでしこのみへの織ものに同し色のみへのこうちぎ着させ玉ひてさいしさゝせ玉へるもこゆ

釵子

ひに御ひたひ髮の打をゝひてなよ〳〵こ引れ行たるはいこゝもてはやされて云々】安齋翁云釵子(さいし)は宮
女の髻の餝也今世の詞におしやしこいふはさいしの轉語也(玉篇)に釵楚街切婦人岐笄也こあり女房式

カブ

正の時は垂髮して頂の上に髻を瘤の如く束ねて是をカブこ名くそのカブに釵子をさすなりこれを髮上
こいふこ見えたり伊豫守隆成が〔足利將軍家初ころの人〕女房歌仙の內に此躰をかけるが有り頂に髻
はあれごも猶下ヶ髮なり髮の中程は結たるにや〔又おもふに頂上に結束せずこも中程ゆひて垂たるも
髮結へるなり〕其實は動作の爲なれご常にせざるこごなるから式正にのみなれり(允恭記)の結髮陪於
後宮こあるも夫に奉仕するの道なりよて男して髮あげするもこれが爲なり

耳はさみ

○因に云垂髮は顏かくすを要こす故に耳はさみなごは常にはせぬことなり(源氏帚木)に耳はさみがちに
ひさうなき家こうし〔これは下ざまの人をいふなり〕(同橫笛)に雲ゐのかりの若君のねおびれたるを
あつかふ處にうへもおほこなぶら近くこりよせさせ給ひて耳はさみしてそゝぐりつくろひていだきゐ
給へり貴人も子持なご髮の面にかゝりたらんは見あつかふに煩はしければ鬟のかみを耳にはさむなり
(帚木)にいへるは賤き女なればもこより恥らひもせず面をあらはに出し居なり(紫式部家集)に彌生の
朔日かはらに出たるにかたはらなる車に法師のかみかうふりしてはかせだちたるをにくみて「はらへ
ごのかみのかざりのみてぐらにうたてもまかふ耳はさみかなこの耳はさみは法師が紙かふりの緒をい
ふにや又(石淸水物語)左大臣の北の方姫君の入內をこりつくろふ處に耻しらひたるこなく耳はさみを
してこ有り

ひにきにけり又（催馬樂）に竹河の橋のつめなる花そのに我をはなてめさしくはへて（狹衣）にめさしなる御ぐしをせちにかきやりつゝあそびむつれ給ふと書るもいときなき子のひたひ髮の末かほにさがりて目をさすばかり短きをいへれば此心にわらはべをめさしと名付たる歟（枕草紙）にあまにそぎたるちごの目に髮のおほひたるをかきはやらで打かたぶきて物などみるいとうつくし是めざしとはいはねど（狹衣）に同し（伊勢物語）にくらべこし振分髮も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべきまた（萬葉十一）問答歌凡者誰將見鴨黑玉乃我玄髮乎靡而將居と云るも髮あぐへきものを待意と聞ゆ（衣服令）に内親王

寶髻

より内命婦まで禮服に寶髻あり「一品已下五位已上去寶髻云々髻に飾なきなり」（義解）に謂以金玉餝髻緒故云寶髻とあり髻ゆひたるさまいかやうなるか未考東大寺鴨毛屛風は繪の傍に天平勝寶三年十月と記したればこゝにて造りたる物なりといへる說によりて見れば其繪の女のかた結髮のやう唐人のごとしこれ然るや否をしらず其後いつの程より髮結こと廢れたるにかあらむ其故をおもふに十五六歲までも垂髮にて居ることなれば結髮てはその歲もあらはにしらるゝ故「なべてみな男もちて髮あぐるにもあらじさらずは男もたぬはいつ迄も童なりやこは今も同じかるべし」そのと一とせ二とせおくれなどもすべし年のふけなむをうしと思ふは人情なり又中古の風俗も女は面をかくすならひなれば髮あげては顏かくすにも便りなくそれもうければ髮あぐべきところに一たびその事はすれども常には垂て居しが風俗をなせるなりそは貴人よりはじめて下々に及びしことゝ思はるそのかみとても動作しげき者は髮結へることなり（源氏）【桐壺】に更衣のかたみをいふ所御ぐしあげのてうどめく物そへ給ふ（河海）に昔は女御更衣以下常に髮をあぐる事本義なり又（抄）に内の女房ははれの時はかみあげとてかんざしなどして髮をいたゞきへあぐるなり（紫式部日記）御產やしなひの條におものまゐるとて女房八人ひとつ色にそうぞきてかみあけしろきもとゆひして白き御盤もてつゞき參るこよひの御まかなひは宮の內侍い

あまそぎ

ふかそぎ　振分髮

うなゐ

めさし

屋之菟名負處女之八年兒之片生乃時從小放爾髮多久麻庭爾並居家爾毛不所見云々 切き時髮を剃ること今とおなじ（源氏）【横笛】薫が幼稚の時をいふにかしらは露草してことさらに彩りたらん心地して有り三歳頃より剃らず（薄雲）あかしの姫君のとこの春よりおふす御ぐしあまそぎの程にてゆら〳〵とめでたく云々（細流）にあまそぎの程はふかそぎなりさげ尼の程なり（若紫）に十ばかりにやあらんとみえて髮はあふぎをひろげたるやうにてゆら〳〵として又尼そぎをもかくいへり（手習）浮舟が尼姿を髮はいつへのあふぎをひろげたるやうにごちたきすゑつき也【大人なればごちたき也】（万葉略解）に兒四歳計の時髮の末を切そめて是を深そぎといふさて八歳まで其髮の末を眉とひとしく切是を放髮とも振分髮ともいふ云々八歳の後は髮をそがずして長からしむれば肩を過て垂る云々いへり眉とひとしく切は前のかた額の髮をいふ歟うなゐの程にて切是をうなゐといふ八歳の後はそがずと云るも違へり源氏（葵）源氏紫の上と祭見に出立むとする處【此時紫上十四歳なり】いざ給へもろともに見んよとてみ髮の常よりもきよらにみゆるをかき撫給ひてひさしうそぎ給はざめるをけふはよき日ならんかしとて暦のはかせめして時とはせなどし給ふまづ女房いでねとてわらは姿どものをかしげなるを御覽ずいとらうたげなる髮どものすそはなやかにそぎわたしてうきもんのうへの袴にかゝれる程さやかにみゆ【かやうにかたなりなるも末をばそくとなり】君のみぐしは我そがむとてうたて所せくも有かないかにおひやらんとすらむとそぎ煩ひ給ふいとながき人も額髮はすこし短かくぞあめるをむげにおくれたるすぢのなきや云々【此處をかける源氏繪に紫のうへ碁盤の上に立る圖あり此物語の時代はいかゝありけん其後の畵には双六ばんなどを踏だいにしたる圖などもあれは碁ばんも同じく何にも用ひしなるべし然るに後世これを深そぎの儀に用ふるを式とす】（古今集二十）こよろぎの磯たちならしいそなつむめさしぬらすな沖にをれ浪（餘材抄）云今按（神樂）朝倉本歌云朝倉やをめの湊にあひきするたまのめさしにあ

文身斷髪

○後世游俠を好む惡少輩文身すること（事物紀原）に今世俗皆文身作二魚龍飛仙鬼神等像一或爲二花卉文字一舊云起二於周文王之子呉太伯一云々（史記）越世家言夏后帝少康之庶子封二於會稽一文身斷髪披二草萊一而邑証レ此則是茲事爲レ始二於帝少康之子一因知三文身斷髪之爲二呉越之俗一也舊矣また高士奇澹人が（天識祿餘）に唐之中葉長安惡少多以二詩句一鑱二涅肌膚一夸二詭力剛一坊閭遠近效レ之成レ習後皆爲二薛京兆元賞杖殺一更有レ取二名賢詩中意一細二刺樹木人物一至レ有下周身用二白樂天詩意一刺涅人呼爲二白舍人行詩圖一者上（雜俎續）名レ之曰二劄青一云こゝには天正文祿の頃異様の出立する惡徒多かりしかど文身のさたも聞えず其後種々の俠客有しも猶その事見えざれば專ら行はれしはいと近きこととみゆ（關東俠客傳）に

入ぼくろ

淺草神田川に鐘彌左衞門と云る者極めて立派なる男の其頃迄は入ぼくろ大きなるは珍らしかりけるに横筋かひに肩より南無阿彌陀佛と大文字に彫付たりと云り【其頃淺草御藏前に永野七郎兵衞といへる名主異名をつりがねといはれしが此船頭彌左衞門に鐘といふ異名を讓りたりとぞ】是延寶天和の頃なりかばかりなるを大きなることゝしたり其他あまたの男立ども文身のこと聞えずいと〳〵希なるを知るべし其後寶曆年間（うき世草子）などに入ぼくろする處をかけるもありまた日雇とりなど肌ぬきたる圖にほりもの有り其文は一心といふ字或は渦まき抔にて手のこみたるはなし肌もみえざる程こと〳〵しき繪をほるといふは近時の事なり

女子髪あげ

○女子髪あげのことは（允恭紀）七年皇后聞レ之恨曰妾初自二結髪一陪二於後宮一既經二多年一云々あり結髪の制は遙に後（天武紀）に出たること上に引るが如し然らばこゝは（文選）の古詩に結髪爲夫妻などの漢文に傚ひてかゝれたる虛飾の文などもいふべけれどさにあらず（天武紀）に出たる制はこの事とは異なり上古より女子のさまは（景行紀）二十七年十二月云々日本武尊解レ髪作二童女姿一以密伺二川上梟帥之宴一時云々この時尊御とし十六なり（万葉集十三）問答歌に然有社歳乃八歳叫鑽髪乃（同集九）見菟原處女墓歌童

人、答曰我者山代之猪甘也云々又（書紀）雄略天皇十一年冬十月鳥官之禽、爲菟田人狗所嚙死、天皇瞋黥面而爲鳥養部【（古事記傳）に履仲紀飼部の黥を止られたるは馬飼部に限れる事なるべし此猪甘（雄略紀）の鳥養など猶あれは也云々此黥を面黥とも書ヒタヒキザムともメサクともいへる面といひ額といひ目といへる皆同じことなり又目さくといふも實に目を裂にはあらず目の邊りを刻むなりといへり此說非なり飼部の黥を止られたる事明文ありこれ黥刑をやめられしにはあらず罪あるをば黥せられてこれを飼部に屬せらるゝはもと飼部は黥せられたるものなればなりこの故に猶後にも飼部に黥者あるなりまた目さく事をいへるもわろし大久米命の黥利目とあるにて明らかなりこれ飼部目尻を裂るから目の大なるなり】これ飼部の黥はすべて止られたれども黥刑を止られしにはあらず（鉗狂人）に黥すると上古よりの風俗ならば死罪に行はるべき程の重き罪をこれにかへ給ふべきにあらずたとひ旣に應神仁德の御世に止られたりともそは猶いと近き事なれば上古よりの風俗を人はさのみ耻辱とも思ふまじければなり又上古より近代迄の風俗ならむには伊奘諾神いかでか其氣をにくみ給はむ然ればこの二ツの事をもて黥は上古の風俗にはあらざりし事をさとるべし【此說は（衝口發）に上世文身黑齒被髪す云々文身いづれの時に禁ぜられしをしらず（履仲紀）によれば應神仁德の朝に止られしならんと云乃序非なり】とあるは人の說をうちたるなれば爰にとりていはむは其趣ことなれども黥は上古もありて卑き部等のする事なれば耻辱とせむと勿論なり又重き罪をかならず是にかへ給には非ずこれ非常の事なれば垂大恩なども見ゆるをや又神の惡み給ひしは其疵の癒ざる故惡臭あればなり【刑餘の人を用ひらるゝは後世放免のもの撿非違使に屬するが如し飼部やうの者は後にも皆賤しき職分なりかくいふも（衝口發）の說を助くるにはあらずその書杜撰の强と多く殊に（日本決釋）などいふ僞書をさへ作り愚人を欺かむとすいと惡むべきものなり

さける利目

蝦夷男女二人示唐天子といふ事も見えたり彼國是等を見て前史の趣を信じ其後にも本邦を文身の俗といひ傳へしとしらる但し彼黥面のとは有といへどもその部類ありてなべての事にはあらず（古事記）に大久米命以天皇之命詔其伊須氣余理比賣之時見其大久米命黥利目而思奇歌曰阿米都々云々那杼佐祁流斗米とあり久米てふことは（古事記傳）に久流目の略也といへり皇孫命天降坐し時の例にや神武天皇東征し給ふにも大伴氏の祖道臣命と久米直氏の祖大久米と相並て先鋒となり大功を立給へるに（書紀）には天孫降跡の處一書に大伴連遠祖天忍日命帥來目部遠祖天槵津大來目背負天磐靫云々立天孫之前遊行降來云々また（神武紀）に勅道臣命汝宜帥大來目部作大室於忍坂邑云々あるは大伴氏の下に屬たるものにて大來目は久米部の部首たるものと聞ゆ前後同名なるはその故なるべし（古事記）に神武の御時なる大久米命は殊に大功ありし故大伴氏と相並びて記しゝにもあるべし後に久米直といふがあり（姓氏錄）左京神別右京神別ともに載て高御魂命八世孫云々ありて大久米命のよしは見えず（古事記傳）に子孫に至りては大伴氏のみ榮えて此久米直氏は甚く衰へて終に大伴氏の部下に屬るとど成にけるは（書紀）はその衰へたりし子孫の時代のさまをもて記されたる物とこそ聞ゆれと云るはいかゞあらむ子は父に似るものなれど夫すら似ざるも多かり然るにそこばくの年序を經て【（書紀）によれば天祖降跡より神武の御時まで一百七十九万二千四百七十餘歳とぞ】大來目命のさける利目は奇しむべし此によりて思ふに來目部は目をさきし事しるしされど黥面は墨刑にて目を裂墨をさす事なり（履中紀）元年夏四月召阿曇連濱子詔之曰云々罪當于死然垂大恩而免死科墨卽日黥之因此時人曰阿曇目又（同紀）五年九月天皇狩于淡路島是日河内飼部等從駕執轡先是飼部之黥皆未差時居島伊奘諾神託祝曰堪血臭矣因以卜之兆云惡飼部等黥之氣故自是後頓絕以不黥飼部而止之又（古事記）に安康天皇記於是市邊王之王子等意祁王袁祁王【二柱】聞此亂而逃去故到山代苅羽井食御粮之時面黥老人來奪其粮爾其二王言不惜粮然汝者誰

んかされど既に(神代卷)に天照大神結髮爲髻傳裳爲袴便以八坂瓊之五百箇御統纏其髻鬟及腕といふとあり然るに(源氏)【胡蝶】かぢとりの棹さすわらはべみなみづらゆひてもろこしだゝせて云々いへるは舞臺のごとくさうぞきたるにやみづらはもとよりこゝの古風にて唐にならへるにあらずおのづから彼と似たる事もなどかなからん中昔は女わらんべともに常に垂髮なる故みづらを唐風とおもへるなるべし今世にも兒のさるさまに似たるを唐子といひならひたり又【からわともいふ正章が千句にきくとぢの袖の朝霜打はらひからわにあぐる鬢水やめす今大家に召つかふ女の童の髮にわらはといふは童にても有べけれど猶からわなるべし】但し神代結髮の事は平生のさまにはあらぬも知るべからず(古事談一)小松帝いまだ儲君となり給はざる時昭宣公參り見給ふ處にもとゝり二股にとりてと有り褻のとをいふこれ童すがたにや婦人結髮は法令出て後もその事行はれず【令條のまゝに行はれざる事是のみにあらずいと多かり】ありしかば(天武紀)十三年閏四月又詔曰男女並衣服者有襴無襴及結紐任意服之其會集之日著襴衣而著長紐唯男子者有圭冠々而着括緒褌女年四十以上髮之結不結及乘馬縱横並任意也別巫祝之類不在結髮之例また朱鳥元年七月勅更男夫著脛裳婦女垂髮于背猶如故この事を(玉勝間)に云かくあるは天皇御病ありて御祈事など有し時の事にて神代よりの風をあらためられしを畏み給ひてにやありけんかくて又(續紀)慶雲二年十二月令天下婦女自非神部齋宮々人及老嫗皆髻髮【分注】語在前記至是重制かくあれども此制行はれざりしと思しくて中昔にもすべて垂たりき然るに近き代になりてはみな髻なるはいつのほどよりのことにかあらんといへり猶下にいふべし

黥面文身

○(後漢書)倭人傳に男子皆黥面文身以其文左右大小別尊卑之差などいへるは邊海の民さるたぐひの者有けむを聞傳へて書るにもあるべし(景行紀)二十七年二月武內宿禰自東國還之奏言東夷之中有日高見國其國人男女並椎結文身爲人勇悍是總曰蝦夷この國今もそのさまなり(齊明紀)五年七月云々以陸道奧

嬉遊笑覽卷一下

容儀 ○ 上古のさま　文身鯨面　古服　髮あげ　垂髮【たわ】　着裳　髮置　黑齒
白粉【二種】　黛　眉　しん　燕粉【爪べに、寒べに】　膏澤　五味子　花の露　伽羅油

上古のさま
みづら
あげまき

上古は男女ともに髮を垂たり又は鬟とて頂にて二ツに取わけわがね結ひて前さまにおしたれたるとありそのさま法隆寺太子の御影の前なる童子これ古の髮なり（萬葉集）に角髮をみづらとよめり左右に分れたるが角のごとくなるをいふ即角子なり（崇神紀）に古俗年少兒年十五六間束髮於額十七八間分爲角子今亦然之とあり十七八間とあるはやゝ後のことなるべし上代のみづらは男子の裝なり（古事記）伊邪那伎命御美豆良云々のごとあり又天照大神男の裝して御みづらを纏ひ玉ふ又神功皇后御髮を洗ひて自から分れたるをみづらとし玉ふも假に男貌となり玉ふなり角子をあげまきと云は後の稱なり（推古紀）十一年十二月始行冠位大德小德云々大智小智並十二階並以當色絁縫之頂撮摠如囊而著緣焉唯元日著髻

髻華

華【同紀十九年に髻華大德小德並用金大仁小仁用豹尾大禮以下用鳥尾とあり其品々によりて定められしなり但し髻華は上古よりありし風俗故冠制出來ても元日には冠を用ひず古風のさまにて有しにや後世心葉とて冠に付るものゝ類みな釵頭花なるべし】（天武紀）十一年夏四月詔曰自今以後男女悉結髮十

結髮の始

二月三十日以前結訖之、唯結髮之日亦待勅旨云々六月男衣始結髮仍着漆沙冠と有り此時貴賤一統に髮を結る事になれる成べし（萬葉集）【十一】肥人額髮結在染木綿染心我忘哉うまひとは貴人なり古訓にコマヒトと有は肥は狛の誤り歟この歌狛人ならばそれがさまをこゝに學びたりなど思ふともあら

盆山の石打といふ事

し云々有り【此人京に久しく居たりとみゆ】（万寶全書）盆山の石横六寸高サ厚み見合川石のすはりのよき手いらずを用ゆ石ふるきがよし谷川の石上石なり名石の分は谷川石なり山石海石は景よくても悪しなどいへり盆石に打といふと今の法にてはまづ石を居地砂を蒔洲濱をかたどり羽帚にて洲濱の外をはき落し石をも取あげよく掃又盆中すべて薄く砂を蒔ば水とすべき處は洲濱の外なりさて鳥の羽に鋸歯を刻みたるにて浪をかき畢て石をもと据たる處に置又あられ砂を匙にて盛なり是を打とはいひがたし然らばもとは槌あるひはわら束などにて打たる故の名にて今様の如きにあらずと見ゆ砂に打と云は是のみにもあらず庭前などにも云るそも又打ならす故なり

礬山

○浪花の畫師長田武禪は月岡丹下が弟子にて能畫なり清貧を安として陋巷に居れり寒暑つよき間は畫をかゝず夏月は唯石膏をもて假山を作ると巧みにて八方正面のとし畫法によりてなり陸務觀（入蜀記）に乾道六年閏五月二十五日云々晩葉夢錫侍郎衡招飮、案間設礬山數盆、望之如雪、武禪これに倣へる歟盆山白砂を用るもかゝる事よりともいふべけれどさにはあらず是は庭に白砂蒔ことより出しならむ盆山より又盆繪は出たり砂を五色に染て源氏の卷の名をもて呼び象牙の丸き匙また篦板とて笏の形して先を三絃の撥の如く薄く作りたるもの大小二つ有り畫かく具ともなり盆は桐木を用ゆ塗たるはわろし【砂に粘をすこし入乾し盆に此砂をもて畫き湯氣にてむす其砂乾く時盆に付て落すこれを扁額の如く壁に掛へし是をとめ盆と云其師有て口傳とし兒女子を欺く】此わざはいと近世より始まれるなるべし

水上砂繪
地上砂繪

○又紙砂を染て五色になし蠟に漬したるを水上に浮へ繪をかく是は唯小兒の翫びなり又近ころ物もらひが砂を手に握りて地上に書畫をかくもの有り是も安永の頃ありしと見えて胴脈が（針の供養）といふ草子に砂を摑み蒔て字を書く法師ありといへり

備後砂
胡麻砂
鹿背砂

にても兼て見し物にて盆石には聊打かたき子細もあれど戯に用るには又くるしからず大磯の小石の色はさま〴〵にけはひ坂より出し物は】（大和草本）に備後砂は三上郡帝釋の溪間にある鮮白にして愛すべし銕槌にて碎き盆底に布くに水を得て其光彌潔白也坐上の珍玩とす他州にも有り（本草啓蒙）河沙の條盆山に用るは大礒黑胡麻砂山城の鹿背砂【木津川邊に鹿背村と云處あり】黄白色にして灰色の斑あり備後のあられ砂云々（日本鹿子）伊勢國名物の內盆山石同敷石五色なる石なり（同書）有馬盆山蒔砂琢砂とみゆ（風俗文選）湖水賦盆山のしき砂は大洞の白石【自注に方解石なりと書り】

○（萩原隨筆）に烏丸光廣卿有馬御入湯の時あたみ堂に詣給ひ引提て床の上にてついすゆる大千世界九は海とよみ給ふ是盆山を題し給ふ御自筆の短冊今に此寺に有り昔のは細密なるさるものにて小き槌にて砂を打ならすと傳へたり成かたに片桐石州侯の盆石の自畫賛あり山の形を寫して嶺岳市尾崎の五字をしたり傳へある事となり（年山記聞五）奧州岩城の主內藤義概朝臣江戶より歸り給ふとて村松山日高寺を一見し別當の龍藏院に立より休給ふ折ふし床の上の盆石を見てしらさりき遠き堺の海山も手にとる石の上にみむとはと書つけ龍藏院に見せられしを後に西山公の御覽に入侍りしかは其側にかはりて御返ししらざりき遠き境のなさけをも手にとる文のうへにみむとは（三曉菴雜記）【薩州の畫師寶曆十三年に七十餘歲の老人の話なり】盆石のと石のいけ樣浪のよせ樣四季にかはるなど細々有之由尋候へば如何樣習も有之候哉當時京都などにては法式無之由聞及候自分いけ候は石をすゑ藥の切口にて砂を突かため羽箒にてはき候儘にて候盆石はもと遠山を移し候景色浪のよせ跡細々の事は見えさる筈にいたしたる物なりそれ故石の小きは廣座敷にては見えかね候眼下に見るより遠く引はなれて見候が直に遠山また遠き島などに見候樣なる至極よく候誹諧に遠山の小松がもとのかき蕨といたし候へば點者御眼力の程うら山敷と頭書致候由自愛の石は屋久嶋の產なり迚被出候大ふりにて景色も段々有之裏表な

苑、皆其所布置也、楊惠之、變畫爲塑、此更變爲平遠山水、尤奇矣、かゝれば淸の代になりて南垣より庭の作りやう一變しかの湖石の穴明たる物は古風となりけるなりこゝにて石を立ることの廢れたると同じ

菊目石

○周之冕が畫に菊目石を立て石竹の花生たる圖あり（八種畫譜）に山丹花と此石を畫けり【菊目石は（大和本草）にキクメイ石とあるは土俗の訛なり紋の大なるをから松石と云ふ（廣東新語）の海化石なり】本邦にても昔より用ひしものなり（續山井）菊目石の花と植てや雪の下【風鈴軒】白き輪や其まゝ菊目石の竹【定行】

釣しのぶ

○釣しのぶなどは古きものに見えず（京羽二重）つりしのぶ女ばかりの物見かな【一雫】このしのぶといふ草は（本草綱目）の海州骨碎補なりと云ふ歌などによめる物にはあらず

○米元章は奇石を翫びしと云ふことの盆山はさるとにもあらず【米元章が硏山は南唐の寶石なり上に華蓋峯、月巖、翠巒、龍池、上洞、方壇、玉筍などの諸勝あり雨ふらんとすれば龍池潤ふとぞ後家園と交易すといふことをしみしかどせんすべなかりしなり圖を寫し記を書し又詩を哦して曰硏山不復見、哦詩徒太息、唯有玉蟾除、向予頻淚滴、といへり程へて此石吳興に入り兵火に燬すと云ふ（輟耕錄）にその圖あり然るに後世いでたる由蕚卿贅筆に見えて或は贋作ともいへれどさにはあらじとなむ】

盆石飾の事

○（雲根志）に古田織部重能の記をみるに盆石飾の事知る人まれ也東山殿御歌盆石の前には一つ淺ひさし後に遠き海そえならぬ此歌の心にて盆石飾の趣よく聞えたりといへり（貞德文集）座敷飾物先床は三幅一對掛物云々花瓶盆石云々（懷子集）あら玉の春のあしたに砂蒔て節ふる舞にかざる盆山【三政】（續山井）盆山に見るや四季咲雪の花【盆石に白き處あるを御覽じてよみ人不知とあり】（東海道名所記）

鞠子石

【三】世にもてはやす盆山の石に鞠子石とて見事なる石を出すとあり【大磯の石の類なるべし寶曆の頃土御門安倍泰邦卿（東行記）大磯の宿にて赤き青き色々雜りたる小石を所の名產とて宿より送る是ば京

滑多（老槃餘事）盆景以几案可置者爲佳、其次則列之庭榭中物也、最古雅者如天目之松高可盈尺云々、更以透漏窈窕奇古石筍安挿得體【これにも穴の明たる石おくことをいへり】

石菖蒲

○また（白定窯方）に五色の砂石を布き水を貯へ石菖を植るは眼の藥となり邪を避ることなどいへり（博物要覽に均州窯、青綠錯若垂涎此窯、惟種菖蒲、盆底佳甚とあり石菖鉢の別にあるにてこの物はやる事しらる【近頃江戸にて石菖はやりさま／＼ありし其内まさむねと云は葉半分白く又びろうどゝていささやかなるもありき高麗などいふは彼より渡りし物か（懐子集）高麗せきしやうといへるを夏といへは高麗迄や石菖蒲といふ句もみえたれば古くありしものか淸閑寺石にさゝやかなる石菖を生し盆におき水を貯ふ洛東淸水の奧より出る石なり黑色にして細かに脆く能く苔を生ず】昔の俗に石菖鉢のたぐひを盆山といへりと見えて（一代女）【五】盆山に奈知石を蒔て石菖蒲の根からみ靑々としたるを詠こもいへり古意にかなへり立花の砂物などいふも石菖鉢より起れるにや（娘容儀）といふ草子におごり者のことをいふに蚊除の間とて薄絹の障子の中に五尺四方の盆石に水行燈をしかけ云々などもあり（五雜爼）に閩の窮民假山を作ることを云に疊蠣房爲山、池如杯盌、山如筆架、水環其中蜆爲螄之舟、琢瓦爲之橋、殊肖也また云余在德平葛少寶園、見木假山一座、岩洞峯巒、皆木頭疊成、不用片石杯土也、余奇而賞之かきがらの山などはこゝにては小兒も弄ばず又この木假山もこゝにては索麪あるひはところてん賣る水茶やなどに枯木を山とし處々に土燒の家塔など置き猿の釣するもあり又うみほゝつきは必ず枯木にかけ並べて賣るこれはもと流れ木のふりたるに付たる物なれどもこの朽木は風情なければ姿よき木にかくるなり】

木假山

○（鶩曝雜記）【五】古來構園林者、多疊石爲嵌空險峭之勢、自崇禎時有張南垣、創意爲假山、以營邱北苑大痴黃鶴畫法爲之、峯壑湍瀨曲折平遠、巧奪化工、南垣死、其子然號陶菴者繼之、今京師瀛臺玉泉暢春

よしこす性堅して潤ひ嵌空穿眼宛轉嶮怪の勢あり一種色白一種色青黑一種微青黑なり其質文理縱横籠絡して面に隱起す均坎多し風浪中衝激して成これを彈子窩こ云扣けは微聲あり採人鎚鏨を携て深水中に入り奇巧なるを度りて取鏨ち巨索を貫き大舟を浮へて引出す高大なるを貴む古よりこれを採る故今はいこ鮮し世の好事者虛名を慕ひ聞て舊石を鑽求め某名園某峯石某名人題詠某代傳て今に至る斯眞の太湖石なりこて重價に買ふ湖石は鮮なければ別山にいまだ取らざる石あまたあり何をか新こし何をか舊こせむ凡石露風なるは舊く土中にあるものは新らしされご幾ばくもあらず雨露をふれば舊ぬべしこて諸石を多く擧たり

○袁宏道園亭(紀略)云徐冏卿園在閶門外下塘堂側有土隴甚高多古木隴上有太湖石名瑞雲峯高三丈餘巧妍甲于江南相傳朱勔所鑿終移舟中石盤忽沉湖底不見之不取得因未果行後爲烏程董氏購去至中流舟覆募善沒者取之須臾忽得其盤石亦浮水而出今爲徐氏有范長白云此石至夜分間有光燭空石亦神物矣哉

盆中假山

○小々盆島は盆中假山また盆景こもいふ今世に箱庭なごいふものをも云べし(望一千句)やう〳〵こゝしらへ立る玉の枝露打はたす花の島ぼん、霞くむ座敷の前を掃除して【島は庭ほんは盆なり】(僊傳抄)

石菖鉢

棚かざりの圖石菖鉢また松の鉢うゑなごあり(圓光大師繪傳)にも木うゑたる鉢に石を立たるもの是盆石なり(歌林四季物語)夏部時日はさだめね共くすりのかみやくるんしなご御さゑんのなでしこ土のかめにもりて內裏して奉ればいこなき宮こたちはそこにまうでゝ見給ひあなたこなた朝露にそぼちわけまよひためる云々行り鉢うゑは盆景なり

盆景

○(金鰲退食記)南花園の條に江寧蘇松抗州所進盆景皆付澆灌培植

○(金石緣傳十六回)五間靜室魚池花草盆景假山十分幽雅(雲臥紀談)【僧曉瑩著本邦に早く貞和丙戌三月梓刻せり】雪竇持禪師假山詩、數掌幽石疊嵯峨、池水泓然一寸波、欲識山川無限意、目前蕭灑不

それを又八ッこし候亞は沈約が八詠樓に傚ひ候共申し李太白の金華開八景こ申一句により候共申候本邦にて取はやし候は東山公方の御物の玉澗が八景候故こ聞え候されこ此方の景をそれに擬しけるは慶長元和の比ほひ京の圓光寺の長老故有て近江蟄居の時に近江の景を瀟湘八景の題を用ひて撰され候を時の堂上衆歌も侍らひしか是近江八景こ申物に候是より國郡は偖置當時大名旗本衆中の別業山荘等に八景のなきは無き樣に成來り爰かしこより詩なこ心得る者歌なこ心得候者に詩歌を望まれ候異國に八景こ名付候に十も二十も候八ッに限らぬ事に候或は詠こ云或は勝又境又絶こも申其名其數も定らぬ事勿論に候本邦世俗に景こしては夜雨秋月歸帆落雁ならぬはなく候餘り不雅なる事にや云々

近江八景　○契冲（雜々記）近き世妙壽院惺窩翁こ聞えし人市原山荘に八景を名付て各其歌をよまる云々此歌こもいかにいへるとにか心得かたきとも多してにはのたかひなご和歌の家に生れたる人こもおほえず其子爲景卿丈山なご云詩人を彼山荘に招て此歌を出して詩を作らしめらるおぼつかなきとなり

盆山　盆山【大湖石】　石菖鉢假山【菊紋石、鈞しのぶ】　砂石【打こいふと】　礬山　盆繪　水上砂繪

今盆山こいふのみを盆山こは云ず（狂言記）五十番に盆山こいふがあり庭石を盜みに來る者その石の陰にかくるゝ狂言なり石を疊める山なるべし又石臺こいふもの花を植るのみにて此石を呼ぶもゝこ石を置たる故なりこれ即盆石なり（寛永發句帳）年々のつぎ木や臺の作り花盆山にそだてゝ見ばや石の竹漢土には太湖石をめでたり（西廂記）墻角聯吟の條、小生先潛身、在太湖石畔墻角兒頭、から繪につくね芋の形して穴の多く明たる石ある是なり（吳風錄）に今吳中富豪、競以湖石、築峙奇峯陰洞、至諸貴占

大湖石　據名島、以蠶々而嵌空妙絶珍花異木錯映闌圃、雖閭閻下戸亦飾小々盆島爲玩、以此務爲饕貪、積金以克衆欲、その貴重するこごかくの如し【（簷雲樓雜記）に袁宏道園亭記畧を引て瑞雲峯こ名付る太湖石のとをいひて神物なりなごいへり】（園治）に蘇州府所屬洞庭岩水涯に產す唯消夏灣こ云處より出るを最

園林

公輸が奇巧陸雲が精藝も其人みづから斧斤を執りしものにはあらじ匠者はたゞ彫鏤排架の巧精しきのみなり凡造作はかならず先地を相て基を立廣狹を量り方曲に隨ひて宜きを得べし拘拏すべからず【風水家説のなごをは用ひさる事知るべし】是主人七分の所なり但し園林は主人は什か九にして匠者は什か一なるべし【主人七分ご云は家作にいふなり】凡園林は因借の二ッに巧なるべしこれ匠作の爲べきにあらずもし主人其事に不堪ならばよき人を選みて用ゆべし因さは其勢の高下體形の端正に隨ひて木を礙椏を删し泉石互に相資け或は亭を立あるは榭を作る其宜にかなふべし借さは園は内外を分つさいへごも景を得むとは遠近に拘るとなく晴巒聳秀紺宇空を凌く極目俗ならはこれを屏く是巧にして體を得るものなり又云借景は園林の最肝要なり、遠借、隣借、仰借、俯借、應時て借る物情逗る所目寄て心期す其意筆の先にありて描寫するが如しなごいへり

小庭

○(年山記聞)に万葉【廿】家持歌八千種に草木を植て時とにさかむ花をしみつゝしのはな(御釋)歐陽永叔種花詩云、淺深紅白宜相間、先後仍須次第栽、我欲四時攜酒去、莫敎一日不花開、これ國は和漢をわかち人は先後を隔てたれごよく似たる歌なり小庭にても四時花を見むご思はゝ草花にしくはなし花壇を作り時節の花を何にまれ植かへ〳〵せむは生花に勝れり

家々の名所

○(類柑子)家々の名所こいふ條務慨奇絶をつくされたる殿づくり表はいらかにし茅にして遠石兩公の物數寄をふるはせ給ふ庭山は細川殿の國石土佐殿の良材島津殿の蘇鉄家々領分の名木をあつめ云々鄙の住居をやつして春耕し秋收る業五十三次の糒粮をまふけ云々いへる世に名高き名苑こ聞えたり【明和二年千柳點前句附雲すけのないが御庭の不足なり】

八景

○八景(白石手簡)に八景の始は宋人歟元人歟にて宋復古ご申畵工山水に妙を得たるが一軸を畵けり凡一代の絶作に候を人々其興ある處に名を題して終に八ツの名出來候ご申是より好事の人詩をも題詠し

大松七ツあり水これを環れり是にて其勝概を知らる天然の趣は鉅麗を鬪はすにあらず古は庭作るといへば上に見えたる如く凡下のしる事にあらぬ故是を業とする植木屋などもなかりしなり

草賣

○（著聞集）に或なま侍のもとに草賣きけるを只今變りなかりければ其草かしおけと云けるを草賣打聞てあさましやかりとはいかにあさことに草にかけたる露の命をと有り草花などを作りて賣あるく者は有しとみゆそも多かりとも聞えず（枕草紙）亭山の條こもりといふもの丶築地のほとにひさしさしてゐたる抄に木守山守とて有り御庭木など守る者なるべしとあれば是庭守なり（三十二番職人盡歌合）農人

庭守

につがひて庭掃といふ者あり掃除する事を役とする者なれば木草の枝などきりすかすなどせしなるべし其歌、名にたてるこや庭はきに家の風はなをわか世の朝きよめかな。すてやらぬ世をはいかにかすへは丶きはらふも庭の塵のみながら。是等今世のうゑ木や庭作りなどなるべし

庭に松葉を敷

○庭に松葉を敷こと今人は霜除のためと思へりもとさにはあらずと見えて（貞德御傘）に盧次に松葉まくも赤葉なれども其志は松を愛してする事なれば植物になるなり云々

○因云江戸にて塵捨ると明曆元年未十一月永代浦に札立置候此處に芥捨か申事【寛文五年巳四月五日ごみ捨賃向後は節句前に其町々名主方迄ごみ捨之者取に參候間名主方に其前かどに集置相渡可申候同五月十六日今度町中へごみ溜被仰付候其内へ捨可申候云々寛文七年未五月九日延寶九年酉六月晦日同年十一月朔日元祿九年子四月朔日又同十二月卯三月十九日なとごみ捨の事に付て御觸有り】

○（園治）と云書有り表題に名園巧式奪天工と記せるは書賈などの名つけしなるべし崇禎辛未自叙あり作者許無否、とありもと畫人といいり關仝荊浩が筆意を好めり畫工は此わざに巧なる者あるべしされば（今昔物語）に百濟川成と云ふ繪師あり世に並なき者なり瀧殿の石もこの川成が疊みたるなりと見えたりさて（園治）興造論に世人專ら匠を鳩るを要とするは三分は匠七分は主人といふ諺を聞ざるにや古へ

たり近き人の家に立入たりけるに其家いと廣くもあらず庭前栽をえもいはず木ともうゑて色々の花かずを盡して錦を打おほへる如く見えたり云々主の云をのれは佐國と申す博士の子にて侍り父世に侍りし時ふかく花を興して折につけて是を翫ひ侍りき且其心さしをは詩にも作れり六十餘回看不足他生定作愛花人佐國は播磨國諸越の產なり二人靜の謠曲にもゝろこしの佐國とうたふ是なり（東見記系圖）等にも見えたり掃部頭從五位上なり平生花を愛す六十餘回看不厭と云詩は（新撰朗詠）に見ゆ又（本朝無題詩）に翫卯花、尋訪村野醉濁醪と云詩あり

建仁寺垣

○竹垣萩垣種々あれど今江戸にて專らふとき竹を四ッ割にして垣とするを建仁寺といふ近きとゝ見えて物にもしるさすされども此寺もとよりよき竹有しと見えて（醒睡笑）唯有といふ條長岡殿伏見より雄長老の許へ旗竿をもらひに使者を遣られし時狂歌吳竹のふしみにはあらてはる〳〵と京迄切にのぼり棹哉【また思ふに（雍州府志）に忍竹建此比並爲垣と有り忍竹を建るを省きて建忍などざれとに云たるにはあらぬかしかし竹も異に垣のさまもかはるなれど建仁寺垣ものに見えざれば試に云なり】近頃茶事ます〳〵はやりて猫の額ばかりの庭にもかの青竹のふときをもみ糠などにて磨きけんにんじといふものわらび繩もていかめしく結めぐらしずんど切とて大木を半より截たるを植みかげ石のきらめける石燈籠手水鉢の大なるを置き飛石とはいへど大石を地の明たる處もなき迄敷並べたるは見るめもうとましこれたゞ人情野鄙になりて價の高下をもてさたするよりかゝる似つかはしからぬ事にも心つかず大かたは植木やどもに任せてさするなり世にはやればそれをよしとする俗人さらにをのれが見解なしこれのみならずこのとよろづにわたるべしすへて粉飾勝たるは天然の致なし廣からむ處にも灯籠などあまたあらんはうるさし（園冶）に大木は石よりも得難く水は大木よりも得がたしといへり（洛陽名園記）苗師が園を第一とす大樹百尺むかひ峙ちて山の如く竹百餘竿あり水流には十石の舟をうかぶべし

社の舊迹遠山深林の中に有るを尋ね祿を厚うして望む人不少今名高く聞ゆる春日の祓堂の灯籠二月堂にて建長六年十月十五日と彫付たる古代の物あり京にて高桐院の燈籠【利休所持今當院に有之】第一とす其外太秦にも侍る代に此類新に寫してもてはやす人侍る

砂利置

○又云或時宗旦老人久須見鶉巣茶席にて咄し申侍りき昔は砂利土を置て山路の面影をうつしつるに今は砂利は堅く打て手水鉢のあたりに老人はすべりさうにあやうし手水鉢も今は前石の間遠く柄杓とりにくきは人の手も昔に替り長くなりたるにやと云て笑ふ云々休【利休なり】雨の後山路處々砂利の出たるを見て面白く思ひかく置れたる故古人砂利を置と云打とはいはさりしなり（類柑子）茅場町住居の事をいふ處南の隅なる所に灯の袋をかゝけて鵜舟と名く石灯籠蚊屋にきえ行こぶねかな【こはいとよき名ながら雪などご降つまむ時には似合しからず】

路次植物

○路次植物（貞德文集）に路次御作立候哉利休時代迄松竹岩苔等計植置く處近年は樅柏槇多羅葉未聞見唐木集め被植候更に殊勝不存候佗數寄不似候外路次內路次搆可然候唯禪家山居隱者遁世者住居移申傳候間思々相搆掃除簡要也

致忠が事

○致忠か事（江談）に備後守致忠買閑院爲家欲施泉石金一兩にて石一ツを買ふこのよ洛中に風聞してこれを業とするもの奇石を爭ひて賣らむとする時に致忠今は不買といひければ石賣ものせんかたなく門前に打捨たりければやがてその風流なる石どもをえらみて立たるよし見えたり致忠が姦詐なるにくむへし按るにこれ漢土錢塘の故事なり（世說）に晋人沈姓なる者會稽の縣令たりしが塘を築くに詭りて土一畚を錢一畚に易むといひて土多く集りたる時今は用なしといひければ土賣せんすべなく打捨たるをやがて用ひて築きしかば錢塘と名づくとあれどこれもそら言にて秦漢已前よりこの縣名は見えたり

大江佐國

○大江佐國宅は圓宗寺の向なりと云（長明發心集）云或人圓宗寺の八講に參りたりけるに時まつ程其あ

りければ百姓等十萬人万歳山を踏破り臺榭宮室一字も殘らず打毀ぬこの時に當りて宮車も禁ずるとあたはずさしも古今に比ひなしと誇りたりしも一夕の薪となりて亡びたりこそ【されども山はのこりて其後修造して金元これを戒めず修りを加へて亡ひたり明に至て其勝概を存し登臨して鑒戒となす宜德御製(廣寒殿記)これなり】又史を見るに土木の工役に費を究めたりしは隋煬帝なり始め洛陽顯仁宮を營み大江以南五嶺以北の奇材異石を集め又海内の草木禽獸の珍奇なるものを苑囿に實つ又遠き江水を引き旁に柳を植て長安より江都と云處まで連る其間に離宮四十餘年を作りて往來遊行す西苑周り二百里其中に廻り十餘里の海を作り龍舟雉艄數万艘を遊幸の用とす蓬來方丈等の諸山を高さ百餘尺に爲り臺觀宮殿山上に羅絡すこの海の北に渠ありて縈紆りて海に注く渠に緣て十六院ありて門皆水に臨み華麗云へからす樹の花枯れは作り華を綴る沼には荷芰なとをも作る色渝れは新きを易ふ月夜を好みて宮女數千騎を從へてこの西苑に遊ひ馬上に清夜遊の曲を奏せしむ其外處々に河をほり又米倉など多く作れると限りなし

○また明の熹宗は宮中に在て手細工を好み小樓閣を製らる彫鏤清絶なり斧斤を常に手ばなさすおはしける魏忠賢その細工の少しひまあるを伺ひて諸部院の章奏を進らすれば大かた忠賢に任せて看せしむこの故に內官權勢日に重く成行く事を帝これを悟らずと(池北偶談)に老官監が言へる由見ゆ(同書九)に元臣巙々曰宋徽宗諸事皆能獨不能爲君耳又或書に周正夫曰仁宗皇帝百事不會只會做官家此說在巙々之前可謂絕對子曰君子多哉不多眞哉乎

石燈籠

○石灯籠古代は庭に石燈籠を置となし石燈籠は寺社の物なるを茶湯者取て庭に置て見物とす(指月集)は藤村庸軒が茶話なるを久須見鶉が集筆記したるなり【宇涯菴が書る異傳あり田邊希明が元祿十四年の跋文みめ】其內に近きころより石灯籠の大振なるが晴嵐陰雨に年經たるを庭に移して見物とす適寺

假山

○世に假山を作るに四條嵯峨の二流有といふ四條は後嵯峨の御門を云嵯峨流は天流寺開祖夢窓國師水石を好みて造りたる庭多ければそれより出たる也京師には古き庭とも今に遺りたる多し（雍州府志）に雙林寺（東山）寺中文阿彌が庭また紫野大德寺の大川院の假山はいづれも相阿彌か作る處龍安寺方丈はもと細山勝元の書院にて其庭の水石みな勝元の布置なりとぞ又紀伊郡遍照心院の條下大通寺方丈有假山、是謂小善之所經營也、南都春日山中院屋之假山、稱善之所作、然則對此善、稱小善者乎、善未詳僧俗之別也とみゆ遍照心院は大通寺といふ尼寺なり俗に六孫王といふは經基の住所にて其社あればなり小善といふは比丘尼の名のやうに思はる

立石

○庭石は今の如くありく路の敷石の如くするは茶室なとより起りしにやもとは立たるゆゑ立石といふそれに立かたわろければたゝる事なと有と云は漢土風水の說によれりとみゆまた立石は太湖石を置となども擬したるべし宋の代は風水堪輿の說行はれたる時なれは入宋の砂門等傳へたる事多からむ宋の徽宗登極の初め方士が堪輿の說に隨ひ京城東北の隅を高く築かしめしを後その工役を興し山を高うして壽山艮嶽と名け梁師成といふものにその事を董さしめまた朱勔といふ者ありて潮といふ處の珍らしき花木竹石を取て進らすこれを名けて花石綱といふ【舟舡相繼一運爲一綱明人（吳風祿）に朱勔子孫居虎丘之麓、尙以種藝疊山爲業、遊於王侯之門、俗呼爲花園子、其貧者歲時擔花鬻於吳城、而桑麻之事衰矣】よりて應奉局を平江といふ處にたてゝ人夫を驅て危き巖に登り深き藪に入て殘る隈なく搜り求め一草一木にても手當あしければ罪せらる江湖もまたさの如くその運送する道に障るものは城郭をも毀てこほすに至るその費計るへからす府庫の貯を竭して凡六年を經て出來ぬ靈壁の一石高さ二十餘丈艮嶽の一石高四十餘丈といふ世に大湖石を重んずるの始めなり飛閣高樓美麗を極め珍禽異獸も悉く集る又これを萬歲山と呼しかどわづかに十年ありて金の國より軍をおこして攻る時大雪ふりて薪乏しか

花石綱

や又芝生を切て道を作るをも云べし（夫木）芝を百敷の庭のきり芝ふる雪にこれを限とぬれし袖かな【光俊】

這入口

○今世に家に入處をはひり口と云這入は門の入口を云歟眞淵云今の田舍にては門又は家の戸口をはひり口といふなり（源氏）にいさゝかの間ありく處をはひ渡ると云是なり（古事記傳）波比岐神の注（後撰集春上）云々躬恒いもか家はひりに植る青柳に今やなくらむ鶯の聲契沖云（夫木）（和泉式部集）見にと來る人たにもなし我宿のはひりの柳下はらへとも（堀川百首）柴の屋のはひりの庭にたく蚊火の烟うるさき夏の夕暮これらを思ふに門より舍屋の内に入までの間の庭をはひりといひしなりはひりとはたゝ歩入にて今世の言にも入るをはひると云これなり云々はひりは古へ然るべき家にては大庭といひ今世には玄關白洲なと云なる處云々

林帷

○林帷（萬葉廿）六日内庭假植樹木、以作林帷、而爲肆宴、歌一首、打奈婢久波流等毛之流久宇具比須波宇惠木之樹間乎奈伎和多良奈牟六日は天平二年正月なり帷は（和名抄）【加太比良】閫也、以自障閫也、とみゆ林帷とは木をつらね植て帷のかはりとするなるべし然らは幕に用ひて日除の爲にはあらじ樹を日よけにするは常のとなからいと興あるは明人揚循吉が（吳中故語）に錢曄常熟之富人也、云々其享用等封侯、園地之勝蓋爲江南甲冠、嘗於池中築一亭、夏月宴客、則登焉、客旣集則去橋不得輙去、亭皆四窓嫌日色蒸照、則取大方舟、實以土、上種名花作高屛、視日所、至牽而障焉と見えたりまた揚誠齋東園小步詩、醉來忽墮錦綳窩、無奈桃園李繞何、八角小亭無處坐、見花多處背花多

障日花舟

○又幕を張て花を食ふとあり（王安石集）に越人以幕養花因遊其下二首、幕天無日地無塵、百紫千紅占得春、野草自花還自落、落時還有惜花人、尙有殘紅巳可悲、更憂回首抵空枝、莫嗟身世渾無事、睡過春風作惡時、

り賤の小家なれども故ありて住なしたりとみゆ

まさご　いたご　まなご　すなご

○（圓珠菴雜記）にまさごいさごまなごすなご皆同じされば石はすこし大きなるべし（万葉）には多くまなごとよめり後の歌にすなごすなとはまれによめり【（狹衣に宰相中將の妹大將の堀川殿にわたりたる處庭のまさごの白かねかと見えたるに木草のたゝすまひ迄もなへてならず云々

○（落窪）三條の家作りたる處にげにみれば作りさまいとあらまほしうすなごしかせすだれがけさせなどす云々（夫木集）光俊の歌秋風に軒はの椎の落くれは庭に黑石まくかとぞみる石は白黑なにをも蒔べし茶人はなち黑をかこひ茶室の外に並ぶて數すくなきは物はしそうにてあしゝ又色々形をなして蒔とは（作庭記）に砂のとは云ざれども河の汀の白濱はすさきの如とがりくはがたの如くゐり入べきなり云々また島姿の樣々山島、野島、杜島、磯島、雲形、霞形洲、濱形、片流、干潟、松皮、等なり云々霞形二かさね三かさねにも入ちかへてほそ〳〵と爰かしこたきれわたりみゆべきなり是も石もなくうゐ木もなき白洲成べし洲濱形は常の如し但とうるはしく紺の紋なとの如くなるはわろし云々松皮樣はまつかはすりの如くちがひたる樣にてたきれぬべきやうに見ゆる處あるべしと有り其地の形を樣々に作るとのみにあらず白濱といひ白洲といふみな抄を蒔とところとしらる松皮形などは鱗形に近かるべし松皮と紺屋の染かたのやうなるは嫌ふよしさも有べし（康富記）に康正二年十月八日立砂下知云々など

島姿の樣々

白洲　立砂

あるは今も貴人の通行する處また神祭に大路を淨め水うち砂を置て神輿をわたす是は盛砂といふ是なり又武家の玄關前などに小石を敷これをしらすと云はもと白洲よりいひ來れる歟また白砂の下略にや

しらす

（徒然草）に庭のかはかざるにとみに鋸屑（おがくづ）を敷たるをいみじと思ひけるははづかしかりき庭の儀を奉行する人かはき砂を設くるは故實なりといへる事あり常には形よく一處に積置てか樣に用意ある成べし（犬子集）に【休甫】卯花は庭にちり敷白砂かな【又芝を種るに地の形よく限りしたるを切芝といふに

と有り(神代紀)に青山を枯山となすとあれば枯山水の枯をからと訓し點は非なるべし

野筋

(夫木廿八)慈鎭和尚夏木立庭の野すぢの石の上にみちて色こき深み艸かな又按るに今庭にせんすいといふはもと山水なるを池にのみいふは非なりそは泉水の心には池は泉のみにもあらず

前栽

○前栽(ぜんさい)は庭前に草木を植たるを云其料にすべき草木をいへるは(藤原長能集)嵯峨野に前栽ほりにまかりて日くらしに見れともあかず女郎花野へにやこよひ旅寢しなまし(枕草紙)御まへはつぼなれは前栽などうゑませ結ていとをかし又前栽合などあり今俗前栽を野菜にのみいふは非なり(万葉十四)宇惠多氣能毛頭左倍登與美は植竹也(同十九)吾屋戸能植木橘【二十】に宇具比須波宇惠木之樹間乎云々あり又(古事記)景行天皇の記中に意富迦良能宇惠具佐とは大河原の植草なり今俗には竹木草木をみな植木と云ひそを商ふものをうゑ木やと云さて植木とは人の植たるのみをいふにもあらず生ひ立てあるを謂なり竹も草も然り

五色砂

○庭に砂を敷と有り京師淨土寺村慈照寺は慈照院義政公閑居の處なり東山殿と稱す方丈の東北に書院有り同仁齋と云ふ此處四疊半敷なり後世茶室四疊半は是に本づく方丈の南は庭にて二重の閣ありいはゆる銀閣なり庭上に白砂を圓く敷たり昔より敷來りしに銀閣は大北山なる鹿苑寺の金閣を摸されたりとかや金閣は鹿苑院義滿公退居の處後小松院行幸ありし時造られたり(足利治亂記)應永十五年前相國義滿入道道義公當春北山花叡覧に備らるべしとて北山の處々に新殿を十三處かまへ天子御座の殿をば八棟に作りて八龍を立て金色に彩りたり御殿の西北の二方には早咲の櫻を並樹に植させ其間の庭には五色の砂を鱗形にしきと有り然らば銀閣の庭の敷砂古跡なるべしもと金閣寺と云は(資治通鑑)唐代宗大暦二年造金閣寺於五臺山鑄銅塗金爲瓦所費鉅億時王縉爲給中書符牒令五臺僧數十人散之四方求利以營之と云り(舊本今昔)寛蓮碁打の女に値ふ物語に前の庭に籬結ひて前栽をなむ可笑く植て砂など蒔た

ぶるに至るされば俗師風水の說憑るに足らずと云へり此事はもと陸遊が(入蜀記)にいへり

案山子

○案山とは向へる山を案几に表したるなり山のみならず葬穴に對峙する山なき時は樹木などをも案山とするなり案山の文字(禪錄)などにも出たりこゝにて鳥をとしのかゝしを或は案山子と書く是は山寺の禪僧などの戲れに書なるよりの事なるべしもとより其義なき事なり(後撰戀六)源のかねきかすみ侍りける女の母云々小山田のをどろかしにもこざりしをいとひたふるに逃し君かなひたは鳴子なりをどろかしはかゝしなり

山水

○(伊勢物語)みよしのゝたのむのかりもひたふるに君が方にそよるとなくなる(鴨長明無名抄)に人の歌を評するにたとへば石を尋ね人のよき石を得ずしてちいさき石どもをとりあつめてめでたくさしあはせつゝ立たれどいかにもまとの大きなる石にはおとれるやうにわざとしたるが失にて侍るなりと見ゆ又庭を作るを山水作ると云ふ(同書)たとへば山水を作るに松をうゝべき所には岩をたて池をほり花

鵜會

をさかすべき地には山を築き眺望をなすが如し(東鑑十二)阿闍梨靜空が弟子靜玄法師に二階堂の石を立さする處にのすぢ鵜會と云ともみゆのすぢは野筋なり鵜會は鳥合の義歟但鵜の羽ほす石と云ともあれば鳥の居集まるべき處の石にてもあるべし

假山水

○(尺素往來)に假山水は海樣、池樣、泉樣、遣水樣、岩井樣、細谷川樣、枯山水樣、山形、野形、洲濱形、葦手形等、立石者、海川石、野山石、流波石、水分石、逃石、追石、添石、離石、起石、臥石、麒麟羽干石、鴛鴦並居石、三尊形、品文字等、瀧落者、絲落、布落、離落、傳落、重落等、摸國々名所令建立之候と有り名目大

枯山水

概出たれ共猶數多あるべし此內に枯山水を古寫本にもフルセンスイと訓あるはわろし枯を古と誤りたる本ありて後人まがひて點を付たるにや音にてよむべし(作庭記)に池もなく遣水もなき所に石を立るこれを枯山水と名付くその枯山水のやうは片山の岸或は野筋などを作りてそれに取付て石を立るなり

方位家

たるをなさけありてしなさばをかしきかりぬへき所かな【大井の家をいふ所】

○(山家集)に庭の石に目たつる人もなからましかとあるさまに立しおかすは是は山城國大覺寺の東大澤の池にある庭湖をよめる也巨勢金岡が石也といひ傳へり(山家集)云大覺寺の金岡が立たる石を見てとあり今大澤の池中有大石号庭湖石金崗所立石乎庭湖石とは漢土の大湖石の名をとりていふにや後京極殿【良經公】の(作庭記)にむかしの上手のたて置たる有さまをあとゝして家主の趣意を心にかけて我風情をめぐらしたつべき色(云々)廣貴が云石は荒涼に立べからず東北院に蓮仲法師がたつる處の石禁忌を犯せる事一ッ侍る延圓阿闍梨は石をたつる事相傳を得たる人なり予又その文書を傳へたり如此相營て大旨を心得たりといへども風情盡ることなくして心及ばざる事多し但近來この事委くしれる人なし云々高陽院殿修造の時も石をたつる人みなうせてたまたまさもやとて召つけられたりしものいと御心にかなはずとてそれをばさるとにて宇治殿御みづから御さたありき其時には常に參りて石を立ると能々見聞侍りきなど樹木水石のことども細やかに書れたりこはその傳へも古く立花などの後に作り設たる法とはひとしきものならず【されども是風水堪輿の說を傳へたるなり堪輿家の說によき墓地を得れば必發跡すと云へり(三餘偶筆)地脉の條に黃梨洲曰葬地說君子所不道就其說而論之今凡三變毎變而愈下周官之法亡言形法者已爲變矣再變而爲方位形法理之顯者也方位理之晦者也三變而爲三元白法方位一定不易者也三元白法隨時改換者也其法即曆書所載云々尤彼之說以求吉地必一年一改葬而後可是故方位者地理中之邪說也三元白法者又邪說中之邪說矣(蓴卿瑣筆)昔有兇人、營一墓兆甚佳、考亭先生題二語于壁、曰此地不發是無地理、此地若發是無天理、後竟爲震雷擊毀、誠哉是言也といへりよくおもふべし(西湖遊覽志餘)に大師蔡京が父の準を臨平山に葬る此山駝形をなす塔を山頂に作る遊江を帶とし會稽山を案山とす術家に於て誠にすぐれたる地所なり蔡京すでに富貴を極めしが一旦傾覆して其眷族も亡

歟】嶋と云と（万葉廿）屬目山齋作歌三首、乎之能須牟伎美我許乃之麻家布美禮婆安之婢乃波奈毛左伎爾家流可母（伊勢物語）むかしたかきこと申女御云々の條右大將藤原常行といふ人いまそかりけるそのみわざにまうて給てかへさに山科の禪師のみこおはしますその山しなの宮に瀧おとし水はしらせなどしておもしろくつくられたるにまうて給ふて云々宮つかへのはじめにたゞなをやはあるべき三條の大御幸せし時紀の國の千里の濱に有けるいとおもしろき石たてまつりきおほみゆきの後たてまつれしかばある人の御ざうしのまへのみぞに居たりしを島このみ給ふきみなりこの石を奉らむとの給ひて御隨身とねりしてとりにつかはすいくはくもなくてもてきぬこの石きゝしよりはみるはまされり云々【山科の禪師親王は仁明天皇の四のみこ三條の大御幸は（三代實錄）貞觀八年三月右大臣良相の百花亭にみ

山齋

ゆきありしなり】本居氏の說に屬目山齋云々の山齋はしまと訓へしすべて庭の泉水築山を島といふは古言なり島山ともよめり（伊勢物語）に島好み給ふ君なりといへるも庭を好み給ふなり（万葉畧解）もその說に從ひ注しながら屬二目山齋一と點を付たるは注と訓點とはたがひたり山齋をしまと訓むには屬目を漢藉よみにせむこといかゞ

心字の池

○心字の池（源氏）【桐つほ】さとの殿はすりしきだくみつかさに宣旨くだりてになうあらため造らせ給ふもとの木立山のたゝずまひおもしろき處なるを池のこゝろひろくしなしてめでたう造りのゝしる云々池の心とは歌にも多くよめり詩にも碧波心裏など作れり懷といふも同じ程の義なり後世心字の形に池を作るはこれらのことより轉りたる歟

立石

○古へ石を居るを立といふ（源氏）【明石】所のさまをばさらにもいはずつくりなしたる心はへ木たち立石前栽などのありさまえもいはぬ入江の水など繪にかゝば心のいたりすくなからん【入道の家をいふ所】また（松風）前栽ともの折ふしたるなどつくろはせ給ふこゝかしこの立石ともゝみなまろびうせ

の暮これは(職人盡)のかはかうにはあらずかははまるなりかうは買はむなり即ち肥とりをいふ京師の俗に小便買といふ者もとより有り(續の原)春の朝なを舎利唱へける【一排】山城の小便買も長閑なり【其角】

○尿守しとゝよむべし(散木集四)うちわたりに夜ふけてあるきけるにかたちよしといはれける人のうちとけてしとしけるを聞てしはぶきをしたりければぢていりにけり又の日つかはしけるかたちこそ人にすぐれの何となくしとすることもをかしかりけれ是を或人嫉妬の字音なりと云はかなはず

庭

庭　假山　嶋　立石【方位家案山】　心字池　鵜會　花石綱
枯山水　前栽　蒔砂【立砂しらす】　這入口　林帷　障日花舟　名苑致忠が事
路次植物　建仁寺　庭掃　草寶

假山

庭を作る事は(日本紀)推古帝二十年、自百濟國有化來者、其面身皆斑白、云々臣有小才、能構山岳之形、其留臣而用、爲國有利、云々仍令構須彌山形及吳橋於南庭、時人号其人曰路子工、亦名芝耆摩呂、云々また同三十四年五月戊子朔丁未、大臣薨云々家於飛鳥河之傍、乃庭中開小池仍興小嶋於池中、故時人曰島大臣【大臣は蘇我馬子なり】また(齊明記)三年秋七月都貨邏國、男一人女四人、漂泊于筑紫云々乃以驛召、辛丑作須彌山像於飛鳥寺西、且設盂蘭盆會、饗都貨邏、同五年三月云々吐火羅人、共妻舎衛婦人來、甲午甘檮丘東之川上、造須彌山、而饗陸奧與越蝦夷、云々同六年五月云々、又於石上池邊、作須彌山、高如廟塔、以饗肅愼四十七人、云々見えたり庭に山水の景を造るを島といふ蘇我大臣を嶋大臣といひしも其故なり又須彌山を作られしは始め路子工が爲國有利といひたるに任せられしより後度々其事ありしは故ある事歟【或は盂蘭盆會をなし又夷人を饗せらるゝ佛氏に功徳の爲に山を造る事ある歟是とは異ながら我國の禮にも大嘗會に山を作らるゝも壯觀をこととするなれば須彌山も同じき

嶋

いふ厠と同く心得るは非なり其外くさ〴〵悉く（覆簣錄）にしるしつればこゝにいはず昔人厠に入には足駄をはきたり（古事談三）叡山の平燈大德或日朝に河屋に居たりけるが足駄ばかりを踏脫て跡を晴まし失たりとありまた（福富双紙）にも足駄はきて厠に居る畫あり但し厠の作やうによりてなるか然りともおもはれず

婦人の小便

○因に云婦人の小便する事（今昔廿九）若き女夏の頃近衞大路を西さまに行けるに小一條と云は宗形なり其北面を行ける程に小便の急なりけるにや築垣に向ひて南面に突居て尿をしければ共に有ける女の童は大路に立て今や爲畢て立々と思ひ立りける云々男みるに【そこを通りける男なり】實に女の中結て市女笠着たる築垣に向て蹲り居たり云々是を見れば京都の婦人も昔は立ながら小便するとはなかりしなり後に田舍風の移りて今の樣にはなれるならむ蹲りてするとは今にては江戶のみにや其外は大かた立てする也說郛の（眞臘風土記）に每三兩家爲一坑蓋其草滿則塡之又別堀地爲之、凡登溷既畢、必入池洗淨止用在手、右手留以拿飯、見唐人登厠用紙楷拭者笑之、甚至不欲其登門、婦女亦有立而溺者可咲々々と云れば漢土にも婦人の立てするとはなきを知べし又洗淨するに左手を用ると天竺の俗なり（南海寄歸傳）に便利の事委く見えたり其法瓶水を持また丸めたる土を厠の外に置これをとりて厠に入左の手にてその土と水とを用ひて洗ふ又籌片を用るとも有といへり【原文繁多なれば抄出せず】

厠籌

厠籌は胡元瑞が（甲乙剩言）に唐の代の美人鶯々と北齊の文宣帝との事を擧たりこゝにて今も邊鄙の處には紙を用ひず草木の葉わら屑また木べらを用るなり漢土にも厠に用ゆる紙は一種の麁紙あり（照世杯）に穆家新坑の條に厠を建て報條（ひきふだ）を書く處本宅顧貼草紙とありこゝにも江戶にてすきがへしを草紙がみといふ【糞を艸ともいへどこれはその事にはあらず昔し此紙に鱗形屋の繪草紙摺たれば草子紙と云なり】

草紙

（篗絨輪）垢で留つた居風呂の漏、不掃除に長雪隱が止む木曾路（五元集）にかはかうや竹田へかへる雪

の御筆のよしにて火防の歌こて人々用ひ來れりこ有り時代もしらぬ人の傳へなり

厠

○厠かはやこ訓ずるは古へ河の上に構へたる故なり古くかはこのみもいひたりしは今もまるこいふ器をかはこもいへる是なりかはやこいふべき事は(古事記)【中卷】大物主神の大后こせむ美人を求め給ふ條に自爲大便溝流下【(古事記傳にかはやのしたなりこ訓たり】また小碓命【倭健御子】の兄を捕ふる處に朝署人厠之時またかはこのみいひたりしは(萬葉)詠香塔厠屎鮒奴歌あり古も河なき家も多かるべけれご厠はかはやなるが本義なればいづくにてもかはやこ云しなるべし其上かはやこはいさゝかの溝をもかはこいふなり然るを(東雅)にかはやの義不詳舊說に高野山の地形悉く曼陀羅の義を表す故に不潔をこゞむる事をゆるさず溷厠をば必ず河上に架するをもてかはやこいふなりこいふさらば此山開けざらん世にはいかにやいひぬらんこいへるは深く考へざるによりてなり高野の舊說もこより取にたらす但し河のうへにかまへきつるは古製の名殘なるべし中昔にはひこのこいへり槭殿なるべし

ひとの

(和名抄)坐臥具、槭牏、說文云槭【音威和名比】牏也國語注云牏【音投】行淸厠こ見えたり(和名抄)の河海類には(淮南子)云決塘發槭許愼云槭所以通陂竇和名以比こいへり古くも此字比このみもよみたりいひこ云も同じとなり(和名抄)はたゞ其物の世に云なれたるによりてなるべし歌に多く池のいひなごよみて言ひの詞をそへてよめりこれ水を通す樋のとなり俗にこひこ云これには大小あり信實朝臣の(今物語)にひこのゝと有此ひこのゝ内に虎子淸器等を置て用ひたるあこは洗したるなり御厠人樋洗こいふものは其役を勤むる下女なり筥に屎まる故にはこするこもいひその器をまるこも云ふしのばこ厠の筥か又私の筥にてもあるべし【(左傳)襄十五年に師慧過宋朝將私焉杜注私謂小便こあれご私は二便こもにいふべししのはこ又は屎の畧なる歟】・

はこ

雪隱 後架

○雪隱は雪竇の明覺禪師靈隱寺に持淨の職を司こりし故に雪隱の名あり後架も禪家の名にて小便所を

御所
大御所

○將軍家を御所と稱し同御父を大御所と稱すると鎌倉の時より成べし（東鑑）文治元年四月廿一日梶原平三訴廷尉不義日景時爲御所進士云々といへり大御所は（同書）建仁二年九月六日被候大御所、分註、幕下將軍御遺跡當時尼御臺所御座とあり（秋草）に是らの号を足利家の初代よりのとなるべしと云るはいかゞ

○（太平記）道譽京洛の處六間の會所に大紋の疊敷双へ本尊脇繪花瓶云々ありこれ客殿對面所なり長祿二年巳來（申次記）云正月十四日御會一獻有之同上樣の御在處也其時撿校も參りて平家を申也【在處則御會處の御座間なり】

逆柱

○さか柱逆柱ある家はやなりなどするものとか按るに（談苑）に造屋主人不恤匠者則匠者以法魘主人、木上銳下壯、乃削大就小、倒植之、如是者凶、と云りこゝには呪ひごとしてするわざと聞えず等閑に心づかで用るとは有もすべしこれによりて怪き事ありといふは俗說にてうけがたき事なり其故は割木のまさ目なるは本すゑのけぢめもいはず用ひて物を造るにあらずや逆しまなるはいくらも有べし結構美を盡したる造營などにはことさらに彫物などを逆に轉倒したる柱も有り凡物滿たるは缺るとの微意にやあらん（籆絨輪）にいろは五十韻に、のこる手跡は床のかけもの、おそろしや枕返を逆柱、といふ句も右の俗說によれり【智恩院の垂木に挿める傘なども故あるにや】何ものゝ筆ずさみにか唯（雜記）にある物に京に住む人とかや狸の所爲とて夜ごとに家をゆる事ありて祈禱などさまぐ＼すれども更にしるしなくてせんすべなしと語りけるを鈍全聞て一首の狂歌をよみて贈りける石すゑの柱うごかばけたぬきのさはりとなりて住うかるらん是にや感じけね其後は家ゆる事やみけるとぞ【鈍全は甘露寺殿の雜掌寺田宮内といふ者とぞ】又火災を避る歌とて傳ふる霜柱氷の垂木雪の桁雨の棟木に露の葺草といへるは紀逸が（雜語抄）に能登國鵜島の何某が家は九百年來に及ぶといへりかの棟札に云々弘法大師

御厨子所をば臺所とも可申にや臺所の別當とて中﨟の女房の中に然るべき仁体を撰ばれて此職に被補云々（源氏）に横河の僧都母を伴ひて宇治の院にやどる處下すどもみなはか〲しきはみづし處抔あるべかしき事どもをかるゝわたりにはいそぐものなりければ【食物のまうけを人々するなり】とも見えたれば（海人藻芥）の名は後の定めにや又臺所といふは（著聞集十六）臺所のさたしける女房どもみゆまた

御すゑ 海人藻芥に內裏に御すゑといふ處あり常人の所ならば中ゐなどの邊にや內裏仙洞に限りて御すゑと申にや近ごろは其外にも御すゑと申さかやとあり【（義輝將軍御成記）永祿四年三月木下古御殿御末迄御座敷構北平張打爲御末衞】今も是を傳へて大家には御末といへり（狹衣）に宰相のいもうとに辨君そひて大將の堀川の御所へ入給ふ處道季思ふさまなる御つほねし出てすゑなどあつかひありくとあるを（下紐）にすゑ俗のお末と云ふといへりされどこれは御局し出て居などあつかひにはあらぬにや

中居 【中居は北條五代記早雲寺殿廿一ヶ條に夕には臺所中居の火の廻り我々見廻りかたく申付】

臺 臺とは御臺所など申も女はもとより食物のとなど預り給ふとなればなり臺は食物居る器物の名なるがやがて食物の名となり食物の中には飯に勝るものなければ飯を臺といふ（源氏）【夕霧】おほとなぶらなどいそぎ參らせて御臺などとなたにて參らせ給ふ又たれも〱御臺參りなどしてのどかになりぬるひるつかた云々みな飯くふ事をいへり

御臺所 ○御臺所武家御妻の尊稱たり（東鑑）九月二日御臺所自伊豆山遷秋戸鄕給、不奉知武衞安否獨漂悲涙給之處、今日申刻土肥彌太郎遠平、爲御使自眞名鶴崎參着（阿州將裔記）云將軍義植公の御臺を清雲院殿と申き安齋は御臺盤所の略稱なりといへり

御厨子 御厨子所といふも厨子は物置棚にて臺所にあるものなり御厨子黑たなとて後には結構手を盡してもてあつかふもとは臺所物ゆゑ烟熏ほり黑みたるをもて黑棚といふとぞ

また今桶作る者の六尺桶井戸かは等の大きなる桶作るに用る鉋は正直といふ此も近ごろの名にはあらず（望一千句）正直のうへをてらす月日影秋の夜をかけ桶をゆふなり（後撰夷曲集）正直な人をば守る印には社ろく〳〵に仕ふかんなぎ

正直

○もぢ（和名抄）考聲切韻を引て鋠鑽也（漢語抄）に毛遅とあり明衡の（新猿樂記）に大工の容顔をいふ處臂有曲尺、肩者鋠柄、足者鉄槌也、などいへり諸家これを詳かならずおもふに此器鐵にて作り戻る物なれば俗に鋠字を當て用ひなれたるを字書によりて注したるより分らぬ事となりぬるかこれ恐らくは今いふ釘ぬきにや木の道にも何にも必用の具なるをこれなくばあらじ（後三年合戰繪詞）に將軍義家兵に命じて千任が舌を拔しむる處にかなばしにて引出すとあり凡箸といふは一條なるを折曲て兩の端相對ひたるが本義なりされども其圖をみるに今の釘拔に同じ今かなものゝ匠は唐剪刀の如きものをきりばしといへりかなばしに似たる剪刀なればしかいこ歟（砂石集）【卷二】眞言の法をいふ處これを譬へば釘拔のさをは如來の加持力座は法界力我手は以我功德力なり釘拔のより合て大なる釘をたやすく拔が如し重障のゝぞこるとおのづからしられ侍りかたし【紋にある釘ぬきといふも其器の兩端の向ひ合たるに似たればなり關戸などの釘ぬきは其義にあらず上に見ゆ】

もぢ

かなばし

○三妻錐（源平盛衰記卷一）五節の拍子物をいふ處村上の御門の御宇左中將兼家北の方を三人持たれば異名には三妻錐と申けり云々是も五節に拍子をかへて取障る人なき宿には三妻錐こそ揉合なれ穴廣々々ひろき穴かなとはやしけり錐をきりと云は切る具なる故なるに夫をもむとも云るは同言なりと云りされば（靈異記）に鑚をきり又もみとあれば古へよりもむとも云しなり

三妻錐

○臺所（海人藻芥）御厨子所內裏仙洞の外は諸宮に不可申而るに御室には寛平法皇の御時より御厨子と申傳へたり常に貴所には臺所と稱之又膳所など稱之歟臺盤所と申所は內裏仙洞執柄家にあり又內裏の

臺所

堅にあらざれば必江北の闔官也と云り

柱かくし

○柱かくし漢に是を楹帖といふ(甌北詩集)に金子友來乞楹帖、其家住太平寺旁、門臨大池、余爲書、鳥宿地邊樹僧敲月下門、一聯、適有尼菴、亦來乞桃符、僮奴不知即以此付之、一時見者傳爲笑資賦此懺解とて七律一首あり(五元集拾遺)、格枝亭柱かくし、空や秋水ゆりはなす山おろし(雅莚醉狂集)ある茶人より柱かくしに竹をかきたる畵の歌望みければ、千尋ある陰の柱とかくれてや浮世に佗の茶湯する宿

鉋

○百工そのことをよくせむとするに必まづその器をえらぶとかや古は物ごとに備はらぬこと多し鉋なども今のやうなるはなくて削たるものも木賊などにてむらをとりしなり故に椋の葉みがき鼻あぶらひくなどいふ諺あり(無名抄)に業平の家の柱はちまき柱にてとあるもことさらにしたるにはあらじ今の鉋は突かんなと云ふ百年已前に始れりとぞ(東雅)に云かなは古時にはまかなといへり(万葉)の歌に眞鉋と有

まがな

(和名抄)に引ところ辨色立成に曲刀(まがな)としるせし是なり今猶その物あり俗にやりかなと云ものゝ屬にまさぐりといふ物是なり鉇は鉋を誤れるなり鉋は(玉篇)に平木器と注せし物今俗につきかなといふ是なりといへり(眞如堂緣起)畵者掃部助久國と云ふ大永四年甲申八月と奥書あり其畵中に今世の鉋をもて木を削る處あり大永は三百余年の昔なり此器其頃あれども用る者すくなかりし歟又は繪の轉寫によりて誤りし歟しらずしかし(事跡合考)に柳島村なる一故家【予が聞たるは小村井村の名主某舊家にて鎌

鉇鉋

倉盛時の古文書など有とぞ】今の鉋なき時作りたるとて其家の柱皆鎗鉋にて削りたる戸など稀にあり此器にて削りたるも手をこめて磨きなどしたらむは刀痕も有べからず寛文八年の頃江戸の流行を集めたる短歌に肥前本ぶしやりがんな又(松の落葉)棟上踊り小歌、のこぎりこぶつら引まはし一筆書てやりがんな云々【南都大佛殿柱立をとりくどきしらげたつるやつきがんなあくまそなたへやりがんな】

してんかりのやどりといへど心やすからずは住かひ有まじ世移り時かはりて陵谷變遷するにや昔は斯はあらじと思ふ、於方丈石上戯作、已出瑞籬入化城、長明心鏡不長明、遺音猶有和歌在、石上松風々雅聲、鷲の山おのがとめて入月のたえぬ光をなに恨むらん、とは彼方丈記の終に、月影は入山の端もつらかりき絶ぬ光をみるよしもかなとある歌を詩にも歌にもよめるなれど是は長明か歌にはあらず（新勅撰）釋教の部にありて源季廣か歌なりこの古跡には後鳥羽院は二度まで御幸ありしと僧心敬が（私語）にいへりよく見てよしといひけん山の如く山水のめでたきも人からによる事なり【かけ作りと云は山岸などに依て作る屋を云ふ山の片そばをがけとかもじ濁りていへ共もとかけなるべし文字にも崖を懸崖と云これなり峻道を和名にやまのかけちと云り（夫木抄）【蛛】打はより籬の竹にかたかけて風をたよりのさゝがにの糸【後京極】かた岸にあらぬ軒はのたよりにもかけつくりなるさゝかにの宿【信實】又同人の歌かけつくる谷のいほりの軒ばより雫もながし五月雨の頃】

宗鑑が庵の額

○（百物語）に或人山崎の宗鑑が庵を見物せし迚諸りけるは入口の額に擧し語おどけたるかる口なり上の客人立かへり中の客人日かへりとまり客人下の下と見えたり何故の滑稽なる歟（阿羅野集）下々の下の客といはれむ花の宿【越人】といふ句は此とによれりとみゆ妙喜庵は山崎寶寺の麓にあり宗鑑此地に住りとは云ど此庵其時のさまを移したりやいかゞ（山城名勝志）に或云妙喜庵功叔は豐臣秀吉公昵近僧也公渡御當庵時千利休獻茶々店殘在于今云々宗鑑法師幽居于此地とあり

今俗茶人は吏なり常の人も家に遍額かくるとも禪家を學びてするなりつねに茶人など拙筆のえもしれぬと書たる其心も會せず其中にいみじき不祥のとなどもわきまへず高貴の人の茶の宗匠などの書たるを風雅ひてかゝげ置くいとをかし床の懸物なども亦然り（五雜俎）にも多く人の園池をみるに家の作り物ずきあしく俗惡なる聯額などあまたかくるは徒に勝地の不幸をまし山靈の嘔噦を貽すこれ江南の賈

あり（和名抄類聚國史）云假床、此間云佐受枳、今按假構屋内床之名也とある抔は字に付て云るのみなりさすきは後世に物みる爲に搆るさじきなり（書紀釋）に今世棧敷歟と云り押あてに作り書るなり之に依て唱るは甚ひがとなりさじきの名は物語文に多く見ゆ

○おばしま俗に軒檻などを訓りこれはおはします通りを云なり貴人の御座の順にあめる高らんなり（源氏）【野分】にまたみかうしもまゐらすおはしますにあたれるかうらんおしかゝりてみわたせは云々源氏の君の寢處の順のかうらん也

日藏
ひさし
母屋廂

○日藏諸書に多くみゆ（海人藻芥）に月卿雲客の亭寢殿にも日藏不可有之云々今いひさしなり其内これは霧よけなどいふ類と見えたりひさしのと正明が（年々隨筆）に古へひさしといふは母屋廂と分別して南庇はまろうどをすうる所もやも同じ殿のうちなり今時いふは座しくばかりひろきもあれど桁より別に屋根葺おろしたる所にて尾張あたりの民家にはかやぶき瓦ひさしのみ多かりさる所をひさしといひしと物語などにはみえねど（日觀集）に草の庵に軒のあやめをふきつればひとひさしさす心地こそすれとあるは今時いふひさしなり今時は庇をおろすといふをこゝにはさすと有り母屋庇といふひさしも日影のさし入義なるべければ今時のは更なりといへり物諸等に見えずといふは非なり日藏是なりさすとは傘をさすなどゝ同じく日を避るなるべし長明が（方丈記）に南に假のひかくしをさし出して竹のすのこをしき云々見えたり又はしかくしといふは階のうへを覆ひたる屋をいふ也

はしかくし

○次てに云長明が古跡は（醍醐隨筆）に日野の外山に鴨の長明か方丈を作れる遺跡云々こゝなん其あとよといへば見めぐりけるに山のこしのかけたる處より二丈ばかりなる岩のさし出て西のかたはるかに伏見淀などの川の面舟の行かふも見ゆればおもしろけれど下は谷なれば目もあやうく心やすからず云々かの取置自在に作りなしたる方丈の室をこの岩上に置たらんは東の山おろしはげしく下の谷へ吹落

鉋　かなばし　臺所　御厨子　おすゑ　逆柱　厠（ひとの、はこ）
雪隱　後架　婦人小便　厠籌　草紙

釣殿
釣殿（類聚國史）に云文德天皇仁壽三年閏三月丙午朔、鑾輿幸太政大臣東京染殿第觀櫻花云々天皇御釣臺觀釣魚云々（增鏡）に寶治二年十月廿日ころ宇治に御幸し給ふ云々平等院の釣殿に御舟よせおりさせ給ふ【釣殿舊跡は川邊なりと云々【源氏常夏】いとあつき日ひんがしの釣殿に出給ひてすゞみ給ふ又（宇津保）【祭使】大將殿つり殿に出給ふて君達抔すゞみ給ひて網おろしなどして鯉ふなとらせ給ふ（拾芥抄）に釣殿院とも見えたり夏日納凉の爲にもし專ら魚を釣べき處に設たるなり古畵に多くみゆ廊

泉殿
をつゞけて池水の上に四方なる屋を作るすみをかけたる板敷なり又泉殿といふも大やう同じとなり是は泉の湧出る處に作りしなるべし（古事談）に入道殿東三條を造らるゝ條千貫の泉透廊と有は樋にて長

透廊
く通したる處に渡る透廊をいふにや透廊は同廊に細き木を竪にしげく打たる窓有て透て見ゆるなり泉

千貫樋
字を家字に書たる本もあるは非なり〇今も東海道三嶋に千貫樋と云があり西鶴（諸國咄）に信州の事をいふ處兩村の大勢千貫樋にむらがり云々見えたればいづくにも云とゝ聞ゆ樋をあまた續きて長く渡るを千貫と云なるべし（宇治拾遺七）長谷寺參籠の男の條にえもいはぬ馬かな是ぞ千貫かけなど云にやあらむとあるは目方の重さを云なるべし千貫の重物を負て馳するにや

能舞臺
〇鎌倉殿中の差圖に能舞臺及橋がゝりを圖して是を泉殿と書なり（春湊浪語）に昔の泉殿のありしをすぐに猿樂能をする處に用ひしより舞臺とのみいひて泉殿といふ名は癈れたるなるべしといへり泉水なければ泉殿と云べからず舞臺は是を學びて作れ共舞をみる爲なれば高く作りて異やうにはならぬ京師

橋殿
清水の舞臺と稱すれ共是は舞臺には非ずされば（舊本今昔物語）には撿非違使忠明清水の橋殿にして

さじき
京童と諍をして云々の物語あり物みる爲のさじきと云ものは（書紀）に假殿八間云々假庪此云佐受枳と

廣徳寺の門

（世の人心艸子）【第五】都につゞく伏見の里むかしの春は日暮しの御門こて詠めし所も間びき菜の畠こなり云々【按に（永代藏）に此御門は越の君の御舘こいへり江戸には（落穂集）に豫州矦の御門處がら人通りも多く見物人の絶る間もなく其頃世間に於て日暮しの御門こ申よし云々しるしたり】

○廣徳寺の門こいふ諺は（續新齊夜話）こいふ物に元祿のころ天台座主下谷なる廣徳寺の門を御覽あり此の門には故あるべしこてたくみ等に仰て尋しめ給ふある番匠の申やうこれを造りし者あやまりて一尺低くせしを悔みてありしが身まかれる時に其よし妻に語りしを申傳へて侍こ申ければさては我おもへる事こはそむけり江戸は平野の地にして風行高からず其心がまへして造りしよこ思ひしは古へ柏原の御門羅城門を高しこて一尺きらせ給ひしをたくみ等低きに過むこ思ひて五寸切て一尺こ僞り申せしを叡覽有ていまだ五寸高し初めより一尺五寸きらすべかりしをあしく見てけりこ仰られしに人みなふるひおのゝきて云々の由奏しければ其儘にして置れしに果して三度迄風に傾きたりこぞかやうの事を其者に聞せなば後悔せまじきものをこぞ仰ける【此文撮要なり】實に此門今に至るまで風火の災なきよしみゆ按るに廣徳寺の門の諺（江戸砂子新篇江戸志等）にも見えず其後の諺こはしらざれば此言はごういふ物だかういふ物だこいふことをしやれてかうこく寺のもんだこいひしが行はれたるを附會して設けたる說なり柏原の帝の御事は（小世續）に出たり又江戸の地勢風行の事をいふ處は鳩巢の（獻司錄）をこりて書り皆淨藏貴所八坂塔の傾たる時祈りて直したりこぞ（蜩𦳝瑣語）に余兒時、郡庠明倫堂欹、郡主謀牮、直之、計費不貲、時有金姓者、云々自陳能神、牮不假人力、費止三金、如數給之金、以銀市紙筆硃砂鐃鍚米肉、每粑貼硃砂符一道、設祭祀焚錫鐃鳴鑼數次、其堂立正、後濠股塔偏、亦用前法牮直之、こ云へり小說こるに足らざれごも似たることなり

釣殿　泉殿　千貫樋　能舞臺　日藏　長明か方丈　宗鑑か菴　額

きまへずなん【又押あてに思ふに高野ひじりの笈に其躰の似たるか行燈もそれが用ゆる程なるの名にや】

○窓錢（五元集）矮屋窓錢の浮世を晀す雪見哉房錢は（事物紀原）に宋朝會要曰大中祥符五年正月以雪寒應店宅務賃屋者免僦錢三日此雨雪房錢之始也これは貧民の官舍に住ものに雪ふる時にその屋賃を免して出させぬとなり

しのべ竹

○（義理物語）に雨もやみて壁下地のしのべ竹に白玉の露そうとはこまひ竹をいふなり（犬子集）さゐづらば鳥さし棹もしのべ竹【政直】又（雍州府志）竹の條に一種其莖細長而其葉片大也、是稱女竹、又謂忍竹、建是比並而爲垣、又半破之、縱橫結束、爲墻壁之骨、しのべは節延なるべし江戸などにはしの竹と畧呼す

青瑣

○門戸の青瑣は門のみならず車の腰御倚子經机その外着物に此透しあり立筋を青く塗たるなり門に設る事は漢代帝王の門の制なり又（韻會）凡物刻鏤爲結交加爲連瑣文皆曰瑣非特門鏤也など見えたりこゝにて青鎖といふものは猪の眼の如き彫かたありて其内に立筋を刻みて塗その間を透すものなりこれを眼象なりといへる說もあれど誤なり眼象は猪の目にてその中を空孔にしたるにて文はなし【穴を目といふとは漢土も同じ針眼鳥目鷲眼等多し（字彙）覘字注に女墻開箭眼窺望城下とあるこれ矢ざまなり】

花狹間

今神殿などの戸牖に花狹間とて種々の文を彫刻して透したるに金箔を置き彩色するものもこゝの青鎖より出たる歟貞德が（淀河）に玉章をこよひ鼠にひかれけり枝に油やぬりし花ざま【玉づさは木草の枝に付るものなり花ざまより鼠のひきたるとにや】

日暮門

○日暮の門といふ事（雍州府志）聚樂城の條下に外には黑門日暮し門あり黑門といふは鉄をもてこれを飾り日暮し門は鳥獸草木等を彫刻すその美麗なるを諸人見とれて日の暮るゝをしらざれば名づく又

是も伊豫簾さぬき圓座などは其國より出る名物なるによりて其名を云ふ窓をやまとゝいふもその國より始て仕出したる巧みにやさにては侍らず文字を大和と心得るゆゑ義理聞えず此窓は家內に明りをとらむため又は竈の烟を出す道なるゆゑ日本窓と書侍りひのもとゝ唱ふれは煙の縁語もうすく籠れり云々按ずるに今いふ引窓なり爰の說によれば是も例のなぞ〳〵のやうなる名なり此窓の製ふるきものに見えず(五元集)飼猿の引窓つたふしぐれ哉

引窓

突上ケ窓

○(遺老物語)永祿以來出來初る事種々の內、ぬれ緣、突上ケ窓、出來始りしは天正の初泉州堺の津に北向道珍といひしわひずき屋敷狹うして窓を取へき處なき故にすき屋の屋ねを切破り明りをとりしなり

虫籠窓

○寬文七年に集めたる(續山井)に蛛の巢や二階椿の虫籠窓【道之】とあるは細かに子を打たる窓なるべし今も窓の出格子を虫籠と呼ものあり又(同集)に色紙窓にとべる螢や金砂子【友靜】これら形によりての名なるべし計無否が(園治)に風窓式の內氷裂兩截三截梅花圓鏡六方等の式ありその內梅花は心釘を轉じて一瓣づゝ開くやうに造ると見ゆまた峭壁の條に峭壁者、壘壁埋也、藉以粉壁爲紙、以石爲繪也、理者相石皴紋、倣古人筆意、植黃山松柏古梅美竹取之圓窓宛然鏡遊也など巧みなる事ども有されどもやり戸の製なきは不自由なるとなり(槐西雜志)に畫師帳無念書齋以巨幅潤紙爲窓幌、不著一擋取其明也これは窓の障子骨なきなり又窓擋なり

ひじり窓

○ひじり窓と云ふは出格子とはかはりて箱のやうに作り出して連子も短き子を雜えざるなりといへり紀逸が(六玉川)三篇にひじり窓にもふらぬ錫杖といふ句あり思ふに西鶴等が書るものにひじりあんごうと云小巷にさゝやかなる窓をかまへて居る賣女が軒にある行燈をいへりこのすこしの出格子の窓をいふかもしさもあらば窓がもとにてそれにかけたる行燈なればひじりの名あるかいづれともいまだわ

となくすべて木を用ひし事とみゆ

助枝

○また（和名抄）同部に助枝（楊氏漢語抄）云助枝【之太知功程式云志達】また（説文）云、牖、穿壁以木爲交窓也【和名末度】また門戸類に説文を引て在屋曰窓、在墻曰牖、とみゆ今茶室などに下地窓といふものは牖字に當れり下地は助枝なるべし又下立の義か（建保職人歌合）壁ぬりが戀歌、忍へともしたちにはなるふるかべのたゞこぼれなる我なみだ哉、下地窓といふもの今は寒竹と葭とを格子にして藤かつら纏ひて風流に作れども壁下地のまはたしこまひ竹をあらはして土を落し窓としたるが侘しき處にある是なり【（夫木集、慮慈圓、上壁に窓ぬりのこすいほまてもすさめすやとる秋の夜の月】古き前句附つひ埓か明〳〵袴から見りや立附の下地まど】

窓

櫛形

○窓を穴と云（徒然草）に内裏作出されて還幸近くなりけるに玄輝門院御覧じて閑院殿のくしがたの穴は丸く緣もなくてぞ有りしと仰られけるこれはえふの入て木にてふちをしたりければあやまりにてなほされにけりくしがたは櫛の形なりえふの入たるは今の火塔口の形をいふえふとは葉字にてくりかた入をいふ鎧の杏葉またえふ器など有り

○元あるまじき處に窓あくる事（源氏物語）【繪合】畫師を召て秘してかゝする處にわりなき窓をあけてといふ事なりこれとは事異ながら（日覺草）【德峯老人】利久ほろびて後のとをいふ處されどすきの道猶たえずして茶好の男再びこの道を起し當流とぞいひけるみな人この男のまねして云々ある時は土壇を高く築て數寄屋を作り遠山を詠めむとて窓をあけたり是より人皆地を高く築て數寄屋を作り改め窓を明たり其家にあるまじきかたなれども窓なくてはかなふまじとて內々の住居のみぐるしきかたの見え渡るともいはず窓をあくれば耻かき窓にてぞ有ける

耻かき窓

やまと窓

○やまと窓（寛永發句帳）唐までの月をぞ思ふ大和窓（新竹齋物語）都鄙の家ごとにやまと窓といふあり

月役

はこれに據れりと覺ゆ（沙石集卷五）伊豆の山寺の僧の物かたりに榑貢くれや召候とて馬につけて來るあり後世に日光そぎ甲州そぎなどいへる類なり又彼月役といへるものなど大よそにいはむには榑にて有べし月役は木の長さを定め切て木口を裂べき程に刀めを入瀑布落る下に置て木口を水に打すればひびき入て擘に易しとぞ木のたけはゞは異なれども彼とり葺屋根に用る板も其制同じかるべし

○（太平記）六條貴の所に西は羅生門の礎より東は八條河原の邊まで五六寸の琵琶の甲やすの郡などえりぬきてしたゝかに屛を塗り云々（曆龍工隨筆）にひばの甲は木を二つに割ればわれたる方平に表の方は丸みの付て琵琶の甲に似たればさもいひたるや疑らくは今いふ榑木なるへき歟やすの郡は末の田樂棧鋪打處にも出てやすの郡より出る材木なるべし今木曾の尺一なと云が如けん

木舞

○こまひ（下學集）檑【木舞】とあり（和名抄）居宅具に文選に鏤檻楹文とあるを引て加佐禮留乃岐乃須介と出たり字書をみるに楹は連櫓柱椽之端とあるによれは今いふ軒つけの廣小舞にあたれり（下學集）の檑の字を（和訓栞）にこゝの俗字とするは非なりこれは梠の字を誤れりと覺し（和名抄）造作具唐韻櫓柱支屋欲也【今按和名須介】（楊氏漢語抄）云棉梠【和名同上】とある和名件の楹と同く須介といふよりこの梠の字を出し又字をも誤りて檑とかけるなり須介の名は同じけれど物は異なり字書を撿するに（廣韻）梠桷端連綿木也とあれば（和名抄）棉字恐らくは綿字ならむ今こまひをぬきといふは非なり杜に貫き通したる上をこそいふべけれ（同書）に欄額を波之良ぬきとよめり【廣小舞は享保中始るよしいふは非なり】

まわたし

○まわたし（和名抄）墻壁額漢音義云壁帶謂壁中之横帶也【今按末和多之功程式云間度】（東雅）壁中の横帶ならむには今俗にぬきなどいふ物のごとく聞ゆるにや（說文）構字注構壁柱、西京謂之壁帶と見えたり心得られずといへるが如く（說文）によれば今間柱といふものゝ如し古へ間度には竹を用ひしこ

（慶安四年辛卯日記）十一月廿日町觸河岸端にこもばりぬりたれの小屋仕間敷候若町中に立申處候はゝ五三日の内急度取可申事また（類柑子）北窓の條西北に並べる塗垂の間に一株の柳あり云々

檜楚　榑　月役　めかくし　木舞「軒づけ」　間度　したぢ　窓【穴櫺形】

耻かき窓　ひじり窓　大和窓　しのべ竹　青鎖　花さま　日暮門　廣德寺門

くれそぎ

○くれそぎ（和名抄）造作具に檜楚【比曾、俗川檜曾二字、今按楚字是也】とあり楚は細きものゝ名なり魚に楚割木に楚【氣條】などの如し（東雅）に檜楚とは（延喜式）に以檜竿爲天井といふは細木をいふに似たりさほの反ぞなりとあるに從ふべし又（和名式）同部に說文云構壁柱也【和名久禮功程式有檜―椙―（東雅）に今俗にくれといふものとも見えず東國の俗に地上の芝といふ草を土ながら取て屋上を葺

くれを切
埴生の屋

をくれを切などいひて圦の字を用ひてくれとよむなり古にいひしあづまなる埴生の屋などいふものゝ制にやあらむ（萬葉集抄）に古語に久といひしは入るといふ詞なりと見えたり土に隨ひ入に圦ふ字讀てくれといふは近俗の制造せし字とも見えず屋ふくべき料の材をくれといひしこれらの事によれりと見えたりされば木に從ひ薄に從ふ字を假用ひてくれと讀しが只かの薄板となして屋をふくべきの義なり構字の本義によれるにはあらず凡（和名抄）に注せし處かゝる事の分曉ならぬ事共もあるなりといへり構は薄木の義をとれるにも有べし古書に榑とも書たる易きに隨ふにや（東雅）ひたすら屋をふくべき料としたるは彼芝を土ながら起すをくれといふによれりされど（枕草紙）谷詣の條榑階（庭訓）に組押へ榑またくれ緣【今はきりめならぬ横板のえんをいふ】などいへる必しも屋をふく料のみならず（和訓栞）にくれ材木にいふは木斷の約まりたるにや又圦の字を用るとは土くれの畧なるべしといへる其義穩にぞ聞ゆる今も材木の端を截たるをはなくれといふ其義かなへり但し薄木の義によれば丸き木のきれにはあらず屋根板のこともするも近きことにもあらず（下學集）榑【日本俗爲葺屋板不知本據云々】（東雅

榑

他家こゝなへ住居を隔て小き藁ぶきの家を村々に作り置き經行臨産の節は右の他家へ遣し置となり經行の忌は七八日産婦は五十日も過て家に歸るよしなりといへりのちは何のよしにか恐らくはのし地の畧歟のし葺のとを上にいへり他家は寛永頃の俳諧に往々みゆ（發句帳）にたや色の紅葉は月のさはりかな「休甫」立田姫たやをやこぼす下紅葉【貞徳、此句、（犬子集）にも出づ】（油加須）に客人やさしあい有とかへるらむ他家の日數を待はうかれ女

三階作
瓦葺

○江戸にて三階また瓦葺のと（見聞集）に今の江戸町の家作りを見れば二階三階のとぢ葺瓦ぶきにて云々又慶長六年霜月二日するが町かうのじやう家より火出云々町中草ふき故火事絶ず此序に皆板葺になすべきよし御觸有て町悉く板葺に作る所に瀧山彌次兵衛といふ者諸人に秀て家を造らむとたくみ海道おもて棟より半分瓦にて葺うしろ半分をば板にてふきたり皆人さたしけるは本町貳丁目瀧山彌次兵衛は家を半分瓦にて葺たり扨もめづらしやと褒美して異名を半瓦彌次兵衛と云ふ是江戸瓦葺の始なりといへり【正保二年江戸にて始て瓦を燒寺嶋某中氏彦六と云ふもの江戸瓦師元祖と云と（武江年表）に云へり】其後また華美になりしと見えて友山云酉年迄は町方の普請叮嚀に有之大傳馬町作久間と申町人の表屋を三階屋に仕二階三階には黑ぬりにしたる串形窓を明ならべ候故殊の外目に立申たる事に候と有り思ふに回祿の度每にしば〳〵家作り變れるにや寛文元年丑九月廿二日町觸町中わら葺茅葺小屋のやね土にて塗可申候又同年十月廿八日藁葺茅葺小屋新規に作候義自今已後堅御法度の間左樣相心得可申事猶寛文八年申九月晦日にも屋根を土にて塗る事の御觸ありされば此頃もさやうの麁屋町中に處々有しなり【（貞享三年日記）寅十月廿八日銀四匁六分五厘長左衛門殿へ相渡申候右は元大坂町太左衛門店欠落孫左衛門雜道具並九尺貳間の竹柱立のわら葺小屋一軒所拂代銀なりなどゝみえたり】

○因に云今の世土藏より庇を作り出して塗家にしたるをぬりたれと云これそのかみよりの名と見ゆ

蠣殼葺

年日記）十一月晦日麴町の儀去る未年土藏造塗屋に申付候今度見分相糺候處茅葺藁葺杉皮葺等の小屋有之蠣殼屋根の分過半下地を塗不申仕方不屆千万に候依之地主地借へ過料申付蠣殼屋根の分は來戌三月中迄下地惣塗家作に致し屋根の義は土留迄に蠣殼差置候分は勝手次第茅葺藁葺小屋杉皮葺の分は取拂はせ跡普請の義は土藏造塗家に致し可申之由麴町名主共只今迄の申付未熟故支配町々不埒に付押込申付候と町中不殘御觸あり

烏飛

○烏飛といへるはからすおどしなるべし（徒然草）に後德大寺の大臣の寢殿に鳶ゐさせじとて繩はられたりけるを西行が見て鳶のゐたらむ何かはくるしかるべき此殿の御心さばかりにこそとて其後は參らざるけると聞傳る綾小路の宮のおはします小坂どのゝ棟にいつぞや繩をひかれたりしかば彼ためし思ひ出られ侍しにまことや烏のむれゐて池の蛙を取ければ御覽じ悲しませ給ひてなんと人の語りしと云り

屋根板

○屋根に用る板是も前の記に屋根板は元文の末より杉を片出し月役と云ふものこれ有りこけら葺の下地に用ひしが是も同頃より【享保年中】廣ごまひといふものを工夫し出し月役はなく成りぬ瓦下には杉皮葺を用云々【廣ごまひ此時始て出來し物には非ず後を見よ】（雍州府志）土佐國產の內野根山所出

月役

之材其條理直而宜割板是稱野根板また長片といふ又方にして細長きものを月役と云ふ凡そ杉或は檜を一尺餘に伐り刀にて割たるを片板といふ屋を掩ふ是を葺板と云又曾木といひ桁ともいふもと安藝國より出し故に（庭訓）に安藝桁と稱す然れども京師に專ら用るは信濃國木曾山の產佐和良木を良とす小川が（塵塚噺）【文化十一年に歲七十八とぞ】我等二十歲頃迄は江戶の端々武家町屋共に多く蠣屋根にて有しなり又月役といひて長さ一間に幅一寸四五分の割木をのぢにしそれより板にて葺き其上に蠣殼を敷き并ぶ月役は田舍にて婦女經行の節別居して其時の仕業に屋根に遣ふ割木を拵へし故に月役と名付

のぢ

しなり享保延享の頃はのぢはみな月役にて今の小舞貫は用ひざりしなり伊豆國七島などにては經行を

鱗のならべるに似たればなり西鶴（置土産）に燒木も舟大工のこけらを用云々是は本義を失はず（佐夜中山集）鱗をば取ぶきにしてこけらずし

とち葺

○こぢ葺とは二分こぢ三分こぢ或は五分こぢもあり板の厚きをいふなり重りては五寸七寸の厚さとなるこぢば綴の義にや（衣食住の記）【作者をしらず天明の今六十餘歳とあり】享保の中頃迄諸侯大夫の殿門表長屋の屋根の厚さ五寸七寸のこけら葺棟には瓦を置き烏飛と云ふ木を渡し井筒に天水桶を入れ火敲を添へ屋根に上置き腰板は栂檜の節なしきらびやかなりしに度々の火災ゆえ用心の爲にこて瓦屋根に造り替腰板も腰瓦にかはれり【江戸町々に火見やぐら出來長屋の壁に瓦を用る事此時なるべし】又云小屋敷町屋などは蠣殼を屋根へあげ軒に貝留を板にて打【新見老人の（昔の物語）に昔は江戸中に蠣殼葺四五軒ならでは見ず近年は大方蠣殼葺となること享保十七年にかく云り】尙も火用心に瓦葺となり塗屋造りに替れり云々

火の見

○因みに云享保庚子年九月十七日纏の形品々有但組合數いろはの内へらを除き百千万迄四十七組此内へ寺社門前町組合幷に本所深川分は一組より十六組まで都合六十三組右場所組分片山三七承りにて出來候よし○一町に火之見の高サ町屋家根棟より火之見棟迄九尺に定貳町程見通し候積り町々申合繪圖面通り喰違に火急上け可申候出火有之は板木にて爲知可申候○火之見の近所に風見の喚鐘釣置火之見番人兩人宅置風有之喚鐘鳴候はゞ壹人の番は火之見上り可罷在候殘る壹人は火之見番上り候段町中へ爲知可申候其時組合町々申合人足用意仕罷在火之元入念申付出火有之候はゞ早速罷越打消大火に不相成樣可仕候貞享三年寅九月火之見櫓に番置候儀も來月中は風吹候時ばかり差置可申候十一月は晝夜

屋根番

差置可申候とあれば火之見櫓も享保よりあるに非ず又貞享元祿の頃專ら屋根番と云とありて屋根に上り火を見る此も其居る所を作りて有しなるべし今も家々にある火の見と云ものゝ是なるべし（享保十四

諸國に此制あり屋根のかうばえ低くせざれば危しその輪といへるは上に置く石其儘にては轉び易ければ木また竹にて輪を作りこれを敷て上に石を置なるべし屋上木石を置たる圖古畫に多しこれも釘うてば石など上るに及はねどもそは料もあまたにてやすからねばさはせざる也古へのこけら葺は是なるべし（庭訓）に組押榑安齋云屋上を風に吹損ぜられんことを恐れて木を桁の如くに組連ねて屋上に置を云なるべし又（同書）に襲木は石の押榑の上に太き木を横に置を云なるべし古畫に石を置たる躰も見えたり

襲木

貧家には石をも置べしとあるは井桁の如く組たるものを組押といひそれに用る料の榑といふ意と聞ゆ此説いかゞ有べき思ふに襲木も屋上に置木とも定めがたくや是は組とは天井の組にて押の榑は其上に用る料たるべく襲木もそれに用る製あるべし

檜葺
井繩

○檜皮かぞふるに坪數にて云にや（山城名勝志）鳴瀧村の條に南長尾の保古文書を引て云ふ爰成多喜堂【号願成寺】修理料檜皮捌拾井【最下五尺井繩定】直錢捌貫文代被宛行檜皮大夫紀恒弘也云々見ゆ今一坪などいふが如く五尺井繩とは五尺四方なるべし【今屋根板に一束の多少を定むるに繩など云は繩の長短をもて量る茅檜皮も同じきか板ぶきにも是をかや足といひ又巻茅などいふ葺かたもあれば五尺井繩もそのことのやうなれど檜皮八拾井としるせしは束故のことにはあらじ】（宇治拾遺物語）に五石なわの釜を五ッ六ッかきもてきて（玉勝間に）今世に一斗ばかり入べき鍋釜を斗なわといふ事ありといへり是も其法繩をもて定めしものとみゆ

地葺

○地葺といふこそその始は（事跡合考）に元祿年中の事をいふ處こけら又とち葺にてもすみやかにせんとするにかねてぐあいよく幾枚も地上にて葺て置き其儘持上げ取合せの處にて釘じめに致候間暫時に出來たり是急用のこけら屋根地葺といふことの始なりといへりこけらは柹字なり（和名抄）造作具に見えて削木の細片をいふ其魚鱗に似たればこけらといふとぞ是は一ひらのさまにより今いふこけら葺は魚

雨下 所造などの四方に軒ありて雨垂の四方に落る屋作り雨下は臺の屋作の兩方雨水の落るを云ふ（源平盛衰記十一）育王山に金を送る條すなはち檜の材木を以てほうきう作りの御堂をたてゝ云々是はほうきやうの訛りほうきうは寶形なるべし四阿の屋にして屋頂に寶珠の形を設るなり今俗只四方に屋の垂たるをほうぎよと云ふ（甘露寺職人歌合）檜皮葺軒つけをまつふきそむるひはだやのまたむねあはぬ戀もする哉今こけら葺はいづこよりともなけれど大かたはむねのかたよりふくや檜皮のまた異なる歟

のし葺 ○（太平記）に常法には四品已上平侍なんどは關板打ずのし葺の家にだも居ぬ事にてこそあれ云々見ゆ

板葺 諸大夫といへども武の家は板葺草葺歟武家板葺の事上に引る（海人藻芥）にも見えたる（北條五代記一）

草葺 早雲寺殿廿一條に四壁垣根犬くゞり處を塞ぎ拵さすべし下女つたなきは軒を拔て燒き當座の事をまかなひ後の事を知らず万事如此あるべし深く心得べしと有是は草葺と見ゆのし葺は板葺なれども作りやうよきにやあらんのしとは熨たるやうにみゆるをいふ歟こまひぬきを用ひず廣き板にてはりつめたる上を葺をいふとぞ寛正五年甲申四月（糺河原勸進猿樂日記）に棧鋪の次第云々のし葺の分は已上御簾取ぶきの分は悉く蘆簾也舞臺のし葺西にひさし有り橋かゝりにもやねあり廣板ぶきかうらん竹

こけら葺 ○こけら葺も今の製とはいたくかはれりと見えて（古今著聞集）に渡邊の藥師堂はこけらぶきにて有けるを修理する事を云ふ處この堂建立の年記をかぞふれは七十餘年になりにけりと見えたりかく久くたもつは葺板の厚さと重ねの多きともおもひ見るべし（落穗集）に江戸の昔の事をいひてこけら葺と中條は一ヶ所も無之悉く日光そぎ甲州そぎなどを以てとりぶきいたし其外かやぶきなりと云へり（西鶴織

取葺 留）に伏見の里なる質商人の事をいひて取葺屋根の軒のひくきを作事して瓦ぶきに白かべ京格子を付ければ云々また（永代藏草子）にこれも同じ里の荒てはかなき職人などの住よしをいふ條に取葺屋根の輪扇の要割みと見えたり取ふき屋根とはそぎ板を排次（ならべ）て押へに石或は木の丸太などを載せ置たり今も

馬人船謂之馬頭かゝればむねと兵馬の爲に設しやうなれどさばかりにもあらず（天香樓偶得）都曾之處謂之馬頭以地當水陸衝要冠蓋商旅之所聚集擧馬頭以概車船且擧馬頭以概馬之全體也といへり

屋根

○屋根（古事記）に鵜葺草葺不合命訓葺草云ふ加夜とありかやと云は此字の如く屋を葺く草を云る名なり令合を阿閉と云なりすべて屋を葺には此方彼方の軒より葺上て棟にて葺合せて終るとなる故に葺終るを葺合すとは云なり（六帖）に思ふ人雨と降來る物ならば漏るわが屋根は合せざらまし（万葉八）はたすゝきをばな逆ふき黑木もて造れる家は万代までに上つ代は大御殿をはしめ凡て草もて葺つればなり

卷かや葺

かやぶき本なるゆえ板もて葺もかや足と重ねのをめりたるを云ふ又卷（かや）と云ふ葺方などあり】

屋形

屋形は字の如く屋の形なり車蓋をやかたと云ふ船は更なり（源平盛衰記廿三）富士川に陣どる處に屋形どもを指上て閑に幔幕引て居たり館をやかたと云て尊稱とすることは殿と申す類なり又たゞ家をやかたと云ふ人名に家持などはいへど常にはいはぬやうなれど（源氏）【あつまや】に浮船が三條のかくれがの處賤居人あやしき聲したる夜行うちしてやかの辰巳のすみのくつれいとあやうしとありやかは家を云なり（東雅）に屋制を儀禮また（爾雅）によりて云ふ其制五架なり正中の衡梁を棟と云ふむね也其次を椳と云ふこれもや也【分注】にされは前後一ッづゝ二ッなりもやを母屋としらず古へにおもやと云ふ又そ

まぐさ

の次なるを楣といふまぐさと云ものゝ是なりこれも前後に一ッづゝなり棟と椳と楣と合せ五架とはいふ楣の下門は戸を設くる所なれば楣は門戸のうへの横梁なりまぐさとは古語に両あるものをまといへり屋の両下の制をまやといふがごとし又物の限りをきさといふ波限をなぎさと云ふが如しきさをくさといふは轉語なり屋の前後両旁の限りある横梁なるが故なり凡そ屋の内にあらねど門戸のうへの横梁をばまぐさといふとになりぬと云へり是屋作りの大よそなり屋根とは（萬葉集）に見えたり

四阿

四阿は（催馬樂）にあつまやのまやのあまりのあまそゝぎわれたちぬれぬそのとひらかせ（梁塵愚案抄）に四阿は御

家の掟より只品ありし武士も皆なめんだうにぞ今はなる云々又(鴉鷺合戦物語)【一條禪閤文明八年奥書あり】畿内近國の勢はせ集り在々所々なめんだうに爰に一手かしこに一手一騎一黨一家いへ〳〵の幕の紋思ひ〳〵の相しるし野山にみち〳〵たり(夏山雜談)にめんだうなるといふ諺は善といふとなるにや田舎にては善をめんだうと云巫をとるに三反して一爻をなし十八反して卦をなすなり其仕様の因循なればめんだうなる事と云ふ俗言に出たる成べしといへるは非なり(源平盛衰記廿一)箭だうなど云ふことば有り小坪合戰條に藤平實光和田小太郎に故實をいふ處敵一人をあまたして射ると有べからず箭だうなに相引してあやまちすな云々(太平記十四十七)にもみゆ十七の卷山門せめには遠矢な射そ矢弊にと文字かくの如し此たうといふと上にいへると同じ語と聞ゆ是を今江戸の詞にいはゞ箭だうなは箭だくなゝりめんだうは眼だくな也たうなといふ意は費なる事をいふなり【今俚語にむだといふはめだと同じめだをめつたともいふ是即ちめんだうのつゞまりたる語と聞ゆされば件のなめんだうは名めんだくにや目めたくなに繁多なるなり又(和訓栞)に(盛衰記)に上らうなりとも契は人によるべからずたとへ下らうなりともむすめがみするめんだうなりと見えたり又めんごいとも云ふめれは目厭の義なるべしと云へるは未然らず不角が(矢の根鍛冶後集上)泣々膝へもたれかゝりし逢だうな子の木像の京下り【會津遊鷄】轉りては厭の意にも用る歟

めを見する

○拾遺集國もち宮つくるひたのたくみのてをのおとほど〳〵しかるめをも見しかな○めを見すると云こと(異本保元物語)に大庭平太景義爲朝に膝ふしを射られしを大庭弟景親がすくふ處に云く他人は誰か助け申さん朝暮こめみせ玉ひつるはいかゞこり玉ふかと云ければ云々とあり小目みするとは常に辛くあたれるを云この目をみると云は古言なり伊奘冊尊黄泉に吾に辱見せ給ふこの玉ふとあり

馬頭

○又馬頭と云は(通鑑)唐穆宗記に上於黎陽馬頭爲度河之勢胡三省曰附河岸築土植木夾之至水次以便兵

の面の外廻りにある緣がはの事なり廊下のとく長くつゞく故めんらうともいふ但めんらうはぬんだつの轉語なりタとラと横通の音なりと云ごこれはいたく誤れるにや音便にめんと云るを面と心得それを正しとしたるよりことぐく違へり（和訓栞）に（繁露）に止於馬道馬道許人上馬處也といひ（和名抄）云々今なめんどうといへり緣の事なりとぞいへるは今の世緣がはのひさし垂木とけたとの間を塞ぐ板をめんだうと云ふ【これは一間づゝ穴有ばめどゝいふにや】とのあるそれをいふにや心得がたし諸說い

緣がは

づれも明らかならず殊に安齋の說緣がはをいふは廊もめだうも緣がはもけぢめなし今いふ緣がはゝ簀子なり廊はほそどの上にも見えたる如く對の屋などにわたる爲に設く緣がはとは異なりさてめだうは馬道にて馬に乘るべき處をいふは文字にてもしるしこゝに用るところは異なれば（和名抄）にもたゞ向堂之道といふを引り往來すべき處の義に取て家の內にめりく處あるといふ彼廊などよりおし通してそ

入側

の道あるべしこれ今世入側といふ疊敷たる緣のとこ見ゆ（入側とは殿の內の緣がはといふ義なり）これも古は板敷にて疊は鋪ざるなるべし（甲陽軍鑑）喧嘩仕置之條武田の御殿は公方家の作法也公方の屋形作りは第一諸人の付合に慮外なき事肝要故諸侍伺候いたすに緣ばかりあるくやうに造り給ふは中興鎌倉にて賴朝公より始りぬ其後尊氏公右の圖を以て都にて作り給ふ屋形造りの樣子人に緩怠なき爲なり

馬道

とこれ入側にて卽馬道たり（天香樓偶得）曰、都會之處謂之馬頭、以在當水陸衝要、冠蓋商旅之所聚集、舉馬以概車船且舉馬頭、以概馬之全體也、同書又云、藝圃雌黃云々所謂榮者東西南北皆有之矣、故李華含元殿賦又有風雨交四榮之說、榮爲屋檐、卽屋四垂也、又謂之楣、又之相屋梠兩頭起者爲榮、愚按榮之爲榮屋之四周也、又今人屋前再展一架、其名曰廊、其上或用接檐、或用重檐、意者前榮卽類此乎これ人の集ふ街を馬をもて名とすること今馬道を人の家の內往來する處の名に用ると似たり又（和訓栞）になめんだうといへるは家の內にいふとにはあらじ建武元年の落書に四夷を靜めし鎌倉の右大將

る中字に迷ひて母屋こいへるはわろし（今昔物語）【廿四第一語】前の放出の隔子（同卷）【第六語】放出の廂庇ある板屋【放出をハフダシこ訓を付たるはわろし】（落窪一）寢殿の放出のまた一間なる落窪なる處の二間なるになむ住せ給ふ猶所々に見ゆ是今世はなれ座敷やうの處ながらつゞきてはあるなり（夏山雜談）に放出こは本殿より別に造り出したる處なり俗に小書院小座敷なごいふが如し村名に放出こいふ所あり中古莊園なごより割出したる地名なるにや今いふ新在家なごのごこき歟（夫木）河の歌師光はなちでやこをりの川の朝朗堤むかひに舟よぶやたれはなちては河内こあり

○めだう（榮花）【疑の卷】道長公御殿造らせ給處そなたを北南こめだうをあけてみちをさゝのへ作らせ給また三昧堂を建らるゝ處に中にめんだうをあけさせ給ひて左右に僧房をたて又（根合の卷）四條の宮にわたらせ給ひぬせばくあつかはしき心ちす北對をめんだうあけて西には中宮そなたのらうあけておはします云々（源氏【桐つほ】えさらぬめだうの戸をさしこめ又（蜻蛉）大將殿云々めたうのかたのさうじのほそくあきたるゟやをら見給へは云々（枕草紙）【身をかへたらむ人はの條】ほそごのゝやり戸いこゝうおしあけたれば御湯殿のめだうよりおりてくる殿上人云々（和名抄）道路類辨色立成云馬道【俗音米多宇】向堂之道也（夏山雜談）に馬道こは禁庭にて人の通り道なり馳道の記錄書のよしなりこいへるはあやし（和名抄）にも馳道こ馬道こならび出て異なるよし明らかなり（江次第）七日節會頭書にも馳道は輦の道南庭の中に有こ云り階の通りの正中なり馬道は廊下なり故に轉訛してめんらうこもいへり（太平記三十）こゝの馬道かしこの局には聲もつゝます泣悲む云々又（曾我物語）【勘當免さるゝ條】めんらうの廡うち掃ひ又（熊坂）の謠曲に爰の面廊かしこのつまり云々是を（拾葉抄）に面廊こは權現造りの拜の屋をいふなり爰にては座敷へ行所の廊をいふなるべしこは何を心得たるにか廊は社前ならでもあるものを（安齋隨筆）めんらうは面道なり約めてめだうこもいふ馬道こ書く面は家の面なり家

ではむかしの職人盡に見えたる如く女のわざなり（五元集）【市隅】竹と見て驚きたる竹もがり又今のやうなるもがりも慶長のころ有けるにや當時はやり歌に江戸のもがりにさはりはするとよけてとをしやれたいしやくり毛といぶは加藤清正身のたけ四尺三寸の給脛の三里の程を多く過ざるに六尺三寸に餘れる馬に乘てあるかれしその馬を帝釋栗毛といふ是故にもがりに障るとうたひしとかや（犬子集）にばらりと散し花ぞめの袖春ながら嵐の音のたかもがり【望一】また（安布良加須）に及ばぬ戀をするぞをかしきせめて手を出せといひたき高もがり又卜養が蓮花をよめる狂歌にすらり〳〵ともぎあけてといへる詞は蓮莖の枝もなきものなればもぎあげてと云り西鶴などが草子に虎落者といべるとあるこれは（甲陽軍鑑）などにも有ことばにて別のとなり箕山か（風流大鏡）にいひぶんを拵へ理を得るたくみなごする者なりといへり虎落は假字なり（住吉物語）情なき人の心ぞもがり船うきよをはたゑ便成らん此意ならば藻苅なり

しゝかき

○又しゝかきは鹿角と云ふ軍中なごに用ゆさかもぎと大かた通はしいへごも分ちていはゞさかもぎはもぎ木にて枝なきなりしゝがきは枝あるを用るにや（三餘贅筆）今官府衙門列木於外謂之鹿角盍鹿性警群居則環其角圍如陣以防人物之害軍中塞柵埋樹木外向亦名曰鹿角また林逸か（節用集）逆茂木の下に小字にて逆頰と書たり逆茂木逆つらといへるは簽刺をさかとげといふの逆にて頰は外に向ふのよしにや是亦一說なり此さかつらは鹿角にひとし又軍中に敵の首を兜と共に取たるをもぎつけといふとかやもぐは首にいひつけは兜を添る意と聞ゆ

放出

○放出（源氏）【梅かえ】ひんかしはなかのはなちいで（花鳥）に放出は母屋なり東の對のもやなり中といふは母屋と東西の廂との間に障子を立へだてたれば御帳を立たる處を中のはなち出といへるなり又（若菜上）みなみのおとゝのはなちいでにおましよそふ云々（花鳥）の說非なるべし中のはかち出とあ

へり(日知錄)に古書を多く引て云々皆謂拒門之木後人因之遂謂門爲關也(周禮)司關註關界上之門とい
へり】又むげに近きものにてこゝに似つかはしからねど(一代女)といふ雙子に江戸すきや橋の邊をい
ふに釘貫の木陰と有り天和貞享ころ迄は街の木戸のかこいをかくいへりとみゆ

朝鮮矢來

○因に云竹にて一種の垣を作りこれを朝鮮矢來といふその國より使の來し時しそめたればなりそは正德元年七月朝鮮人來聘に付十二日觸書横小路板にてやきり無用竹矢來喰ちがい低く致し尤人の乘越不申程に仕り往來障りに不罷成候樣可仕事と此度始なるべしよの常に矢來といふものは矢ふせぎのよしにてもがり成べしこれより已前にも竹矢來のとあれば寶暦といふは非なり(卅二番職人歌合)に竹賣が

もがり

歌手あたりのよき枝あれば折もうしはなのかこひのもがり竹めせ(康熙字典)に蕃籬曰二虎落一前漢鼂錯傳爲二中周虎落一註以二竹篾一相連遮二落之一也もがりはもがるもぎもぐとはたらく詞なれど逆茂木などいふもぎもこれなり逆茂木は假字書なり(夫木)柿本影供百首【後九條內大臣】山ふかく八重のさかもぎ

さかもぎ

ひくとても世のうきとは猶ぞかよはむ(同集)六條題述懷百首關【俊成卿】世中はせきどにふせぐさかもぎのもぎれはてぬる身にこそ有けれさかは界のはぶきなり枯はてゝもぎゝになりし昔より燒捨てられむ日をぞはかれるといふも枝葉をもぎたるなり(源氏)【竹川】よそにてはもぎゝなりとやさだむらんしたに匂へる梅のはつ花【抄に杌【モキ】(廣韻)樹無枝也と見ゆ】もがりは枝葉をもぎたるなれば竹木にわたるべければ竹もがりとはいふなり(烏帽子折草子)にあのむかひに見えたる竹もがりの內こそ五郎太夫と申てえほしの上手にさふらへと有りもがりは物をかけて乾などもする故ゑぼし折などは用あるなりまた家のかこひとす今は紺かきなどの染ものゝほし場に作るをのみもがりといふその造りやうむかしとかはれるはかこひのかたの用ならねばなり近くは貞享ころの繪に染ものを張てほすところの竹もがり垣の如く立たる竹に絹ども横に幕をひきたるやうにはりて乾たり紺かきもそのころま

說を付るは非なり【江市屋宗助が事は（江戸眞砂）に見えたり】○又江戸にて工夫し初めたる器物多けれども有益なる物は千石通しなどなりこれは貞享五年のころ江戸大門通釘屋喜兵衞と云もの工夫にて出來しと云ふ

釘貫

○釘貫は（埃嚢抄）に町々の城戸を釘貫と云人を登せじとて釘を打通して根を返さず故に釘貫と云とありこれ今いふ忍び返しなり此名もいと近きにあらぬにや（犬子集）に軒にさすあやめは忍び返しかな

忍バ返し

【正信】（埋木集）【三十体の內物哀の體】股ついて見せむ心中のほどついひぢの忍び返しに忍びこゑ【正章】（榮花物語）【うら〳〵のわかれ】木はたにまいり給【伊周公】月をしるべにて卒都婆くぎぬきいとおほかる中にこれはこゝとこのごろの事ぞかしされば少し白う見ゆれどそのなりかく人々ものし給ひしかばいづれにかと尋ねまゐりよらせ給へり【其折とは長德元年父道隆公兄道賴公など薨ぜさせ給ひしをいふ歟すこし白くみゆるは久數ふりたるにあらぬそこはをいふそれも數多ければ月あかりたこ〴〵しくえらせらるゝなり】そこは釘貫とは卒都婆たつるめぐりの釘貫か又は古きをば垣にかくと有それにや（菟玖波集）にそこはみちたる山寺の垣といふ句に導譽法師戸をあくる內に佛を立ならべこもみゆ（今昔物語）に關寺牛佛の條牛をば牛屋の上のかたに少し登て土葬にしつ其上に卒都婆を起て釘貫差せり狹衣に門などもなくてたゞくぎぬきといふものをぞしたりけり（更級日記）に淸見が關はかたつかたは海なるに關屋どもあまた有て海まで釘ぬきしたり云々（異本應仁記）に富小路の釘貫は富樫鶴童丸が衆持堅めしを北畠黃門烏帽子直垂にて是は三條內府病氣にて東山におはするを今出川殿に御尋可有事有て被參なり明給へと宣へ共富樫不審を立て開かず鎰なしと答ければ敎親卿兼て用意して相鎰を以て開かれて早々御通りありと見ゆこれ（埃嚢抄）にいへる町々の城戸なり

○今門戸のかんぬきと云ものは關の木なり元來關と云は此木の名なり（說文）に關以木橫持門戶也とい

とは云なり棟より下にては即椽【タリキ】と並ひて同じさまなる又屋の左右の妻にては樽風と云ふものなるに書紀には其字を當られたり然れども是らは棟より下にての名なれば共に氷木には叶はず右傳十卷六十三丁に尚委く見えたり然れは樽風は殿の左右の妻なるを前の方に其形を別に作り設るは後のことゝ見ゆ（和訓栞）はふの條考ふべし

狐格子

○今白木にて四角に組たる格子を狐格子と云ふ盲人の（當道記錄）などに檢校たる者住べき家作の事を云に狐戸釣たる家などいへり是は蔀なるべしこれは蔀にも格子あればさはいふ歟但し其格子眞の隔子よりも穴大に組かた麁なるにや（茶話指月集）に口切の時分宗易さる佗の方へ釘屋宗安作ひ參られければ露地の中垣に古き狐戸を釣たり宗安さびて面白く候とあれば易我らはさびたりと存ぜず却て結構なる釣戸とこそ存ずれ如何にとなれば定て遠き山寺より所望し來るにぞ有ん其人是らの雜用思ひはかるべしたとへば佗の心ならば自身戸屋へ行きいかにも麁相なる猿戸がほしいといはんに戸屋さやうならば松板のくづ繼合せいたし參らせむといひて出來たるを其儘釣てこそ面白きと申べけれかやうの事にて其人の茶の湯見え侍ると云る物語あり茶湯者の物好こそ心得ね此古き狐戸求たる雜費推せらるゝによりて面白からずといへるは理りながら千鳥の香爐を高價に求め舟岡の墓じるしをおろし手水鉢に用ひたるはいかに是はとまれ爰にも狐戸とあれば盲人傳書のも是と同じとみゆ狐格子は其形を戸にも作るべけれど是は家の表に作り付るなり（續山井）火ともすや狐かうしも家櫻【友靜】（染糸）の千句に狐格子をのぞく往來頻かふり月には背く三筋町など見ゆ後世種々の格子あり名は格子にて多く竪にて方空ならぬ蓮子などをしか呼て本義を忘る西鶴などが艸子に京格子と云るは竪に子をあらく幷べたるなり江市屋格子に其子を細かにして三角に削りたるを透間なきが如く打たれば內より外は僅に見ゆれ共外よりは見えず是は江戸の町人江市屋といへるが元祿の頃造りそめしとかや狐格子を喜連格子と云て

京格子

江市屋格子

にてはやゝ古くより用ひしなるべし刀劍の目貫と云ものもいはゞ釘かくしなりされば其製古くも有しなるべし目貫は目釘の上の覆ひなり（俳諧矢根鍛冶集）によき作意とて譽られにけり先假りに姫まんぢうを釘かくし

狐戸

○狐戸は（古今著聞集）頼光朝臣頼信の家に宿りし處に鬼同丸いましめたる繩金鎖ふみ切てのがれ出ぬ狐戸より入て頼光のねたる上の天井に在て云々（同書）後鳥羽院の御時八條殿のばけものを若狹前司頼度が見あらはす處頼度寢殿の狐戸に入て待けり云々これは物など收め藏す處なれば其戸を狐戸といふ歟狐の穴ばかりの小き戸にて今いふくゞり戸の開か突あげ戸なるべし後にはいよゝ小さくいひて鼠といふ有り猿樂の芝居の入口に設く【これを歌舞伎にもうつして鼠戸あり同くゝくり戸なりしが後には作りざまかはりぬれど今も鼠木戸とはいふなり】（童蒙先習）に狹物の中に鼠戸ねつみ戸などはせばきが中ぞ【中といふは鼠の鳴聲に似てこの文のつゞき滑稽のやうなれど此書さやうのをかしき事更になしこれは中庸といふ事なり】（俳諧染糸）に鐺とがめをしても益なし番するてさしかため置く鼠戸に作事方の者に聞しに凡そ破風下の處には少きやり戸あり其外は蔀なり此やり戸は暑中に風を入る爲に明るは凉風を納るのみにあらす屋の朽ざるやうに設るなりこゝより入れば天井にあがる（著聞集）にいへる是なり（和名抄）辨色立成云榑風比宜云々古本古へ榑風（ハフ）と云ふに（大神宮延暦儀式帳）正殿一區云々上榑風肆枚長二丈八尺弘八寸厚四寸號稱比木と見ゆ宣長云氷木千木共に肱木【和名一の肱木と云る別なり】其ひぢの下を省けると上を省けると差のみなれば本一ッ名なる故に通はし云るなりそのひぢはもとフリの切たるにてフリとは本一ッにて斜に左右へ末の分れたる物を云なり（和名抄）に杈椏云々和名末多布理など云ふ名是なりと云上代の家造りに屋の左右の端に有て其本は前へ後ろへ軒よりして上りて棟にて行合ふを組違て其末を長く上へ出したる物にして其棟より上へ高く出たる處を氷木

しんざし

○しんざしは後指なりかけがねはさすかねともいふ共に（源氏）などの物語にみゆ（若菜）上みさうじのしりはかためしければ（孟津抄）にしりざしをしたるなり又（夕霧）こなたよりこそさすかねなどもあれと云々（椎が本）こなたにかよふさうしのはしの方にかけかねしたる處に穴のすこし明たるまた（枕草紙）大進なりまさが家に中宮行啓の處東のたいの西の廂かけてある北のさうじにはかけかねもなかりける【（狭衣）に大將入道宮におはする處さうしをさぐり給へばかけられにけりいとどうらめしう心うきに思ひわびてたゝう紙をさし入てさうしかけかねをさぐり給ふにはなれぬるやうなればたゞすこしあけて云々有り是は前に引たてさせ給ひぬるも手のみわなゝかれて云々有ればよくもたてざりける成べし（簾中舊記）御こうしのかきかねはあしたとく御はづし候て夜は御かうしまいらせ候へば御かけ候

かきかね

又今呼ぶ如くかきかねともいへるは（景清双紙）にしつちやうつめがね八さうかきがねとみゆしつちやうは七挺たるべしはつさうは八相にや金物に八相と云有り楅つきたる戸をさる戸といふ（寛永發句帳）に押あけて今朝くるとしのさる戸かな【成安これは寛永九年の歳旦なり】くろゝをさるといふは何の

猿戸

よしにかあらん猿は人の如く手の働くものなればたとへしにや太刀の金物の猿手といふも手長猿の手をくみ合せる形をおもひて呼るにか【後には其名に付て全く猿臂に作るは非なるべし】楅も此かな物の形より猿の名ある歟釜などを釣る自在竹のさるといふ物も同義なり

かすがひ

○（催馬樂）に貫河かすがひもとざしもあらばこそゝのとむのとわれさゝめ云々（延喜式）に鎹をよめり（契沖雜記）に催馬樂にかすがひといへるは世に云かけがねなり

釘かくし

○釘かくし京師佛光寺通烏丸西に釘隱町と云ありこれは京に三富家あり角倉十四矢倉醍醐倉と云この十四矢倉住る町をしか云は長押の釘かくしの金物美麗なるに習ひ釘の頭をかくすかな物をさの如くせしかば民家未これなかりしかば世人來り見る者多く遂に町の異名となりけるなり思ふにこの金物大家

（和名抄）鏁子を藏乃賀岐とあれどもかぎには非ず今じやうと云ものなり故今本には邪字と訓を付たり

やり戸

○やり戸は今用る引戸なり（萬葉集十一）旦戸遣乎速莫開朝戸やりはあしたのやり戸なり（源氏）【あづまやゝり戸といふものさしていさゝかあけたればひたのたくみも恨めしきへだてかな【（花鳥餘情）にひだのたくみは番匠の惣名なり云々古へ飛驒より木工いでしゆゑ番匠の惣名ともなれり東國にては武州淺艸の大工また安房國大工など（東鑑）に見えたりこれらの所に良匠を出しゝなり（房總志料）に本郷童の諺に飛驒の匠か竹田のばんしよと云とあり此地平郡瀧田などを云なり（和名抄）に朝夷郡健田とあり今瀧田に作る平郡に並といへり然らは此とわざいと古きとゝ聞ゆ因て思ふにからくり師の竹田もこれによしあるにや

ひだのたくみ

○左甚五郎と稱する者受領して飛驒にて有しが（甲陽軍鑑）に大工受領して飛驒になる事ともみゆ飛驒の甚五郎と稱せられたるを後に左りとなりしも知べからず（人倫訓蒙圖彙）に木彫師の處に天正の頃左と號する名人ありなどいへり（屠龍工隨筆）に左甚五郎は我祖父の弟子なり大工堀内大隅が語りし然れば明暦天和あたりの者なるべしといへり堀内は平内の誤りにや件の（圖彙）にも左とのみいひて甚五郎の名をいはず江戸にて甚五郎といひし者は左の名を襲ひしなるべし（近世奇跡考）に出る家譜は覺束なし

（源氏物語）蜻蛉の巻にいと物はかなきすまゐなりかしつぼねなどいひてせばくほどなきやり戸口によりゐ給へば【此人は薫なり】云々有る女は一品のみやの官女可然人なりされども局は狭き處にて入口にやり戸立たるなど今大家の長つぼねなどいふさまにや（枕草紙）にくき物やり戸などあらくあくるもいとにくしすこしもたぐるやうにてあくるは鳴りやはすると有り今世諺に下らうの一寸戸とさゝみせり戸障子をたつるに一寸のこし草履木履など踏ちらしぬぎ置く人皆敗家の人なり

唐紙　衾障子　杉障子

唐紙は唐國の紙を唐紙といふそれにはあらじこれは今世にも衾障子にはる紋ある一種の紙あるそれなるべしこれを唐紙といふよしはひまなく紋のありてよの常の紙とはそのさま異なればなりすべてよの常にことなる物をば唐某といふ常のとなり扱いにしへの障子といへるは多くは衾障子の事にて今いふ障子はあかり障子なりさて又ふすま障子といふよしは衾をひろげたらむやうに張たる故なり云々いへり古代の障子多くは縁を取たり衾も縁あれば【今俗かどみぶさんと云】其形似たり(職人盡歌合)に唐紙師あり(庭訓往來)にも其名出たり又(同書)に杉障子みゆ(秋夜長物語)に書院の杉障子と有りこれ今の杉戸なり衾障子も今はふすま又たゞ唐紙にて通用すことば略に過たり今世にからかみと云ものも本は唐紙にさやうの紋ある紙にならひて作りしなるべし(散木集)物名の歌からかみのかたきよと共に心をかけてたのめともそれからかみのかたきしるしか横本にて刻板なり(到來集)桐の葉は次第々に落うせて幾秋ふるき韓紙障子【義敬】世話盡法の道も近き生死の海越に硯の墨をつけなからかみ寛文延寶の頃よりもかくいへり

○古へも障子の骨なとはさまでかたく作れる物にはあらじ清少納言あしうあくればさうしなどもたほめかしごほめくこそしるけれと云りさて又白石翁云昔の腰障子は人のつくばひて影のみえざる程に腰高からじ今の腰ひきゝ障子は古田織部の物ずきにて近代の作なりと云り(事跡合考)に加藤清正の居所四方の障子最古風に腰高き障子にて總てその骨木の外の方鉄の筋かねを入れ外の方に一本ごに鉄の樞を仕込たると云これ白石翁が說にかなへり

○眞淵云上つ代には戸を常は傍に取退置をたてむとてそれを持來て立塞くなり(万葉十一)に門立而戸毛閉而有乎また門立而戸者雖闔これ立ることさすと差ひあり又(廿)に久留儞久根作之加多米等之久留は戸の樞なり又(十六)に櫃爾鏁刺藏而師眞淵は右の廿巻の歌に依てくきと訓り古は鏁をも然く云けむ

板屛

みたるにせんざいとも心くるしげなり（古事談）に村上御時朝成始昇殿候小板敷主上御覽自小蔀これらも御透見のやうなり（雍州府志七）良賤家宅庭際座上以板壁隔中間是謂蔀（甲子隨筆）に板蔀は（狹衣物語）に飛鳥井の宿りいたじとみ長くしわたして云々これ立板にて今板屛といふものなり此圖（志貴寺緣起）に見えたり板蔀には格子いれたるもあるべしといへり格子としとみは等しきものにて格子は透たるもの蔀は表手に板うちたるにや格子入たるもあるべしといへるが蔀の本体なるべし（信貴寺緣起）に見えたりといへるものは非なるべしそれは鰭板のやうに思はる（福富草子）に白木の塀にて格子表に板打たるものみゆ是なるべし今俗にしとみ戶とて戶を橫ざまにして上下へあげおろすは其似たれば名付るなりしとみとは下止の義なりといへりいかゞあるべき（續古事談）殿上一種物の條こと人々多くは難を出せり主殿司とりてたてしとみによせたつと有る蔀は今俗壁の外を覆ふをしたみといふ蔀の字を用ゆ（誹諧錦繡緞）【元祿十年】色づく秋をしらぬ紫蘇の實【其角】蔀する北の家陰の露しぐれ【溪石】庭に建て垣にも用る物ゆゑ壁の雨覆にも其名をうつしゝにやされど昔は壁のおほひとやいひけん（醒睡咲）に山崎の宗鑑が大風に壁のおほひを吹おとされしとき人のもとへ俵をこひに遣すとて歌あり車に半蔀あるは（今昔物語）に大藏史生高助が娘をかしづく條に蔀上たる車の新しきに娘どもをのせて云々あれば（源氏の細流）に大臣の車といへるのみにもあらぬにや

方立

○方立（圓珠菴雜記和名抄）棖【ホコダチ。トツテ】此は俗に方立と書てホウタテと云ものなり今按るにホコタチはホヽタチにやのこぎりをのほぎりと有ばホとコと同音なれば通はして云ふにや戶のつらに立る物なればほゝたちといふ歟眞淵の（頭書）に云ホコタチは（落窪物語）の部屋の戶に木を立て槍をつけたるに依て戶の面に叉竪に木を立たるものなり然れば戶つらも其意なり

障子

○障子（玉勝間）に（台記別記）に寢殿簾中調度未立上達部座障子可張絹今日猶爲唐紙不可然とあるこの

勢などの神垣をみるに皆同じ幅の板を八重に立たりはた板も此樣に目板は同じほどの板なるべし

駒よせ

○今坊間の民家窓前簷下に低く垣めくものを木にて作りて駒よせと呼は馬を外より牽來るをつながむ爲に作れるも有べけれどそはいと希にて多くは人畜ともに其より内へよせまじき爲なり然らば名に負はぬことなるべし（周禮、掌舍設梐枑注云梐枑行馬也或曰行馬舍交木以禦衆といへりこの類なるべしもしさもあらばこれも馬塞なり

蔀

○蔀はくさ／＼あり（源氏物語）【夕顏】家のかたはらにひかきといふものあたらしうして上ははじとみ四五けんばかりあけわたして簾などもいと白うすゞしげなるに云々（花鳥餘情）に半蔀は下はかふしはた板などにて上にしとみを釣りて外へあぐるやうにしたるをいふ（細流）に大臣などの車に半蔀とてあり（枕草紙）家はといふ條藤山吹などいろ／＼にこのもしくあまた小半蔀のみすよりおし出たる（和名抄）に（周禮注）を引て蔀覆暖障光也といへるにて透間なきよしはしらる格子は其間すきたり（枕草紙）卯花車の條かきくらし雨ふりて神もおどろ／＼しうなりたれば物もおぼえずたゞおろしにおろす職の御ざうじはしとみをぞみかふしにまいりわたし云々（徒然草）に細なるものを見るにやり戸は蔀の間よりも明しといへるは其間すきたるやうに聞ゆれど是は間といふは家の間にて蔀つりたる處はやり戸あけたるより暗しとにや蔀も格子と同じく内の方は漆にて塗たるもあるべし

隔子

隔子は外なり安齋（庭訓）の古抄の頭書に格子は一間を横に二ッに作て上一枚は金ものにてつりあげておろす時は上より垂れさがる下もかけ金にてかけ置なり上の隔子を上る時下の隔子ははづして取のくるなり又下をば其まゝ置ともありかうししとみは寢殿にあり蔀は板戸の如し隔子の外に當て風雨を防ぐ物なり隔子ある家には必ず蔀あり一間を横に二ッに作てかけ金にてかくるなりと云ふ板蔀と云は垣の類にて是は白木なり

竪蔀

蔀は横なるを是は竪なり故に竪蔀といふ（枕草紙）に野分の又の日云々たてじとみすいがいなどのふしな

古馬能波津々爾（こまのはつはつに）或本云字瘷勢胡之云々うませは馬塞（うませ）なり（和名抄）籬をまかき又ませと訓むませは宇瘷勢の略なり（隣女唔言）にうませこしをウ文字は添字にてませごしなりといへるはもと末をわきまへぬにや又檜垣は檜の薄板をあじろのやうに組たるなり故に今その形に似たるを何にもあれひがきといふ檜垣も古書に往々あり上代に垣と云しは後世築地など云たぐひのか（姓氏錄）大春日朝臣の條に仲臣令【これは人名誤字とみゆ】家重千金委糟爲垣、干時大鷦鷯天皇臨幸其家、詔號糟垣臣、後改春日臣、これは酒池肉林などの如き奢侈のことなれどもこれは其とは殊にて家のかまへに用ひたるなり廣く築たる垣もありしなるべし思ふに糟を土に和して作りしにやさるは堅くなりなどする爲ならむ但しかすがは古き地名なれば此古事は大鷦鷯の御世より猶古へのことなるべし

鰭板

○鰭板（古事談）に小野宮の大炊御門面にははた板を立て穴をあけたる處ありけりそれに菓子などを令置給ければ京童部集て天下の事共を語り申けり其中に名事とも多聞けり（春湊浪語）に鰭板は柱を地にほり立て作ることなり（玉海）の承安の記に今は切懸も柱を地に立て作るよしあれば其頃よりきりかけといふもはた板といふも大やう同じ製になりけるか其後はきりかけといふ名は聞えず（東鑑）等に鰭板とのみいひたり右大將家さしも日本惣追捕使を奉りて天下を掌に治め給ひし御館も土門に鰭板の圍なりしこと東鑑に見えたり【此外（砂石集）の武藏守泰時が家の鰭板破れたるを執權に追從せむと思ふ人々の築地つきて參らせんと云しを泰時が辭したるを載す此事（神皇正統記）にも見えて泰時を稱せられたり】はた板は地をほり立るなどを思ふに切かけよりも堅固なる物とみゆさらでは武家の圍ひとはなしがたし切かけは風流なるかたにや思ふに板の合せめはよくあはすといへども風日にさらせば透間出來る故切かけなどは羽がさねにして横板にすることは雨水のよく流るゝやうにかまへたるなり鰭板は今の板塀のごとく竪板にて合せめに板を重ねたるものと思はる今は目板とて板を細めたるを用ふれども伊

狐戸　釘貫【忍がへし】　もがり　さかもぎ　放出　　馬道【めんどう】　屋根【こけら、こり葺、地葺、のし葺、井縄のと、鳥おどし、江戸瓦葺】

切かけ

○切かけは（源氏）【夕顔】きりかけだつものにいと青やかなるかづらの心ちよげにはひかゝれる云々下文にかうあやしき垣ねになむ咲侍りける（抄）に板をつかねて垣などにしたるものなり（大和物語）にきりかけをせさせてまがきするひだのたくみのたつき音のあなかしがましなぞや世の中、と詠り垣といふに疑ひある可らず（今昔物語）佐太といふ侍着ける賤の水干の綻の絕たりけるを脱て切懸より投越てこれが綻び縫て遣せよといひたりし物語は（宇治拾遺）にも出たり石原正明が（甲子隨筆）に（源氏物語）夕顔にみえたる切懸は板がこひのかりそめなるなり（長範記）仁安三年十一月二日大嘗會齋場處の結構を記して南廂自第三四間敷布端疊爲八女座云々東第一間切懸下敷六男座とあり齋場處などはかりそめなるとゝおぼし切かけとは柱に切かけをしてそれに板を差あてゝ上より押へ木をうちたりと云り其体に似たるもの（福富草子）に見えたり又同じさまにて今のつい立障子めくものあり是等も切かけと

さゝらこ

いふにや今さゝらこと云もの有り日光山御宮のさゝら塀と唱ふるものこれ略言なるべし即さゝらこなりこれは上より押えの木に切かけしたるさまさゝらの子の如くなれば名付るなり【日光山なるは上にやね有り今常には多くしたみに用ゆ】これ即切懸なり正明がかりそめなる物といひしは悪し品おくれたる物といへどもよくもあしくも作らるゝなりまして垣根など人家に用ゐんにかけなかしのやうには作るへからず（雍州府志）慈照院條下に飛鳥井難波兩家の鞠場の事をいふに四方に柱を立て細木を以て横にこれを圍むこれを横算といふ兩家の外是を作るとあたはずといへり板と細木とはかはれども是又切かけにひとし又切立といふは竹を切立て鞠のかゝりとす一日はれの儀なりとかや

垣

○垣をくねといふはくべなり（万葉集十二）拒楉越爾麥咋駒雖詈また【十四】に久鞨胡之爾武藝波武

局
ツボ

は後世の好みなるといづこも同じ

○局をつぼねと云はつぼやかなる義なり（日本紀）に一部をツボと訓る是なり桐壺梅壺などみなその一區をさしていへり（榮華物語）【はつ花】おの〳〵屛風をつぼねつゝ（同）【わかばへ】臺盤所にて屛風几帳ばかりをひきつぼねて云々（紫式部日記）にもびやうぶひとよろひをひきつぼね〳〵口には木丁をたてつゝ（今昔物語）信濃守なる入御坂に落入語に宿直壺屋といふとみゆ又前栽を壺といふは今もいへりいづれも同義なり（南留邊志）などに梨つぼ桐つぼ等は壺と壼ととりちがへたるなりといひ（東雅）に何壺といひしものは宮中の道をいひしにはあらず漢に庭院などいひしもの即是なりしかるをかく名付しはその人間の境にあらざるをもて方壺瀛壺などいふ義にとられて御壺などいひしと猶上皇の宮居を仙洞など申が如しといへる說ともみな僻言なり局は女房の居所に限らず禁中に侍從局內記局監物局等あり役所をいふ（和名抄）にみゆ又（庭訓）などに局部屋とあるは部屋は役人の休息所壺屋と云も部屋など云處人ばなれてある物置風情の處をも云（舊本今昔物語）師の勘當うけたる僧の事を云處に憚りて御前へも不罷出後の壺屋などに候又一條に身貧しくして壺や住にてある者云々又門の內に荒たる壺屋立たる處に女房あり云々など多く見えたり

部屋

○部屋今世部屋住などいふ部屋は古へに曹司と云（落窪物語）に我叔父たるがこゝに曹司してと云るは食客となりてあるなり今世に部屋子といふと同じ義經を九郞御曹司といひしは部屋住をいふなり又（落窪物語）に落窪の君を部屋にこむることあるは物置に入置なり其文に樞戸（くるゝど）の廂二間ある部屋の酢酒魚などまさなくしたる部屋にたゝみ一枚口のもとに打しきて云々いへり【今世にも炭薪その外牛馬など入置く處をすべて部屋と云】

切懸　垣　鰭板　蔀　方立　障子　やり戸　しんざし　かけがね　猿戸

板敷のやうに固め置云々（古事談）に京極御殿御時摸二大内春宮町一令レ造給云々故左府之時修理之間自二天井上一被レ取二出種々物一【これは呪にて入置たるなり】古は民家といへども天井を堅く造りて今の如きものにはあらずとみゆ（義經記）忠信最後の條天井にひた／＼と登りてさしのぞきて見れば云々（景清双子）清水坂にて討手をうけたる處いとま申てさらばとて天井にあがりはふせき板を蹴やぶつて家のむねにつゝとあがりなど見ゆ（徒然草）に家の造りやうは夏をむねとすべし天井の高きは冬さふく灯くらしといへるはさるとながら夏をむねとするにはかなはずや（和名抄）に（風俗通）云殿舍作天井【俗云殿掌】とあり漢土には是を天花版と云ひ又仰被覆樑など種々の名を用ひて天井は今一處のかたにのみいへり（唐類函）州部（水經）注曰義陽郡南十五步對門有天井周百餘步（華陽國志）曰牂牁郡上當天井故多雨潦これは天文の天井をいふ也（類書纂要）に天井明堂甬道など出たるもこゝに云ふ天井にはあらず（金瓶梅十八回）吳月娘をはじめ衆美人前廳の天井にて虫を弄びなぐさむ事あり（杜騙新書巻三）大雨如注天井水滿など諸書に多く見ゆこれば雨水をあつむる水溜を長く方に地に堀たる處なり王思義が（三才圖會）にも圖ありまた風水家の說には揚救貧が（門路放水經）また近くは洪潮和が（趨避通書）等に放水の方に吉凶あるよし詳なり

○さて爰に天井をくみれといふは組入なり（榮花物語）うら／＼のわかれ内大臣のがれ出させ給ひ【伊周公なり】つはものより申す處に帥はすべてさふらはぬよし奏せさすればあるまじき事なりみやをさるべくかへたてまつりてぬりごめをあけてくみれのかみなども見よとある宣示しきりにそふ今格天井といふもの本製とみゆ組入の名思ふべし即井の字の文なるべし轉りてそらさまにあるをば何にもいへり内宮長曆の送官符に生絹天井また天井蚊屋など見えたり格天井本製なるは（園治）云仰塵即古天花版也多下于二棋盤方空一畫二禽卉一者上類レ俗一概平仰爲レ佳或畫二木紋一或錦或糊レ紙惟樓下不レ可レ少これ平仰

なり又同巻一條の宮の處ぬりごめにおまし一ッしかせ玉ひて内よりさしておほこのごもりにけり云々是は女二ノ宮人をうく思ひてかくれたるなり又(狹衣)に大將さがの入道の宮におはする處宮はかしこう入はてゝたてさせ玉へるに云々うつさせ玉へり大將あなたばぬりごめこみれば心やすくてへだてなごもやぶり玉はずこはこれより外へ出へき處なければなりおしいれられてこいふ詞もあれば今下ざま

納戸

に押入こいふも賤しき名にもあらず(まさすけ裝束抄)もやのなんご又みすはなんごにかくるも南おも

別納

てにかくるなりなごみゆ納こは物を入るゝ處の名なり(源氏物語)【夕顔】に別納のかたにぞさうしなごして人すむべかんめれ云々(細流)に別屋なり小寢殿なごいふ物なり雜舍なりこあるはくだ／＼しき注

納屋

也はなれたる雜舍にて物置處なるべし今も物入る處を納屋こいふ又帳臺を納戸こいふは(春湊浪語)に

帳臺

納戸こいふ名もむかしは帳臺の名なり鎌倉殿中の差圖に見えたり今もその唱殘りて殿中の帳臺を納戸構こいふなり又云平治物語義朝々臣生害の時云々塗籠の口までせめ入けれごも美濃尾張のならひ帳臺のかまへしたゝかに拵へたれば力なく長田父子を討得ずこ書たるなごは帳臺も塗籠もおなじやうに聞ゆれご是は下ざまの家作り定りたる式もなければ帳臺の設なくて塗籠を臥所にして是を帳臺こも唱る事こ見ゆこいへり按るに(下學集)に塗籠【土民所言】帳臺、局、閨に并び出せり塗籠は土民のみいふとにあらず恐らくは此注は次の帳臺の注にはあらざるやもこ帳臺は濱床の名なり(類聚雜要)は圖あり御帳を設る臺なればしかいふ臥所にもぬりごめにも帷を垂るより帳内こいひけむを文字は帳臺になり

土藏

しなるべし又後世土藏こいふものも塗籠より起れる歟土藏こ云とも既に(太平記十二)殿法印の手の者ごも京中の土藏ごもを打破て財寶を運取けるこあり次でにいふ塗籠はかくれの處なれば今俗亭主宿に居ながら留主をつかふこいふ事あり是を猿樂狂言の塗師平六のとばにぬりごめ他行こいへり

天井

○天井(今昔物語)美濃國因幡河出水語其河邊に住人は水出る時にて登居る處こて家の天井を強く造て

へ共古田織部なども指而執心不被申候哉らん髄に覺知之旨も不相聞候得共當時淺猿事共也

甕居　**額突**　**居間**

○げゐ（源仲正家集）北東風にけるの床までとをりつる小雪はみすの餝ふなりけり又無詮が（沙石集）咎一高野の明遍僧都善阿彌陀佛と云ふ遁世ひじりを三井寺の長吏公顯僧正の許につかはす處善阿僧正の坊へ參ぬ高野ひがさに脛だかなる黑衣着てとやうなりければ高野ひじりと聞てなつかしく思はれけるにやひたひつきしたるげゐに呼入て高野の事後世の物語なんど通夜せられけり（又卷）三犯戒の僧の事を云處持齋も破りて僧房に同宿兒共あまたおきて兒に喰はせむとてさは川と云ふ河にて魚をとらせて我身はひたひつきの內にゐて下知し弟子の僧火たきて前の爐にて生たる魚を煮る云々と有りげゐは甕居にて今いふ居間部屋などのことし（古事談）敎光朝臣愛酒之間不斷置之酒於甕居棚また作別當相人の條に馬を甕居の前に一疋別に立飼ける【此物語は舊本（今昔）にも出たりひたひつきとは額突にて狹きを額になぞらへいふか又つきとは頭つき顏つきなどいふつきにやされぱひたひつきは今火塔口（くわたうくち）といふ物かともおもはる（長門本平家物語）兼隆被誅條に內へせめて入て見ればひたひつきの前に火おこしたり又同所を（源平盛衰記）八牧夜討の條に景廉云々頓て內へ攻入て寢殿をさしのぞいて見れば額突あり燈白く搔立て障子を細目に開て太刀の帶取五寸許引殘せり云々今云火塔口なり（太平記）時勢粧の條に額付のあと以の外に下りたり

塗籠

○塗籠（ぬりごめ）は壁をぬりまはしたる處なり（源氏物語）【御法】南東の戶をあけておはします寢殿の西のぬりごめなりけり云々南東の戶はぬりごめの戶なり又（榊卷）源氏藤つぼの方に參られたる處われにもあらでぬりごめにおしいれられておはす云々君はぬりごめの戶ほそめに明たるをやをらおしあけて御屛風のはさまにつたひ入給ひぬ（花鳥細流）等に調度などの置處又文庫などの如しと有り今いふ納戶なり又（夕霧）の卷御息所小野の住居の處中のぬりごめの戶あけあはせて云々 是は前後の戶を明て閑道にしたる

いばんなごもかたへはちりばみてたゝみ所々ひきかへしたり見るほごだにかゝりましていかに荒ゆかむごおぼす其抄にこれ古來の不審なりきのふけふのとにかくはあるべからず只何もかはりたるさまをかきなせるなるべしご有りおもふにこれさまで不審のとにあらず臺盤は侍臣のつきて用るともなければ僅の內にも塵ばむべし疊は用ある處にのみ敷ものなれば不用ならむをば引かへして置べきなり

深緣差莚

（庭訓往來）に深緣差莚安齋翁云ふ深緣とはへりを廣く差たるを云なるべし差莚とはたゝみ表の兩面にして裏の方をば床へさし付て所々とぢたる故差莚といふなるべし貴人は疊の上にまた疊を重て座し給なり其上の疊差莚なり云々今時禁中へ攝關衆の年頭の御禮に參られたる時は其人の御禮申さるゝ疊を一帖うらがへす其上にて御禮ありこれを差莚といふと（樋口秘記）に見えたりこれは實の差莚にてはなく差莚をしく代にたゝみを裏返し敷て被用し成べしと

ござ

○今俗ござと云ものは其品をよく云むとての名なり（枕草紙）にあかぎぬきたる男の疊をもて來て云々こりいれたればこと更に御座といふ疊のさまにて高麗などいときよらなりとみゆ【今門前ござなどいふはいと有まじき事にや】

高麗緣　**臺目**　**座敷**

○緣(へり)に品々高下あると（海人藻芥）に見ゆ高麗緣は白地に黑紋織たり略には黑文を染む又思ふに座敷といふも御座を敷設くるをいふ名なり【茶室に臺目と云は一疊を四ッに分ち一分減たるなり堺にて藥種一斤を四分一減たるをたい目と云文字可考といへり按るに其大なる方を大目と云ならん薦にて廣狹あるなり】

眞の飾

○今世にいみじき祝ひ日などに眞の飾と稱して書院佛前の三具足喚鐘拂子などを用ふ安齋翁云古き事にはあれど俗家祝儀などには斟酌すべき事なりといへり貞德文集御成座敷飾物之事先床は三幅一對掛物云々盆石石菖鉢云々皆以古實置樣香樣御座候得共紹鷗已來臺々敷相傳輩無之候近來利休居士可被存候

疊

〇次てに云疊とは敷合するもの故に名付【重ぬるにて折るとにあらず今物をたゝむと云も重ぬるなり】古書にたゝみめといふは水草のわかめを集めて作りたるに今の干海苔の類今たゝみいはしといふ物と同義なり（古事記傳十七）皮疊絁疊などあるを以て見れは上代には氈茵（かもしとね）なごのたぐひも凡てたゝみと云しなり右の白檮原の朝の大歌に菅疊を敷て二人御寢坐しよしあればしきて寢る物を疊と云しと知らる云々後世疊に品々あり長帖短帖狹帖半帖又厚帖薄帖などあり帖の字は疊と音を通はして用るなるべし（同傳廿八）疊むとは重ぬるとにて菰を重ねて幾重もある意又石だゝみ子だゝみ藪だゝみ等ありたゝみの義是なり然るを今のうすぺりのやうに心得るは非なりむしろ一重なりとも捲こそせめ折たゝみなば折めつきて用ふべからずかぞふるには一ひら二枚といひたり幾帖といふはさらなり又いづこにもあれたゝみ一枚二枚ばかり敷て用る事もあり（枕草紙）いろつやゝかなる板のはし近うあざやかなるたゝみひとひらかりそめにうちしきて三尺のきちやうおくのかたにおしやりたる云々（今昔物語）に在原業平女をぬすみ出して大なるあぜ倉につれゆく處に板敷の板もなくて立寄べきやうもなかりければ此内に疊一枚を具して此女を將行て臥せたり云々石だゝみは石をしきつめたるなり（散木集）皇后宮弘徽殿におはしましける時西おもてのほそどのにて立ながら人に物申けるに苦しかりければ土に居たりけるをいとほしたゝみをしかばやなど申ければたゝみは石たゝみしかれて侍るめりと云を聞てよめる石たゝみ有ける庭を君にまたしくものなしと思ひけるかな返し名にしおはゞ身もさえぬへき石たゝみ片しく袖に衣かさねよ又疊の裏と音にてもいひしにや（同物語）に大和の城の下といふ處を疊の裏といひたる諺あり城疊（しやうぐ）同音なるよりいふなるべし後世なぞ〳〵のやうなる物の名を呼こともいと古し又疊に上下（かみしも）ある事（江談抄）に面のむしろを裏に折返して閉付たるを上と知なり不ㇾ折して只付を下に可ㇾ敷也

かもしとね

石だゝみ

〇（後三年合戰の古畫）をみるに疊の厚さ今と異ならず（源氏物語）須磨巻二條院殿上のさまをいふ處だ

棚

よりて床棚など幷べ稱すもと棚と云ものは別にありて厨子たなと幷べ稱す其棚は二階三階あり是を居ゑ置て物を置く處に用ふ書などを置をば今も書棚とて別にありこの棚を床の旁に作り付にしたるなり脇手には戸棚など云物も出來れり

間木

○今つけ鴨居の上に只一枚の板を横にわたして棚と云ものは昔は間木と云しにや（今昔物語十九）夏の比麥繩を客人共集りて食けると云條に大なる折櫃一合に入て前なる間木に指上て置てけり又荒卷の條に荒卷三卷を間木に捧置て云々（宇治拾遺物語）にも見ゆ（蜻蛉日記）すゞもまぎに打あげなどあり昔は付かもゐはなし上長押なり間木は其上にあるべし

置床

○小キ家には置床とて取おきにするあり不角が（わくがせわ）物ずきの度に置床蚤の筌

床　くれとこ　あくら

○床はもと（神代卷）に同床共殿とありてゆかと訓り又とことも云ふ（万葉集）に奥床に母は睡有外床には父は寢有とあり床は臥床をいふ也されど漢土の如く別に床作りて其上に臥にはあらず古への人家すべて板敷なれば坐臥する處には疊を敷その臥ところを床といふなり今疊に床といふとこの意にかなへり（和名抄）坐具に牙床胡床など見えたり是は腰かけに用るにて臥處に用るにあらず（源氏）若菜の下柏木ゑもんの督の女三の宮を寢所より抱きおろすとあるは一段高き床なり又（柏木）の卷にも床高きよし見ゆ女三の宮を御父朱雀院のとひ玉ふ處に宮をも人々つくろひ聞えて床のしもにおろし奉るとあるは父へ禮義なりされどこれは貴人のヿなり又ゆかとも通はしていへど分ちていはゞゆかは簀にて床上

盜竹

に籍ゝ竹也とあれば是すのこなり（和訓栞）には簀の下に横たふる竹を盜竹といふ床下にかくれて繋縛せらるゝをいふとあり床下に隱るゝにてヿ足れり（宇治拾遺）に門部の府生と云もの弓を習ふ條板じき

板しき　ねだ

したげたまでも皆はり燒（曾我物語）祐經をうちし處たゝみ板しき切とほししたもち迄ぞ打入たるといへるしたもちは今いふねだかけのヿなるべし今ねだといふは根板にや

佛壇床

はさ入て投捨てけりと有り上人の居所なれは傳中其圖あまた所に畫きたり今俗に高さ一尺ばかりに作りたる佛壇床と云ものもとより有し佛壇なるを後に床の間出來て【これも俗稱なりもとは床のある間をいふ】これをば佛壇床といひし成べし同例と見えたり【文みる處に出文机の製よろしかるべし色々こごりつくろうはうるさしたゞ明き(アカル)小窓のもとに棚板をとりはづしにしたらむは塵掃ためにもよかるべし古樣に拘はらず棚の下膝の入べき處はあけて置かざれば机とするに便りよからず疊三四疊敷にして傍に書籍置處あるべし黴塵もなきはこゝろよけれどあけくれ書籍取ちらすのみならず其儘に置かざれば明の日また其ごとく取出すにいとまも費えなどするはもの撿索するときの常の事なれば日々茶室などのやうに掃淸むるとあたはず物の隈には塵もつもれば掃ふ時やすきやうにかまふべしされば日々掃淸むるやうの人はいかやうにも有るべし松崎堯臣が(窓のすさび)に烏丸光廣卿は常に居玉ふ一間十疊ばかりありて書物を悉く引ひろげ四枚のふすまを二枚ひらき机一脚箱一ツ三本入の扇子箱に筆あり其間へは年月を經ても人の入るとなかりし故居らるゝ處跡付て其外は煨塵みち〳〵たり公宴とて參内院參などの時も右の扇子箱に硯をいれ手にさげて乘輿に入り會席へ持參ありける】

床

押板

○床は今いふものはもと押板なり(曾我物語)に此押板には古今萬葉を初めとして數の双子をつみ置たれば【此物語は鎌倉將軍の末のころのものなり】押板とは板をはりたる床なり(東山殿御飾記)に床の圖見えたりこれも鎌倉北條禪法を好み書院をたてし以來佛家のまねをして床を作れるなるべし床は佛繪をかけ香花を備ふるための佛壇なりと(秋草)にいへり(奇異雜談)に寺のとをいふ處方丈ひろくあけこほし書院の押板に硯を置云々また町屋のとをいふ處にも奥の座敷をみれば四間の座敷に押板あり云々(甲陽軍鑑二十)勝賴於伊奈初て信虎に對面之條武田重代左文字の御腰物を押板の上に置給ふ又(同書)押板の釘に【これ押板はかべをぬらず板に打たるなり】扇をかけし事あり今は床の脇には棚あり

には義士が草書の偈韓愈が文集眠藏にけ沈純子の宿直物を取副て置云々（秋草）にもこれを引て今世客

主殿　客殿　出居

に對面する處を書院と云ひ古は大家には主殿とも又客殿ともいふ小家には出ゐといふ【今も田舎にて對面所を出ゐといふ】云々書院は禪家にて學問する處なるを學びて造れるなり出居は民家のみにあらず（續古事談）に後三條院宣旨を太神宮に奉らむとせさせ給ふ條に其御時迄はいでゐの御座にて供御はまゐりける云々出居とはあるじの出て居べき處をいふなり【（源氏物語柏木卷）夕霧致仕の大殿を訪ふ處おとゞの御いでゐのかたに入たまへり】民家にても一段高き處にや【（義經紀）伊勢三郎義經の臣下なる條に我身も出居のしとみあけて灯たい二所に立て腹卷取てそばにおき云々】（室町殿日記）大森傳七郎切死の條葛屋のはかなきは天井ちかくて切そんじ【よせ手傳七を切そんじたるなり】よる程のやつばらうたれて云々傳七今は罪つくりに何かせんと出居へふつと走りあかつて云々見えたり

○白書院黑書院といふ事（室町家日記）又（椿葉記）等に出つ院字俗にゐんと云却て正音なり

附書院

○今世附書院と云ものは（事跡合考）に異邦書院作りの營法を不知して唱ふるものこそ書院は床に掛物香爐等あり棚には書籍等を置き俗に附書院といふは其高さ机案のごとく向ふに明障子を立て卽この板の上に書籍を披閱し書寫する事全く書案なりされば東山殿書院の飾りやう此板の上に硯筆等を置る末代猶如此書を學ぶ爲なれば如此結搆の間を書院といふ附るといふ字床の脇に作り付けたるを見ていふ俗稱なりといへりこれはそのもと末をわきまへぬみだりごとなり附書院の製はいまだ禪法行はれず

出し文机

しなりもとこれをば出し文机とぞいひける（圓光大師傳）に上人黑谷にして華嚴經を講じたまひけるに青き小ぐちなは机のうへにありけるを法蓮坊信空に取て捨べきよし仰せられければ法蓮坊かぎりなくくちなはにおづる人なりけれども師命そむきかたきによりて出文机の明障子をあけまうけて塵とりに

を板敷に一段高くしてそこに馬飼二人ばかり臥たり遠侍より縁がはつゞきにて兩扉の唐戸あり中口門なるべし其奥二間蔀を上て簾かけたる內屛風立廻したるは主(あるじ)の臥ごにて枕邊に弓矢甲胄等あり此二間も中をみする爲め蔀をあけて書たるなりそれより奥のかたみな遣り戸立たりひさし長く出て家の横手緣がはも横にめぐれり此所に沓脫の踏だんあり平日爰より出入なるべし【前に引る貞順の(故實書)に妻戸をば斟酌すべし主人貴人御出專一被用ごあり】中門口は平日は閉て置にや（因幡堂藥師緣起蒙古襲來）等の畵卷物にも武士の家の圖あり又(六條道場)十二卷の緣起には武家大門の屋の上に井樓(やぐら)をかまへたる處あり後世には二階門も有しご見えて明曆三年酉正月廿五日作事之儀縱ひ國持大名たりごいふごも三間梁より廣く家作可爲無用附二階門可爲停止幷こまよせ先無用之事ごあるは大火有しに付て觸となり

○四ッ足門(東鑑)四十八正嘉二年正月廿四日勝長壽院四足脇門造畢

玄關

○玄關釋義堂が(日工集)に至德三年二月廿二日云々忽有敲玄關者山名奧州太守淸來禮云々（三光院內府記）に塗輿は諸家諸山於門前乘之也但東堂者至玄關乘之云々諸寺に玄關ある事知るべし北條足利共に禪法を好みて何事も學びしゆゑ家居にも書院玄關などのありしもその初め私のごなへなれば有來りて似つかはしき處を名付け呼たるか後にはことさらに作る事ごなりしなるべしこゝに玄關は正しき居所の名にはあらず老子に玄之又玄衆妙之門などいへる意にていはゞされたる異名なり(室町殿日記)義輝公最後の條に玄關に出給ひてさしごり引つめさん〴〵に射給へは云々【安齋の室町殿迄玄關はなきやうにしるしたるものは非なるべし】

書院

○書院(太平記)佐渡判官入道々譽都を落つる所六間の會所には【庭訓にも會所ご書これ客殿なり書院を客殿にするは後の事たり】大紋の疊を敷ならべ本尊脇繪花瓶香爐鑵子盆に至る迄一樣に置調へ書院

殿に續けり對の屋につゞきたる廊に車よせあり幷びて中門あり又釣殿有て池水に臨めりそのめぐり築地にて中門の外の方に大門を構ふ侍所は中門の旁にあり中門なき家にても大かたこのさまに廊にて別屋にかよふやうに建たるものなりそは古圖ども見て知るべし（後世禁中圖）後光明院御時一對屋東西八間南北廿一間女房居レ之、宮人居處なり二對屋東西十二間南北八間半宮人居レ之、長橋局東西六間半南北十四間掌侍上臈人居レ之、是勾當內侍なりなどあり圖をみるに一對屋と長橋局常御殿西の旁なる御見間と云に通ずる廊下あり二對の屋は常御殿中間の處に通ふ廊あり何れも御殿より北にあるなり

侍

○侍は（源氏物語）〔まき柱〕にさふらひに人々聲して雪すこしひま有夜はふけぬらんかしなどさすがにまほにはあらでそゝのかし聞えてこはづくりあへり云々其聲の聞ゆるは近きにあるなりはなれて有を遠侍といふ（秋草）に古代の武家のやうは外に惣構の築地ありそれに大門あり其外所々に小門有り大

遠侍

門を入て塀中門ありそれを入ば遠侍あり今の大家の門の內に幕番所といふ所の如し【遠侍は惣板敷也（鎌倉年中行事）に見ゆ此所に番の侍あり色々武具をもをさめ置なり】遠侍の前を通りて主殿の前に至るなり【客殿とも對面所ともいふ主殿には定りたる作りやう有（三光院內府の記）に委し】客人にても使者にても主殿の前の庭に立て案內をこへば內より奏者出て請し入るなり古き繪どもに客人と亭主と對面して居る座敷の庭に供の者の居る體を繪がきたるあり室町殿の頃迄は如此なり其已後は玄關出來しなるべしとあり此說いまだ然らず室町殿に玄關有り【下にみゆ】やごとなきあたりのとにはあらで武家の大よそをいふとならば主殿に向ひて案內こふ程の處には塀中門は有べからず（圓光大師繪詞）に

武家の構

上人の父久米の押領使漆の時國が館の體を圖するをみるに昔の武家のやう大かたかゝるさま成べし大門より垣おしまはして惣構とし大門の內侍所あり武士鎧を着て假寢する者五六人旁に兜弓箭などあり此處板間にして四方に障子などなきは內の體をみせて畫ける故なるべし夜の體なりはなれて厩あり半

泉両守護淡路守護大舘富樫伊勢武田大野大夫甲斐や織田畠山には播磨守中務少輔遊佐ぞある細川方には右馬頭下野守仁木の一族に五郎少輔と葦名とさて京極に加賀守黒田とここそ聞えし土岐の下には池尻此外奉行頭人と奉行外樣大名の家々の殿づくり注さんとするに際限なし或は藥醫平門の大名の內わに至る迄凡六七千間は在らむとぞ覺ゆる所記其中に取書は曾て有べからずなどいへり其品は粗知べし

中門の廊

○中門の廊は（春湊浪話）に寢殿のとをいひて表の角によりて中門を作る是は門とはいへども門にはあらず今の玄關式臺といふものなり】（夏山雜談）にも中門は今の玄關なるべしと云り】（太平記）に中門のかたをみれは宿直しける者ものゝぐ太刀かたなをとり散してといふ是なり又中門の外の沓ぬぎ或は中門の板敷とも書しとあり是につゞきたる庫或は廊下を中門の廊と云ふ是には必ず窓をひらくこれを（大鏡）には中門の廊の連子といひ（古事談）には中門の連子と書云々古き書に多く見えたるにいつの頃誰が名付たるにや今世なべてこれを實檢の窓とのみ唱へて廊の連子といふもの更になしといへり此說宜し但し中門といふに二所あるとを辨へず故に中門といへども門にはあらずといへり【今日光山本坊などにて御車寄につゞきてあるこれ中門の廊なり柳營には正德年中朝鮮人來聘の時殿門御重修あり今迄の御車寄を中門の廊と稱し別に中門をたてさせまし〳〵御駕籠臺を御車よせと呼べきよし仰せ有りしとかや（事跡合考）に塀重門を玄關の脇門に造らるゝものは出陣の時旗を伏せずして立さまにとほす爲なり朝鮮人來聘の砌諸親王攝家の例の如く四足門屋根あるものを用ゐらる享保中に古來の如く塀重門に改めらる云々いへり塀重門といふは上にいふもろをり戸なり】（源氏物語）【帚木】馬頭が物語する所【木枯の女の家の築地のさま】あれたるくづれより池の水かげ見えて月だにやどる住家をすぎんもさすがにてをり侍りぬかし云々この男いたうすずろぎて門ちかきらうのすの子たつものにしりかけてとばかり月をみる云々凡家の式は南面に寢殿あり對の屋ははなれて東西また北にもあり廊ありて皆寢

廊の連子
實驗の窓

四ツ足門

殊外嫌ひ申候子細あるとなりといへりおもふに是をたゞ中門ともいふ故中門を（海人藻芥）には上の中門といひしにや妻戸は中門なき家にもあるべきなり（類聚雑要）康治二年前齋院三條移御の條に水火童女從中門內步出などあるは內の中門なり塀中門とも云なるべし（同書）建保元年七月廿二日新造御所事云々指圖少々有被改之所此度可立中門之由云々（吾妻鏡）建仁二年九月十五日有御鞠云々秉燭程將軍家又出御于石御壺召并中門內召行景云々（四方硯）にむかし妻戸といふは宮殿廊等の端にあるをいふ端ならざるを唐戸といふ其形は同じ妻戸は戸一枚唐戸は二枚なり車よせにも唐戸あり後世立關の製ありむかしは簀子といふは今の緣かはの事なり世移れば物の名もかはりぬ（和爾雅）に言關禁裡稱之、車寄武

妻戸

家謂之妻戸、僧家稱之立關云るはわろしもと妻戸は車よせに必ずある物なり【切妻戸と云は又異なる歟（吾妻鏡）康元二年二月廿六日奥州起侍座經廊西緣被候切妻戸こは半戸などの如きにや但し今も屋の

棟門

嵜下しならぬを切妻といへば其入口の戸にや】又棟門はやねあるなり

楣

○（東雅）に（和名抄）門戸具に楣の字まぐさといひ（爾雅）に門戸上横梁也と云ふ注を引りされど楣はもと門戸の具にあらず（儀禮爾雅）に據るに屋制五梁の一にして棟の次楣にて下は門戸を設る處なれば屋の內にあらず門戸にも上の横梁をば楣といふとになれり又棖字（爾雅）の注を引て【（和名抄）をいふなり門の兩傍木也ほこだちといふとあるは今俗に【方立といへるは轉語なり】（藻鹽草）に古へ道をありくは鉾をつきて兵具とし家に入てこれを妻戸に立すゑて置より始るといへれど殿門には予楯を設て威儀とすこれによりてほこたちの名ある歟【已上撮要】

もろをり戸

○もろをり戸は兩扉にして今の冠木門などをいふべし上土門とはやねを土にて塗たるなり古畫に多く

上土門

みゆ上土門を武家に立ると（應仁記）云大名の家作り吉良石橋澁川等をは先おきて武衛細川畠山山名一

冠木門

色六角は上土門を立にける又冠木門の武士方は讚州相模土岐京極能登美作兩大夫備中守護因幡守護和

宮殿〻くなりしこと

○宮殿高くなりし事(榮花物語)【朝みどりの巻】京極どのやけて伊豫守賴光どの丶内のとすべてつかふまつる條殿の造りざまはじめは古代にむかし作りなりしかば屋のたけ短う打あはぬとおほかると有うちあはぬなど云るを思へば是も彼別々の屋の脊合ぬとにや此時作られしは屋のたけ高うなりしこと知べし

○叉ひら家は(源平盛衰記)廿二東國下向の討手の使迯かへりたるを嘲りて入道殿の門に落書の中にひらやなる宗盛いかにさわぐらん柱とたのむ助を落して平家と書てひらやとよむまろび倒れんずるには助と云て柱の代に大なる木を以てさゝへ直すことあり平家の大將軍にて下り給へる權亮少將維盛落ければ右大將宗盛の騒ぎなげき玉ふらんと云にそへたりさてひらやとは今も云ふ二階なども なき平たき屋を云なるべし助と云ふは添柱などにや

中門

○中門は(源氏物語)【藤のうら葉】冷泉院六條院に行幸の處に山のもみぢはいづかたもおとらねどにしの御前は心となるを中のらうのかべをくづし中門をひらきてきりのへだてなくて御らんぜさせ給ふ(海人藻芥)に大臣家に四ッ足あり上中門あり云々名家以下月卿雲客の亭四足上中門不可有之云々寢殿にも日隠不可有之武士の家には不造檜皮屋皆板屋作りなり然共近年將軍家渡御之在所各稱檜皮屋單中門廊以下月卿の家に同じ但不立棟門皆もろ折戸也叉上土門を立る輩少々有之とあり【(庭訓古注)に云棟門は立棟也唐門は唐樣とて丸棟作りなりと見え平門棟門を安齋云ふ此門どもの製詳かならず愚老が推量には門の正面を八風作りにしたるは棟門にて門の正面に軒の垂たるは平門にやと云り然るにや】

平門

此書初めに名家以下月卿の亭上中門なきよしをいひて叉中門の廊以下月卿の家におなじといへるいぶかしきやうなり按るに中門といふに二ッあり(貞順故實條々聞書)に中門とは妻戸なり妻戸をば不斷は斟酌有べきか主人貴人御出の時專一被用候なれば平人さい〱出入する事いかゞにて候また常出入は

みつばよつば　幸種　水梘　閤漏

べもとみけりさきくさのみつばよつばに殿つくりせり（冠辭考）にさきくさは福艸又さゆりなるべしといへりそはもとあれみつばよつばは瑞の義にて宮殿の別になりしさまをいふなり（源氏物語）に宇治の宮の中の君匂宮へ嫁娶の處宵うち過てぞおはしつきたる見もしらぬさまにめもかゞやくこゝちする殿づくりのみつばよつばなる中にひきいれて【車を入るゝなり】（枕草紙）木はの條ひの木人ちかからぬ物なれどみつばよつばの殿づくりもおかし（北畠親房卿抄）云幸種は檜の木をいふなりみつばよつばは三棟四棟と書なり云々按るに宮殿を造るに檜を用る故枕草紙にしかいへるをそれによりてさき草をひの木の事とするは非なり男山八幡宮本社と拜殿との間にかなどひに金箔おしたるがかけてあり田舍人など參詣すれば社人等歎きて黄金の樋なりとて見する山崎の離宮八幡もとは木樋なりしを（信長記）に十二月十日至山崎寶積寺被移御座けるに大雨降しかば兩日御逗留有ける處八幡宮木樋朽たる由申上ければからかねを以て鑄て參らせよと武田佐吉林甲兵衛に被仰付けりと見えたり男山のやうに造りたるなるべしやねの谷に雨水の集りたるを箱とひにて通すなり其形柱のやうなれば是をうつぼ柱と名付く（源平盛衰記）殿上やみ討の條に頭左中辨師俊朝臣藏人判官平時信をめして宇津保柱より内に布衣の者の候ぬるは何者ぞ云々（夏山雜談）に宇津保柱といふは殿上の前にあり御殿の屋ねのつま／＼のゆき合にて雨水のもるゝ處なきゆゑに柱を穴にして其內より雨水の落るやうにしたるなり（夫木集）にしのびおつるうつぼ柱にかくる樋はもるてふ水のくちやなからんと有り柱を穴にしてとはいかゞなり立樋の柱に似たるにこそ古き繪に見えたるは（信貴山緣起）の內殿前に立しもの是なり（席上腐談）古之承霤以レ木爲レ之用行レ水即今之承落也（類書纂要）簷下承二霤水一者以レ木爲レ之俗云二水梘一又謂二之閤漏一

○屋の中に主とある處を身屋と云後に母屋と云はムヤを訛れる也今世にはおもやと云ふ廂を借ておもや取らるゝといへる諺もあり

も久しきわさなり（竹林抄）雑の連歌上に弓矢にあまたしるとぞある〔宗砌〕棟上に時日をとるははかせにて今は板にて矢の形作りて用ゆ（西翁千句）に矢先に渡るあまたの聲秋の田のかりほの庵の棟上て我衣手ににぎる赤飯斧をよきとも云（後撰集）戀六よみ人しらずあふこなき身とはしる〳〵戀すとてなげきこりつむ人はよきかは（六帖）かた時もみねば戀しき大江山ならきこらする人はよきかは何れも斧をそへたり】

下ケ墨

○物をさげすむといふとはもと番匠の詞なり（七十一番職人歌合）おし直す工もいざやすみかねにさげすむ月のかたふきにけり（醒睡笑）の謠の斷に大工が能を見物に行ける時脇出て津國高砂の浦を一けんせばやと存候といひければ大工感じて我は高砂の浦を廣いと計り思ひたるに壹間せばいといふたはおもしろい何にも餘分をおきてさげすむべきものなりこれぞ後學なりといひたるも物をおとしめて見るとのやうなれども乙つもり量る事なればおのづから其意にも通ふなり昔とは詞の用ひやうかはれり（誹諧片言）【二色】物を押はかるをさげすみと云ふ下墨と云となるべし番匠の糸墨を高き處よりさげて物のゆがみすぐなるを量る事より出たる詞なりといへりまた（福富覺書）といふ物に押來り候馬印は黑き棒にて鳥毛か熊かといづれもさげすみ候（懐子誹諧）集「蚊柱のたてりをみるやさがり蜘【重方】今も柱のたていれを見るといひて墨繩をさぐる是下ゲ墨なり（獲誡輪）月や下墨（さげす）む鯨（きりき）別荷宰領是は當時川る處の意なり今江戸の工匠はさげ繩などいへども田舎にてはさげすみさげすむといへり

宇津保柱

○宇津保柱は（大鏡）に花山院は風流者にこそおはしましけれ御家をつくらせたまへるさまなんどよ寢殿對わた殿なんどはつくりあひゝはだふき合する事も此院のし出させ給へるなりけり昔はやう〳〵にてあはひに樋かけてぞ侍りしと有しかば花山の帝より屋をつゞけて葺とは始りしなりそのかみの宮殿は別々に作りやねと〳〵のあはひにとひをかけて雨を通したりとみゆ（古今集）の序にこのとのはむ

たふは神を祈りて總路をかなへ水はわかいでこ聲くはゆるは作事につきて富饒を祝へるにやなご云り（輕口ばなし）に眞如堂の地突見物に行ける噺は元祿十四年にや今地突また祭禮の牛車を挽なごすべて木やりをうたふ昔は木を牽に木やり石には石引かねにはかね引こて各歌ありて大厤なごにも見ゆれごも必ず定りしにも有べからで大厤木やり歌にけいひかぢやてつこのしゆ【今もうたふ章歌なり】（人倫訓蒙圖彙）に挺者（てこりもの）普請の場又は大木大石を引動かす役人なり鴟口を以て打立て引こもあり是に依て鴟の者こいふこいへり【木石を引に下に木槓をくはふこれを挺こ云ふ手木の義なり】承應二年巳五月觸書に鳶口てこの者云々寛文五年六月町觸に鳶口せおひかるこ持なごあるは其日雇の者を云なり是然るへし鴟の者こは異稱にて聞えぬとなり

てこの者
とびの者

○穴太築（あなふつき）（明良洪範）に石垣を築くにあなふ築こ云仕方あり江州あなふこ云所古へより石の五輪を切出し其工手多し信長公天守を建られし時同國の事ゆゑ穴太より石工を多呼よせ仰付られしより諸國にても是を用ひしかば次第に石垣のと上手に成て後には五輪を止て石垣築を業こしける以來いづくにても通り名こなりて石垣築ものをあなふこ云習はしける

あなふ築

○棟上ケに餅を拋る事（秉穗錄）に（文體明辨）に上梁文者工師上梁之致語也世俗營搆宮室以擇吉上梁親賓裹麪【今呼饅頭】雜他物稱慶而因以犒匠人於是匠人之長以麪拋梁而誦此文以祝之こいへり

棟上ケ餅

○今番匠春の初に手斧初の儀式あるは吉書初なごの例にならひしならむもこいつにても家を造りはじむる日を手斧初こいふなり（榮花物語）【蓍の花】この四月みあれの日よりてをのはじめて【略】南殿せいらうでんなごはむねあけんこす（同）【玉の村菊】この殿はやがて八月よりてをのはじめさせ給云々見えたり【（梅窓筆記）に棟上の時大工の衣冠するも古きとなり（玉海）承安二年二月三日建春門院新御堂上棟云々大工束帶日取麻昇屋上こあり上棟の古書（眞如堂緣起）に見ゆ又上棟に弓矢を用るこご

手斧初

込候はんに地形の內いづくにてもひし〳〵と碎けて地中へ入らぬ迄突堅め候を限りと被遊可然候といへりとなり數多の人々の思慮に不及をとみにかく答へしは流石にこの人なりけり（事跡合考）に見ゆ

どう突

○（癸亥隨筆）に俗間に小石をざりと云ふ歌にさゞれとよむと同言なるべしさゞれもざりもさら〳〵じやり〳〵と云音を形容したるなりといへり【おのれ思ふにじやりは沙礫の譌音かたゞし砂の音利は添ていふ詞なり其證は蛇籠とて長く作りて蛇の如きによるにあらず砂籠なるべし又山のそば崖など砂崩るゝをじやくづれといふは砂崩なり漢土に崩砂といふなるべし是をひやくがうつなどいふは訛りなり砂ばかりいふ時はおのづから利もじ添て呼べりとみゆ扨どう突と云しも近時の言にもあらず】延寶中（洛陽集）に石竹を筒搗(とうづき)や日傭が庭の石の竹【如風】といふ發句あり

木やり

○世に木やりは建仁二年榮西上人々夫に下知して我名を呼しめしより起るといへり是とは異なれども軍勢を指揮するにも似たる事あり（戴恩記）に六條本國寺を三好の軍兵かこみたる時信長公一騎がけに駈付られ小歌を作りてみづから音頭をとり諸勢にうたはしむ其歌に織田のかづさは果報のものよ一番槍をつくほどにしかも上意の御前にてと三へんうたひすまし八面の大軍を一追に突くづしたる事委しくみえ又上京に城郭を築き參らせらるゝ時大石の數百人にて引かぬるを信長公ざいを取てたゞ一聲えいやと聲を出したまへは鳥の飛がごとく行けることなり何時も人の氣はいさむといさまぬとに替る事なり此人の御聲は大きに有し御馬揃の時丸が見物せし三條衣棚にてなにとて先はつかへて行ぬぞとの給ひし御こゑ東西南北四五町程づゝ聞えしと人みな申きとみゆ豐臣太閤聚樂を造られたる時の歌は（尤雙紙）に載たり木石をひくにうたひたるにや淸正異風に出立て大石を引く下知されたると【事跡合考】に出つ元隣か（寶藏）に地突石つきは家居の始なり其故に大弩を天にはり酒を地にそゝぎて萬歲をとぶき人足あまた集りて綱をひかせ唄ひ躍らしむ誠に其唱歌も心あるかな愛宕參りに袖をひかれしとう

ば此年にこそ程なくとは云べけれ】又（塵滴問答）【寶永三年撰】に近年町屋の人居繁く空地すくなきにより又は火を防くに堅固なりとて穴ぐらと云ふもの多く出來たりといへれば明暦二年は始にはあらねど寶永の初迄もいまだすくなかりしと見ゆ

○庄庫（吾妻鑑）文治四年六月十一日越後國大面御庄御年貢云々去年分早米有進納領家渡米者或雖令積載未承着否或令納置庄庫これは今田舍にて郷藏と稱するもの年貢米を入置倉なり故に郷藏と呼ぶ領家とはその貢を收る人を云ふ今に村名などにこれあり

地突

○地をならし突堅むるを土突といふ今どうづきといふは誤なり又地突ともいふ其土砂を運ぶを砂もちとて大寺の造營には信者ども助力するにさま〴〵興ある事を催すこれを見物に出る者多しこれ京難波の習ひなりいつの程よりともしらざれども今宮祇園等の祭祀のにわかなどにひとしきさまもあるをおもへば元文の頃より興ある事をばし出たるにや江戸にも寶暦四年五六月頃幡隨意院了碩和尚谷中三崎に晉賢山法住寺開創この地は溝口侯寄附なり江戸中の男女地形の土砂を運び日ならずして成就す世俗新幡隨院と云ふ（江戸枝折）あら金の土持玉ふ御信心此時のとなるべし

淺草砂利

○むかし江戸にては地突に用る砂利は淺草の產を用ゆ（正保五年日記）子の二月廿一日町觸に町中海道悪敷所へ淺草砂に海砂まぜ高低なき樣中高に築可申候ごみ泥にて築申間敷事又寛文三年卯四月十日町觸に今度日光へ神田橋より本郷通を被爲成候云々海道悪敷所は淺草砂にて中高に一兩日中急度築立可申事など數多見えたり淺草には今に砂利場と云處ありまた古へは隅田川の邊をすべて石濱といへり今もこのあたりの土中に小石多し【元祿中上野中堂の地突を諸人の議らひに極めて突堅まりしといふ事しれがたき時川村隨見に問はる答曰突堅むるにいか程も突に任せて沉むもの故限りと申御請はなり申間敷候しかし爰に一つ了簡御座候あの十四五間にも及候末口大丸材木の矢倉胴突にかけ大豆砂利を突

事談）伶人助元を左近府の下倉に召籠られしたぐひにやされごこは窖藏にはあらさるべし【もろこしに古へ司空こ云官あり顔師古が（漢書）百官公卿表注に空穴也古人穴居穿土爲穴以居人也（日知錄）に此語必有所本（易傳）云上古穴居野處（詩）云古公亶父陶復陶穴未有家室今河東之人尙多有穴居者（小注）今人謂窯即古（字莊子）に言逃虛空虛空即今人所謂冷窯也洪水之後莫能奠民居故伯禹作司空爲九官之首】又（建保職人盡）塗師の歌に土むろしてもほされざりけり今も漆ぬるに穴藏を用るとおなじ但し麴作るなごにはむろこいへごも塗師なごは風呂このみ云ふそは箱の内に水をそゝぎたるさま風呂の湯氣のやうなるよりむろこいふをいつしか轉りて風呂こはいふにや【漢土に倉こ云ものは窖なり（通鑑）に隋の煬帝置洛口倉於鞏東南原上城周二十餘里穿三千窖云々窖皆容八千石なごいへりこゝにて倉こ云ものは（書紀）玉垣宮の段または十七年云々五十瓊敷命妹大中姫に我は老ぬれば神寶を掌るこ能はず今よりは汝これを主れこあるを大中姫辭みて吾はたはやめなればいかで天の神庫に登らん五十瓊敷命曰ほぐらは高けれごも我梯を造らば登りかて玉はんやこ云ふ處に故諺に曰神之神庫隨樹梯之此其緣なりこ云とあり又そのかみ高倉こ云人の名もあれば倉は高きものこ見ゆ】

○因に云江戸にて穴藏の始は（我衣）明暦二年丙申本町二丁目和泉屋九左衞門こいふ呉服屋始むこなり此者は福島家の浪人なりこいへり按るにこれ始にあらず石屋宗山（明曆火災記）此火事迄は穴藏こ中事人々存よりも無之たゞ車長持をたのみにて諸道具を皆々燒失ひたり又云御天守臺石垣の内兩面にして高サ二間石垣四方築内前々より穴藏ここなへ御用の金銀納り有之こ見え又浮生が（滑稽太平記）に末吉道節があるこしの歲旦に穴藏のみのこし祝ふ朝かな書中に道節江戸に下り寛永十八年正月廿八日桶町の火災に逢て歸京しける當歲旦にこあればけに此歲辛巳の年なり【されごも此句はごなく身の上こなりて承應三年に死こいふ時は其間十二年も間のあるを程なくこも云べからず承應二年は癸巳の歲なれ

内室作り

り立るを云なり（鹽尻）にやんとなき御所に内室作りといふありいかなる製にやといふ人あり予云これを匠家に聞侍る内室とは天井なく屋裏（ヤウラ）のまゝに造る事とぞ紫宸殿清涼殿などもうちむろ作りなりとかや凡諸寺の金堂なども内室作りの法といへり我熱田の神宮等もこれなり（日本紀廿四）舘堂をむろづみと訓ぜし室字のみむろとよむにはかぎらざる歟と云り（事跡合考）に坪曲尺（ガネ）の達人正德の頃予に語りて龜戸の聖廟の御本殿は垂木のかけやう一室作りと云造りやうなり當世あのすみかね作法知りたる大工は江戸中に一人もなし云々誠にめでたく出來たる宮殿なりしが延享三丙寅年二月隣家よりの類火に燼滅したることそ千歳の恨なるかなといへるをしむべき事は火にかゝる物これのみならずいづれかをしからぬもの有べき此殿絶てはその製作も世になくなりぬるやうにおもへるはこれを記しゝ人はさらなり坪曲尺の達人もわきまへなきとゝ見ゆ且ッ一室といふとはなし是内室を訛りたるにこそ猶おも

虚空

ふに内室は虚室（ウツムロ）の義にてうつむろと訓べし（和訓栞）に舘をよめるは室積の義（周禮）に候舘有積と見えたり周防のむろつみも是なるべしといへり（東雅）に南都にゆきて僧寺の室といふものを見しかど上世に室といひしものゝ制とも見えずもと是僧寺の製なるが故なるべしといへるは非なりそは宮室になりての製なり上世の遺跡は今も古き窖の殘りたるが九州などにはありといへり彼土蜘蛛といひしものなどの住たる處も有べしとかや近くは鎌倉に殊に多くこれ又上世の遺風なるべし農民の物を入置處に堀

やぐら

たるも多く又墓穴もあり土俗是れをやぐらといふ（日本紀）に兵庫をやぐらとよめるは箭をいるゝ處なればなり是は其義にはあらず谷倉の義なるべしよりて塚穴をもなべて云ふ實朝公の墓穴には岩に彫物ある故に繪かきやぐらと云ふ又囚人を籠るにも用ひしとて大塔宮をはじめ景清唐糸等が古跡あり（散木集）連歌堀河院御時出納が腹立てへやのしうとも云ものを御倉のしたにこむるを聞て源中納言國信へやのしうみくらのしたにこもるなり云々付よとせめ有ければをさめどのにはとこころなしとて又（古

嬉遊笑覧巻一上

喜多村信節撰

[library seal]

居處 ○室〔やぐら〕 地突〔てこ〕 手斧初 宇津保柱 中門〔廊〕 妻戸 さふらひ 武家の搆
書院〔出文机〕 居間 床 疊 押板 飾物 塗籠 帳臺〔出居〕 天井 局〔つぼ〕

古書をもて徴とするをいとひて別に一種の學を立るものあり杜撰といふべしといへりげに物によらではえあるまじきわざになむ何にまれその道々の文はあんめるをいさゝやかなることは猶しられぬもおほかり老翁（オキナ）老婆（オウナ）のむかし語りは更にもいはず眼（マ）のあたりの事今だにおぼつかなくきのふと過きけふと經るまゝにいつしかいひゝがめ訛（アヤマ）り傳へてあらぬことゝなれるなど論（アゲ）つらひものするはむねとその根ざしを正さんとすなりされぱたよりとなるべきをばいはけなき畵物がたりあやしのざれ草子もさらにきらふことなく文の林の塵芥のことごとほれるせゝら藝を學びの海にかいやらんとす玄旨法師は學問は乞食袋のやうによきもあしきもとり入て事にのぞみて用ふべしといはれしとかや

むろ

○むろは（神代紀）に窨をよめるがもとにて地室をいふ（古事記傳）に山の腹を横に堀て石窟の如く搆へたるをいふ地を下へほりたるにはあらずといへり宮室を作るも其さまをうつしたれば室をむろとはいひしなるべし上つ代の家造は柱を地中に築立て繩つなをもて結固めしものなり（書紀）顯宗紀室壽御辭に築立る稚室葛根また（大殿祭詞）に此の敷坐大宮地底津根乃極美下津綱根云々古に於底津石根宮柱布刀斯理立など云ふは上代神宮も人の舍も伊勢神宮などの製の如く地を堀て柱を立る故にこの稱あり今

堀立

世にも賤が戸には是あり堀立と云ふ石すゑして柱を立るは後のことなり右の下津石根など云は只深くほ

嬉遊笑覧上巻索引終

卷五上　宴會

卷五下　歌舞

卷四下　雜伎

卷四上 武事

卷三下　詩歌

卷 三上 書畫

巻二下　器用

巻二中　器用

巻 二 上　服 飾

巻壹下　容儀

嬉遊笑覧索引

◎上巻

巻壹上　居所

總目

右總計十二卷附錄一卷

ひかまへて年經るにいとふいなる事のみさしつどひて心ざしゝ事もいたづらに成つゝかの塵ばかりもはふらさしとせし物までもおもはずに名殘なくうせぬるはさるべき時にやありけむといと淺ましかゝるまぎれにすこしばかりもたりしふみさへ半ばにたらずなりぬるはいかにかせまし今はいよゝちからも盡(つき)て文みる事もゝのうくて心にそまねばしばしは手だにふれざりしかど年ごろ抄書(ぬきがき)しつる反古ども散みだれたるがしみの巣とならむはさすがなる心ちせられて捨もやらずまさぐりみればいとをかしきことどもゝまじれるに心なぐさみぬるは童のたはふれになん似たりけるこれによておもふに世にもてあつかふことわざ繁(しげ)くまた人の好みもまち／＼にはあんなれどおほくはこの戯れ遊ひにひとしいでやこの反古どもを種(たね)として其中にわきて遊興の事のはかなくをさなき又はおほどけさるがうかましきなどかいつめてみばやとやがてかく物するになほをち／＼にのどめてかへさひ撿ふべき書もおほかれどおほらかにかいやりて勤めてあなぐり求るも勞がはしくかつは心ゆくまで正さむとせばいくばくのいとまか費えはてしなからむもわづらはしければひきゝりに休ぬるにこそかくて後ゆるやかに見出たる事あらんついで／＼に書くはへなむかし

ものうさにまなびし道はふみもみすひまゆく駒のをしき物から

おのれ信節またの名節信ともいふはもろこしの潛夫論を著しゝ人を學ぶにもあらず又井出の蛙のからしたるをもたりし數寄者をしたふにもあらでいと等閑なる人わらへならむかしさるはゆかりある人の金もの巧みに作れるが我に贈するとて銅印を刻めるに文字をうへしたかへさまに居たれば改めつくらんといひしかど殊さらに作り出たる物のあたらしくをしければせちにこひてそのまゝに用ひたるは行成卿のみづからなりゆきとかゝれしも思ひ出られぬまた筠庭といふとは住る處の庭の傍にむら竹のいさゝか生たるをすなほなる心を學ぶ友なれや文みる窓になびく呉竹とくちずさみてもしさるべき處もとめて文みるためにはなちいでの一間をも設けたらましかばこれをそのかたへに移し植なましとまづあらましに號をつけむもをこがましきわざなれど今は世人のならひなればやがて竹庭とぞいひける文字をしも漢めかさむとて筠庭また筠居とも書るになん幼きよりよろづに拙うしてたゞ物よむとのみすこし好みて有にまかせて見しうちにはふと心づきて思ひ得るとなどもある折々に書籍に乏しければ考ふべきこともあたはずいかでこれ多く集めてしがなさりとてことひ牛に汗あゆまでひかせ文庫の棟木へさゝへん程ならんは見つくすべうも覺えねばたゞおほよそにもてあつかふゝみどものよめがたきは異本を得てよく挍へ合せてもたらば事足りぬべしなどおもひしも力及ばざるをいかゞはせんわが家にむかしより貯ふる物とては古き書畫器物のみ今の身の程にはこよなう過たる物どもゝ有しをもてあそぶこともなく用ることもせでひめ置ぬるはいとやくなき物からかく傳へぬるをいさゝかも我好む事にかへむは本意ならねばせんすべなくて蟻といふ虫の土をまろかせて塔婆くむとかいふめることわさのごと物つみて其料にせむにはしかじと思

嬉遊笑覽序

人之稟質雖各異、心志和乃樂、樂乃笑、獻笑以諸戲、嗚呼飽食無所用心、難矣哉、夫四海之內、一州則有一州之俗、一鄕則有一鄕之習、勿論於歲時節物、於凡百伎藝、亦自有小異、而節物伎藝、更各有戲事、是故詩人藻客、取戲于文、勇士壯夫、致謔于武、或較優劣、或爭輸贏、上自掖庭宴游、縉紳風流、下迄閭閻社會、小兒囉唣、要之均是戲事、而所娛樂以遣興者一也、況方今熙朝無事之時、逸民皆無不含哺而嬉、鼓腹而遊者、若夫善戲謔不爲虐、則足以觀太平之餘樂、迺此編諸詼敖弄、雖近爲虐之言、然亦將慰賢乎已之歎云爾、

文政十三年庚寅冬十月　筠庭　信節

PL
772
N523
v.1

宮内省御用掛
文學博士　關根正直先生

東京帝國大學史料編纂官
文學博士　和田英松先生

宮内省圖書寮編修官
田邊勝哉先生

監修

日本随筆大成第二期別巻

収載書目

嬉遊笑覧 上巻

喜多村信節



日本随筆大成 別巻之

UNIVERSITY OF TORONTO
JAN 6 1964
East Asiatic Studies Library



143

PL
772
N523
v.1

Nihon zuihitsu taisei dai-ni-ki
bekkan

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY